

上信越自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書13

— 小布施町内・中野市内その1・その2 —

い い だ ふ る や し き
飯田古屋敷遺跡

げ ん し ょ う じ あ と
玄照寺跡

が ま ん ^{ぶち}
がまん淵遺跡

さ わ だ な べ つ ち
沢田鍋土遺跡

し み ず や ま か ま あ と
清水山窯跡

い け だ は た か ま あ と
池田端窯跡

う し で こ よ う
牛出古窯遺跡

1 9 9 7

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター

上信越自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書13

— 小布施町内・中野市内その1・その2 —

い い だ ふ る や し き
飯田古屋敷遺跡

げ ん し ょ う じ あ と
玄照寺跡

が ま ん ぶ ち
がまん淵遺跡

さ わ だ な べ つ ち
沢田鍋土遺跡

し み づ や ま か ま あ と
清水山窯跡

い け だ は た か ま あ と
池田端窯跡

う し で こ よ う
牛出古窯遺跡

1997

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター



清水山窯跡 「高井」「佐久郡」銘須恵器



牛出古窯遺跡 5号住居跡(SB05)出土玉類他

序

善光寺平を貫く上信越自動車道は、小布施町から千曲川に沿って北上し、信州中野インターチェンジが設置された高丘丘陵を通過して千曲川を渡り、豊田村から信濃町と進み新潟県へと延びていきます。この自動車道建設にともない小布施町、中野市内では平成3年度より平成6年度までの4年間にわたり8遺跡の発掘調査が実施されました。本書はこのうちの小布施町内2遺跡、中野市内5遺跡の発掘調査報告書となります。

中野市の高丘丘陵は7世紀後半から9世紀にかけての須恵器の窯址群の存在が古くから知られている地区でありました。この度の発掘調査でも12基の古代の窯跡が調査され、高丘丘陵古窯址群のようすを知るうえで重要な資料を提示することができたと考えております。なかでも「佐玖郡」「高井」などの郡名が刻まれた須恵器は、古代信濃における須恵器生産を考えるうえで欠くことのできない資料となるものです。

また小布施町におきましては、町の指定史跡である飯田氏の館跡とされる飯田古屋敷遺跡の一角を調査しました。調査区内では館跡の確認はできませんでしたが、館跡を連想させる堀が発見されました。さらに室町時代の墳墓堂や五輪塔など中世の墓址も確認されており、小布施町内では初の中世・近世の考古学的な資料を提示することができました。今後更なる研究に期待するところです。これらのほかにも7遺跡を通して、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代の貴重な資料を得ることができ、北信濃の歴史研究に新たな一石を投じるものと信じております。

最後になりましたが、発掘作業から本書刊行に至るまで深い御理解と御協力をいただいた、日本道路公団名古屋建設局・同中野工事事務所・同長野工事事務所・長野県須坂建設事務所・長野県高速道局・中野高速道事務所・中野市・同教育委員会・小布施町・同教育委員会、対策委員会をはじめとする地元の地権者・関係者の方々、発掘・整理作業に御協力いただいた多くの方々、直接の御指導を賜った長野県教育委員会の皆様に対し、心から敬意と感謝を表する次第であります。

平成9年3月31日

財団法人 長野県埋蔵文化財センター

理事長 戸田 正明

例 言

- 1 本書は上信越自動車道建設工事にかかわる、上高井郡小布施町飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡、中野市がまん淵遺跡・沢田鍋土遺跡・清水山窯跡・池田端窯跡・牛出古窯遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 上記遺跡の概要は、(財)長野県埋蔵文化財センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』7・8・9・10、『長野県埋蔵文化財ニュース』No.36・37・38他で紹介しているが、内容において本書と相違がある場合は本報告を持って訂正する。
- 3 本書に使用した地図は、日本道路公団作成の関越自動車道信越線平面図(1:1,000)、中野市基本図(1:2,500、1:10,000)をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図(1:50,000)を使用した。また、高丘丘陵の地形図については昭和42撮影の航空写真より(株)協同データセンターが図化したものを使用した。
- 4 写真図版の航空写真は(株)写真測図研究所に撮影を委託したものである。
- 5 弥生時代後期土器、古墳時代土師器、古代須恵器・土師器の分類は複数の遺跡にわたる為、9章にその基準を示した。
- 6 各章の遺物の観察表は本文末尾に時代ごとに一括してまとめて掲載する。
- 7 執筆分担は次のとおりである。
土屋 積 第1章1節1項、第3章4節
中島英子 第2章3節、第3章3節、第9章3節1～3項、5～8章の奈良・平安時代の遺物に関する記述
中島庄一 第9章1節
鶴田典昭 上記以外
- 8 本書の編集・校正は鶴田典昭・中島英子が行い、土屋積が全体を校閲した。
- 9 遺構番号は時代にかかわらず種別ごとに付けたが、原則として発掘調査時の番号を変更しなかった為欠番がある。飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡では一部遺構番号を変更し、その内容については本文中に示した。遺物の図版番号は、縄文土器・石器・近世以降の遺物は種別ごとの通し番号、それ以外は遺構ごとの通し番号とした。なお、この番号は本文・挿図・表・写真図版のすべてに共通する。
- 10 註および参考文献は各章あるいは節の末にまとめたが、執筆者ごとに適宜挿入した部分がある。
- 11 発掘調査から本書の刊行に至るまで多くのかたがたのご指導・ご協力を得た。本文中にお名前を揚げさせていただいたが、厚く感謝申し上げたい。
- 12 本書で報告した各遺跡の記録および出土遺物は、長野県立歴史館が保管している。

凡 例

- 1 本書に掲載した実測図の縮尺は原則として下記の通りで、該当箇所スケールの上に記してある。ただし地形図・調査区全体図・遺構配置図などは任意である。

1) 主な遺構実測図

竪穴住居址・掘立柱建物址 1:60 住居内施設 1:30 窯跡 1:60または1:30

2) 主な遺物実測図

土器拓本 1:3 縄文土器 1:6 その他土器・土師器・須恵器 1:4 陶磁器 1:3
五輪等・石臼 1:8 旧石器 2:3 または 1:2 縄文・弥生時代石器 2:3 と 1:3 と 1:6
木製品 1:3 と 1:6 と 1:8

- 2 本書に掲載した遺物写真の縮尺は、下記のとおりである。

古代坏類 2:5 古代甕類 1:4 または 1:6 中近世陶磁器・かわらけ 1:3

上記以外の土器、石器は原則として実測図と同一

- 3 遺物の出土地点の表記は、図版の表題に示すか、図版中の遺物の下に出土遺構名またはグリッド名を表記した。図中に表記のないものは観察表に出土地点を示している。

- 4 実測図中のスクリーン等下記のように用いた。これら以外の場合は、当該項目の中で説明するか、図中に凡例を示した。

1) 遺構実測図



焼土・火床



炭化物層



窯体

2) 遺物実測図



赤色塗彩



黒色処理



胎土目

古代の土器については須恵器と土師器の区別は巻末の観察表に示した。また、挿図中では、土師器については遺物の下に土師器と記し、須恵器については特に記載していない。

本文目次

序	
例言	
凡例	
第1章 発掘調査の概要	
第1節 調査の経過	1
1 発掘調査に至る経緯 2 調査体制と調査期間 3 指導者・協力者 4 調査参加者	
第2節 調査の方法	5
1 発掘調査の方法	
(1)試掘と調査区の設定 (2)遺跡名称と遺跡記号	
(3)グリッドの設定と呼称法 (4)遺構記号	
2 整理の方法	
(1)遺物整理の方法と収納 (2)遺物の分類について	
第3節 遺跡周辺の環境	8
1 遺跡の位置と概要 2 周辺の遺跡	
第2章 飯田古屋敷遺跡	
第1節 遺跡と調査の概要	14
1 遺跡の概要	
2 調査の概要	
(1)調査範囲と調査方法 (2)調査経過 (3)調査結果の概要	
(4)基本土層 (5)遺構名の変更について	
第2節 中世・近世の遺構	16
1 概要 2 溝 3 水田址 4 その他	
第3節 中世・近世の遺物	20
1 焼き物 2 石塔 3 木製品	
第3章 玄照寺跡	
第1節 遺跡と調査の概要	25
1 遺跡の概要	
2 調査の概要	
(1)調査範囲と調査方法 (2)調査経過 (3)調査結果の概要	
(4)基本土層 (5)遺構名の変更について	
第2節 中世・近世の遺構	27
1 概要 2 火葬施設・埋葬施設 3 竪穴状遺構 4 井戸址	
5 掘立柱建物址 6 集石・集石土坑 7 土坑 8 溝 9 ピット	
第3節 中世・近世の遺物	48
1 焼き物 2 石塔 3 石製品 4 金属製品 5 木製品	
第4節 玄照寺および飯田氏居館について	62

第4章	がまん淵遺跡	
第1節	遺跡の概要	73
	1 遺跡の概要	
	2 調査の概要	
	(1)調査範囲と調査方法 (2)調査経過 (3)調査結果の概要 (4)基本土層	
第2節	旧石器時代の遺構と遺物	75
	1 概要 2 出土層位 3 遺物分布状況 4 出土遺物	
第3節	縄文時代の遺物	89
	1 概要 2 土器 3 石器	
第4節	弥生時代の遺構と遺物	99
	1 概要 2 竪穴住居址 3 柵列・溝 4 土器集中区 5 土坑 6 遺構外の遺物	
第5節	奈良・平安時代以降の遺構と遺物	115
第6節	まとめ	116
	1 がまん淵遺跡縄文時代第Ⅲ群土器について	116
	2 弥生時代後期の防衛的集落について	117
第5章	沢田鍋土遺跡	
第1節	遺跡と調査の概要	120
	1 遺跡の概要	
	2 調査の概要	
	(1)調査範囲と調査方法 (2)調査経過 (3)調査結果の概要 (4)基本土層	
第2節	旧石器時代の遺構と遺物	123
	1 概要 2 ブロック1 3 その他の石器	
第3節	縄文時代の遺構と遺物	131
	1 概要 2 遺構 3 遺物 4 小結	
第4節	古墳時代の遺構と遺物	142
	1 概要 2 遺構(粘土採掘跡) 3 遺物	
第5節	奈良・平安時代の遺構と遺物	165
	1 概要 2 竪穴住居址 3 竃跡と灰原 4 土坑・集石 5 溝	
	6 ピット群 7 遺構外の出土遺物	
第6節	近世以降の遺構と遺物	187
第6章	清水山竃跡	
第1節	遺跡と調査の概要	190
	1 遺跡の概要	
	2 調査の概要	
	(1)調査範囲と調査方法 (2)調査経過 (3)調査結果の概要 (4)基本土層	
第2節	縄文時代の遺構と遺物	194
	1 埋葬 2 土坑 3 出土遺物	
第3節	奈良時代の遺構と遺物	201
	1 概要 2 竃跡・灰原 3 土坑 4 ピット群	
第4節	中世・近世の遺構と遺物	253

第5節 ④区(低湿地)の調査	257
第7章 池田端竊跡	
第1節 遺跡と調査の概要	261
1 遺跡の概要	
2 調査の概要	
(1)調査範囲と調査方法 (2)調査経過 (3)調査結果の概要 (4)基本土層	
第2節 縄文時代の遺構と遺物	266
1 遺構 2 遺物	
第3節 古墳時代の遺構と遺物	272
第4節 奈良・平安時代の遺構と遺物	274
1 概要 2 竊跡・灰原 3 粘土採掘跡 4 その他の遺構	
第5節 近世以降の遺構	320
第8章 牛出古竊遺跡	
第1節 遺跡と調査の概要	322
1 遺跡の概要	
2 調査の概要	
(1)調査範囲と調査方法 (2)調査経過 (3)調査結果の概要 (4)基本土層	
第2節 旧石器時代の遺構と遺物	326
第3節 縄文時代・弥生時代の遺物	335
第4節 古墳時代の遺構と遺物	337
1 概要 2 竊穴住居址・竊穴状遺構 3 その他の遺構	
4 遺構外の出土遺物とその出土状況	
第5節 奈良・平安時代の遺構と遺物	359
1 概要 2 竊跡関係の遺構 3 竊穴住居址・掘立柱建物址・柵列	
4 墓坑 5 焼土坑 6 その他の遺構	
第6節 中世以降の遺構と遺物	393
1 集石土坑 2 炭竊 3 溝	
第9章 調査の成果と課題	
第1節 高丘丘陵における中期・後期旧石器時代移行期から後期前半期の石器群	398
1 高丘丘陵の旧石器時代遺跡 2 がまん淵遺跡	
3 高丘丘陵の石器群 4 まとめ	
第2節 弥生時代後期から古墳時代前期の土器	418
1 奥信濃の当該期土器編年研究の現状 2 土器の分類	
3 がまん淵・沢田鍋土・牛出古竊遺跡の土器群の様相	
第3節 高丘丘陵古竊址群の須恵器生産について	429
1 器種分類 2 高丘丘陵古竊址群の須恵器編年	
3 奈良時代のヘラ描き資料について 4 竊跡の構造について	
5 奈良・平安時代の須恵器生産	
付章 1 旧石器時代遺物観察表	477
2 弥生時代後期・古墳時代前期遺物観察表	485
3 奈良・平安時代遺物観察表	493

挿 図 目 次

1 章

- 第 1 図 グリッド呼称法
- 第 2 図 中野インター周辺の発掘調査区
- 第 3 図 小布施町・中野市周辺の遺跡分布図

2 章 飯田古屋敷遺跡

- 第 4 図 玄照寺跡・飯田古屋敷遺跡調査区
- 第 5 図 飯田古屋敷遺跡 基本土層
- 第 6 図 飯田古屋敷遺跡 S D 02・03・07・08
- 第 7 図 飯田古屋敷遺跡 ②区水田址
- 第 8 図 飯田古屋敷遺跡 出土焼物・五輪塔
- 第 9 図 飯田古屋敷遺跡 出土木製品(1)
- 第10図 飯田古屋敷遺跡 出土木製品(2)

3 章 玄照寺跡

- 第11図 玄照寺跡 基本土層
- 第12図 玄照寺跡 S X 01
- 第13図 玄照寺跡 火葬施設
- 第14図 玄照寺跡 S B 01
- 第15図 玄照寺跡 S B 02
- 第16図 玄照寺跡 S K 42
- 第17図 玄照寺跡 S K 19・24
- 第18図 玄照寺跡 S T 06・07
- 第19図 玄照寺跡 集石土坑
- 第20図 玄照寺跡 土坑
- 第21図 玄照寺跡 溝址配置図
- 第22図 玄照寺跡 遺物分布状況(1)
- 第23図 玄照寺跡 遺物分布状況(2)
- 第24図 玄照寺跡 出土焼物(1)
- 第25図 玄照寺跡 出土焼物(2)
- 第26図 玄照寺跡 出土焼物(3)
- 第27図 玄照寺跡 出土焼物(4)
- 第28図 玄照寺跡 出土五輪塔他(1)
- 第29図 玄照寺跡 出土五輪塔他(2)
- 第30図 玄照寺跡 出土石臼(1)
- 第31図 玄照寺跡 出土石臼(2)
- 第32図 玄照寺跡 出土古銭・石製品

- 第33図 玄照寺跡 S K 24出土木製品
- 第34図 大正 3 年・昭和27年の地形図
- 第35図 大字飯田字境
- 第36図 玄照寺跡・飯田古屋敷遺跡 周辺の地形・地境
- 第37図 玄照寺跡・飯田古屋敷遺跡 地境と遺構分布の推定

4 章 がまん淵遺跡

- 第38図 がまん淵遺跡 A区遺構配置図
- 第39図 がまん淵遺跡 基本土層
- 第40図 がまん淵遺跡 旧石器時代遺物分布(1)
- 第41図 がまん淵遺跡 旧石器時代遺物分布(2)
- 第42図 がまん淵遺跡 旧石器時代遺物分布(3)
- 第43図 がまん淵遺跡 旧石器時代石器(1)
- 第44図 がまん淵遺跡 旧石器時代石器(2)
- 第45図 がまん淵遺跡 旧石器時代石器(3)
- 第46図 がまん淵遺跡 旧石器時代石器(4)
- 第47図 がまん淵遺跡 旧石器時代石器(5)
- 第48図 がまん淵遺跡 旧石器時代石器(6)
- 第49図 がまん淵遺跡 旧石器時代石器(7)
- 第50図 がまん淵遺跡 旧石器時代石器(8)
- 第51図 がまん淵遺跡 縄文時代土器(1)
- 第52図 がまん淵遺跡 縄文時代土器(2)
- 第53図 がまん淵遺跡 縄文時代石器(1)
- 第54図 がまん淵遺跡 縄文時代石器(2)
- 第55図 がまん淵遺跡 縄文時代石器(3)
- 第56図 がまん淵遺跡 縄文時代石器(4)
- 第57図 がまん淵遺跡 縄文時代石器(5)
- 第58図 がまん淵遺跡 防御的集落の想定図
- 第59図 がまん淵遺跡 弥生時代後期遺構配置図
- 第60図 がまん淵遺跡 S B 01出土土器
- 第61図 がまん淵遺跡 S B 01・03・05
- 第62図 がまん淵遺跡 S B 02・04
- 第63図 がまん淵遺跡 S B 02・04出土遺物
- 第64図 がまん淵遺跡 S B 03出土土器
- 第65図 がまん淵遺跡 S A 01

- 第66図 がまん淵遺跡 S D 01遺物出土状況
- 第67図 がまん淵遺跡 S D 01出土土器(1)
- 第68図 がまん淵遺跡 S D 01出土土器(2)
- 第69図 がまん淵遺跡 S D 01出土土器(3)
- 第70図 がまん淵遺跡 S D 01出土土器(4)
- 第71図 がまん淵遺跡 S D 01出土土器(5)
- 第72図 がまん淵遺跡 S Q 01出土土器
- 第73図 がまん淵遺跡 鉄製品・土製品
- 第74図 がまん淵遺跡 S K 07・08
- 第75図 がまん淵遺跡 遺構外出土土器
- 第76図 弥生時代後期高地性防御的集落

5章 沢田鍋土遺跡

- 第77図 沢田鍋土遺跡 遺構配置図
- 第78図 沢田鍋土遺跡 基本土層
- 第79図 沢田鍋土遺跡 ブロック1遺物分布図
- 第80図 沢田鍋土遺跡 ブロック1遺物分布図
(合成図)
- 第81図 沢田鍋土遺跡 ブロック1石器(1)
- 第82図 沢田鍋土遺跡 ブロック1石器(2)
- 第83図 沢田鍋土遺跡 ブロック1石器(3)
- 第84図 沢田鍋土遺跡 ブロック1石器(4)
- 第85図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘坑内出土石器
- 第86図 沢田鍋土遺跡 縄文式土器の分布密度
- 第87図 沢田鍋土遺跡 埋甕1・2
- 第88図 沢田鍋土遺跡 縄文時代土器(1)
- 第89図 沢田鍋土遺跡 縄文時代土器(2)
- 第90図 沢田鍋土遺跡 縄文時代石器(1)
- 第91図 沢田鍋土遺跡 縄文時代石器(2)
- 第92図 沢田鍋土遺跡 縄文時代石器(3)
- 第93図 沢田鍋土遺跡 縄文時代石器(4)
- 第94図 沢田鍋土遺跡 縄文時代石器(5)
- 第95図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡全体図
- 第96図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(1)
- 第97図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(2)
- 第98図 沢田鍋土遺跡 S X 09 (S K 45) 遺物出
土状況
- 第99図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(3)
- 第100図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(4)
- 第101図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(5)

- 第102図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(6)
- 第103図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(7)
- 第104図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(8)
- 第105図 沢田鍋土遺跡 疑似擬凹線文写真
- 第106図 沢田鍋土遺跡 古墳時代出土土器(1)
- 第107図 沢田鍋土遺跡 古墳時代出土土器(2)
- 第108図 沢田鍋土遺跡 古墳時代出土土器(3)
- 第109図 沢田鍋土遺跡 古墳時代出土土器(4)
- 第110図 沢田鍋土遺跡 古墳時代出土土器(5)
- 第111図 沢田鍋土遺跡 古墳時代出土土器(6)
- 第112図 沢田鍋土遺跡 奈良・平安時代遺構配
置図

- 第113図 沢田鍋土遺跡 S B 01
- 第114図 沢田鍋土遺跡 S B 01・02出土遺物
- 第115図 沢田鍋土遺跡 S B 02
- 第116図 沢田鍋土遺跡 S Y 01・S K 39
- 第117図 沢田鍋土遺跡 S Y 02
- 第118図 沢田鍋土遺跡 S Y 01・02出土遺物
- 第119図 沢田鍋土遺跡 S W 01
- 第120図 沢田鍋土遺跡 S W 01出土遺物(1)
- 第121図 沢田鍋土遺跡 S W 01出土遺物(2)
- 第122図 沢田鍋土遺跡 S W 01出土遺物(3)
- 第123図 沢田鍋土遺跡 S W 01出土遺物(4)
- 第124図 沢田鍋土遺跡 S W 01出土遺物(5)
- 第125図 沢田鍋土遺跡 S W 01出土遺物(6)
- 第126図 沢田鍋土遺跡 S W 01出土遺物(7)
- 第127図 沢田鍋土遺跡 S W 01出土遺物(8)
- 第128図 沢田鍋土遺跡 S K 44・59・60・S H 01
- 第129図 沢田鍋土遺跡 遺構外出土遺物
- 第130図 沢田鍋土遺跡 近世以降の溝出土の砥石
- 第131図 沢田鍋土遺跡 近世・近代の遺構配置図

6章 清水山窯跡

- 第132図 清水山窯跡 調査区とグリッド設定図
- 第133図 清水山窯跡 遺構配置図
- 第134図 清水山窯跡 基本土層
- 第135図 清水山窯跡 S X 03 (埋甕)
- 第136図 清水山窯跡 S K 03・04・05・09
- 第137図 清水山窯跡 縄文時代土器
- 第138図 清水山窯跡 縄文時代石器(1)

第139図	清水山窯跡	縄文時代石器(2)	第179図	清水山窯跡	S X01
第140図	清水山窯跡	縄文時代石器(3)	第180図	清水山窯跡	ピット群
第141図	清水山窯跡	弥生時代以降の石器	第181図	清水山窯跡	長頸壺の頸部・肩部接合 方法
第142図	清水山窯跡	甕の接合関係	第182図	清水山窯跡	横瓶の製作方法
第143図	清水山窯跡	S Y01遺物出土状況(1)	第183図	清水山窯跡	山頂部の遺構
第144図	清水山窯跡	S Y01遺物出土状況(2)	第184図	清水山窯跡	S X02・06・S K12
第145図	清水山窯跡	S Y01	第185図	清水山窯跡	出土五輪塔
第146図	清水山窯跡	S Y01出土遺物(1)	第186図	清水山窯跡	S D01・02
第147図	清水山窯跡	S Y01出土遺物(2)	第187図	清水山窯跡	④区の土層断面図
第148図	清水山窯跡	S Y01出土遺物(3)			
第149図	清水山窯跡	S Y01出土遺物(4)			
第150図	清水山窯跡	S Y01出土遺物(5)	7章	池田端窯跡	
第151図	清水山窯跡	S Y01出土遺物(6)	第188図	池田端窯跡他の試掘調査	
第152図	清水山窯跡	S Y01出土遺物(7)	第189図	池田端窯跡	遺構配置図
第153図	清水山窯跡	S Y01出土遺物(8)	第190図	池田端窯跡	基本土層
第154図	清水山窯跡	S Y01出土遺物(9)	第191図	池田端窯跡	縄文時代S K13・14・18・ 19・48・70・82・85・100
第155図	清水山窯跡	S Y02遺物出土状況(1)	第192図	池田端窯跡	縄文時代石器(1)
第156図	清水山窯跡	S Y02遺物出土状況(2)	第193図	池田端窯跡	縄文時代石器(2)
第157図	清水山窯跡	S Y02	第194図	池田端窯跡	縄文時代石器(3)
第158図	清水山窯跡	S Y02出土遺物(1)	第195図	池田端窯跡	S B01
第159図	清水山窯跡	S Y02出土遺物(2)	第196図	池田端窯跡	S T01
第160図	清水山窯跡	S Y02出土遺物(3)	第197図	池田端窯跡	奈良・平安時代遺構配置 図(①区)
第161図	清水山窯跡	S Y02出土遺物(4)	第198図	池田端窯跡	S Y01
第162図	清水山窯跡	S Y02出土遺物(5)	第199図	池田端窯跡	S Y01出土遺物
第163図	清水山窯跡	S Y03遺物出土状況(1)	第200図	池田端窯跡	S Y02(1)
第164図	清水山窯跡	S Y03遺物出土状況(2)	第201図	池田端窯跡	S Y02(2)
第165図	清水山窯跡	S Y03	第202図	池田端窯跡	S Y02出土遺物(1)
第166図	清水山窯跡	S Y03出土遺物(1)	第203図	池田端窯跡	S Y02出土遺物(2)
第167図	清水山窯跡	S Y03出土遺物(2)	第204図	池田端窯跡	S Y02出土遺物(3)
第168図	清水山窯跡	S Y03出土遺物(3)	第205図	池田端窯跡	S Y02出土遺物(4)
第169図	清水山窯跡	S W01遺物分布密度	第206図	池田端窯跡	S Y04煙道部
第170図	清水山窯跡	灰原	第207図	池田端窯跡	S Y04
第171図	清水山窯跡	S W01出土遺物(1)	第208図	池田端窯跡	S Y04出土遺物
第172図	清水山窯跡	S W01出土遺物(2)	第209図	池田端窯跡	S Y05
第173図	清水山窯跡	S W01出土遺物(3)	第210図	池田端窯跡	S Y06
第174図	清水山窯跡	S W01出土遺物(4)	第211図	池田端窯跡	S Y05・06出土遺物
第175図	清水山窯跡	S W01出土遺物(5)	第212図	池田端窯跡	S Y07
第176図	清水山窯跡	S W01出土遺物(6)	第213図	池田端窯跡	S Y07出土遺物
第177図	清水山窯跡	S K11・13			
第178図	清水山窯跡	S K01・02・06・07・08・10			

- 第214図 池田端窯跡 SW02出土遺物
- 第215図 池田端窯跡 粘土採掘跡(1)
- 第216図 池田端窯跡 粘土採掘跡(2)
- 第217図 池田端窯跡 粘土採掘跡(3)
- 第218図 池田端窯跡 粘土採掘跡(4)
- 第219図 池田端窯跡 粘土採掘跡(5)
- 第220図 池田端窯跡 粘土採掘跡(6)
- 第221図 池田端窯跡 粘土採掘跡(7)
- 第222図 池田端窯跡 粘土採掘跡(8)
- 第223図 池田端窯跡 粘土採掘跡(9)
- 第224図 池田端窯跡 粘土採掘跡(10)
- 第225図 池田端窯跡 奈良・平安時代粘土採掘跡配置図
- 第226図 池田端窯跡 SK15・20・21・22・23・24出土遺物
- 第227図 池田端窯跡 SK31・32・34・39出土遺物
- 第228図 池田端窯跡 SK45・53 出土遺物
- 第229図 池田端窯跡 SK62・68・71・73・77・79・81出土遺物
- 第230図 池田端窯跡 SK87・88 出土遺物
- 第231図 池田端窯跡 SK88・96・97出土遺物
- 第232図 池田端窯跡 SK98・99、SF01出土遺物
- 第233図 池田端窯跡 SX01・遺構外出土遺物
- 第234図 池田端窯跡 SK01・04
- 第235図 池田端窯跡 時期不明石製品
- 第236図 池田端窯跡 近世以降の遺構
- 8章 牛出古窯遺跡
- 第237図 牛出古窯遺跡 調査範囲
- 第238図 牛出古窯遺跡 遺構配置図
- 第239図 牛出古窯遺跡 基本土層
- 第240図 牛出古窯遺跡 旧石器時代調査範囲
- 第241図 牛出古窯遺跡 旧石器時代遺物分布図
- 第242図 牛出古窯遺跡 ブロック1・2・6 石材別遺物分布図
- 第243図 牛出古窯遺跡 ブロック3・4・5 石材別遺物分布図
- 第244図 牛出古窯遺跡 ブロック1出土遺物(1)
- 第245図 牛出古窯遺跡 ブロック1出土遺物(2)
- 第246図 牛出古窯遺跡 ブロック3・4・5出土遺物(1)
- 第247図 牛出古窯遺跡 ブロック3・4・5出土遺物(2)
- 第248図 牛出古窯遺跡 縄文・弥生時代の遺物
- 第249図 牛出古窯遺跡 SB03
- 第250図 牛出古窯遺跡 SB03出土遺物
- 第251図 牛出古窯遺跡 SB04
- 第252図 牛出古窯遺跡 SB04出土遺物
- 第253図 牛出古窯遺跡 SB05
- 第254図 牛出古窯遺跡 SB05遺物出土状況
- 第255図 牛出古窯遺跡 SB05出土遺物(1)
- 第256図 牛出古窯遺跡 SB05出土遺物(2)
- 第257図 牛出古窯遺跡 SB05他出土玉類など
- 第258図 牛出古窯遺跡 SB06Pit1遺物出土状況
- 第259図 牛出古窯遺跡 SB06
- 第260図 牛出古窯遺跡 SB06出土遺物
- 第261図 牛出古窯遺跡 SB07遺物出土状況
- 第262図 牛出古窯遺跡 SB07出土遺物
- 第263図 牛出古窯遺跡 SB08遺物出土状況
- 第264図 牛出古窯遺跡 SB08出土遺物
- 第265図 牛出古窯遺跡 SB09遺物出土状況
- 第266図 牛出古窯遺跡 SB09Pit1
- 第267図 牛出古窯遺跡 SB09出土遺物
- 第268図 牛出古窯遺跡 SB10
- 第269図 牛出古窯遺跡 SB10遺物出土状況
- 第270図 牛出古窯遺跡 SB10出土遺物
- 第271図 牛出古窯遺跡 古墳時代遺構外出土遺物の分布
- 第272図 牛出古窯遺跡 遺構外出土遺物
- 第273図 牛出古窯遺跡 奈良・平安時代遺構配置図
- 第274図 牛出古窯遺跡 SY01遺物出土分布図
- 第275図 牛出古窯遺跡 SY01
- 第276図 牛出古窯遺跡 SY01出土遺物
- 第277図 牛出古窯遺跡 SW01・02出土遺物
- 第278図 牛出古窯遺跡 SW03出土遺物
- 第279図 牛出古窯遺跡 SK01
- 第280図 牛出古窯遺跡 SB01
- 第281図 牛出古窯遺跡 SB02
- 第282図 牛出古窯遺跡 SB02出土遺物
- 第283図 牛出古窯遺跡 SB11
- 第284図 牛出古窯遺跡 SB12

- 第285図 牛出古窯遺跡 S B12遺物出土状況 分類(2)
- 第286図 牛出古窯遺跡 S B11・12出土遺物(1) 第318図 弥生時代後期から古墳時代前期の土器
分類(3)
- 第287図 牛出古窯遺跡 S B12出土遺物(2)
- 第288図 牛出古窯遺跡 S B13 第319図 各遺跡の編年の位置付け
- 第289図 牛出古窯遺跡 S B13遺物出土状況(1) 第320図 奈良・平安時代の器種分類(1)
- 第290図 牛出古窯遺跡 S B13遺物出土状況(2) 第321図 奈良・平安時代の器種分類(2)
- 第291図 牛出古窯遺跡 S B13出土遺物(1) 第322図 高丘丘陵古窯址群出土遺物(1)
- 第292図 牛出古窯遺跡 S B13出土遺物(2) 第323図 高丘丘陵古窯址群出土遺物(2)
- 第293図 牛出古窯遺跡 S B13出土遺物(3) 第324図 高丘丘陵古窯址群出土遺物(3)
- 第294図 牛出古窯遺跡 S B13関連 (S D05・
06) 遺物 第325図 高丘丘陵古窯址群出土遺物(4)
- 第295図 牛出古窯遺跡 S B14 第326図 高丘丘陵古窯址群出土遺物(5)
- 第296図 牛出古窯遺跡 S B15 第327図 高丘丘陵古窯址群出土遺物(6)
- 第297図 牛出古窯遺跡 S B14・15 出土遺物 第328図 高丘丘陵古窯址群出土遺物(7)
- 第298図 牛出古窯遺跡 S T01・02 第329図 高丘丘陵古窯址群出土遺物(8)
- 第299図 牛出古窯遺跡 S A01 第330図 高丘丘陵古窯址群窯跡分布図
- 第300図 牛出古窯遺跡 S K13 第331図 主な須恵器窯の分布
- 第301図 牛出古窯遺跡 S K09・10・12・17、
S X01 第332図 須恵器坏A形態と法量変化(1)
- 第302図 牛出古窯遺跡 S D10・S K07 第333図 須恵器坏A形態と法量変化(2)
- 第303図 牛出古窯遺跡 S K02 第334図 須恵器坏B形態と法量変化(1)
- 第304図 牛出古窯遺跡 S K18 第335図 須恵器坏B形態と法量変化(2)
- 第305図 牛出古窯遺跡 S X02出土遺物 第336図 高丘古窯址群変遷図(1)
- 第306図 牛出古窯遺跡 S H01・02・03・04 第337図 高丘古窯址群変遷図(2)
- 第307図 牛出古窯遺跡 S Y02 (炭窯) 第338図 清水山窯跡「井」印のへら描きの分類
- 第308図 牛出古窯遺跡 近世以降の溝 第339図 骨組材の痕跡を残す窯体
- 第340図 窯別杯・蓋の組成率

付 図 玄照寺跡・飯田古屋敷遺跡遺構配置図

9 章

- 第309図 石器分類表
- 第310図 石核分類表(1)
- 第311図 石核分類表(2)
- 第312図 旧石器時代 高丘丘陵石器群の変遷
- 第313図 旧石器時代 中期旧石器時代～中期
後期移行期の石器群
- 第314図 南曾峯遺跡出土の石器
- 第315図 旧石器時代 沢田鍋土遺跡(上) 浜津ヶ
池遺跡(下) 石核接合資料
- 第316図 弥生時代後期から古墳時代前期の土器
分類(1)
- 第317図 弥生時代後期から古墳時代前期の土器

搜 表 目 次

第1表 遺跡地名表	第11表 牛出古窯遺跡 玉類観察表
第2表 玄照寺跡出土古銭一覧	第12表 牛出古窯遺跡遺構別口縁部(底部)破片数
第3表 がまん淵遺跡層位別石材数	第13表 牛出古窯遺跡S B 0 1 出土礫の重量分布
第4表 沢田鍋土遺跡ブロック1石器出土数	第14表 牛出古窯遺跡出土銭貨一覧
第5表 沢田鍋土遺跡と栗林遺跡の主な石器の組成率	第15表 器種分類別破片数
第6表 沢田鍋土遺跡古墳時代粘土採掘跡出土遺物一覧	第16表 須恵器の器種名比較表
第7表 沢田鍋土遺跡奈良・平安時代土坑一覧	第17表 長野県内窯跡出土器種の時期別比較表
第8表 沢田鍋土遺跡近世以降の土坑一覧	第18表 長野県内窯跡群編年表
第9表 池田端窯跡S Y 02瓦観察表	第19表 高丘丘陵古窯址群の窯の規模
第10表 池田端窯跡土坑一覧表	第20表 窯滓の出土量
	第21表 須恵器の遺構別器種組成

写 真 図 版 目 次

巻首図版 清水山窯跡出土遺物・牛出古窯遺跡出土玉類

P L 1 小布施町中野市航空写真	P L 17 弥生土器(2)
飯田古屋敷遺跡	沢田鍋土遺跡
P L 2 S D 02・03	P L 18 ブロック1遺物出土状況、埋甕、粘土採掘跡空中写真
P L 3 空撮全景、②区水田址	P L 19 粘土採掘跡
P L 4 出土遺物	P L 20 S Y 01・02、S W 01遺物出土状況、S K 44・59・60
玄照寺跡	P L 21 旧石器時代石器(1)
P L 5 空撮全景、S X 01、S K 05、S B 01・02、S K 42	P L 22 旧石器時代石器(2)
P L 6 S K 19・24、S H 02・03、S T 06	P L 23 縄文時代土器・石器
P L 7 出土遺物(1)	P L 24 縄文時代石器
P L 8 出土遺物(2)	P L 25 古墳時代土師器
P L 9 出土遺物(3)	P L 26 S W 0 1 出土須恵器(1)
がまん淵遺跡	P L 27 S W 0 1 出土須恵器(2)
P L 10 遺跡全景、S B 01・02・04、S D 01	清水山窯跡
P L 11 旧石器時代石器(1)	P L 28 調査前遠景、調査区全景
P L 12 旧石器時代石器(2)	P L 29 S Y 0 1
P L 13 旧石器時代石器(3)	P L 30 S Y 0 2
P L 14 縄文時代早期土器	P L 31 S Y 0 3
P L 15 縄文時代早期石器	P L 32 S W 01、S K 11・12、S K 04・05、S X 03、
P L 16 弥生土器(1)	

- SM01・02
- PL33 SY01出土須恵器(1)
- PL34 SY01出土須恵器(2)
- PL35 SY01出土須恵器(3)
- PL36 SY01出土須恵器(4)
- PL37 SY01出土須恵器(5)
- PL38 SY02出土須恵器(1)
- PL39 SY02出土須恵器(2)
- PL40 SY03出土須恵器
- PL41 SW01出土須恵器
- PL42 ヘラ描き文字(1)
- PL43 ヘラ描き文字(2)
- 池田端窯跡**
- PL44 空撮全景
- PL45 SB01、SK32・53・78・87・88
- PL46 SK23・32・34・73・81・94・100
- PL47 SY01、SY04
- PL48 SY02
- PL49 SY05、SY06、SY07
- PL50 SY01出土須恵器
- PL51 SY02出土須恵器
- PL52 SY02出土瓦
- PL53 SY02・04 出土瓦
- PL54 SY05出土須恵器
- PL55 SY06・07、SK20・21・23・31出土須恵器
- PL56 SK34・45・79・53・87出土須恵器
- PL57 SK88・96 出土須恵器
- PL58 SK88・98・99・SX01出土須恵器
- 牛出古窯遺跡**
- PL59 遺跡全景、旧石器時代遺物出土状況
- PL60 古墳時代住居跡SB03、SB04、SB06
- PL61 古墳時代住居跡SB05
- PL62 古墳時代住居跡SB07、SB08、SB09
- PL63 古墳時代住居跡SB10・平安時代住居跡SB01・02
- PL64 奈良・平安時代住居跡SB02・11・12
- PL65 奈良・平安時代住居跡SB13・14・15
- PL66 SK10・12・13、SY01、SH01~04、SY02
- PL67 旧石器時代石器
- PL68 古墳時代土師器(1)
- PL69 古墳時代土師器(2)
- PL70 古墳時代土師器(3)
- PL71 SY01、SW01・02 出土須恵器
- PL72 SW03出土須恵器
- PL73 SB02・14・15、SK13出土遺物
- PL74 SB11出土遺物
- PL75 SB12出土遺物
- PL76 SB13出土遺物

第1章 調査の概要

第1節 調査の経過

1 調査に至る経緯

本書所収遺跡の発掘調査は、日本道路公団（以下、公団）による中野市および小布施町における上信越自動車道建設に関連して行われたものである。なお、中野市・小布施町では本書の7遺跡のほかに牛出遺跡を調査しているが、その報告は豊田村分とあわせて次年度刊行予定である。また、中野市内のいわゆるオリンピック道路関連の栗林・七瀬遺跡の報告書は平成5年度末に刊行済であり、須坂市内では上信越道関連の発掘調査は行われなかった。

従来より、長野県においては、高速道にかかわる埋蔵文化財保護は広域にわたる統一的措置が求められることから、長野県教育委員会（以下、県教委）が対応してきた。また、その発掘調査は（財）長野県埋蔵文化財センター（以下、センター）が実施してきた。また、側道拡幅などこれらと一体的に行われる開発についても市町村と協議の上、センターが調査を行うことが多い。

信州中野インターチェンジ周辺以南の中野市・小布施町の路線内では、周知の遺跡として、牛出古窯遺跡・池田端窯跡・清水山窯跡・がまん淵遺跡・玄照寺跡・飯田古屋敷遺跡が知られていたが、その範囲は未確定であり、また、未周知遺跡の存在も予想されるところであった。これら周知の遺跡の内容および範囲を把握するための試掘調査は、センターにより本調査と並行して実施され、未周知遺跡の存否を確認するための試掘調査は県教委により行われた。その結果、周知の遺跡の範囲の変更により、あらたに沢田鍋土遺跡が調査対象にくわり、牛出古窯遺跡・池田端窯跡・清水山窯跡・玄照寺跡において当初の周知面積を大幅に拡大して調査対象とすることとなった。また、窯跡として周知された遺跡のなかには、時期の異なる住居跡などの遺構群をともない、遺跡の名称と調査内容がそぐわないものも多い。一方、清水山・池田端などでは調査以前からの土採りにより地山が削平されており、調査対象から除外された部分もある。

平成4年～6年、中野市教育委員会は、センターの調査に前後して清水山窯跡・沢田鍋土・がまん淵遺跡の調査を行い、すでに報告書が刊行されたものもある。これらの隣接地の調査が高速道分と一体として行なえなかったのは、側道拡幅や隣接採土地の計画決定・用地買収・着工などが、公団の施工計画やセンターの調査計画と一致しなかったことに原因がある。一方、飯田古屋敷・玄照寺跡では県施工分用地の調査もセンターが実施したが、平成7年、排水機場建設にともなう調査が小布施町教育委員会によって行われた。これらの隣接して行われた調査の成果は、可能な限り本書にも盛り込むようにした。

センターでは、長野自動車道・上信越自動車道などの調査に対応するために、昭和62年度より長野調査事務所において、須坂長野東インターチェンジ以南の調査に対応してきた。平成3年、中野市内のいわゆるオリンピック道路に関してもセンターが調査を行うことになり、須坂以南より遅れて着工した上信越道の調査も本格化するため、中野市立ヶ花に中野支所を設置した。中野支所は翌4年から中野調査事務所となったが、平成7年度、新潟県境までの上信越自動車道の発掘調査を終えて、8年3月、閉所された。以後の整理作業は長野調査事務所に引き継がれている。

第1章 発掘調査の概要

各遺跡の調査年次は次項に記したが、発掘および整理は年度ごとに公団が県教委に委託し、県教委がセンターに再委託して実施された。発掘調査の契約面積は下記のとおりである。

(年 度)	(遺 跡)	(調査契約面積)
平成3年度	中野市 がまん淵遺跡	3,000m ²
	同 沢田鍋土遺跡	20,000m ²
平成4年度	小布施町 飯田古屋敷遺跡	6,300m ²
	同 玄照寺跡	6,000m ²
	中野市 清水山窯跡	5,000m ²
	同 池田端窯跡	16,000m ²
平成5年度	中野市 牛出古窯遺跡	8,500m ²
	小布施町 飯田古屋敷遺跡(県道)	420m ²
	同 玄照寺跡(県道)	690m ²

2 調査体制と調査期間

調査体制及び調査期間は以下のとおりである。

(1) 平成3年度

調査体制	事務局長	塚原隆明
	同 総務部長(兼長野調査事務所庶務部長)	塚田次夫
	同 調査部長(兼長野調査事務所調査部長)	小林秀夫
	長野調査事務所長	峯村忠司
	中野支所長	堀内規矩雄
	同 調査課長	土屋 積
	同 調査研究員	鶴田典昭 中村敏生 入沢昌樹 阿藤慎治 中島庄一
調査期間	沢田鍋土遺跡	平成3年4月4日～平成3年12月30日
	がまん淵遺跡	平成3年7月8日～平成3年11月15日

(2) 平成4年度

調査体制	事務局長	峯村忠司
	同 総務部長	神林幹生
	同 調査部長	小林秀夫
	中野調査事務所長	関 孝一
	同 庶務課長	高野幹郎
	同 調査課長	土屋 積
	同 調査研究員	鶴田典昭 赤塩 仁 白田広之 越 修一 中村敏生 林 正則 藤沢高広
調査期間	池田端窯跡遺跡	平成4年4月6日～平成4年8月4日
	清水山窯跡遺跡	平成4年9月7日～平成4年12月17日
	玄照寺跡遺跡・飯田古屋敷遺跡	平成4年7月2日～平成4年11月27日

(3) 平成5年度

調査体制 事務局長 峯村忠司
 同 総務部長 神林幹生
 同 調査部長 小林秀夫
 中野調査事務所長 関 孝一
 同 庶務課長 高野幹郎
 同 調査課長 土屋 積
 同 調査研究員 鶴田典昭 白田広之 山本 浩 (牛出古窯遺跡)
 渡辺敏泰 林 正則 (玄照寺跡遺跡・飯田古屋敷遺跡)

調査期間 牛出古窯遺跡 平成5年4月6日～平成5年7月2日、同年11月1日～同年12月22日
 玄照寺跡遺跡・飯田古屋敷遺跡 平成5年11月1日～平成5年11月26日

(4) 平成6年度

整理体制 事務局長 峯村忠司
 同 総務部長 神林幹生
 同 調査部長 小林秀夫
 中野調査事務所長 関 孝一
 同 庶務課長 高野幹郎 6月より村山茂美
 同 調査課長 土屋 積
 同 調査研究員・調査員 鶴田典昭 中島英子

整理作業内容 窯跡の資料を中心に古代の遺物の実測・トレース、遺構図のトレースを行う。

(5) 平成7年度

整理体制 事務局長 峯村忠司
 同 総務部長 西尾紀雄
 同 調査部長 小林秀夫
 中野調査事務所長 関 孝一
 同 庶務課長 村山茂美
 同 調査課長 土屋 積
 同 調査研究員・調査員 鶴田典昭 中島英子

整理作業内容 古代以外の遺物の実測・トレース、遺構図のトレース、遺物の写真撮影、遺物及び遺構図の図版組みを行う。

(6) 平成8年度

整理体制 事務局長 青木 久
 同 総務部長 西尾紀雄
 同 調査部長 小林秀夫 (兼長野調査事務所長)
 長野調査事務所長 小林秀夫
 同 庶務課長 外谷 功
 同 調査第2課長 土屋 積
 同 調査研究員・調査員 鶴田典昭 中島英子 石原州一 中島庄一 (現中野市教育委員会)

整理作業内容 遺構図の図版組み、原稿執筆、編集、校正を行う。

3 指導者・協力者

発掘調査と整理作業にあたり、下記の方々や機関にご指導ご協力を得た。お名前を記して感謝したい。

(敬称略・五十音順)

赤塚次郎 安藤政雄 岡村道雄 織笠 昭 金井汲次 倉沢正幸 坂井秀弥 笹沢 浩 白沢勝彦
田辺昭三 壇原長則 鶴間正昭 傳田伊史 戸沢充則 中沢道彦 中村由克 平川 南 広岡公夫
藤原妃敏 松島義信 宮下健司 山田真一 山田昌久 湯本軍一 吉田恵二 和田 萃
上田市信濃立国分寺資料館 小布施町教育委員会 須坂市教育委員会
豊科町教育委員会 豊科町東山遺跡調査会 中野市教育委員会 (株)長野共同データセンター
㈱写真測図研究所 (株)こうそく (株)パレオ・ラボ 長野県考古学会縄文早期部会

4 発掘および整理作業参加者 (平成3～8年)

荒井 三郎 青井 祐一 青木 文雄 浅沼喜一郎 畔上美津子 畔上ちよ子 天尾 洋子 有賀 保訓
今井百合子 今井 侃 池田 幸男 池田すぎ子 池田 淑美 池田 政夫 飯田 静夫 石沢 善蔵
石井 賢一 石川 清子 伊藤久美子 伊藤 彦市 伊藤ひめ子 海野 明子 上野美和子 内田 守
上原 金治 小川 益大 小田切吉夫 小田切一郎 小野沢時子 尾沢みつ子 小淵まり子 大原三保子
大沢 松子 上条 正義 金谷のり子 金谷 美江 笠原 範子 兼岡 護 勝山みつの 川口 耐子
北沢 甲三 木ノ内きみい 北原昭四郎 北村あけみ 黒岩 澄男 黒岩 清江 黒沢 和子 黒沢 晴美
黒沢 登市 久保ます江 倉沢より子 倉沢 浩子 児玉くにい 児玉四利信 小林 伸子 小林 新吉
小林理兵衛 小林ノブエ 小林ふみえ 小林由美子 小林 芳子 小林 定子 小林 資成 小林 嘉子
小林ツネ子 小林 房子 小林 正人 小林 よ志 小林 光子 小林 三郎 小泉 恵子 小池 好子
越 輝子 小橋 石松 近藤 栄 坂口 実 坂口 あさ 坂口 二郎 坂田恵美子 坂巻 すい
酒井 和美 酒井今朝吉 佐々木よ志江 白須けい子 下田 民夫 白井隆太郎 実延 章子 渋澤 伸治
渋澤とし子 塩島 定子 清水 眞 春原弥惣治 春原三千子 須田 有子 関口太傳治 関 増行
関谷 智子 関 健吾 田子 定夫 田上 濱子 田中幸太郎 武井スミ子 高沢 正富 高橋 弘美
高相 三男 高橋千代江 高橋 信子 檀原 康信 竹内 三男 塚田 宏 土屋 實治 土倉美すゝ
坪根まどか 鶴田 郁子 徳武 博幸 徳永 利夫 徳永 徳一 徳竹ミサオ 鳥羽す美子 豊田 千咲
中村 博恵 中村 富保 中川 愧 中丸 節子 中島亮之進 中島 忠夫 成田 三郎 長原 賢
長原 英子 長橋喜一郎 西堀 節子 西原 三郎 原 汪子 服部カツ子 服部 正志 畠山 明子
樋口のり子 深谷 亘 降旗まつ子 降旗 茂 藤木まつみ 松林 明子 松田 正一 藤木 利高
町田 俊雄 町田富美子 町田 幸重 町田 好江 増田 昭子 真崎 恵美 丸山みどり 松林 明子
松田 正一 宮沢 洋子 宮沢 和 宮下恵美子 宮崎 正枝 村澤 光子 村松 明子 山田 艶子
山口 久江 山崎キヨシ 山崎 観守 山崎多恵子 柳澤 静子 山本 和美 矢沢ゆき子 湯本 宰
湯出川こはる 吉沢トシ子 吉池シマエ 吉野 治雄 吉原 次男 横田 節子 和田 貞夫 和田久美子
渡辺三千代 綿田 茂実 割田登志子 若林 より

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

(1) 試掘と調査区の設定

本調査に先がけて長野県教育委員会及び長野県埋蔵文化財センターにより高速道路路線内の試掘調査が行われ、その結果に基づき調査範囲を設定した。

信州中野インターチェンジ周辺の4遺跡では、遺構・遺物が検出されなかった谷部とすでに削平されていた地区を除いてほぼ全域を調査区とした(第2図)。がまん淵遺跡と沢田鍋土遺跡の間の谷部は1~3mの盛り土で面的な試掘は困難であったため、3ヶ所の試掘坑をあけたところ、遺物は検出されず、粘土層とシルト層の互層が確認された。水田の可能性もあることから、プラントオパール分析を行ったが、水田を示す結果は得られず、調査対象外とした。また、池田端窯跡は平成3年度の試掘の結果により、近代の粘土採掘により大規模に攪乱された丘陵頂部と遺構遺物が検出されない地区を調査対象から除いた。池田端窯跡の前面に広がる低地部分(清水山窯跡④区)は、試掘で遺物が出土したトレンチを中心に調査区を設定したが、他に遺物・遺構は検出されず、それ以上調査区は広げなかった。上記の試掘の詳細は7章に示す。なお、第2図では削平された部分も一部旧地形で表現している。

小布施町内の飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡と中野市内の牛出古窯遺跡の試掘と調査区の設定については第2・3章と第8章にそれぞれ記述する。

(2) 遺跡名称と遺跡記号

本書で報告する遺跡名には下記の略号を用いた。遺物、写真他の記録類の注記などはこれによる。

い い だ ふ る や し き い せ き 飯田古屋敷遺跡	A I F	し み づ や ま か ま あ と 清水山窯跡	A S M
げ ん し ょ う じ あ と 玄照寺跡	A G S	い け だ は た か ま あ と 池田端窯跡	A I D
が ま ん ぶ ち い せ き がまん淵遺跡	A G B	う し で こ よ う い せ き 牛出古窯遺跡	A U S
さ わ だ な べ つ ち い せ き 沢田鍋土遺跡	A S D		

(3) グリッドの設定と呼称法(第1図・第2図)

グリッドの設定は、国土座標を利用し大々地区・大地区・中地区・小地区の4段階に区分した。まず調査区全体にかかる200m×200mの区画を設定し、これを大々地区としI・II・III・・・とローマ数字で表記した。この大々地区を40m×40mの25区画に分割し大地区とした。大地区の呼称は北西から南東へAからYまでの大文字アルファベットを用いた。その大地区を8m×8mの25区画に分割し中地区とした。中地区の呼称は、北西から南東へ1から25の算用数字を用いた。同じく大地区を2m×2mの400区画に分割して小地区とした。小地区は、大地区の北西角を起点とし、X軸上に西から東へAからTまでのアルファベット、Y軸上に北から南へ01から20の数字を付して、両者の組み合わせで「A01」のように小地区名とした。これらの呼称を組み合わせ、例えば牛出古窯遺跡の大々地区「II区」のうち、大地区「L区」の中の中地「17区」(8m×8m)は「IIL17」と表記される。また、大地区「L区」を小地区に分割した「M05」(2m×2m)の場合は、「IILM05」と表記される。

グリッドの設定に際し、飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡の2遺跡(第4図)、がまん淵遺跡・沢田鍋土遺跡・

清水山窯跡・池田端窯跡の4遺跡（第2図）は、それぞれ一括して大々地区の設定を行い、牛出古窯遺跡は単独で大々地区の設定を行った。

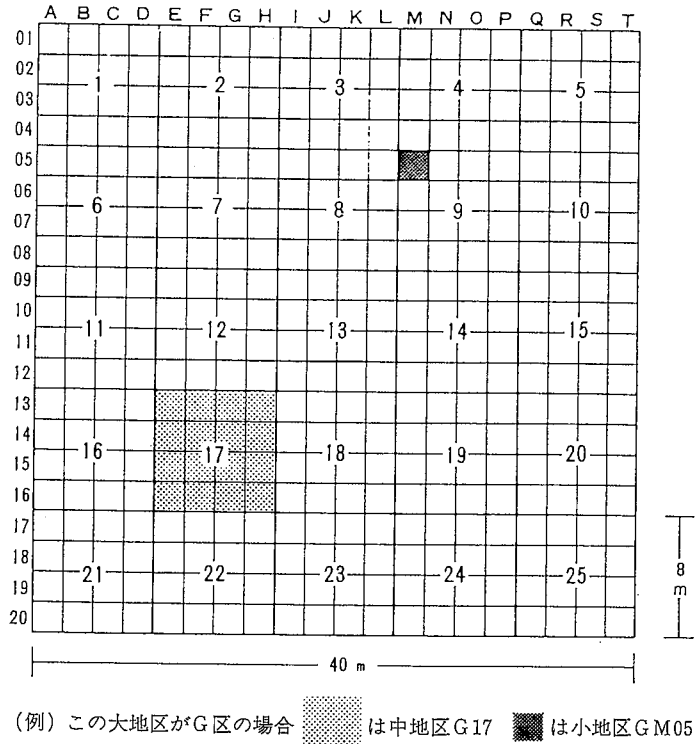
(4) 遺構記号と遺構番号

記録・注記等の便宜を図るために遺構名称は記号を用い、遺構番号は時代等にかかわらず種類ごと、検出順に付した。遺構記号は基本的に検出時に決定するため、主として平面的な形態や遺物の分布状況等を指標としたもので、必ずしも個々の遺構の性格を示すものではない。混乱を避けるため原則として遺構記号・遺構番号の変更は行わず、本報告書は発掘時に付した遺構記号・遺構番号を使用している。このため整理段階で遺構と認めなかった場合、遺構番号に欠番が生じている。また、遺構番号が重複してしまったものについてのみ整理作業段階で遺構番号の変更を行っている。

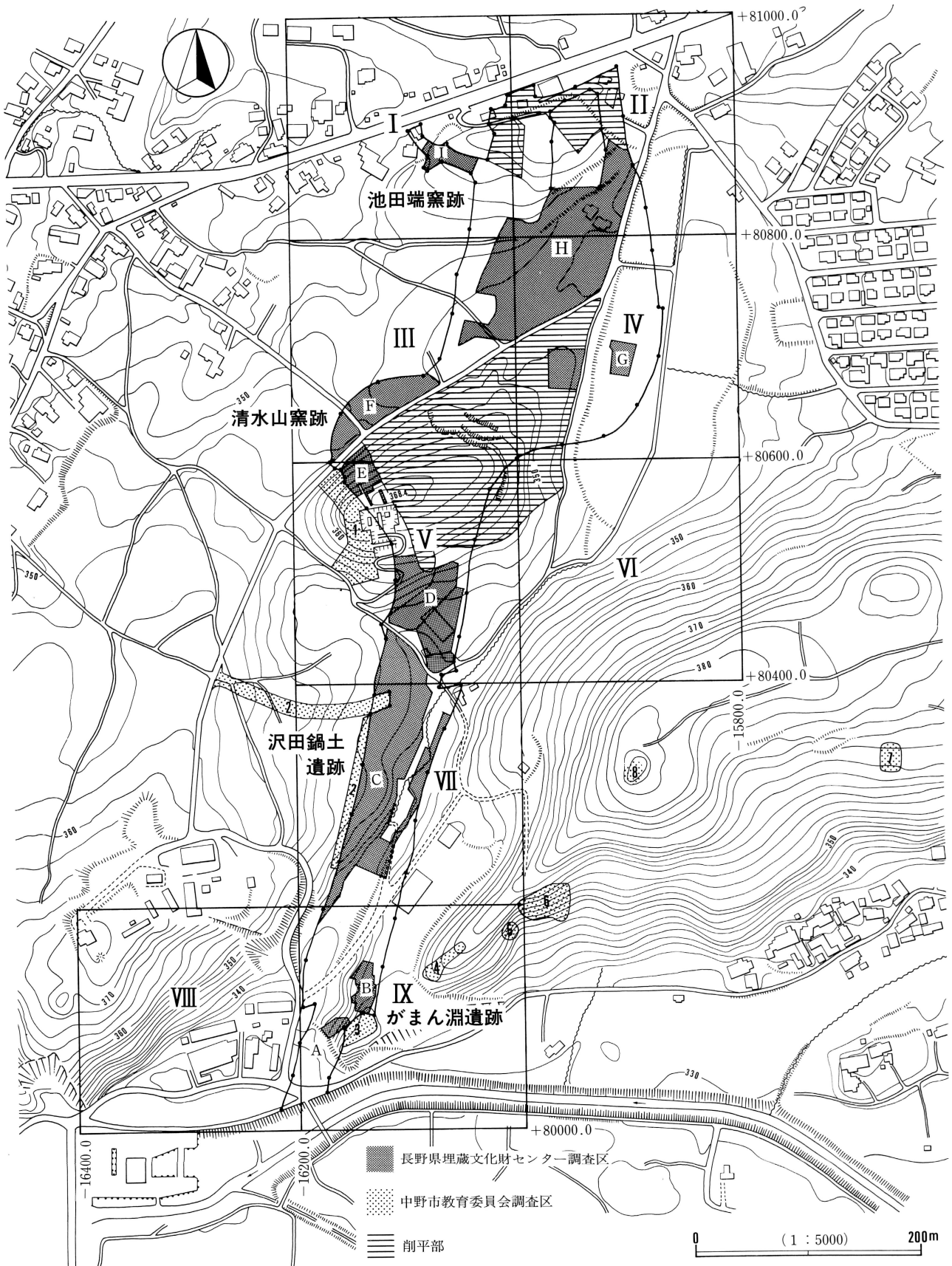
なお、本書で用いた遺構記号は当埋文センターで共通に用いているもので、以下のとおりである。

- [SB] 2m以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。(竪穴住居址、竪穴状遺構)
- [SK] 単独もしくは他の掘り込みと関係が認められないSBより小さな掘り込み。(土坑、落とし穴貯蔵穴、井戸、粘土採掘址等。)
- [SA] SBより小さな落ち込みや石が、列として配置されるもの。柵、築地。
- [ST] SBより小さな落ち込みや石が一定間隔で方形、円形に配置されるもの。(掘立柱建物址、礎石を利用した建物址)
- [SD] 帯状の掘り込み。(溝、河道他)
- [SF] 単独で存在し、火を焚いたあとが面的に広がるもの。(火床、炉址)
- [SH] 石が面的に集中するもの。(集石)
- [SQ] 遺物が面的に集中するもの。(ごみ捨て場、祭祀址、旧石器時代石器製作址他)
- [SY] 窯址 (須恵器窯・炭窯)
- [SW] 須恵器窯の灰原、物原
- [SX] 以上の遺構記号及びSL (水田・畑跡)、SC (道路)、SM (古墳・墳墓) の諸記号に該当しない不明遺構。ただし、沢田鍋土遺跡、清水山窯跡、池田端窯跡の一部の遺構については粘土採掘跡にSXの遺構記号を使用した。

さらに、SB・ST内の掘り込み(柱穴等)にはPを付した。また、飯田古屋敷遺跡、玄照寺跡のみで自然流路と思われる遺構にNRの遺構記号を使用した。



第1図 グリッド呼称法



- A・B がまん淵遺跡、C 沢田鍋土遺跡、D～G 清水山窯跡、H I 池田端窯跡
1. 清水山窯跡 1993年調査
 2. 沢田鍋土遺跡 1992年・1994年調査
 3. がまん淵遺跡A地点 1993年調査
 4. がまん淵遺跡B地点 1993年調査
 5. がまん淵一号窯址 1993年調査
 6. 西山中世基址遺跡 1993年調査
 7. 上の山遺跡粘土採掘坑 1993年調査
 8. 京塚古墳 1991年調査

第2図 中野インター周辺の発掘調査区

2 整理作業の方法

(1) 遺物整理の方法と収納

遺物への注記は、白色で書いたものと黄色で書いたものがある。白色の注記は発掘時の出土地点（遺構名、グリッド名など）と遺物取り上げ番号を示す。黄色の注記は整理時の整理番号を示す。整理番号は実測図、拓本などの資料化したすべての遺物に付し、遺跡ごとの通し番号とし、遺物の種類または時期によって以下の番号を用いた。また、整理番号を付した後に、異なる番号のものが接合するなど、整理番号に欠番が生じている。なお、整理番号は実測図番号とも一致している。

弥生時代・古墳時代の土師器	No.0001～No.1000
古代土師器・須恵器	No.1001～No.2000
縄文土器	No.2001～No.3000
石器・石製品	No.3001～No.4000
瓦	No.4001～No.5000
金属製品	各遺跡により異なる。

飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡の整備番号については以上の原則によらず、中世・近世の焼物と木製品とにそれぞれNo.1から通し番号をつけた。

金属製品は、保存処理を施し、木製品については自然乾燥による保存を試みたが、一部損してしまったものがある。曲げ物、漆器椀については水付けにして保存している。その他の事項については各遺跡の該当項目で記述する。

遺物・記録類は当埋蔵文化財センター「整理収納システム要項」に従い整理収納した。なお、遺物類は整理番号を付し図化を行ったものとそれ以外のものを分け、それぞれを遺構単位に収納した。遺物記録類のすべては整理終了後、長野県立歴史館に移管した。

第3節 調査遺跡とその周辺環境

1 調査遺跡周辺の環境と発掘調査の概要

各遺跡については、それぞれの章で詳述するが、ここでは全体の概要にふれておく。

本書で報告する7遺跡は善光寺平（長野盆地）北端の千曲川沿いに位置する。山地に囲まれた善光寺平は、千曲川とその支流の河川によって形成された沖積地と扇状地が発達しており、沖積層の地表下数メートルに遺物包含層が確認されるところもある。善光寺平のほぼ中央を流れてきた千曲川は中野市立ヶ花より丘陵地形の狭間を蛇行しながら飯山盆地へ向かって流れており、善光寺平中心部とは異なった地形環境を示す。なお、千曲川は中野市立ヶ花で急に川幅が狭くなるため、その上流は頻繁に洪水に見舞われる地域であった。また、善光寺平北西の縁部には丘陵が発達しており、丘陵上には平坦な地形が残り、丘陵斜面には段丘地形が形成されている。千曲川西岸には南から豊野丘陵・赤塩丘陵・奥手山丘陵、東岸には本書報告の遺跡が立地する高丘丘陵・長丘丘陵が連なる。長丘丘陵・高丘丘陵周辺には千曲川によってつくられた河岸段丘が発達しており、高位より赤塩面・長丘面・草間面・高丘面（原面）・栗林面の5段に区別される。なお、遺跡周辺の丘陵地形の詳細は、『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19 栗林遺跡・七瀬遺跡』に詳しく述べているので参照して頂きたい。

小布施町内の2遺跡が立地する松川扇状地は千曲川の支流松川により形成され、現在の松川を境に右扇と左扇に分かたれる。小布施町は右扇の上にひらけており、飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡はその扇端に隣接して所在し、現在の千曲川の河道から約300mの距離にある。松川は、近世初めに福島正則が治水に大きな成果を上げたと言われていることから、扇状地上を乱流していた松川の流路が近世初めに固定され、現在の流路になったと推定されている。両遺跡は中世から近世にかけての遺跡であることから、その形成・変遷と松川の治水とは切り離せない関係にあるものと思われる。

これらの2遺跡を千曲川沿いに3.2km下り、支流の篠井川を渡るとがまん淵遺跡を初めとする中野市内5遺跡が立地する高丘丘陵に至る。現在供用中の信州中野インターチェンジ周辺に、がまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡、清水山窯跡、池田端窯跡が、更に北西に進み高丘丘陵の西縁の一角に牛出古窯遺跡が位置している。高丘丘陵は須恵器の窯跡群の所在地として古くから知られている。それらの一部が草間窯跡群（金井汲次1982）と呼ばれたり、中野市西部の窯跡群を総称して長丘丘陵古窯址群（笹沢浩・原田勝美1974）または、長丘・高丘丘陵窯址群（笹沢浩1988）と呼ばれている。しかしながら、高丘・長丘丘陵は通常南側の低い部分を高丘丘陵、北側の一段高い部分を長丘丘陵と呼んでおり、窯址群の所在は今のところ南側の高丘丘陵に限られていることから、本書では高丘丘陵古窯跡群と呼ぶことにしたい。ちなみに「長丘」と「高丘」は合併によって現中野市が発足する以前の村名であり、学校や地域名として受け継がれているが、地籍名としては存在しない。なおこれらの遺跡は先述の高丘面に立地し、牛出古窯遺跡の古墳時代の集落部分のみ栗林面に立地する。

以上の7遺跡の調査の概要を時代をおってまとめてみたい。旧石器時代では、がまん淵遺跡と牛出古窯遺跡でA T降下以前と思われる石器群が出土し、特にがまん淵遺跡は中期旧石器時代末から後期旧石器時代初頭に位置付けられる可能性が指摘できる。縄文時代ではがまん淵遺跡で、早期貝殻沈線文系土器群に並行すると思われる櫛描の条線文が施された土器群とその時期の石器群が出土した。土器は破片ではあるが、本地域で今までまとまっては確認されていなかったもので今後注意されるべき遺物群である。この他に沢田鍋土遺跡・清水山窯跡で中期後半の遺物と粘土採掘跡と思われる土坑を数基確認した。

弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の時期では、がまん淵遺跡と牛出古窯遺跡で集落跡、沢田鍋土遺跡では粘土採掘坑群を検出した。特にがまん淵遺跡はいわゆる高地性の防御的集落と考えられ、長野県内では初めて確認されたもので今後の類例の増加を期待したい。同種の遺跡が北陸地方特に新潟県などに同時期まで認められるようである。

奈良・平安時代では、沢田鍋土遺跡、清水山窯跡、池田端窯跡、牛出古窯遺跡で須恵器の窯跡を14基調査し、牛出古窯遺跡では須恵器生産に関わる工房跡を発見した。窯跡は8世紀前半代のものが多く、7世紀末から9世紀にかけて操業されたと考えられる高丘丘陵古窯跡群の中でも古い窯が集中していると考えられる地点の調査となった。

中世では牛出古窯遺跡で埋葬施設、清水山窯跡では五輪塔が出土している。清水山窯跡の西側斜面部は中野市教育委員会の調査によって、五輪塔が並べられた墓域であったことが確認されている。また、飯田古屋敷遺跡は雁田郷飯田の領主である飯田氏の館跡とされる遺跡で、調査区内では堀と考えられる溝の一角などを発見したが、館跡の特定はできていない。そこに隣接する玄照寺跡は、戦国時代までは随行寺と号し、館主の菩提寺であった可能性も指摘される玄照寺の旧所在地とされている。調査区内では掘立柱建物跡と思われる多数のピット・井戸などと共に、火葬施設・墳墓堂と推定される方形周溝状の遺構を検出し、遺跡内からは五輪塔などの石塔が出土していることから、中世には葬送行為に関連する場所であったと推定される。しかし、玄照寺の存在を示す遺構・遺物は確認できなかった。

2 周辺の遺跡

周辺の遺跡分布図を第3図に示した。このうち発掘調査などの行われたものを時代順にあげておく。

旧石器時代 中野市浜津ヶ池遺跡・立ヶ花表遺跡・栗林遺跡・沢田鍋土遺跡中野市教育委員会調査地点・豊野町南曾峯遺跡などで出土例が報告され、いずれも同じ丘陵面である。また、千曲川の下流域の飯山市・栄村の丘陵上では関沢遺跡・太子林遺跡・日焼遺跡・上野遺跡・トトノ池南遺跡・小坂遺跡・横倉遺跡などの調査例が報告されている。特に沢田鍋土遺跡中野市教育委員会発掘地点・南曾峯遺跡・がまん淵遺跡では中期旧石器時代から後期旧石器時代にかかる石器群が出土しており、長野県内でも最古に属する石器群である。これらの遺跡は小地域内にまとまっており、今後、同時期の遺跡の発見が期待される地域である。なおがまん淵遺跡から直線距離にして15km北方に野尻湖遺跡群がある。

縄文時代 前期後半の南大原式の標識遺跡である下水内郡豊田村南大原遺跡・中野市姥ヶ沢遺跡（中期前葉）・同栗林遺跡（中期末～後期前半）・豊田村風呂屋遺跡（中期前葉）などの調査例がある。縄文時代の遺跡の調査例は少ないが、中期では北陸地方や関東地方からの強い影響を受け、中南信地方とは異なる独自の土器文化圏を形成していたことが近年の調査で明らかになりつつある。また栗林遺跡では後期の水さらし場遺構や低地の貯蔵穴群の調査成果が注目される。

弥生時代 中期では、栗林式の標識遺跡の中野市栗林遺跡、同七瀬遺跡、同西条・岩船遺跡群などで遺構の調査例がある。後期では中野市七瀬遺跡、栗林遺跡、安源寺遺跡、西条・岩船遺跡群、間山遺跡などで集落の調査例がある。善光寺平南部で急増している同時期の資料と対比して興味深いものがある。

古墳時代 中野市安源寺遺跡前方後方形周溝墓・林畔1・2号墳・七瀬双子塚古墳・西山古墳・京塚古墳・合掌形石室を持つ金鑑山古墳・豊田村風呂屋古墳などの古墳、中野市栗林遺跡・同七瀬遺跡・同安源寺遺跡・小布施町中条堀廻遺跡・同大道下遺跡などの集落跡が調査されている。この他に中野市新井大ロフ遺跡では祭祀跡、安源寺遺跡で土師器焼成遺構とされるものが報告されている。特に弥生時代末から古墳時代初頭には中野市南部地域での東海系土器や北陸系土器の流入が指摘されており、がまん淵遺跡の防衛的集落の存在などと合わせて、古墳時代への変換期を探る上で重要な位置を占める地域と見られる。

奈良・平安時代 須恵器の窯跡では、高丘丘陵古窯跡群の千曲川を挟んだ水上内郡豊野町・同牟礼村域内には髻山古窯跡群があり、豊野町山の神窯跡、同平出上の山遺跡1号・2号窯、牟礼村前高山窯跡などが調査報告されている。高丘丘陵古窯跡群では、中野市茶臼峯窯跡・同大久保窯跡・同がまん淵遺跡・同立ヶ花表山窯跡・同上の山窯跡・同中原窯跡などの資料が報告されている。これらの窯跡群は7世紀末から9世紀中頃まで操業したと考えられているが、窯跡群周辺の当該期の集落の調査例が少なく、本地域の須恵器の編年は余り進んでいない状況にある。特に奈良時代の集落の調査例が少なく、善光寺平南部に集落跡の調査例がいくつかあるものの、高丘丘陵窯跡群からの須恵器の供給は確認されていない。また、中野市栗林遺跡で平安時代の土師器焼成遺構なども認められ、奈良・平安時代を通じて須恵器・土師器の生産地域であった。

中世では、中野市高梨城跡・同牛出館跡・同牛出遺跡などの館跡や集落跡の他、中野市清水山窯跡・同西山中世墓址遺跡・豊田村対面所遺跡など五輪塔を伴う斜面に立地する火葬墓群が調査されている。また、小布施町雁田には応永15年（1408）建立の浄光寺薬師堂があり、国の重要文化財に指定されている。

参考文献

- 金井汲次 1982 「草間古窯址群」『長野県史』考古資料編（二）
笹沢浩・原田勝美 1974 「長野県下出土の須恵器（上）」『信濃』26-9
笹沢浩 1988 「VI（19）須恵器の分布」『長野県史』考古資料編（四）

第1表 遺跡地名表(1)

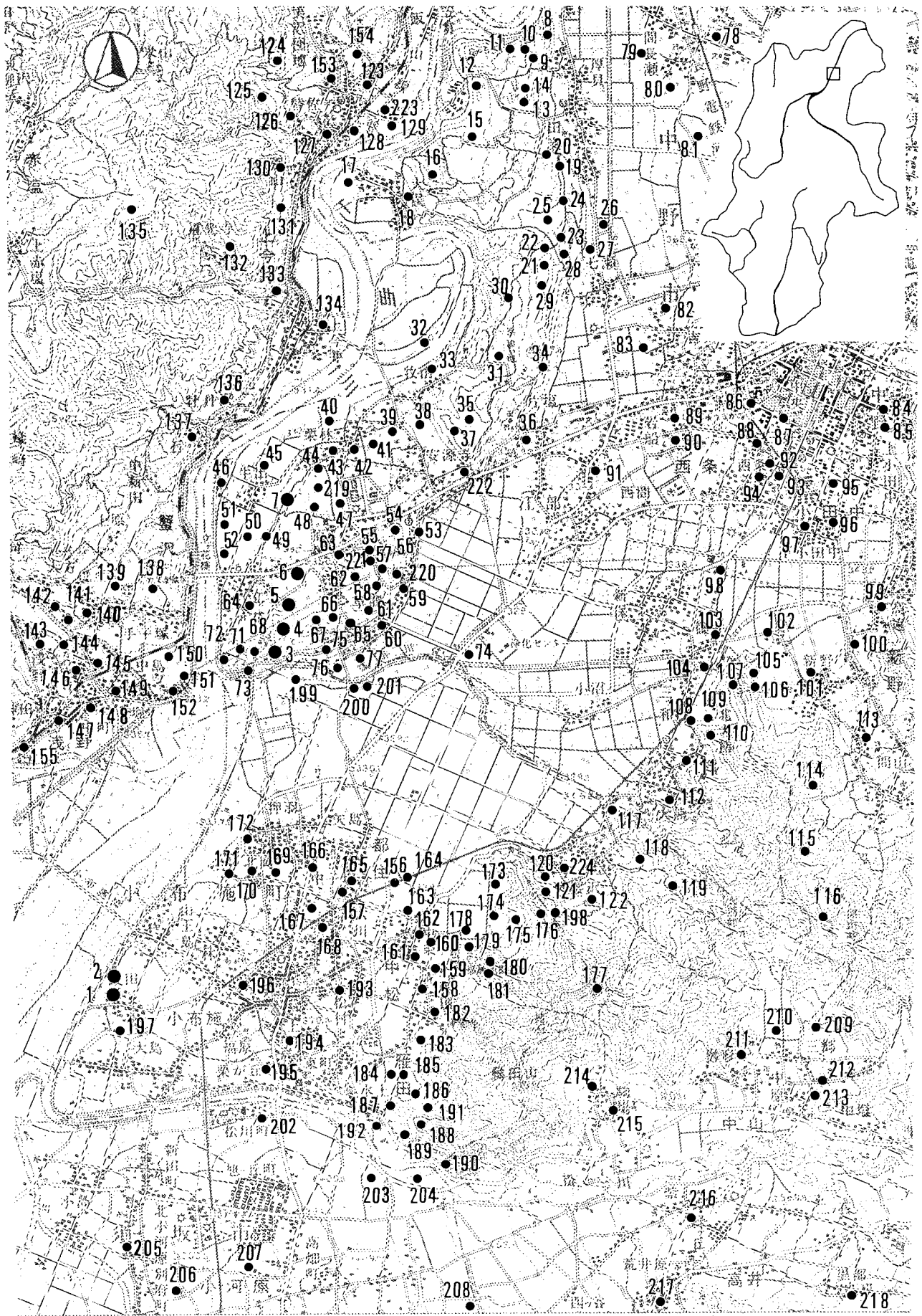
NO	遺跡名	所在地	旧石器時代	縄文時代	弥生時代		古墳時代	奈良・平安時代		中世
					中期	後期				
1	飯田古屋敷遺跡	小布施町飯田								○
2	玄照寺跡	小布施町飯田								○
3	がまん淵遺跡	中野市草間	○	○		○		○	○	
4	沢田鍋土遺跡	中野市立ヶ花	○	○			○	○		
5	清水山窯跡	中野市立ヶ花		○				○	○	
6	池田端窯跡	中野市立ヶ花		○				○		
7	牛出古窯遺跡	中野市牛出	○				○	○	○	
8	山の神古墳	中野市厚貝					○			
9	永峯古墳	中野市厚貝					○			
10	陣場遺跡	中野市厚貝	○	○	○	○				
11	峯遺跡	中野市厚貝	○							
12	赤畑古墳	中野市厚貝					○			
13	中畝1号古墳	中野市田麦					○			
14	中畝2号古墳	中野市田麦					○			
15	三ツ又遺跡	中野市田麦		○						
16	大俣城跡	中野市大俣								○
17	宮反遺跡	中野市大俣		○	○			○		
18	姥ヶ沢遺跡	中野市大俣		○	○		○			
19	林畔1号古墳	中野市田麦					○			
20	林畔2号古墳	中野市田麦					○			
21	七瀬1号古墳	中野市七瀬					○			
22	七瀬2号古墳	中野市七瀬					○			
23	七瀬3号古墳	中野市七瀬					○			
24	七瀬4号古墳	中野市七瀬					○			
25	七瀬5号古墳	中野市七瀬					○			
26	棚畑遺跡	中野市七瀬						○	○	
27	七瀬遺跡	中野市七瀬			○	○	○			
28	前山古墳	中野市七瀬					○			
29	七瀬双子塚古墳	中野市七瀬					○			
30	大徳寺跡	中野市栗林								○
31	浜津ヶ池遺跡	中野市栗林	○	○				○		
32	南大原遺跡	豊田村上今井		○	○	○		○		
33	光海寺跡	中野市栗林								○
34	大徳寺遺跡	中野市片塩					○	○	○	
35	から池遺跡	中野市安源寺						○	○	
36	片塩遺跡	中野市片塩						○		
37	安源寺城跡	中野市安源寺								○
38	安源寺跡	中野市安源寺								○
39	安源寺館跡	中野市安源寺								○
40	栗林遺跡	中野市栗林			○	○	○	○	○	
41	小丸山古墳	中野市安源寺					○			
42	栗林1号古墳	中野市栗林					○			
43	栗林2号古墳	中野市栗林					○			
44	栗林3号古墳	中野市栗林					○			
45	牛出遺跡	中野市牛出		○	○	○		○	○	
46	立ヶ花・上川端遺跡	中野市立ヶ花	○							
47	坂下窯跡	中野市草間						○		
48	中原窯跡	中野市草間						○		
49	草間西原窯跡	中野市草間						○		
50	本誓寺跡	中野市立ヶ花								○
51	牛出城跡	中野市牛出								○
52	立ヶ花遺跡	中野市立ヶ花	○	○			○			
53	風巻遺跡	中野市安源寺						○		
54	茶臼峯窯跡	中野市草間		○				○	○	
55	茶臼峯窯跡	中野市草間						○		
56	高山1号古墳	中野市草間					○			

NO	遺跡名	所在地	旧石器時代	縄文時代	弥生時代		古墳時代	奈良・平安時代		中世
					中期	後期				
57	高山2号古墳	中野市草間					○			
58	社宮司古墳	中野市草間					○			
59	高屋敷遺跡	中野市草間			○	○	○		○	
60	草間中組遺跡	中野市草間				○			○	
61	御嶽山古墳	中野市草間					○			
62	大久保窯跡	中野市草間							○	
63	林畔砦跡	中野市草間							○	
64	立ヶ花表山窯跡	中野市立ヶ花							○	
65	秋葉山古墳	中野市草間					○			
66	西山古墳	中野市草間					○			
67	京塚古墳	中野市草間					○			
68	立ヶ花1号古墳	中野市立ヶ花					○			
69	立ヶ花2号古墳	中野市立ヶ花					○			
70	立ヶ花3号古墳	中野市立ヶ花					○			
71	立ヶ花表遺跡	中野市立ヶ花	○			○		○		
72	立ヶ花城跡	中野市立ヶ花	○	○	○		○		○	
73	島軒割遺跡	中野市立ヶ花					○	○	○	
74	殿橋遺跡	中野市江部					○			
75	竜徳寺跡	中野市草間								○
76	川端遺跡	中野市草間					○			
77	草間城跡	中野市草間								○
78	笠原向フ原遺跡	中野市笠原						○		
79	間長瀬遺跡	中野市間長瀬						○		
80	新井向原遺跡	中野市新井								○
81	新井大口フ遺跡	中野市新井						○		
82	屋裏遺跡	中野市吉田					○		○	
83	吉田宮脇遺跡	中野市吉田					○		○	
84	姥懐山古墳	中野市上小田中						○		
85	普代遺跡	中野市中野			○	○	○	○	○	
86	寿町遺跡	中野市中野					○			
87	三好町遺跡	中野市西条								○
88	西条遺跡	中野市西条					○		○	
89	岩船岩水神社遺跡	中野市岩船					○	○	○	
90	岩船氏居館跡	中野市岩船								○
91	岩船遺跡	中野市岩船					○		○	
92	西条長屋塚遺跡	中野市西条								○
93	五加遺跡	中野市中野								○
94	西条東屋敷遺跡	中野市西条								○
95	上小田中遺跡	中野市上小田中					○	○		○
96	光念寺古墳	中野市上小田中						○		
97	下小田中遺跡	中野市上小田中					○	○	○	
98	新保遺跡	中野市新保								○
99	高遠山古墳	中野市新野						○		
100	新野上東遺跡	中野市新野								○
101	新野遺跡	中野市新野					○			○
102	行人塚遺跡	中野市新野								○
103	篠ノ井居館跡	中野市桜沢								○
104	道添遺跡	中野市北大熊						○		○
105	新野1号古墳	中野市新野						○		
106	新野2号古墳	中野市新野						○		
107	金鑑山古墳	中野市新野						○		
108	えびす山古墳	中野市北大熊								○
109	三ツ和遺跡	中野市北大熊			○	○		○	○	
110	専福寺跡遺跡	中野市北大熊								○
111	大熊日影遺跡	中野市北大熊								○
112	大熊日向遺跡	中野市南大熊					○	○		○

第1表 遺跡地名表(2)

NO	遺跡名	所在地	旧石器時代	縄文時代	弥生時代中期	弥生時代後期	古墳時代	奈良・平安時代	中世
113	間山遺跡	中野市間山		○		○	○		
114	小曾崖城跡	中野市新野							○
115	西山砦跡	中野市間山							○
116	沼ノ入城跡	中野市間山							○
117	会下沢遺跡	中野市桜沢		○		○	○		
118	会下遺跡	中野市桜沢						○	
119	桜沢1～6号墳	中野市桜沢					○		
120	南沢南遺跡	中野市桜沢		○		○			
121	二十端城跡滝ノ入城跡	中野市桜沢							○
122	中屋遺跡	中野市桜沢		○		○		○	
123	宮沖遺跡	豊田村豊津				○			
124	飛山遺跡	豊田村豊津		○	○	○			○
125	替佐城	豊田村							○
126	対面所遺跡	豊田村							○
127	南大洞遺跡	豊田村豊津		○	○	○			
128	千田遺跡	豊田村豊津		○		○	○		
129	琵琶島遺跡	豊田村豊津		○	○	○			
130	上水内北部高校遺跡	三水村普光寺		○				○	
131	風呂屋遺跡	豊田村上今井		○	○			○	○
132	北城山城跡	豊田村上今井							○
133	寺窪窯跡	豊田村上今井						○	
134	山根遺跡	豊田村上今井		○	○	○		○	
135	瘤屋敷遺跡	三水村赤塩						○	
136	長清寺遺跡	豊野町川谷							○
137	二ツ石遺跡	豊野町蟹沢		○					
138	下張遺跡	豊野町蟹沢	○						
139	八幡社遺跡	豊野町蟹沢						○	
140	板橋遺跡	豊野町蟹沢						○	
141	立石ヶ丘遺跡	豊野町大倉		○	○	○			
142	立石ヶ丘古墳	豊野町大倉						○	
143	上浅野遺跡	豊野町浅野		○		○			
144	観音堂遺跡	豊野町大倉		○		○	○		
145	橋場遺跡	豊野町大倉				○		○	
146	大川端遺跡	豊野町浅野						○	○
147	大道添遺跡	豊野町浅野		○					
148	町尻遺跡	豊野町浅野		○					
149	中島遺跡	豊野町蟹沢		○					
150	南曾峯遺跡	豊野町蟹沢	○	○	○			○	
151	南曾峯古墳	豊野町蟹沢						○	
152	峯の畑遺跡	豊野町蟹沢						○	
153	飯網平遺跡	豊田村豊津		○					
154	飯網平北跡	豊田村豊津		○					
155	古瀬遺跡	豊野町古瀬							○
156	古堂塚古墳	小布施町中松						○	
157	銚子塚古墳	小布施町都住						○	
158	清水端遺跡	小布施町雁田		○	○		○	○	○
159	宮林遺跡	小布施町雁田		○	○	○	○	○	
160	木下遺跡	小布施町雁田				○	○	○	
161	大道上遺跡	小布施町中末			○	○	○	○	○
162	中町遺跡	小布施町雁田			○	○	○	○	○
163	中条堀廻遺跡	小布施町中松			○	○	○	○	○
164	中子塚遺跡	小布施町都住				○	○	○	
165	道添遺跡	小布施町都住						○	
166	六川遺跡	小布施町都住		○		○	○	○	
167	松宮遺跡	小布施町都住		○	○	○	○	○	
168	三田町遺跡	小布施町都住			○		○	○	

NO	遺跡名	所在地	旧石器時代	縄文時代	弥生時代中期	弥生時代後期	古墳時代	奈良・平安時代	中世
169	三木遺跡	小布施町北岡			○	○	○	○	
170	西蓮坊遺跡	小布施町北岡					○	○	○
171	向屋敷遺跡	小布施町北岡						○	○
172	西郷遺跡	小布施町押羽				○	○	○	
173	わぐ遺跡	小布施町雁田			○	○	○	○	
174	飯縄前遺跡	小布施町雁田	○		○	○		○	○
175	下入1～6号墳	小布施町雁田					○		
176	二十端遺跡	小布施町雁田							○
177	滝ノ入城跡	小布施町雁田							○
178	木戸脇遺跡	小布施町雁田			○			○	
179	権助土腐遺跡	小布施町雁田			○				
180	雁田城跡	小布施町雁田							○
181	岩松院1～9号墳	小布施町雁田						○	
182	薬師堂1～4号墳	小布施町雁田						○	
183	最明寺遺跡	小布施町雁田			○				
184	鳥の林1～3号墳	小布施町雁田						○	
185	新田原遺跡	小布施町雁田	○	○					○
186	蟹沢遺跡	小布施町雁田							○
187	観音崎遺跡	小布施町雁田							○
188	沢入古墳	小布施町雁田							○
189	隼人塚1～4号墳	小布施町雁田						○	
190	外不動1～19号墳	小布施町雁田							○
191	観音下1・2号墳	小布施町雁田						○	
192	外不動遺跡	小布施町雁田						○	○
193	大日堂古墳	小布施町小布施							○
194	万霊塔古墳	小布施町小布施							○
195	石碑古墳	小布施町福原							○
196	居村古墳	小布施町福原							○
197	坂の上遺跡	小布施町飯田							○
198	二十端1～4号墳	小布施町雁田							○
199	北久保遺跡	小布施町都住						○	○
200	土橋遺跡	小布施町都住						○	
201	焼釣遺跡	小布施町都住							○
202	六川道西沖第1号墳	須坂市小河原							○
203	丹波塚古墳	須坂市日滝							○
204	口明第1～3号古墳	須坂市日滝							○
205	左岸寺跡	須坂市小河原							○
206	小河原大塚古墳	須坂市小河原							○
207	高畑遺跡	須坂市小河原						○	○
208	境塚第1～4号墳	須坂市日滝							○
209	赤林遺跡	高山村							○
210	朝日遺跡	高山村			○				
211	梨ノ木遺跡	高山村						○	○
212	北坪井遺跡	高山村			○				○
213	坪井遺跡	高山村			○	○			○
214	滝ノ入遺跡	高山村			○				
215	宮前遺跡	高山村			○				○
216	紫遺跡	高山村			○	○			
217	荒井原遺跡	高山村	○	○	○	○	○	○	
218	黒部遺跡	高山村			○	○			○
219	東池田窯跡	中野市草間							○
220	上の山窯址	中野市草間							○
221	大久保館跡	中野市草間						○	○
222	安源寺遺跡	中野市安源寺	○	○	○	○	○	○	○
223	川久保遺跡	豊田村豊津				○			
224	南沢北遺跡	中野市桜沢			○	○	○		



第3図 小布施町・中野市周辺の遺跡分布図 (国土地理院 1:50,000「中野」)

第2章 飯田古屋敷遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

飯田古屋敷遺跡は15世紀半ばの豪族の飯田氏の居館址とされており、上高井郡小布施町大字飯田字古屋敷418-1他に所在する。千曲川に流れ込む松川の扇状地末端部分に立地し、現在は千曲川の堤防に接しており、千曲川の河道から300m～400mの距離にある。3章で記述する玄照寺跡の南に隣接する。玄照寺跡とは用水路を挟んで遺跡を分けているが、この用水が堀と考えられており、用水路に囲まれた範囲が館跡と推定されている。館跡推定地の西側は比高差2mの崖となっているが、この崖は遺跡範囲外にも続いており、千曲川による侵食崖と思われる。遺跡範囲内は果樹園となっており、東側には中世に現れたとされる飯田の集落が隣接する。なお、原地形では用水は地表下に埋設されている所もあり、館跡の全体の形状は地図からは読み取れない。

これまで発掘調査は行われていないが、調査区付近より備蓄銭が多量に出土したと伝えられている。

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法 (第4図)

調査区は遺跡の西端部分に当たり、調査は2年にわたって行われ、平成4年度は平坦部と、それより一段低い低地部分を調査した。当初、遺跡範囲は一段高い平坦部に限られていたが、低地部分の試掘調査で溝中より木製品が出土し、調査区を低地部分に広げた。平坦部北部を①-1区、平坦部南部を①-2区、崖下の低地部を②区とした。平成5年度は平成4年度の調査区の東側の幅約6mの範囲の調査を行い、整理段階で便宜的に③区とした。

調査方法は、重機で表土を除去した後、遺構の調査を行った。遺構外の遺物は2mグリッド単位で取り上げた。なお、②区の水田跡では深さ3mのところまで調査を行ったが、調査区壁の砂の崩落の危険性があり、SD04を検出した時点で調査を断念せざるを得ず、それ以下の層序での調査はできなかった。

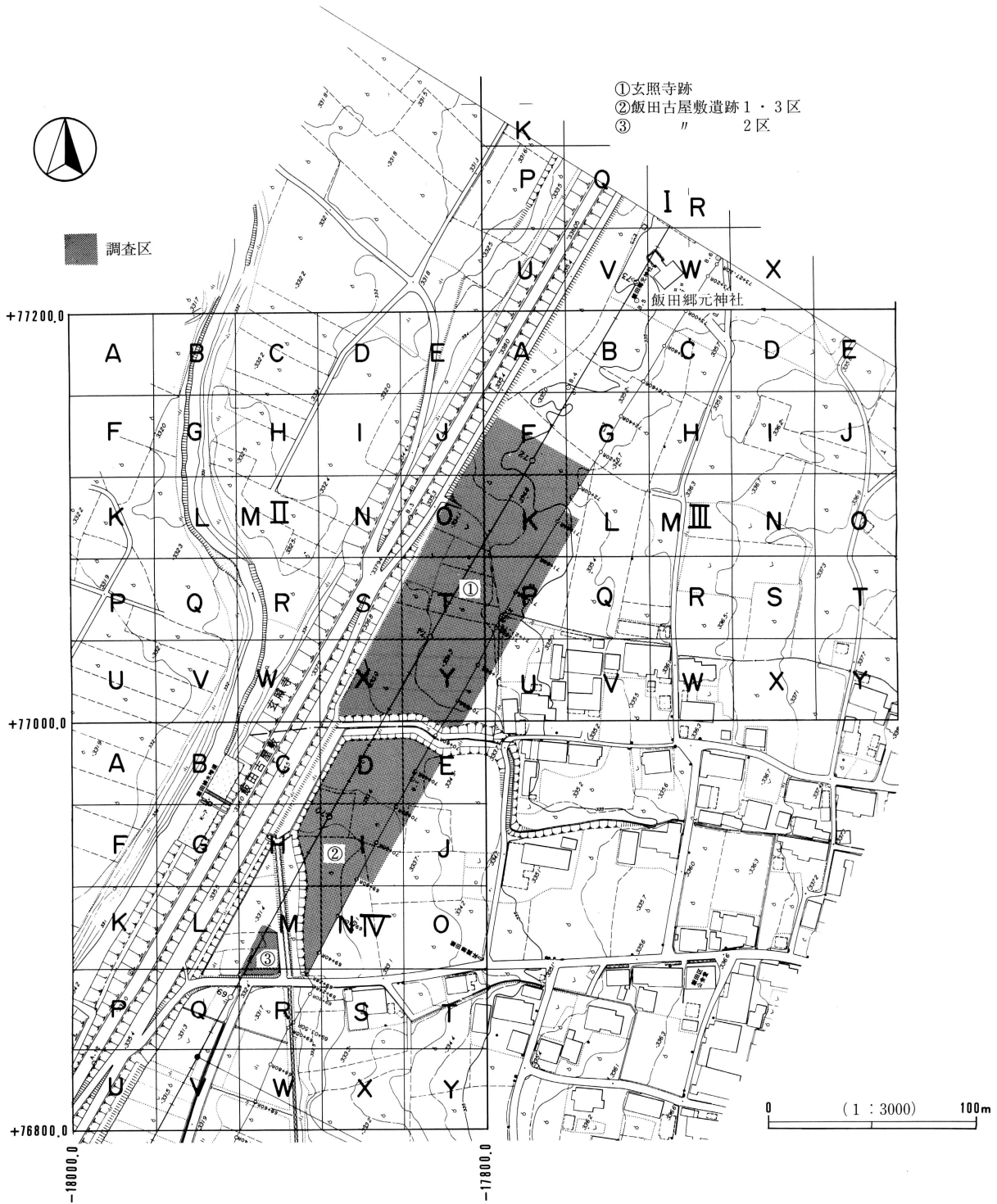
グリッドは、長野県埋蔵文化財センター仕様に従い、玄照寺跡と合わせて設定した(第1章2節3項参照)。第4図に大々地区と調査区との関係を示し、調査区内の方眼交点の座標を以下に示した。

第VIII系	IVIA01 (小グリッド)	X = 76960.000	Y = -17880.000
	IVIN01 (小グリッド)	X = 76940.000	Y = -17880.000

(2) 調査経過 (調査日誌抄)

調査期間	平成4年8月18日～11月10日、平成5年11月1日～11月25日
平成4年 (玄照寺跡と並行して調査を実施。)	9月14日 ①区遺構の平板実測を始める。
8月18日 ②区の調査開始。水田面確認。	9月24日 空撮・空測準備。
8月27日 ①区表土剥ぎ、Ⅲ層面の調査開始。	9月28日 空撮・空測を実施。(写真則図研究所に委託)
9月3日 ②区SD04より漆器、曲物などの木製品出土。	9月30日 調査区壁面の断面図実測開始。
9月8日 ①区Ⅳ層面の調査開始。	10月6日 斜面部のトレンチ調査開始。

- | | | | |
|--------|-------------------------|-----------------------|------------------------|
| 10月12日 | SD02・03を検出。 | 平成5年（玄照寺跡と並行して調査を実施。） | |
| 10月13日 | SD02に底面に植物遺体の集積確認。 | 11月1日 | 表土剥ぎ開始。 |
| 10月25日 | 飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡現地説明会。 | 11月8日 | SD07・08検出。 |
| 10月27日 | SD02底面に五輪塔の地輪・火輪を検出。 | 11月16日 | SD07・08発掘終了。ピット群平面図実測。 |
| 11月2日 | SD02平板実測。 | 11月19日 | 空撮・空測を実施（写真則図研究所に委託）。 |
| 11月5日 | SD03平板実測。SD02遺物取り上げ終了。 | 11月22日 | 調査区壁面セクション図実測。 |
| 11月10日 | SD02・03調査終了。玄照寺跡の調査に合流。 | 11月25日 | 撤収。 |
| 11月11日 | SD02・03埋め戻し。 | 11月26日 | 埋め戻し終了。 |

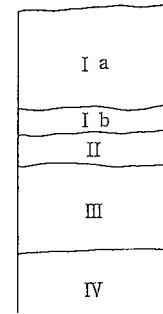


第4図 玄照寺跡・飯田古屋敷遺跡調査区

(3) 調査成果の概要

①・③区の平坦部分では、深さ1mを越える深い溝が検出されており、底面より中世陶器、五輪塔、木製品などが出土した。溝の北側には遺構・遺物ともに少なく、浅い溝とピットが検出されたのみである。掘立柱建物跡と思われる柱穴は確認できなかった。低地部の②区では上層に近世の水田跡、下層にはそれ以前の溝跡が見つかり、溝からは漆椀、曲げ物などの木製品が出土した。

334.5m



334.0m

(4) 基本土層 (第5図)

①・③区と②区とでは土層が大きく異なっており、対比できない。①区北端部での土層の堆積状態が良好であるので、本遺跡の基本土層とした。I a層：暗オリーブ褐色砂質土(Hue2.5Y3/3)、耕作土。

I b層：黄褐色砂質土(Hue2.5Y2/3)。II層：にぶい黄色砂質土(Hue2.5Y6/4)、鉄分の沈着が見られる。III層：黄褐色砂質土(Hue2.5Y5/4)、鉄分の沈着が見られる。IV層：砂質のシルト層、シルトと砂質土の混土層で、場所により色調が異なる。II層、III層は調査区南側では非常に薄くなり地表下15cmで地山になる所もある。II層、III層が遺物包含層となり、IV層は遺物を含まない地山である。

第5図 飯田古屋敷遺跡基本土層

遺構検出はIII層上面とIV層上面で行った。平成4年と平成5年の調査では、基本土層の層名が異なっているため、本報告では平成4年の層名を用いた。なお、②区の土層は第7図を参照して頂きたい。

(5) 遺構名の変更について

本遺跡は平成4年度と平成5年度の二年度にわたり調査が行われた。この為遺構名に混乱が生じ、整理段階で平成5年の遺構名を変更した。以下に、遺構名を変更したものと及び遺構名がなかった為に新たに付けたものの一覧を示す。遺構名の変更にあたっては、図面、写真、遺物などすべての資料において変更を行った。

調査年次	旧遺構名	新遺構名
H5年	NR02	SD07
H5年	NR03	SD08
H5年	SK08	SK01
H5年	SK09	SK02
H5年	SK10	SK03

第2節 中世・近世の遺構

1 概要

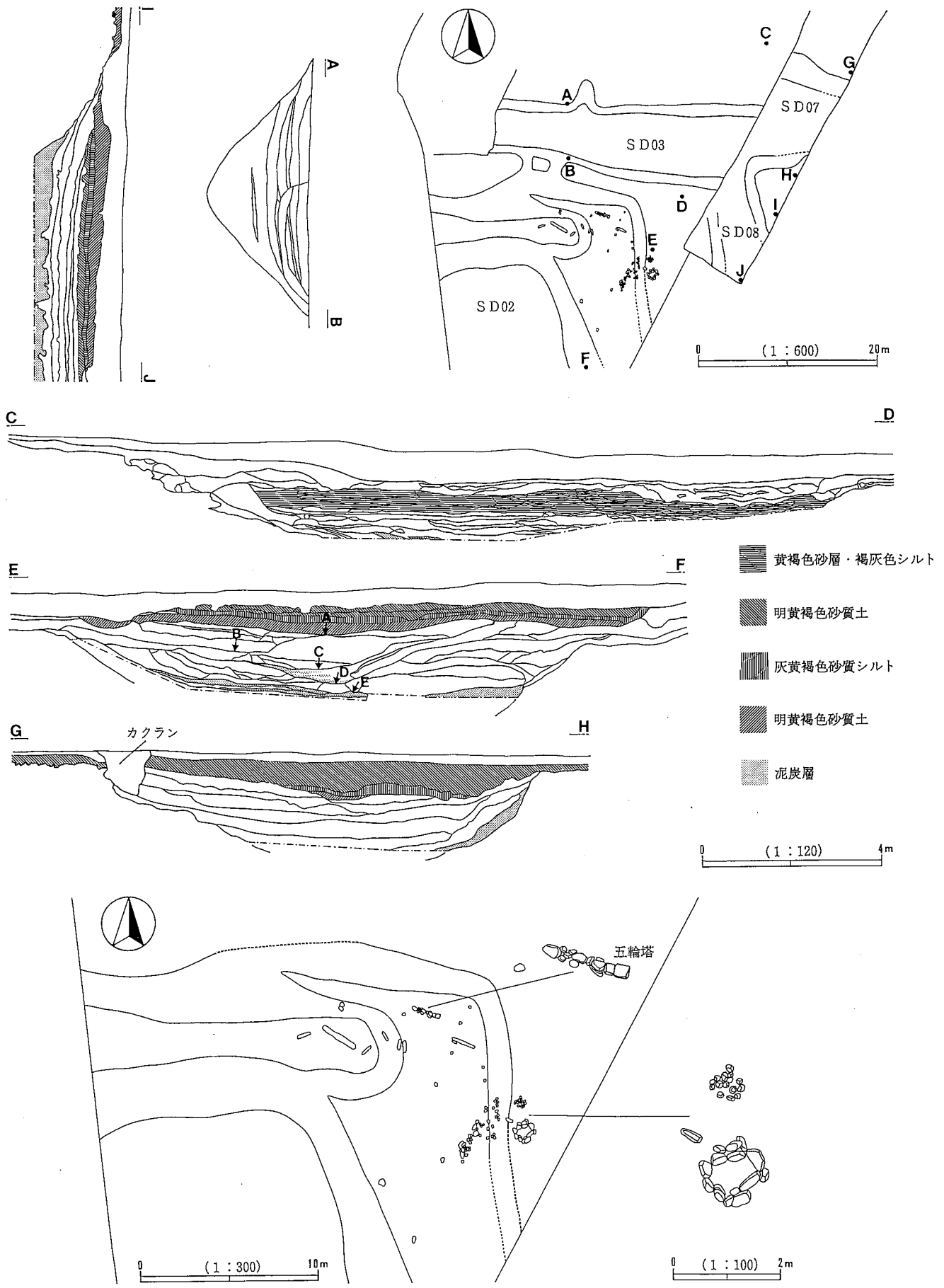
玄照寺跡に比較すると、遺構、遺物数は極めて少ない。まず、①・③区では調査区北半部では土坑3基と浅い溝の他、ピットが約150検出された。ピットについては掘立柱建物跡と認識されるものがない。遺物も内耳鍋、カワラケが27片と五輪塔4点が出土したのみである。調査区南半部では堀と思われる溝が2条確認され、木製品が出土している。

②区の低地部分では洪水砂にバックされた近世以降の水田跡が5面確認され、更にその下層の溝から漆椀などの木製品が出土している。

2 溝

SD01

T字状に交わる溝で、幅50cm~70cm深さ5cm~10cmである。出土遺物は肉耳鍋1点のみで、時期は不明。



第6図 飯田古屋敷遺跡 SD02・03・07・08

SD02 (第6図)

調査区北側のSD03に隣接して検出された溝で、L字状に曲がったコーナーが検出された。幅約8m、深いところで2.2m、浅いところで1.4mを測る。一部でSD03と接続する部分があるが、検出面からの深さは80~90cmと両溝より浅い。南北方向に走る部分は東西方向に走る部分より浅く、底面一面に葦と思われる植物遺体の堆積層が認められる。この堆積層は1~2センチの層厚で、底面に敷きつめられたかのようであった。この植物遺体は機動細胞珪酸体の形質の特長からイネ科のヨシ属と同定された。溝底のコーナー付近には五輪塔の地輪を含む石が直列に配置しており、人為的な配石の可能性が高い。東西方向に走る部分は南北方向に比べ一段深くなっており、落ち込んだ壁面の一部に礫が集中して出土した。護岸的な施設の可能性がある。溝の西側は千曲川の侵食によりその先の状況は不明である。また、小布施町教育委員会の試掘調査により直線的に更に南側に溝がのびることが確認された。ほぼ直角に曲がっていることから堀や用水路などのような人為的な溝であると考えられる。

覆土には5面の不整合面が認められ、堆積環境の急変もしくは堀直しがあったものとおもわれる。断面図中に矢印で示した部分が不整合面で、E面が先述したヨシ属の堆積面である。後述するSD03・07・08では明瞭な不整合面は確認されず、これらの溝とは近接するものの堆積環境の差異が指摘できる。

また、溝の東側の縁には人頭大以上の礫を用いた方形の配石が確認された。この配石の周辺には礫が比較的集中し出土しており、これらの礫も配石とかかわりがあるものと思われるが、遺構の性格を推定する資料は得られず、SD02と関連する遺構であるのか否かも明確ではない。

底部付近から15世紀末~16世紀の瀬戸美濃・青磁(第8図1~4・9)の他、五輪塔(第8図12)、桶・横槌・建築部材(第10図13・14・16~22)などの木製品が出土した。この他に加工痕が認められない自然流木と思われるものが多数出土した。これらのうち任意に42点の枝材を選び、樹種同定を行った結果、ニレ科のケヤキ12点、ニレ科ニレ属9点、ヤナギ科ヤナギ属6点、バラ科ヤマザクラ5点、マメ科サイカチ4点、エゴノキ科のエゴノキ属2点、ブナ科のクリ2点、マメ科のイヌエンジュ及びビウルシ科のヌルデが各1点であった。なお、植物遺体の同定は株パレオ・ラボの藤根久・鈴木茂の両氏に委託して行った。

出土遺物から、溝が機能していた時期は中世末から近世初めころと思われる。

SD03・07・08 (第6図)

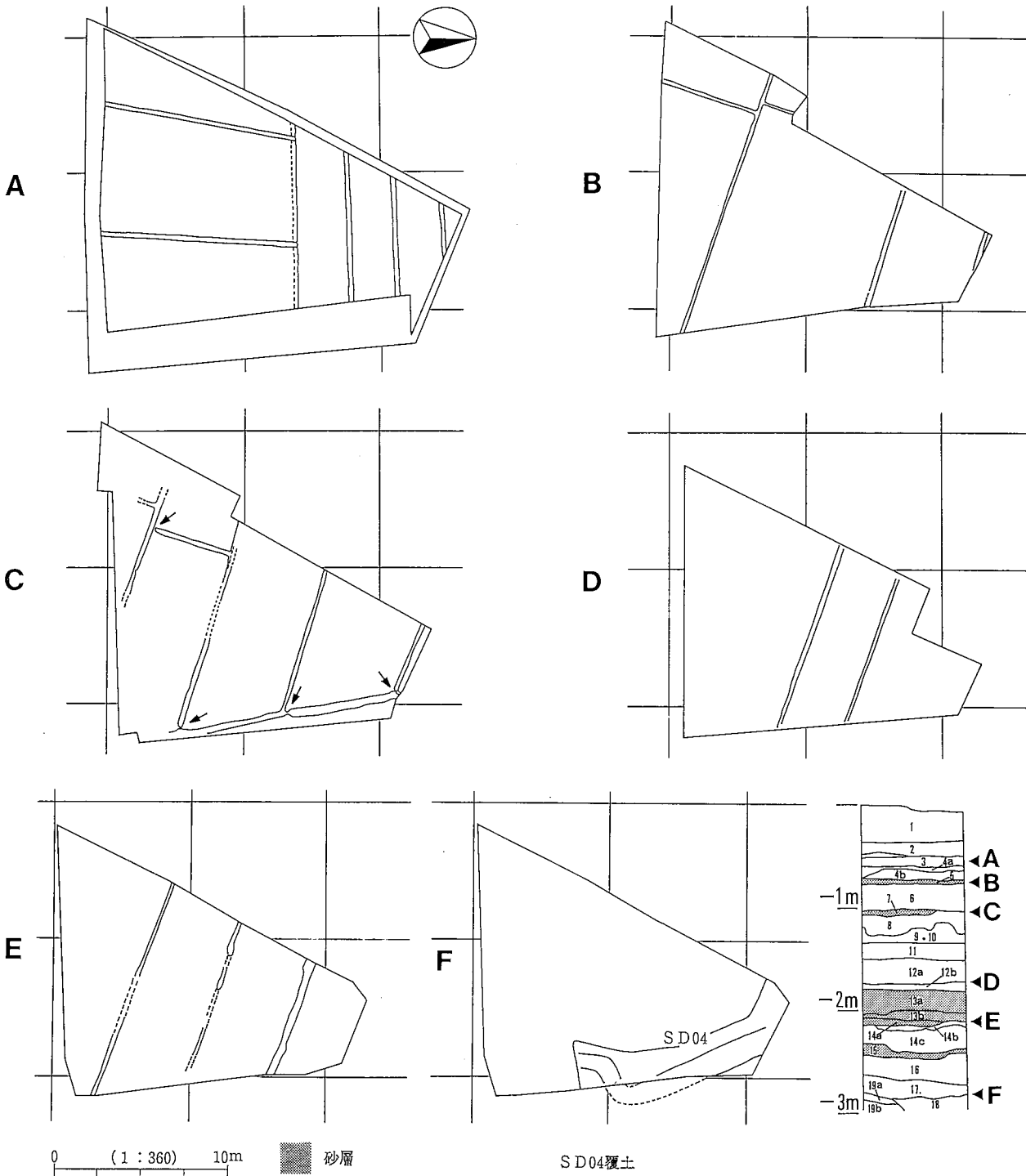
SD03は平成4年度調査、SD07・08とした部分は平成5年度調査となったため図面上で平面形態が整合しない。いずれも重機による調査であったため、平面形態が正確には捕らえられず、実測図は修正することなく不整合のまま示したが、SD07・08に切り合い関係はなく同時期のものと考えられ、さらにSD03はSD08につながる溝と推定できるため、これらはT字に交わる同一の溝と考えられる。覆土の砂粒の大きさの違いなどから、SD08がよどんでいたのに対し、SD07はそれに比べ水の流れが速かったと思われる。幅は6~8m、深さ約2.2mを測る。出土遺物は石臼が1点出土したのみである。

なお、小布施町教育委員会の調査により、SD07・08の続きが調査され、東西方向の溝では、石垣が崩れたよう状態の礫を検出した、と調査担当者からご教示頂いた。

SD04 (第7図)

低地部の2区の地表下3mで検出された溝である。調査区北端では幅約1.5m、深さ約60cmを測る。溝はクランク状に屈折していると思われ、L字に曲がった部分が検出された。調査区は千曲川の洪水によってもたらされた砂層が厚く堆積しており、壁面の崩落の危険があったため、覆土は重機で掘り、上げた土を人力でさらって遺物を採取した。安全上の問題から、これ以上調査区を広げることができず、詳細な観察はできなかったが、溝は北に向かって傾斜していることを確認した。

覆土中より、漆椀・曲げ物・楔などの木製品(第9図1~12・第10図15)が出土した。図示したもの以外



- 1層：客土
- 2層：表土
- 3層：にぶい黄色粘土 (Hue2.5Y6/3)
- 4a層：にぶい黄色粘土 (Hue2.5Y6/3) 3より黄色で明瞭に分層される。
- 4b層：黄褐色粘土 (Hue10YR5/6)
- 5層：黄褐色砂 (Hue10YR5/6) 灰色砂層と互層になる。
- 6層：にぶい黄色粘土 (Hue2.5Y6/4) 下部は明黄褐色粘土 (Hue10YR6/6) となる。
- 7層：黄褐色砂層 (Hue10YR5/6) 5層と類似。
- 8層：にぶい黄色粘土 (Hue2.5Y6/3) 明黄褐色粘土・細砂をブロック状に混じる。耕作により層が乱れる。
- 9・10層：黄褐色シルト (Hue2.5Y5/3)
- 11層：にぶい黄色粘土 (Hue2.5Y6/3)
- 12a層：暗緑灰色粘土 (Hue10GY4/1) 空気に触れ酸化すると、黄色化する。

- 12b層：暗緑灰色 (Hue10GY4/1) 粘土と砂の混土層
- 13a層：褐色砂 (Hue10YR4/6) 1～3 cm 大の礫を含む。
- 13b層：暗オリーブ灰色砂 (Hue5GY3/1)
- 14a層：オリーブ灰色細砂 (Hue2.5GY6/1) やや粘性あり。
- 14b層：灰色粘土 (Hue7.5Y5/1) 上面は層が乱れる。
- 14c層：灰色粘土 (Hue10Y5/1) 暗緑灰色粘土をまだらに混じる。
- 15層：オリーブ黒色砂 (Hue10Y3/1) 13b層の砂粒子に類似。
- 16層：灰色粘土14層に類似。
- 17層：暗オリーブ灰色粘土 (Hue2.5GY3/1) と黒色粘土 (Hue7.5Y2/1) が綿状に混じる。
- 18層：黒色粘土 (Hue10YR1.7/1) 灰色粘土をまだらに混じる。SD04覆土。
- 19a層：灰色粘土 (Hue10YR5/1)
- 19b層：オリーブ黒色粘土 (Hue5Y3/1) と灰色粘土 (Hue10YR5/1) の互層

第7図 飯田古屋敷遺跡 ②区水田址

にも加工痕が認められる木片も出土した。漆椀から、溝は17世紀以降のものと思われる。

3 水田址 (第7図)

②区低地部で5面の水田面を検出し、第7図A～Eに検出され畦を示した。

Aは表土直下に確認された畦である。南北の畦の上に東西の畦が作られていることが観察された。調査区は戦後まで水田耕作が行われた場所であり、A面は戦後の水田址と思われる。

Bは5層中で確認した幅20cm前後、高さ6cm～8cmの畦である。B面では稲株が検出され、南北方向の畦に沿って列をなしている。稲株列の間隔は20cm～30cmを測る。

Cは7層上面で確認した畦で、矢印で示した部分は畦が切れるか細くなっており、水口と思われる。調査区東端の南北方向の畦は幅40cm～50cmで、他の畦が幅20cm～30cmであるのに対して幅広である。北側の水田区画では稲株の列は約30cm間隔で南北方向の太い畦に沿っているが、他の区画で稲株の列の方向は確認できなかった。

Dは12b層上面で確認した砂が畦状に盛り上がったものである。稲株などは確認されなかった。

Eは14層上面で検出した畦で、一番北側のものが幅約40cm、他の2本は幅約20cm～25cmである。稲株列は約30cmの間隔で蛇行しながら畦と直行する南北方向に走る。列は畦を乗り越えて進んでおり、田植えが区画された水田ごとに行われたのではないことを示している。また、E面では稲穂が倒れた痕跡が検出され、収穫前の時期に洪水により埋没したことが伺える。

以上のように、B・C・E面の水田は洪水砂によってバックされたものである。A面以外は、畦の方向がほぼ一致しており、一貫した原則により水田が区画されていたと考えられる。また、小布施町史によると千曲川付近では度重なる洪水により地境が不明になるために割地慣行が行われていたとされている。このことから、B～E面の畦は地割慣行により区画された水田で、A面は昭和初期の千曲川の築堤で洪水による水田の埋没がなくなった時期以降の水田と推測することができる。すなわち、B面以下は大正以前の水田であり、E面より下層から17世紀頃の溝が検出されたことから、E面の水田も江戸時代をさかのぼるものではないことがわかる。このことはわずかに出土した遺物の時期とも矛盾しない。

隣接する玄照寺跡では中世の遺構・遺物が出土しており、また近接する飯田集落も中世からの集落であるとされることから、E面より更に下層に中世の水田跡が残されている可能性があるが、調査区壁崩落の危険があったためそれ以上深い部分の調査は断念した。

第3節 中世・近世の遺物

1 焼き物 (第8図1～9)

青磁 (1・4) 15世紀末から16世紀はじめの青磁である。1は内面中央部に印花文が押印された高台つき碗である。4は丸皿で、口縁下外面に段を設け、外反する形態である。底部は欠損している。

瀬戸美濃系陶器 (2・3) 3は付高台丸皿で、16世紀後半から17世紀のものである。高台脇から丸みを持ち逆「ハ」の字形に立ち上がっている。高台は小さく断面三角形である。2は16世紀後半の瀬戸美濃の製品である。削り込み高台のいわゆる稜皿である。体部下半部が直線的で、上方がやや外反する。高台は削り幅が広い。内面に胎土目跡が残っている。

瓦質陶器 (9) 燭台の脚の部分であろう。中心部に蠟燭の芯を出す細い筒状の孔が開けられている。

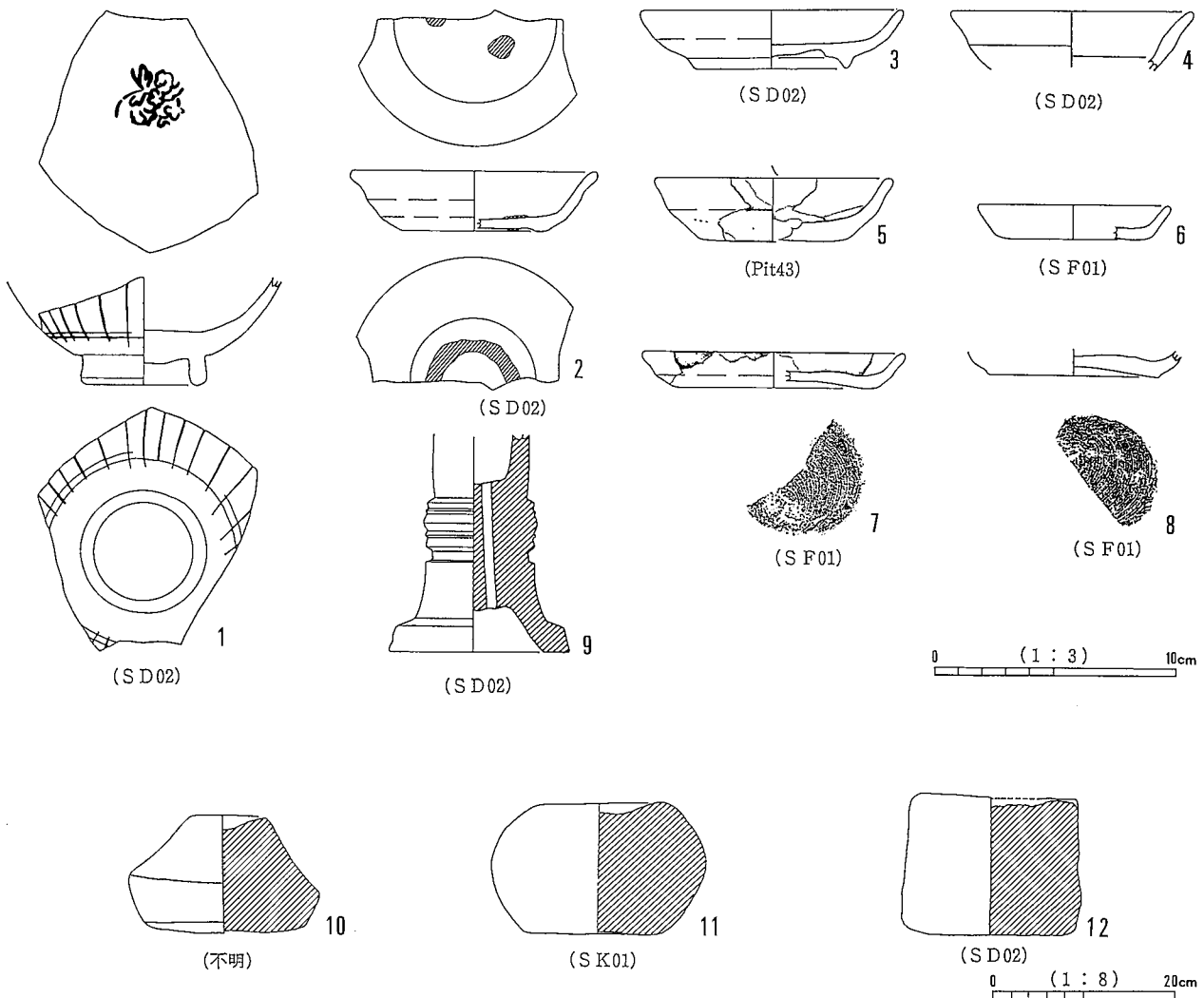
カワラケ（土師質皿5～8） 当遺跡のカワラケはすべてロクロ挽きのものである。5はやや深めで杯形である。内外面にススの付着がみられる。6は平たい小型皿状の器形である。7は平たい皿状のもので内外面にススが付着している。8も底部径がやや大きく皿状の形態のカワラケである。内外面にススが付着しているものは灯明皿として利用されたものと思われる。

2 石塔（第8図10～12）

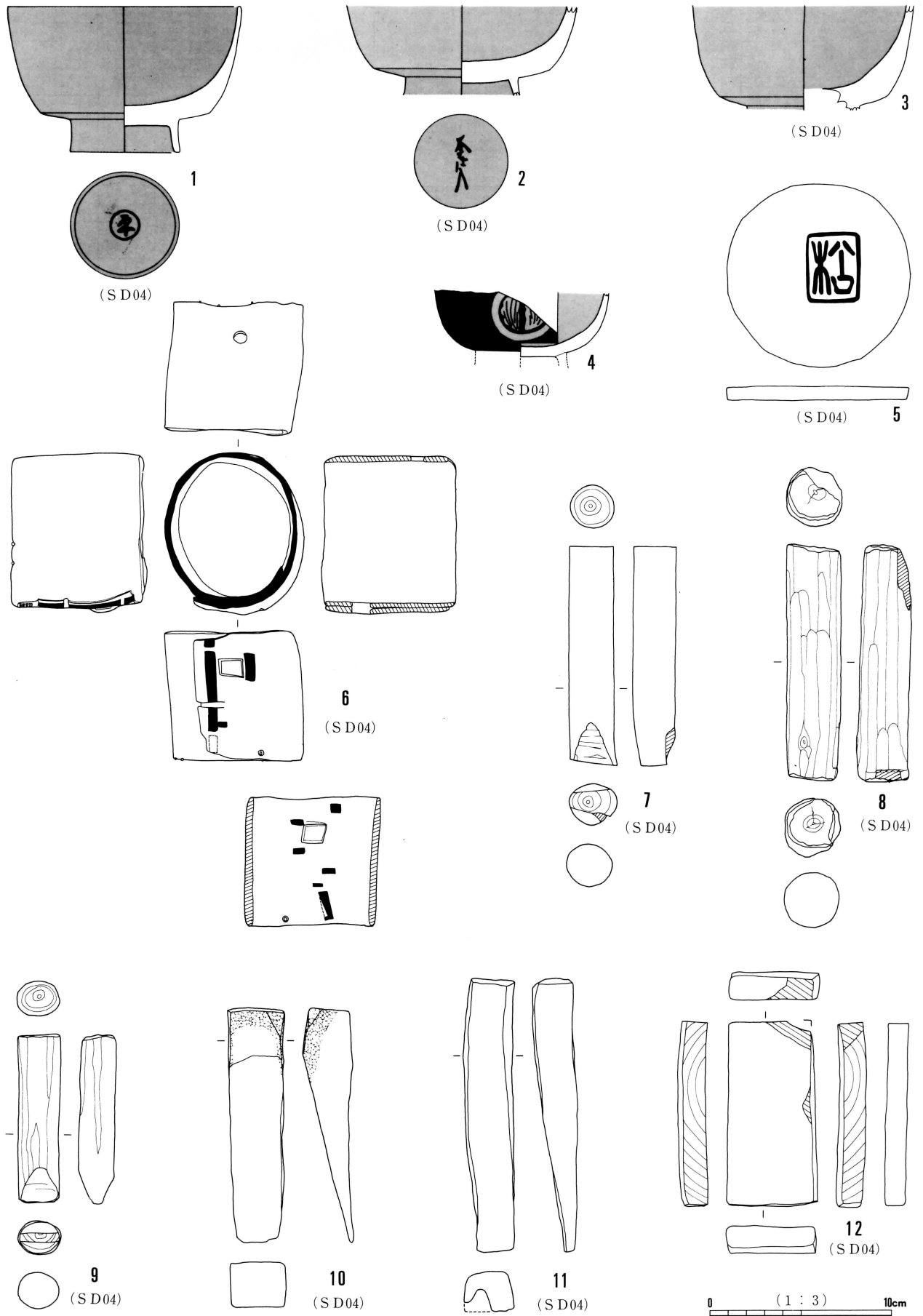
五輪塔（10～12） 火輪（10）、水輪（11）、地輪（12）が出土しており、全点安山岩製である。玄照寺跡（第3章）の五輪塔分類では、火輪A-2、水輪A-2、地輪B-2とおもわれる。

3 木製品（第9図～第10図）

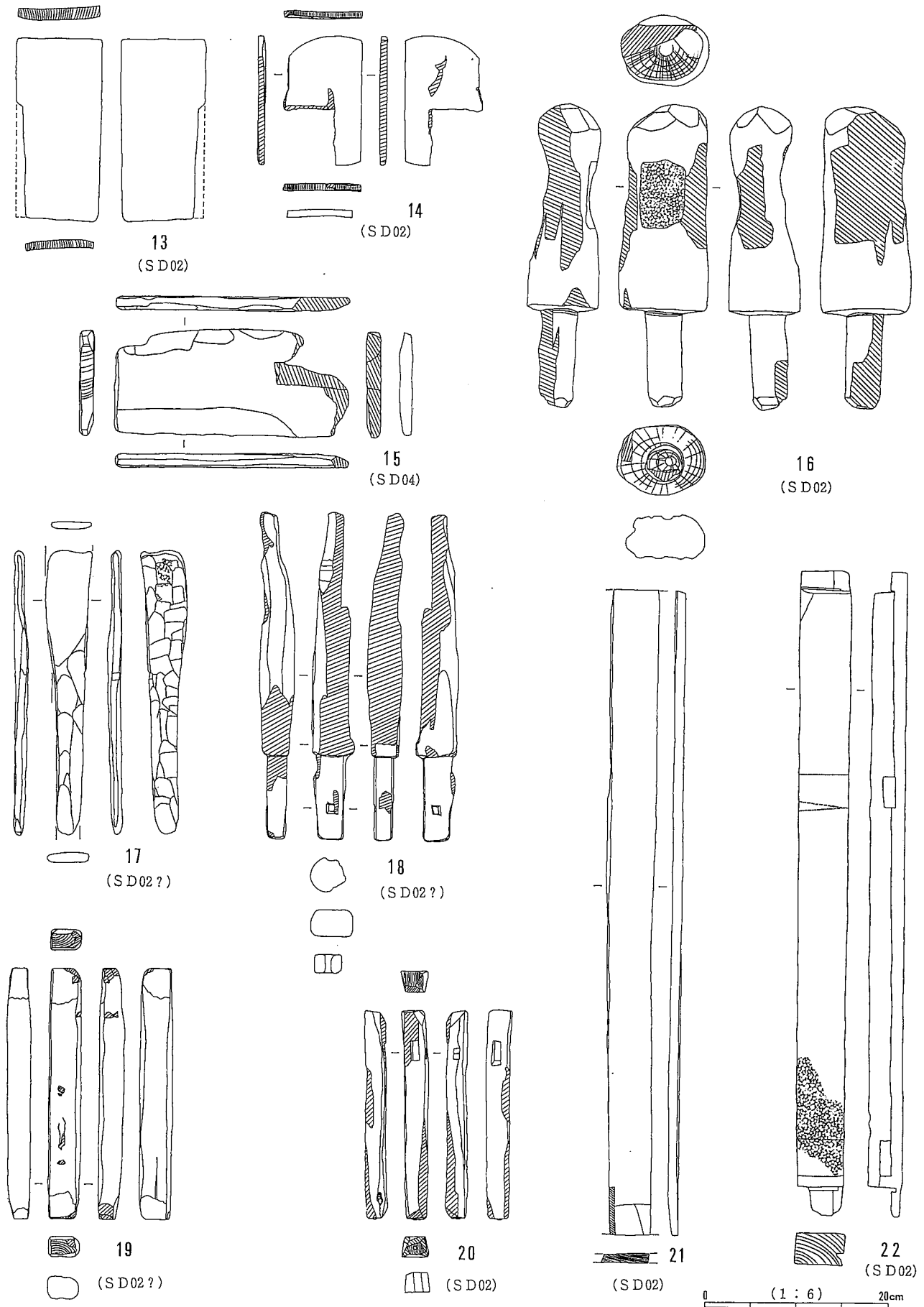
1は朱漆椀である。高台は高めで高台径は余り大きくなく、高台の外反もあまりない。腰部分は角張っており自然にやや開き加減に立ち上がっている。朱漆は全面施され、高台内に丸に「平」の行書文字が黒漆で書かれている。2は1とほぼ同形の朱漆碗である。高台内に「奉仕人」の文字が書かれている。3は1と同形の朱漆椀と思われる。4は外面黒、内面朱の漆椀である。高台と口縁部が欠損している。腰部が



第8図 飯田古屋敷遺跡 出土焼物・五輪塔



第9図 飯田古屋敷遺跡 出土木製品(1)



第10図 飯田古屋敷遺跡 出土木製品(2)

丸みを持つ器形である。外面には丸に柁と思われる家紋が朱漆で描かれている。これら漆椀は、家紋を描いたり、行書文字を椀面に書いたりしているため17世紀以降のものと思われる。

6は曲物柄杓の桶部分である。柄の底板は失われている。曲物の合わせ部分は紐状皮材で縫うようにしている。縫い目は、表面が長く、裏面が非常に短くなっている。側面底部付近には、底板を取り付ける径3mmの木釘穴1ヶ所が開けられている。柄杓の柄先端を差し込む孔は径7～8mm、柄が貫通する穴は0.9cm×1.3cmのものとおもわれる。5は断面が逆台形になっている桶底板と思われる。底板内面には焼き印が施されている。方形の枠に「松」?の焼印がおされている。12は桶の側板で、径の大きな浅いタライのような桶と思われる。13は桶側板である。口径20cm前後の12枚ハギの桶であろうか。14は桶の底板である。復元径は14cmである。7～9は杭棒と思われる。7と9は先端部を表裏から削り先端面を一文字にわずか残している。10、11は楔である。断面は方形で、先端に向けて長い傾斜で薄くしている。16は横槌である。1本造りで断面は楕円形である。使用面と思われる槌中央部は凹んでおり、炭化している。15は板材である。調整方法はほとんど摩滅しており不明である。17は篋状の木器である。両面とも手斧?で整形している。表面先端付近が炭化している。

18～22は建築部材および紡織具と思われる。18は図上部が棒状で、下部は上部より細く境目は段があり、板状である。板状部分下から1/3ほどの位置に方形の柄穴が開けられている。板状部は他の部位に差し込まれ、柄で固定されたものであろう。カセの可能性はある。19は細い角材で稜先端がやや細くされている。20は細い角材である。縦長の断面長方形の柄穴が開けられている。21は薄い板材の一部と思われる。図下方の先端部が斜めに薄くしてある。22は細く薄い板材の両先端に柄穴に差し込むために段切りしてある。また中央部分と先端より少しはなれた側面部分に横長の柄穴が2ヶ所みられる。その先端の柄穴付近が炭化している。

参考文献

- 野村一寿 1990 中央自動車道長野線埋蔵文化財報告書4—松本市内その1 総論編
長野県佐久市教育委員会 1986 大井城跡(黒岩城跡)
酒詰秀一 1980『図録歴史考古学の基礎知識』 柏書房

第3章 玄照寺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

本遺跡は上高井郡小布施町大字飯田字北屋敷402他に所在する。遺跡名が示すとおり、現在大島地籍にある玄照寺の旧所在地とされる遺跡で、同寺は元禄17年（1704）に千曲川による侵食の恐れがあるため現在の所在地に移ったとされる。遺跡は千曲川の支流松川の形成した扇状地の扇端に位置し、現在の千曲川の河道から300m～400mの距離にあり、前章で記述した飯田古屋敷遺跡の北側に隣接する。千曲川築堤により遺跡の一部は現堤防下および河川敷内になっている。遺跡の東側には中世に現れたとされる飯田の集落が隣接している。また、北側の高速道路用地内には飯田郷元神社がある。県教育委員会が境内及び神社周辺の試掘を行ったが遺構は検出されなかった。神社は道路建設にともない道路の東側に移築された。

「小布施町史」によると、玄照寺は戦国時代には随行寺と号し、臨済宗の寺であったが、16世紀中頃、村上義清の臣加藤左右衛門が諸堂を建立し、曹洞宗に転じたとされる。寺号については、「天文年間に甲斐の人晴照なるもの出家して玄照坊と号し住す」とする説と、「高坂弾正の亡父戒名光山玄照に因む」とする説がある。また、飯田の館跡の北西に玄照寺跡があることから、随行寺は館主の菩提寺的性格の寺であった可能性が指摘されている。

今回の発掘調査以前に発掘調査は行われていないが、調査区周辺より備蓄銭が畑の耕作時に出土していると記録されている。

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法

調査前、遺跡として示されていた範囲は、II E・II J・III A・III Fグリッド内の直径30m～40mの小規模なものであったが、平成3年度の試掘により、当初の遺跡範囲より南側の飯田古屋敷遺跡側にも遺構・遺物の分布が判明した。そのため、飯田古屋敷遺跡と接する用地内全域を調査対象とした。調査区と飯田郷元神社の間においても県教育委員会によるトレンチ調査が行われたが、遺構は検出されなかった。

また、高速道路用地内を平成4年度に、その東側の側道幅部の約幅6mの部分平成5年度に調査した。

遺構検出は原則として、III層上面とIV層上面の2面で行うこととしたが、地区によってはIII層が見られないところもあり、IV層上面の1面のみで調査を行ったところもある。遺物は遺構別もしくは2mグリッド単位で取り上げた。

グリッドは、埋文センター仕様に従い、飯田古屋敷遺跡と合わせて設定した。（第1章第2節参照）。第4図に大々地区と調査区との関係を示し、調査区内の方眼交点の座標を以下に示した。

第VIII系	III P A 01 (小グリッド)	X = 77080.000	Y = -17800.00
	III U A 01 (小グリッド)	X = 77040.000	Y = -17800.00

(2) 調査経過 (調査日誌抄)

調査期間 平成4年7月2日～同年11月27日、平成5年11月1日～同年11月26日

平成4年		託。)
7月2日	表土剥ぎ開始。	長野市立博物館遺跡見学会一行約20名見学。
7月6日	発掘開始式。	10月25日 飯田古屋敷遺跡を含めて現地説明会を実施。
7月8日	Ⅲ層面の調査を開始し多数のピットと溝が検出される。 火葬施設検出。	10月28日 中村由克氏(野尻湖博物館)他遺跡見学に訪れる。
7月13日	刻書「彌?」出土。	10月29日 NR01より五輪塔の地輪出土。
7月15日	ベルトコンベアーを導入する。	11月5日 SK24(井戸)にて木枠が検出される。
7月24日	SK05(火葬施設)の調査開始。	11月9日 空撮実施。(写真測図研究所に委託)
8月17日	SB01(竪穴状遺構)の調査開始。	11月11日 NR01平板実測
9月1日	SK19(井戸)の調査開始。	11月20日 NR01埋め戻し。
9月3日	井戸に五輪塔、石臼などが用いられていることを確認。	11月26日 SK24(井戸)重機による断ち割り。
9月4日	④区Ⅳ層面の調査	11月27日 調査終了し、機材撤収。
9月7日	調査区中央部に設けたセクションベルトを崩す。	平成5年
9月12日	①区Ⅲ層面の空撮。(写真測図研究所に委託)	11月1日 表土剥ぎ。発掘開始式。
9月18日	①区Ⅳ層面まで掘り下げ遺構検出開始。	11月2日 周溝墓と思われる施設(SX01)を確認。
9月22日	②・③区Ⅳ層まで掘り下げ面遺構検出開始。	11月15日 SX01平面図実測終了
10月2日	⑤区Ⅳ層まで掘り下げ面遺構検出開始。	11月16日 NR01より五輪塔出土。
10月7日	根石を敷いたピットが数基検出。	11月19日 空撮・空測を実施。(写真測図研究所に委託)
10月9日	天候不順のためセスナ飛行機による空中撮影中止。	11月24日 調査区壁面断面図、遺構実測終了。
10月12日	NR01(溝)調査開始。	11月26日 埋め戻し終了。現場撤収。
10月22日	セスナ飛行機による空中撮影。(写真測図研究所に委託)	

(3) 調査成果の概要

本遺跡は中近世の遺跡である。13世紀・14世紀では常滑、古瀬戸、青磁など数点の陶磁器が出土している。15世紀・16世紀では瀬戸美濃、青花などの陶磁器片、内耳鍋と五輪塔が出土している。五輪塔は井戸や溝などに転用、または廃棄された状態で出土している。近世に入ると唐津など肥前系の陶磁器が多くなる。墳墓堂と思われる遺構1、火葬施設8、掘立柱建物址(礎を入れた掘立柱建物址2)、礎敷の遺構2、溝、井戸2などの遺構が確認されたが調査時の所見から時期が確定できるものが少ない。なお、焼物の産地と年代は市川隆之氏の分類による。

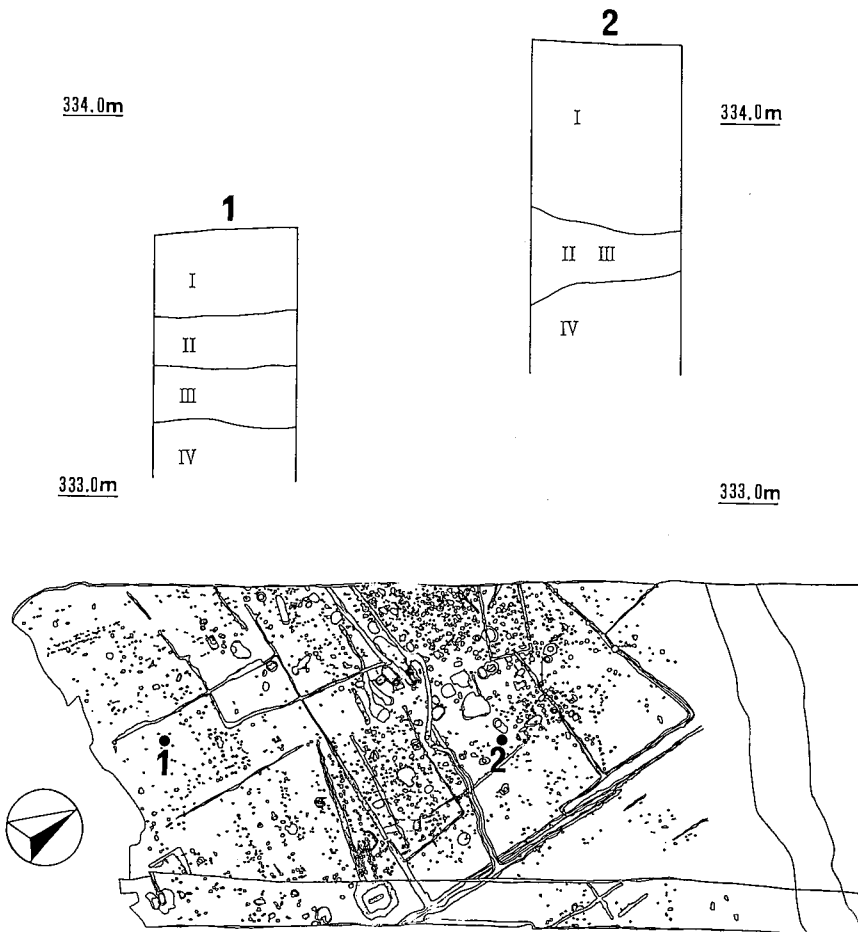
遺跡名が示す玄照寺跡と思われる遺構は検出されず、仏具などの寺院を示す遺物も出土していない。

(4) 基本土層 (第11図)

土層観察地点1を本遺跡の基本土層とし以下に記す。I層：にぶい黄褐色土(Hue10YR3/4)、耕作土。II層：灰黄色砂質土(Hue10YR6/2)、赤褐色の斑状の鉄分の沈着が認められる。炭化物を含む。III層：にぶい黄橙色砂質土(Hue10YR6/3)、炭化物を含む。IV層：橙色シルト層(Hue7.5YR6/8)、所々に白色の粘土または砂を含む。土層観察地点2ではII層・III層相当層は分層できず、I層とは分層されるもののI層に類似する土を混じていることから、耕作による攪乱を受けている層と判断される。すなわち、調査区南側では層位が安定しているものの、調査区北側では、II層またはIII層は耕作などによる攪乱のため明瞭に確認できず、層位は余り安定していない。II層・III層は中近世の遺物包含層で、IV層が遺物を含まない地山である。遺構検出はIII層上面もしくはIV層上面で行った。

(5) 遺構名の変更について

本遺跡は平成4年度と平成5年度の2年度にわたり調査が行われた。このため重複する遺構名が生じ、



第11図 玄照寺跡 基本土層

整理段階で重複した平成5年調査の遺構名を変更した。なお、ピットについても重複するものがあったが遺構名の変更は行っていない。ピット出土遺物については調査年次ごとに収納することにより混乱を避けた。

以下に、遺構名を変更したもの及び遺構名がなかったために新たに付けたものの一覧を示す。遺構名の変更にあたっては、図面、写真、遺物などすべての資料において変更を行った。

調査年次	旧遺構名	新遺構名	調査年次	旧遺構名	新遺構名	調査年次	旧遺構名	新遺構名
H4年	北側流路	NR01	H5年	SD04	SD35	H5年	SK02	SK114
H5年	SD01	SD32	H5年	SD05	SD36	H5年	SK03	SK115
H5年	SD02	SD33	H5年	SD06	NR01	H5年	SK04	SK116
H5年	SD03	SD34	H5年	SK01	SK113	H5年	SK05	SK117

第2節 中世・近世の遺構

1 概要

火葬施設8、墳墓堂1、竪穴状遺構2、掘建柱建物址と思われる多数のピット、井戸2、屋敷地などを

区画したと思われる溝などが検出された。墳墓堂と推定される方形の周溝を持つ埋葬施設(SX01)、ピット内に礫を詰める掘立柱建物址(ST06)、道状の遺構の下部構造と考えられる礫敷の土坑(SK42)などが注目される。これら多数の遺構については、切り合い関係は不明な部分が多く、出土遺物も少ないことから、遺構の時期決定が十分にできない。それぞれの遺構の時期については、遺構の性格、配置関係などから想定することとし、詳細は第4節に述べることとした。

遺物は、中世では常滑、古瀬戸、初期伊万里、青磁、内耳鍋、かわらけ、五輪塔、宝篋印塔、宋銭などが出土し、近世では、唐津、伊万里などの陶磁器、古銭、曲げ物などが出土した。

なお、以下の記述の中で所在地区は8m方眼の中地区名で示した。

2 火葬施設・埋葬施設

SX01 (第12図)

平成5年度に調査された。遺構の西側が道路工事によってわずかに破壊されている。

遺構の構造 約6m×6mの方形周溝状遺構で、検出面での溝の幅は0.8m～1m前後で、深さ10cm～20cmとなる。四辺はほぼ東西南北に向いており、方位を意識して構築されている。周溝内側は東西3.8m南北4.2mの方形を呈し、中央部には2.5m×0.6mの南北に長い楕円形の土坑があり、底面は平坦で検出面より20cmの深さである。なお、この土坑は本来長方形プランであった可能性がある。土坑の底面より約50センチ上面に拳大の河床礫が平らに配された集石がある。土坑中央部が一部攪乱されているため集石の原位置での配置状態はわからないが、礫の分布は土坑と一部重なっており、溝の覆土にも集石と類似した河床礫が含まれている。溝内の礫は底面より浮いており、溝の埋没途中で溝に入ったものと思われる。以上の状況から集石が本遺構の一部である蓋然性は高い。とすると、周溝内側は土坑底より50cm以上土盛りされマウンドが築かれており、その上に礫が配されていたと考えられる。土盛り部分に配されていた礫が溝中に落ち込んだと考えると、礫は地表に露出していたということになる。なお、土坑上面に残存している礫の周辺は耕作による攪乱が深部まで及んでおり、礫が検出されなかった部分での礫の状況・存否は明らかではない。

土坑底面には暗赤褐色の焼土が認められ、その上に炭化材及び頭骨片及び上腕骨と見られる人骨片とわずかな焼土を含む褐灰色の砂質土(5層)がのる。5層は土坑外にも伸びてマウンドの盛り土の下に入り込んでいることから、土坑はマウンド構築以前に掘られたと解釈できる。

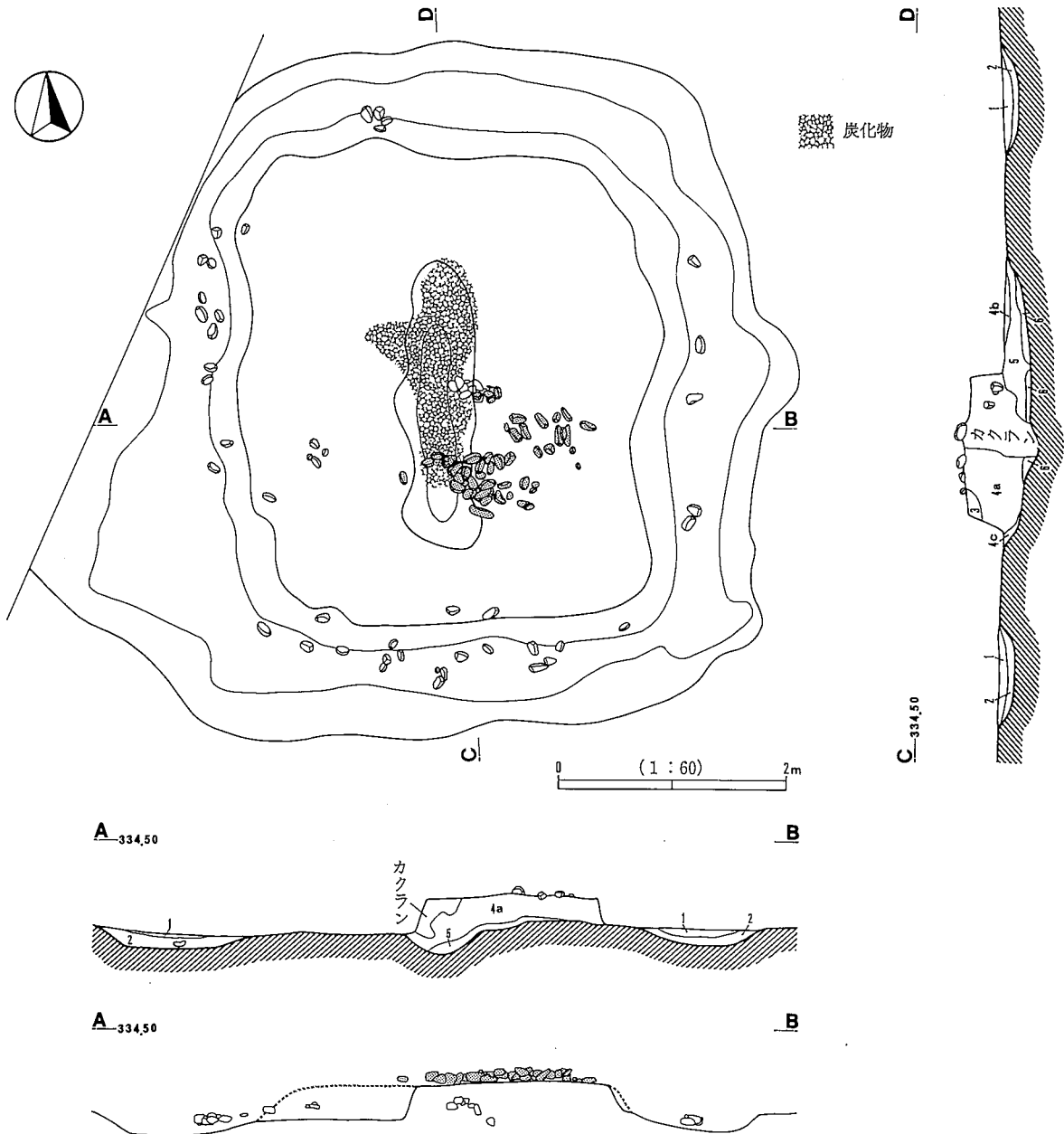
出土遺物 河床礫107点、人骨片、溝の覆土から近世陶磁器(17・18世紀)3点、内耳鍋片1点、盛り土内より古瀬戸(室町時代)1片が出土している。

SK05 (第13図)

II Y 1 3 グリッドに位置する。III層面で検出された。1.1m×0.8m、深さ0.1mの不整な長方形を呈し、西側に幅0.4m、長さ0.6m、深さ0.2mの細長い張り出し部を持つ。以下、同様な構造を持つ遺構について、張り出し部に対し不整な長方形部分を主体部と呼称する。主体部は、底面から壁面にかけて焼けており、中央部は掘立柱建物址のピットに壊されており、1層は本遺構の覆土ではなく掘立柱のピットの覆土である。主体部よりも張り出し部の方が深く掘り込まれており、SK14・SK22と同じ構造の遺構である。張り出し部には焼骨と炭化物が多量に含まれるが、主体部には焼骨も炭化物も含まれない。主体部に火床面があること、張り出し部から焼骨が出土していることから、本遺構は火葬施設と判断される。出土遺物はなく、時期不明である。

SK14 (第13図)

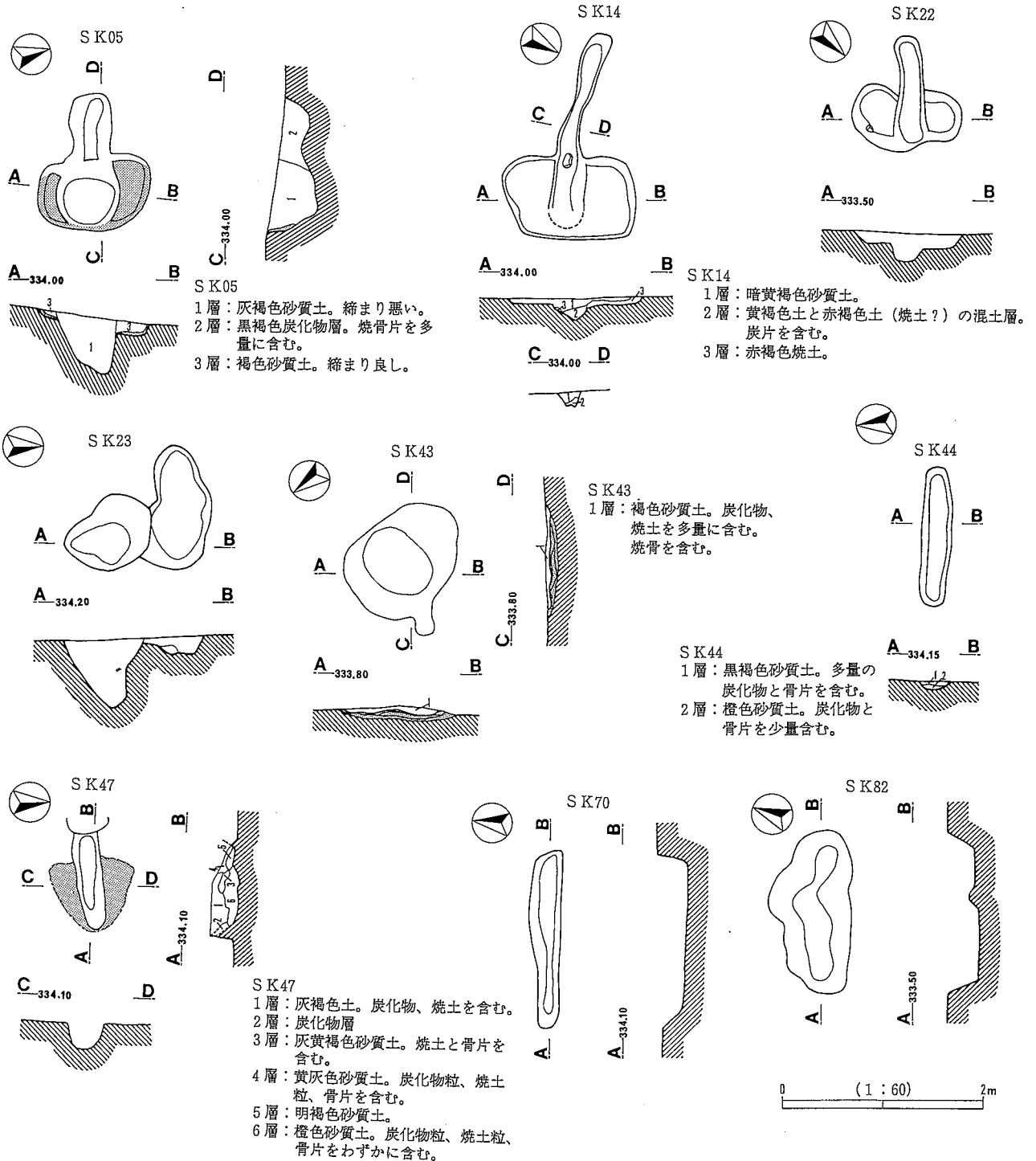
II T 0 8 グリッドに位置する。IV層面で検出されたが、焼土はIII層面からも検出できた。1.3m×0.8m



- 1層：灰オリーブ砂質土 (Hue5Y5/2) 基本土層III層を主体とする。
- 2層：にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR5/3) 基本土層II層を主体とし、III層などを混じる。
- 3層：灰褐色砂質シルト (Hue7.5YR6/2)
- 4a層：黄褐色砂質土 (Hue10YR5/6)
- 4b層：にぶい黄褐色砂質土 (Hue10YR5/4) 4a層中に炭化物と骨片を含む。
- 4c層：基本土層III層に類似。
- 5層：褐灰色砂質土 (Hue10YR4/1) 炭化物 (大きいものは2cm大)、骨片を含む。
- 6層：灰黄褐色砂質土 (Hue10YR6/2) 下部には暗赤褐色の焼土がみられる (火床面か?)。

第12図 玄照寺跡 SX01

深さ約10cmの長方形を呈し、西側に幅0.2m、長さ1.2m、深さ15cm～20cmの長い張り出し部を持つ。主体部は底面から壁面にかけて焼けているが、焼けた範囲は記録できなかった。張り出し部は主体部より深く掘り込まれ、主体部の底面に張り出し部の溝が延長しており、約10cmの段差を持つ。主体部東側は底面を掘り過ぎたため張り出し部からの溝がどこまで伸びているか確認できなかった。また、主体部と張り出し部の境に拳大の礫が溝の底部に密着して出土した。主体部に火床面があること、覆土に少量の焼骨が出土していることから、本遺構は火葬施設と判断される。出土遺物はなく、時期不明である。



SK22 (第13図)

II T 0 2 グリッドに位置する。III層面で検出された。1.12m×0.6m 深さ約14cmの不整な長楕円形を呈し、南西側に幅0.2m、長さ0.7mの長い張り出し部を持つ。主体部の火床面がわずかに写真記録で観察されるが、その範囲は記録されていない。張り出し部は先端部が浅く主体部側が深く掘り込まれ、主体部の底面に張り出し部の溝が延長しており、約10cmの段差を持つ。主体部覆土は暗黄褐色土に灰色土を混じ、底面に、炭化物と焼土の堆積が所々に認められる。1cm以下の焼骨片が少量出土した。主体部に火床面があること、覆土に少量の焼骨が出土していることから、本遺構は火葬施設と判断される。出土遺物はなく、時期不明である。

SK23 (第13図)

II T 0 4 グリッドに位置する。不整なL字状の形状を呈し、縦横1.2m×1.38mを測る。調査時には火葬施設と判断したが、覆土中に炭化物、焼土は見られるものの、焼骨は認められず、火葬施設とする根拠は薄い。出土遺物はなく、時期不明。

SK 4 3 (第13図)

II Y 1 8 グリッドに位置する。本地区はIV層面まで一気に掘り下げたため、検出面がIV層面となるが、遺構の掘り込みが浅く、本来III層面以上から掘り込まれた遺構であった可能性が高い。検出時にリング状の焼土が確認された。検出面からの深さは5cm程度で、遺構の底部が残存しているのみで、検出面での形態は1.2m×1.0mの西側に小さな張り出し部を持った不整な楕円形を呈する。覆土の1層は炭化物・焼土と共に焼骨を含む。2層上面は硬く焼けた火床面で、それ以下の層は被熱により変色したもので、変色した厚さは10cm近くに及ぶ。焼骨が出土していることから火葬施設と判断される。さて、検出面がほとんど底面であったことと、西側にわずかに張り出し部を持つこと等を考慮すると、本遺構の本来の形態はSK 1 4他の火葬施設のように、方形の一辺に張り出し部を持つ構造であった可能性がある。ただし、SK 1 4などは主体部よりも張り出し部が深くなっているが、本遺構では主体部に溝状の掘り込みは確認されていない。出土遺物はなく、時期不明。

SK 4 4 (第13図)

II T 2 5 グリッドに位置する。本地区はIV層面まで一気に掘り下げたため、検出面がIV層面となるが、本来III層面以上から掘り込まれた遺構であった可能性が高い。長さ1.4m、幅0.3m、深さ7cmの溝状の遺構。覆土には炭化物と焼骨片が多量に含まれる。規模、主軸が東西方向であること、焼骨片を含むなど、SK 0 5、SK 1 4の火葬施設の張り出し部との共通点が認められ、これらと同じ形態の火葬施設の主体部が削られて、主体部より深く掘り込まれている張り出し部のみが残ったものと推定される。焼土が認められなかったが、他の火葬施設でも焼土があまり形成されないものもあることを考慮すると、本遺構は火葬施設と考えられる。出土遺物はなく、時期不明。

SK 4 7 (第13図)

II T 1 4 グリッドに位置する。長さ94cm、幅24cm、深さ24cmの溝状の遺構。東西方向に長細く、西側はピットと切りあっている。検出面の溝周辺には焼土が広がっており、検出面より上に火床面があったことを示している。覆土には炭化物、焼土、骨片が含まれている。SK 4 4同様に張り出し部を持った火葬施設の主体部が削られて、主体部より深く掘り込まれた張り出し部のみが残ったものと推定される。検出面に認められた焼土は、主体部の火床面の一部が残存したものであると思われる。出土遺物はなく、時期不明。

なお、検出面が焼土面よりも低く、本遺構部分のみ島状に残して調査されたため、焼土の範囲など削られて不明となった部分がある。

SK 7 0 (第13図)

II Y 1 4 グリッドに位置する。長さ1.7m、幅0.2m～0.3m、深さ0.3mの溝状の遺構。東西方向に細長い。完掘時の記録のみで覆土の状況は不明である。上面に炭化物、焼土が含まれていたと記録されていること、主軸が東西方向であるなどの共通点から、SK 4 4、SK 4 7と同様に張り出し部を持った火葬施設の主体部が削られて、主体部より深く掘り込まれた張り出し部のみが残ったものと推定される。ただし、骨片は出土しておらず、その可能性を指摘するにとどめたい。出土遺物なし、時期不明。

SK 8 2 (第13図)

II S 2 0 グリッドに位置する。長さ80cm、幅30cm、深さ25cmの溝状の遺構。東西方向に細長い。記録は平面図のみで覆土については記録がない。骨片が出土していることから、火葬施設もしくは埋葬施設の可能性があるため、本項で記述した。

3 竪穴状遺構

SB01・SK32 (第14図)

II T 2 3・2 4 グリッドに位置する。南北2.8m、東西2.1m、深さ30cmの隅丸方形の竪穴の東壁に0.7m×1.0mの張り出し部を持つ。便宜的に張り出し部に対し、方形の竪穴部分を主体部と呼称する。調査当初、張り出し部は別の遺構として捕らえたため主体部にSB01、張り出し部にSK32の遺構名を与えたが、調査の結果ひとつの遺構であると判断した。記録類の整理には当初の遺構名を使用している。

遺構の構造 主体部は平坦な床面で、柱穴などのピットは確認されなかった。北壁の突出部と南壁のピットは本遺構に関連する施設か否か不明である。床面には一面に2cm～3cmの厚さで炭化物が堆積していた。

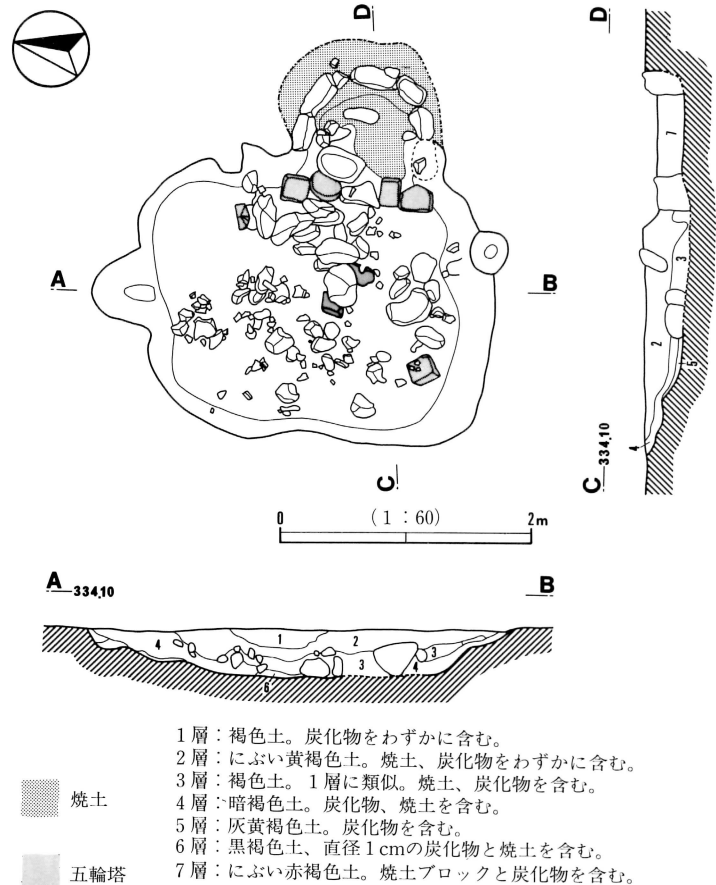
張り出し部は一辺30cmを越える大きな石を立てて壁面としている。張り出し部の床面には火床面が認められ、壁面に用いられている石も被熱してひび割れを生じている。主体部の覆土からは張り出し部の壁に用いられている石と同じ大きさの石が十数個出土した。これらは五輪塔、石臼を含んでおり、張り出し部側に集中して出土した。被熱したものが多く、床面に接しているものもある。出土状況から判断して、張り出し部の構築材として用いられていた石が、竪穴廃絶直後に崩落して主体部内に崩れ落ちたものと思われる。張り出し部と主体部の境の床面に五輪塔などを一列に配置した状況があり、張り出し部と主体部の間に石が積み上げられていた状況が推定される。

出土遺物 五輪塔の地輪6個、石臼2個(第30図1)が出土し、これらは張り出し部の構築材として再利用されたと推定される。陶磁器、内耳鍋などが出土した。

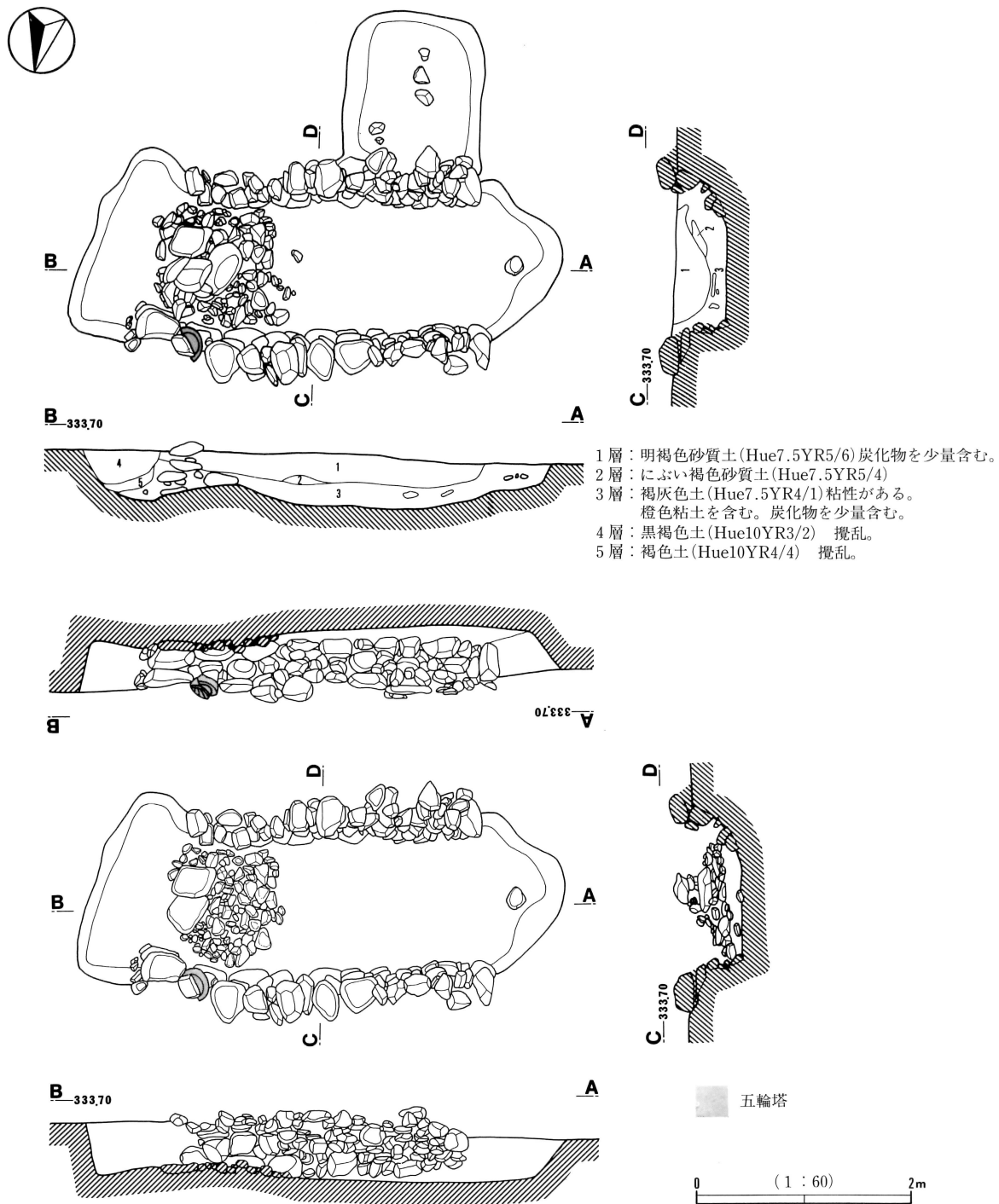
SB02 (第15図)

II T 1 7・II T 2 2 グリッドに位置する。

遺構の構造 東西約4m、南北1.3mの長方形を呈する。深さは約50cm～60cmを測る。南北壁には一辺20cm～40cmの礫を床面から積み上げ50cm～60cmの壁を作っている。東壁は南北壁と同様に礫を積み上げて壁としているが、壁の礫は中ほどで途切れ南側半分には礫が認められない。西壁際には崩落した状況の礫も出土していることから、壁の礫が崩れたとも考えられるが、確証は得られなかった。礫が途切れる部分が直線的にそろっており、もともと礫が積み上げられていない構造のものであったとも解釈できる。東壁の礫積みの外側にもプランが伸びるが、攪乱が入っているため本来の形状は不明である。西壁には礫は見られない。床面は平坦で、東側底面には1m四方に礫が敷きつめられている。これらは2枚の大きな平石と、小礫によって構成されており、東壁の礫積はこれらの敷石の上に構築されている。なお、本遺構の南壁に



第14図 玄照寺跡 SB01



第15図 玄照寺跡 SB02

接して方形の土坑が検出され床面から礫が数個出土した。同一施設であるのか否か判断できないため、同じ図中に示しておく。

出土遺物 礫積みの中の壁の中に、3点の欠損した石臼(第30図2・3)が積み石として再利用されている。カワラケ、陶磁器破片が12片出土した。第24図・第25図の19・22・29・32・35は本遺構より出土したもので、22は16世紀後半と指摘されたが、他はいずれも17・18世紀の伊万里、唐津である。

出土遺物より、本遺構の時期は近世以降のものであると推定される。

SK42 (第16図)

II T 16・17グリッドに位置する。幅約2.2m、長さ9.8mの東西に細長い溝状の遺構である。東半分

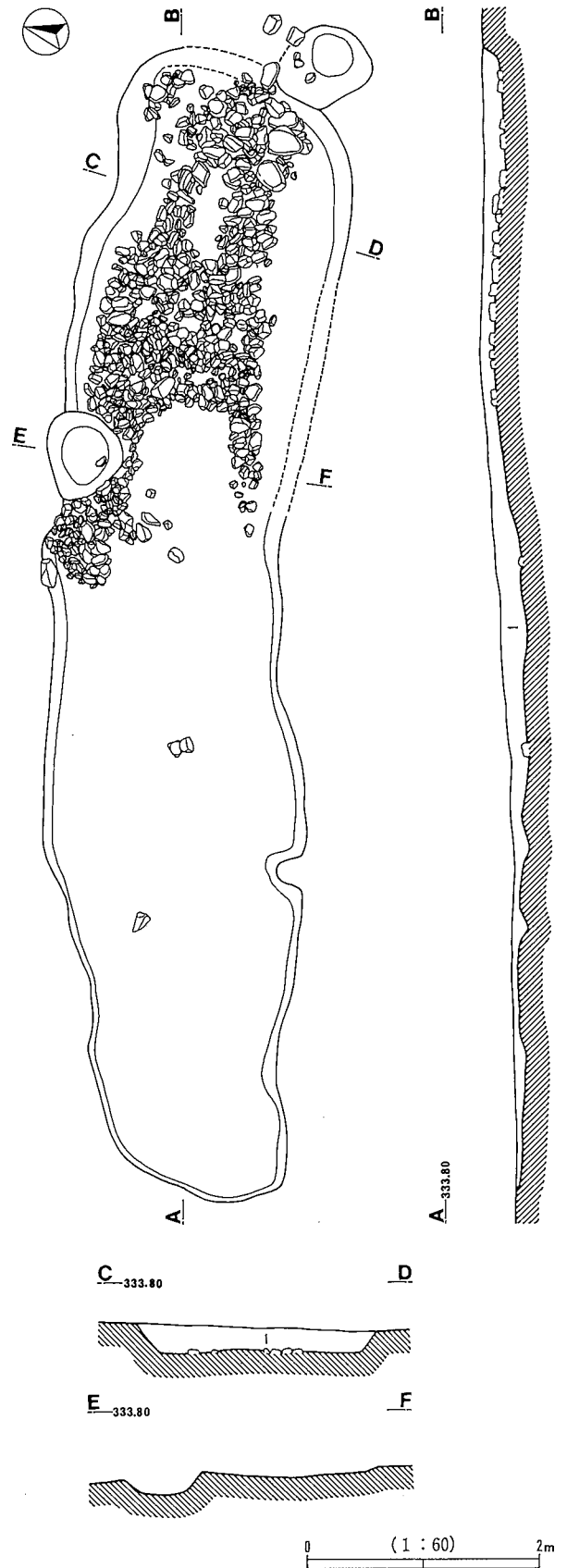
の底面の幅1.4m、長さ4.4mの範囲に礫が平坦に敷きつめられている。礫を覆う覆土は非常に硬く、その硬い面は礫の無い部分にも広がっており、遺構として捕らえたほぼ全体に硬い面が見られたと思われるが、詳細な範囲を示すことができない。また、西側の立ち上がりははっきりせず更に西側に遺構が伸びていく可能性もある。部分的に礫がない部分が認められるが、最初からなかったものかどうかは判断できない。他の遺構との位置関係を見ると、SD04が本遺構を避けるように回り込んで掘られており、そのSD04と平行するSD19との間に位置する。覆土が硬く締まっていた状況は、SD04・SD19が道の側溝であったとすると、本遺構は土坑ではなく道の構造の一部とも考えられ、最終的な使用面は礫面ではなく、硬く締まった土の上面となる。また、SB02とも隣接して平行する位置関係にあり、関連施設と推定される。

出土遺物 内耳鍋・陶磁器片26点、煙管2点が出土した。第24図～第27図4・15・20・28・33・47・55・64・68は本遺構より出土したもので、古瀬戸瓶子、青花または初期伊万里から17世紀唐津、18世紀瀬戸美濃、明治以降の皿などが出土している。明治期以降のものは1点のみで、床面の礫が部分的に抜けることから後世の攪乱により混入したことも十分考えられる。床面から第24図15が出土していることから第24図4の古瀬戸は混入したものと考えられ、本遺構の時期も近世と考えておくのが妥当であろう。

4 井戸址

SK19 (第17図)

IT07グリッドに位置する。石組みの円形の井戸址である。検出面では直径2.4m～2.6mの不整な円形を呈し、深さ1.8mである。検出面から40cmの深さで円形に組み込まれた石積みが発見される。石組みは井戸の底面から積み上げられ、上方に行くにしたがって内径は大きくなる。石組み上面での内径は1.1m、底面では0.7mを測る。石組みは径30cm～40cm程度の石を積み上げ、その透き間に更に小さな石を入れて築かれている。多くの石は角のとれた川原石であるが、五輪塔、宝篋印塔、石臼など20点が石組みの材料に転用されていた。断ち割り調査の結果、石組みの東側には掘り方が認め



1層：褐灰色砂質土(Hue10YR6/1) ※1層の上に黄橙色の粘土層がのる。

第16図 玄照寺跡 SK42

られたが、西側は掘り方に接して石が積まれている。井戸の底面の標高は331.9mであるが、SK 24同様に砂層まで掘り込まれていたとすれば、さらに1mほど深かった可能性もあろうが、地山層との関係は明らかにできなかった。また、本遺構の覆土にST 06のピットが掘り込まれている。

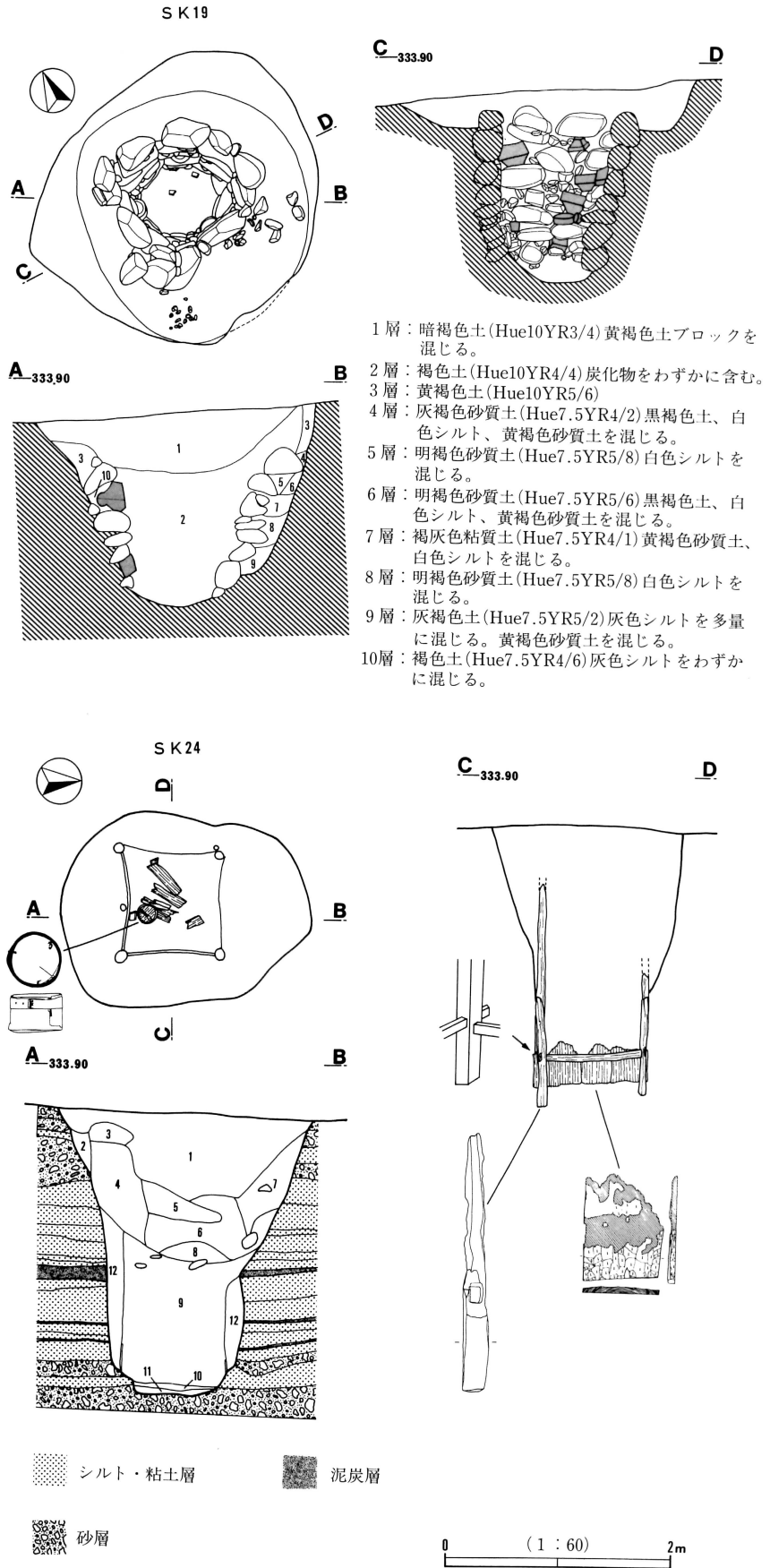
出土遺物 井戸の底面と断面図の3層中より内耳鍋片が出土した。この他に覆土1層及び2層上部に内耳鍋、陶磁器片が30片出土した。五輪塔風空輪3点(第28図1~3)、火輪9点(第28図7~15)、地輪4点、宝篋印塔笠1点(第29図46)、石臼3点(第30図5・7・8)が、石積みに用いられていた。出土遺物から本遺構の時期は特定できないが、SK 24との関連から近世後半以降のものとして推定される。

本遺構では五輪塔・宝篋印塔が転用されていること、切り合い関係からST 06より古いことが確認された。この所見からすれば、玄照寺跡の形成は少なくとも三段階に分けて理解することが可能となる。すなわち、五輪塔などが建てられていた墓域的な性格のI段階、SK 19が井戸として機能していたII段階、SK 19が井戸の機能を失って、ST 06を中心として遺跡が構成されていたIII段階である。

SK 24 (第17図)

II T 03 グリッドに位置する。

遺構の構造 木組みの方形の井戸址である。検出面では長軸2.2m、短軸1.7mの不整な楕円形を呈するが、下部では木枠に囲まれた



第17図 玄照寺跡 SK 19・24

一辺0.9mの方形となる。深さは検出面より2.5mを測る。木組みは四隅に一辺6.5cm～9.5cmの角材を立て、その間に幅約27cm、厚さ1.5cm前後の板材(第33図5～9)を縦に並べ、角材と角材に横木を渡して板材を抑えている。角材(第33図3・4)には段違いに十字に貫通する穴があり、横木を通すようになっている。横木は腐食しており覆土に痕跡のみ残している部分もある。底面付近ではこれらの木組みの残存状況は良く木質部が残っているが、上方に行くにしたがい腐食が著しく、痕跡が認められるのみである。壁の板材がどの高さまであったか明らかでないが、角材は底面から約2mの高さまで痕跡が確認された。板材と掘り方の間は10cm～15cm空いており、土が充填されている。覆土の1～8層は分層されているが土層注記が無く詳細は不明である。9層は断面を残さずに掘り下げており分層可能かどうか不明。10層は青黒色(Hue 5B2/1)の泥炭質粘土層で粗い砂粒を含む。11層は暗青灰色(Hue 5B3/1)粘土で粗い砂粒を多く含む。12層は前述した板材の後ろに充填された土である。井戸は検出面の砂層とその下のシルト・粘土層群を掘り抜いて青黒色の粗い砂層まで掘り込んでおり、底面の標高は330.94mである。底面より1m上部で人頭大の石がまとまって出土していること、北壁の12層が底面より約1mのところまで切れていることを考え合わせると、石の出土したレベルを境に上半部と下半部では埋没の状況が異なると推定される。すなわち、下半部では井戸の形状が保たれた状況で埋没し、上半部は壁の崩落後に埋没したものと思われる。

遺物出土状況 覆土上半部で南東側に集中して礫が出土している。SK 24の南東に隣接してSH 07の集石が見られ、その礫が落ち込んだ可能性がある。覆土下半部では、底面から約1mのところまで人頭大の石5個がまとまって出土し、その中の1点は五輪塔の風空輪(第28図4)である。これらの石を取り上げたところで、直径1.2mの円形のプランが確認された。さらに掘り下げると、底面から約15cmのところ、板材と曲げ物(第33図1・2)がまとまって出土した。この他に、覆土上層より陶器、土器片が6片、底面から30cmのところまで土器1片、底面より陶器1片が出土した。時期が判明した遺物は16世紀前半の青花と18世紀の肥前系の焼き物で、本遺構の時期は近世であると思われる。

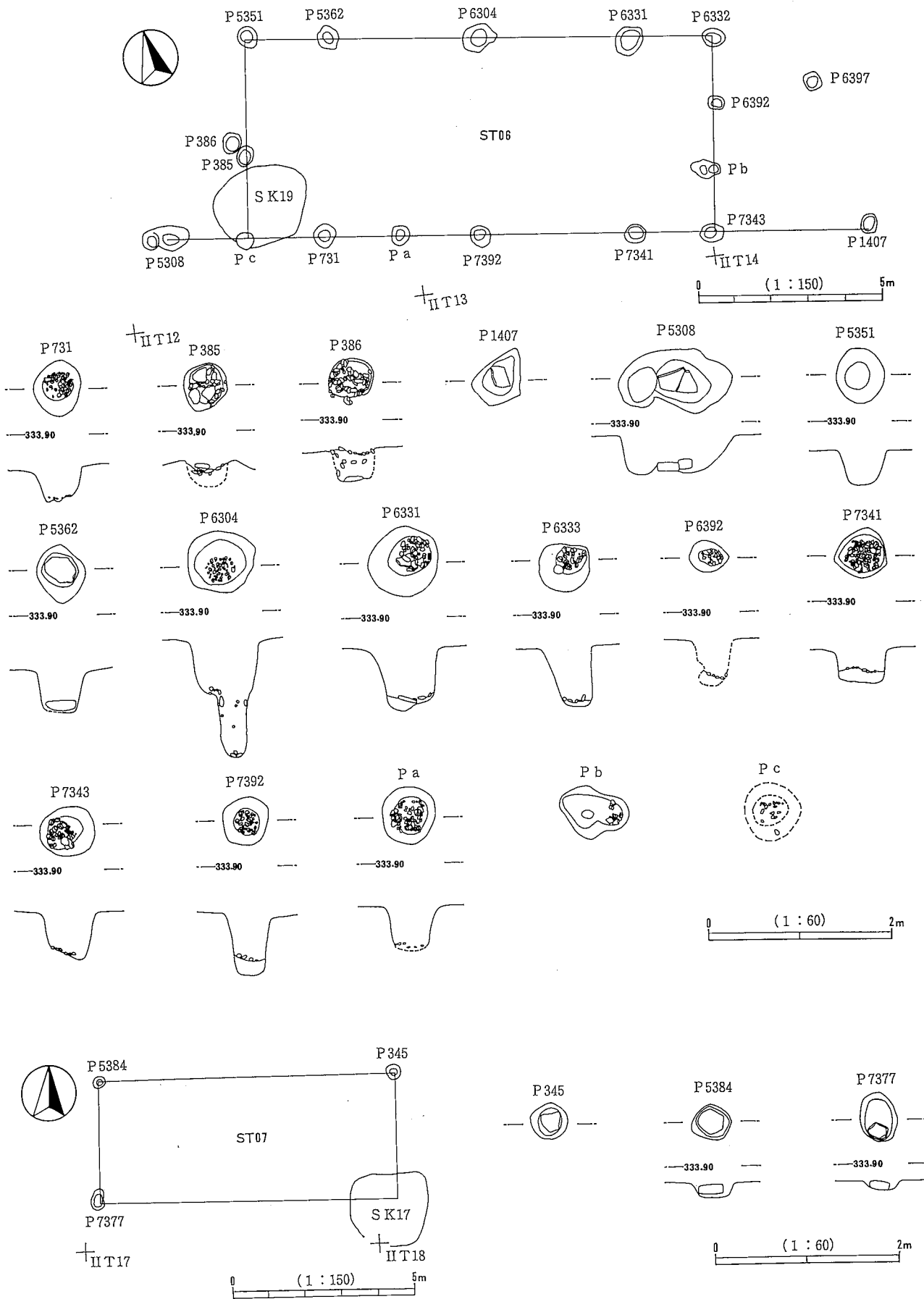
ところで、石製供養塔類が、前項のSK 19に転用されたことと、SK 24埋土中位に廃棄されたことが関連するものであるとすれば、SK 19構築時にはSK 24は半分程度埋没していたことになる。この前後関係は遺構の形式から見ても矛盾しない。さらにこれによって、前項で推測した第2段階の細分の可能性またはSK 24が第一段階の遺構である可能性も指摘できる。^(註1)

5 掘立柱建物址

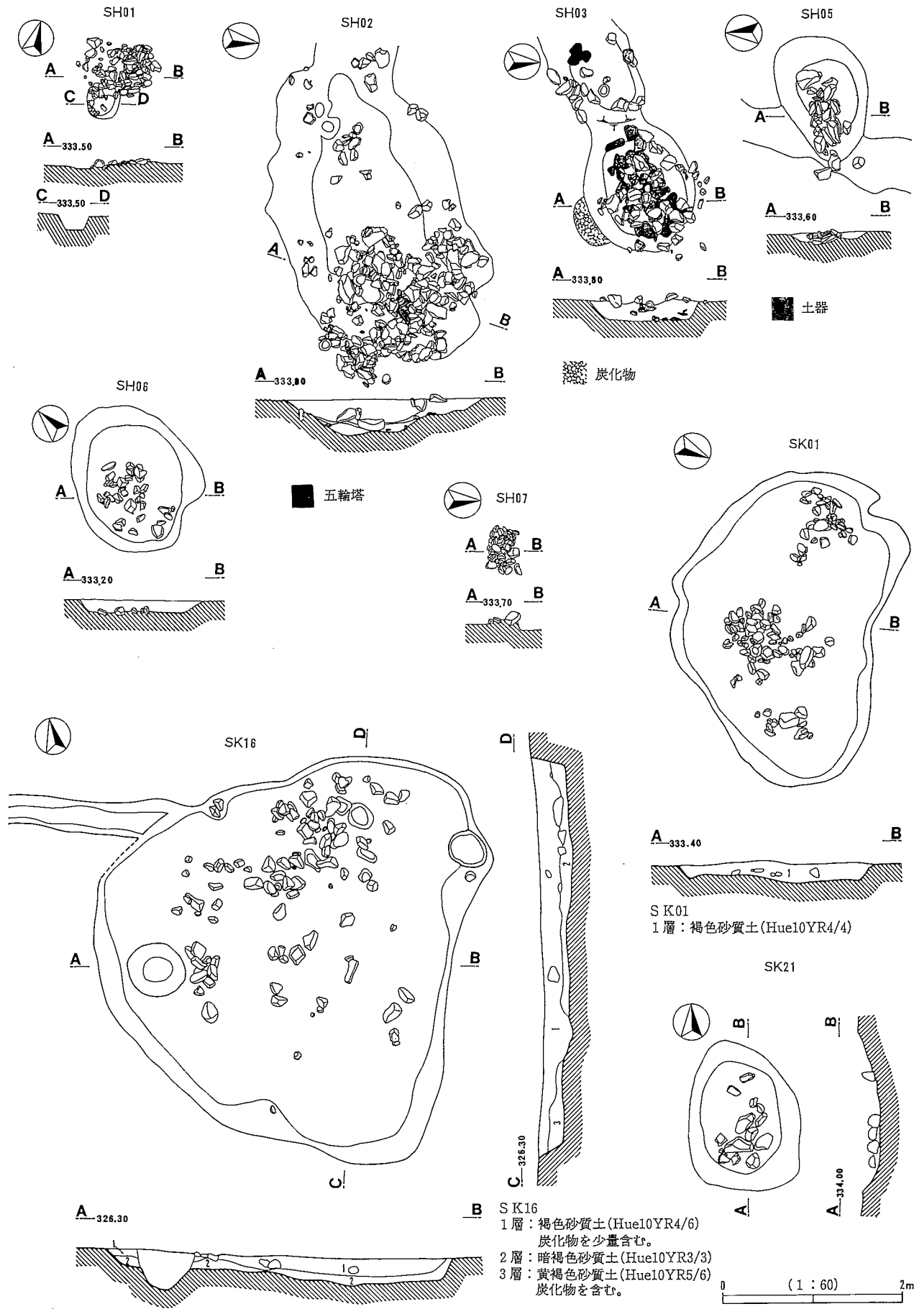
発掘調査時には掘立柱建物址としてST 01～ST 05を認めた。ST 06以降は整理作業時に確認したものである。なお、柱穴内に礫を詰めたST 06・07以外は建物址である根拠がなく、遺構配置図に位置を示していないが、推定される建物址群を第37図に示した。

ST 06 (第18図)

IIT 07・IIT 08・IIT 09・IIT 12・IIT 13・IIT 14グリッドに位置する。柱穴内に石を入れた掘立柱建物址である。石を入れた柱穴は、本遺構とST 07のみで、両者は隣接しており、他の地区にはこのような柱穴は認められない。柱穴の石の敷き方には2種類あり、ひとつは多数の拳大以下の小さな礫を底面に持つもの(A類)と、一片20cm以上の大きな平石を1個～2個敷いているもの(B類)とがある。A類は13m×5.5mの長方形の中に配列している。この配列中にはB類のP5362が含まれる。また、SK 19の端には小礫が確認されており、A類と同様な出土状況を示しており、ピット名は付けられていないが位置関係からST 06を構成する柱穴であると思われる。SK 19の覆土中に礫がまとまって出土していることからST 06の方がSK 19より新しいと考えられる。またP5351からは礫が出土していないが、位置関係からST 06とした。更に、B類のP5308・P1407はST 06の南辺の延長上に位置して



第18図 玄照寺跡 ST06・07



第19図 玄照寺跡 集石土坑

おり、ST06と関連を持つ柱穴であると考えられる。また、長方形の線上に位置しないがP6397はA類の柱穴であり、ST06と関連を持つものと思われる。柱穴は直径25cm～35cm、深さは25cm～65cmである。なお、P385・P386は検出面から礫が認められ、他の柱穴と礫の出土状況が異なる。P371・P6304には底面の礫より下に柱痕と思われる掘り込みが認められ、これらは底面に礫を敷いたものではなく、柱と穴の透き間に礫を詰めたものと判断できる。なお、ST06は真北より約7度東にずれる東西棟である。

出土遺物はP371・P5308・P7343より内耳鍋片が出土している。SK19より新しいが、詳細な年代は不明である。

ST07 (第18図)

IIT12・IIT13グリッドに位置する。SK17に破壊され、柱穴一つを欠いているが、8.2m×3.4mの長方形の四隅に平石を置いた柱穴が確認された。いずれのピットも一辺20cm以上の大きな平石を土坑底面に置いたものである。真北の軸にのる東西棟で、ST06とは約7度ずれる。出土遺物はP345より陶器が出土しているが時期不明である。

6 集石・集石土坑

SH01 (第19図)

IY06グリッドに位置する。90cm×60cmの範囲に拳大前後の集石が見られ、おおむね長方形に配置される。集石下には一辺35cm、深さ30cmの方形のピットが検出された。ピット内に石は見られず、集石とピットの位置がずれており、両者が関連あるものとするデータはない。集石より内耳鍋が1片出土したが、時期不明。

SH02 (第19図)

IIT22グリッドに位置する。土坑に伴う集石で、SD06の東端に位置しておりSD06と関連する施設と思われる。検出面ですでに集石が確認され、集石は更に土坑底面まで落ち込んでいる。土坑は3.1m×2.0m、深さ約30cmの不整な楕円形で、集石は土坑の東側に偏っている。集石は一辺20cmを越える人頭大のものが多く、中には被熱して黒色化したもの、五輪塔(1点)などが含まれている。五輪塔はスクリーントーンで位置を示した。出土遺物は18世紀の瀬戸美濃と思われる天目(第25図49)の他、陶磁器片、内耳鍋片、五輪塔1点、火縄銃の玉1点である。時期は五輪塔が転用されていることから、近世と考えられる。

SH03 (第19図)

IIT17・22グリッドに位置する。土坑に伴う集石で、SD06の分岐した溝の東端に位置しており、SH02と隣接している。集石は検出面から確認され、土坑底面には敷かれた様に張り付いて出土している。図では土坑底面出土の石をスクリーントーンで示した。一辺20cm前後の石が多い。土坑は1.3m×1.4m、深さ20cmの楕円形を呈しSD06よりわずかに低く掘り込まれている。集石の一部がSD06部分にも散布することからSD06と同時期のもので同一の施設と判断した。土坑南側の検出面で炭化物の分布が認められたが、本遺構に関係するものか否か不明である。遺物は陶磁器(第24図11、第25図50)、内耳鍋片が出土した。時期はSH02と同時期か。

SH05 (第19図)

IIT07・08グリッドに位置する。SD08と切り合うが、前後関係は不明。1.0m×1.4m、深さ約10cmの浅い土坑中に見られる集石である。集石は一辺10cm～20cmの石を用いており、被熱して赤褐色に変色したものが含まれる。出土遺物はなく、時期不明。

SH06 (第19図)

IIX05グリッドに位置する。1.6m×1.2m、深さ約5cmの浅い土坑に伴う集石である。集石は一辺10

cm前後と他の集石に比べ小さな石を用いており、数も少なく散漫である。SD13とSD11が交わる角に位置している。内耳鍋片が出土しているのみで、時期不明。

SH07 (第19図)

位置不明。写真記録を見るかぎり、土坑壁面に沿って石が積み上げられている遺構である。その状況の実測図がないため検出面の平面図のみ図示した。出土遺物は陶磁器、内耳鍋片が出土しているが、時期不明。

SK01 (第19図)

II X 0 5・10グリッドに位置する。3.4m×2.2m、深さ25cmの不整形な土坑に伴う集石である。集石は土坑底面にあり、3つのまとまりに別れている。一辺10cm~20cmの石を用いている。遺物は古瀬戸おろし皿(第24図3)の他、内耳鍋片が出土した。第1検出面で検出され、遺構は古瀬戸が示す年代より新しい時期のものと思われる。

SK16 (第19図)

II T 1 3グリッドに位置する。4.0m×4.5mの不整形な土坑に伴う集石である。SD10の東端に位置し、SD10よりも深く掘り込まれている。切り合うものか、同一の施設であるかは確認できなかった。写真記録で見るかぎり、土坑底面では約3.1m×2.5mの長方形のプランが認められる。集石は土坑中央部では床面付近で出土するが壁面付近では床面より浮いており、土坑が埋没する過程で石が遺構内に廃棄された出土状況を示している。石は20cm前後の人頭大のものが多い。遺物は17世紀前半の唐津(第25図31)、18世紀の伊万里(第24図16)の他内耳鍋片が出土した。出土遺物から近世後半の遺構と思われる。

SK21 (第19図)

II T 0 3グリッドに位置する。1.2m×1.6m、深さ20cmの楕円形もしくは不整な隅丸の方形の土坑に伴う集石である。SK24(井戸)に隣接している。石は一辺20cm前後で土坑底面にまとまっている。遺物は常滑の壺破片(第27図62)の他、内耳鍋片が出土した。遺構内出土の常滑の壺と同一個体と思われる破片が、遺構周辺より出土している(第22図)。遺構の時期は不明。

7 土坑

SK02 (第20図)

II T X 0 9・10グリッドに位置する。2.2m×1.3m、深さ40cmの長方形を呈する。底面は平坦で壁面もほぼ垂直に立ち上がる。土坑底部には炭化物が散っており、人頭大の石が出土した。遺物は16~17世紀の青花もしくは初期伊万里(第24図13)、明治以降の碗(第26図54)と思われるものの他、内耳鍋片、銅製の煙管が出土した。遺物は覆土中位から上層にかけて出土しており、近代の遺構の可能性もあるが時期を確定できないため本節で取り扱った。

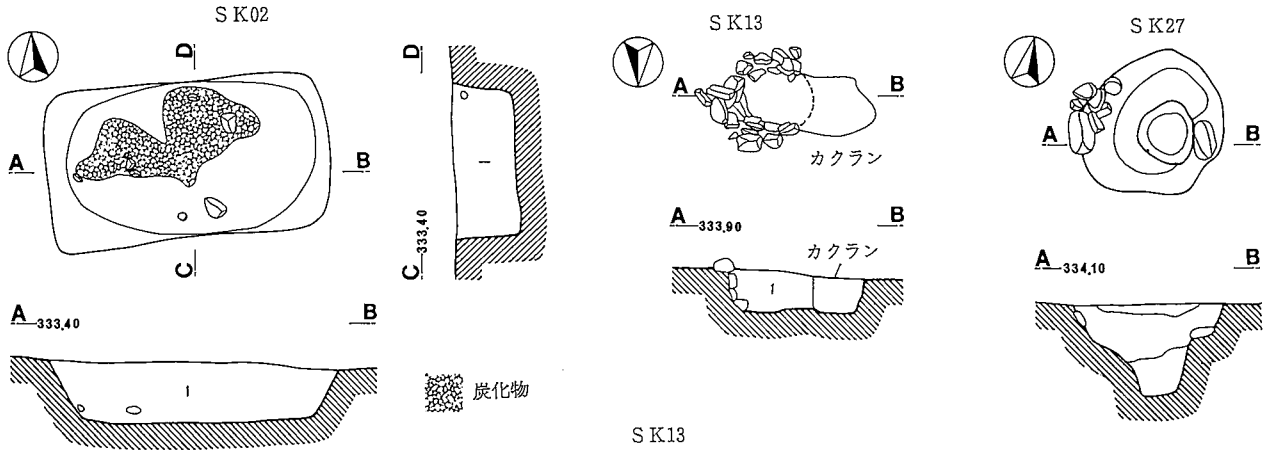
SK09 (第20図)

II S 2 4・25グリッドに位置する。5.0m×1.2m、深さ約50cmの長方形を呈する。底面は凹凸があり平坦ではない。長軸方向が現代の耕作痕や溝と平行することから、近代以降の遺構と思われる。土坑東側の底面付近から人頭大の石が出土した。この他に、煙管が1点出土した。

SK13 (第20図)

II T 1 3グリッドに位置する。直径約80cmの円形で、深さ約40cmを測る。拳大の石を積み上げて壁面を形成しているが、西側は攪乱のため石が除かれている。底部には石はなく平坦な面をなす。出土遺物はなく時期不明。

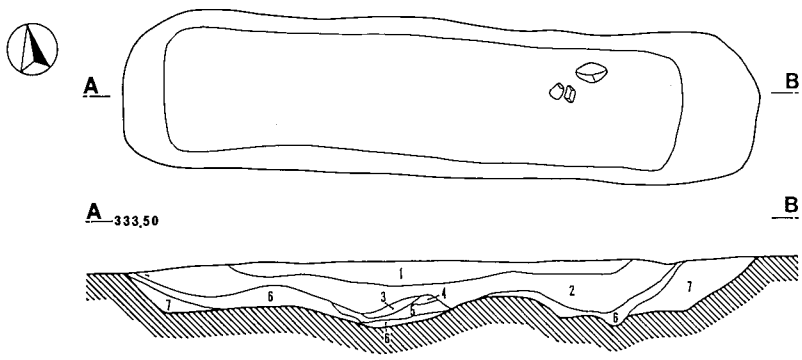
SK27 (第20図)



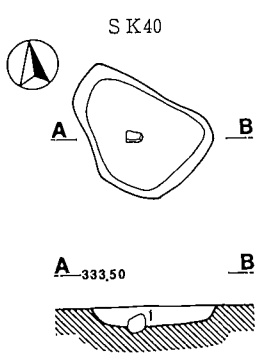
SK02
1層：にぶい黄褐色砂質土(Hue10YR5/4) 炭化物をわずかに含む。

SK13
1層：暗黄褐色砂質土。灰褐色砂を混じる。カクランと類似。

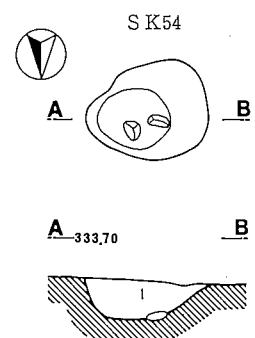
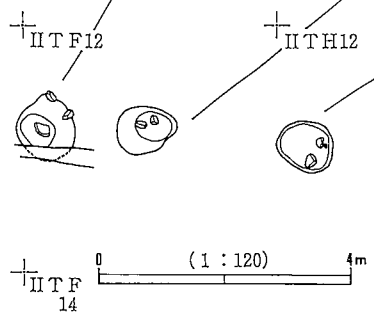
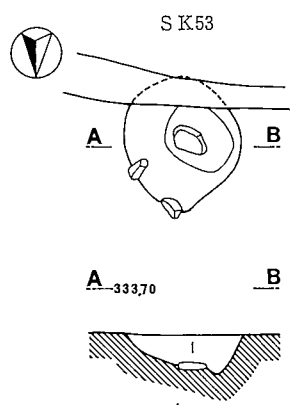
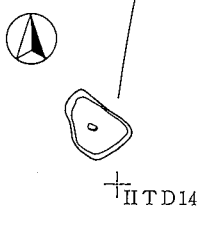
SK09



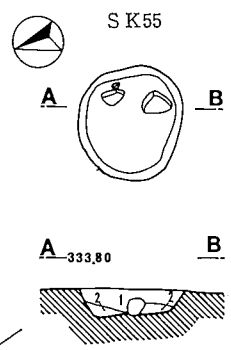
SK09
1層：にぶい黄色土(Hue2.5Y6/4) 耕作土に類似。
2層：暗灰黄色土(Hue2.5Y5/2) 炭化物を少量含む。
3層：焼土。
4層：黄褐色土(Hue10YR5/8)
5層：にぶい黄褐色土(Hue10YR4/3) 灰色と褐色土のブロックを混じる。
6層：黄褐色土(Hue10YR5/6) 灰色、赤褐色土を混じる。
7層：黄褐色土(Hue10YR5/6) 6層中に地山の土を多量に混じる。



SK40~SK55の配列



SK40
1層：黒褐色土(Hue10YR3/2)
SK53
1層：褐色砂質土(Hue10YR4/4)
SK54
1層：黄褐色砂質土(Hue10YR5/6) シルトブロックを混じる。
SK55
1層：黄褐色砂質土(Hue10YR5/6) シルトブロックを混じる。炭化物を含む。
2層：明黄褐色砂質土(Hue10YR6/6) シルトブロックを混じる。



(1 : 60) 2m

(1 : 120) 4m

第20図 玄照寺跡 土坑

II T 0 9 グリッドに位置する。直径約1.1mの不整な円形を呈する。中段にテラスを持つ構造になっており、最深部で70cmを測る。東壁面の上半部では礫を積み重ねている。遺物は陶器片と内耳鍋片が出土しているが、時期不明。

SK 4 0 ・ SK 5 3 ・ SK 5 4 ・ SK 5 5 (第20図)

SK 4 0 はII T 1 6 グリッド、他はII T 1 2 グリッドに位置する。いずれも土坑底面に15cm～20cmの石が見られる。4基とも直線上に配列しており、土坑の規模も類似する。一辺0.9mから1mの不整な円形を呈し、深さ20cm～30cmを測る。出土遺物は、SK 5 3 から陶器片が1点出土したのみで、時期不明。

8 溝 (第21図)

検出された溝は出土遺物も少なく、切り合い関係も確認できなかったため、配置関係から同時期のものと思われるものをまとめて報告する。配置関係ではT字もしくはL字に交差するもの、平行するものを同時期のものと仮定し、十字もしくはX字に交差するものについては異なった時期のものと理解した。

SD 0 2 ・ 0 3 ・ 0 4 ・ 1 4 ・ 1 6 ・ 1 7 ・ 1 9 (第21図B)

SD 0 2 ・ 0 3 ・ 1 9 はL字状に接しており、配置関係から互いの溝を意識して掘られているものと判断され、同時期のものとしてとらえた。SD 0 3 とSD 1 7 は同一直線上にのっており、同一の溝と判断した。西側が調査区外になるため全体像はつかめないが、SD 0 2 ・ 0 3 ・ 1 7 ・ 1 9 はコの字もしくは口の字状に配置する。これらの溝に囲まれた中にあるSD 1 6 はSD 0 3 ・ 1 9 ととも平行しており、同時期の可能性がある。深さと幅は以下のとおりである。SD 0 2 は幅42cm～80cm、深さ12cm～32cm。SD 0 3 は幅44cm、深さ10cm。SD 1 6 は幅50cm、深さ20cm。SD 1 7 は幅28cm、深さ20cm。SD 1 9 は幅88cm、深さ30cm。

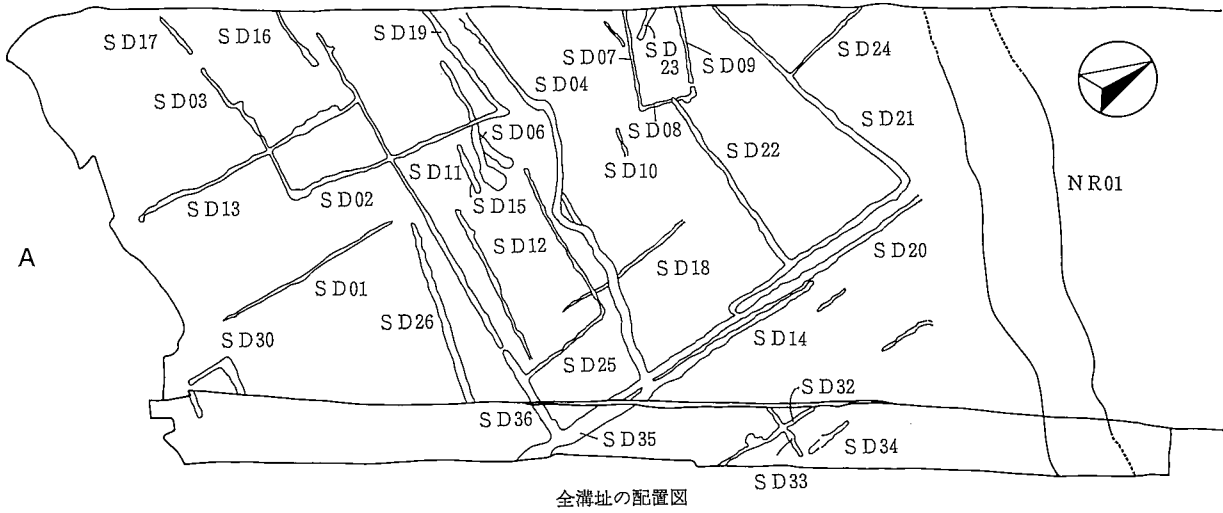
次に、SD 0 4 は調査区西側ではSD 1 9 と平行しているものの、SD 1 9 が途切れるところから一度蛇行し、SD 2 0 と十字に交わり、SD 1 4 とTの字に交わる。それぞれの覆土の切り合い関係は確認できていない。SD 2 0 とは溝底面のレベルがほとんど同じため、関連のあるものなのか否か発掘所見からは判断がつかないが、SD 2 0 を越えてSD 1 4 につながっていることから、ここではSD 0 4 とSD 2 0 は直接は関連のないものと理解しておきたい。このように考えるとSD 1 4 とSD 2 0 は平行しているものの、違う時期に掘られたものと推定される。いずれも南北軸とわずかにずれている。SD 0 4 とSD 1 9 は2.5mの間隔で平行しており、SK 4 2 の項で述べたとおり両溝の間には堅緻な面が認められ、この溝が道路の側溝である可能性もある。したがってSD 0 4 ・ 1 4 はSD 0 2 ・ 0 3 ・ 1 6 ・ 1 7 ・ 1 9 と同時期のものと理解したい。それぞれの溝の深さと幅は以下のとおりである。SD 0 4 は幅65cm～102cm、深さ22cm～46cm。SD 1 4 は幅90cm、深さ20cm。

SD 0 2 より、カワラケ (第26図56) と16世紀後半から17世紀の瀬戸美濃が出土し、SD 1 4 より陶器片が1片出土している。他の溝からの出土遺物はない。時期不明。

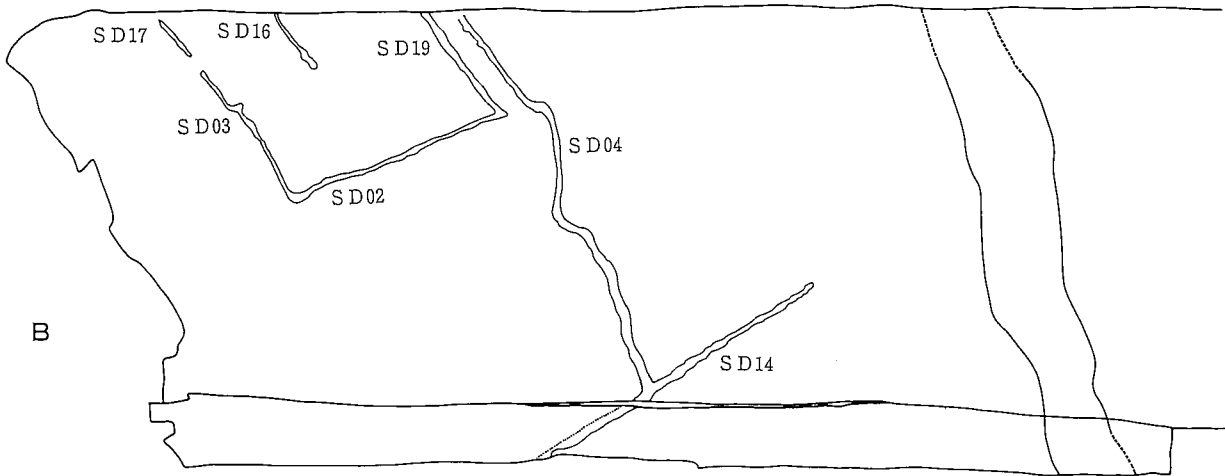
SD 0 1 ・ 1 1 ・ 1 3 ・ 2 0 ・ 2 1 ・ 2 2 ・ 2 4 ・ 2 5 ・ 3 5 ・ 3 6 (第21図C)

SD 0 1 は南北方向に23mにわたり検出された溝で、SD 1 3 と平行し、その間隔はおよそ14.0m～14.5mを測る。

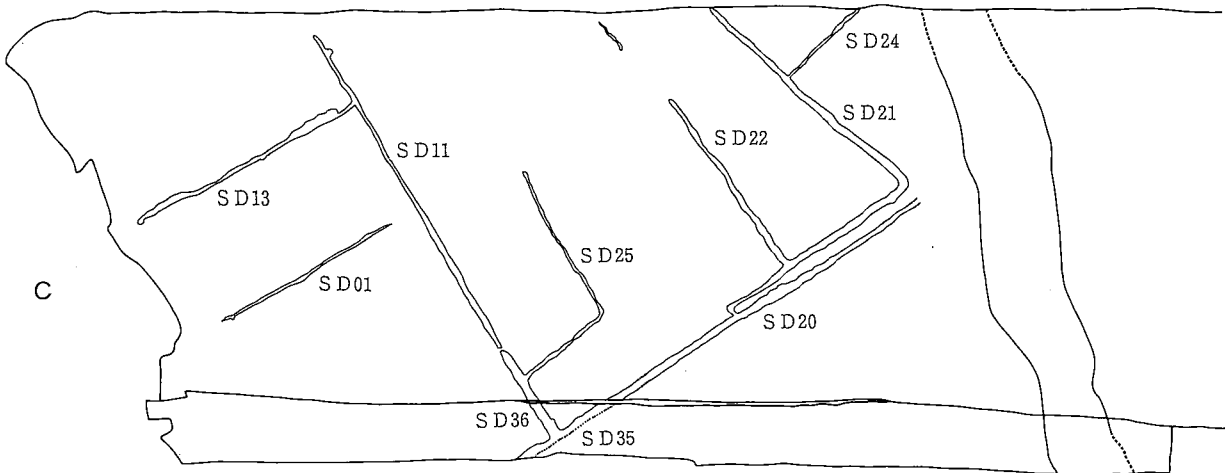
SD 1 1 と1 3 はTの字に交わり、それぞれ東西南北の軸に平行する。SD 2 5 はL字状に曲がる溝で、SD 1 1 とTの字に交わる。SD 1 1 はさらにSD 3 5 とTの字に交わる。SD 3 5 は平成5年調査地区で使った遺構名であるが、平成4年調査区のSD 1 4 ・ 2 0 の続きである。平成4年調査のSD 1 4 ・ 2 0 はほぼ平行した別な溝となっているものの、平成5年調査のSD 3 5 は1本の溝として調査されている。SD 3 5 部分では断面図で確認する限り2本の溝があるとは認められない。前項での考えに従



全溝址の配置図



SD02、03、04、14、16、17、19配置図



SD01、11、13、20、21、22、24、25、35、36配置図

第21図 玄照寺跡 溝址配置図

うと、SD14とSD20は時期を異にして掘られたもので、平成5年調査区で一本の溝になっているのは2本の溝が部分的に重なったところを調査したために一つの溝と誤認したものではないかと想像できる。SD11がSD14と同時期のものとする、SD25とSD04が同時期となり不自然な位置関係になると思われるので、SD11はSD20の続きと交わるものと推定される。SD20はNR01近くまで伸びているが、その先はNR01の影響で検出面が下がってしまい、溝がどこまで伸びるか確認できなかった。なお、SD11の平成5年調査部分はSD36の遺構名が付けられているが本文中ではSD11として説明を進めたい。

SD21はL字に曲がる溝で、一辺はSD20と平行し、もう一度東にわずかに曲がったところでSD20とTの字に交わる。交点部分はピットが切り合っており、詳細不明である。付図ではSD20の方が深くなっているように示しているが、他の部分のレベルを見るかぎり実際にはほとんど同じ深さのようである。SD20とSD21が交わっているとすれば同時期のものと考えなければならない。さらにSD22は東西方向に、SD24は南北方向に伸びる溝で、いずれもSD21とTの字に交わっており、SD21と関連のあるものと考えておきたい。いずれも東西南北の軸とはずれている。なお、IIT06グリッドに約4.5mの短い溝が認められるが、SD22の延長上にあるためSD22とつながる遺構であると理解した。

以上の溝のつながり方と位置関係からSD01・11・13・20・21・22・24・25は同時期のものと理解しておく。なお、SD14とSD20は現在の畑地境の道にほぼ一致する。

それぞれの溝の深さと幅は以下のとおりである。SD01は幅40cm、深さ20cm。SD11は幅36cm～64cm、深さ20cm～38cm。SD13は幅56cm～118cm、深さ28cm～38cm。SD20は幅78cm～140cm、深さ25cm～40cm。SD21は幅48cm～64cm、深さ22cm～24cm。SD22は幅80cm、深さ28cm。SD24は幅34cm、深さ12cm。SD25は幅36cm、深さ30cm。

SD35とSD11との交点付近に、一辺10cm～20cmの礫が数個出土した。SD35より、陶器片1点と珠洲系の播鉢片が1点出土したのみで、他の溝には遺物は認められない。

SD07・08・09 それぞれほぼ直角に交わり、調査区内で確認できる範囲ではコの字状の区画を形成する。調査区外にも伸びており全貌はわからない。SK19・ST06と切り合うが、前後関係は確認できなかった。なお、これらの溝の区画は現在の筆境と一致している。SD07・08から27片の陶器などが出土しているが時期不明。

それぞれの溝の深さと幅は以下のとおりである。SD07は幅43cm、深さ16cm～20cm。SD08は幅48cm、深さ24cm～38cm。SD09は幅40cm、深さ14cm～26cm。

SD06 東西方向に、やや蛇行しながら伸びる溝で、途中で二又に分かれSH02とSH03とした集石土坑につながる。それぞれの集石土坑に付属する施設と考えられる。東西方向に伸び、約13mにわたり確認された。SH02につながる溝が深い、切り合い関係は不明で、二つの溝が切り合い関係にあるのか、一つの溝が二又に分かれているのか確認できない。出土遺物はなく、時期不明。

SD10 長さ3.5m、幅38cm、深さ12cmで東西方向に伸びる溝である。東西の軸と5度前後ずれる。東側はSK16と接しており、切り合い関係にあるのか、SK16の施設なのかはわからない。溝内に、直径20cm～30cmのピットが確認されており、SD15と同様の構造を示している。SD10の西側の延長上のP344も同じ施設の可能性がある。

SD12 幅40cm、深さ12cm、長さ29mにわたり確認された東西方向に伸びる溝である。東西の軸と3度ずれる。SD25の一辺に平行するが、SD25に比べ浅い。SD25と関連して生じた溝の可能性もある。出土遺物はなく、時期不明。

SD15 幅50cm、深さ34cm、長さ6mにわたり確認された東西方向に伸びる溝である。東西の軸と5

度前後ずれる。溝内には8個のピットが不規則な間隔に並んでいる。出土遺物はなく、時期不明。

SD18 幅36cm～44cm、深さ14cm～16cm、長さ28mにわたり確認された南北方向に延びる溝である。南北の軸とは11度ずれる。SK47、SD04、SD25と切り合うが、前後関係は不明である。内耳鍋が出土している。時期不明。

SD23 調査区西壁際にわずかに確認された溝で、幅52cm、深さ18cmである。調査区内では4mだけ検出されたが、さらに調査区外に延びる。出土遺物はなく、時期不明。

SD26 幅70cm、長さ32mにわたり確認された東西方向に延びる溝である。東西の軸と11度ずれる。SX01とぶつかる位置関係にあるが、平成5年度調査区では確認されず、切り合い関係はつかめない。陶器片2点が出土した。時期不明。

SD30 平成4年調査区ではコの字形に確認された。幅38cm、深さ20cmである。出土遺物はなく、時期不明。

SD32 平成5年度調査区のみで確認された溝で、平成4年度調査区では確認されない。幅43cm～70cm、深さ18cmで、長さ13.5mで南北にのびる。南北の軸とほぼ一致する。SD33と十字に交わるが、SD33より後に掘られていることが検出面での観察で確認された。SD34と平行している。内耳鍋片9点、カワラケ2点の他、青磁破片が出土している。

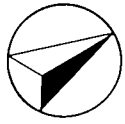
SD33 平成5年度調査区のみで確認され、平成4年度調査区では確認されない。東側は攪乱があり、調査区外へ延びるものか否か確認できない。幅39cm～63cm、深さ12cm～28cm、確認された長さは約7mで東西に延びる溝である。東西の軸とはほぼ一致する。SD32より先に掘られていることが検出面の観察で確認された。内耳鍋片が15点出土した。

SD34 幅40cm～70cm、深さ18cm、長さ5.6mで南北に延びる溝である。溝の南側は攪乱されており、SD33との交点は確認できない。内耳鍋片3点、カワラケ1点、磁器1点、ガラスのおはじき1点が出土した。

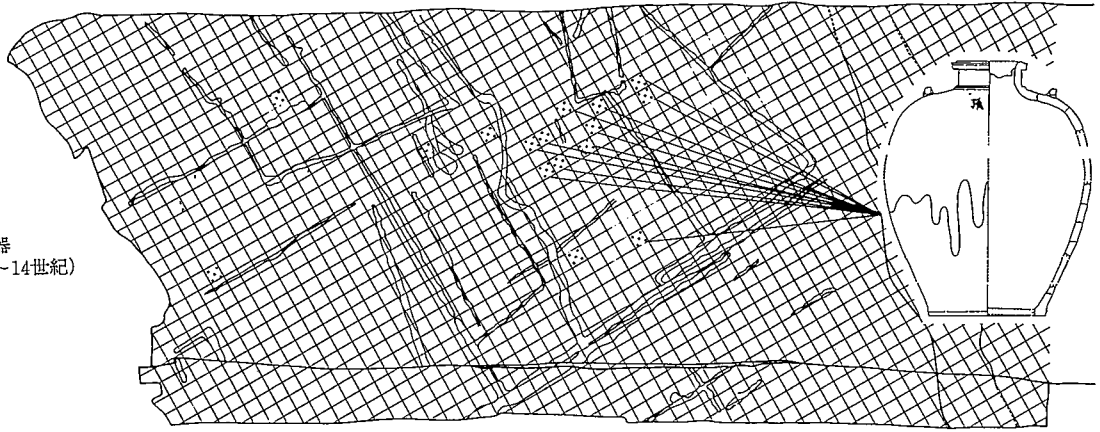
NR01 (第21図A)

調査区の北側に確認された幅8m～10m、深さ1.4m～2.0mの溝である。溝はわずかに蛇行しており、底面は東側の方が高く、西側に向って傾斜する。溝の南壁は砂層とシルト層で遺構集中地区と同じ層序であるが、北壁は礫層が現れている。溝の底面付近には多数の礫とともに五輪塔、宝篋印塔、石臼などの遺物が出土している。平成5年度調査区では、溝の南側半分に礫、五輪塔、陶磁器などの遺物が偏って出土していることが確認された。また、溝を境としてその北側には遺構は認められない。この溝の方向は等高線と直交し、蛇行していることなどを考え合わせると、自然流路と考えておきたい。ただし、平成5年度調査区内では、溝の南側のみに五輪塔を含む礫がまとまって出土していることを見ると、これらは人為的な廃棄行為によるもの、もしくは護岸施設として南壁部分に積まれていた礫が崩れ落ちたものとも考えられ、溝の南側に展開する遺構群を形成した人々の生活の行為が残されていることは確認できる。また、五輪塔などを含む層より上層では炭化物や焼土を含む層が確認されて、全体としてシルト層と砂層が互層をなしており、洪水などで一気に埋没したのではなく、流路以南の集落形成とその推移にともなって徐々に堆積している様子が伺える。また、基本土層II層が溝覆土を覆っていることが確認され、II層形成時には流路としての機能を失っていたことがわかる。

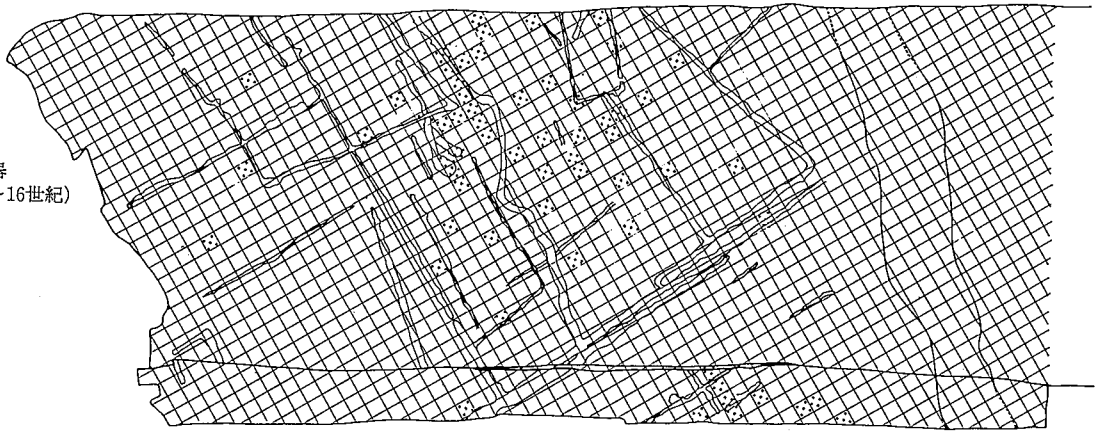
出土遺物 100点を越えるカワラケ・内耳鍋片と3点の陶器(第25図46)と、五輪塔の風空輪2点、火輪3点、水輪5点、地輪16点、宝篋印塔の笠1点、塔身1点、石臼7点が出土した(第28図16～18・28～30、第29図33～35・38・40・41・43～45・47・48、第31図9・14)。第29図48の宝篋印塔塔身には四面に梵字が彫られている。



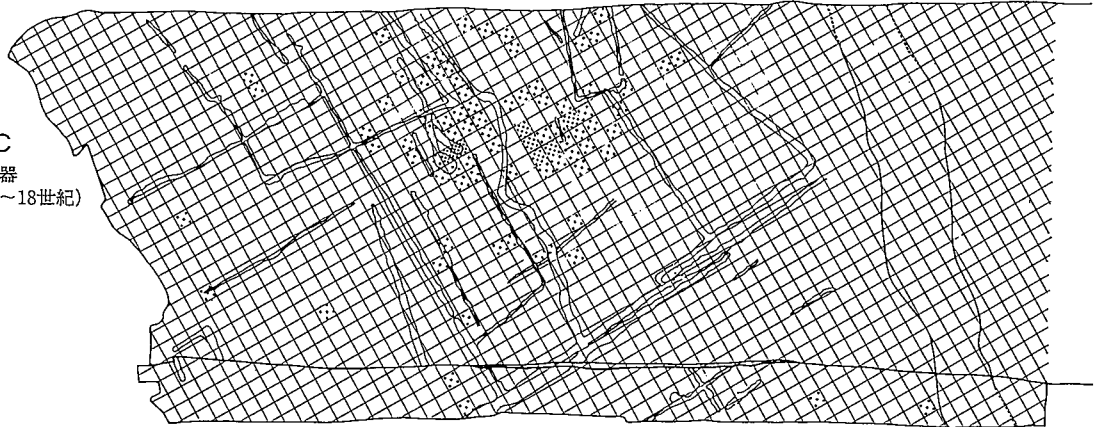
A
陶磁器
(13~14世紀)



B
陶磁器
(15~16世紀)



C
陶磁器
(17~18世紀)



⊘ 1点~5点

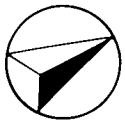
⊘ 6点~10点

⊘ 11点~20点

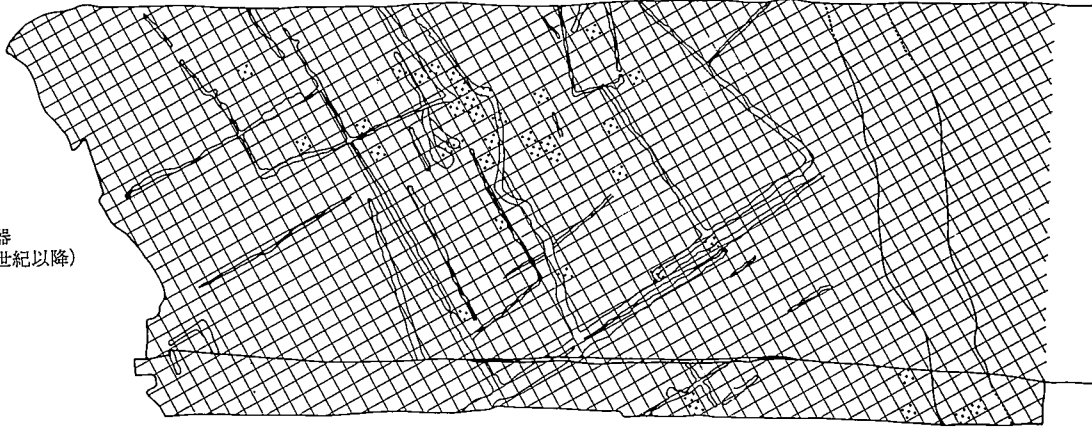
■ 21点以上

0 (1:1000) 50m

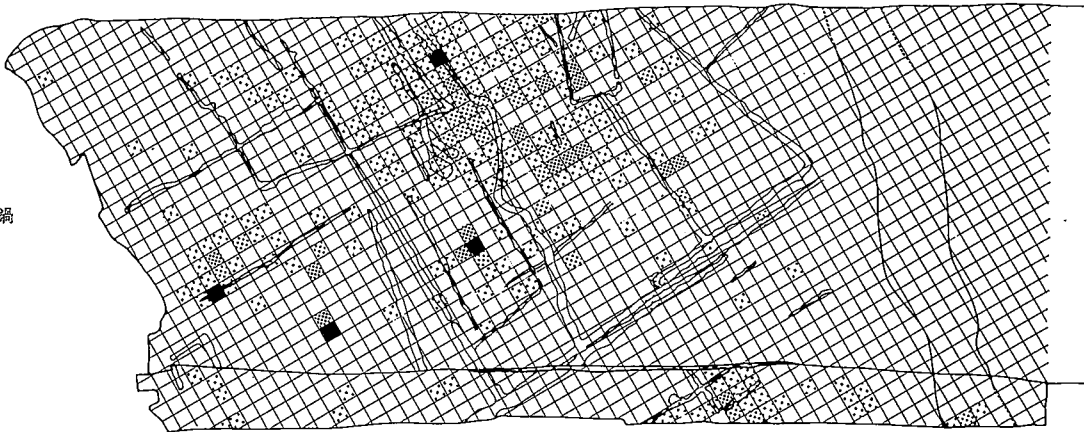
第22図 玄照寺跡 遺物分布状況(1)



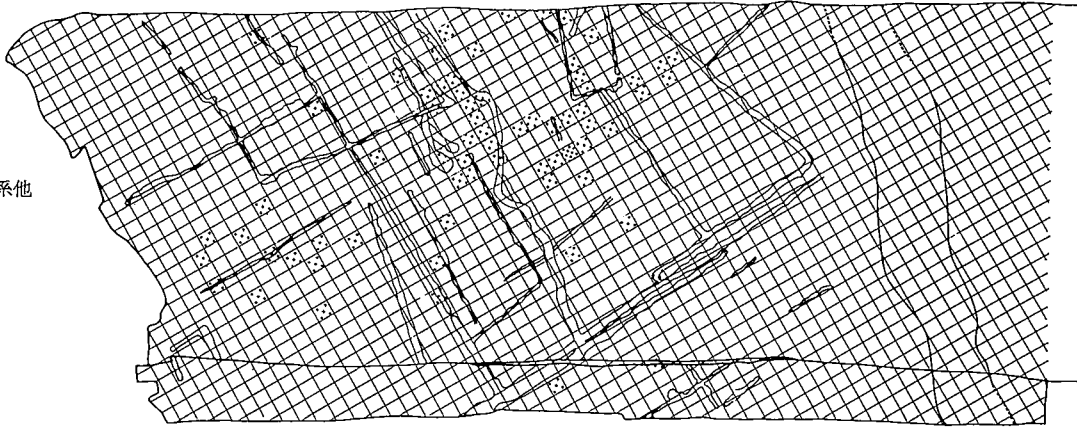
D
陶磁器
(19世紀以降)



E
内耳鍋



F
珠洲系他



1点~5点

6点~10点

11点~20点

21点以上

0 (1:1000) 50m

第23図 玄照寺跡 遺物分布状況(2)

9 ピット

本項では掘建柱建物址以外のピットについて記述の必要のあるものを取り上げた。

SA01・02

II X 18・23に位置する。直径20m～30m、深さ10cm～20cmの円形のピットが2列、約60cm離れて平行して南北方向に走る。長い方のピット列はおよそ8.5mを測る。出土遺物はなく、時期不明。

P2413・P6335・P7357

これらは古銭を出土したピットである。整理中に古銭の出土地点が不明となり、これらのピットからどの古銭が出土したか不明となってしまった。

10 遺物出土状況 (第22・23図)

製作時期の判別可能な陶磁器と、内示鍋・珠洲系他の播鉢の分布を示した。遺構の覆土より出土したのも含めて出土点数とし、2m四方のグリッド単位で遺物の破片数を示したものである。A図は13～14世紀の陶磁器で、同一個体と思われる常滑の壺(第27図62)が広範囲に分布している他は、出土遺物はきわめて少ない。E・F図の内耳鍋・珠洲系他の播鉢は時期不明の物が多く時期を区分せずを示した。

遺物は各時期を通してSD14・20・35より西側の遺構集中部に分布している。また、これらとは別にSD32以東にもわずかではあるが遺物の分布が認められ、調査区以東の遺構の存在が考えられる。

第3節 中世・近世の遺物

1 焼き物 (第24図～第27図)

青磁(1・2・51～53) 1・2は13世紀の青磁である。2は連弁文である。

51～53は15～16世紀の青磁である。51は連弁文。53は青磁を再利用したもので、高台脇を割り、割取った部分の面を落とし、その陵が摩耗している。利用法は不明。

古瀬戸(4・5) 14世紀の古瀬戸製である。4は釉が剥げてしまった唐草文の瓶子、3は卸皿である。

常滑壺(62) 13世紀の常滑製玉縁口縁の壺で肩部にへら描き文字「彌」が刻まれている。横付け耳部分が肩部にみられる。古瀬戸の四耳壺の影響であろうか。

摺り鉢(66～75) 66・67は珠洲焼きの摺り鉢である。66は口唇部におろし目の波状文を巡らせている。口唇部は平らである。内面には摺り鉢のおろし目がみられないが、15世紀の珠洲焼きの摺り鉢と思われる。67は片口の摺り鉢と思われる。口唇部が面取りされている。73・75は13～15世紀の在産地である。73は口唇部が面取りされている。73も75もおろし目が疎らである。68～70・72・74は産地不明の摺り鉢である。74は非常に櫛描が少なく口縁は平らで単純に開く器形である。71は口縁部に暗赤褐色の釉が見られている。71は72の口縁下に段を設け異形の受け口状になっている。櫛は9本単位でやや散漫に摺り鉢の櫛描が行われている。68と69は口縁部にかえりがみられる。68は90度近くかえりがみられる。69は櫛描と空白の部分が交互にみられる。櫛は9単位である。70は櫛描が密であるが1単位は幅がある。口縁部は垂れるように外反している。

内耳土器(63～65) 野村一寿氏の分類に従えばII類に相当する(野村 1990)。口縁部の内面に横ナデを行い、体部が内湾して立ち上がり、口縁が内湾気味である。63と64はほうろく型と思われる。分類に従えば15世紀中葉から16世紀前葉のものであろうか。

青花と古伊万里焼（6～13・15・18） 6～9は青花製である。6～9は16世紀前半のものであり、12は16世紀後半の折り縁の碗である。6は扇文であるが、他は草花文である。10・11・13・15は16～17世紀の青花か初期伊万里製の染め付け碗である。10は高台内に「大明成」の文字が描かれている。

伊万里焼（14・16・17・19） 17は「成化年製」の文字が高台内にみられる。19は赤絵の油徳利である。

唐津焼き（20～36） 20～22は16世紀後半のもので、釉は灰緑色釉である。24・25・27は16世紀末～17世紀初頭のもの。24は砂目積み痕がみられる。24・25は灰緑色釉、27は褐色釉である。26・28・29・31・33は17世紀前半のものである。26・28・31・33は灰緑色釉であり、29は鉄絵の一部がみられる。30は17世紀中頃のものである。見込み部分に高台痕が見られ、内面に鉄絵の草花文が描かれている。32は17世紀後半のものである。緑黒色釉である。高台内に「製」の墨書がみられる。34は17世紀前半から後半のものである。内面黒色釉である。35・36は18世紀の唐津焼きである。35は褐色釉が口縁部の内側から外面にみられる。36は輪髻皿で、内面は緑色で、外面灰緑色で内外の色分けを行っている。

肥前焼き（37～40） 18世紀の肥前系焼き物である。釉は灰白釉である。

瀬戸美濃製（41～50） 41・42・45・46・48は16世紀後半瀬戸美濃大窯製である。46・48は鉄釉、他は灰緑色釉である。41・42は折り縁削ぎ菊皿。48は見込み部に印花文がみられる。43は17世紀の瀬戸美濃製と思われる菊皿丸のみによる削ぎで、緑釉。44・47・49・50は18世紀の瀬戸美濃製陶磁器である。44は茶色の鉄釉。47・49は褐色の鉄釉である。50は透明釉。44・47・49は天目茶碗と思われる。50は花瓶の台脚部分と思われる。

近代以降の遺物（54・55） 54は小杯、55は折り縁染め付け皿。

時期不明の遺物（56～61） 56～59はロクロビキのいわゆるカワラケ（中近世土師皿）である。完形品になるものがなく、小型のもの56とやや大きめのもの57～59に分けられる。60は土師質の壺である。61は土師質小鉢の脚と思われる。

2 石塔（第28図・第29図）

(1) 五輪塔（第28・29図1～45） 玄照寺跡の五輪塔は四石五輪で造られ、すべて安山岩製である。空風輪、火輪、水輪、地輪はそれぞれ次のように分類する。

空風輪（1～6）

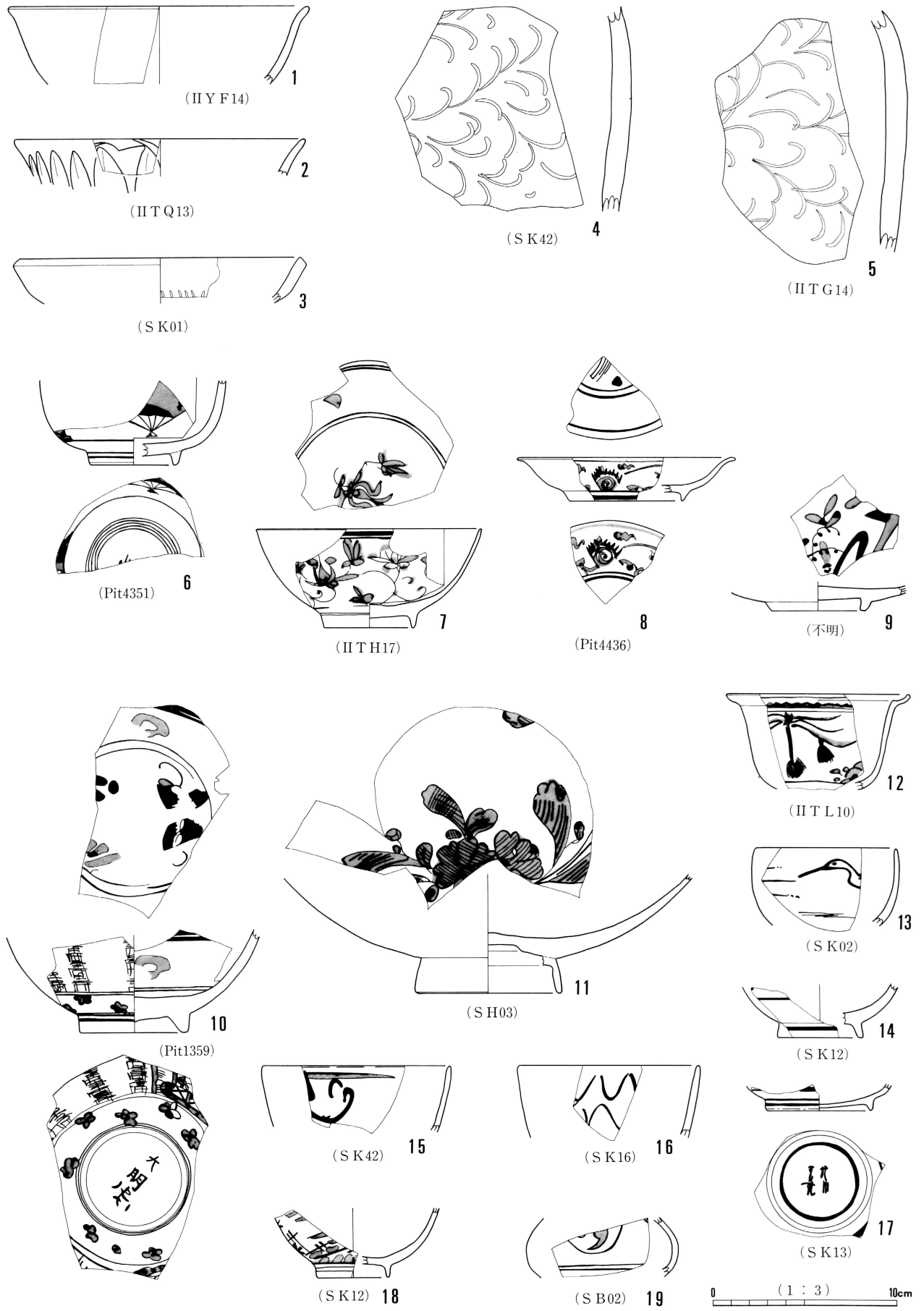
- A 空輪が風輪よりも小さく頂部が尖ったもの（2）
- B 小型で空輪と風輪の境目のくびれが少ないもの（6）
- C 空輪のキュウピー頭型のもの（1・3～5）

1・2には風輪の底部に凹がみられる。

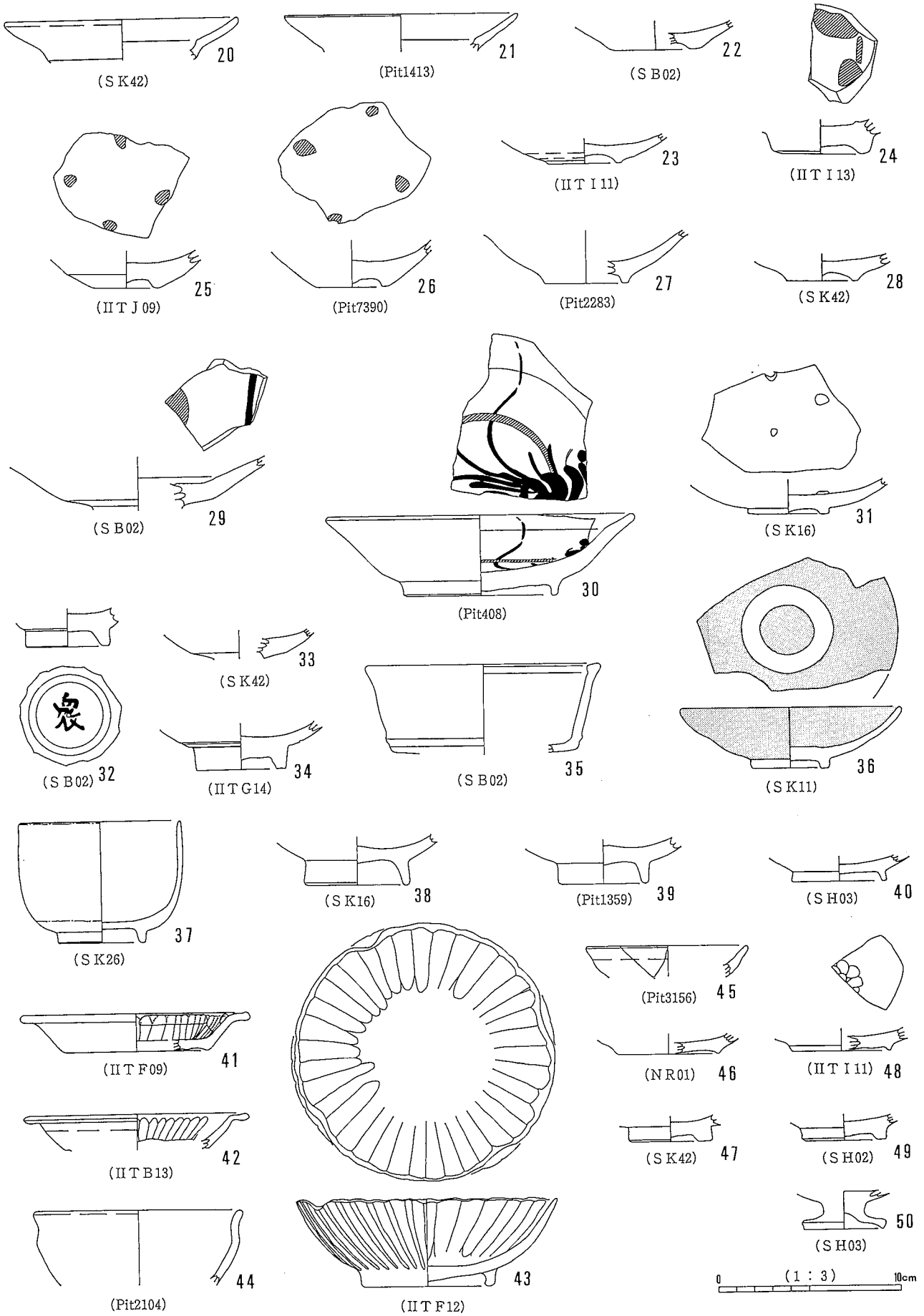
火輪（7～25）

- A 屋根流れが直線的なもの
 - 1、屋根の低いもの（10）
 - 2、屋根の高いもの（7・8・17）
- B 屋根流れが弓なり軒の傾斜の少ないもの
 - 1、小さいもの（20・22）
 - 2、大きいもの（12・13・14・16・18）
- C 屋根の流れが弓なりで、軒の傾斜が急なもの（9・11・15・19・23・25）
- D 軒の傾斜が急で、軒の高さが高いもの（24）

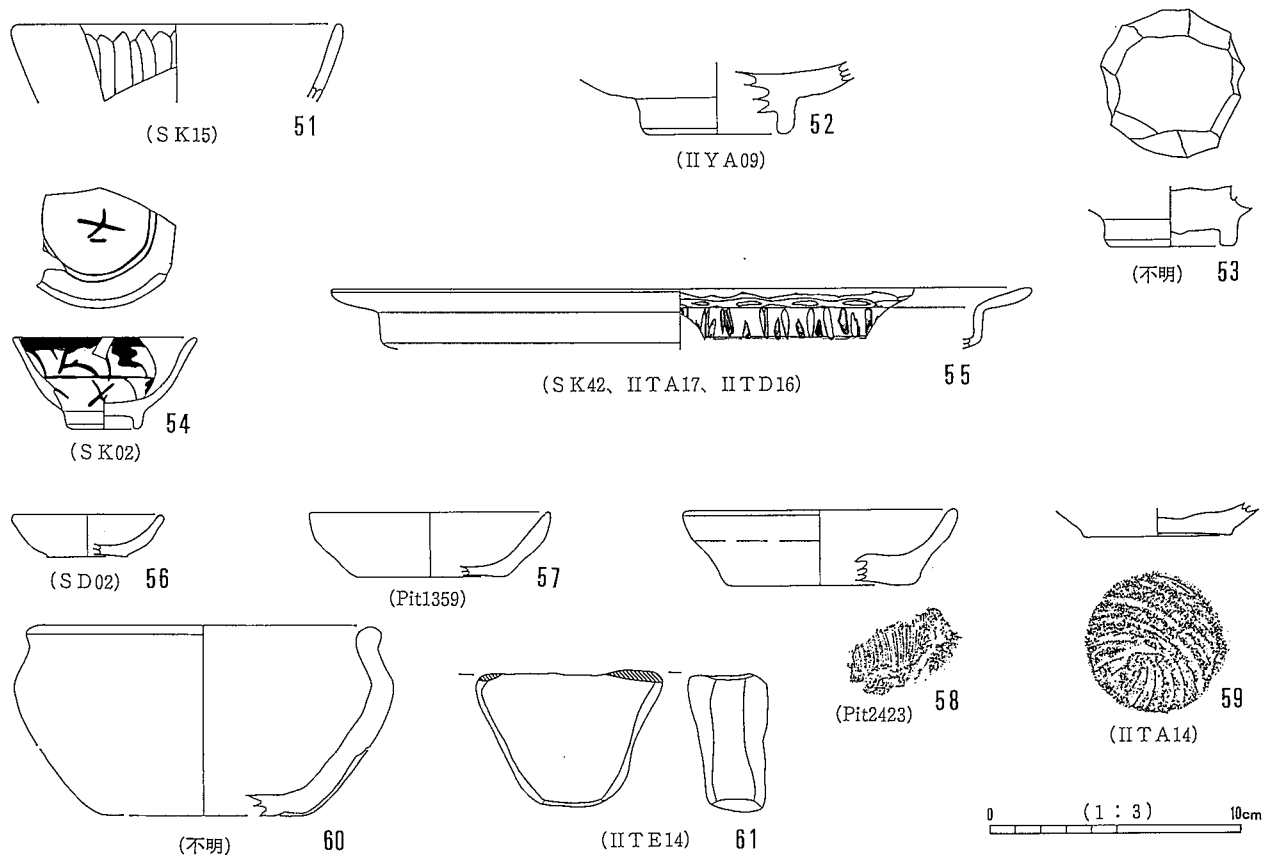
その他火輪の天井部に浅いくぼみのあるもの（7・8・23）、火輪の底面に浅いくぼみのあるもの（11・



第24図 玄照寺跡 出土焼物(1)



第25図 玄照寺跡 出土焼物(2)



第26図 玄照寺跡 出土焼物(3)

19)、火輪の天井部に風輪を差し込むための柄穴のあるもの (12)、火輪の底面の凸のもの (7・8・10・13・14・17・18・25) などがある。

水輪 (26~31)

A 高さが低く、中央に最大径があり、横幅がないもの

- 1 全体が小さいもの (27・31)
- 2 全体が大きいもの (30)

B 潰れた算盤玉のような形態のもの (29) (高さがなく横幅があるもの)

C 高さがあり横幅がないもの (28)

D 上部の方が底部より幅がなく火輪を差し込める円筒柄穴があるもの (26)

AとC類は上部と底部に凹がみられる。B類は上部のみに凹がみられる。

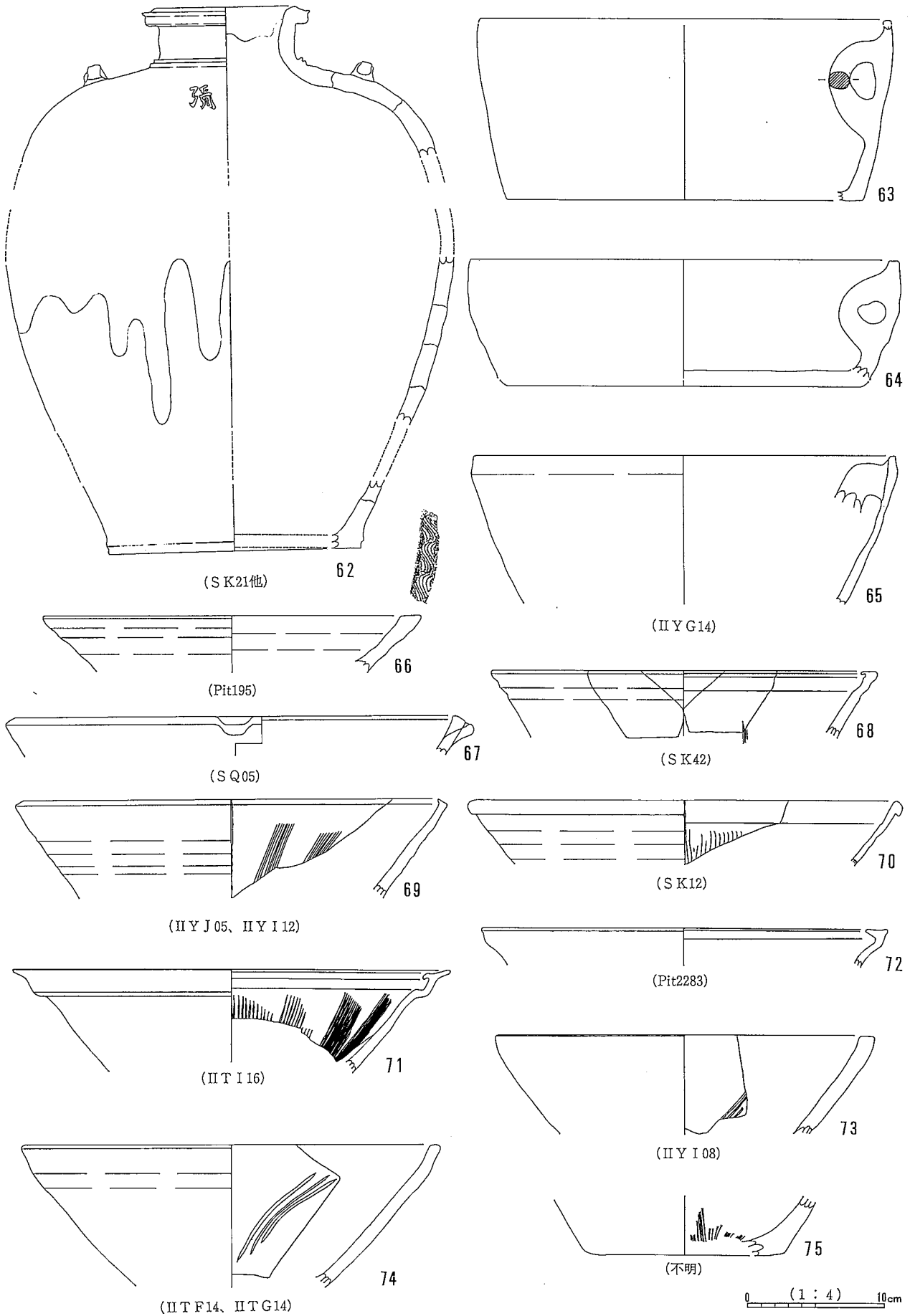
地輪 (32~45)

A 横幅に対してやや高さが低いもの。大きさ別に小さいものをA-1 (32)、中くらいのものをA-2 (42)、大きいものをA-3 (44) とする。

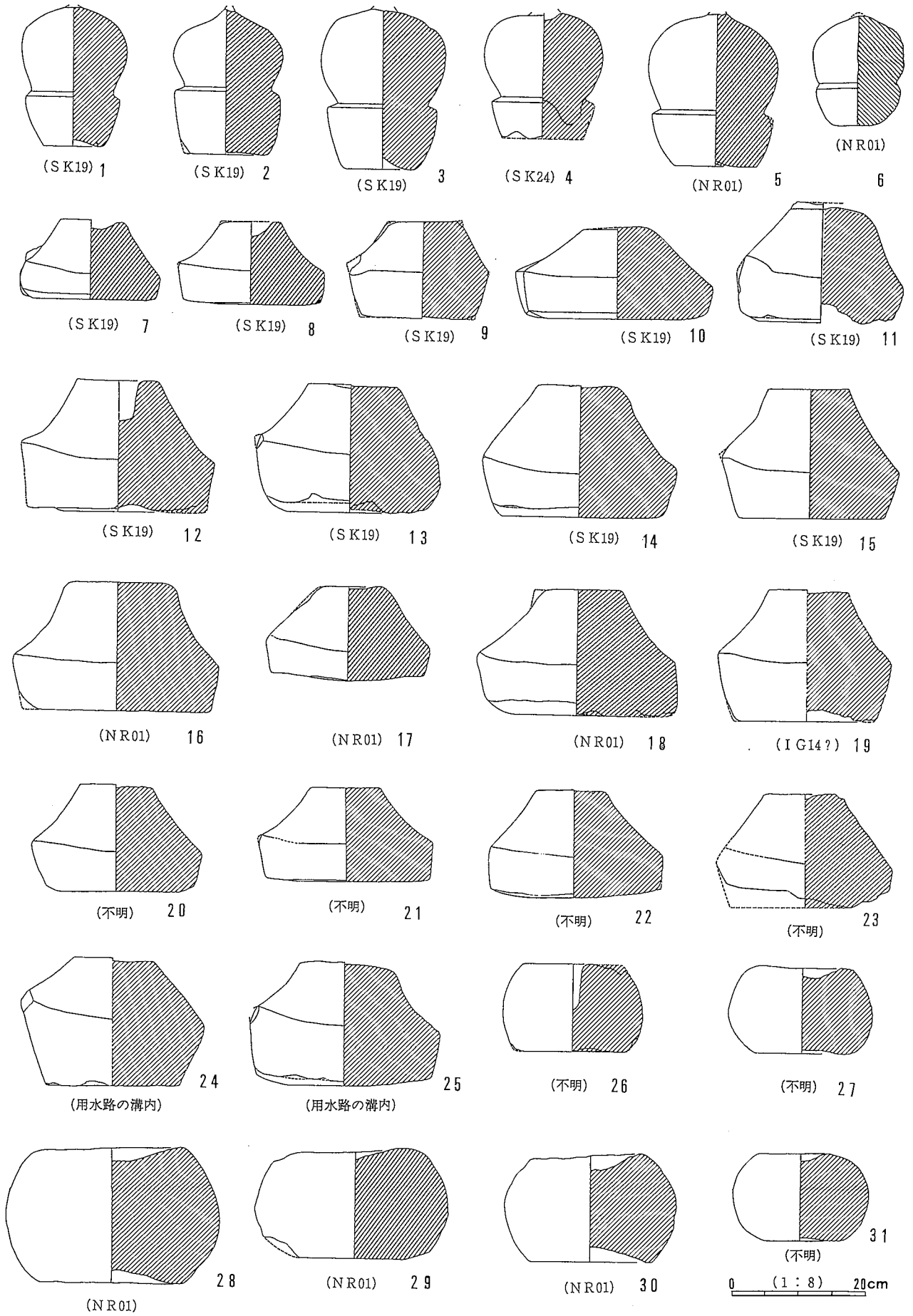
B Aに比べ高さに対して横幅がないもの。大きさ別に分類し、小さい方からB-1 (41)、B-2 (33)、B-3 (38)、B-4 (35・36・40・41・45)、B-5 (43) とする。

五輪塔は形状から中世前半のものの中世後半(室町時代)のものと大きく二分類される。地輪のAとBの違いが中世前半期と中世後半期の違いとなってくるものと思われる。空風輪ではAとBが前半Cが後半、火輪ではAとBが前半CとDが後半、水輪ではAとBが前半CとDが後半になるとおもわれる(註2)。

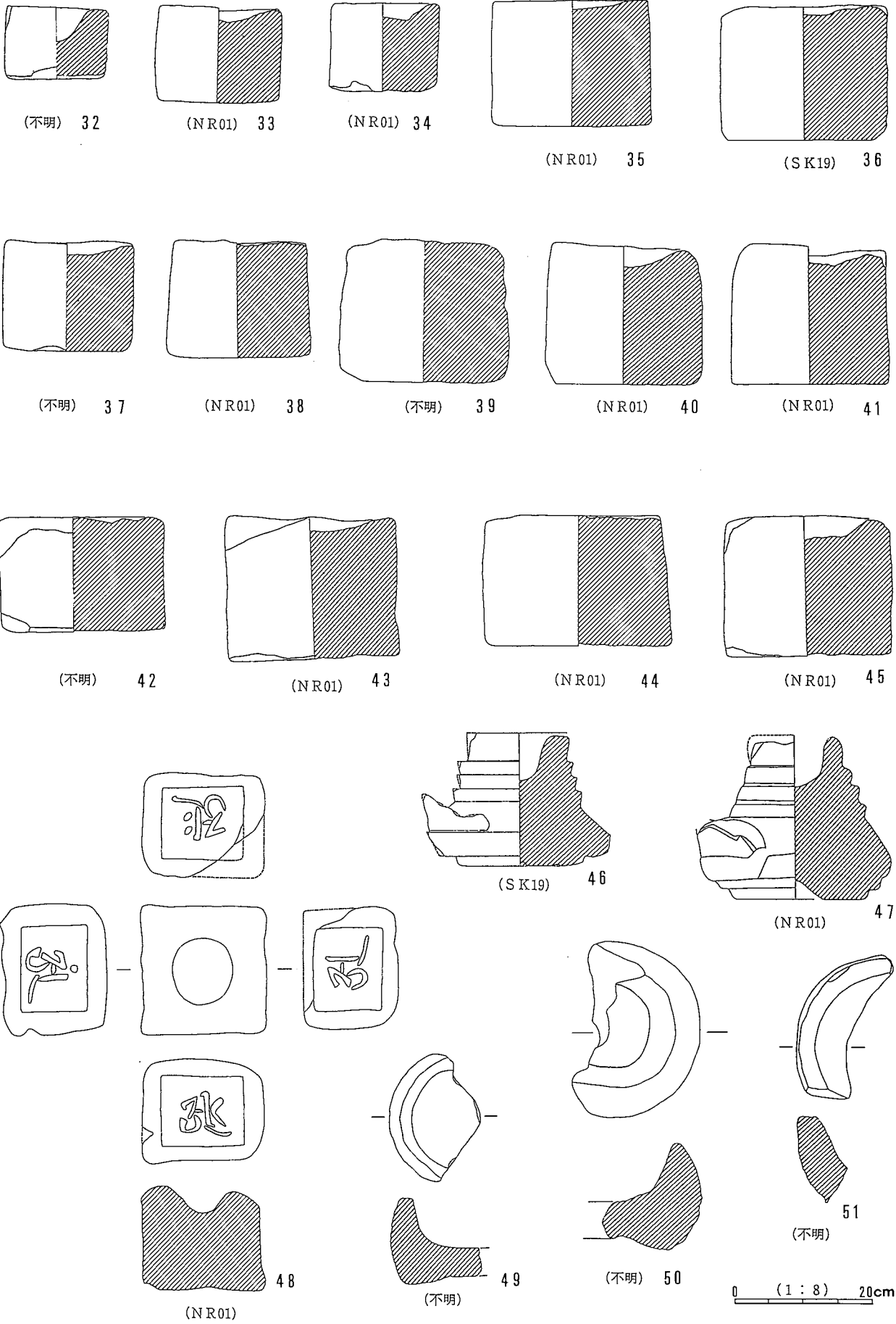
(2) 宝篋印塔 (第29図46~48) 3点とも安山岩製である。宝篋印塔は鎌倉時代中期から室町時代以前



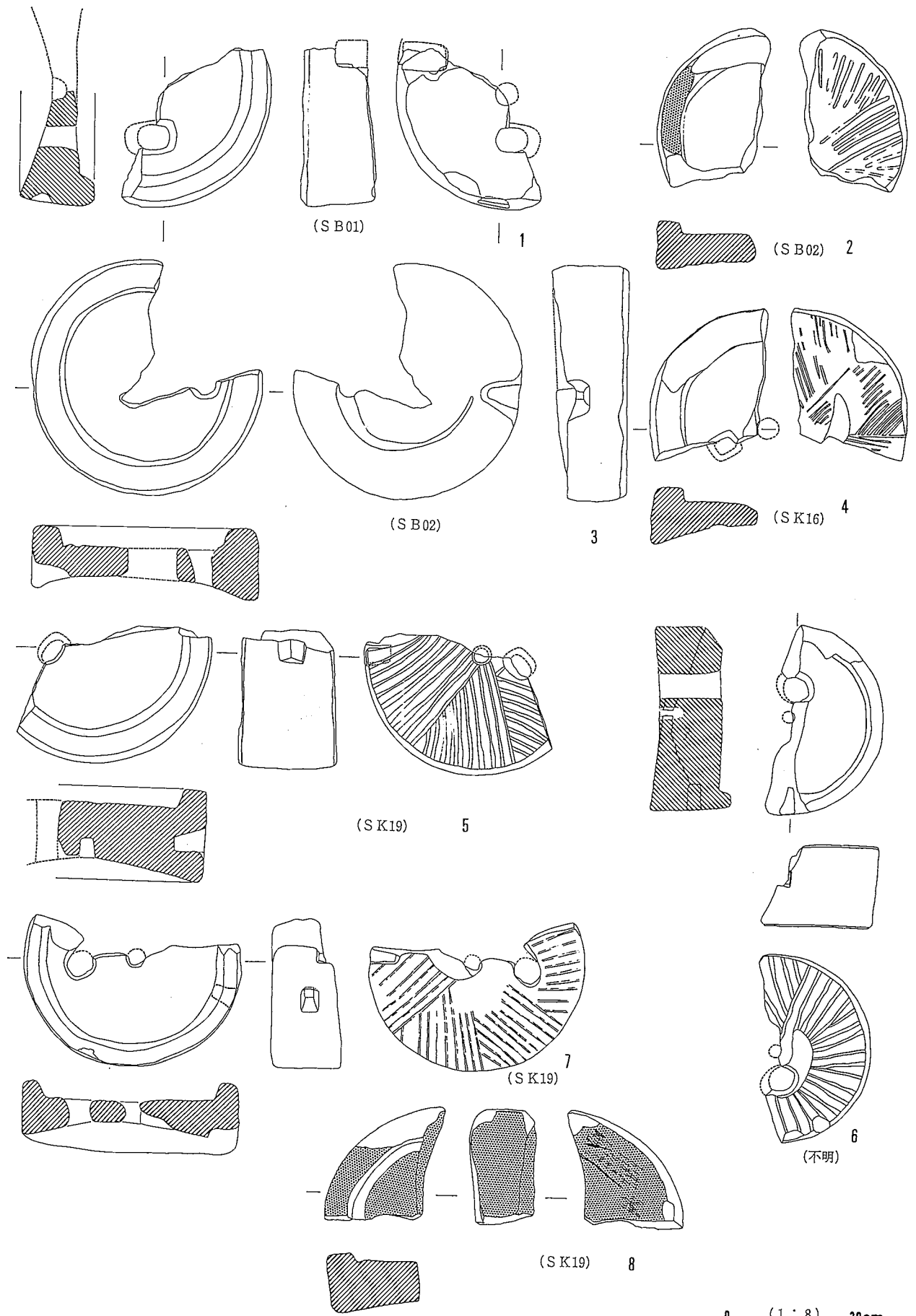
第27図 玄照寺跡 出土焼物(4)



第28図 玄照寺跡 出土五輪塔他(1)

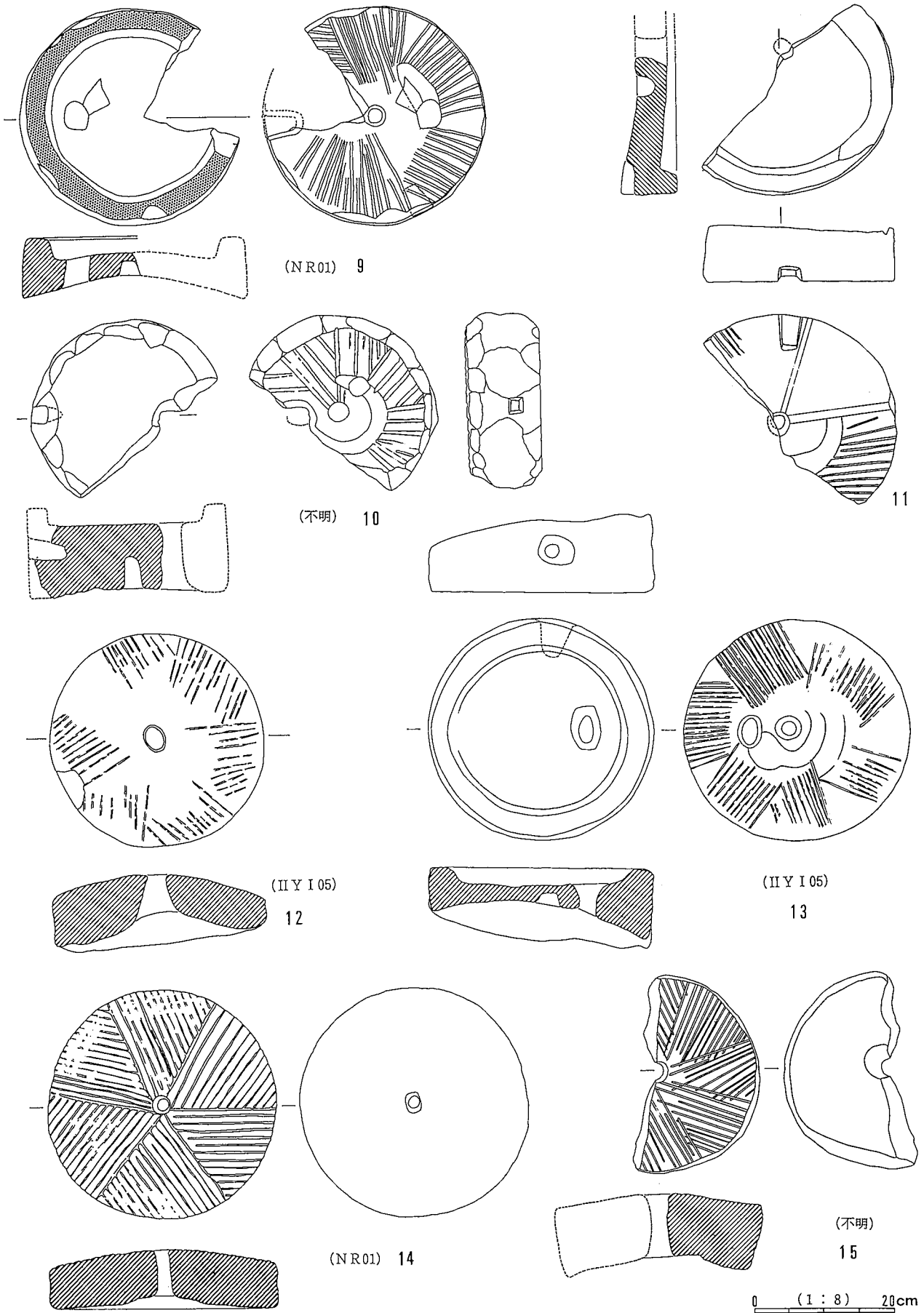


第29図 玄照寺跡 出土五輪塔他(2)

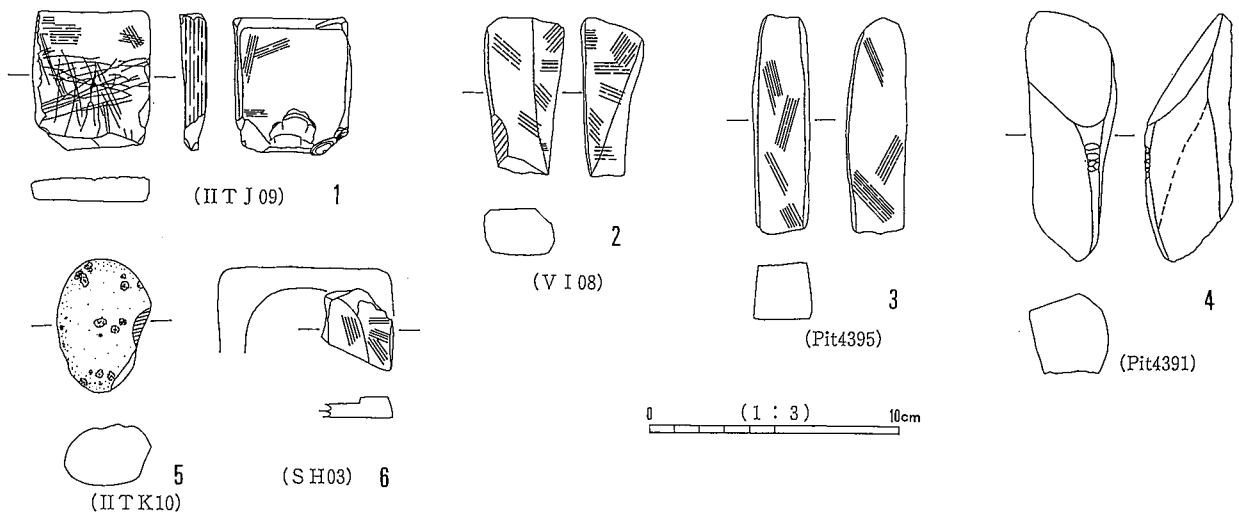
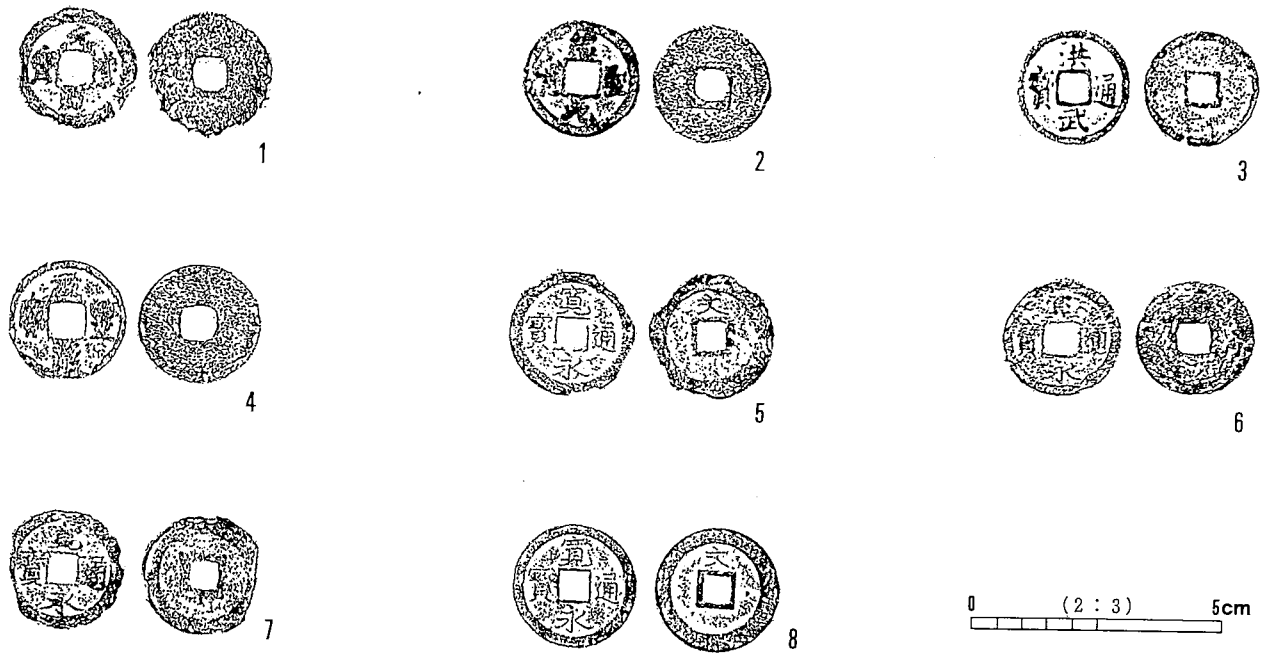


0 (1:8) 20cm

第30図 玄照寺跡 出土石白(1)



第31図 玄照寺跡 出土石白(2)



第32図 玄照寺跡 出土古銭・石製品

に発達した造塔信仰から生まれたものとされる。

笠部分 (46・47) 隅飾の部分が47は欠損している。46と47の笠の上面には柄穴がみられる。47には底面に凹がみられる。隅飾の部分が欠損しているのではっきりした結論は出せないがやや外側に隅飾が開き、中世後半期のものと思われる^(註3)。

塔身部分 (48) 五輪塔の地輪のB-3に大きき形状は類似する。四面に梵字が刻まれている。梵字は東西南北を現していると思われる。梵字の回りには月輪がみられないが、塔身の内側を方形に削りその中に梵字を刻んでいる。上面には大きな深い凹がみられる。

3 石製品（第29図～第31図）

(1) 石鉢（第29図49～51） 全点安山岩製である。

(2) 石臼（第30図・31図1～15）

上臼（1～11・13） 完形品として残っているものが少ない。推定口径は29cm～36cm前後のものがみられ、32cm～34cm前後のものが多い。石材は安山岩である。目なし臼は2点（1・3）認められる。大井城（佐久市教育委員会1986）の例と同様、目なし臼は「ふくみ」が深く、平坦な「すり合わせ部」をほとんど有しておらず、「原料の粉碎化に際し特異な用途に使用された異質な臼である」とする点は、個々でも同様である。

挽き手穴が確認できるものは10個体ある。挽き手穴が上臼側面の中央にあるものは、6個体あり、そのうち1個体はすり合わせ面直上と側面中央の2ヶ所に認められる（9）。これは長時間の使用によりすり合わせ面が摩滅し薄くなったため、挽き手穴としての機能に支障をきたし、新たな挽き手穴が開けられたものと思われる（佐久市教委、1986）。

溝の数や分画は破損しているものが多く正確な数値を把握することができない。8分画と6分画がみられ、8分画の方が多いと思われるが分画が不均等に配分されたものが多く目数は不均一である。

10は上臼の口縁の面取りがおこなわれている。転用であろうか。また2と9の上縁部、8の上縁部や凹、割れ口面、見込み面が砥石に転用され、擦られている。

下臼（12・14・15） 安山岩製である。大きさは径が28cm～33cmである。断面形は3点とも中央部が凸面を呈しており、12は目たちの摩耗が激しく、6分画までは確認できるが、1分画分の目たちが見えない。14の目たちの分画は6分画、15は推定8分画。心棒孔は12は底面が広がったラッパ状であり、14は円柱状、15は下臼円柱形の心棒孔である。15の中心棒孔中央部に段がある。

(3) その他石製品（第32図下段）

砥石（1～4）、軽石（5）、硯（6）、石版が出土した。1は表面に深い沈線がみられる。

4 金属製品（第32図上段）

古銭47点、銅製の煙管10点、鉄釘12点、鉄製の火箸1点、火縄銃の玉2点、鉄滓2点などが出土した。古銭は1枚で単独で出土したものの他、何枚も重なって張り付いて出土したものもある。重なって出土したものは2枚重ね、3枚重ね、4枚重ね、8枚重ね、10枚重ねのものがあり、いずれも中世の渡来銭である。出土した古銭の内容については第2表の出土古銭一覧に示した。古銭の出土位置は整理時の混乱により不明となってしまった。

5 木製品（第33図）

曲物（1・2） 1は桶状の曲物である。材を2重に巻き付けた曲物で、合わせ目を長い縫い目で紐状皮材を用いて留めてある。口縁外周にはさらに幅約4cmほどの材を帯状に1重に巻き付け、合わせ目を短く紐状皮材で2列縫うように留めている。また2重に巻き付けた材の間に幅2.5cmの帯状の材を補強材として、約1周巻き付けている。円形の底板は3ヶ所側面の材に紐状皮材で縫い留めてある。底部側面の2重になった材の間に楔のような木片が3点打ち込まれている。側面の材を留める紐状皮材が緩んだための補強材であろうか。側面の帯状の材が巻かれている部分に対峙する2対の紐を通すような小さな孔が内側まで貫通する。

2は1の底部材より薄く、曲物の底板にみられる紐状皮材を通す孔がみられない。径の2/3の所に2ヶ所

補修孔がみられる。桶の底部に補修孔を穿つことは考えにくい。1と上部径がほぼ一致するため、それと組み合わせとなる蓋板と思われる。

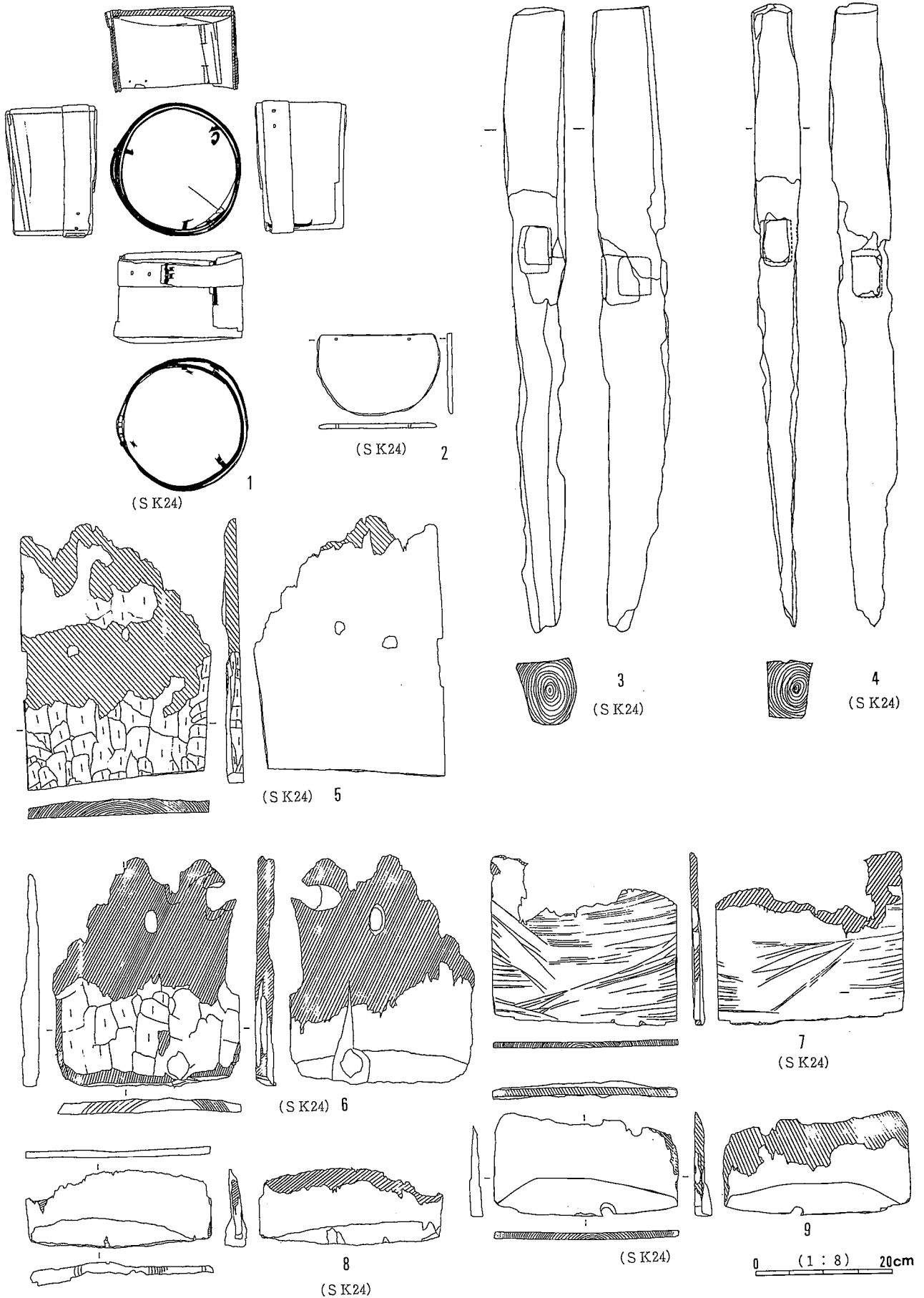
杭材(3・4) 木材の心部を用いた角材である。先細りしており、井戸の四隅で板材を支えた枠である。現状の材の中央部には十文字に方形の孔が貫通するが、二方向の孔は上下に半分ほどずれており、それぞれに差し込まれた材は交差部分で組み合わせられたものと思われる。

板材(5~9) 3・4の杭材の間にあった井戸の板材である。5・6は板状に切った材の表面と側面をノミで削っている。7は板材の表面の多くのノコギリ痕が残っている。8・9は板材を製材する際、表裏とも木口近くまでノコギリを縦挽き、最後の部分を挽き残している。ノコギリの挽き残し面は断面が厚くなっており、厚い部分は表面では弓状に残存している。このような例は非常に珍しいとの指摘があった

(註4)。

第2表 玄照寺跡 出土古銭一覧

図版番号	整理番号	銭貨名	初鑄造年	王朝名	外径(mm)	備考
	5001	元豊通寶他	1078	宋	23.5	4枚重ね(元豊通寶・熙寧元寶・景〇元寶・皇宋通寶)
第32図-1	5002	元豊通寶	1078	宋	24.6	
第32図-4	5003	元豊通寶	1078	宋	24.1	
	5004	元祐通寶他	1086	宋		3枚重ね(元祐通寶・開元通寶2)
第32図-3	5005	洪武通寶	1368	明	23.5	
	5006	永樂通寶他	1408	明		10枚重ね(咸平元寶・景德元寶・皇宋通寶2・熙寧元寶・元符通寶?・聖宋元寶・永樂通寶3)
	5007	永樂通寶	1408	明	24.7	
	5008	寛永通寶	1636		23.5	
第32図-6	5009	寛永通寶	1636		23.0	
	5010	寛永通寶	1636		23.6	
第32図-7	5011	寛永通寶	1636		24.5	
	5012	寛永通寶	1636		22.0	
	5013	寛永通寶	1636		26.1	
第32図-8	5014	寛永通寶	1636		25.0	裏面に「文」
第32図-5	5015	寛永通寶	1636		25.3	裏面に「文」
	5016	寛永通寶	1636		24.0	Pit7357出土
	5017	天聖元寶	1023	宋	25.0	
	5018	熙寧元寶他	1068	宋		8枚重ね(皇宋通寶・治平元寶・元豊通寶・元祐通寶・開慶通寶・永樂通寶・不明2)
第32図-2	5019	紹聖元寶	1094	宋	23.8	
	5020	?				2枚重ね(不明2)
	5021	?			24.5	
	5022	〇元通寶			25.2	
	5023	祥符通寶	1008	宋	22.2	
	5024	?			24.5	Pit2431出土
	5025	元豊通寶				II TA17グリッド出土



第33図 玄照寺 SK 2 4 出土木製品

第4節 玄照寺および飯田氏居館について

1 歴史地理的環境（第34図）

調査地は千曲川堤防に接する位置にあって、「飯田居館」および「玄照寺跡」として伝承、周知されてきたところであった。中・近世以降、水害にともなう集落の移転や割地慣行の存在、水運や渡船など、千曲川および松川の存在が集落および耕作地の立地を強く規制したことがうかがえる。

遺跡地は松川扇状地末端に所在する飯田地区でも最も千曲川・松川に近く、水面との比高2m～3m前後の段をもって河床面に連続する。千曲川築堤以前は、松川の流路に面する位置である。扇状地上では上流部からの水流によって浸食あるいは堆積を受け、浅い谷または尾根状の地形をつくっている。しかし、調査地は扇端部にあたり、礫をほとんど含まないシルト・砂が水平堆積し、千曲川の溢流による堆積層と考えられる。これが扇頂部からの流路によって部分的に東西方向に浸食され、末端部は松川本流または千曲川による南北方向の浸食を受けて、数メートルの浸食崖を成したものが、居館推定地周辺の段差であろう。

畑地としては適地であるが、扇頂部の松川築堤と用水整備がなければ、水には不便な立地である。しかし、遺跡地は松川・千曲川に近く、生活用水の確保にはさほどの困難はなかったであろう。現在も河川敷内には広大な畑地が広がっているが、水田は見られない。築堤以前の地形図には松川沿いの低地にわずかに水田が見られるが、現状の地形面の開田は大正期という。

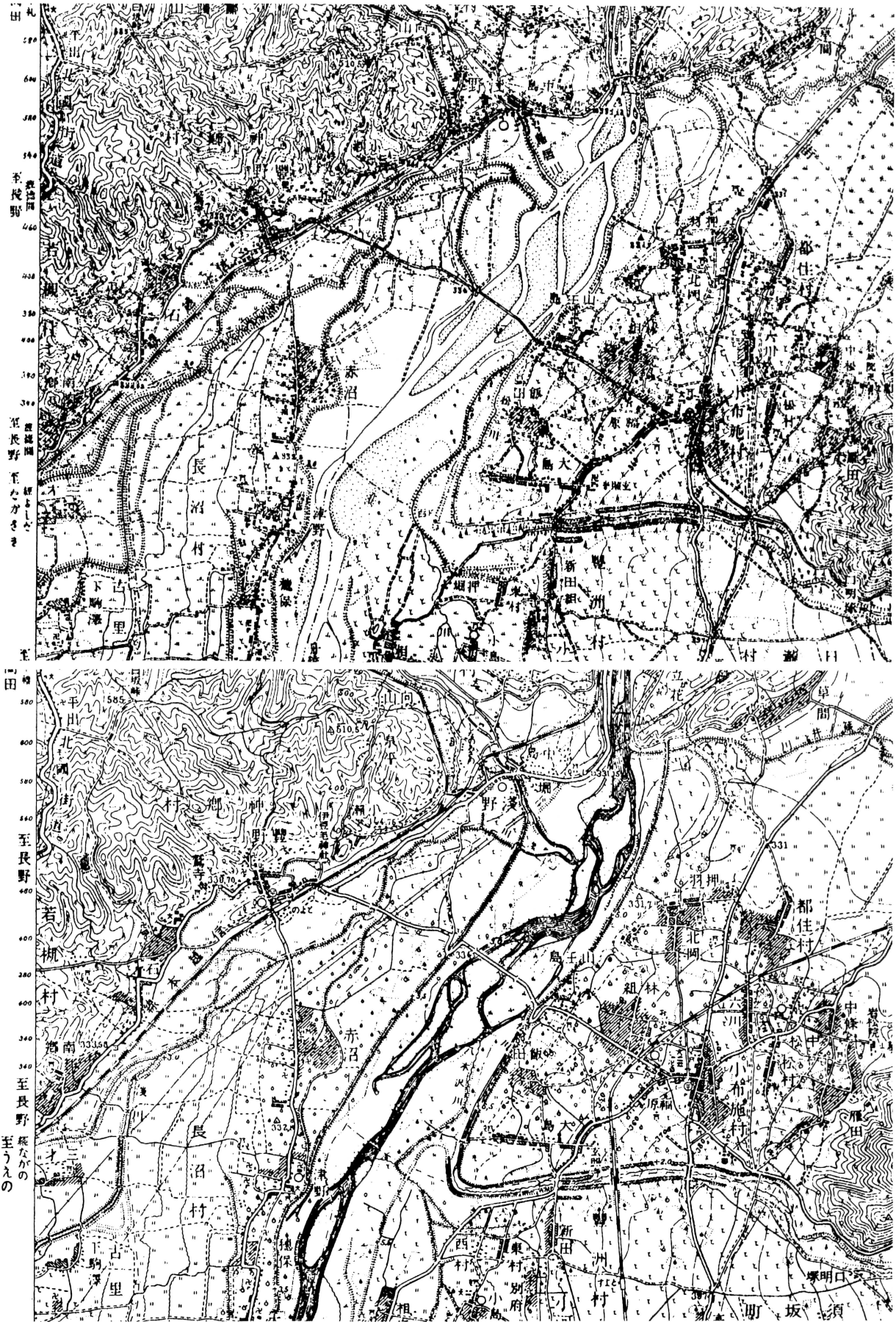
飯田居館は、長祿元年（1457）・寛正二年（1461）の諏訪上社頭役勤仕に際し高梨氏の代官として記録に残る飯田氏の居館とされるところである。飯田氏についての記録はこの諏訪上社文書に見えるのみで、その後の高梨氏などの動向、さらに武田・上杉・織田・徳川氏とのかかわりの中ではまったく登場しない。

また、玄照寺は寺伝によれば、永徳元年（1381）、現推定地に臨濟宗隨行寺として創建されたが、元祿年間の水害により、正徳年間に大島の現在地に移転したという。移転以前は飯田村の西北の千曲川畔にあって、南北七十五間、東西二百十二間という。この数字が寺地の範囲を示すものとすれば、一万六千坪にちかい面積である。

近隣では名刹として知られる現在の玄照寺は曹洞宗である。水害・火災などによって原史料が失われているため不明な点が多いが、その創建は、北方の飯田郷元神社とあわせて飯田氏居館とのかかわりの中で考えられてきた。

2 発掘調査の結果

「飯田居館」および「玄照寺跡」は周知の遺跡であったが、過去に発掘調査は行われていない。前者は千曲川築堤にあたって現状が変更された可能性があり、また、南側の外周が不明確であった。後者はその範囲を画する地表形状は観察されなかった。そのため本調査にあたり、事前の試掘が行われ、調査範囲を確定した。また、試掘の行えなかった飯田郷元神社境内地は、遷座後に工事立会を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった。それらの結果、遺構・遺物の認められた範囲で調査区域を決定した。しかし、居館および寺院として周知されていたために、試掘時の遺構の把握に際して予断がなかったとはいえない。結果論からすれば、「玄照寺跡」の調査地北側は、検出された集落と同時期の耕作地であろうし、「飯田居館」に隣接して検出された水田跡も集落と同時期のものであって、さらに南方にも埋没していることが予想される。



第34図 大正3年(上)、昭和27年(下)の地形図(五万分の一地形図「中野」部分)

「飯田居館」とされていた部分では、ほとんど遺構・遺物が検出されなかった。また、周囲の堀とされていたものも、人為的に護岸などの行われた形跡はわずかに認められたが、掘り割りそのものが人為であることの確証は得られなかった。そのため、ここが居館であることは実証されたとはいえない。しかし、規模の大きな埋没流路をいくつか検出しており、現状の堀状地形も含めて、居館にかかわる可能性も残る。一方、隣接低地の埋没水田跡は、漆椀などの出土遺物から近世後期の水田と考えられ、「玄照寺跡」地区の集落跡と存続時期が重なる部分がある。この水田跡の低地と居館跡推定地との段差は、居館外郭を示すものとされていたが、同地形が調査地外にも長く続くことから、その直接の成因は松川の侵食による自然地形と考えられ、護岸など人為のくわえられた痕跡も見出されなかった。

「玄照寺跡」では、中・近世の建物跡・井戸・火葬地および墓地、それらにともなう陶磁器類・五輪塔などを検出した。しかし、埋葬関連の遺構は存在したが、寺院跡として積極的証拠の得られた遺構・遺物はなく、ここが玄照寺跡であることも実証できない。むしろ、現在の飯田集落にまで変遷をたどり得る近世集落跡の様相を示している。

ともに従来の伝承を実証できたとは言えないが、たとえ調査地内に居館・寺院跡が存在しないとしても、埋没流路の企画性や埋葬遺構の存在から見て、今回調査地に近接してそれらが存在する可能性は小さくはない。また、今回検出された遺構のなかに、中世居館や小仏堂、あるいはそれらの一角が含まれている可能性も否定はできない。

検出された遺構の位置・方向と、調査地外の現状の道路・水路・筆境は次のような点で一致している。

「玄照寺跡」地区

- | | |
|---------------------|------------------|
| ①SD 14・20・35 | 南方の水路と道路 |
| ②SD 04の南に沿って想定される道路 | 東方の道路と水路 |
| ③SD 04の屈曲部 | 調査地南端の現水路の屈曲部と平行 |
| ④調査地北限のNR 01 | 畑の筆境と道路 |
| ⑤SD 32・33 | 畑の筆境の延長線 |
| ⑥SD 26・07など | 近接する筆境と平行 |

「飯田古屋敷」地区

- | | |
|---------------|-------------|
| ⑦SD 03・08など | 畑の筆境 |
| ⑧水田跡Aの畦畔 | 水田の筆境 |
| ⑨水田跡C～Fの畦畔の方向 | 調査地南方の筆境の方向 |

掘立建物は重複が甚だしく、規模・時期などはほとんど抽出できないが、「玄照寺跡」の柱穴群はSD 21・20・14・35と南側の現水路に囲まれた範囲に集中し、その外側には建物跡と考えられるような遺構は存在しない。柱穴がとくに多いのは、掘立建物ST 06の南西と東側であり、前者の集中域はさらに現堤防下にまで広がっているように見える。この周辺には他に見られない井戸2基が存在し、南側には道路側溝と考えられるSD 04が東西に延び、その道路に南面する宅地と考えられる。このSD 04が不自然に屈曲する部分はST 06の位置および方向にほぼ対応しており、SD 04南側のSB 02・SK 42・SH 02・SH 03なども、SD 04を挟んでST 06に対応するような位置関係にある。これらの周辺は時期を問わず陶磁器類の出土量も多く、この区画は、おそらく「玄照寺跡」遺跡の中心部であろう。しかし、柱穴の最も集中するのは西側の堤防下と思われ、ST 06が一時的には区画内の中心的建物であったことも考えられるが、井戸などとの重複からも、継続的にはより西側が区画中心部であった可能性がよい。

SD 04より南、東西溝SD 11との間には、東西2か所で数棟の建物の存在を推定できるが、重複は

道路北側ほどではない。これらは一部を除きSD11に平行する東西棟のようであり、ST06とはやや方向を変えている。さらにSD11より南、現流路との間では、3～4の小区画ごとにそれぞれ1～2棟の建物あるいは柵が認められるが、建物の立て替えによる重複は考えられず、一時期だけの宅地である。柵がさきのST06と同方向である以外、これらの建物もSD11に平行するようであるが、東西棟というより方形あるいは南北棟が多いように見える。

塚墓と火葬施設は大半の建物とは時期が異なると思われるが、柱穴の最大集中域の北東にあたるST06周辺と、柱穴の少ない調査地南東側に多く、SD01のラインより西にはない。

3 遺構群の時期的変遷

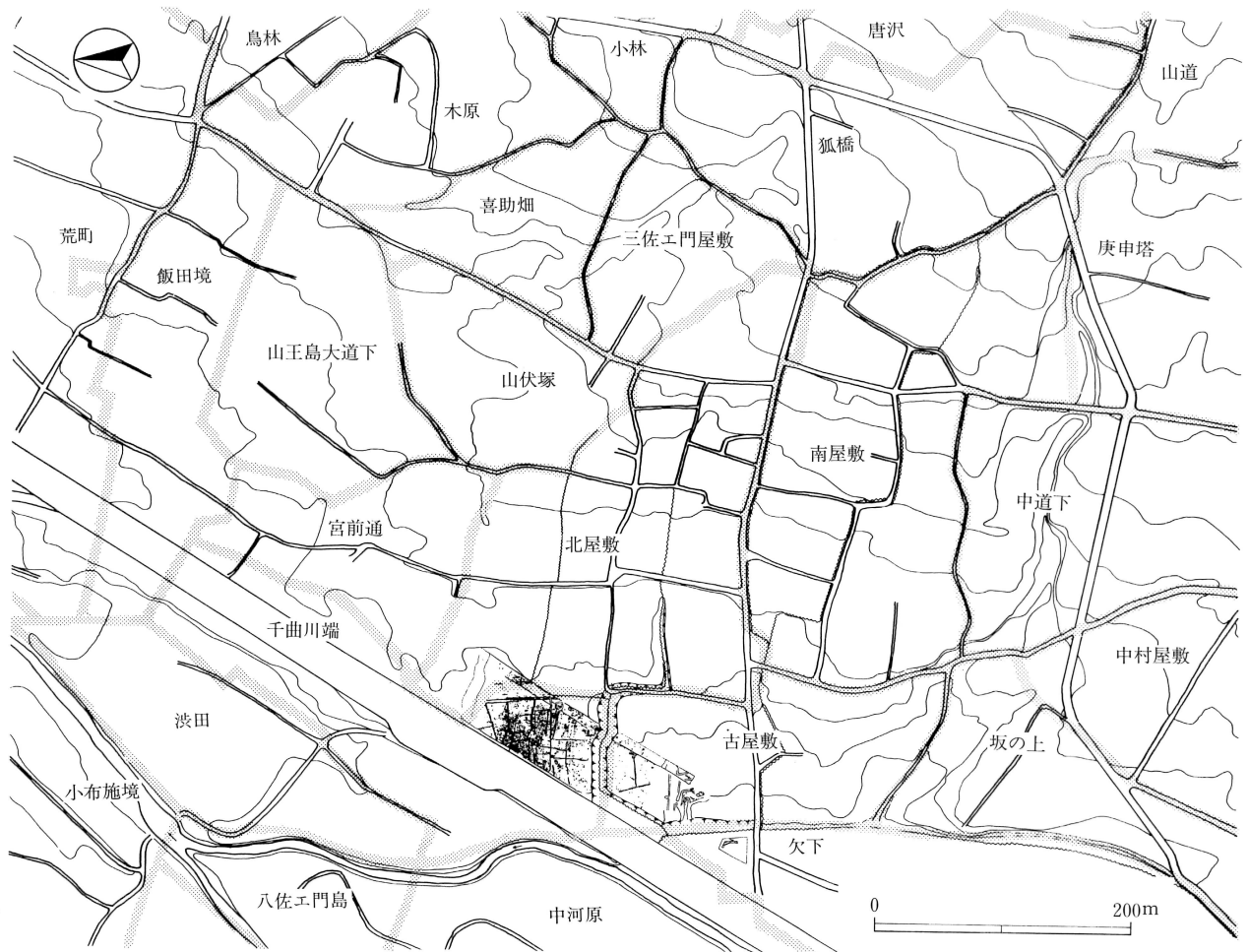
発見された遺構・遺物の機能は大きく見て三種ある。ひとつは埋葬・火葬にかかわるもの、ひとつは掘立建物・井戸・土坑・溝など集落にかかわるもの、もうひとつは地境と思われる溝・水田など耕作地跡である。これらの遺構は全体として中世以降の集落景観を構成したものと思われるが、個々の遺構の同時性を明らかにすることはかなり難しい。

五輪塔・宝篋印塔などの石造供養塔の出土数は多いが、埋葬遺構と直接の関連をうかがわせるような出土状態で発見されたものはない。これらが最も多く出土したのは流路の埋土中であり、井戸や流路の石組や護岸に用いられたものもある。東方の調査地外に五輪塔の集積が存在することからも、出土品の多くは本来、調査地より東方の扇状地上流部にあったと考えられる。また、これらの井戸や流路より埋葬関連遺構の方が古く、それに対する祭祀が断絶した後に、石材として井戸や護岸に用いられた可能性を示している。

一方、出土陶磁器類の一部や宋・明銭などには、埋葬遺構に関連するものが含まれているものと思われる。陶磁器には時期がかなりさかのぼるものが少数あり、13世紀頃と考えられる常滑の四耳壺など蔵骨器の可能性のあるものがあり、周溝をめぐらす塚墓や火葬施設の初源が、供養塔類の初源よりさかのぼる可能性を示している。墓地の起源は明確ではないが、早ければ13世紀、おそらくは14世紀ころに始まり、終末は15世紀に及ぶ可能性が大きい。また、その間に断絶があった可能性もある。そして、墓域は宅地に重複する可能性を含みながらも、総体としては、調査地内の塚墓からより東方へ拡大あるいは移動したものである。同様の動きは近世以降の集落の動向にも認められ、この墓域が集落から隔絶されたものではなく、(寺院なども含めた)集落に密接にかかわって存在したものであったことがうかがえる。また、「玄照寺」の寺伝に言う創建の時期とおおよそ一致することも注目される。

供養塔が井戸や流路の構築材として転用されるには、その供養に対する意識が薄れていなければならないと思われる。そのためには、洪水などによる土地利用の変化だけでなく、ある程度の時間的経過が必要であろう。南北の流路によって建物群の分布が画されることから、流路と大部分の建物跡はほぼ同時期と思われる。建物群周辺の出土遺物は、さきの15世紀以前のものを除けば、16世紀後半以降のものが多く、その頃から宅地化が進んだものと思われる。井戸の存在は宅地化を示すものであろうが、周辺は表流水の利用も比較的容易と思われる。

井戸SK19・SK24の状況は宅地化の起源を考えるうえで興味深い。前者は石組み井戸で、五輪塔・宝篋印塔を用いている。後者は方形木枠の井戸であるが、遺構・出土遺物の形式、埋没過程から、前者よりさかのぼるものと思われる。この井戸は、宅地化の初源を示す可能性があり、また、石組み井戸も含めて、表流水利用の可能な立地点に、かなり立派な造作の井戸が造られたことには特別な意味があるものと思われる。しかし、この井戸も埋土中位に五輪塔が投棄されており、さきの墓域としての意識が失われようとする時期からそれほどさかのぼるものとは思われぬ。むしろ、この投棄を五輪塔群の片付け行為と



第35図 大字飯田字境

考えることも可能で、墓域から宅地への転換が計画的に行われたことを示すものかもしれない。いずれにしても、宅地化の開始は15世紀にはさかのぼらない可能性が強いであろう。

次いで、出土遺物には17・18世紀のものが多いが、その間、集落が継続していたか断絶があるか明確ではない。しかし、遺構・遺物分布の継続性からすれば、盛衰はあるとしても集落としての継続性を認めることができよう。遺構群が検出されたのは、主に字千曲川端および字古屋敷の範囲でもある。多くの溝の方向および位置は、現状の地境との関連をうかがわせ、その一部は近世以降の耕作地の境界を示すものと考えられる。しかし、現在の飯田集落では、宅地と耕作地はほぼ同一の原理によって区画されており、現在の耕作地の境界が、古い宅地境さらには集落形成以前の土地利用に起源を持つものである可能性は否定できない。溝と掘立建物群は、方位を一致させるものが多く、建物が存続した間、現状の地境とほぼ同様な区画が存在しており、それが検出された溝に示されている可能性は強い。また、溝はわずかに方向を変えるものが重複しており、その存続期間中に区画の変更があったことがうかがわれる。この重複は主に宅地から耕作地への変化の中で、区画と方位の変更が行われたことを示すものであろう。変更の主要な原因は千曲川による水害であろうが、その意味での断絶はあるとしても、この区画・建物跡に示される原理は近・現代の宅地・耕作地に受け継がれている（第35図）。

4 「飯田居館」について

前項までの検討からすれば、これまで現況の地形の観察から「飯田居館」とされてきたものは、いわゆる中世城館といえるような遺構ではない。しかし、下層で見出された堀が居館の一端を示すものであるとすれば、推定されてきた居館に類するものが埋没している可能性はある。そして、検出状況からすれば、その形状は地表形状にはまったく表れていないものと考えられる。隣接の「玄照寺跡」の建物の多くは、近世初期の一般的農業村落のそれであろうが、その初源期の建物、宅地化以前と考えられる埋葬地にかかわる遺構・遺物は、供養塔・陶磁器などの質・量から見て、上層農民以上の階層になるものであろう。その点では、居館に類する宅地が近在する可能性を示している。

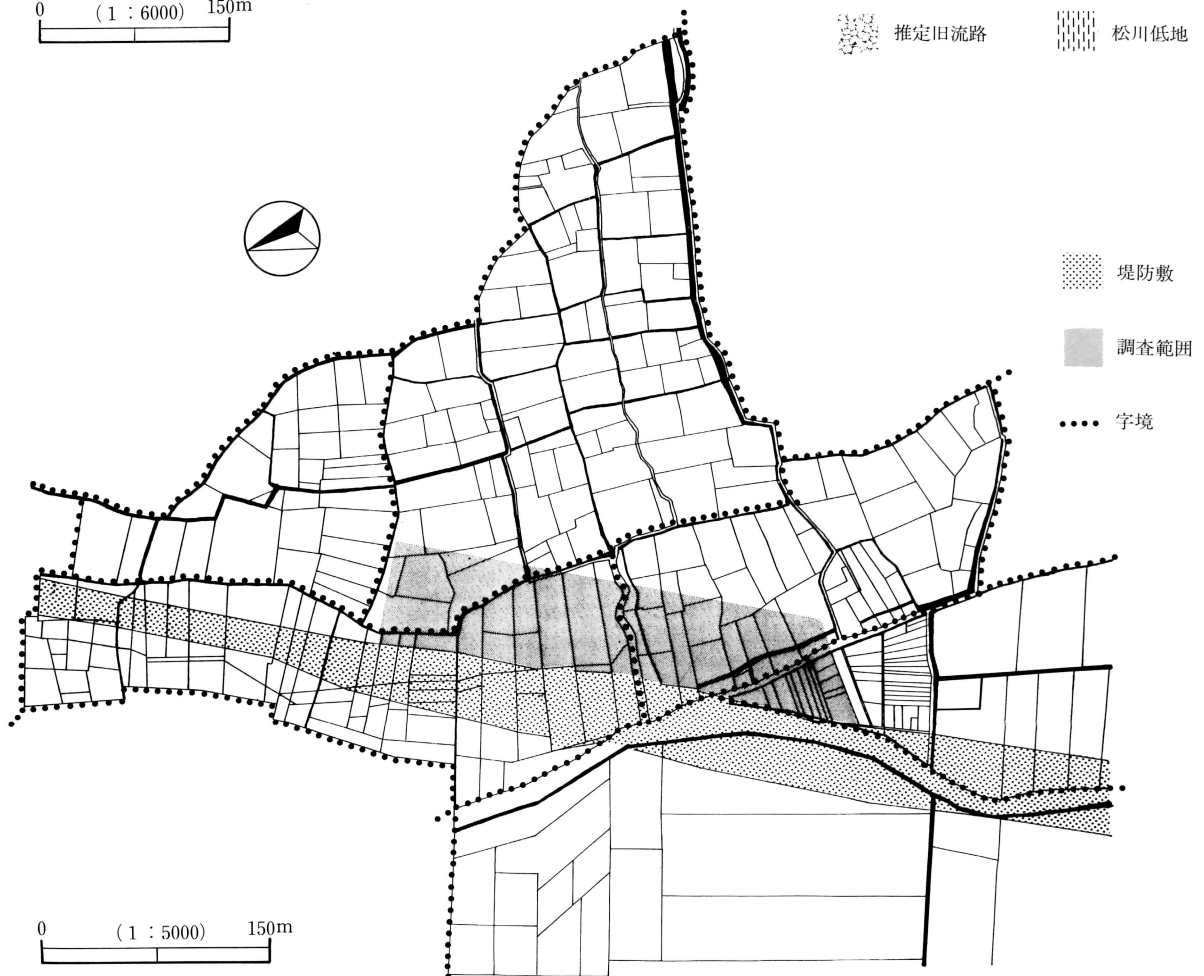
いわゆる飯田氏は姓と地名の一致から、高梨領狩田郷内飯田の在村領主と考えられてきた。しかし、各郷村における高梨氏の代官として『諏訪上社御符礼古書』に登場する者のうち、その郷村を姓とする者は他に見えない。つまり、その郷村の居住者がその代官を勤めたとはかならずしも言えない。また、以後の武田氏安堵状などにも飯田氏は登場しないので、高梨氏と周辺国人との争乱の過程で、あるいは高梨氏の没落とともに16世紀半ばころまでに没落したものか。あるいは本来、戦国大名による安堵状の発給対象とならない階層であったのか。文献記録に表れる飯田氏は、高梨氏や井上氏のような国人領主層よりも下層の武士であったことがわかるのみである。そこで、今次調査で見出された遺構・遺物を検討し、文献記録とどう結びつくのか考えてみたい。

現在の飯田集落は、小布施扇状地の扇頂部から放射状に延びる道や用水とそれに直交して等高線方向に結ぶ道に画されて、ほぼ方形を示す区画を基本としている。また、周囲の畑地も同様である。河川敷の畑地は、方向はほぼ同様であるが、東西方向に長い区画が多い。この狭長区画は近世以降受け継がれてきた割地慣行の痕跡と思われ、集落の立地する扇状地より低く、千曲川の増水の影響を直接受ける部分に見られる(第36図)。

これに対して、扇状地上の道や畑境から想定される方形区画のなかには、居館跡とされている区画とほぼ同規模の区画をいくつも指摘できる。これらの区画範囲の中に居館跡が存在する可能性がないとは言えない。しかしながら、中世に始まる耕地・居住地の開発が方形区画を基本として行われた例は多く、この場合もことさらに居館を想定しなければならないわけではない。現状では、中世以降の開発によって形成された地割を、文献に登場する飯田氏に短絡した結果、その「居館」と誤認したものがこれまで言われていた「飯田居館」と考えたい。もちろん、その開発に「飯田氏」が主体的にかかわっていた可能性はつよいが、それがどのような住居を構えていたかは不明であるし、飯田村が千曲川西岸から移転したといわれることから、かならずしもその居住地为現状の飯田地区内に求めなければならないわけでもない。

一方、これらの方形区画のうちいずれかが居館の痕跡を示すもので、それが近世以降も受け継がれて、現在に至っている可能性も考えられる。しかし、たとえ実際に遺跡地周辺に居館的なものが存在するとしても、それが文献上の飯田氏の居館とも言えない。居館に関してはまったく不明確であるが、塚墓や供養塔さらには井戸や一部の建物跡は、在地領主層の造営になるものとして、近隣にその居住地があることを傍証するものとも見ることできる。そうだとすれば、地表形状から居館の位置を明確には指摘できない現状では、大型の堀と土塁に囲まれた方形区画を基本とする居館とは異なる屋敷地も想定しておかなければならない。

その場合は、今回の「玄照寺跡」地区で見出された遺構群にもその可能性があることになろう。遺構分布域を画す南北の流路間がおよそ一町である点も無視できない。ただ、これらの建物群の大半は16世紀後半以降と考えられるものである。さきの検討からすれば、飯田氏が文献に登場する時期(15世紀半ば)ま



第36図 玄照寺跡・飯田古屋敷遺跡 周辺の地形（上） 地境（下）



玄照寺跡の建物郡の分布 (推定)

第37図 玄照寺跡・飯田古屋敷遺跡 地境と遺構分布の推定

でさかのぼる可能性は、最も古く見積もった場合であり、それは宅地化の初源でもある。

飯田古屋敷地区の下層で見出された埋没流路は、堀跡と考えられていた現状の堀切地形と規模・方向が似ているが、これら全体が一定の区画を囲むようなものであるかどうかははっきりしない。また、今回調査は、その区画の末端を調査しただけであって、区画内の状況はほとんどわからない。堀の掘り込み面と玄照寺地区の建物検出面の土層対比は直接にはできないが、両地区における土層堆積の自然的条件がそれほど異ならないことを考えると、両者はほぼ対応するように見える。そのうえ、埋没流路からの石造供養塔類の出土状況は玄照寺地区とほぼ同様であって、これらの埋没流路の一部は井戸SK24と同時期またはわずかにさかのぼる時点で、溝としての機能を有していた可能性がある。そうであれば、玄照寺地区に建物が造り始められたころ、その南に隣接して大規模な堀に囲まれた区画が存在していた可能性があるだろう。また、居館のいわゆる角切りの痕跡を残すものとも考えられるような地境や水路の屈曲が周辺に見られ、これらとの位置関係が相互に無関係ではなさそうに見えることも注意される。

この埋没流路の位置・方向は筆境とほぼ一致しており、中世以降に松川の浸食が進んで浸食崖が東方に後退した姿が現状の段差であるとするれば、南北一町の方形区画を想定することも不可能ではない。また、調査地より東側にも、これまで居館と考えられてきた位置に、それよりひとまわり小規模な五十間四方程度の区画を想定することもできる。これらの埋没流路は、埋土の状況や近接して平行するありかたから、数次にわたる埋没・掘り直しが考えられ、継続的にこの区画が維持されたことがうかがえる。その期間は、文献上の飯田氏の時期に一致するといえるかもしれないが、玄照寺地区が宅地として安定する16世紀後半以前には完全に埋没していたものと思われ、以後の古屋敷地区は宅地化することはなく、現在に至るまで耕作地であったと考えられる（第37図）。

5 「玄照寺跡」について

「玄照寺跡」周辺は現在の飯田集落周辺の方格地割と以北の方格がやや乱れる地区、以西の割地慣習を示す長方形地割との中間的地区である（第37図）。発掘区の南北両端の流路外縁間の距離はおおよそ130mほどであり、玄照寺（隨行寺）寺伝に示す南北七十五間、内縁間では約一町にちかい。同じく寺伝の東西二百十二間という数値は伽藍規模としては広大に過ぎるが、西隣の字中河原まで含めると南北七十五間程で、東西百五十間以上の筆境に示される区画を指摘できる。調査地はその東端にあたると思われる。所伝が真実とすれば、付属寺地も含めての範囲かもしれないが、それでもなお疑念を持たざるを得ない広さである。

調査地は字千曲川端の南端にあたるが、隨行寺は「千曲川端」に所在したという。これが単に地形上の位置を示すものでなく字名であるとする、字千曲川端の範囲は南北約400m、東西約90mの長方形にちかく、方位は異なるものの、規模はさきの所伝とほぼ一致する。寺伝の記載は、寺地の範囲ではなく字千曲川端の広さと、その範囲の中に隨行寺が存在することを示している可能性がある（第36図）。

建物跡が検出された範囲は字千曲川端の範囲にほぼ限られており、隣接の字宮前通・字北屋敷・字古屋敷には遺構がきわめて少ない。もし字千曲川端の全域に建物跡などの遺構が存在するとするならば、「玄照寺跡」の今回調査区は、その南東端にあたることになる。字千曲川端の大部分は現堤防敷となっており、今後も調査はできない。調査結果からすれば、むしろ調査地に隣接する現堤防以西の千曲川寄りが遺跡中心部と考える方が妥当と思われる。そして、今回検出された遺構の多くは玄照寺（隨行寺）以降のものであるとしても、宅地化のきっかけが玄照寺（隨行寺）の創建にあったことは十分可能性がある。

飯田村に隣接する大島村は、元和元年(1615)、千曲川西岸からの移転を始めたという。飯田村はそれ以前に同様に西岸から移転していたという。移転が事実とすれば、調査地で見いだされた遺構群の継続期間中であつた可能性は大きい。つまり、移転にともなう開発が、それ以前から進められていたであろう村落

開発とは異なった方向をもたらし、そのころから遺跡の性格が大きく変わっていたことが予想される。

寺伝の創建時期に確実にさかのぼると思われる建物、あるいは堂塔建築の存在は確認できなかったが、このように創建時の建物が調査区の西方、千曲川寄りに存在するものと考え、調査地はその寺地の周辺部であった可能性のほかに、創建時の玄照寺が墳墓堂程度の小堂に始まり、調査地の塚墓およびその周辺の建物跡がそれであるという可能性も否定はできない。出土陶磁器類の多くは、玄照寺存続期間（14世紀後半～17世紀末）に一致する時期のものである。遺構・遺物の全体的様相は、これらが何らかのかたちで玄照寺の前身寺院にかかわるものであったか、または寺地の一角であったことを示すように思われる。

6 耕作地と集落

「飯田居館」に隣接する埋没水田は、現在の集落景観に重なるものであろう。最上層の畦畔の方向は、現状の水田転作された畑地の区画と一致している。また、第2面以下の畦畔は隣接する道路ができる以前のものと考えられ、道路以南と同方向の区画を示している。最下層水田面の下層の溝から出土した遺物は、近世後期以降と考えられるものである。最下層水田面は現地地表下3mにあり、近世前半以前は居館推定地との比高5m以上はあったことになる。

明治以降でもこの低地部は地形が変化するほどの洪水を何度も受けている。大正期に開田されたという記録があるが、元和年間の大島村の新田開発やその後の川欠・再開発などの記録からも、古くから水田化していたことは十分考えられる場所である。調査範囲が狭かったこともあり、より下層では溝以外の遺構は確認できなかったが、居館推定地の下層でいくつか検出された埋没流路とあわせて考えると、松川流路の影響を常に受ける湿地帯であった可能性が大きい。しかし、数少ない水田適地として、近世以降はたびたび開発が試みられたであろう。そして耕地として安定したのは築堤後であった。

一方、「玄照寺跡」地区以外では、居館推定地も含めて建物などの遺構は存在せず、近世以降は「玄照寺跡」地区に見出された集落周辺にひろがる屋敷畑を含む畑作地であったと考えられる。そして、そのような土地利用が基本的には近・現代にまで受け継がれている。

7 小結

ここまで述べてきたことは憶測にちかいが、遺跡形成過程の一案を示してまとめとする。

	玄照寺地区	古屋敷地区
13世紀後半～14世紀前半	塚墓などから始まる墓域の形成	
1381年	(随行寺創建伝承)	
1457・1461年		(飯田氏の文献記録)
15世紀後半		居館的区画が存在(初源は不明)
16世紀前半	墓域としての終了 宅地化の開始	堀の存続
16世紀後半～	宅地の拡大	堀の埋没 畑地化
元禄年間	(玄照寺廃絶)	
17世紀初頭	(玄照寺、大島に再建)	
17世紀以降	畑地化	低地部の水田化

第3章 玄照寺跡

註

- 1 井戸の調査所見から理解される遺跡形成段階の一案を図解すると下図のようになる。

段 階	I	II-1	II-2	III
遺構名	(五輪塔群)	SK24 (井戸)	SK19 (井戸)	ST06 (掘立柱建物)

- 2 酒詰 1980の五輪塔の分類を参照し、久保浩美氏の鑑定により時期区分を行った。
- 3 酒詰 1980の宝篋印塔の時期区分を参照。
- 4 山田昌久氏御教示による。

参考文献

小布施町史刊行会1975『小布施町史』

上高井教育会1962『長野県上高井誌歴史編』

酒詰秀一1980『図録歴史考古学の基礎知識』柏書房

酒詰秀一1978『仏教考古学調査法』ニューサイエンス社

野村一寿 1990「第6節 中世土器・陶磁器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財報告書4-松本市内その1総論編』

長野県佐久市教育委員会1986『大井城跡(黒岩城跡)』

第4章 がまん淵遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

がまん淵遺跡は中野市大字草間字西山2092番地他に所在する。遺跡の立地は、千曲川とその支流の篠井川の合流点からおよそ東に600mの地点で、篠井川にのぞむ尾根状に延びる丘陵の先端部である。遺跡が立地する丘陵は牧場造営のために尾根の中間部と先端部が大きく削られて、平坦面が独立丘陵のごとく残されていた。尾根を削平した土砂の一部を斜面部に盛土し牧場を造成しているため、削平を逃れた部分でも微地形が変更されて旧地形にはない平坦面が作り出されていた。また、谷部にも厚いところで1～2メートルの盛り土がなされていた。調査時の地形で谷部と残された丘陵先端の平坦部との比高差が約15mを測る。なお、本遺跡周辺は地滑り防止地域に指定されており、地滑りによる地形変化も予想される。

調査地では旧石器時代の遺物と弥生時代後期の集落跡が発見されているが、周囲の弥生時代後期箱清水式期の集落跡として、直線距離で3km以内に安源寺遺跡、牛出古窯遺跡、牛出遺跡、栗林遺跡があり、北東に約4kmのところには七瀬遺跡がある。また小さな谷を挟んで対峙する丘陵上には古墳時代前期の粘土採掘跡が発見された沢田鍋土遺跡があり、箱清水式系の土器を若干出土している。

かつて、本遺跡出土の箱清水式の壺の出土例が報告されているが(金井文司1978)、今回の高速道路用地内の調査以前には発掘調査は行われていない。また、この発掘調査の翌年に丘陵の土採りに先立ち、中野市教育委員会により高速道路用地に隣接して発掘調査が実施された。現在、がまん淵遺跡の中心部分を含め周囲の丘陵地は高速道路盛り土の土採り作業により削平されている。

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法

調査範囲 (第2図)

高速道路用地は遺跡が立地する丘陵の縁辺部をかすめている。A区、B区のか所の調査区を設定し遺構の調査を行った。両地区ともニセアカシアの林になっており、重機による表土剥ぎを行い遺構の調査に入った。A地区では丘陵部の一部が牧場造成のため削平され、その土が低い部分に1mほど盛られ旧地形がかなり改変されていた。

弥生時代後期の住居址を調査中、柱穴から石器が確認され、そこを中心に調査区を広げ、第38図に示した範囲のIV層を掘り下げ旧石器時代の調査を行った。この掘り下げた範囲の斜面上方についても市松模様に2m×2mの試掘坑を掘ったが石器は確認されなかった。

グリッドの設定と呼称法 (第1図)

グリッドの設定は長野県埋蔵文化財センター仕様に従って設定した。詳細は第1章2節1項を参照して頂きたい。本文及び図版のグリッド名は2m×2mの小地区名を用い示した。

(2) 調査経過 (調査日誌抄)

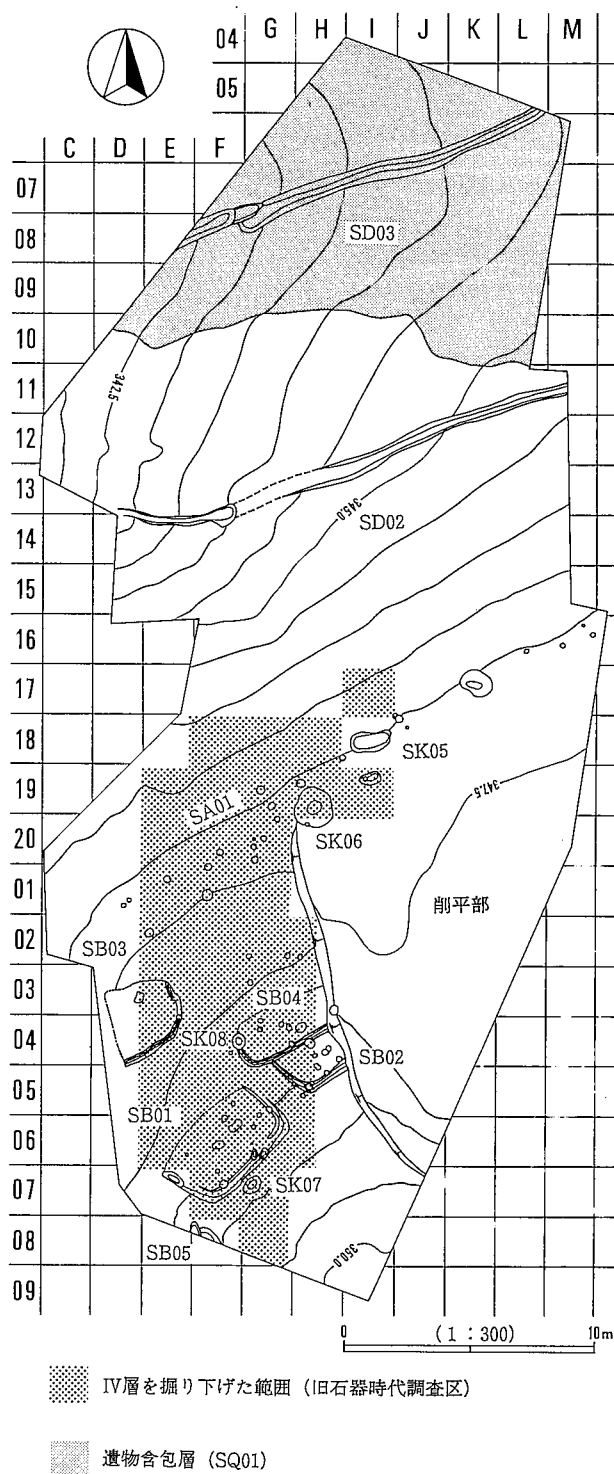
調査期間 平成3年7月8日～同年11月15日

- 7月8日 沢田鍋土遺跡の調査と平行して重機による試掘トレンチ開始。溝、土坑を確認。
- 7月15日 重機によるB地区の表土剥ぎ、遺構検出。
- 7月17日 重機によるA地区の表土、客土剥ぎ開始。
- 8月19日 沢田鍋土遺跡の調査を一時中断し、B地区の溝 (SD01) の調査を開始。箱清水式土器多数出土。
- 8月23日 グリッド杭設定。(株式会社写真測図研究所に委託)
- 9月2日 B区SD01の底面に焼土を検出。
- 9月4日 A区遺構検出、SK01～SK03確認。
- 9月5日 B区空中写真測量、空中撮影。
- 9月10日 A区SQ01 (遺物集中区) にトレンチを入れ、包含層であることを確認。
- 9月11日 SQ01掘り下げ開始。
- 9月17日 弥生時代後期と思われる柵列を確認。SK01より管玉出土。
- 9月18日 遺構名称をSK01～03をSB01～03に変更。
- 9月20日 SB04周溝のみ確認。
- 9月24日 A区空中写真測量、空中撮影。
- 9月27日 SB02・04完掘写真撮影。旧石器時代試掘開始。
- 10月2日 柱穴の断ち割りにより、黄褐色土中より頁岩の剥片出土。
- 10月3日 沢田鍋土遺跡の調査再開。作業人数を縮小してSB02・04床下の旧石器時代調査開始。
- 11月13日 旧石器時代調査区掘り下げ終了。
- 11月15日 機材を撤収し調査終了、沢田鍋土遺跡の調査に合流。

(3) 調査結果の概要

旧石器時代では頁岩と安山岩からなるブロックが1箇所、縄文時代では早期貝殻沈線文の時期の土器・石器が出土しているが遺構は発見されなかった。

弥生時代ではA地区 (第38図) の丘陵平坦部付近の緩斜面部に弥生時代後期箱清水式期の竪穴住居跡4棟とその住居群を囲むかのようなピット列が確認された。その斜面下方には遺物包含層が検出され、箱清水式土器が多量に出土し、遺物集中区としてSQ01の遺構名称をつけて取り上げた。B地区では丘陵斜面部に等高線に沿った溝が確認され多量の箱清水式土器が出土した。土器以外の遺物では、鉄鏃、土製勾玉、管玉などが出土した。



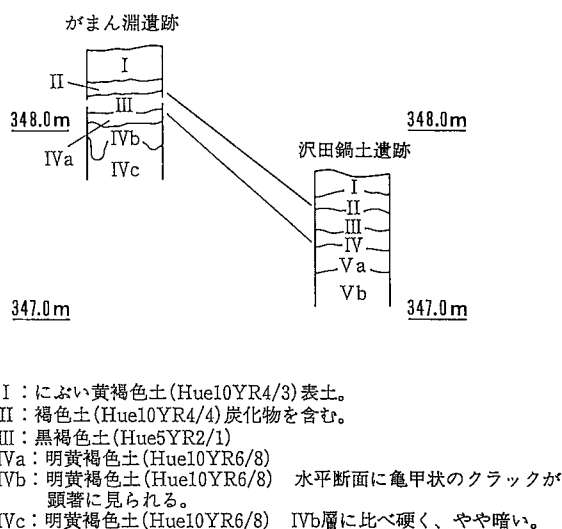
第38図 がまん淵遺跡A区遺構配置図

この他に中世以降の溝2条(SD02・SD03)、土坑2基(SK05・SK06)が検出された。

(4) 基本土層

旧石器時代のブロック1付近を基本土層とした(第39図)。I層：にぶい黄褐色土。表土。II層：褐色土。炭化物を含む。III層：黒褐色土。IV層：明黄褐色土。IV層はa～c層に細分したが、土質と色調はほとんど変わらず、IVa・IVb層が比較的ソフトなローム層、IVc層はそれに比べハードロームである。谷を挟んだ沢田鍋土遺跡の基本土層とやや異なるが、第39図のように対比される。がまん淵IV層と沢田鍋土V層は同じ層と思われるが、それぞれの層内の細分は直接対比できないので、がまん淵遺跡IVa・b層と沢田鍋土遺跡Va・b層が必ずしも対応するわけではない。

なお、長野県埋蔵文化財センター年報8(1991)の層名を変更し、年報の1層をI・II層、2層をIII層、3a～c層をIVa～c層に改めた。本報告を以て正式な層名とする。



第39図 がまん淵遺跡基本土層

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

1 概要

A区の北向きの緩斜面にブロックが検出された。第38図に示した調査区を設定しIV層の掘り下げを行った結果、石器5点と石核9点と剥片・碎片など216点の総数230点が出土した。石材は安山岩とクリーム色に風化した頁岩が主体となり、黒曜石なども認められる。このブロック以外にも弥生時代後期の住居跡や遺物集中区(SQ01)、B区の溝(SD01)などの遺構覆土から出土したものの中に旧石器時代の石器と同一母岩と認められる安山岩と頁岩があり、これらの遺物も抽出した。遺跡内には縄文時代の石器も出土しているが、風化の様子で縄文時代のものと旧石器時代のものとを見分けた。

2 出土層位

基本土層については第1節で述べたが、I・II層のにぶい黄褐色土は中世以降の遺物含包層、III層の黒褐色土は縄文時代以降の遺物含包層、IV層の明黄褐色土が旧石器時代の遺物含包層である。IV層は、a～cに細分したが、色調と土質は変化が無く、硬さの若干の違いで分層しているに過ぎない。また、細分層位を面的に把握できたわけではない。しかしながら、発掘時の遺物の出土レベルの観察では、IVb層とIVc層の境に遺物が多く出土しているように観察された。

調査区内では、III層下面より掘り下げを行ったが、IV層中にはクラックが多数はいつており、クラック中より出土した遺物は出土レベルに関係なくクラック内に堆積した土により出土層位を判別した。また、III層が欠落しIV層直上がII層となる所がある。

3 遺物分布状況 (第40図～第42図)

クラック内出土遺物には石鏃などの縄文時代の遺物も含まれており、調査区のIV層レベルから出土した遺物のすべてが旧石器時代の遺物であるとは言えない。クラック部以外の安定したIV層より出土したものについては旧石器時代の遺物と認識してよいが、クラック内に堆積したII・III層の土より出土したものについてはその所属時期を個々に検討する必要がある。また、調査区東側はIV層まで削平されていた。

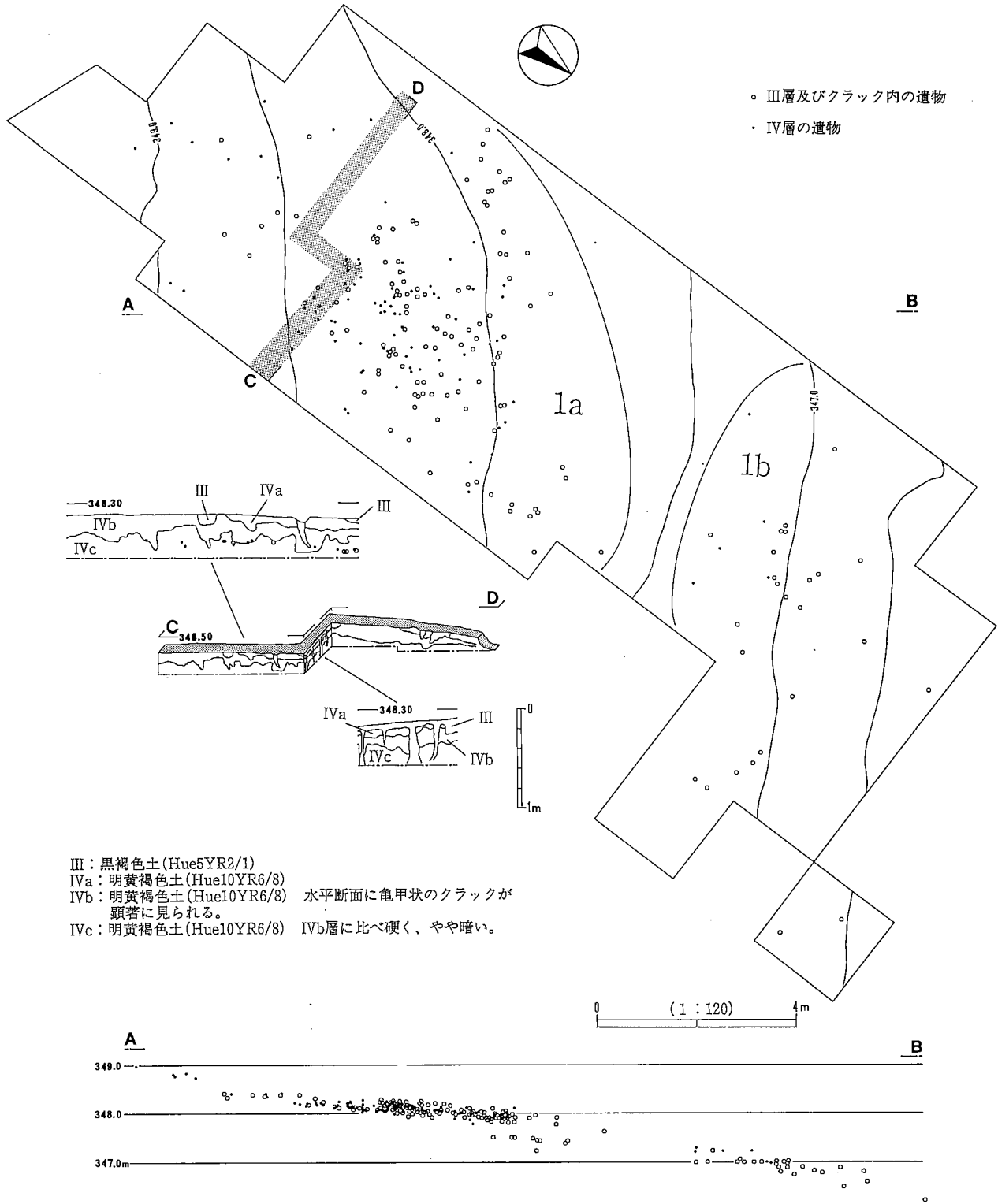
第40図に遺物の平面および垂直分布を示した。調査区の南側と北側で2ヶ所の遺物の集中を認識でき、南側の分布密度の高いまとまりを1 aブロック、北側の密度の低いまとまりを1 bブロックとする。この2つのブロック間には接合資料はないものの、双方とも同一母岩と認識してもさしつかえない頁岩と安山岩を主体とした石材で構成されており、相互に関連のあるブロックである。等高線に直交した方向で遺物の垂直分布を見ると、地形に沿って傾斜している。垂直分布でIV層出土遺物よりも下にI～III層出土遺物が位置するのは、クラック内より出土した遺物を上層の層名で取り上げているためである。

次に出土層位、石材、器種の属性毎に遺物の平面分布を見る。第41図上段のA図は石鏃など明らかに縄文時代と解る遺物を除いた遺物分布で、石器と石核については実測図の図版番号と対応して示した。石器と石核はブロック1 aに多く見られ、特に直径約3.5mの範囲に集中する。その周辺に散漫に剥片・碎片が分布する。次にB図で出土層位別に遺物分布を見ると、IV層出土遺物の示す分布とIII層以上の遺物が示す分布は概ね一致している。したがって、II・III層とIV層との遺物分布は一体のものであり、本来はIV層中のブロックであったと仮定して記述を進める。もちろん黒曜石、チャートなどに縄文時代の遺物が含まれていることは十分考慮しなければならない。

次に、石器群を構成する石材についてみてみたい。なお、先述したようにクラック内出土の遺物の中には縄文時代の剥片が含まれている可能性がある。また、旧石器時代調査区内出土遺物は、全体の半数以上がプライマリーと考えるIV層以外の出土である(第3表)。層位的に旧石器時代の遺物であると確認できるIV層では、頁岩45点、安山岩27点、安山岩b 3点、黒曜石7点、珪質頁岩1点、チャート1点、メノウ1点が出土した。安山岩b、頁岩bは、他の安山岩・頁岩と比べ風化の度合いなどが異なったもので、明らかに別な母岩と認定できるものを区別したものである。頁岩、安山岩はIV層の出土点数が多く、明らかに本石器群を構成する主要な石材となっている。その他の安山岩b、黒曜石、珪質頁岩、チャート、メノウはIV層の出土点数が少なく、調査時点での層位の誤認の可能性はある。しかし、隣接する沢田鍋土遺跡の同時期の石器群の中には(中島庄一他1995)チャートと黒曜石が少数含まれていることからIV層出土のこれら少数の石材も頁岩と安山岩と共に石器群を構成する石材であるとしておく。ただし、石核の石材は頁岩と安山岩に限られ、調査地区内での石器製作は主に安山岩、頁岩を母岩とするものである。C図・D図にそれぞれの石材の分布状況を示し、E図にIV層出土の頁岩と安山岩の分布を示した。安山岩と頁岩の分布範囲はほとんど重なっており、およそ直径5mの範囲の分布密度が高い。ほかの石材は比較的散漫な分

第3表 調査区内層位別石材数(剥片、碎片、石器、石核の合計数。)

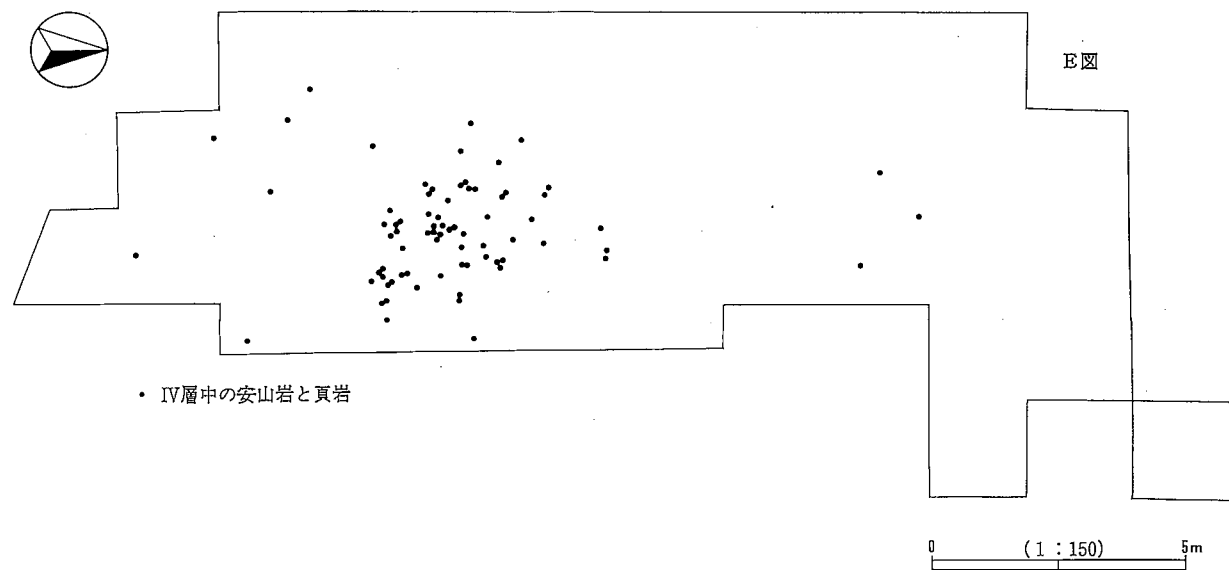
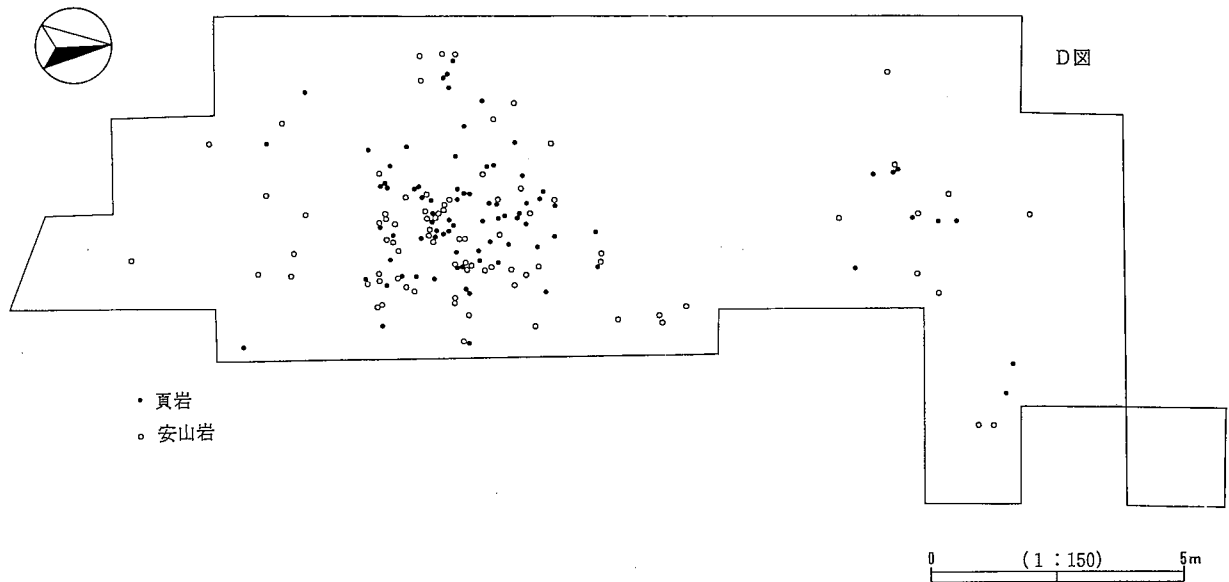
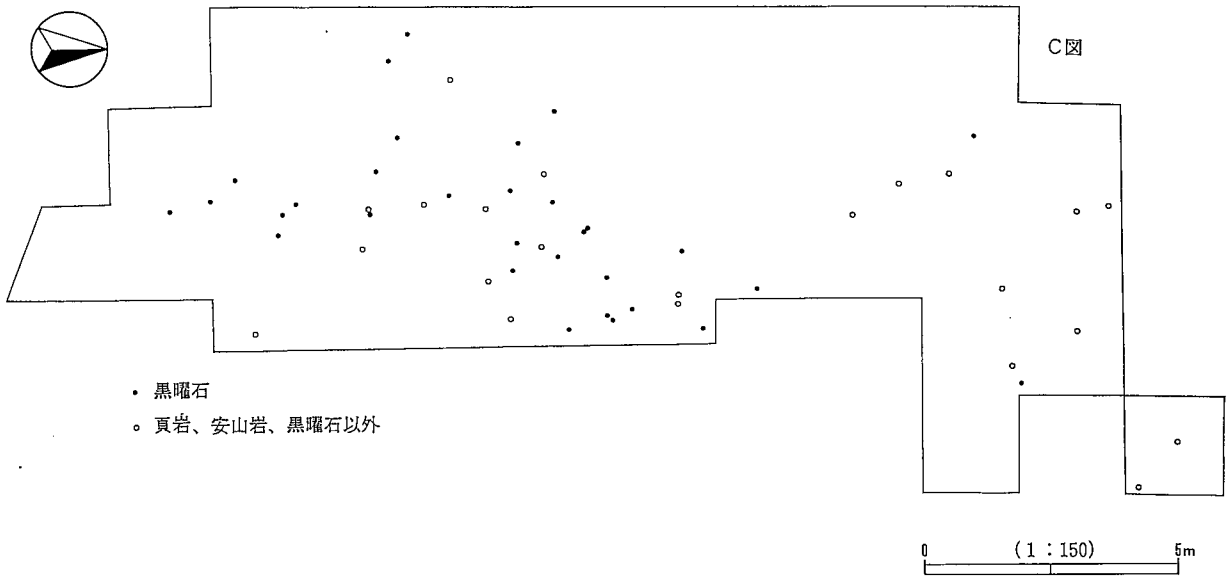
	安山岩	頁岩	黒曜石	メノウ	安山岩b	頁岩b	流紋岩	チャート	珪質	その他	合計
層位不明	1		1	1	1						4
II層	36	36	21	5	10	2	1	4	2	7	124
III層	5	4	3		2					1	15
IV層	27	45	9	1	3			1	1	2	87
合計	69	80	37	7	16	2	1	5	3	10	230



第40図 がまん淵遺跡 旧石器時代遺物分布(1)



第41図 がまん淵遺跡 旧石器時代遺物分布(2)



第42図 がまん淵遺跡 旧石器時代遺物分布(3)

布を示す。

第41図Bに接合関係を示した。接合した剥片数と接合線の数が合わないのは、弥生後期の遺構内から出土したものの出土位置を示していないためである。33・39は弥生時代後期の住居跡の覆土中のものと接合している。

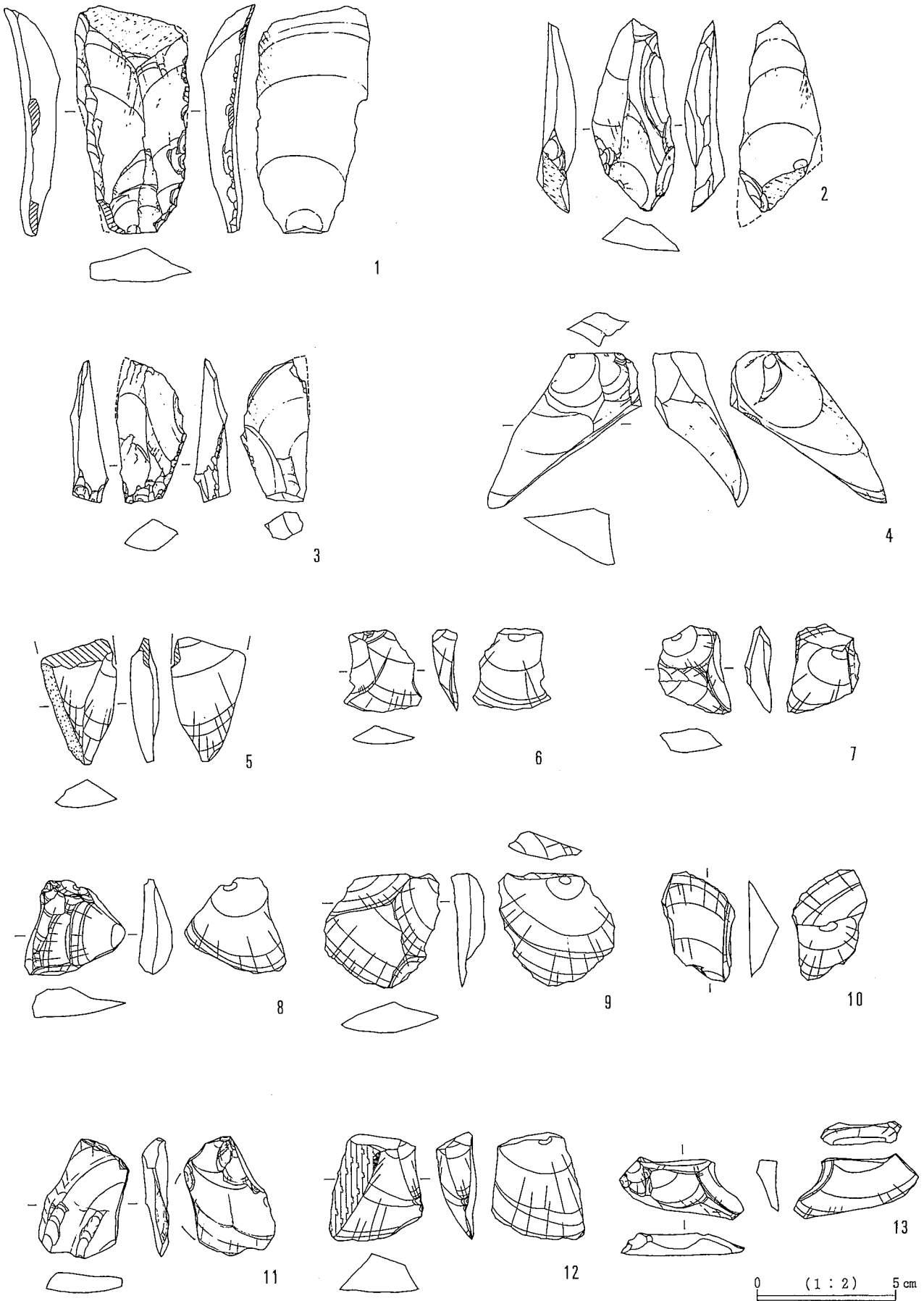
4 出土遺物 (第43図～第50図)

石器 (1～3・18・26) 1はへら形石器で表面に節理面を残す縦長の剥片の一側縁に調整加工または使用痕が認められ、もう一方の側縁には発掘時の欠損がある。他に同一母岩と思われる剥片が認められず、完成品としてブロックに持ち込まれたものである。2は縦長傾向の剥片の基部に調整加工が認められる。裏面図の右側縁の斜線部はガジリである。3も2と同じく縦長傾向の剥片の基部に調整加工が認められる。ただし、この調整加工は剥片剥離する時に生じた微細な剥離とも見られる。2・3はいずれも打面を残しており、ナイフ状石器(岡村他1986)と分類されるものに類似し、本遺跡では基部加工縦長剥片として分類した。18は扇状の剥片の一部に調整加工を施したスクレイパーである。2・3・18とも頁岩製である。26は安山岩製の縦長傾向の剥片の端部に剥離痕が認められる。素材となる剥片は自然面を残し、打面を有している。以上が調整加工が認められる石器と認定されるものである。なお、石器の器種分類と石器の記述は9章1節で詳述する。

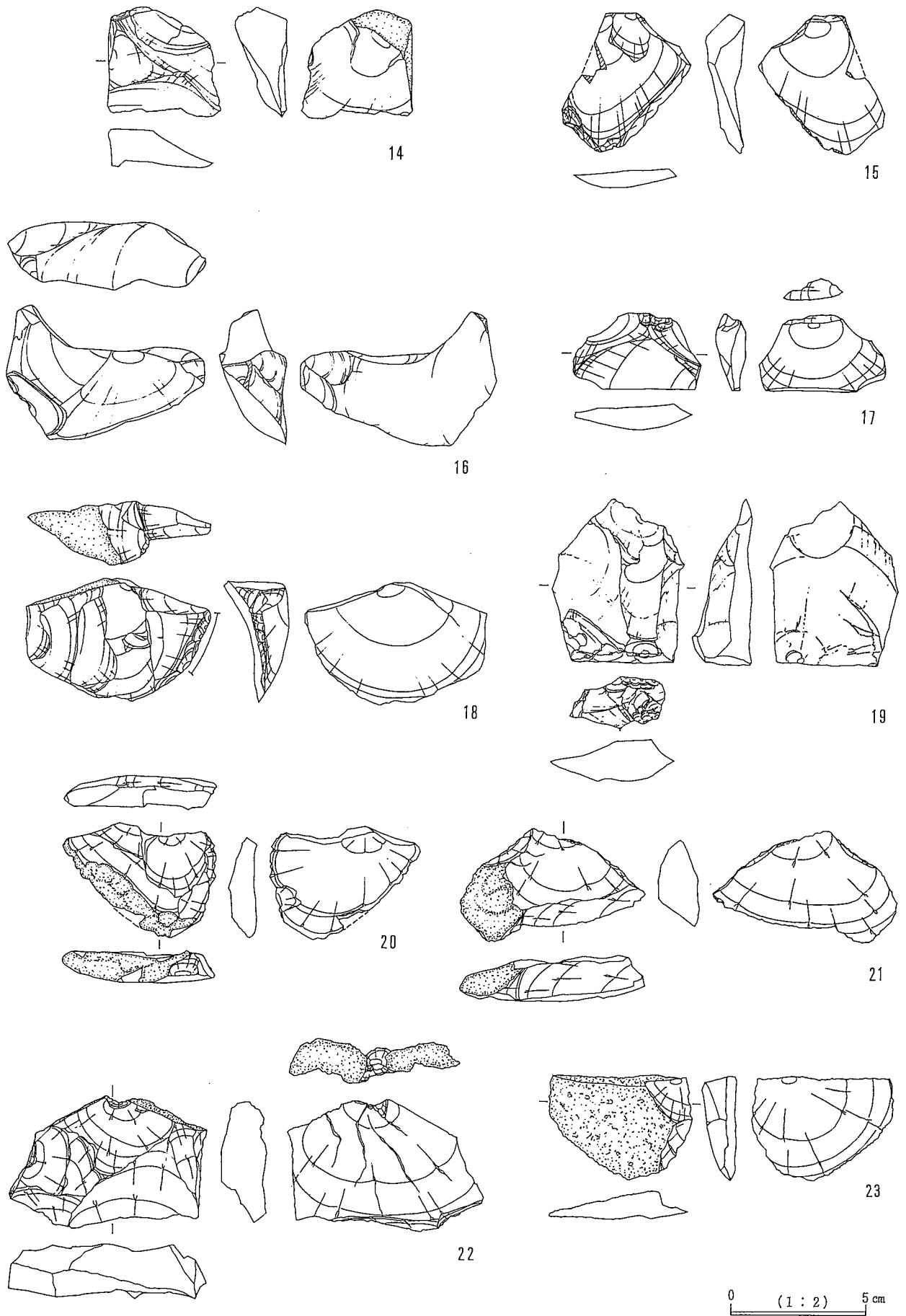
なお、第3節縄文時代で図示したものの中に、ブロック1の石器群との石材の類似から旧石器時代のもので推定される石器が確認された。第50図58・59に再提示したもので、58は縦長の剥片を素材とし一側縁に主剥離面(裏面)より調整加工を施した先端部を持つ石器で、打面を残す。59は分厚い横長の剥片を素材とし、一側縁に裏面より調整加工を施し、もう一方の側縁の一部に表面より調整加工を施した先端部を持つ石器である。58は頁岩、59は安山岩である。この2点は、石材と、素材剥片の特徴は異なるものの、石器の形態、大きさ、調整加工の部位などに共通点が見られる。いずれも弥生時代後期の溝(SD01)より出土したものである。これらの他に、弥生時代遺構内からブロック1の石器群と同一母岩と思われる石器・剥片が出土しており、第50図に示した。63は安山岩で他は頁岩である。これらの中には石器と評価されるものもあり、第9章1節に詳述する。

石核(37・46～54) 37は分厚い剥片の裏面に比較的大きな剥片剥離を施したものである。剥片剥離は全周に巡ってはいないものの、49に類似する特徴を持ち石核に分類した。46は分厚い剥片を素材とする。打面転移が見られ、主剥離面と自然面を打面とした剥片剥離も行っている。47は分厚い剥片の周辺部に裏面を打面とし連続した剥片剥離を行う。裏面にも大きな剥離が2か所見られ、素材の剥片の打点側は折れている。48は打面転移を行うサイコロ状の石核である。全面に剥片剥離が認められ、自然面は見られない。49は分厚い剥片の自然面及び主剥離面を打面とし全周に剥片剥離を行っている。50は分厚い剥片を素材としている。51は小形で石核の一部がはじけたものと思われ、剥離方向が観察し難い。52は90度の打面転移を行うサイコロ状の石核で、自然面を残している。53は90度の打面転移を行う石核の一部が欠損したものである。54は分厚い剥片の自然面を打面として一側縁に剥片剥離を行う石核で、47と同じ特徴を有する。37・46～50・53は頁岩、51・52・54は安山岩である。

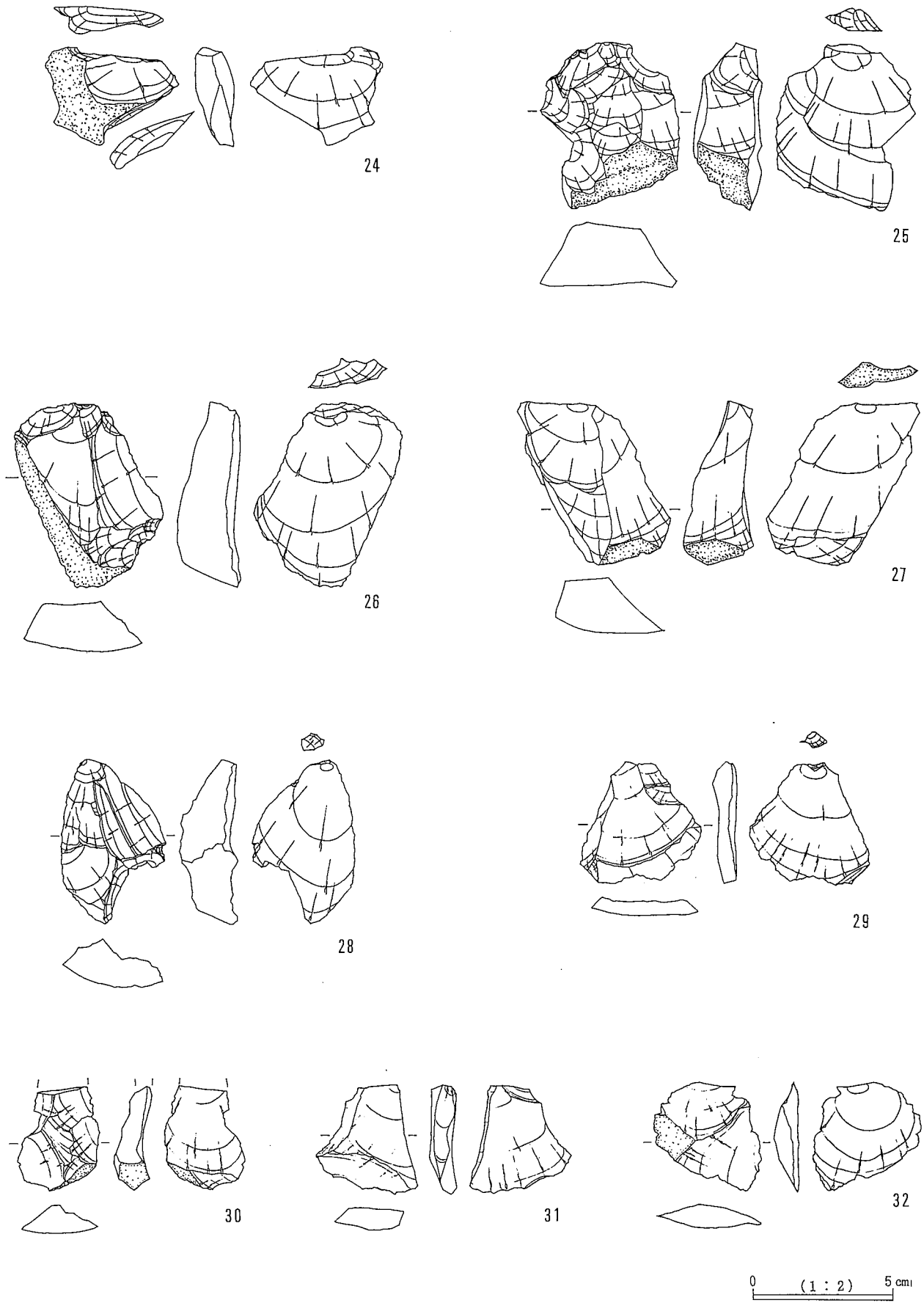
剥片・碎片(4～32・34・35・38・40～42・44・45) 弥生時代の遺構から出土したものも含めて剥片・碎片は249点出土しており、頁岩と安山岩のみ図示した。縦長傾向を示す剥片(4・41・42)、貝殻状の剥片(8・9・17・20)など様々な形状のものがあるが、縦長傾向を示すものは図示したもの以外には見られない。自然面・節理面を有する剥片は、頁岩が71点中6点、安山岩が57点中6点に認められる。これらの中には自然面を打面とするものがある(22・23)。4～17・19・33～45は頁岩、20～31は安山岩、32はチャートの剥片



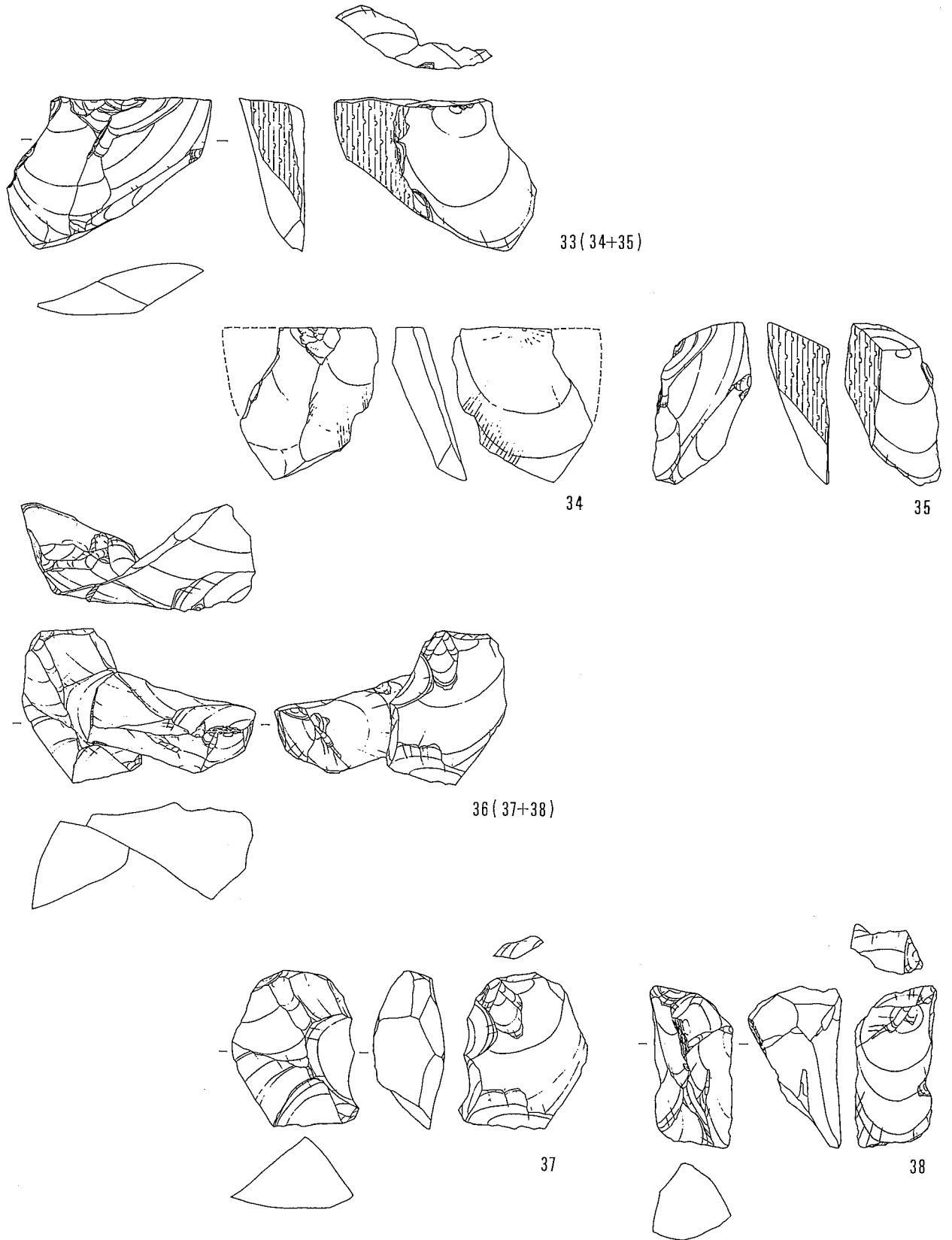
第43図 がまん淵遺跡 旧石器時代石器(1)



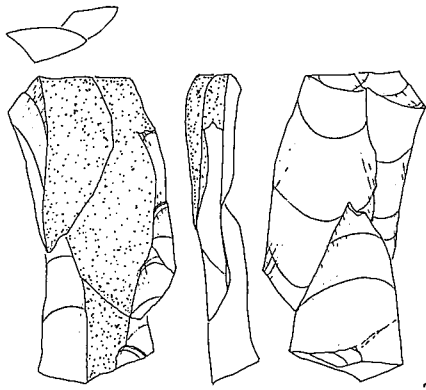
第44図 がまん淵遺跡 旧石器時代石器(2)



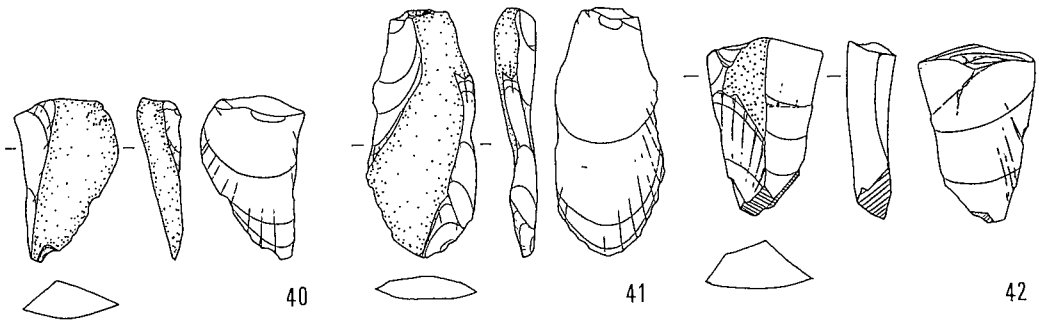
第45図 がまん淵遺跡 旧石器時代石器(3)



第46図 がまん淵遺跡 旧石器時代石器(4)



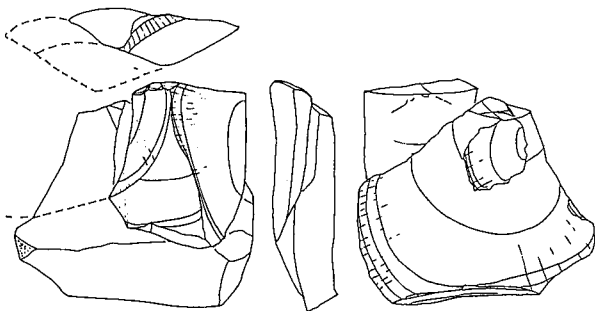
39 (40+41+42)



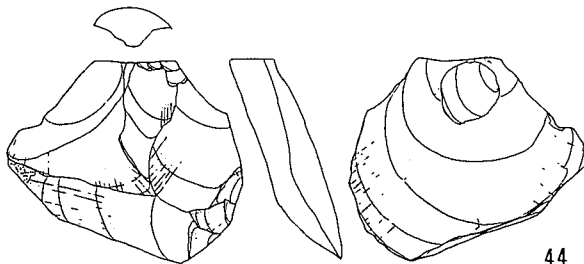
40

41

42



43 (44+45)

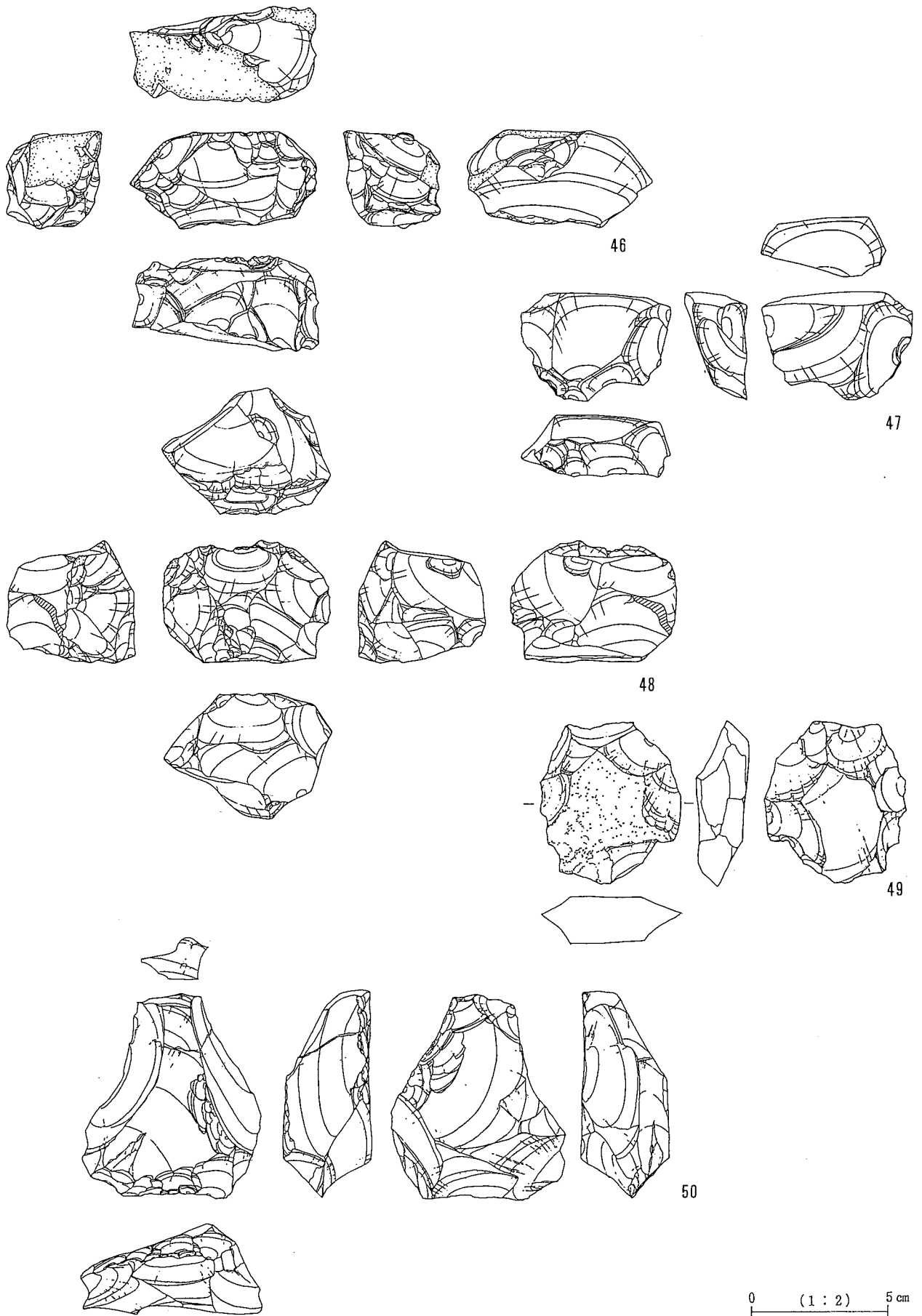


44

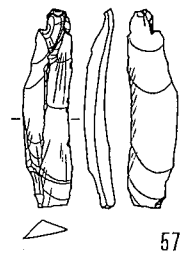
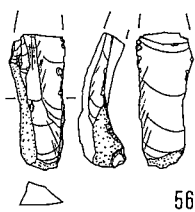
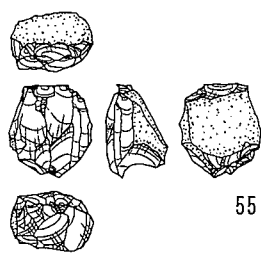
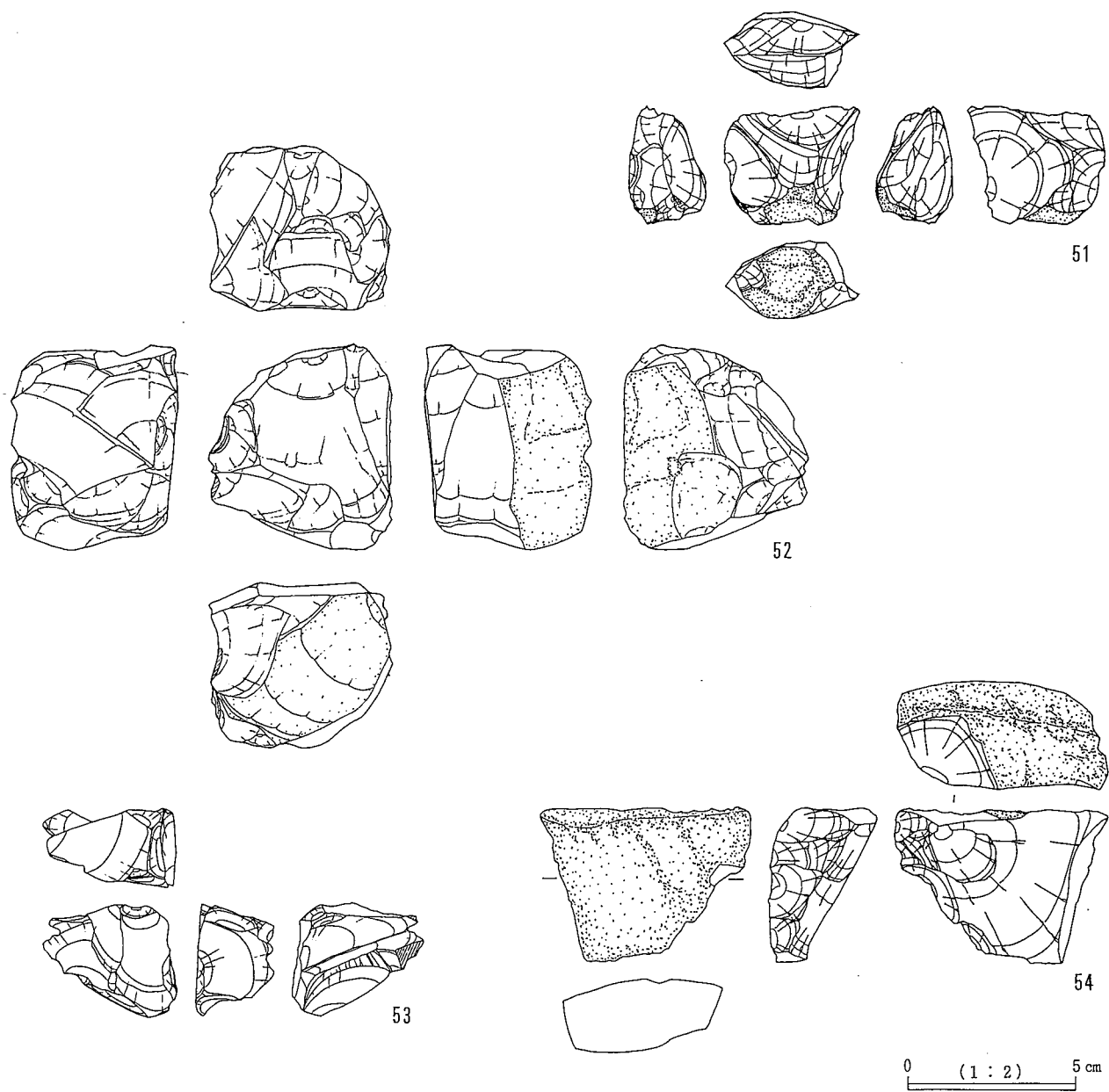
45

0 (1 : 2) 5 cm

第47図 がまん淵遺跡 旧石器時代石器(5)

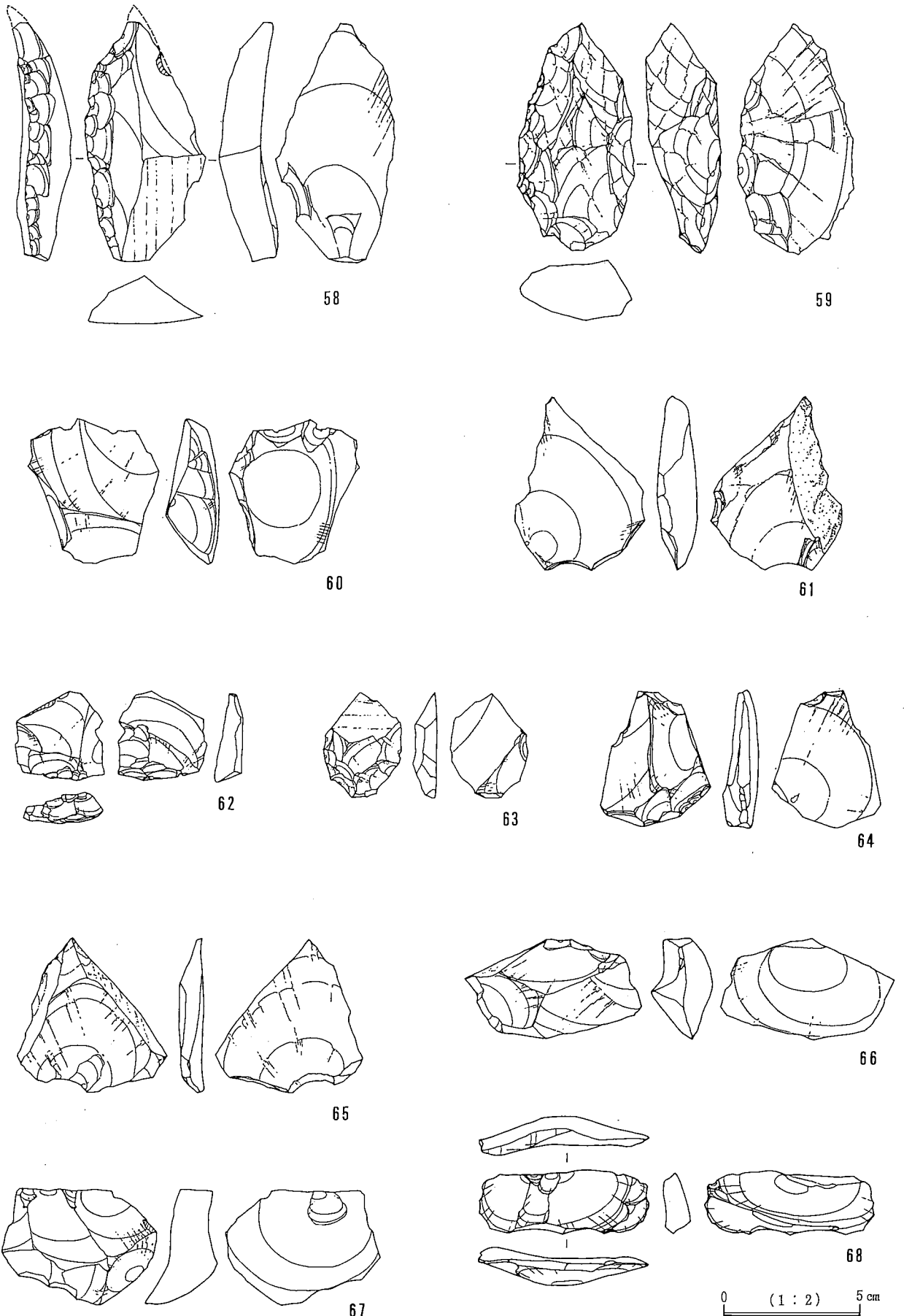


第48図 がまん淵遺跡 旧石器時代石器(6)



0 (1:2) 5 cm

第49図 がまん淵遺跡 旧石器時代石器(7)



第50図 がまん淵遺跡 旧石器時代石器(8)

である。

接合資料(33・36・39・43) 剥片の接合資料が4つ得られた。33は34と35とが接合したもので節理面を有する。同一の打面より剥片剥離が行われており、2点とも斜軸方向に長い剥片である。36は37と38が接合したもので、それぞれ別の打面から剥片剥離されており、およそ90°の打面転移が行われている。2点の剥片の表面の剥離方向を観察すると更に別の打面からの剥片剥離が認められ、かなり多くの打面転移が行われている。39は40・41・42が接合したもので、40・41は同一の打面から剥片剥離がなされているが、42とは180°の打面転移が行われている。43は44と45が接合したもので、同一の打面から剥片剥離がなされている。正面図右方向からの剥片剥離が見られ90°の打面転移が確認できる。またそれぞれの剥片に、打点調整のための細かな剥離痕が認められる。

55～57はこれまで記述してきたブロック1の石器群とは無関係のものであるが、弥生時代の遺構と遺物包含層から出土したもので、旧石器時代の遺物の可能性があるものを提示した。すべて黒曜石製であるが、本遺跡には縄文時代の黒曜石の剥片も多く出土しており、時代決定はできないが、55は細石刃核の可能性があり、56・57は縦長の剥片で縄文時代のものにあまり類例を見ないため参考資料として提示した。なお、ブロック1の石器群の評価は、9章に別項を設けた。

ブロック1以外の石器

55～57はSD01、SQ01より出土したものであるが、旧石器時代の遺物の可能性があるので本節で図示した。いずれも黒曜石製である。

第3節 縄文時代の遺物

1 概要

がまん淵遺跡では縄文時代の遺構は検出されず、土器と石器が出土したのみである。縄文式土器の大半が弥生時代の住居址の覆土中より出土していることから、弥生時代後期の集落形成にともない、縄文時代の遺構・生活面が破壊されたものと考えられる。なお、隣接する中野市教育委員会の調査範囲にも縄文時代の遺構は発見されていないとのご教示を得た。出土遺物は少なく、土器は小片のみである。

2 土器(第51・52図)

100点余りの土器片が出土し、縄文時代早期が主体となる。特に沈線文系土器がまとまって出土している。以下のように分類した。

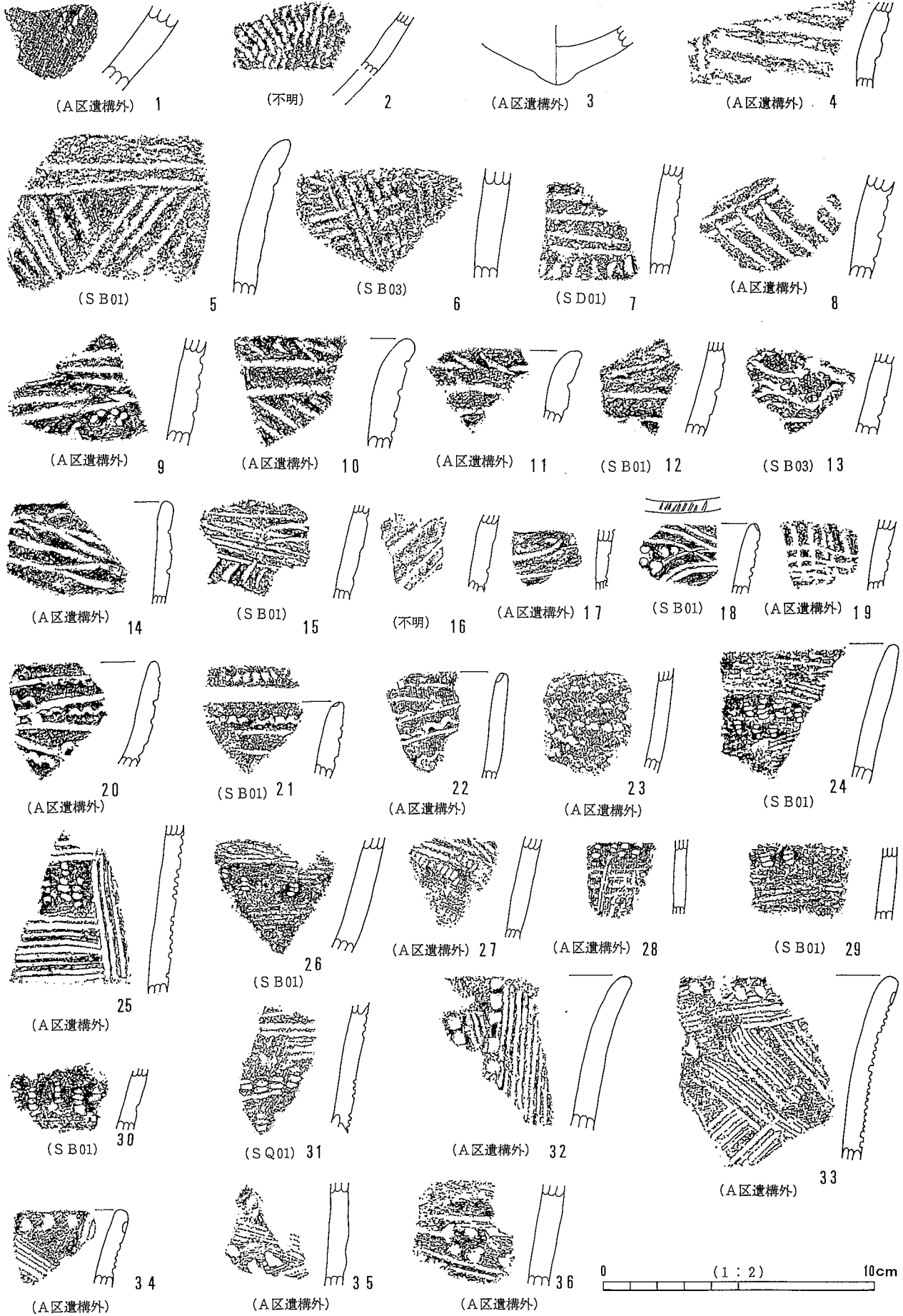
I群 撚糸紋を施文した土器。早期前半の撚糸紋系土器群に属する。(1・2)

II群 へら状工具による沈線で文様を施した土器(4～23)。沈線の太さ、描き方によってa～d類に分類した。

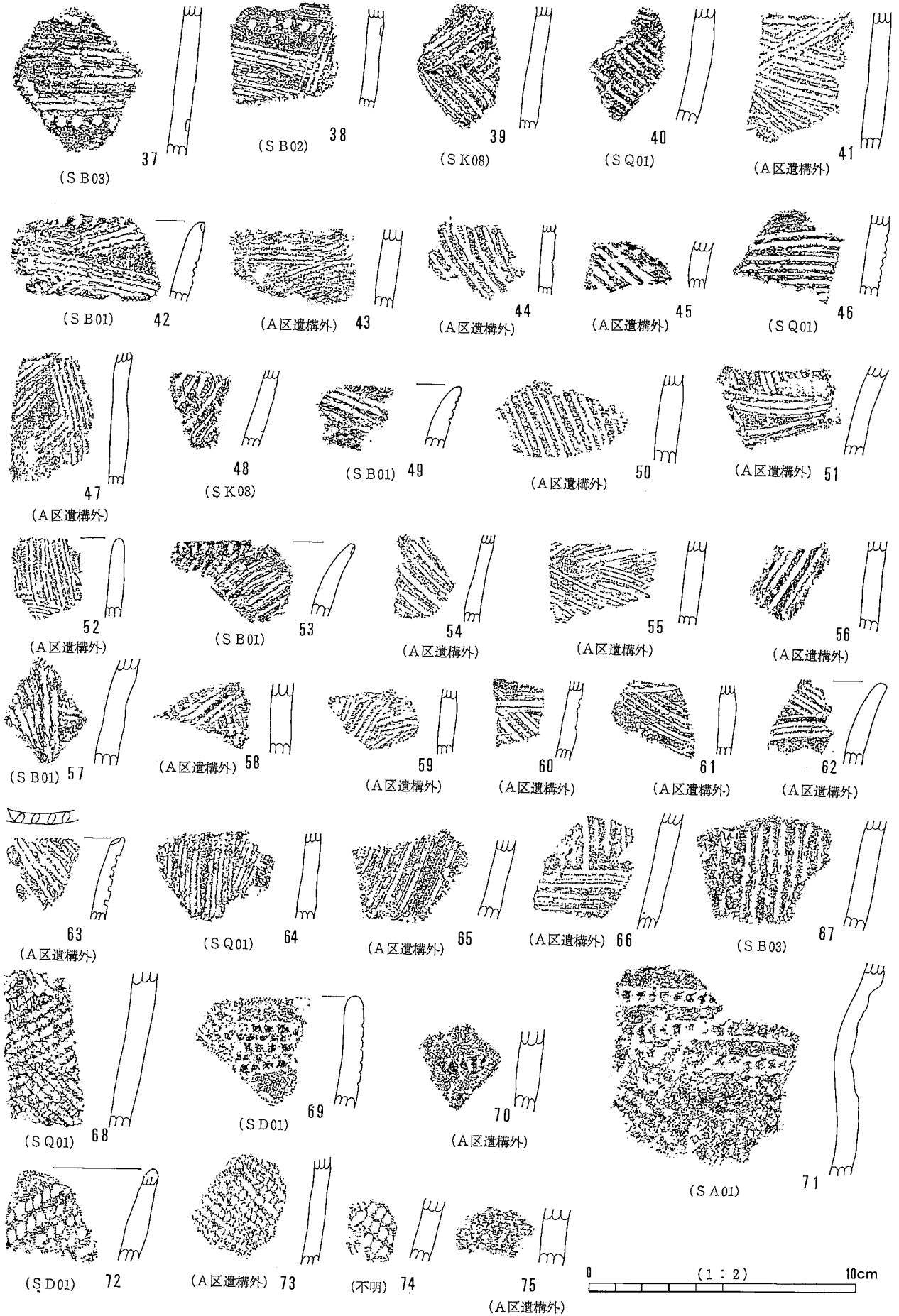
II群a類：横走る5mm～6mmの太い沈線が施されるもの(4)。1点のみである。

II群b類：幅2mm～3mmの平行する沈線で、横走または斜走する平行沈線により文様が構成されるもの(5～12)。7は爪形の連続刺突文が見られ、9は先割れの棒状工具による二個一対の刺突がある。5・10・11は口縁に2本または3本の横沈線を配し、10・11には口縁部に斜めの刻みがある。いずれも外反した口縁形態である。器厚は7mm～9mmと他のII群土器に比べ厚手である。5～11にわずかに繊維が混入していたようである。

- II群 c類：平行しない沈線で文様が構成されるもの(13~18)。曲線的な沈線が多く、沈線は1mm~2mmとa類b類に比べ細い。15は沈線間に擦痕が認められ、連続する爪形の刺突がある。18は円形の刺突と口唇部に細い刻みを入れる。IIb類に比べ器厚が薄く5mm~7mmで、焼成が良く硬質である。15にわずかに繊維の混入が認められる。
- II群 d類：沈線と貝殻腹縁文で文様が構成されるもの(20~23)。21は口唇部に貝殻腹縁もしくは棒状工具よる刺突が見られる。23には沈線が見られず貝殻腹縁文のみが認められる。これらも器厚が5mm~7mmと薄く、20に僅かな繊維の混入が認められる。
- III群 櫛歯状の工具による条線を施した土器(24~65)。胎土にわずかに繊維を含むものがある。文様要素によりa~c類に分類した。
- III群 a類：条線と同じ櫛歯状工具による刺突が施されるもの(24~31)。縦と横の条線がみられ、24・26は刺突の上下に条線があり、24には櫛歯状工具による2段の列点が見られる。いずれも条線は浅く表面が摩耗しているため、文様は不明瞭である。25は縦横の深い条線に区画された中に刺突が認められる。31は二段の刺突が見られる。条線は25・31が刻みが深く、他は浅い。刺突は、26が3個一対で、30が4個一対で、他のものは明確に確認できないが、3ないし4個一対の刺突となる櫛歯状工具を用いている。器厚は28・30が5mm、他は7mm前後で、25・27・28にはわずかに繊維が混入されているようである。全体に脆い土器が多い。
- III群 b類：棒状工具による刺突が施されるもの(32~38)。縦横の条線、または「く」の字状の斜行する条線により文様が構成されている。32は口縁部から縦方向の条線と2列の縦列する刺突が見られ、33は「く」の字状の斜行する条線と口縁部に横列する刺突が見られ、34は斜行する条線と口縁部に横列する刺突が見られ、いずれの口縁部も僅かに外反する口縁形態である。35・36・38は部分的に条線と刺突が重なっているが、条線間の空白部に刺突を行っているものと見られる。37は条線と無文部の境界部分に横列する刺突が見られ、内面は繊維による察痕が認められる。刺突の工具は32・34・37は四角柱もしくは円柱の先端を尖らせた棒状工具で、33・35・36・38は先割れした棒状工具によるものと思われる。条線は、32・33のように比較的深く刻まれたものと、36・37のように浅くはっきりしないものがあり、33は6本一単位、35は3本一単位である。器厚は38が5mmと薄く、他は7mm~8mmである。33・34・35・36・38にわずかに繊維の混入が認められる。
- III群 c類：櫛歯状工具による条線のみが施されるもの(39~65)。ほとんどの破片は斜走する条線で、「く」の字状に交差するものが多い。条線は39・40・41・46・50・63などのように深く刻まれたものと、43・51・52・58・59・62のように比較的浅いものがあり、単位は確認できるもので、55が3本一単位、39・41・42・49が4本一単位、47が6本一単位の条線である。口縁部破片では42・53・63の口唇部に刻みが見られる。III群土器の胎土は、内部が黒色で、内外面は褐色もしくは暗褐色であるが、50のみ他と異なり全体に白色身を帯びる。また、39・40・41・44・45・47・50・51・53・54・55・58・59・60・62に繊維が混入されていたようである。
- IV群 半截竹管による条線が見られる土器(66・67)。2点ともわずかに繊維の混入が認められる。
- V群 半截竹管による押引き文を施した土器(69~71)。
- VI群 縄文を施した土器(68・72~75)。68にわずかな繊維の混入が認められる。すべて前期のものと思われる。
- 以上、I群~III群は早期、IV~VI群は前期となる。II群の沈線文系土器群は周辺地域には資料が少なく、飯山市の新堤遺跡に比較的まとまって出土しているにすぎない。またIII群については、山ノ内町上林中道



第51図 がまん淵遺跡 縄文時代土器(1)



第52図 がまん淵遺跡 縄文時代土器(2)

南遺跡、茅野市判ノ木山西遺跡、望月町新水B遺跡などに類例が見られ、編年的位置付けと分布範囲が明らかにされていない土器群である。これについては次項の小結で更に詳しく触れたい。

3 石器（第53図～第57図）

石鏃38点、石鏃未製品5点、搔器1点、削器7点、楔形石器3点、打製石斧2点、横刃型石器3点、尖頭状石器2点、へら状石器3点、石匙3点、小形不定型石器29点、使用痕のある剥片7点、磨製石斧5点、磨石・凹石15点、特殊磨石6点、スタンプ形石器1点、敲击石9点、石皿・台石3点、礫器2点、石錘16点、合計160点の石器が出土した。この他に剥片675点、石核26点、黒曜石の原石3点が出土した。これらの石器は弥生時代後期の遺構もしくは表土から出土しており、特にSD01の覆土から全体の約6割の石器が出土している。各器種ごとに詳細を記述する。

(1) 石鏃・石鏃未製品(1～39) 7・9・34・36のように調整加工が粗雑で左右非対称の完成品ではないと思われるものを石鏃未製品とした。石材は22が珪質頁岩、10・37・39がチャート、9・23・24・35が安山岩、38は不明、そのほかはすべて黒曜石である。図示できなかったものも含めて、石鏃及び石鏃未製品の石材構成は、黒曜石33点、チャート3点、珪質頁岩1点、安山岩5点となり、黒曜石が全体の76%を占める。

(2) 小形不定型石器(40・42・46・47・52) 調整加工により剥片の形状を変形しているが、定型的石器として認められないものを一括した。40はいわゆる異形石器の一種である。46・47・52は剥片の一側縁の表裏両面から調整加工を行っているが、刃部を作り出しているものではない。図示したものはすべて安山岩である。この他に黒曜石、珪質頁岩、閃緑岩、石英、粘板岩などの石材が見られる。

(3) 削器(41・48・49・50・60) 41は表裏両面から調整加工を施し、48～50は片面からの調整加工により刃部を形成している。60は他に比べ大形で、調整加工も大きな剥片剥離によっており、他の削器とは区別される。50は珪質頁岩、53は不明、41・48・60は安山岩である。

(4) 楔形石器 図示していないが、黒曜石2点と、チャート1点が出土している。

(5) 使用痕のある剥片 図示していないが微細な剥離痕が見られる剥片で、黒曜石3点、安山岩3点、珪質頁岩1点が出土している。

(6) 石匙(43・44・45) 3点とも粗雑な調整加工による対峙する抉りを入れ、つまみ部を作り出したものである。前期以降の石匙に比べつまみ部の作り出しが明瞭でない。43は安山岩、44は流紋岩、45は凝灰岩である。

(7) 打製石斧 2点出土したが、胴部と基部の破片で図示していない。いずれも安山岩である。

(8) 横刃型石器(51) 横長の剥片の一側縁を刃部としたものを横刃型石器とした。51は粘板岩で、他に2点安山岩のものが出土している。

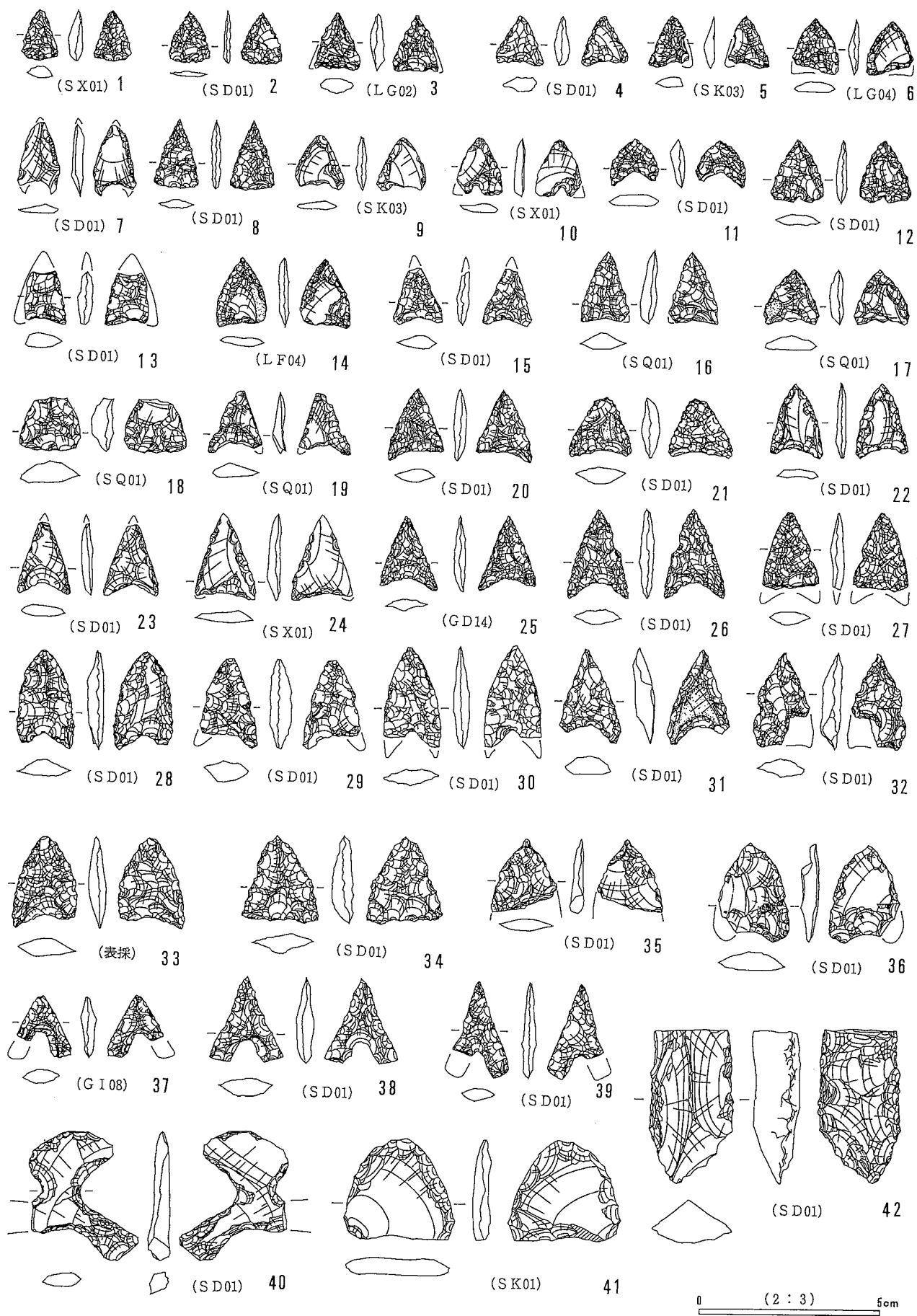
(9) 尖頭状石器(54・55) 厚手の剥片で、剥片の形状を利用し一側縁に連続する剥片剥離を施すことにより尖頭部を作り出すものをまとめた。54は頁岩で縦長剥片を素材にしており、55は安山岩で横長剥片を素材としている。旧石器時代の石器である可能性がある。

(10) 搔器(56) 裏面からの調整加工により剥片下端部を刃部とする。安山岩製の1点のみ出土。

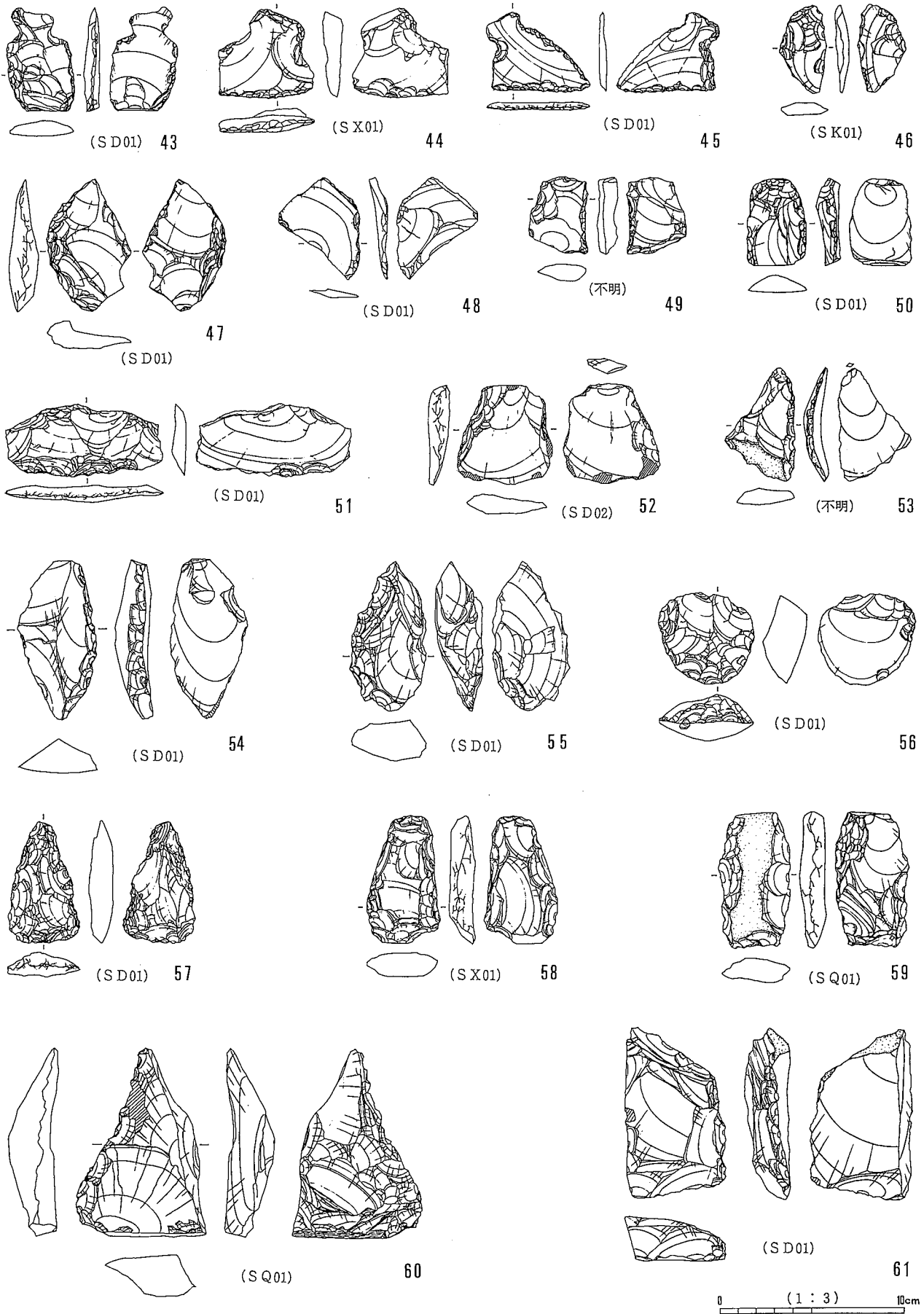
(11) へら状石器(57・58・59) 57は東北地方に見られるへら状石器もしくは石筥と同類のものと思われる。58・59は調整加工が周辺加工にとどまっており、57とは趣を異にするが、へら状石器の未製品の可能性もあり本器種に分類した。いずれも安山岩である。

(12) 礫器(61) 板状に分割した礫を素材として一側縁に剥片剥離を行っている。中部高地の押型文土器に伴い多く見られる石器である。安山岩製である。他に凝灰岩製のものが1点出土している。

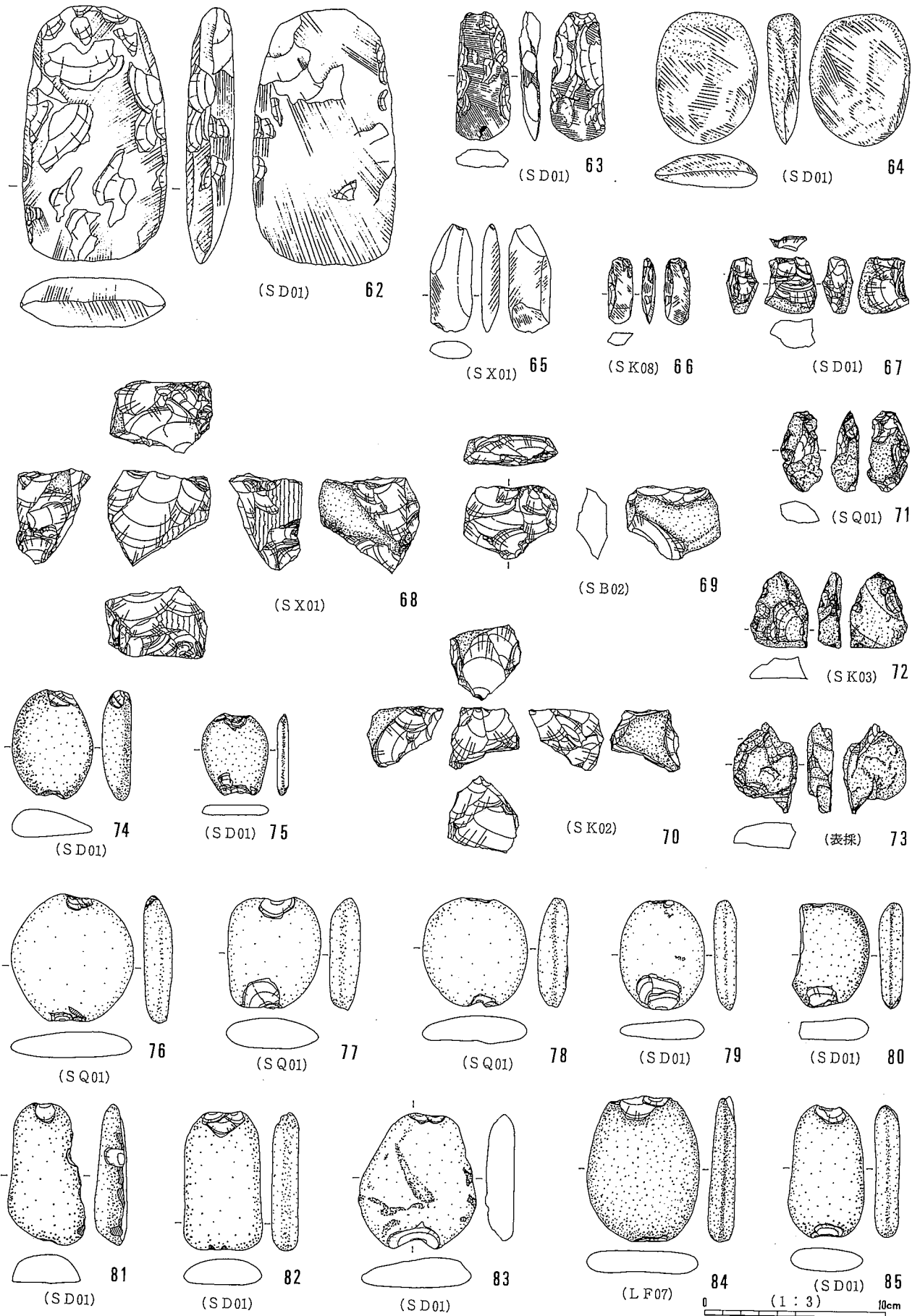
(13) 磨製石斧(62～66) 62・63・64はSD01の底面の窪みからまとまって出土し、SD01に破壊さ



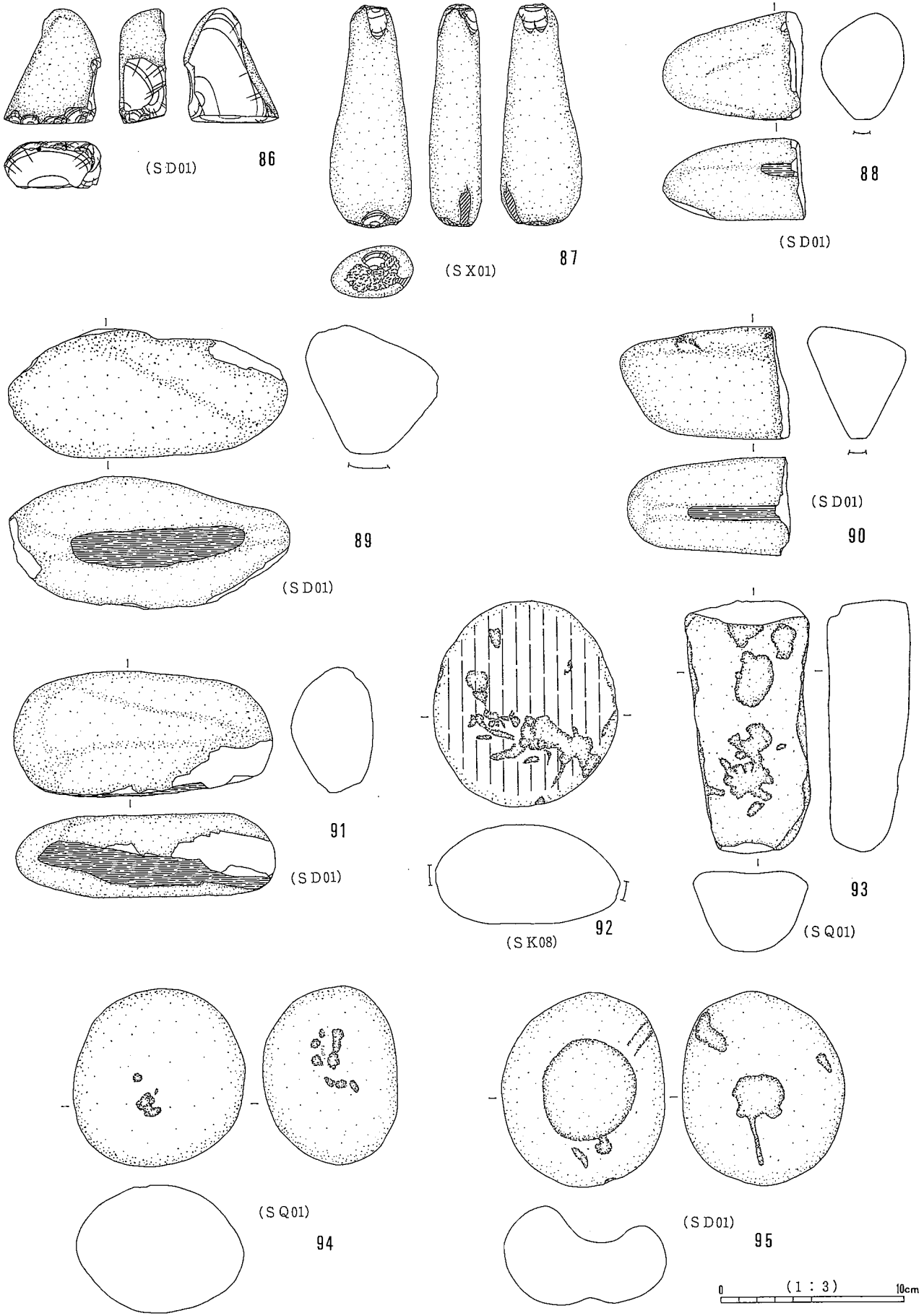
第53図 がまん淵遺跡 縄文時代石器(1)



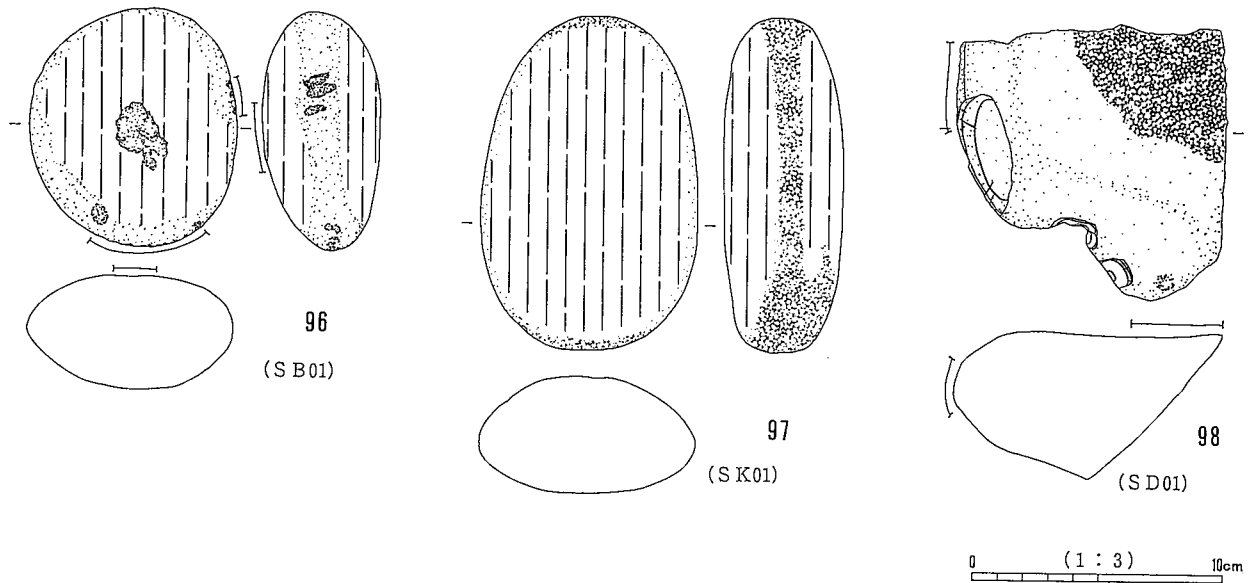
第54図 がまん淵遺跡 縄文時代石器(2)



第55図 がまん淵遺跡 縄文時代石器(3)



第56図 がまん淵遺跡 縄文時代石器(4)



第57図 がまん淵遺跡 縄文時代石器(5)

れた縄文時代の遺構の覆土に含まれたと思われる。62・63は全面に研磨が及ぶが、剥離面が多く残されている。63は基部及び側縁に自然面を残し、剥片剥離の痕跡は認められない。自然礫を直接研磨し刃部を作り出したものであろう。62～65は蛇紋岩で、66は石材名不明である。

(14) 石錘 (74～85) 16点全てが扁平な楕円礫を用いた礫石錘である。長さ4.7cmから7.9cm、重さ16gから114gと大きさ、重さにも差があるが、重さでは50gを越えるものがほとんどである。1点が頁岩で他は全て安山岩である。

出土地点はB区SD01が10点、A区SQ01（土器集中区）が3点、弥生時代後期住居覆土上面が1点、その周辺の表土が2点である。礫石錘は伊那地方では弥生時代にも見られる器種であるが、本遺跡では、住居跡の床面などの明らかに弥生時代の遺物と認定できる出土状況はない。SD01とSQ01は弥生後期の遺構ではあるが、縄文時代の遺物の多くが覆土から出土しており、周辺地域の弥生時代後期の礫石錘の報告例はない。したがって、礫石錘は、縄文時代の遺物であると判断される。本遺跡では縄文時代は早期が中心となっており、石錘も早期の土器群に伴うものとするのが妥当であると思われる。長野県内の早期の礫石器の出土例は少ないが、更級郡大岡村鍋久保遺跡で報告されている。

(15) スタンプ形石器 (86) 1点のみであるが、半割した自然礫の半割面からの剥離痕が認められる。半割面に敲打痕は認められない。スタンプ形石器は、撚糸文系土器群に伴う石器とされており、本遺跡でも2点の撚糸文系土器が出土しており、これに伴う石器と思われる。

(16) 敲石 (87) 端部に敲打痕のある棒状の礫が9点出土した。全て安山岩である。87は棒状の自然礫の両端に敲打痕が認められ、敲打により剥片剥離が生じている。

(17) 特殊磨石 (88～91) 6点中4点が折れている。石材は、5点が安山岩、他は石材名不明である。特殊磨石は、中部高地では押型文土器に伴う石器とされるが、本遺跡では押型文土器は出土していない。本遺跡で主体となる土器はII群III群土器であり、これらの土器群のいずれかに伴う石器である蓋然性が高い。しかし、これら沈線文系土器群に伴う特種磨石は確認されておらず、多摩丘陵では撚糸文土器に伴うものも確認されていることから、スタンプ形石器と同様に撚糸文土器に伴うことも否定できない。

(18) 磨石・凹石 (92~97) 92は滑らかな磨り面に敲打によるわずかな凹み、側縁部には敲打が認められる。93・94は敲打によるわずかな凹みが認められる。95は表裏両面に敲打による深い凹みがある。96は表面に滑らかな磨り面と敲打によるわずかな凹みが見られ、側縁の2か所に敲打痕が認められる。97は表裏面の磨り面と側縁全周の敲打痕が認められる。

(19) 台石・石皿 (98) 3点出土。平坦な敲打もしくは磨れた機能面を持つものであるが、全て破片資料のため全体の形状、大きさは不明である。厚さは3点とも6cm~7cmと共通性を持つ。98は正面平坦面に敲打痕があり、側縁にも一部敲打が見られる。

(20) 剝片 総数出土点数675点で、その内訳は黒曜石438点、安山岩・粘板岩・頁岩162点、チャート49点、メノウ4点、珪質頁岩2点、不明20点である。安山岩・粘板岩・頁岩については判別ができなかったので一括してカウントした。

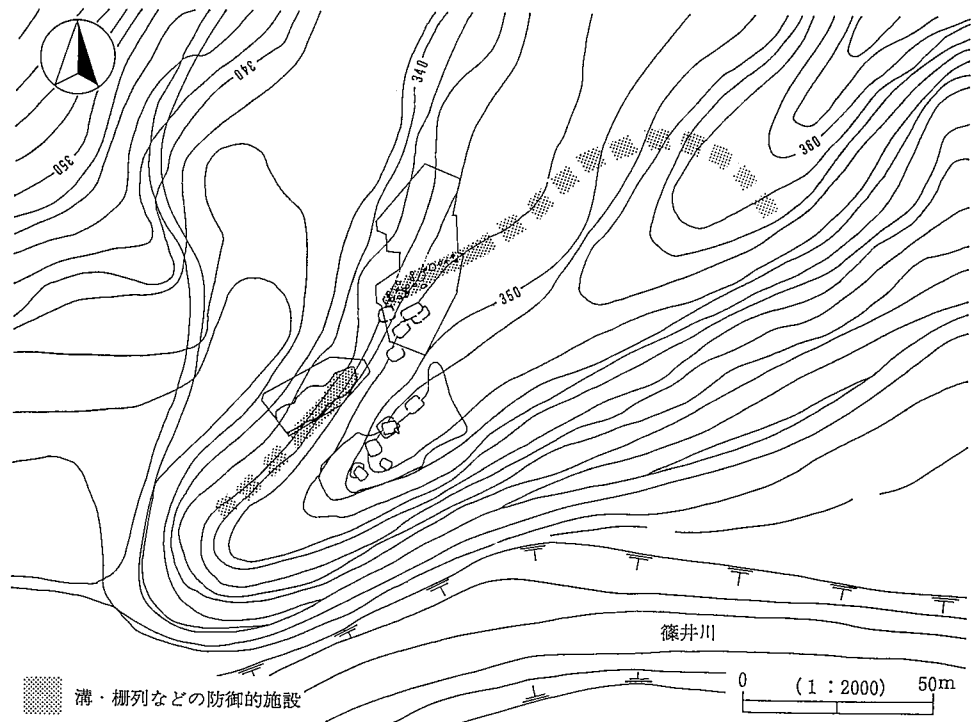
(21) 石核 (67~70) 総出土点数26点で、黒曜石16点、チャート5点、安山岩・頁岩3点、凝灰岩1点、不明1点である。図示したものは69が黒曜石で、他はチャートである。

(22) 原石 (71~73) 3点出土し、いずれも黒曜石の板状のもので、重量はそれぞれ12g、15g、23gである。石核の重量と比較すると、69は36gと原石に比べ大きいのが、これを除いた黒曜石の石核は4g~12gで平均値7gとなり、いずれも原石より小さい。これらの原石が石核として使用可能な大きさであるといえる。

第4節 弥生時代の遺構と遺物

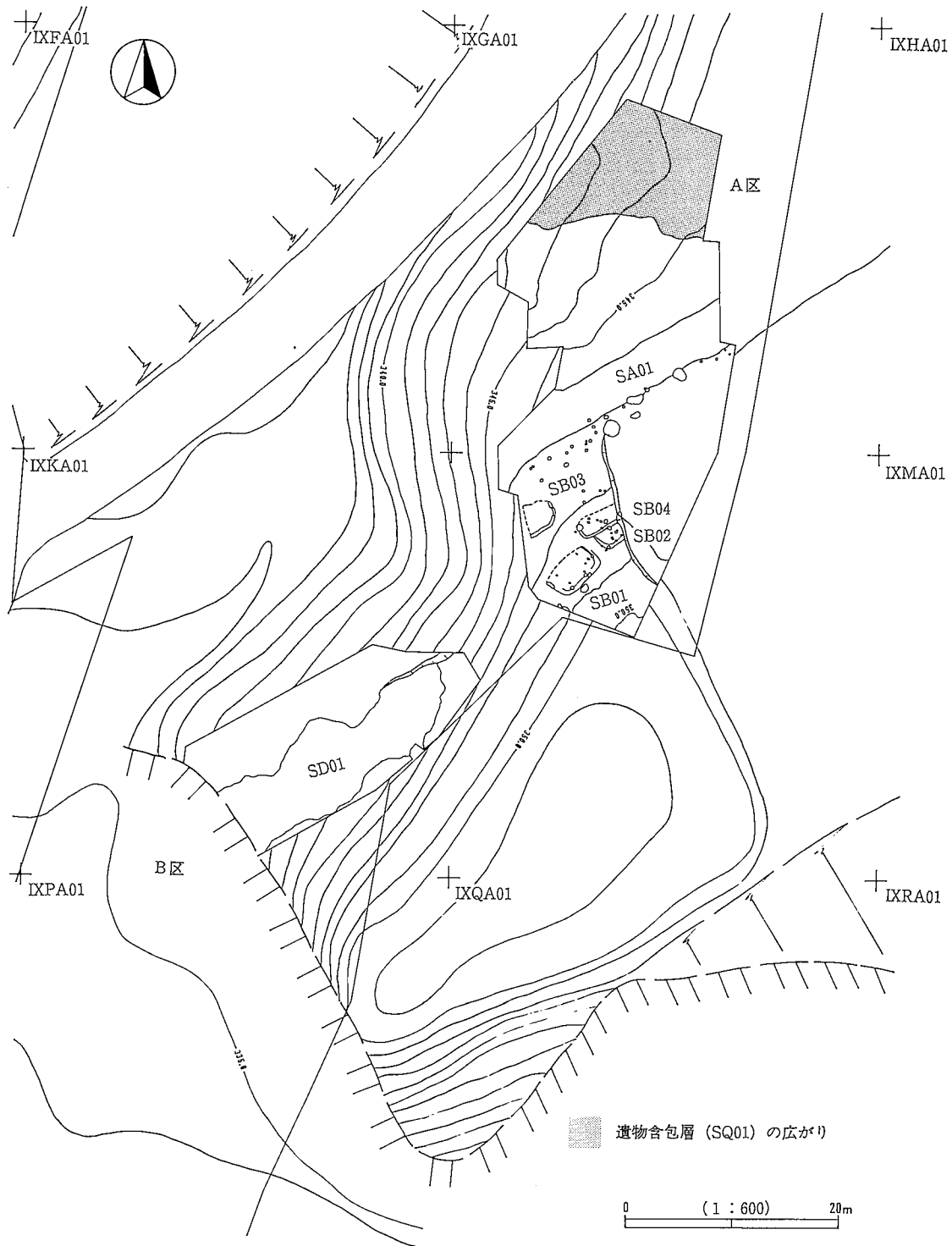
1 概要

調査区は丘陵平坦部の西端の斜面部で、集落西端にあたりと考えられるA区では竪穴住居址5、柵列1、遺物包含層(遺物集中区)1が検出され、B区では溝が確認された(第59図)。集落が丘陵の尾根上に立地し、集落を巡ると思われる柵列と溝の存在から防御的集落の様相を示していると判断される。また、竪穴住居址



第58図 がまん淵遺跡 防御的集落の想定図

は斜面に立地していたため床面の半分以上は流失しており、出土遺物は少ない。大半の遺物は、遺物集中区とした包含層と溝跡から出土した。土器の他に鉄鏃、ヤリガンナ、紡錘車、土製勾玉、管玉が出土した。なお、集落の中心部と考えられる尾根の半分以上は調査以前に牧場造成のために削平されており、削平を免れた尾根の平坦部は1992年中野市教育委員会によって調査が行われて、同時期の竪穴住居址などが検出されている。第58図は削平以前の旧地形に、中野市教育委員会調査区の住居址の位置も合わせて示したものである。この他に尾根上の標高360m付近に2棟の竪穴住居址と尾根を横断する溝が検出された。この溝



第59図 がまん淵遺跡 弥生時代後期遺構配置図

と住居址の位置は示せないが、すべて一連の遺構群とし、防衛的集落の全体を想定したものである。なお、地形図は昭和42年の航空写真より図化した。

2 竪穴住居址

SB01 (1号住居址) (第60・61図)

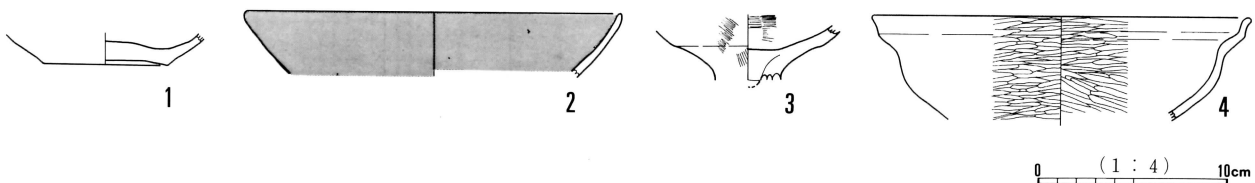
本遺構は調査当初は土坑という判断からSK01の遺構番号を付したが、調査途中で住居址と判明しSB01に変更した。

遺構の構造 斜面下方は床が流失し、南西壁の立ち上がりが無く、全体の規模と形状は確認できない。柱穴の位置から推定復元すると5.02m×3.70mの長軸が等高線に平行する長方形となる。P5とP6が柱穴で、床面からの深さはそれぞれ、34cm、20cm、他に柱穴に相当するピットは見当たらない。P2とP3が配置的には柱穴の可能性はあるがP5・6に比べ浅い。周溝が認められ、周溝に重なってピットが検出されているが、本遺構に関連する施設か否か確認できなかった。なお、周溝の一部がとぎれているが、床面を掘り過ぎたために周溝が確認できなくなったためである。炉は、同一の床面に3か所の焼土跡が確認された。いずれの焼土跡も皿状にくぼんだ面が焼けた地床炉である。ピットの深さはP2が6cm、P3が14cm、P4が6cm、P7が15cm、P8が11cmである。

出土遺物 (第60図) 1は甕の底部と思われるが、摩滅により表面の調整は解らない。2の赤彩された高杯は内湾傾向を示す口縁で、本遺跡で見られる有稜の高杯とは様相を異にする。3の高杯は外面にハケメが見られ、杯部内面もハケ調整の後ナデ調整を行っている。4は有段口縁の鉢である。1～3は住居址覆土出土、4はP1内より出土した。

土器以外では、覆土中より鉄鏃、碧玉製の管玉、土器片を加工したと思われる有孔土製品が出土した。(第73図1・5・7)

時期 出土遺物から弥生時代後期箱清水式期。

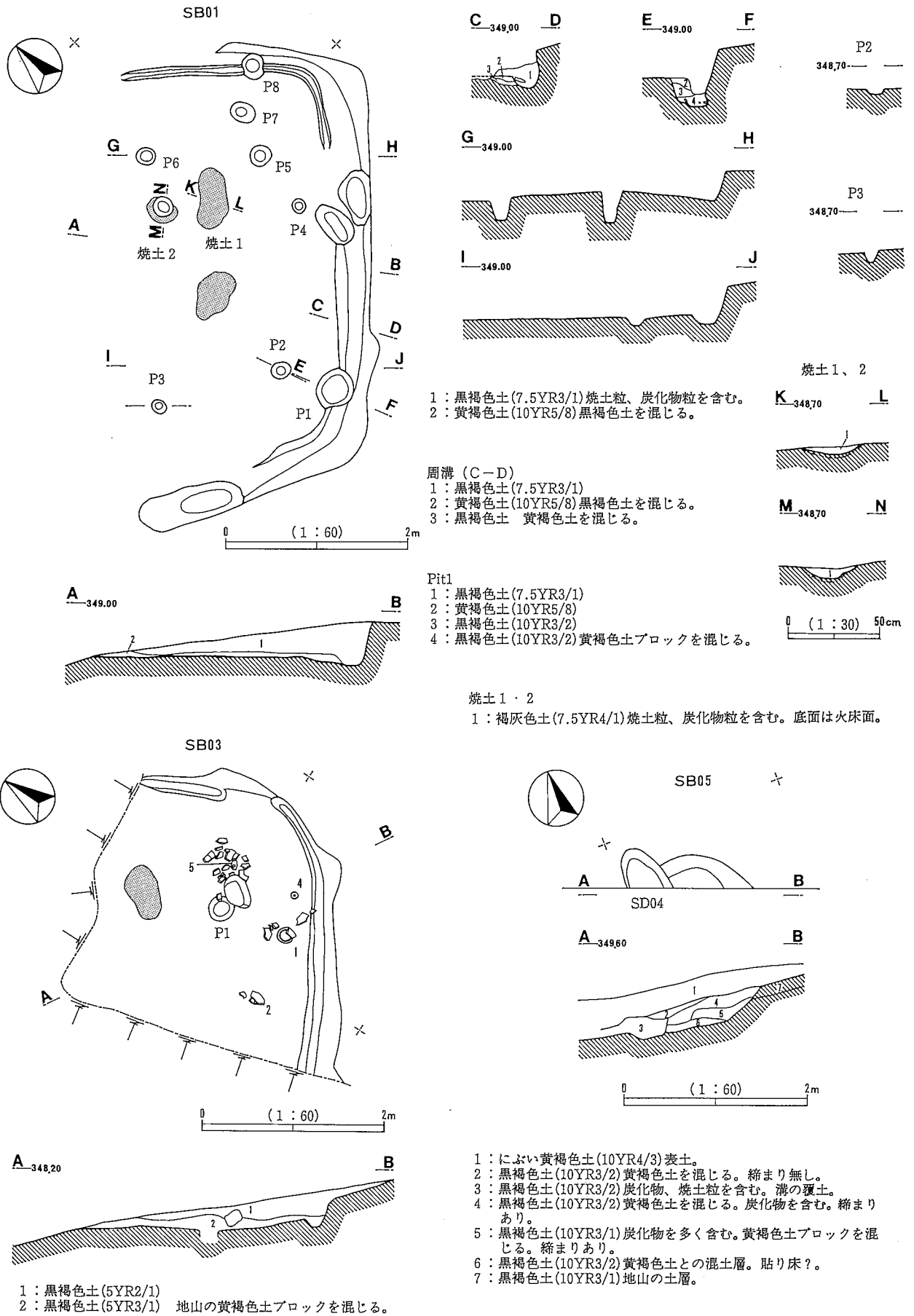


第60図 がまん淵遺跡 SB01出土土器

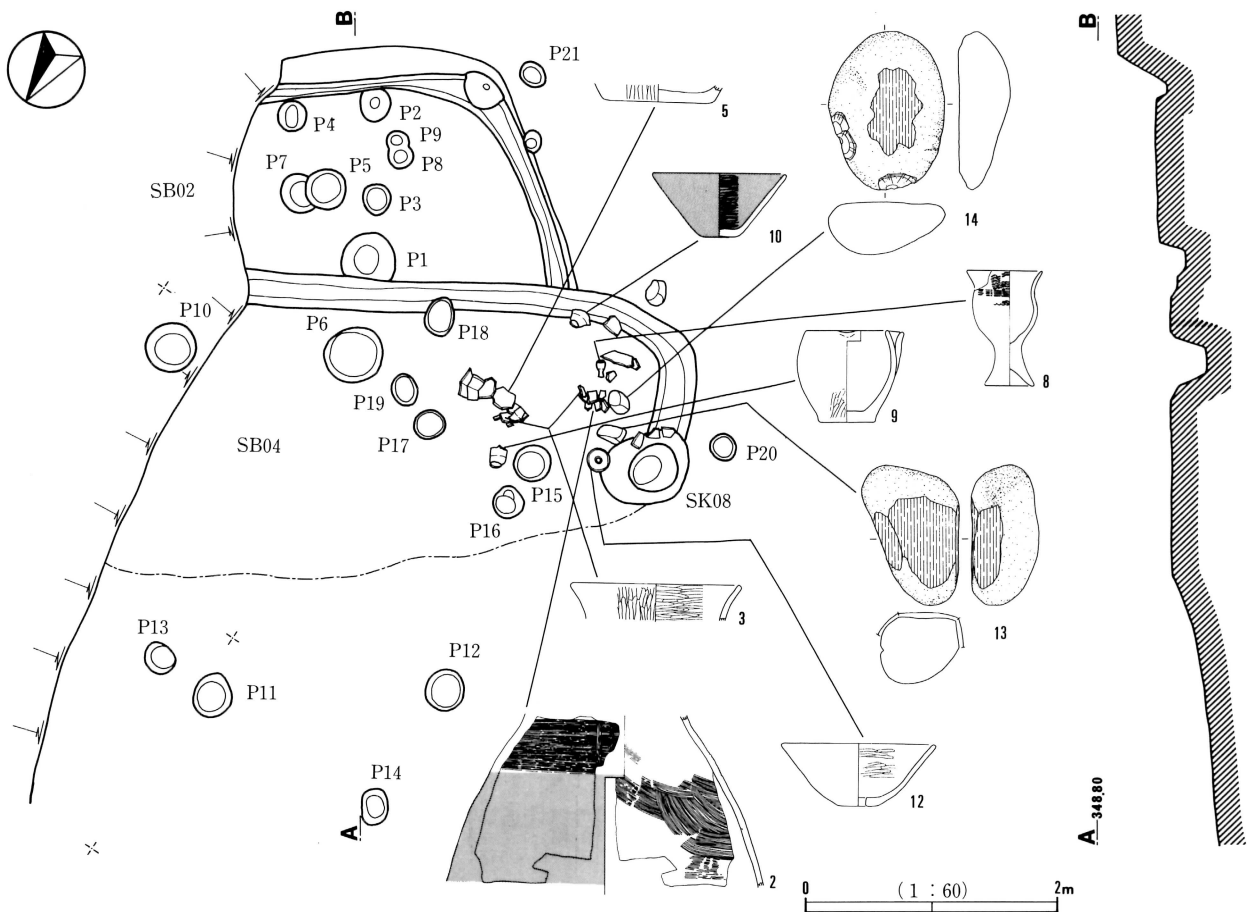
SB02・04 (2号・4号住居址) (第62・63図)

当初一つの遺構として調査を進めたところ、二棟の切り合う住居と確認され、南側をSB02北側をSB04とした。したがって、SB04の床面以外の遺物はSB02の遺物として取り上げている。床面のレベルはSB04の方がやや低くなるが、覆土での切り合い関係は観察できなかった。SB04の周溝がSB02の周溝を切っていることからSB04の方が新しいと判断した。

遺構の構造 SB02は東側は牧場の造成による削平とSB04により切られており一部が残存しているのみである。残存部では幅10cm、深さ5cmの周溝が確認された。SB02の周溝はSB04の床面には確認されないことから、SB04がSB02の床面を壊して作られていることが確認できる。炉跡は確認できない。柱穴は特定できないが、P1またはP5が床面より20cmの掘り込みを持っておりその蓋然性が高い。SB04も東側は牧場の造営によって削平されており、北側の斜面下方は床面が流失し、周溝の一部が確認されたのみである。炉跡は検出されず、柱穴も特定できなかった。検出されたそれぞれのピット



第61図 がまん淵遺跡 SB01・03・05



第62図 がまん淵遺跡 SB02・04

の床面からの深さは、P1が20cm、P2が7cm、P3が14cm、P4が8cm、P5が20cm、P6が25cm、P8が9cm、P9が7cm、P15が28cm、P16が30cm、P17が13cm、P18が15cm、P19が14cm、床面が失われている部分にあるピットはP10・11・12・13の底のレベルがP16とほぼ同じく、P14は更に10cmほど深い。

出土遺物と出土状況(第63図) SB02とSB04のいずれも覆土中の出土遺物は少ない。2・3・8・9・10・12・13・14がSB04の床面、5がSB04の覆土出土で、他はSB02とSB04のいずれに属するか確認できない。1・2・5・6は壺形土器、3・4・8は甕形土器で8は器面の摩滅が著しく楯描波状文と頸部の簾状文がわずかに確認できる。7は高杯、9は内湾口縁鉢、10・11は鉢形土器、12は有孔鉢形土器、13・14は片面に研磨面を持つ約5kgの石英製の砥石と思われ、2点並んで出土した。

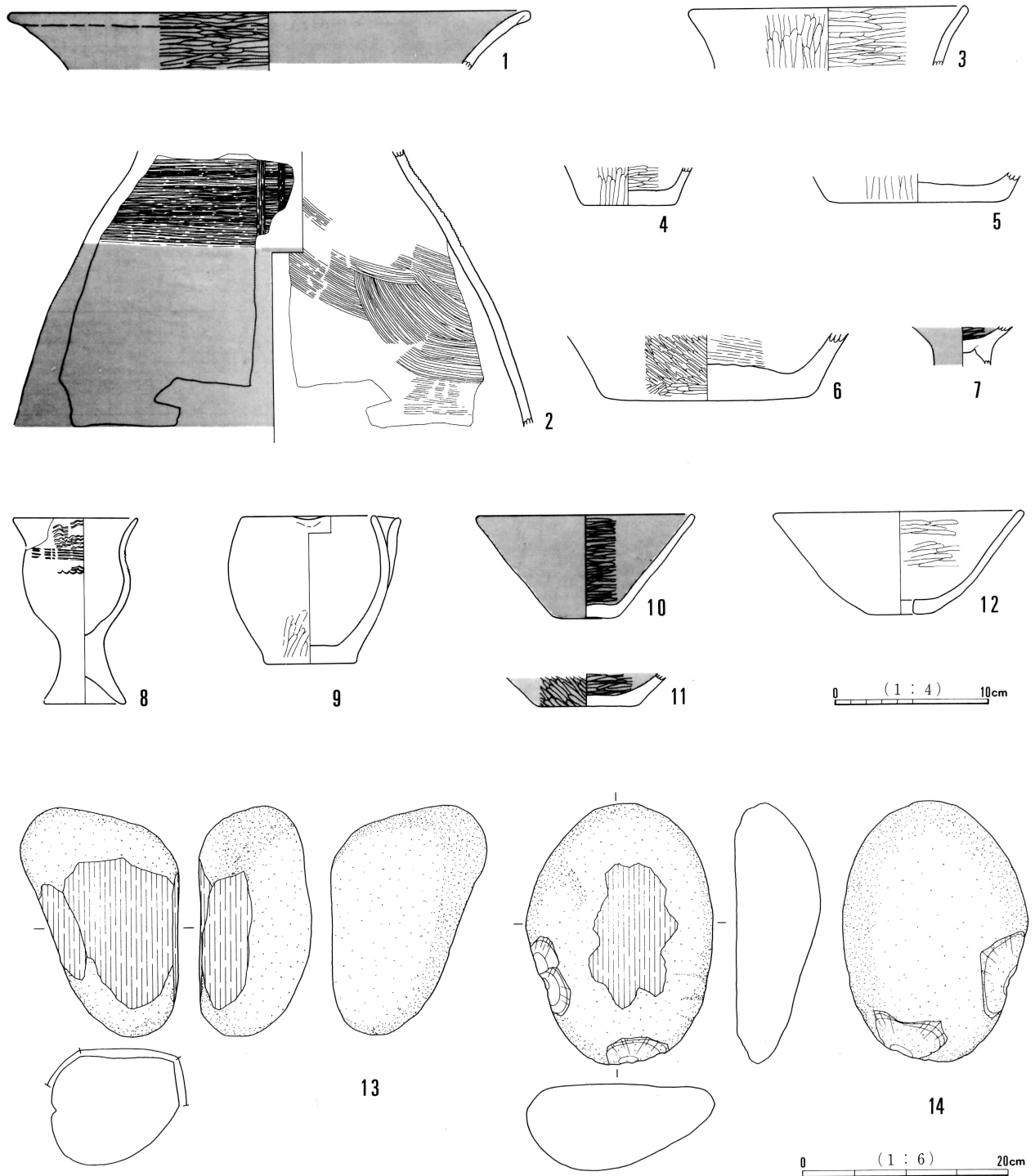
時期 出土遺物からいずれも弥生時代後期箱清水式期。

SB03 (3号住居址) (第61・64図)

斜面下方は床面が流失しており、全体の四分の一ほどが残存している。周溝は竪穴住居の東隅付近でおよそ50cmにわたり途切れる。床面に火床面が認められ地床炉であったと思われる。柱穴はP1が確認されたのみである。P1に隣接し、床面からわずかに上層で人頭大の礫が出土した。

出土遺物と出土状況(第64図) 遺構図に図示した遺物は床面より5cm~10cm上層より出土したものである。1は頸部が「く」の字に折れる壺形土器であるが、摩滅がひどく表面にわずかにハケ調整の痕跡が認められるが、詳細不明。2は粗雑な波状文と簾状文が認められる箱清水式の甕形土器、3・4は甕形土器の底部、5は有孔鉢形土器である。

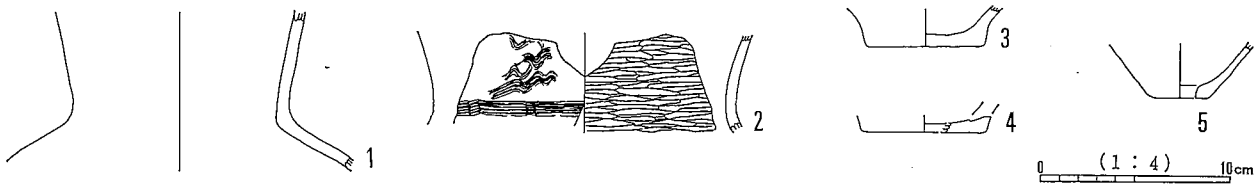
時期 出土遺物から弥生時代後期箱清水式期。



第63図 がまん淵遺跡 SB02・04出土遺物

SB05 (第61図)

遺構の大半は調査区外にあり、直角に曲がるコーナーのみを検出した。形状から竪穴住居跡と推定したが出土遺物はなく時期も確定できないが、覆土の類似から他の竪穴住居跡と同様に弥生後期と推定される。SD04に切られている。



第64図 がまん淵遺跡 SB03出土土器

3 柵列・溝

SA01 (1号柵列・Pit1～Pit26) (第65図)

A区の遺構検出面の347.0mの等高線に沿ってピットが並んで検出された。これらのうち柱穴状のピットは直径18cm～34cm、深さ12cm～48cmと大きさが規格的でない。柱痕は確認されなかった。ピット群は配列、覆土の類似から同一時期のものとして判断される。ピット列の南西方向の延長線上は原地形がかなり急斜面をなしており部分的に検出作業を行ったがピットは検出されず、同一等高線上の更に先には同時期の溝跡SD01が検出された。また北東方向の延長線は調査区外であり、旧地形がかなり変更されていることから、どのように続くのか想定し難い。ピット群は旧地形の等高線に平行して並んでおり、その配列からは建物とは考えられない。さらにピット群より標高が低いところには住居址が確認されないところから、柵列のような集落の境界を区切る施設を想定したい。

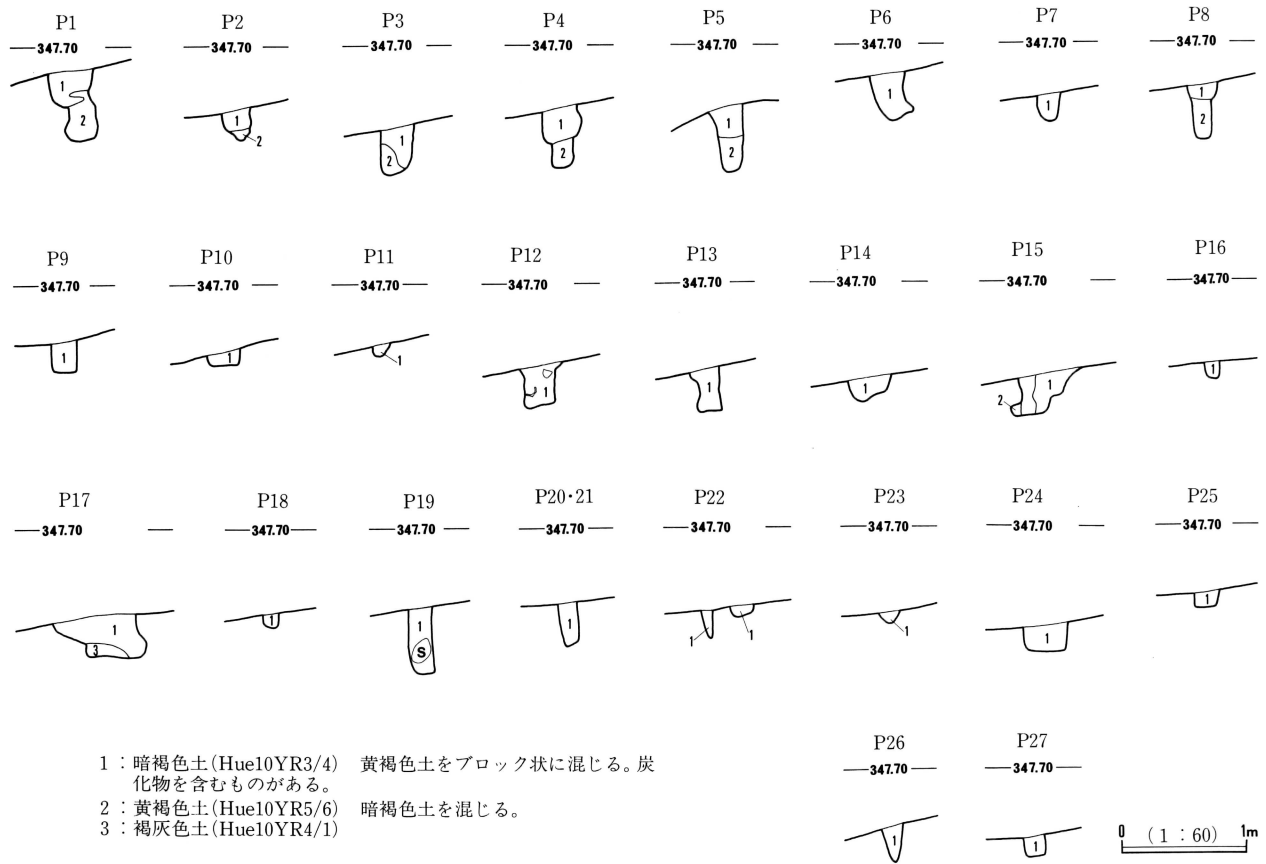
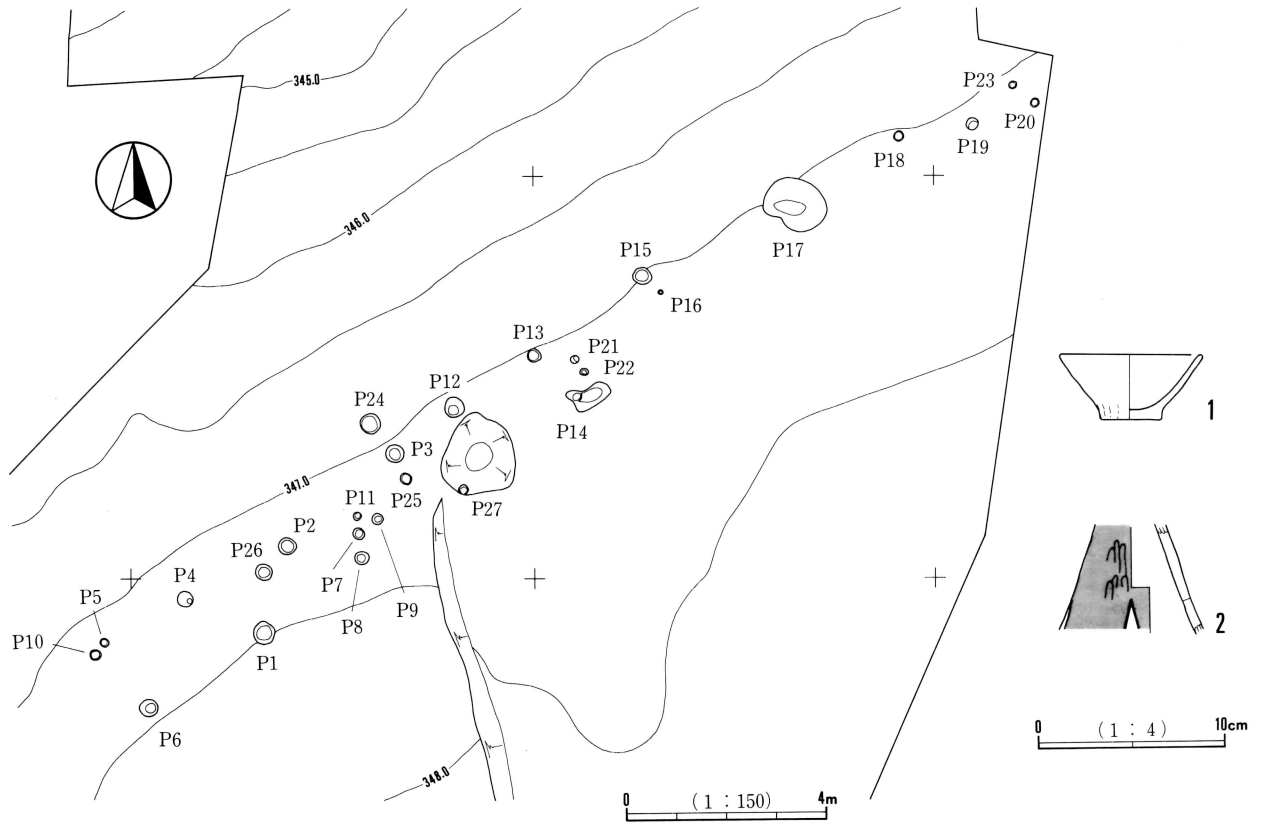
遺物はP12よりミニチュアの鉢形土器(1)が、P21より三角形透かしが認められる赤彩された高杯の脚部(2)が出土している。いずれも弥生後期箱清水式に見られるもので、ミニチュアの鉢形土器は完形で出土しており、中野市の七瀬遺跡、栗林遺跡などにも類例がある。

時期 出土遺物から弥生時代後期箱清水式期。

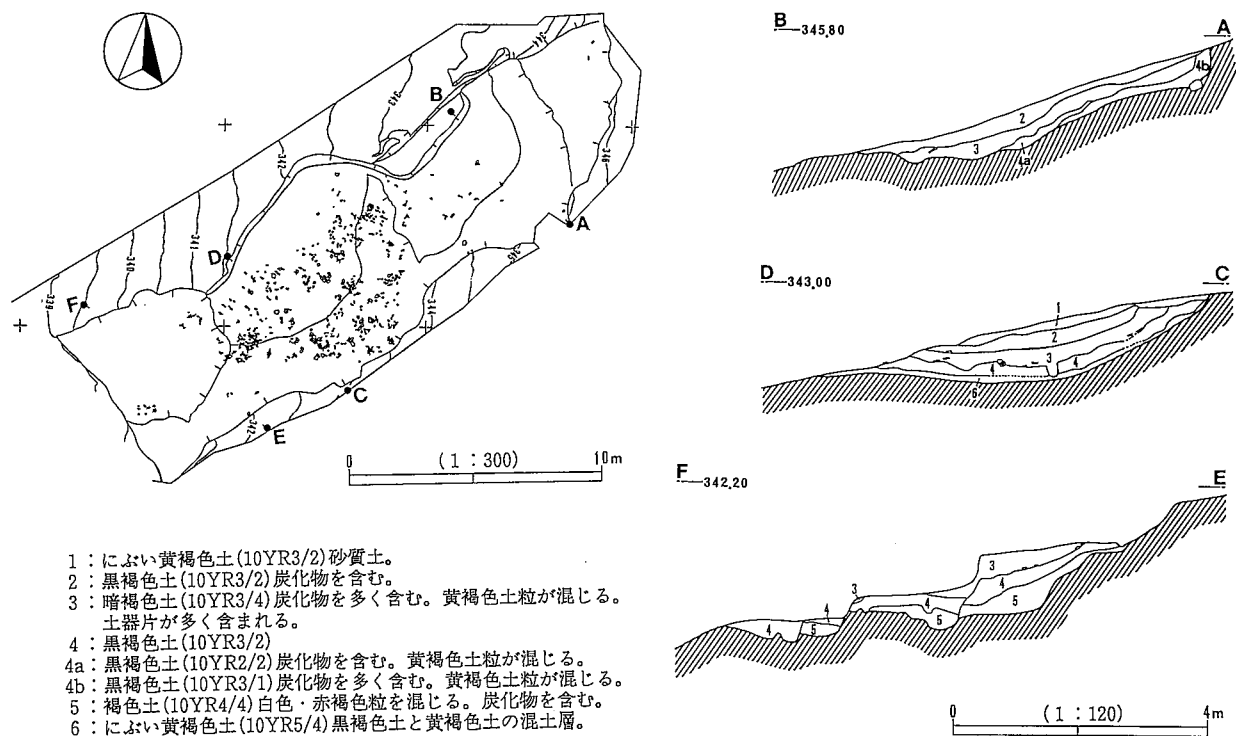
SD01 (第66図～第71図)

丘陵の斜面部中腹に確認された不整形な溝である。溝の山側の立ち上がりは明瞭に捕らえられるが谷側は立ち上がりははっきりせず、溝というよりはテラス状の断面形を示す。また、溝の内部には4段の段差が見られ整った形をしていない。これは地滑りにより遺構の形状が変更された結果と思われる。遺跡が立地する丘陵は地滑り地帯に指定される地滑りを起しやすい地質であり、セクションE-Dの土層を見ると4層5層に断層が確認される。溝の底面の段差と平面形状のずれが一致している。以上の点からSD01は本来等高線に平行していた溝が土砂崩れにより現在の不整形な形状になったものと判断される。すなわち、地滑りの際丘陵先端側がより大きく崩れたために、検出された溝は等高線に斜行する形となったと判断される。地滑り・断層が生じた時期は、4層がずれていることから4層堆積終了以降であることは間違いない。覆土中の遺物は3層と4層に包含されており、地滑りは遺物の廃棄継続中または廃棄終了後に起きているものと判断される。

遺物出土状況 深さ13cmのテン箱に約20箱分の土器が出土した。前述のとおり出土遺物の大半は3層と4層に包含され、特に3層から多数の土器と炭化物が出土した。平面的には検出された溝の中ほどにより多くの土器が出土している。溝の底面から出土する土器はなく、溝がいくら埋まってから遺物が入ったことが観察される。特に3層下部にある程度面的に出土していることから、遺物の多くは溝が少し埋没した時点で一時期に廃棄したものと思われる。なお、遺物取り上げに際し、2・3層を上層、4層を下層とした。



第65図 がまん淵遺跡 SA 0 1



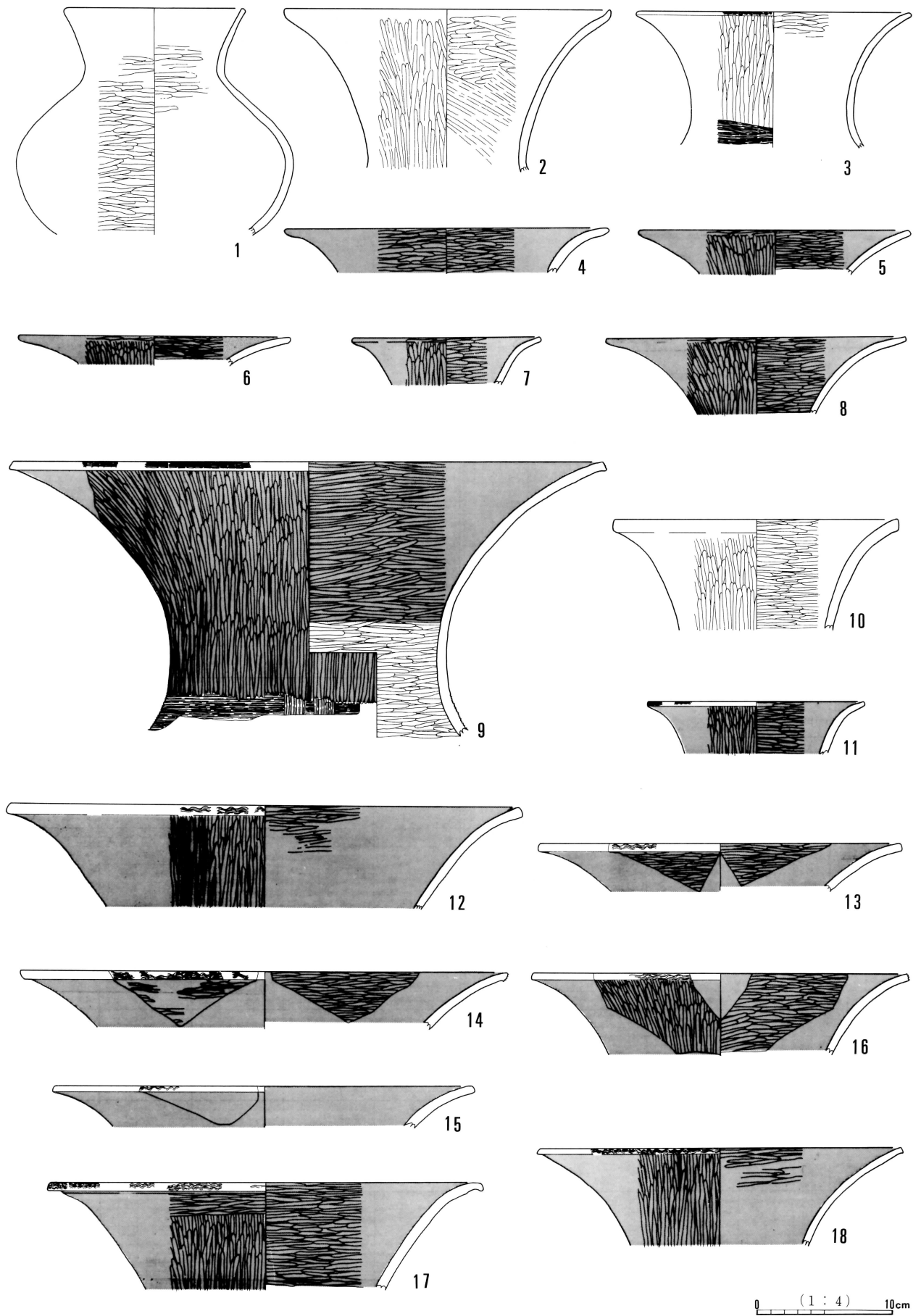
第66図 がまん淵遺跡 S D 0 1 遺物出土状況

出土遺物(第67図～第71図) 1～19・21～31・33・114～116は壺形土器で、1以外は箱清水式の壺の範疇で捕らえられる。1は他の壺形土器と違い口縁部が短く余り開かない。表面の器面調整は摩滅のため解りづらいがミガキ調整が観察される。2・3・10には赤色塗彩が見られない。27・28・114～116は2条のT字文にボタン状貼り付けが見られ、114は無文のボタン状貼り付け、27・116は串状工具による刺突がなされたボタン状貼り付け、28・115はへら状工具で一文字が刻まれたボタン状貼り付けが見られる。また、116の楯描直線文の下には簾状文が施文されている。33は口縁部に突起を持つもので、壺形土器では他に類例が見られない。

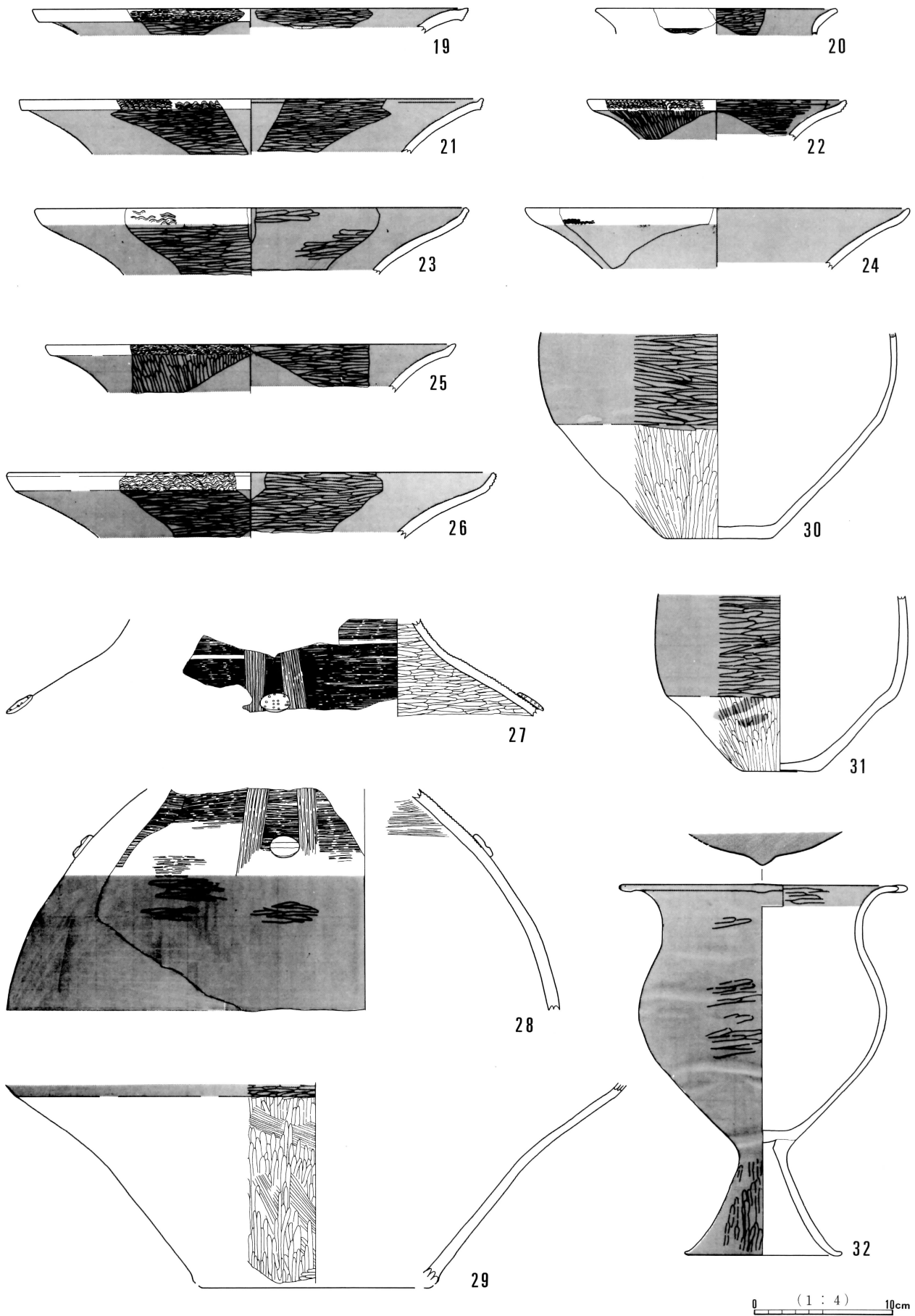
20・32・34～38・104は広口短形壺で、20・34・104は頸部に簾状文が見られ、20は内面のみ赤色塗彩された小破片である。35～38は口縁部に2孔1対の穿孔が見られ、36・38の口唇部は面取りがなされている。

39～73・117～123は甕形土器で、59～73は台付甕である。楯描波状文と楯描簾状文の施文順位が観察されるものは全て、先ず簾状文を描き次に波状文を口縁部側から下に向かって順番に施文している。53は小破片であるが、口縁部の波状文と頸部のハケ調整が見られ、七瀬遺跡の第387図289の有段口縁の波状文を持つ甕形土器に類似する特長を持つものと思われる。60は簾状文を欠く台付甕である。117～120は口縁部に波状文、胴部には縦羽状の楯描直線文が施文されるもので、119以外は頸部に簾状文を施文している。121・122は受け口状口縁の、123は折り返し口縁の甕の破片である。

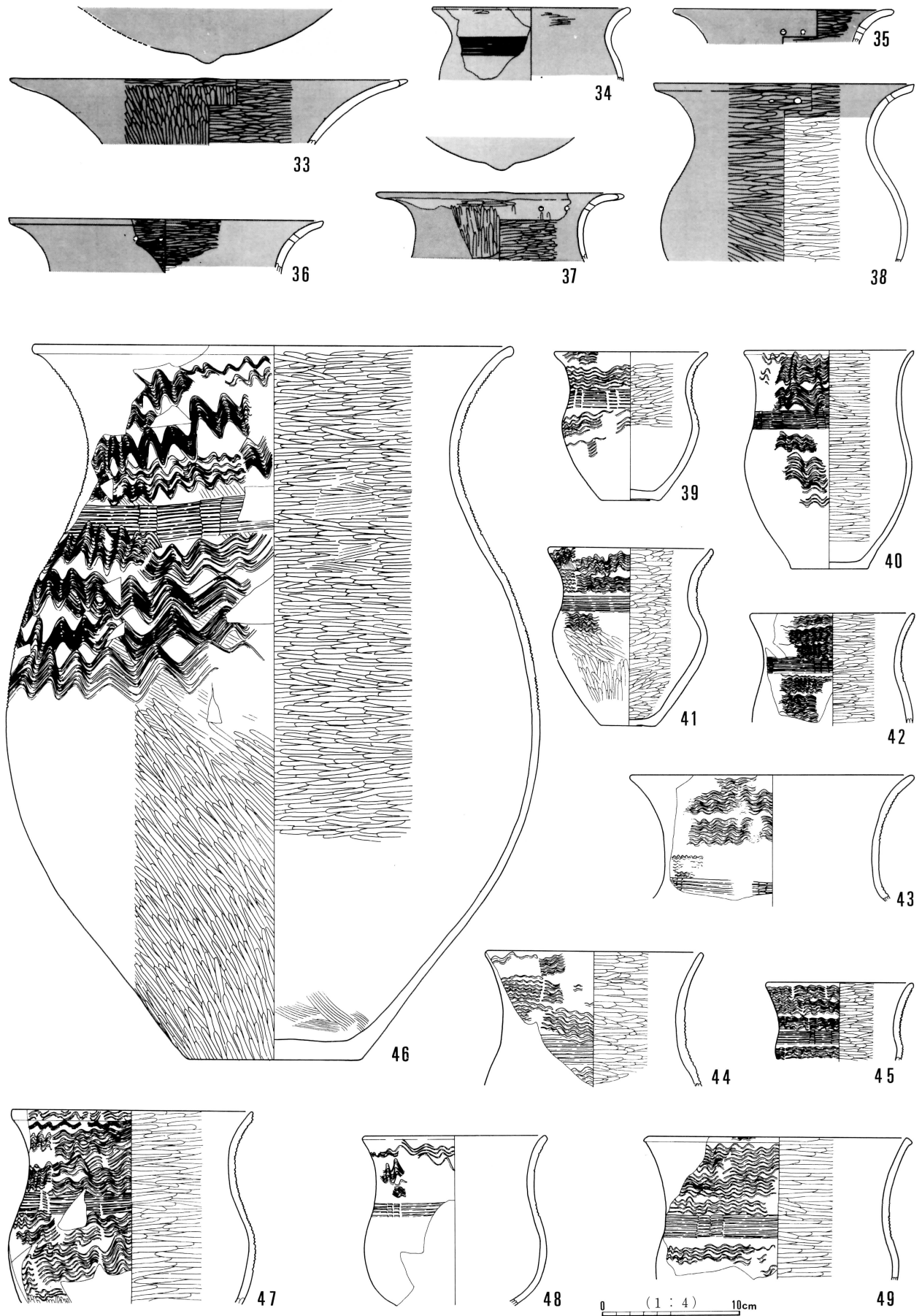
74～98・110～112は高杯である。76は杯部中位に稜を有し、脚との接合部に刻みのついた断面三角形の凸帯がめぐり、脚部には三角形の透かしが見られる。杯部については75・81のように稜が無いものも見られるが、多くは有稜の杯部である。また76・77・80・81の口縁部には小突起が見られる。87は高杯の脚部と思われ、直径4mm～5mmの焼成後の穿孔が見られる。88・111は赤色塗彩がなされず、直径5mmほどの焼成前の穿孔が見られる。91は杯部内面は赤色塗彩がはっきり認められるが、外面の器面は良好な遺存状況にもかかわらず脚部の一部にわずかにベンガラが認められるのみである。95・96には刻みのある断面三角形



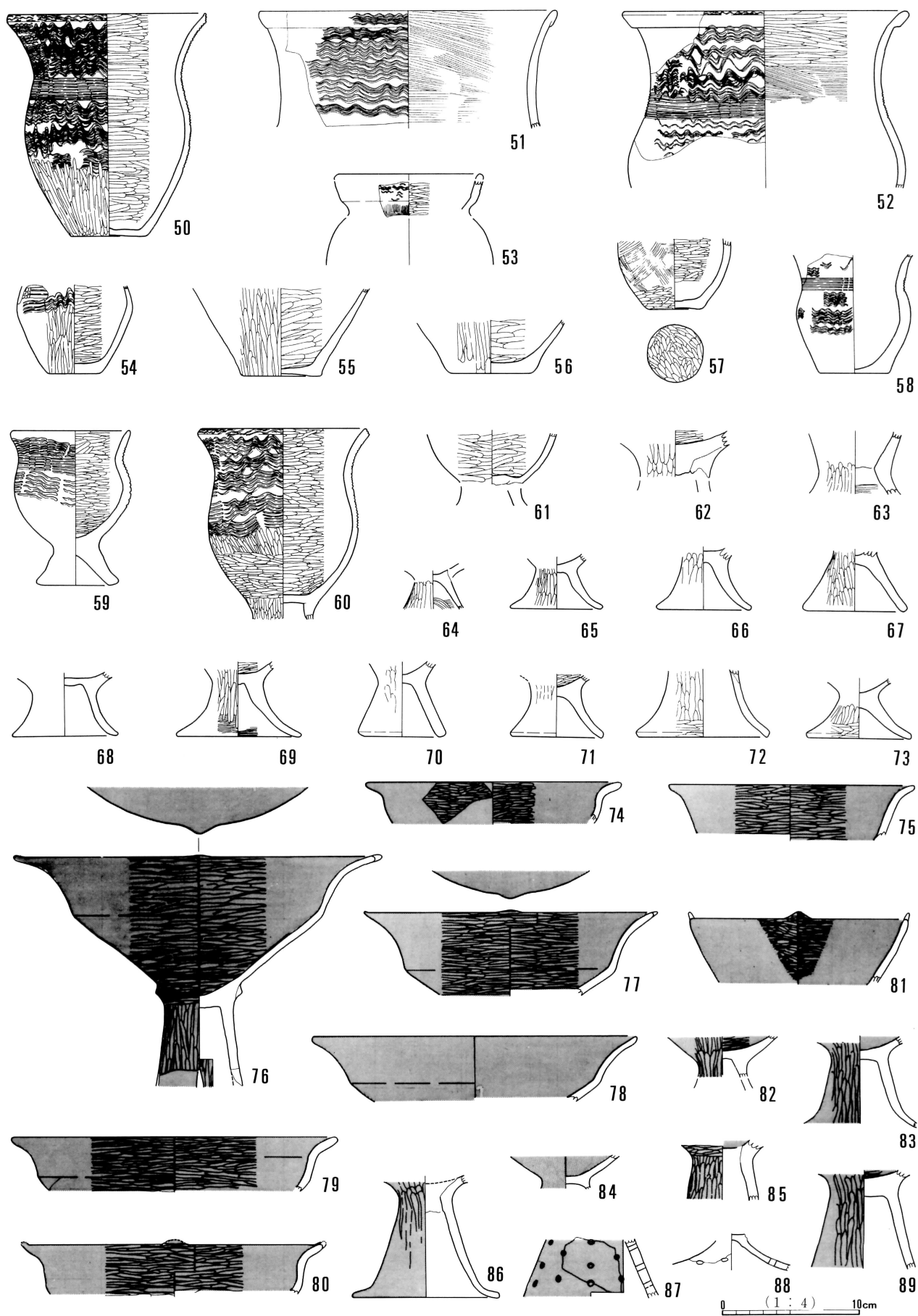
第67図 がまん淵遺跡 SD 0 1 出土土器(1)



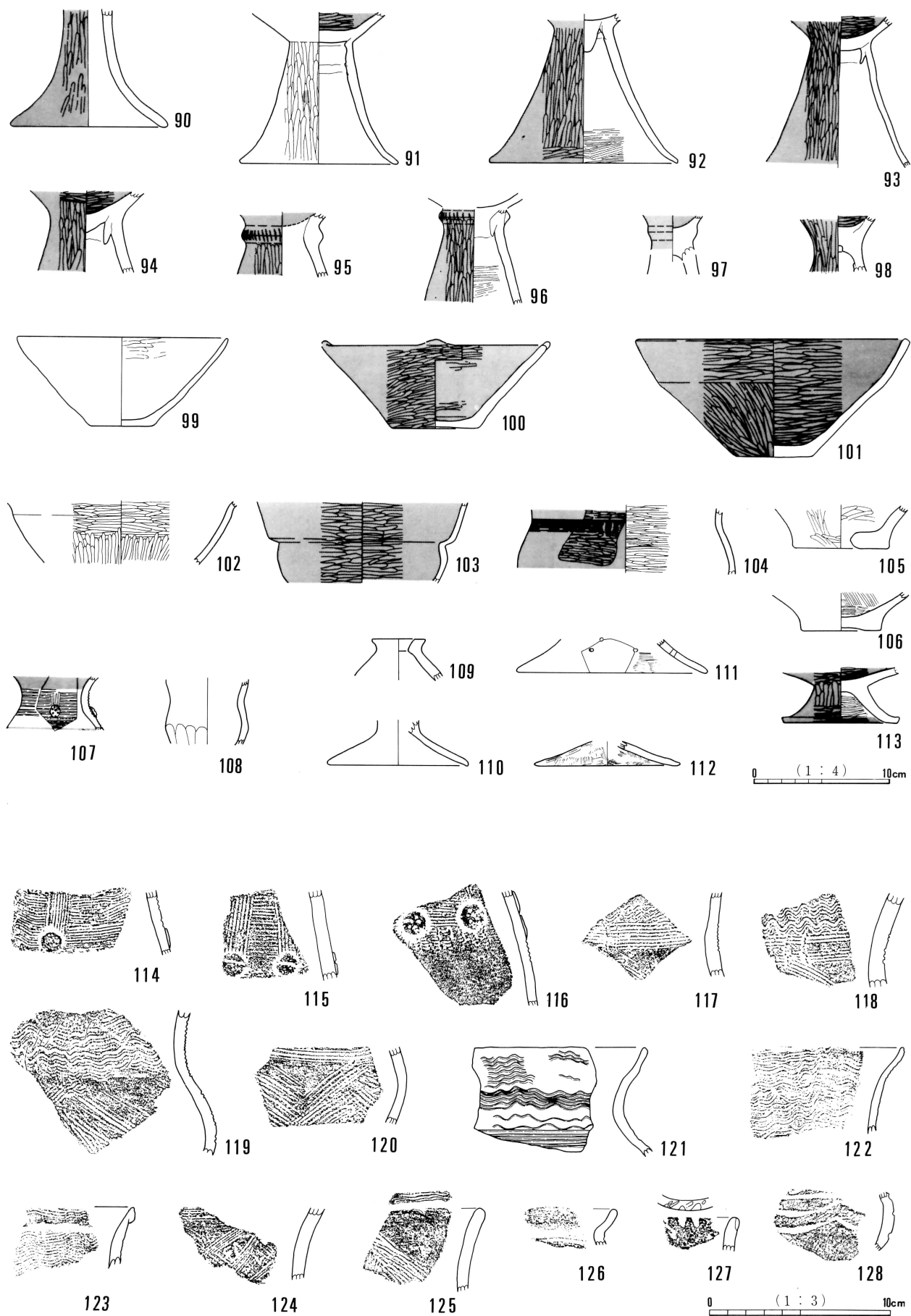
第68図 がまん淵遺跡 SD 0 1 出土土器(2)



第69図 がまん淵遺跡 SD 0 1 出土土器(3)



第70図 がまん淵遺跡 SD01出土土器(4)



第71図 がまん淵遺跡 SD01出土土器(5)

の凸帯が巡り、97には刻みの無い凸帯が巡る。98の脚部天井部には円形の棒状工具による刺突がある。

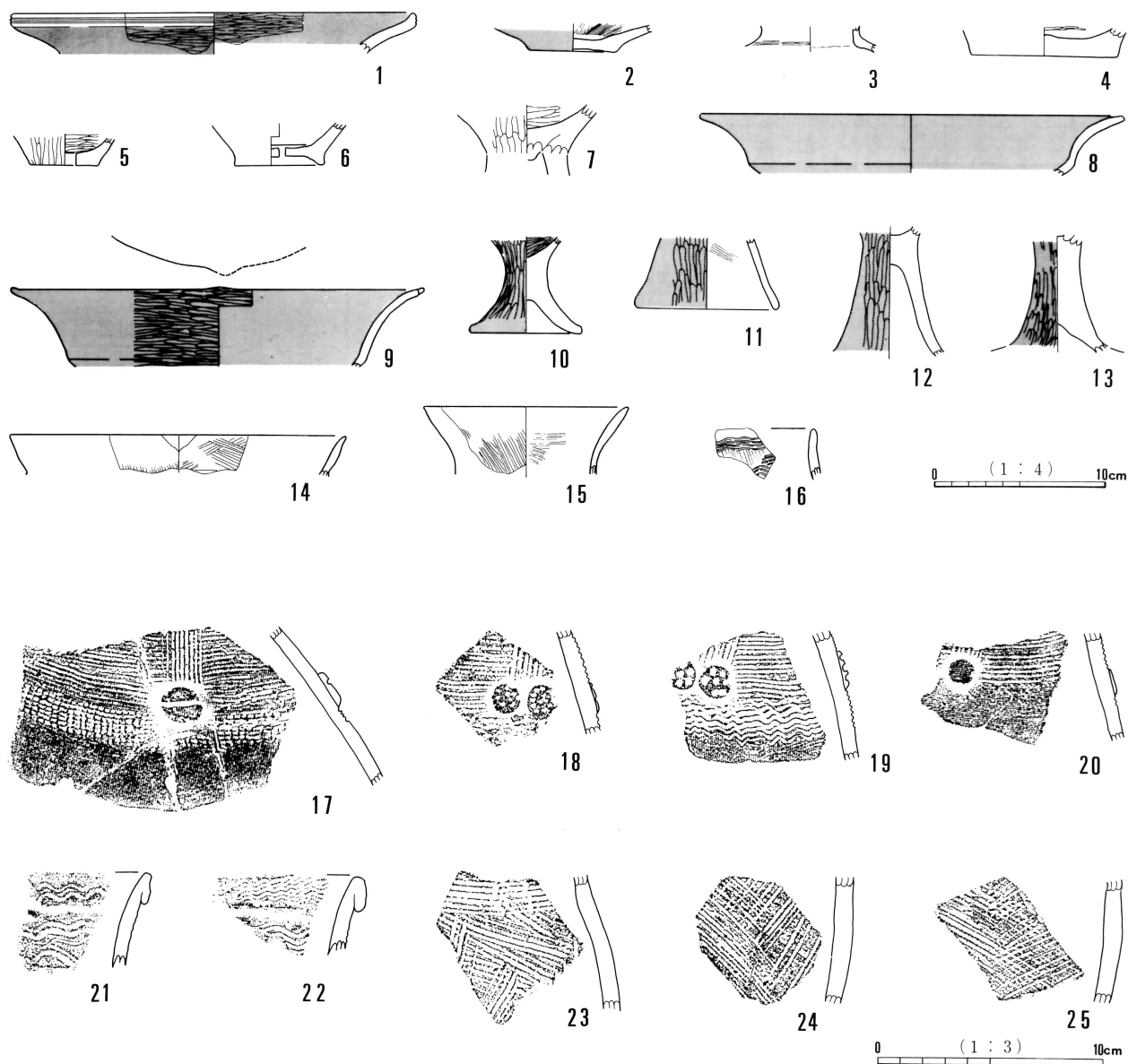
99~103は鉢形土器である。99は表面の摩滅が著しく器面調整は観察できないが、赤色塗彩はなされていない。100は小破片であったが4単位の小突起に復元実測した。105・106は箱清水式土器には見られない底部で、105は焼成前に底部穿孔されている。107・108はミニチュア土器で、108の胴上半部は縦方向の粗いナデ調整で胴下半部はケズリ調整が見られる。103・113は箱清水式の他の土器と比べ胎土に石英を多く含み特徴的な胎土である。

124~128は弥生時代中期の破片で、図示していないが奈良時代の須恵器破片が数点出土した。土器以外では、鉄製のヤリガンナと土製の紡錘車が出土した(第73図2・4)。

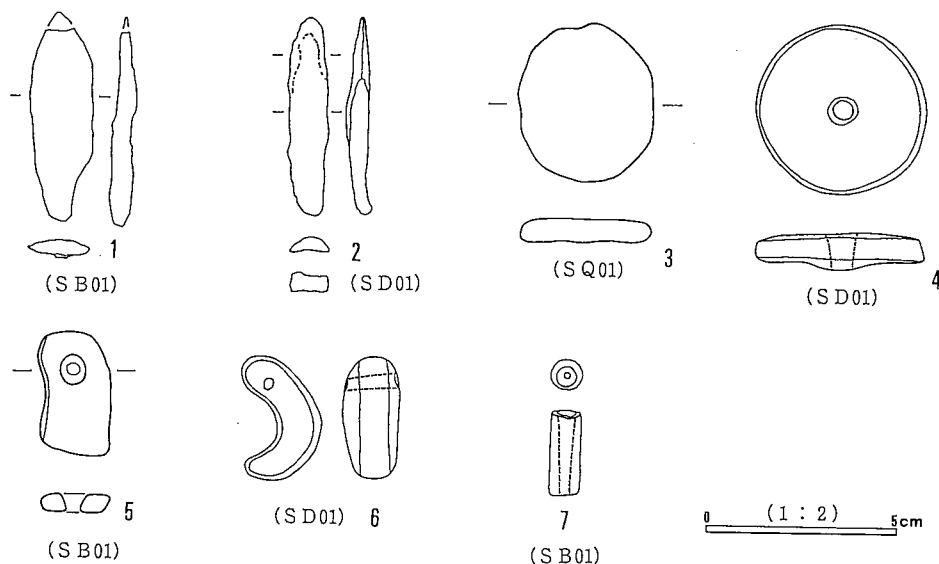
時期 出土した土器から弥生時代後期箱清水期である。

4 遺物包含層 (SQ01)

A区の集落域の斜面下方に黒褐色の遺物包含層が広がる(第38図)。原地形からは観察されないが、表土



第72図 がまん淵遺跡 SQ01出土土器



第73図 がまん淵遺跡 鉄製品 土製品

を剥いだ遺構検出面の微地形を見ると、丘陵の斜面にノッチ状にえぐれた地形をなしていたと想定される低く窪んだ部分に包含層が形成されている。黒褐色土の遺物包含層は約35cm平均の層厚で、遺物は上半部に多く包含されていた。

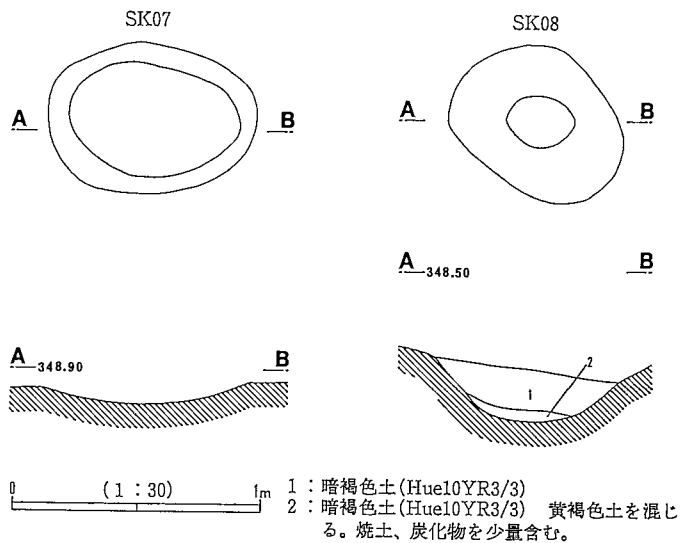
出土遺物(第72図) 1・15・17~20は壺形土器で、1は口縁部端部に2条の細沈線が見られる。15は外面に板状工具のナデによる浅い条線が認められる。17はT字文の下に櫛描籐状文、18・19はT字文の下に櫛描波状文が施文されている。ボタン状貼り付けも、一文字を刻んだもの、串状工具で刺突したもの、無文のもの3種類のバリエーションがある。2は外面に赤色塗彩、内面にはハケ目調整が見られる壺形土器の底部、3は「く」の時に屈曲した壺形土器の頸部で櫛描直線文が認められる。5・6は焼成前の底部穿孔がみられる。8~13は高杯で杯部はいずれも中位に稜を有する。7・14・16・21~25は甕形土器である。7は台付甕、16はハケ調整の後櫛描波状文が施文される口縁部破片、21・22は櫛描波状文を施文した折り返し口縁、23~25はSD01の119に見られるような口縁部に櫛描波状文、胴部に縦羽状の櫛描直線文を施した甕形土器の胴部破片であろう。14は口縁外面はヨコナデ調整、頸部と口縁内面にハケ調整が認められる。なお、14~16は小破片のため口径と傾きが不正確であることを明記しておく。

土器以外では、土製勾玉1点、円板状土製品1点が出土している。(第73図3・6)

5 土坑

SK07・08 (第74図)

弥生時代の土坑と確認できるものは2基で、SK07はSB01の斜面上方に位置する84cm×60cmの楕円形の土坑で、深さ8cm。出土遺物はなく、覆土

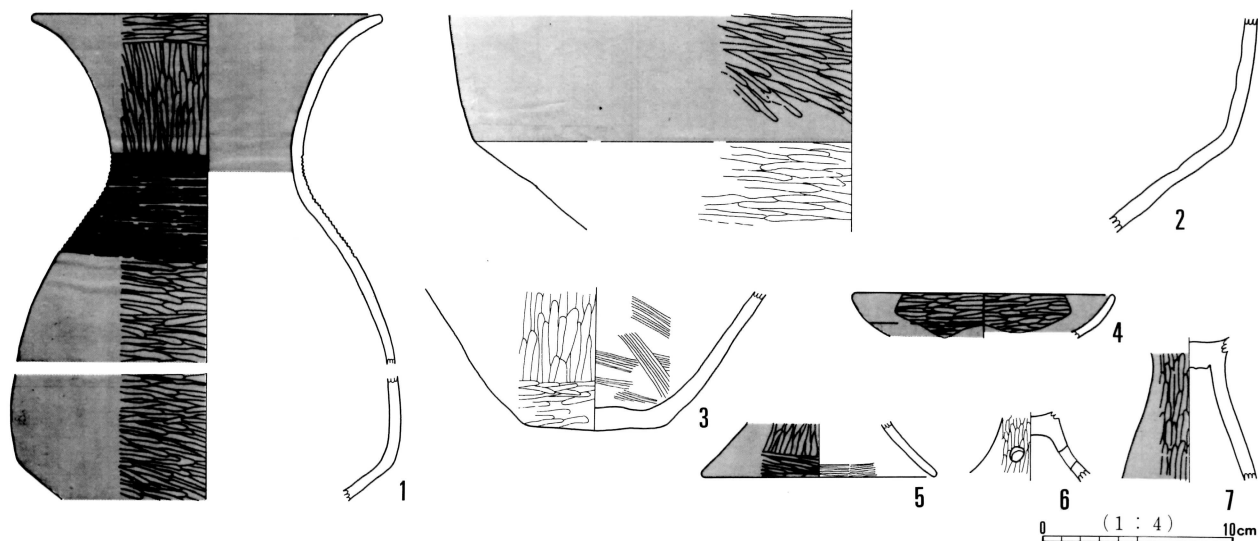


第74図 がまん淵遺跡 SK07・08

が弥生時代後期の住居址に類似することから同時代のものと判断した。SK08は72cm×54cm、深さ25cmの楕円形で、SB04と切り合うが前後関係は確認できなかった。出土遺物は、弥生時代後期時の小破片が数点出土したのみである。

6 遺構外の遺物（第75図）

1・2は壺形土器で、1はT字文とボタン状貼り付けが無いと確認できる唯一のもので、胴下半の稜より下位にまで赤色塗彩が認められる。本遺跡では通例2のように稜より下位には赤色塗彩がなされない。4～7は高杯と思われ、4は赤色塗彩がなされ杯部中位に緩い稜を有する。6は赤色塗彩がなされず、外面は丁寧なミガキが認められ、3単位の円形の透かしを有する。第75図に示したこれらの遺物は住居址の遺構検出時に取り上げられた遺物で、竪穴住居址の覆土及びその周辺から出土したものである。



第75図 がまん淵遺跡 遺構外出土土器

第5節 奈良・平安時代以降の遺構と遺物

奈良・平安時代の須恵器が数点出土したが遺構は検出されなかった。

また、中世以降のものでは、SK06・SD02・SD03があげられる。SK06は直径150cmの円形の皿状に窪んだ土坑で、SD02・SD03は互いに平行する溝で、深いところでも15cm前後と浅く部分的に途切れる。いずれも覆土はにぶい黄褐色の砂質土で、隣接する沢田鍋土遺跡の覆土と比較して中世以降のものと断定できる。時代決定できる遺物はない。

第6節 まとめ

1 がまん淵遺跡縄文時代Ⅲ群土器について

がまん淵遺跡Ⅲ群土器は櫛歯状工具による条線が施文され、櫛歯状工具または棒状工具による刺突、口唇部の刻みなどの特徴が認められる。長野県内ではあまり存在が知られていなかった土器であり、その編年的位置づけが定まっていない。近年、周辺地域においても類例が見られるようになり、ようやく編年的位置づけが行われるようになった。^(註1) 本遺跡の出土土器はすべて破片資料で器形を復元できるものはない。したがって、全体の文様構成を知り得る資料がなく、部分的な文様要素と施文方法、器面調整方法により他遺跡の遺物との比較を行う。がまん淵Ⅲ群土器のまとまった出土例は山ノ内町上林中道南遺跡に見られる。また、器面調整や施文具に若干の相違はあるものの、条線と口縁部の刺突などの施文方法と文様要素に共通性が認められる茅野市判ノ木山西遺跡、望月町新水B遺跡、南佐久郡北相木村栃原岩陰、岡谷市禅海塚遺跡の出土例がある。これらの土器群は沈線文系土器群最終末に位置付けられている(田中1997)。さらに、がまん淵遺跡Ⅲ群土器の中にも、判ノ木山西遺跡などで阿部氏が指摘する「先端が二つに割れた竹管状原体の刺突」が少数ではあるが観察されており、両者の関連性を指摘する材料になろう(阿部1977)。

上林中道南遺跡(壇原・小淵1996) 下高井郡山ノ内町上林に所在し、がまん淵遺跡から約10kmの距離にある。縄文時代早期では表裏縄文、押型文、沈線文、条痕文土器が出土している。早期貝殻沈線文系Ⅲ群土器と分類されたものは、縦位・横位・斜位の条線による文様構成、条線によって区画された空白部に見られる櫛歯状工具又は棒状工具による刺突、繊維の混入などの点でがまん淵Ⅲ群土器と極めて類似する。

判ノ木山西遺跡(小林1981) 茅野市大字金沢に所在する。判ノ木山西遺跡3類土器と分類されたものにがまん淵Ⅲ群土器との共通要素を見いだすことができる。3類土器は「口縁に刺突を持つ、沈線文系土器で、内外面に条痕を残している土器が多い」とされ、田戸上層式に後続する土器群と位置付けられた。また、最近の研究では判ノ木山西遺跡の土器群は「貝殻沈線文土器の地域化を背景にして中部高地で成立した未命名の一型式である」とし、その編年的位置を田戸上層式の終末から子母口式に対応するという見解が示されている(阿部1997)。がまん淵遺跡Ⅲ群土器と対比すると、条線と思われる複数の細かい集合沈線、その条線による区画内に見られる竹管状または棒状工具の刺突、繊維の混入などの共通点が認められる。一方、縦位の貼り付け隆帯と表裏面の条痕はがまん淵遺跡には見られず、がまん淵Ⅲ群a類とした櫛歯状工具による刺突は判ノ木山西遺跡では報告されている限りにおいて認められない。

現在のところ、がまん淵Ⅲ群土器は長野県内ではあまり類例は見られず、特に、条線と同じ櫛歯状工具で刺突したⅢ群a類の類例は、県内では管見に触れる限り上林中道南遺跡のみに見られる。また、県外では新潟県小千谷市堂付遺跡I群2類c土器の中に櫛歯状工具による刺突の類例が見られ(遠藤・江口他1996)、これは田戸上層式に比定され、常世式との関連も指摘されている。この他にも北魚沼郡川口町西倉遺跡(佐藤他1988)、南魚沼群湯沢町岩原I遺跡(北村他1990)などにもがまん淵Ⅲ群土器が認められ、^(註2) がまん淵Ⅲ群土器は信濃川(千曲川)とその支流の魚野川流域に分布域が予想される。今後の発見例の増加を待たなければ明言はできないが、がまん淵Ⅲ群土器は長野県から新潟県にわたる、千曲川(信濃川)流域を核とする分布圏を持ち、田戸上層式平行もしくはそれに後続する段階の土器群である可能性が指摘できる。

がまん淵遺跡Ⅲ群土器は田中氏が指摘した判ノ木山西遺跡3類土器・榊塚遺跡・神林中道南遺跡早期貝殻沈線文系Ⅲ群土器などのD-2グループ(田中1997)に属するものと思われる。その中で先述した判ノ木山西遺跡3類土器との細部に見られる差は、地域的な差であるのか時間的な差であるのか、今後の検討を要する。しかし、がまん淵Ⅲ群a類の分布域は善光寺平北部から新潟県に広がっており、それ以南では確認されないことから、判ノ木山西遺跡3類土器とがまん淵遺跡Ⅲ群土器には地域的な差も介在しているものと思われる。また、がまん淵遺跡Ⅱ群土器と同Ⅲ群土器の関係が時間的に差があるものなのか否かという問題が残されているが、現時点で言及する余裕はなく今後の研究に期待したい。

最後に本遺跡出土の石器群について若干ふれておきたい。本遺跡から出土する土器の大半はⅡ群Ⅲ群土器で、Ⅰ群及びⅣ群以降は数点に過ぎない。Ⅱ群Ⅲ群土器はおおむね田戸上層式平行ということになれば、本遺跡出土の石器群は田戸上層式平行の石器群として捕らえて大枠での誤りはないであろう。現時点ではがまん淵遺跡の石器群は田戸上層式平行期の石器群と捕らえておきたい。すなわち、がまん淵遺跡Ⅱ群Ⅲ群土器に伴うと考えられる定型的な石器は、石鏃、石匙、搔器、へら状石器、磨製石斧、石錘、敲き石、特殊磨石、磨石、台石・石皿とすることができる。石錘については弥生時代後期のものである可能性も否定できず、がまん淵遺跡Ⅲ群土器に伴うとするには疑問が残されることを加えておきたい。

2 弥生時代後期の防御的集落について

がまん淵遺跡の編年的位置は、高杯の形態からは七瀬遺跡の2段階に位置づけられる。すなわち、本遺跡の高杯は七瀬遺跡分類2a・2b類(本報告書分類の高杯A)の高杯を主体とし、3類(本報告書分類の高杯B)が少数見られ、1類は1点も認められない。しかしながら、七瀬遺跡では2段階には北陸系の土器が一定量見られることと対比すると、がまん淵遺跡では外来系またはその影響を受けた土器は第61図4、第70図53・88・第71図102・103・111・113、第75図6などでその割合は極めて少ない。

また千野編年(千野1988)に照合すると、千野分類の高杯B4類・C2類は1点も見られず、C3類もしくはC4類が主体となる。また甕は千野分類のB2類・B3類・C2類が主体となり、B4類・C3類は認められない。このことからがまん淵遺跡は千野編年四段階と一部五段階に重なるといった編年的位置づけができよう。ただし、千野編年は善光寺平南部を中心としたものであり、善光寺平南部と北部での地域性も指摘されている。本遺跡で見られる折り返し口縁の甕や、高杯の杯と脚の接合部に見られる刻み目凸帯など善光寺平北部に特徴的に見られるものもあり、善光寺平南部と北部の直接的な対比が妥当であるか否かは今後の検討を待たねばならない。

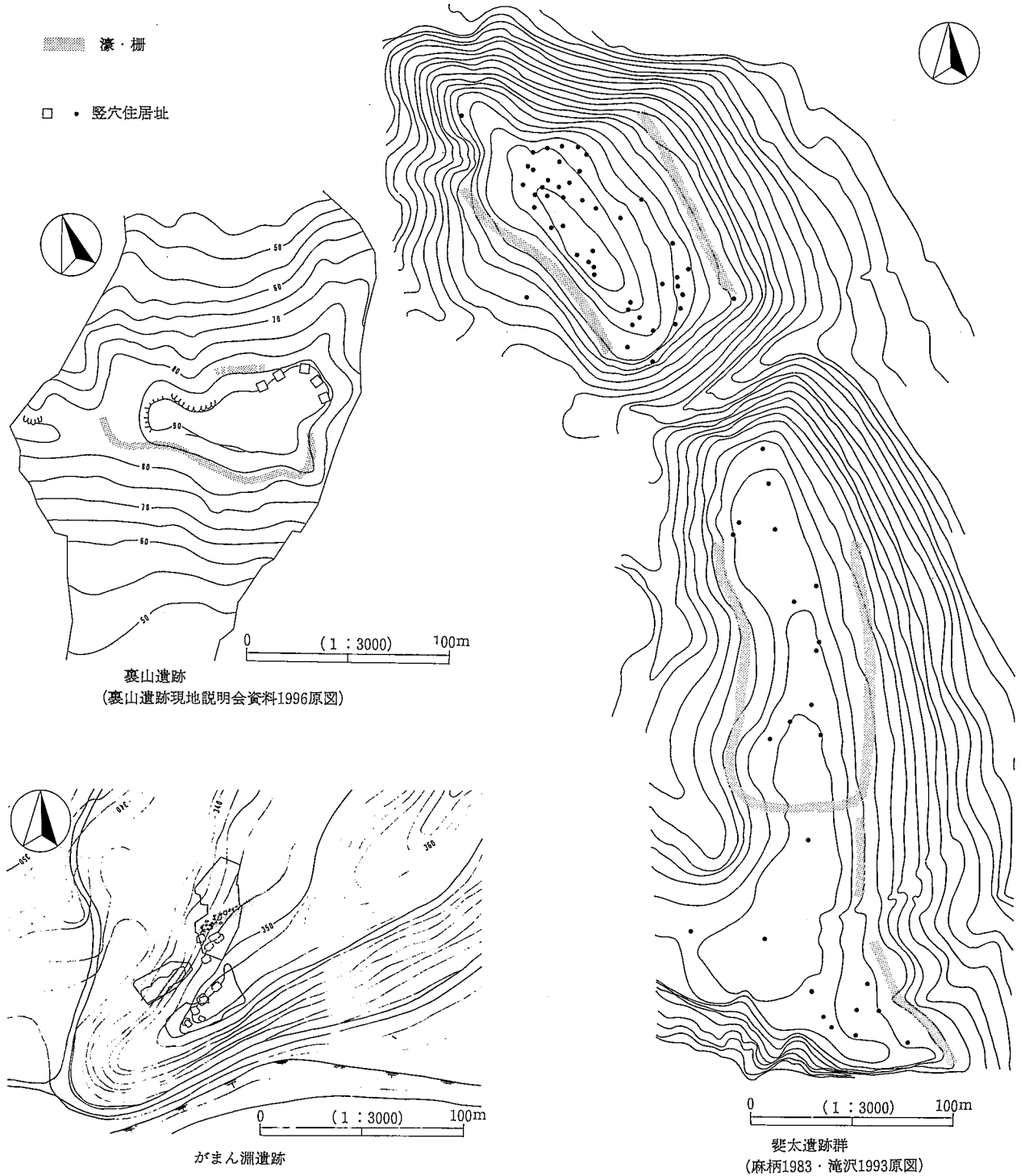
本遺跡では他地域(箱清水土器文化圏以外)と直接対比できる資料がないが、上記の結論と、1993年の「東日本における古墳出現器過程の再検討」の成果によると、がまん淵遺跡は新潟シンポジウム編年の4期を中心とした時期に相当するものと思われ、箱清水式の新しい段階の集落跡と考えられる。また、SB02・04の切り合いが確認されることから、がまん淵の集落はある程度の存続期間が予想される。

次に、集落としてのがまん淵遺跡の特徴は、集落が比高差15m~20mの痩せ尾根状の丘陵上に立地し、集落を画する溝と柵列が配されていることである。今回の調査では、集落を囲むと推定される柵列と溝を確認したものの、集落域端部の部分的な調査である。集落の中心部は牧場造営に伴う削平により失われており、その残った部分を中野市教育委員会が平成4年に調査した。第59図は削平前の昭和42年に撮影された空中撮影写真から作図したものである。

南東斜面側がすでに削平されており遺跡の全貌は確認できないが、中野市教育委員会で調査した上段の尾根上にも尾根に直行する溝と思われるものが確認されている。^(註3)さらに、丘陵の北西斜面に確認された溝(SD01)は、地滑りで平面形状が変更されており、本来は等高線に平行したものであったと想定さ

れることから、溝の延長線上に配置される柵列とセットとなり集落を囲む施設をなしていたと考えられる。溝と柵列に囲まれた区域には重複したものも含めて12棟の竪穴住居址が確認されたが、調査以前に削平された部分にも竪穴住居址が存在した可能性は極めて高く、集落の規模はさらに大きなものであったと思われる。このような尾根上の防御的な集落は管見に触れる限り長野県内には確認されていない。なお、最近の調査で善光寺平の沖積地において箱清水式期の環濠が確認されており、これらの遺跡との関連も検討されなければならない。

がまん淵遺跡に見られる斜面部に掘られた溝で周囲を区画する集落は、北陸地方にその類例が見られ、



第76図 弥生時代後期高地性防御的集落

高地性の防御的集落と位置付けられている。がまん淵遺跡もこれらの遺跡と同様に高地性の防御的集落であると位置付けたい。以下にその類例を示す。^(註4)

所在地	遺跡名	時期
新潟県新井市	斐太遺跡群	新潟シンポジウム2～5期
新潟県上越市	裏山遺跡	
新潟県新津市	八幡山遺跡	新潟シンポジウム1～4期
石川県羽咋郡志賀町	北吉田フルワ遺跡	新潟シンポジウム1～2期
石川県鹿島郡鹿西町	杉谷チャノバタケ遺跡	新潟シンポジウム1～2期
石川県小松市	河田山遺跡	新潟シンポジウム3期(法仏Ⅱ～月影Ⅰ式)

第76図に示した新井市斐太遺跡群、上越市裏山遺跡、がまん淵遺跡は善光寺平北部から直江津へ続く現在の国道18号線沿いに位置しており、分水嶺を挟んで関川と鳥居川を繋ぐルート上に位置している。がまん淵遺跡は他の2遺跡に比べ低地との比高差が小さいものの、溝で囲まれる集落域は他と同程度のものである。また、がまん淵集落の存続した前後の時期に北陸系の土器群が善光寺平北部に流入する現象を勘案すると、がまん淵遺跡の成立原因は、箱清水土器文化圏内の諸事情によるものと考えられるよりも、北陸地域などとの対外的な諸事情により成立した遺跡ではないかと予想される。

註

- (1) 1997年1月のシンポジウム「押型文と沈線文」で長野県内における沈線文系土器群の編年が検討された。
- (2) 小熊博史氏にご教示頂いた。(小熊1997)
- (3) 調査担当者の中島英子氏に御教示頂いた。
- (4) 集落の時期は『東日本における古墳出現過程の再検討』(1993 日本考古学協会新潟大会実行委員会)による。

参考文献

- 阿部芳郎 1997 「判ノ木山西遺跡出土土器の分類と編年」『シンポジウム 押型文と沈線文(本編)』
- 甘粕健他 1993 『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 遠藤孝司・江口友子他1996『国道17号線小千谷バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ』新潟県教育委員会
- 岡村道雄・柳沢和明 1986 「前期旧石器の器種分類」『馬場壇A遺跡Ⅰ』東北歴史資料館資料集16
- 金井文司 1978 「中野市安源寺・草間出土の弥生遺物について」『高井』42
- 北村 亮他 1990 『関越自動車道関係発掘調査報告書 岩原Ⅰ遺跡・上林塚遺跡』新潟県教育委員会
- 小熊博史 1997 「新潟県における押型文系及び沈線文系土器群の様相」『シンポジウム 押型文と沈線文(本編)』
- 佐藤雅一他 1988 『西倉遺跡 一第2次発掘調査一』川口町教育委員会
- 小林秀夫他 1981 「第Ⅱ章1節 茅野市判ノ木山西遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市・原村その3』
- 田中 総 1997 「中部・東海地方における沈線文土器の様相」『シンポジウム 押型文と沈線文(本編)』
- 滝沢 規朗 1993 「古墳出現前後における集落の動向」『研究紀要』新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 壇原長則・小淵利男 1996『上林中道南遺跡Ⅲ』山ノ内町教育委員会
- 千野 浩 1988 「千曲川水系における後期弥生式土器の変遷」『信濃』41-4
- 中島庄一・徳竹雅之・関 武1995『沢田鍋土遺跡発掘調査報告書』中野市教育委員会
- 麻柄一志 1983 「北陸の高地性集落と其の評価」『富山市考古資料館紀要』第2号 富山市考古資料館

第5章 沢田鍋土遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

沢田鍋土遺跡は中野市大字立ヶ花字鍋土636他に所在する。遺跡は、高丘丘陵面南端の東向きの緩斜面に位置する。浅い谷を隔て対峙する丘陵上には、がまん淵遺跡がある。沢田鍋土遺跡とがまん淵遺跡を隔てる谷には、遺跡の北東に広がる湿地より流れでる沢筋が千曲川の支流である篠井川へと続いていたが、調査時点では、沢は暗渠配水に置き換わっていた。

また、遺跡の標高345.0mの等高線より斜面上方には粘土層が広がっており、谷部に向かう斜面部表土下には、砂礫層が露出する。粘土層は、この砂礫層の上に堆積したものと思われるが、土層断面による確認は行っていない。遺跡周辺は、褶曲作用により、砂礫層がかなり傾斜しており、粘土層も丘陵上に均一に堆積しているわけではない。したがって、丘陵上には、表土下に粘土層が広がる地点と、粘土層が無く砂礫層がすぐに現れる地点がある。

なお、中野市教育委員会が1992年と1994年に今回の調査区の西側で発掘調査を行い、旧石器時代のブロック、縄文時代中期末葉の土坑、古墳時代前期の竪穴住居址と粘土採掘跡、奈良時代の竪穴住居址が発見された。(中島1993・中島1995)

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法 (第2・78図)

調査地は、地形的に丘陵上の平坦部から斜面部と谷部との二つの地区に分けられる。丘陵上の平坦部から斜面部にかけては全面表土剥ぎを行い調査区とした(②区・④区)。谷部では、任意に試掘坑を設定し、遺物が検出された地点を中心に2か所の調査区を設定した(①-1区・①-2区)。①-1区では奈良時代の須恵器窯の灰原が検出されたが窯本体は調査区外の斜面部にあるため今回の調査では確認されていない。①-2区では、斜面部にある窯跡の灰原が予想されたが、灰原は確認されず数点の須恵器を採取したのみである。灰原は流失したものと思われる。

谷部①-2区において、粘土層及びピート層が確認され、水田址の可能性を考慮してプラントオパール分析を行なったが、水田面は確認されなかった。

グリッドの設定は、②区では埋蔵文化財センター仕様により設定し(第1章第2節1頁参照)、①-1区では、第119図に示す通り任意にグリッドを設定し遺物の取り上げを行った。

(2) 調査経過 (調査日誌抄)

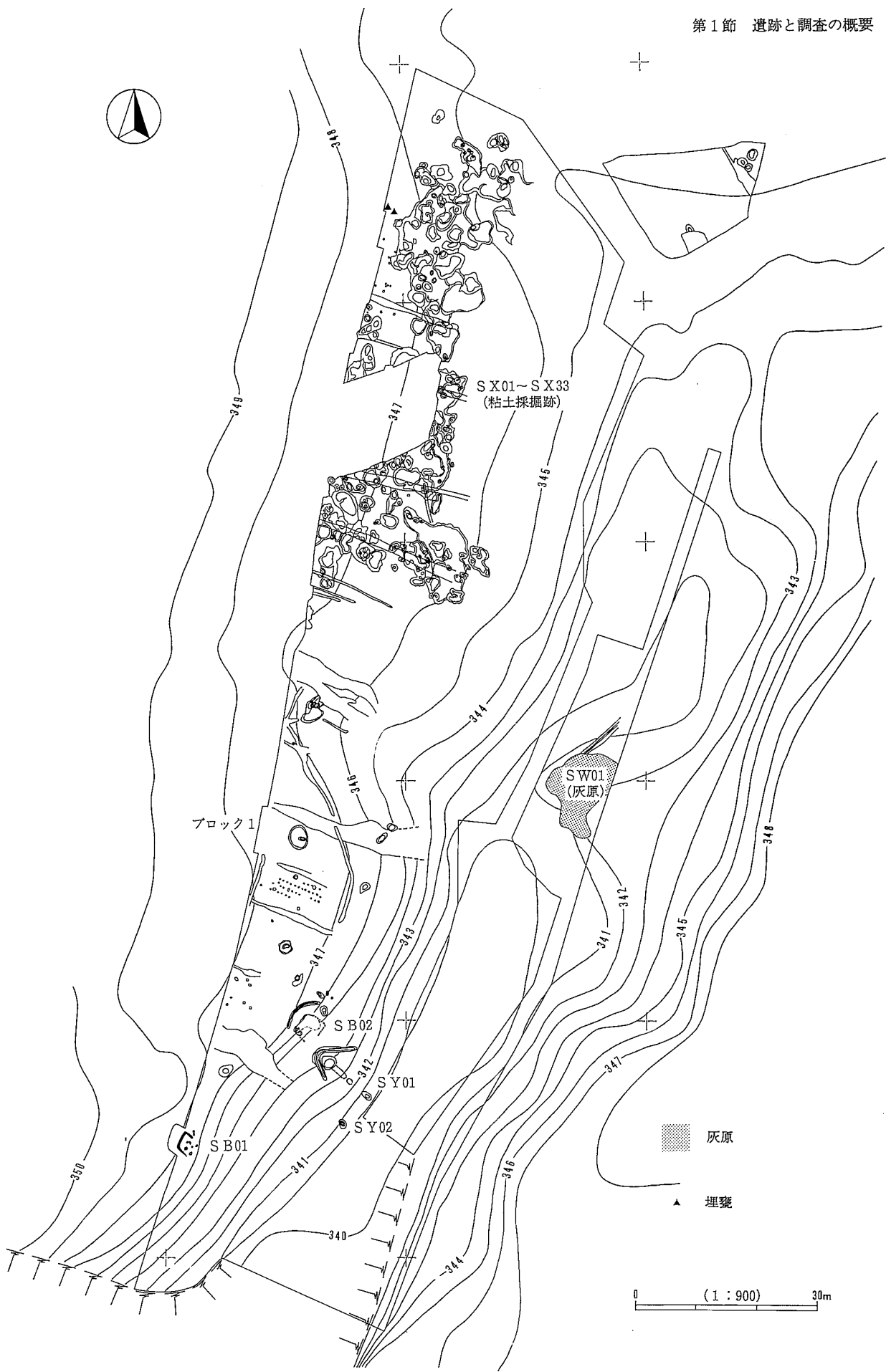
調査期間 平成3年(1991年)4月4日～同年11月30日

4月4日 重機による谷部(①区)の試掘開始。

4月8日 発掘開始式。丘陵上(②区)の南半分の表土剥ぎと遺

4月5日 ①区の試掘で須恵器が多量に出土。

構検出開始。旧石器時代の剥片出土。



第77図 沢田鍋土遺跡 遺構配置図

- 中世以降の溝及び土坑が検出され、遺構の調査に入る。
- | | | | |
|-------|---|--------|--|
| 4月15日 | 住居址(SB01)を検出。 | 6月21日 | 谷部でプラントオーバー分析用土壌サンプル採取。 |
| 4月23日 | 旧石器時代ブロック1の調査開始。 | 6月25日 | 榎田遺跡からの作業員19名が加わる。 |
| 4月24日 | 土坑と捕らえていたSK28・35が住居址であると確認し新たにSB02の遺構記号をつける。 | 7月4日 | 灰原(竪穴本体は調査区外)の範囲を確認し写真撮影、実測を行う。粘土採掘跡と並行して灰原調査を進める。 |
| 4月10日 | ①区で灰原を確認。 | 7月23日 | 最大の粘土採掘跡SX12の調査に入る。 |
| 5月13日 | SB03の竈と認識していたものが焼土坑であると確認され、SB03を欠番とする。 | 7月24日 | 灰原の調査を終了し、総力を挙げて粘土採掘跡の調査にあたる。 |
| 5月15日 | ②区南半分の完掘の写真撮影。②区北半分の表土剥ぎ、遺構検出開始。中世以降の溝及び土坑が検出される。 | 8月4日 | 現地説明会。120名の見学者があった。 |
| 5月17日 | 古墳時代、縄文時代の包含層を確認するが遺構は確認できない。 | 8月19日 | 沢田鍋土遺跡の調査を一時停止し、がまん淵遺跡の調査に入る。 |
| 5月27日 | ②区北半分のグリッド杭の設定。(写真測図研究所に委託) | 8月26日 | がまん淵遺跡の調査に並行して、数人で沢田鍋土1・2号窯の調査を開始。 |
| 5月29日 | 縄文式土器と土師器を含む黒褐色土の広がり認められるが、遺構プランがつかめない。 | 9月5日 | 1・2号窯の空中写真撮影、実測。(写真測図研究所に委託) |
| 5月30日 | ①区の灰原部分の表土剥ぎ開始。 | 9月20日 | 1・2号窯の調査終了。 |
| 5月31日 | 長谷川桂子調査研究員に旧石器出土の層位について指導を受ける。 | 10月3日 | 沢田鍋土遺跡調査再開し古墳時代の粘土採掘跡の調査に入る。 |
| 6月4日 | 1号窯、2号窯を検出するが部分的に残存しているのみ。 | 11月2日 | 粘土採掘跡の北側半分の写真測量および空中写真撮影。 |
| 6月6日 | 遺構プランがつかめない黒褐色土の広がりSXの遺構記号をつけ調査を開始。 | 11月7日 | ブロック1の未調査部分の拡張調査(調査区法面部分)開始。 |
| 6月11日 | SXの記号をつけた遺構が古墳時代の粘土採掘跡であると判断し調査を進める。 | 11月14日 | ブロック1の拡張調査終了。 |
| 6月18日 | 1・2号窯の灰原を捜したが、客土が厚く旧地表下2mまで掘り進めたが灰原は確認できず、安全上の理由 | 11月26日 | 粘土採掘跡完掘。 |
| | | 11月27日 | 粘土採掘跡南側半分の写真測量および空中写真撮影。 |
| | | 11月28日 | 機材を撤収。発掘終了式。 |
| | | 11月30日 | 粘土採掘跡実測終了。 |

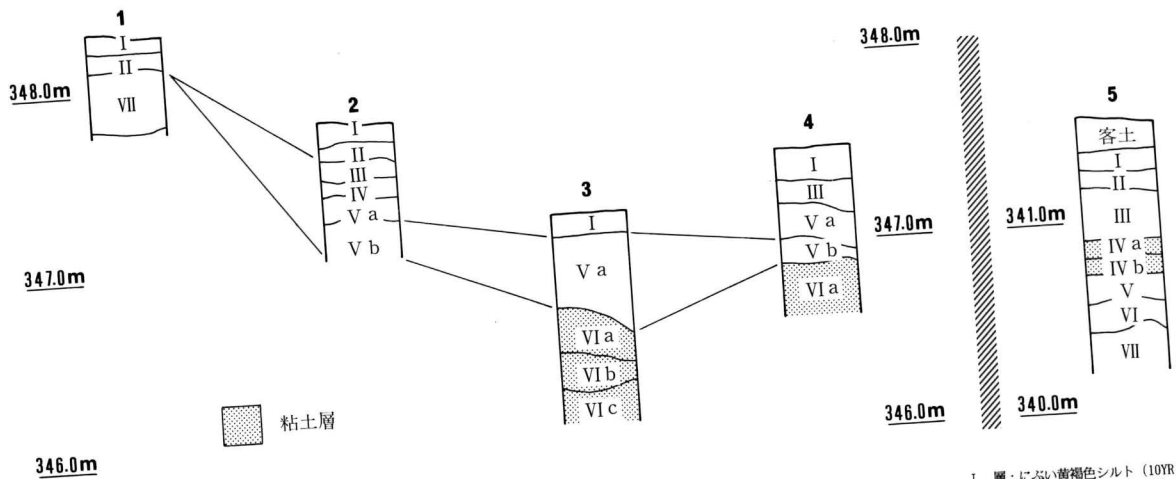
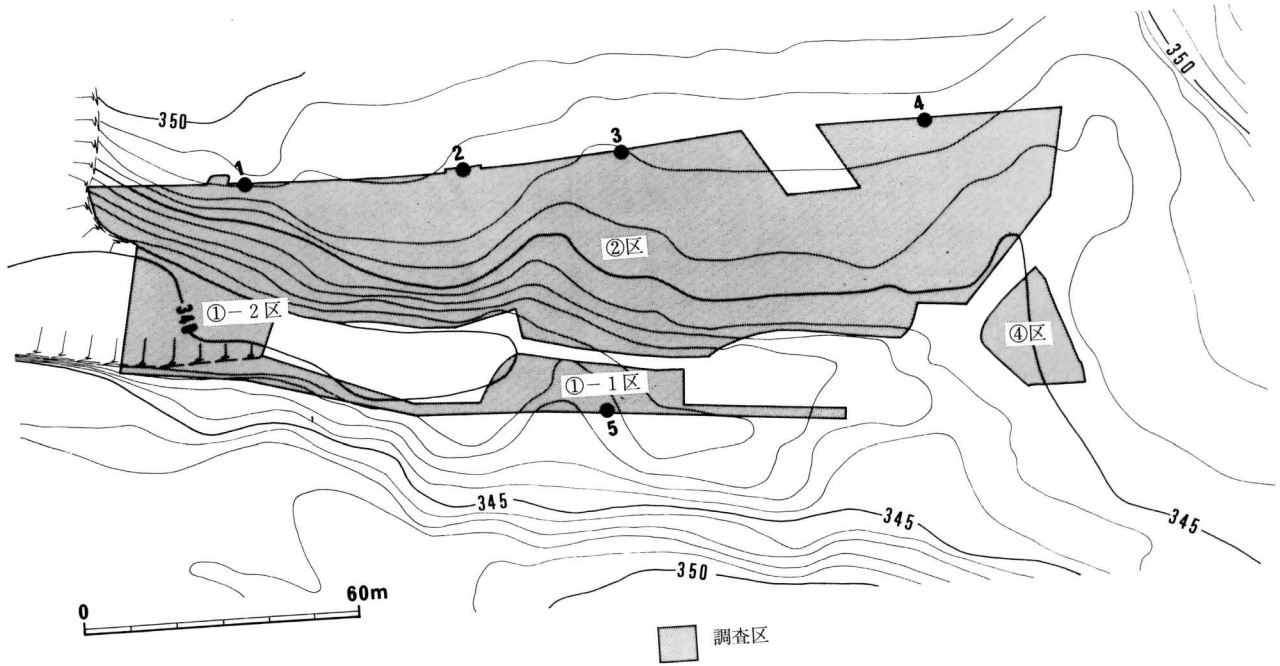
(3) 調査結果の概要 (第77図)

沢田鍋土遺跡の主な遺構は、細石器のブロック1、縄文時代中期埋甕2基、古墳時代前期の粘土採掘跡、奈良時代の須恵器の登り窯2基と別の窯跡の灰原1基、奈良時代の竪穴住居址2棟である。この他に中世以降の溝、土坑の調査を行った。古墳時代の粘土採掘跡は、調査区内だけで、778m²と広範囲に及んでいる。また、奈良時代の登り窯とその工房と考えられる住居址は、隣接する清水山窯跡、池田端窯跡の登り窯と共に奈良時代前半期の高丘丘陵窯址群の須恵器生産を語る上で重要な資料といえる。

(4) 基本土層 (第78図)

本遺跡の、基本層序は、丘陵上と谷部との二つに分けて説明される。丘陵上では、地点によって状況が異なっているが、第78図土層観察地点2を中心として記述する。I層・II層はいずれも耕作土で近世以降の遺物が包含される。III層は褐色土で土を削ってからしばらくすると黒褐色に変色する縄文時代から古代までの遺物包含層。IV層はIIIとV層との漸移層。V層は旧石器時代の遺物包含層でV a・V b層に分層される。V b層では水平面で亀甲状のクラックが見られ、かなり硬く締まった層である。VI層は粘土層で、VII層は礫層となる。なお、III層以下の層位は調査区内全体に均等に堆積せず、調査区南端では地表下20~30cmで礫層となり遺物包含層は存在しない。これは丘陵上であるため土砂の流出により包含層が形成されないうためと、丘陵が褶曲により形成されており基盤層が地点により異なっているためである。遺構検出はII層を除去した面で行った。

谷部では、丘陵上の層位との対応関係はとらえられない。灰原(SW01)付近の土層観察地点5では



- I 層：暗褐色土 (7.5YR 3/3) 耕作土。
- II 層：褐色土 (10YR 4/6) 耕作土。
- III 層：褐色土 (7.5YR 4/3) 土を削ってからしばらくすると黒褐色に変色する。
- IV 層：にぶい黄褐色土 (10YR 6/3) IIIとV層との漸移層。
- V 層：明黄褐色土 (10YR 6/6) 砂質土を主体とする。
- V a 層：にぶい黄褐色シルト (10YR 6/4) クラックが多く見られ、かなり固く締まった土層。
- V b 層：にぶい黄褐色シルト (10YR 6/4) クラックが多く見られ、かなり固く締まった土層。
- VI a 層：灰色粘土 (7.5GY)
- VI b 層：緑灰色粘土 (5Y 6/3) 小礫を少量含む。
- VI c 層：オリブ黄色粘土 (5Y 6/3) 小礫を少量含む。
- VII 層：明褐色礫層 (5YR 5/8)

- I 層：にぶい黄褐色シルト (10YR 4/3)
- II 層：黄褐色シルト (10YR 4/2)
- III 層：黒褐色シルト (10YR 3/2)
- IV a 層：黒褐色粘土 (10YR 2/2) 直径1cm以下の黄色の岩粒を含む。
- IV b 層：黒色粘土 (10YR 2/1)
- V 層：黒褐色土 (7.5YR 3/3)
- VI 層：灰褐色シルト (10YR 4/1)
- VII 層：黒褐色土 (7.5YR 3/3)

第78図 沢田鍋土遺跡 基本土層

I層～III層はシルト、IV層は粘土、V層以下は暗褐色土とシルトの互層になる。奈良時代の灰原はVII層堆積後に形成されている。

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

1 概要

調査区の西壁面のシルト層 (V層) 中より頁岩製の剥片が採取され、剥片採取地点を中心に調査区を設定したところ細石刃のブロックが1地点検出された(ブロック1)。V層が丘陵上の平坦部に広がっている

ため、他の地点の試掘を行ったが、他にブロックは確認されなかった。なお、粘土採掘跡の覆土よりナイフ形石器と大形の剥片が出土しており、古墳時代の粘土採掘により、ブロックが破壊されていることが予想される。

2 ブロック1

(1) 出土状況 (第79・80図)

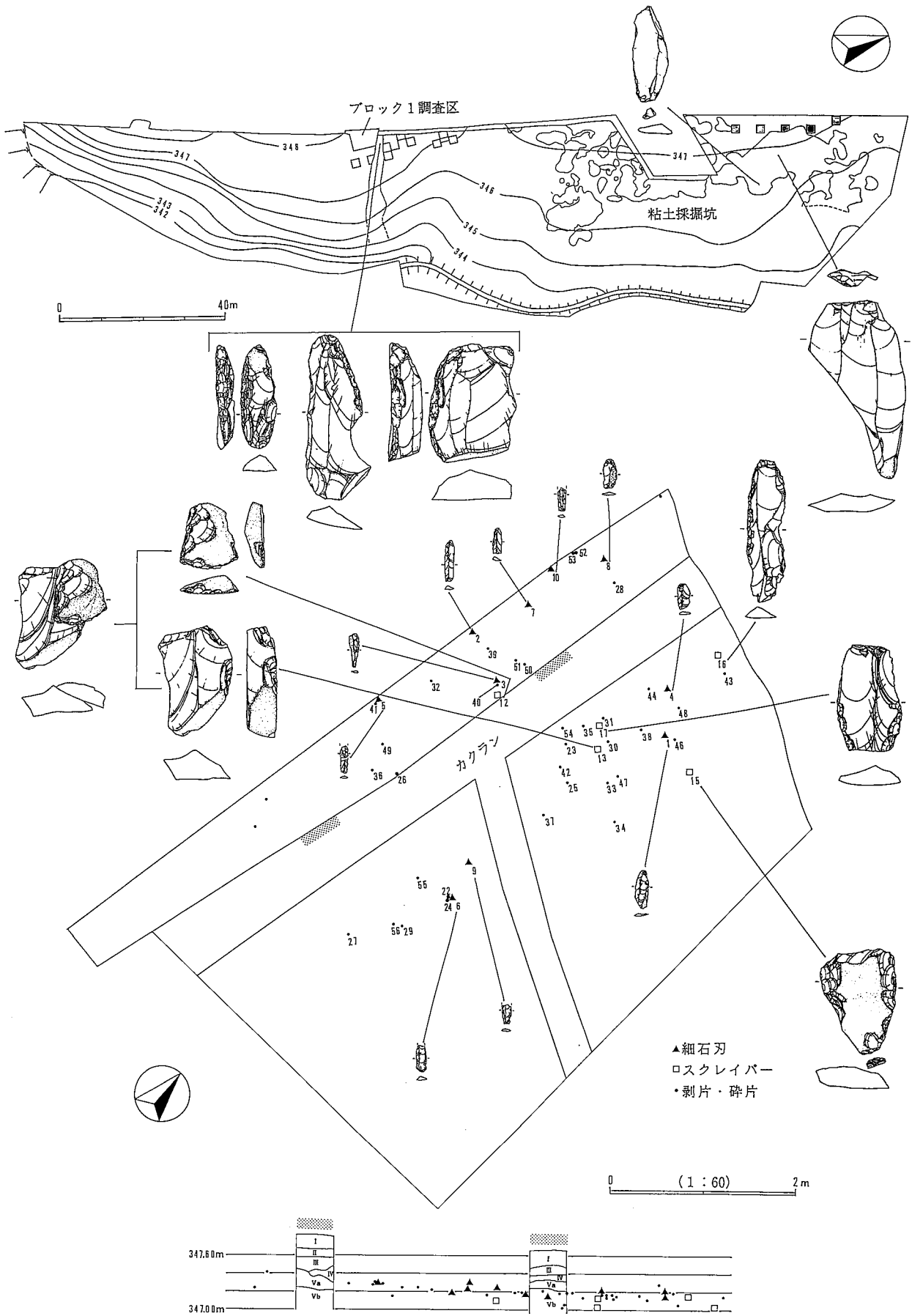
基本土層V a層、V b層より出土した。ブロックはわずかに東側へ傾斜する緩斜面に位置する。ブロックの西側半分は調査区外となっているが、1992年に中野市教育委員会によって調査が行われ、第1集中部として報告されている。(中島1993) ブロックは溝(SD05)、トレンチ、配水管施設の埋設により部分的に攪乱を受けている。SD05より出土したスクレイパー(第82・83図18・19・21)とブロック1の地表より採集されたスクレイパー(第83図21)は、ブロック1に隣接した地点で出土したものでブロック1に含まれる石器である可能性が高い。また、原地形の等高線に直交する方向で垂直分布を示した。細石器、剥片などの小形の石器に比べ大形のスクレイパーが低いレベルから出土する傾向を示す。また平面図中の番号は遺物観察表の図版番号に一致する。

第80図に中野市教育委員会調査区と長野県埋蔵文化財センター調査区の合成図を示した。その結果直径およそ7.5mの範囲に遺物の集中が確認された。なお、グリッドの設定基準が両者で異なるため、溝の位置と調査区境のラインを手掛かりに合成したため多少のずれがある。

(2) 出土遺物 (第81~84図、PL21・22、第4表、付章遺物観察表)

1~10は細石刃で、4は珪質頁岩、他はすべて黒曜石である。7・8の片方の側縁部に微細な剥離痕が認められ、5~10では基部または端部が欠損している。これらの他に細石刃の可能性のあるものが2点あるが小破片のため確認できない。11は打点と対峙する側縁に調整加工が認められ、また折れた側縁にも調整加工が認められる。チャート製の二次加工を有する剥片とした。なお、観察表No.43・49は「細石刃?」としてあるが、小片のため確認できないものである。12・13・15~21はスクレイパーと分類したもので、12は打面を残し、二側縁に調整加工を施し台形状の平面形態を作出しているが、剥片の形状は余り変更されていない。13は自然面を打面とし、一側縁部に調整加工が認められる。12と13は14に示すように接合する。15は二側縁に調整加工を施し、実測図下方の先端部に細かな調整加工が認められる。16・17・20・21は縦長の剥片の一側縁もしくは二側縁に調整加工を施し刃部としたもので、調整加工は側縁の全体には及ばず部分的なものである。これらはすべて打面を残しており剥片の形状はほとんど変更されていない。18はほぼ全周に調整加工が認められるもので、刃部角度は他のものに比べ鈍く搔器的な刃部を有する。19は主剥離面がネガティブ面で、一方の側縁を折り取るような大きな剥片剥離を表面から施し、対峙する側縁に裏面より細かな調整加工を施している。打面ははじけてしまいわずかに残っている。なお、19は先に述べた13と同じ特徴を有する石器である。すなわち打面と対峙する面に自然面を残し、平面形態がD字状を呈し、細かな調整加工は一側縁に限られる。スクレイパーとしたものの中にはこれらとは別に16・17・20・21のような縦長剥片の側縁部を刃部とする一群、さらに18のように搔器状の刃部を持つもの、12・15の台形状の平面形態を示すものがあり、少なくとも以上の4種類の類別ができそうである。12・13・15・17・19・20・21が頁岩で、16が珪質凝灰岩、18が珪質頁岩である。22~40は剥片で、30と33に微細な剥離が観察されるが、調査時のガジリと思われる。22~25は頁岩で、12・13と同一母岩の可能性がある。27、26・36は珪質頁岩、28・29は安山岩、30~35・37~40は黒曜石である。

細石核、石核は出土していない。また、中野市教育委員会調査分で出土した石核はチャートと珪質頁岩



第79図 沢田鍋土遺跡 ブロック1 遺物分布図

のもので細石刃石核は出土していない。

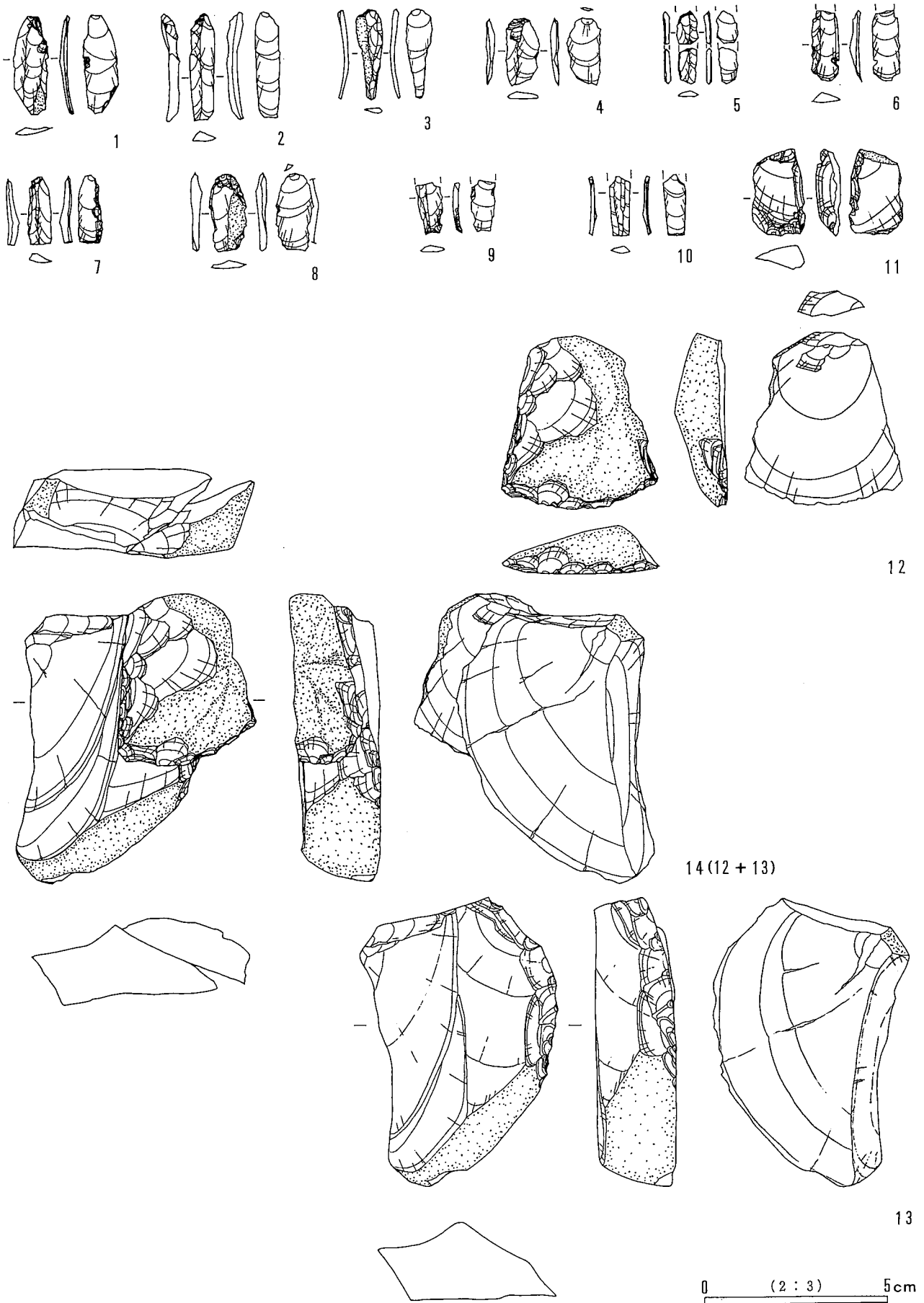
以上、本調査区からは細石刃10点、スクレイパー9点、使用痕のある剥片1点、二次加工のある剥片1点、剥片・碎片34点が出土した。中野市教育委員会調査分の遺物と合わせるとブロック1の器種組成は表4のようになり、総点数133となる。

第4表 沢田鍋土遺跡ブロック1石器出土点数

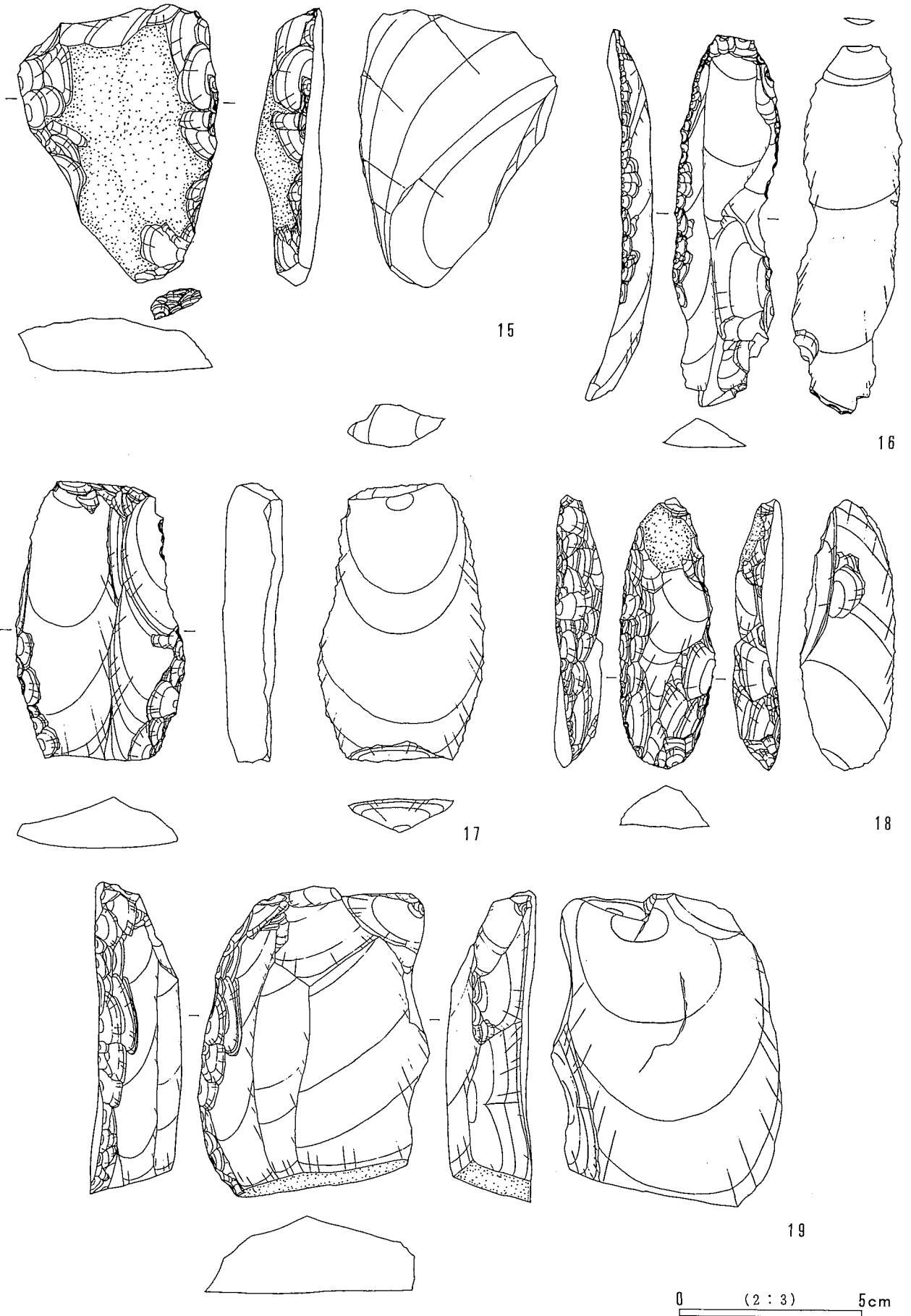
	埋文センター (1991年調査)	中野市教育委員会 (1992年調査)	合計
細石刃	10	17	27
スクレイパー	9	4	13
ドリル ?	0	1	1
re. fl	1	1	2
u. fl	1	0	1
磨石	0	1	1
打製石斧	0	1?	1?
石核	0	3	3
剥片・碎片	34	50	84



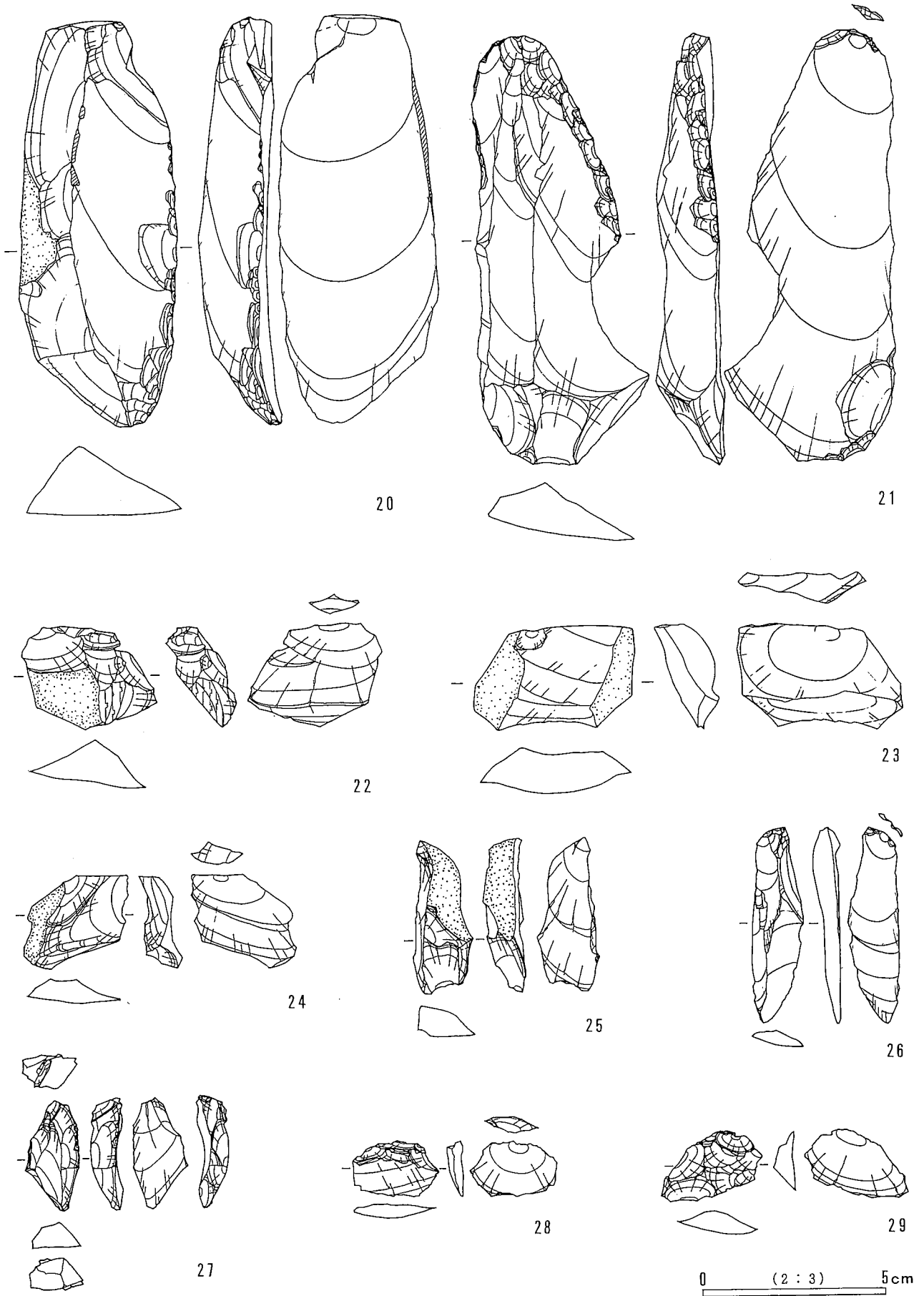
第80図 沢田鍋土遺跡 ブロック1遺物分布図 (合成図)



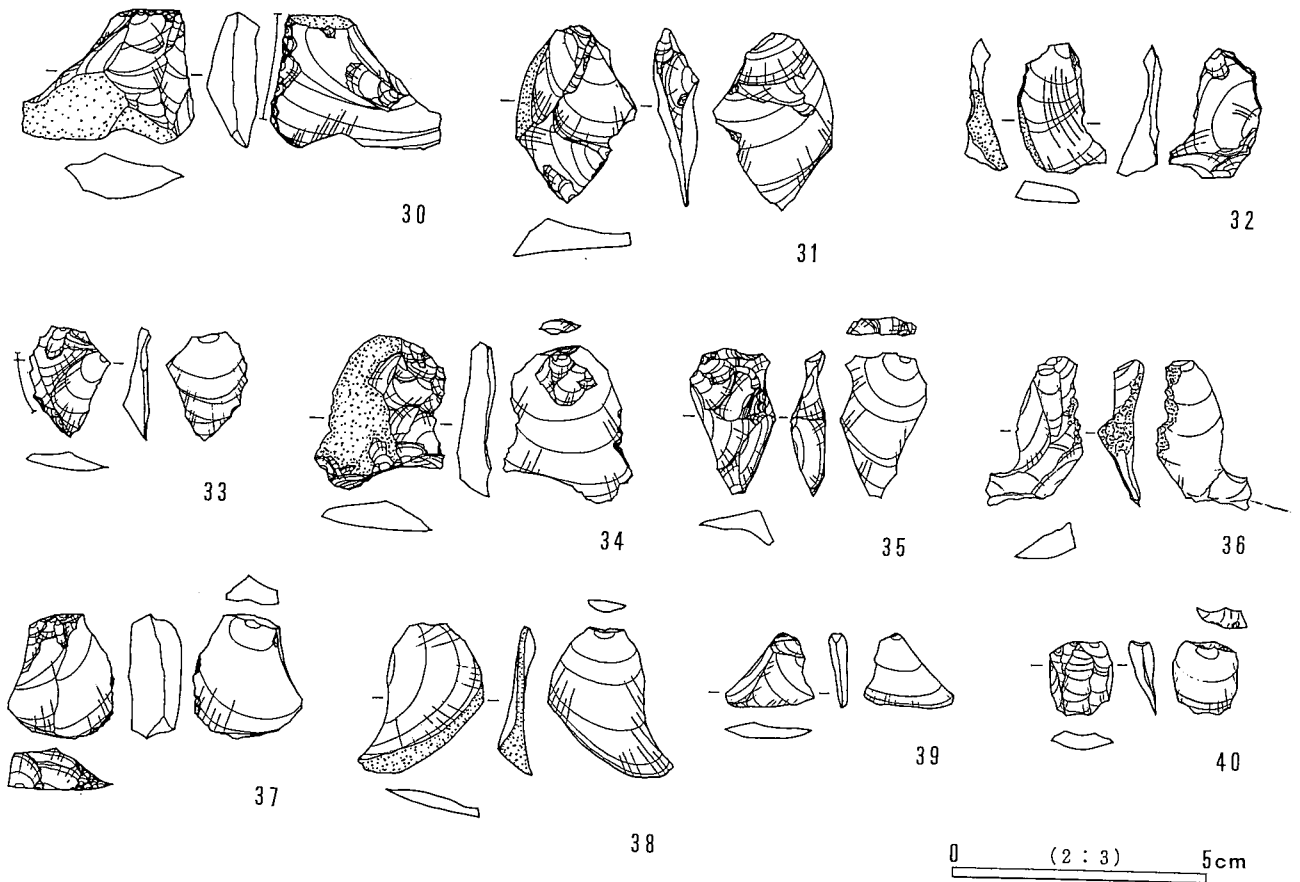
第81図 沢田鍋土遺跡 ブロック1石器(1)



第82図 沢田鍋土遺跡 ブロック1石器(2)



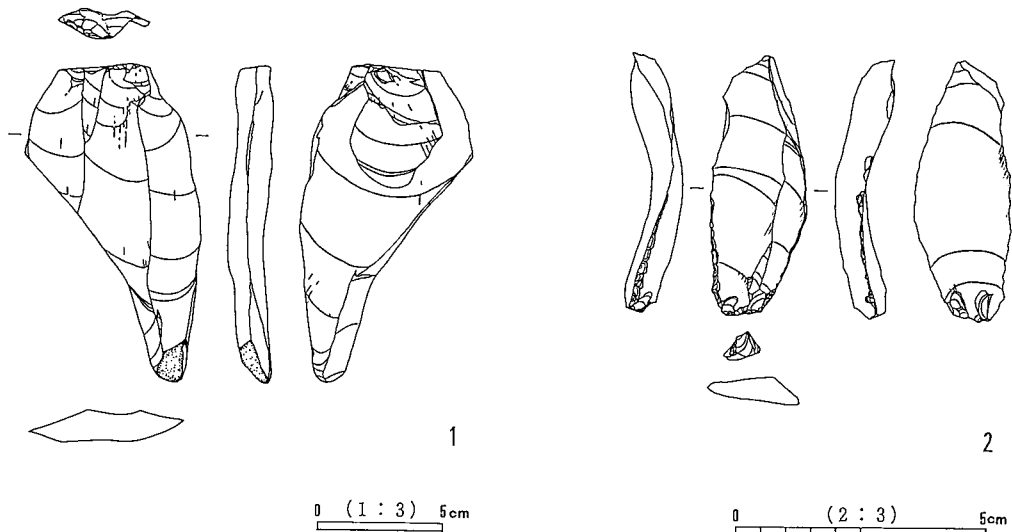
第83図 沢田鍋土遺跡 ブロック1石器(3)



第84図 沢田鍋土遺跡 ブロック1石器(4)

3 その他の石器 (第85図)

ブロック1以外に古墳時代の粘土採掘跡から旧石器時代の石器と思われるものを第85図に示した。1はクリーム色に風化した頁岩の大形の縦長剥片で、長さ12.8cmを測る。欠損しているが石刃と思われる。2は黒曜石の二側縁にわずかな基部加工が施されたナイフ形石器である。打面がわずかに残されている。



第85図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘坑内出土石器

第3節 縄文時代の遺構と遺物

1 概要

縄文時代については、沢田鍋土遺跡と清水山窯跡③区とは同一の遺跡と考えられるので、清水山窯跡③区と合わせて概要を述べる。なお遺構の個別記載はそれぞれの遺跡ごとに行うので清水山窯跡③区の遺構は第6章を参照して頂きたい。

沢田鍋土遺跡では中期後半の埋甕2基、清水山窯跡③区では中期後半の埋甕1基、粘土採掘跡1基、土坑1基が検出された。沢田鍋土遺跡では土器と石器の多くが古墳時代の粘土採掘跡の窪地に堆積した暗褐色土（基本土層II層相当）から出土しており、摩滅した土器が多いことなどから、斜面上方より流されてきたものも多いと考えられる。第86図に縄文時代中期土器の分布密度を示す。沢田鍋土遺跡では、ほとんどの縄文式土器が古墳時代の遺構の中より出土しているので、遺構ごとにその密度を示した。遺構以外の部分では、遺物包含層に当たるII層が流失しているところが多く遺物の分布はほとんど見られない。



第86図 沢田鍋土遺跡 縄文式土器の分布密度

2 遺構

埋甕 1 (第87図1)

検出面にて、直径38cm深さ12cmの穴に胴下半部を欠いた深鉢が正位に直立して埋納される。埋甕は耕作により口縁部は欠損し、胴下半は打ち欠かれていた。埋甕内の覆土は黒褐色で炭化物粒が含まれている。埋甕の周辺には柱穴は無く屋外の埋甕である。埋甕については胎盤埋納、幼児埋葬などの説があることからリン酸カルシウム分析を行ったが、埋甕内には「植物や遺骨が入れられていた痕跡は認められない。」という結果であった^(註1)。

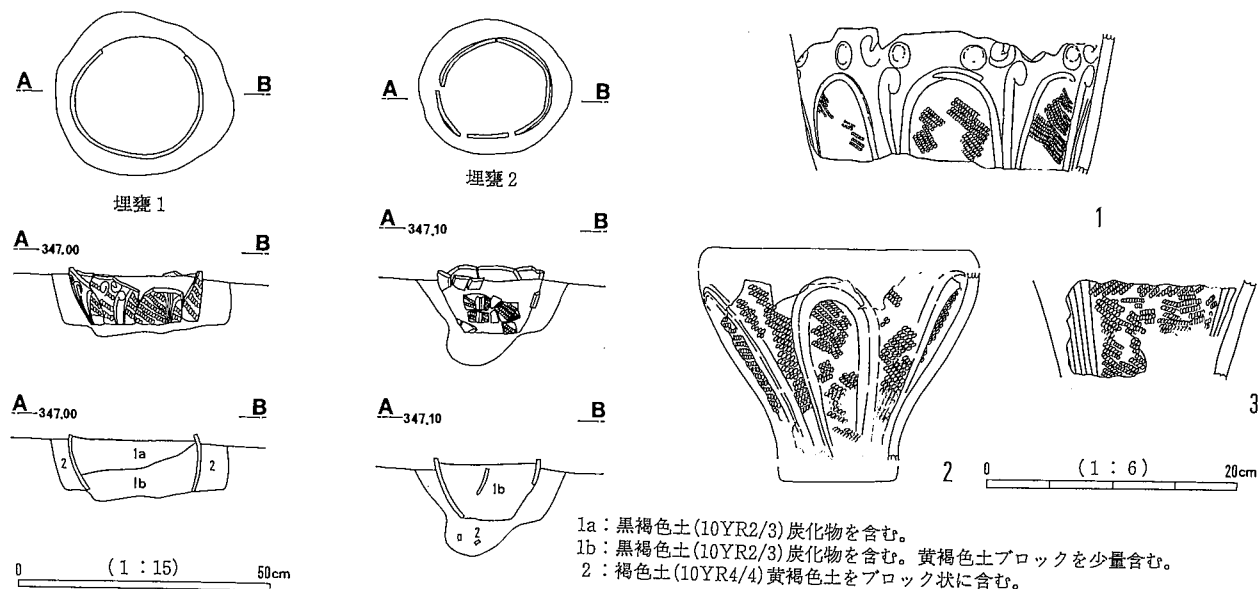
1は深鉢で胴部には指で描いたような逆U字状の沈線と蕨手文状の沈線を交互に配列し蕨手文状の沈線の先端には皿状の円形の窪みが配され、U字状の区画の中に縄文が施文されている。また口縁からは胴部とは逆位の円形窪みを持つ蕨手文状の沈線が垂下している。

埋甕 2 (第87図2・3)

検出面にて、直径38cm深さ17cmの穴に底部を欠いた深鉢が直立して埋納される。埋甕は耕作により口縁部は欠損し、胴下部を欠く。埋甕内の覆土は黒褐色で炭化物粒が含まれている。埋甕1の北西約1mに位置する。リン酸カルシウム分析では、埋甕内には「植物や遺骨が入れられていた痕跡は認められない。」という結果であった。^(註2)

2・3は埋甕2として取り上げたものであるが、それぞれがどのような位置関係であったか不明である。2点とも土器の半分程が失われており全周にわたって復元することができない。2は縄文地文に逆U字状の隆線が見られる。3は縄文と平行する三本の沈線が見られる。

時期 埋甕1・2とも縄文時代中期末葉の所産である。



第87図 沢田鍋土遺跡 埋甕1・2

3 遺物

(1) 土器 (第88・89図)

埋甕の他に土器片がテン箱に2箱分出土しているが、表面が摩滅したものが多い。加曾利EⅢ~加曾利EⅣ式またはそれに平行する時期のものがほとんどである。施文方法により以下のように分類した。

I群 隆帯により文様が構成されるもの。地文の違いによりa類b類に分類する。

a類：地文が縄文または無文のもの（第88図1～28）。

b類：地文が刺突文のもの（第88図29・30）。

II群 沈線により文様が構成されるもの（第88・89図31～52）。

III群 刻目隆帯により文様が構成されるもの（第89図53～60）。太い隆帯のものと細い隆帯のものがある。

IV群 縄文のみのもの（第89図64～81）。I～III群の一部であるものも含まれるが、区別できないので縄文のみの破片を一括する。

V群 櫛歯状工具による条線が施文されるもの（第89図80～81）。条線は直線に引かれるものと蛇行しているものがある。

以上I～V群の土器は加曾利EⅢ～IV式またはそれに平行する時期のものと思われる。なお、I～V群のいずれかの口縁部につく把手が出土しているが、小片のため図示していない。

これらの他に、後期前葉の土器が少量見られる。（第89図61・63）

(2) 石器（第90～94図）

古墳時代の粘土採掘跡を中心に石鏃8点、石匙2点、スクレイパー9点、小型不定形石器12点、ピエス・エス・キーユ2点、打製石斧203点、横刃形石器8点、磨製石斧6点、磨石・凹石12点、敲石14点、特殊磨石1点、石皿・台石14点、石錘1点、その他3点の295点の石器が出土した。剥片は483点出土しており、黒曜石61点、チャート175点、珪質頁岩2点、打製石斧の石材である安山岩、凝灰岩などが222点、その他23点である。

石鏃（第90図1～8） 1・4が珪質頁岩、2が黒曜石、3・5・7がチャート、6が流紋岩、8が安山岩である。

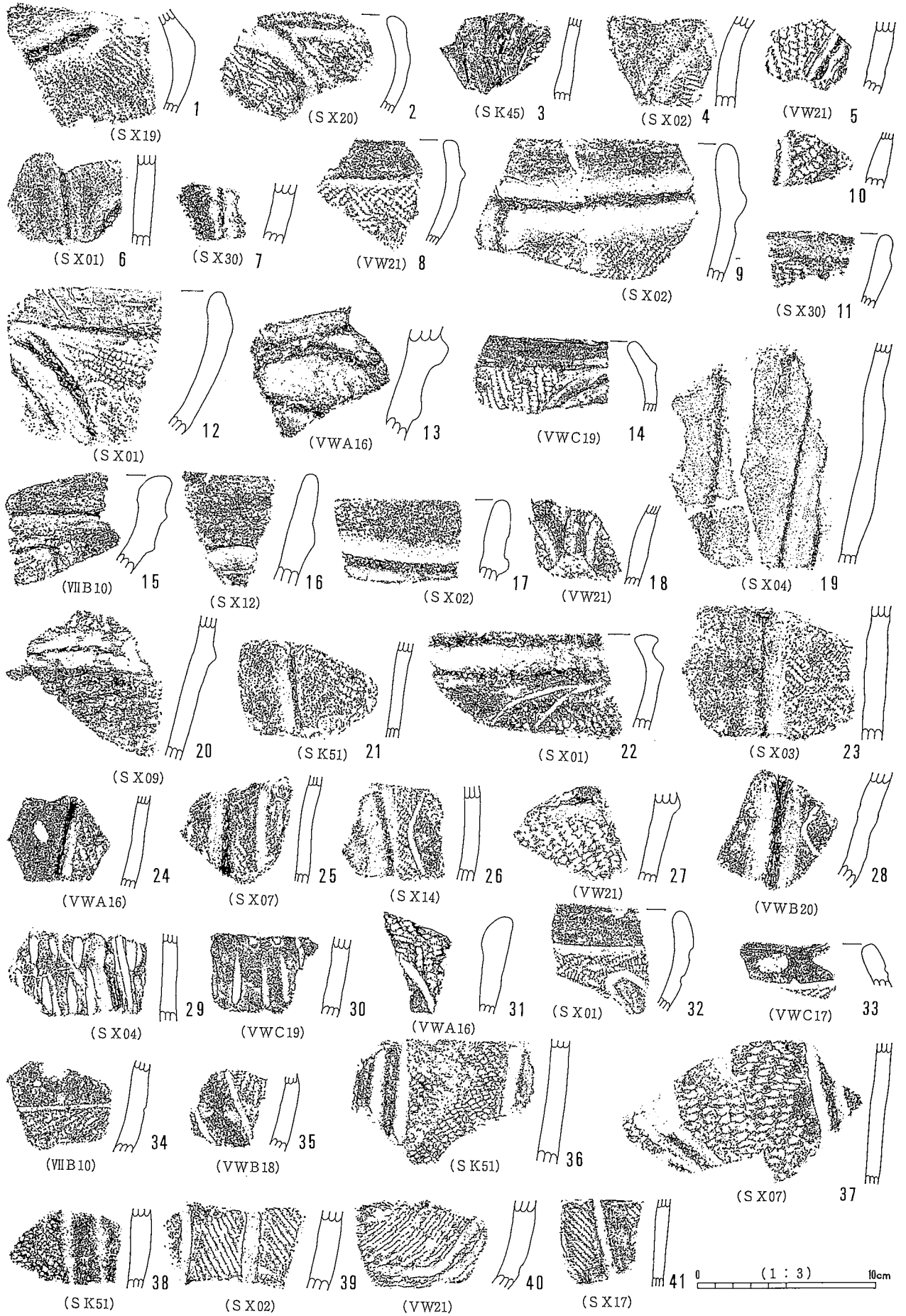
スクレイパー（第90図9、第93図53・55） 9は黒曜石、53は凝灰岩、55はチャートである。この他に安山岩製のものが6点出土している。

石匙（第90図12） 凝灰岩製の石匙である。

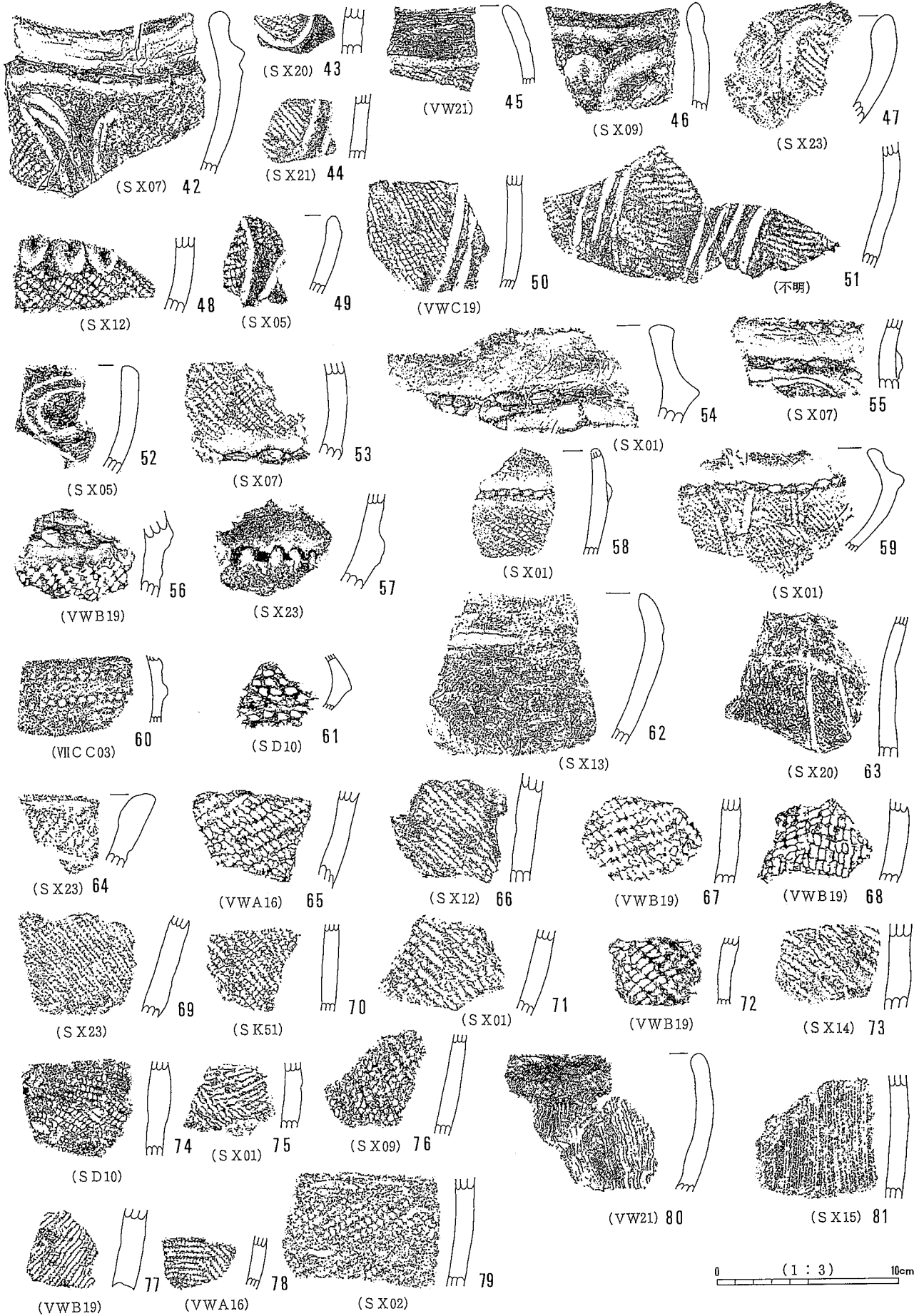
小型不定形石器（第90図10・11・13・第93図57） 定形的な形態を認識できない小型の石器を一括して小型不定形石器と分類した。10は黒曜石、11・13はチャート、57は安山岩で打製石斧と同じ石材を用いている。

ピエス・エス・キーユ 図示していないが、黒曜石と安山岩のものがそれぞれ1点ずつ出土した。

打製石斧（第91・92図14～51・56） いずれも撥形、短冊型とされるもので、14・22は両端部に摩耗痕が認められ、いずれも刃部として使用されたものである。34・41は側縁部に著しい敲打痕を残している。37～40・43は他に比べかなり寸詰りの形態を示す。56は幅広で、一側縁のみに調整加工が見られ、自然面の残る側縁にはほとんど調整加工が見られず、他の打製石斧と区別される。46・47は側縁部からの加撃により大きく剥片剥離しており、50・51は側縁からの加撃により折れたものである。これらには使用による摩耗痕が認められず、いずれも打製石斧の製作途上で放棄された未製品であると判断される。これに対し48・49は表面または裏面から力が加わり折れたもので、48には使用により摩耗痕が認められることから、使用時に欠損したものと推定される。出土した203点中49点が完形品で、完形率24%であり、図示したものの以外の欠損品はほとんどが使用による欠損である。なお、欠損品のうち刃部を残しているものが60点、基部を残しているものが43点で、他は胴部破片もしくは刃部か基部かの認定ができなかったものである。接合作業を十分していないため欠損したものが接合することも考えられるので、出土点数203点そのまま遺



第88図 沢田鍋土遺跡 縄文時代土器(1)



0 (1:3) 10cm

第89図 沢田鍋土遺跡 縄文時代土器(2)

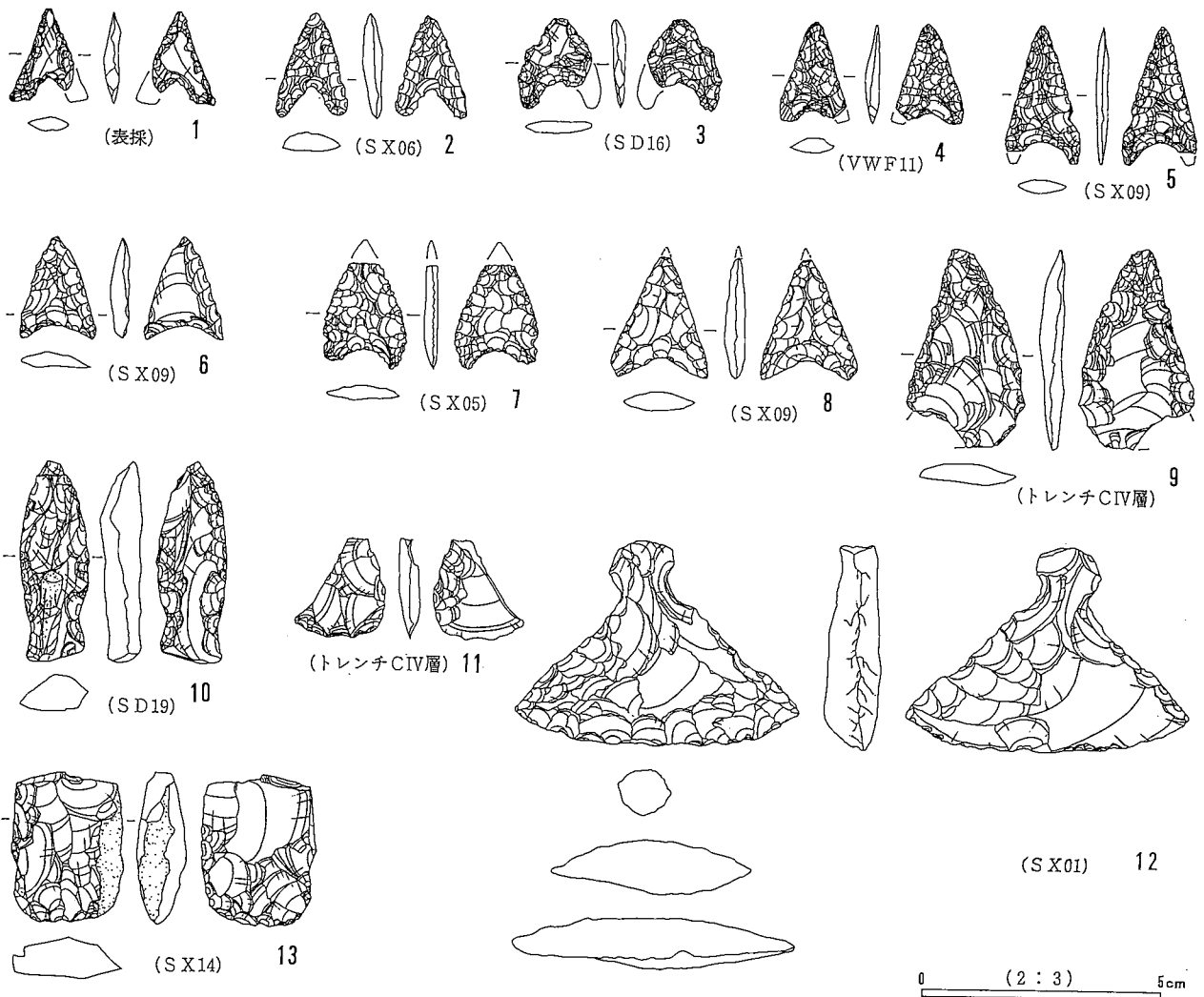
跡で使用され残された打製石斧の数とはいえないが、完形品と刃部の数を加算した108点は、使用され遺跡に残された最小限の数といえる。打製石斧の点数が最小限の108点としても石器組成の中で占める割合は他の石器に比べ特出している。203点中19点が凝灰岩で残りの185点は安山岩である。図示したものは20・24・25・31・32・35・56が凝灰岩で他は安山岩である。

横刃形石器 (第93図52・54) 横長の剥片の一侧縁に調整加工を施し刃部としたもの。スクレイパーと分類したものより大型のものを一括した。8点出土し、すべて安山岩である。

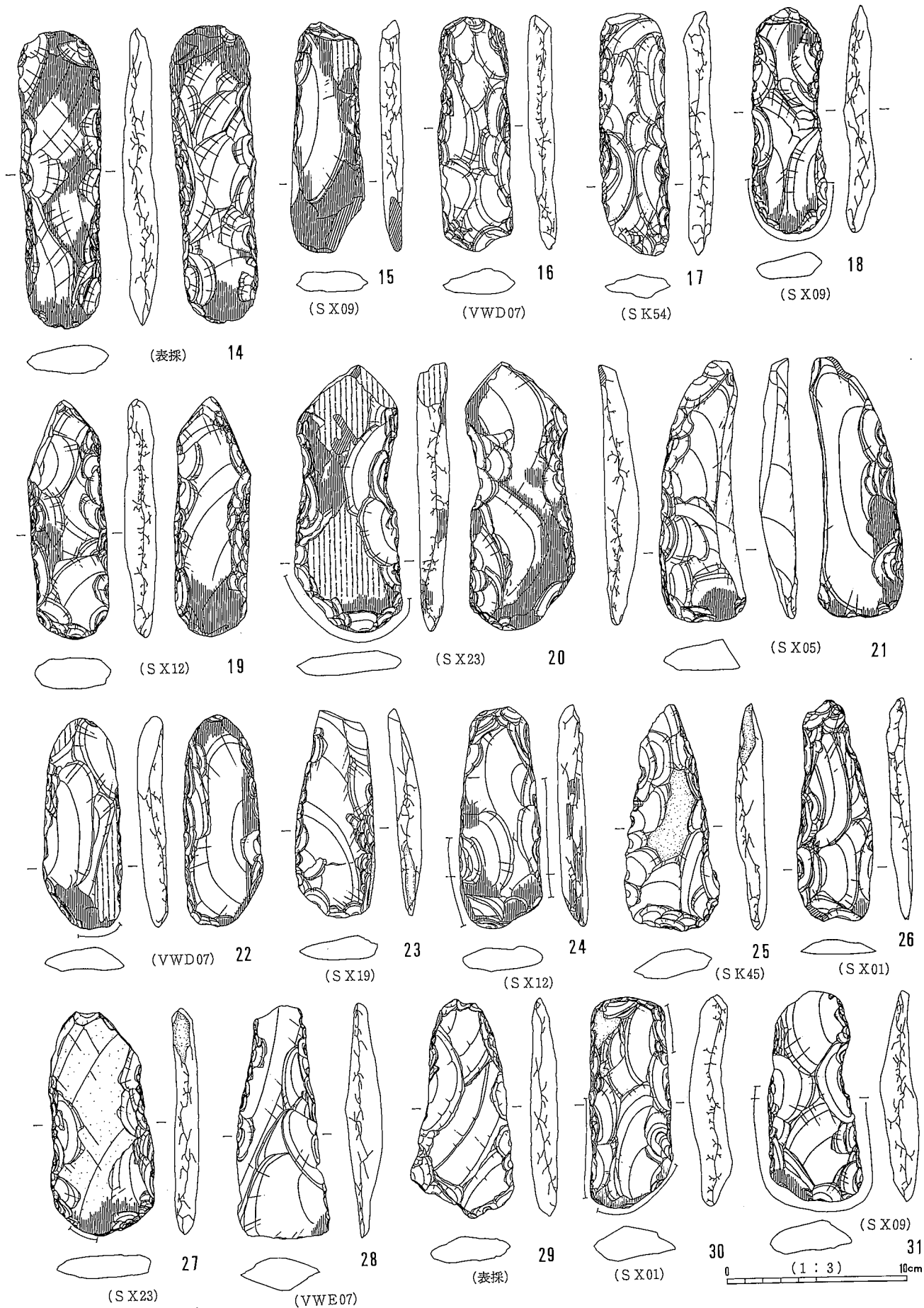
磨製石斧 (第93図59~63) 62のみ完形品で、刃部を残す欠損品2点、基部を残す欠損品2点、胴部のみのも1点である。59が閃緑岩、60~63が蛇紋岩である。なお、閃緑岩、蛇紋岩の剥片が無いこと、砥石などの磨製石斧製作に使われる工具となる石器が出土していないことから、磨製石斧は遺跡内では製作されていないと判断される。

石錘 (第94図67) 偏平な河床礫の両端を打ち欠いた礫石錘が1点出土した。

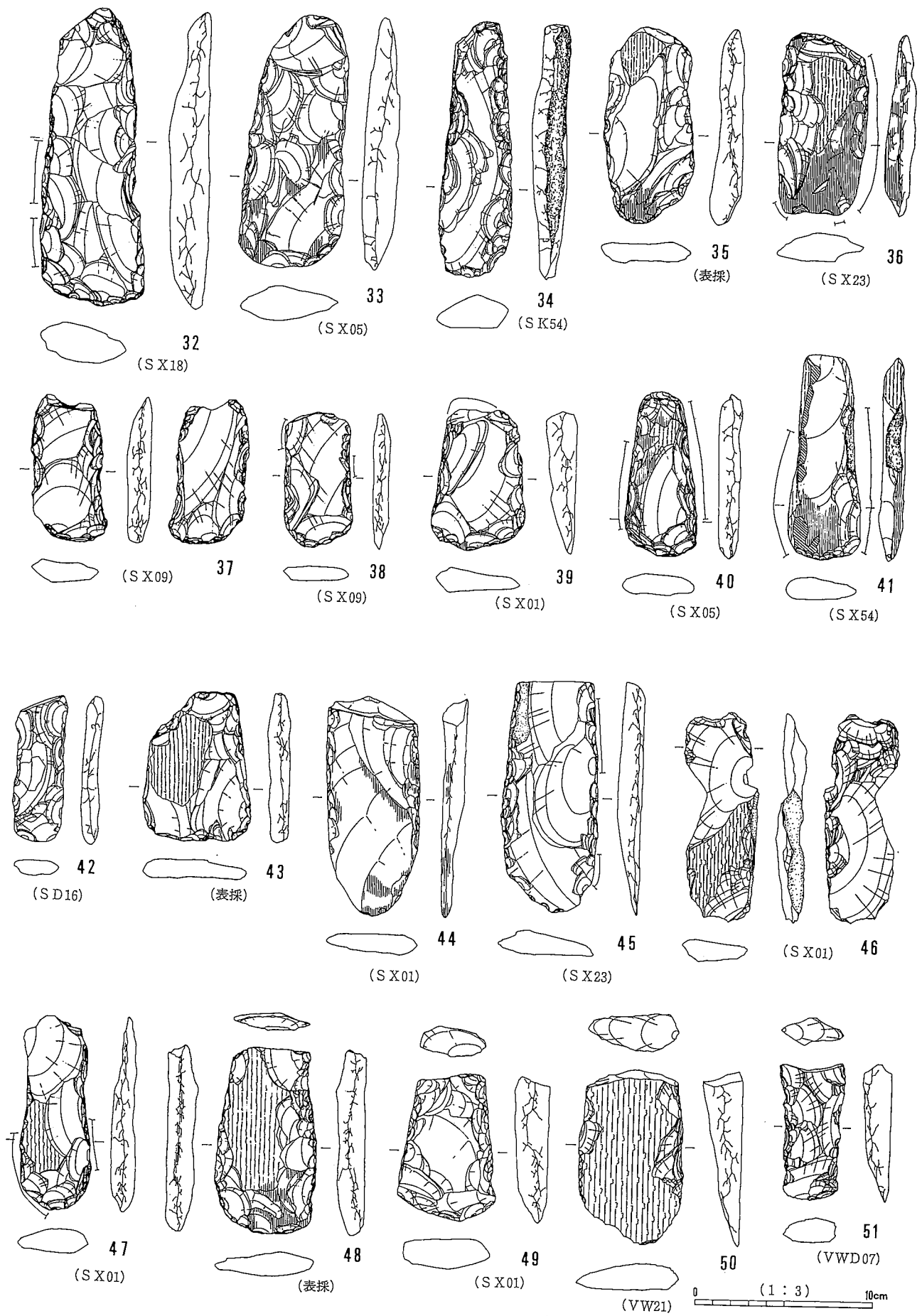
磨石・凹石 (第94図68・71・72) 敲打による凹みと磨面を共有する石器があり、磨り面もしくは敲打による凹みを有する石器を一括して扱った。68は一側面部に特殊磨石と類似する磨り面を持つもので、71は表裏面の磨り面とその中央部に敲打による僅かな凹みが認められる。凹みを有するもの3点でその他は磨面のみ磨石である。すべて安山岩製である。



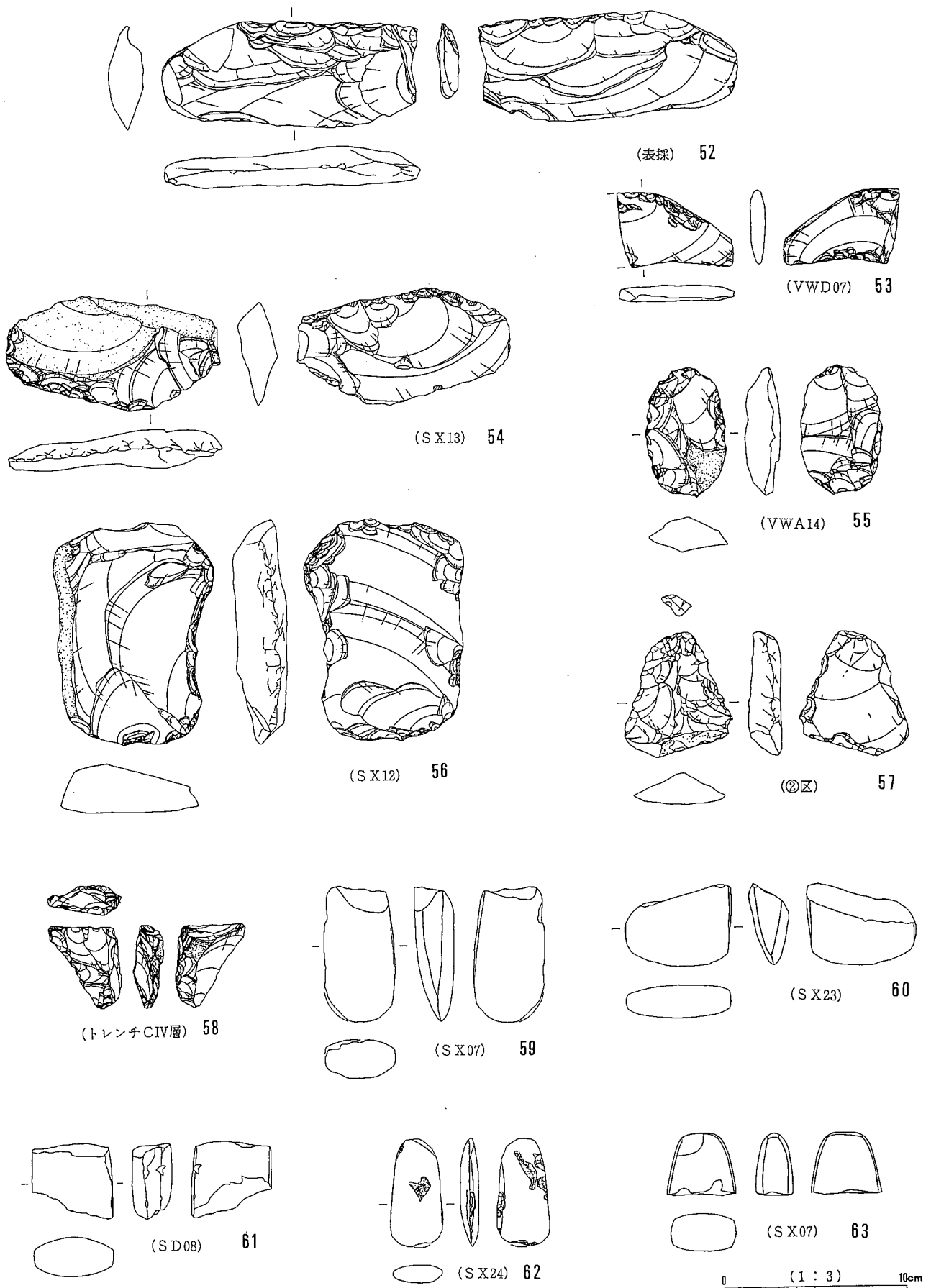
第90図 沢田鍋土遺跡 縄文時代石器(1)



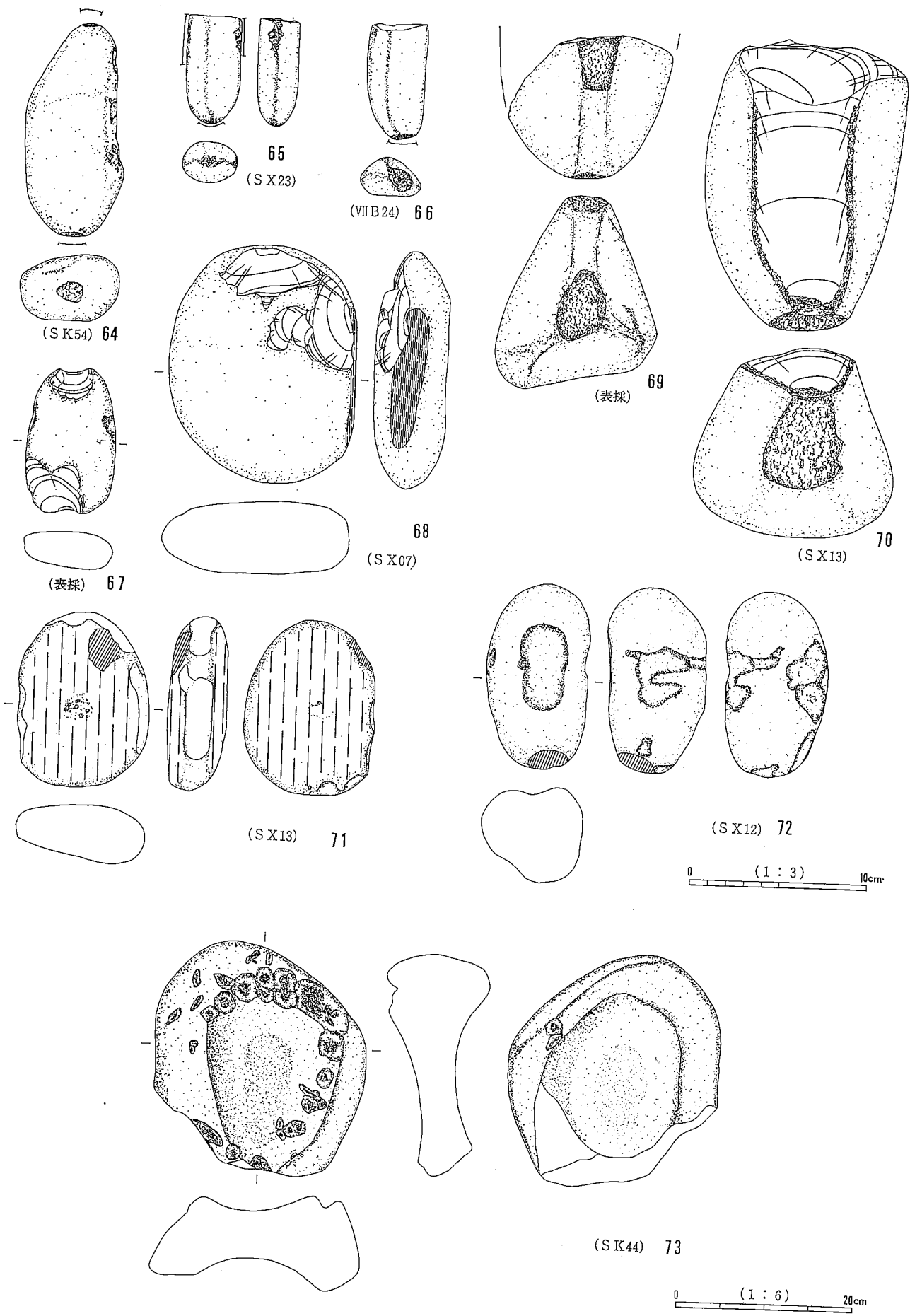
第91図 沢田鍋土遺跡 縄文時代石器(2)



第92図 沢田鍋土遺跡 縄文時代石器(3)



第93図 沢田鍋土遺跡 縄文時代石器(4)



第94図 沢田鍋土遺跡 縄文時代石器(5)

敲石（第94図64～66・69・70） 64～66は棒状の河床礫の端部に敲打痕が認められるもので、65は側縁部にも敲打痕が認められる。これらに対し69・70は完形での推定重量が3Kgを越える大型のものである。これらは断面三角形の礫を用い先端部と側縁部に敲打痕が認められ、形態的には特殊磨石と類似するが、大きさと稜部の機能面の状態が特殊磨石とは異なる。70は端部からの加撃による剥片剥離の後に側縁部が敲打されている。すべて安山岩製である。

特殊磨石 図示していないが、断面三角形の稜部に機能面を有する特殊磨石の小片が1点出土した。

石皿・台石（第94図73）明らかに石皿と認められるものは73のみで、表裏両面に石皿としての機能面を有し、裏面に多数の凹み痕を持つ。14点出土しているがすべて欠損品である。

石核（第93図58） 安山岩1点、珪質頁岩1点、黒曜石1点、チャート5点が確認された。

4 小結

本遺跡及び清水山築跡③区の縄文時代遺構としては、住居址などの居住施設が発見されず屋外の埋甕と粘土採掘跡のみが検出されており、集落址と捕らえるには資料不足である。考えられることは、①居住域が調査区外に存在する。もしくは住居施設が古墳時代粘土採掘跡により破壊された。②居住施設は存在せず粘土採掘及びそれにかかわる活動のみの空間であった、の2つであるが、1994年の中野市教育委員会の調査によって本調査区の斜面上方の発掘調査が行われたが、住居址は確認されなかった。また第5表に示したように、やや後続する栗林遺跡の集落址と比べ石器組成に偏りがあること、すなわち打製石斧の出土点数が極端に多いことなどを考え合わせると、本遺跡は集落跡ではなく粘土採掘に関わる空間であったとする方が妥当と思われる。しかしながら、埋甕の存在の説明がつかず今後の検討を要するところである。調査区西側の清水山南麓から南方にかけては未調査の部分も多く残されており、近隣に小集落址が存在する可能性もある。

本遺跡の土器群は中島庄一氏が栗林遺跡の報告の中で指摘するように（中島1994）、加曾利E式土器様式、唐草文系土器、圧痕隆帯文土器等から構成されているが、その詳細については破片資料のみであるため明らかにはできなかった。

第5表 沢田鍋土遺跡と栗林遺跡の主な石器の組成率

	石	鉄	石鉄未製品	摩製石斧	打製石斧	摩石・凹石	石	皿	小	計
沢田鍋土遺跡	8		0	6	203	12	14			243
	3.2%		0%	2.4%	38.5%	4.9%	5.7%			
栗林遺跡	410		270	90	1400	600	35			2805
	14.6%		9.6%	3.2%	49.8%	21.3%	1.2%			

第4節 古墳時代の遺構と遺物

1 概要

検出された遺構は調査区北側に広がる古墳時代前期の粘土採掘跡で、調査区内で確認された総面積は約788㎡である。調査当初広範囲に不整形の暗褐色土の落ち込みが認められ、縄文中期の土器片が出土したので、縄文時代の遺構として調査を進めた。しかし、暗褐色土の下に古墳時代前期の土器を包含する覆土が確認された。調査の結果、暗褐色の落ち込みは古墳時代の粘土採掘跡の窪みに流れ込んだ土で、縄文時代の遺物も大部分は流れ込みと判断された。粘土採掘跡の形状は不定形で、独立している穴もあるが、いくつもの採掘跡が重なっているものもあり、その切り合いは明確にできなかった。そのため遺構記号は検出面での平面的なまとまりを考慮して付けてはいるものの、調査の便宜上付けたものであり、有為なまとまりを示しているとは限らない。

採掘された粘土は採掘坑群の北側と南側では色調が異なっており、北側は灰白色粘土、南側では黄褐色粘土となる。その境界については明瞭につかめない。

土坑の切り合いを十分に調査できなかったため縄文時代の粘土採掘跡と確認したものは無い。しかし、採掘跡からは縄文時代土器及び多数の打製石斧が出土しており、縄文時代の粘土採掘跡が存在した可能性もある。なお、これらの粘土採掘跡の北側約30mの清水山竪跡③区では縄文時代の粘土採掘跡が確認された。

2 遺構（粘土採掘跡）（第95図～第104図）

前述のとおり遺構名は粘土採掘の単位と一致するとは限らず、非常に不明確な基準で便宜的に遺構名を付けたので、最終的に掘り上がった採掘跡の平面的な位置関係から採掘跡のまとまりを再編成して、第95図に示すようにA～Fの6グループに分けて記述する。

平面的には切り合い関係を確認することはできず、また土層断面は記録の不備もあり採掘跡全体の形成過程を復元するに足る資料ではない。覆土は粘土採掘に伴う残土をすでに掘った穴に埋めた土が多く、個々の土層は複雑な様相を呈している。そこで土層断面図は土層の堆積過程を考慮して以下の5つの層群に分けて説明する。

①暗褐色土を主体とした層。粘土採掘跡全体を覆っていた層で、ひとつの採掘過程が終了した後に自然堆積したと思われる。基本土層Ⅲ層に相当する。

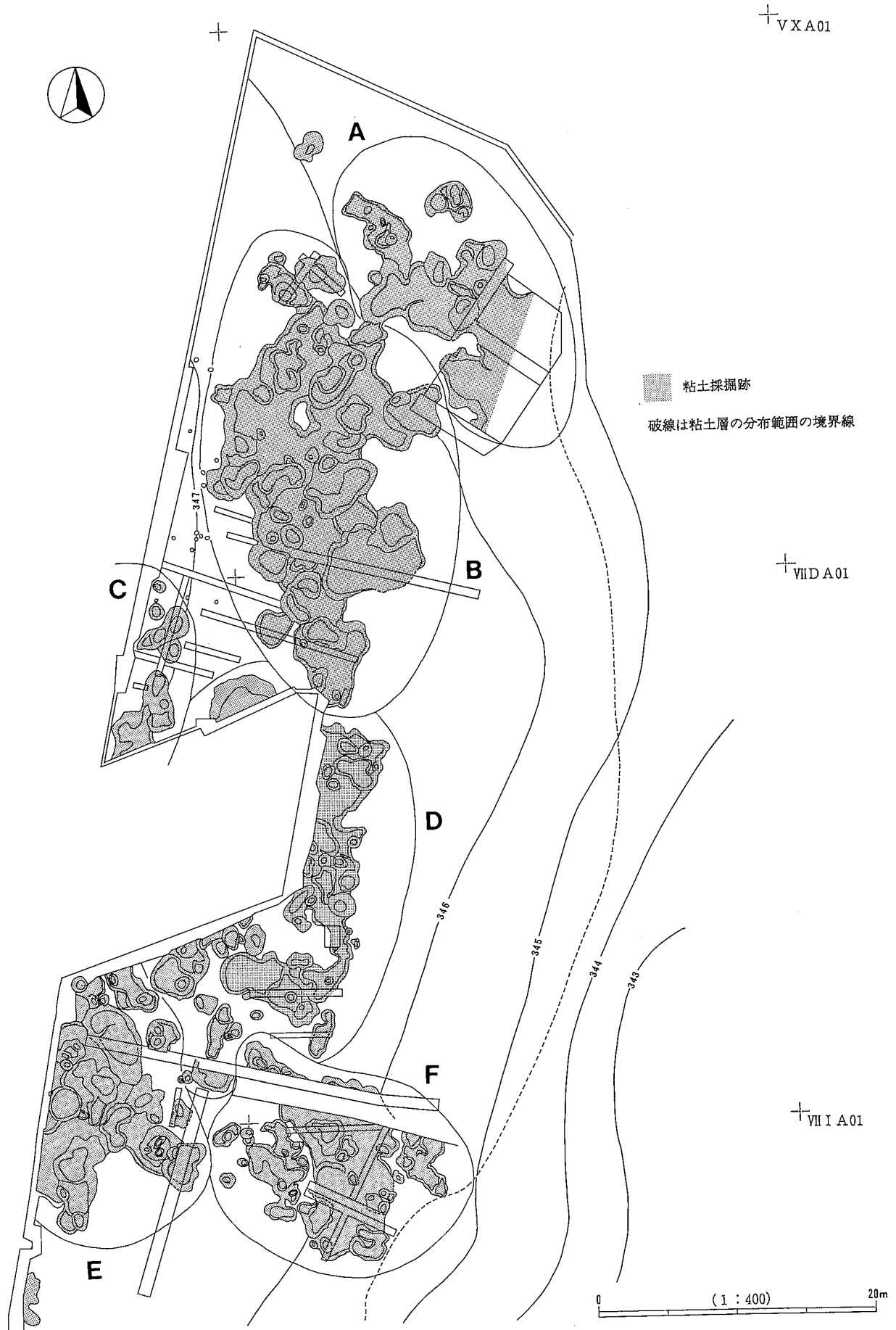
②黄褐色土。あるいは黄褐色土と暗褐色土の混土層。他の採掘坑を掘った土が堆積したもの、もしくは横穴状に掘った穴の天井が崩落したものと思われる。粘土が混じっていないことから粘土層に達するまでの採掘の残土が堆積したものと思われる。

③黄褐色土または暗褐色土を主体とし、粘土を混じる層。粘土採掘終了後、他の採掘坑の粘土採集時に掘り出された土が堆積したものと思われる。

④黄褐色または灰色の粘土が主体となった混土層。粘土が混じることから、②・③と同様に他の粘土採掘に伴う残土の堆積と考えるよりも、その粘土採掘坑の採掘行為の中で形成されたものと理解する。

⑤混じりけの無い粘土層。採掘の際取り残された粘土、もしくは地山の粘土で④同様採掘行為の中で残された層である。

以上①は粘土採掘が終了した後の自然堆積、②・③は混土層であることから人為的な埋め戻しが予想さ



第95図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡全体図

れ、他の粘土採掘地点の残土の堆積、④・⑤はその粘土採掘跡の採掘行為によって形成された層と理解して記述を進める。

斜線で示した地山部分については粘土層のレベルが記録してあるものについて粘土層の範囲を示した。記録の無いものについては示し得なかった。

Aグループ (SX13・16・18・19) (第96・97図)

最も北側のグループで、合計で約104m²の面積を測る。いずれも不整形な形状で、SX13・16・19はそれぞれつながっており、これらが連続して掘られたものか一定の時間をおいて掘られたものかは不明である。SX13断面f-f'を見ると断面図右側に粘土層を横方向に掘り進んだ横穴が認められる。SX19は礫層に達するまで掘り下げている。SX16・18は検出面からの深さが40センチ前後で他の採掘跡に比べ浅い。それぞれの採掘跡の出土遺物の概要は第6表に示す。櫛描波状文を施した甕、赤彩された土器片など、技法・形態の点で箱清水式の系譜上にあるものを箱清水系土器として他の土師器と区別して数をカウントした。SX13とSX19から拳大と子供の頭大の礫が出土した。出土遺物より、古墳時代前期の粘土採掘跡と判断した。

Bグループ (SX05・12・15・17・21・22・23) (第96・97図)

Aグループに接しており、約288m²を測る。SX05aは平面図ではSX12と接してはいるものの、断面r-r'で観察されるように、SX05aの横穴がSX12の床面下に入り込んでいる。調査時点ではオーバーハングした部分は残せずに取り去ってしまったため、遺構が掘り上がった状態では連続した遺構のように見えるが、本来連続しない別の採掘坑であった可能性が強い。

SX12は不定形でかなり広範囲な部分を占める。深いところでは検出面より1m以上掘り下げ、底面は凹凸しており、いくつもの不定形なくぼみが認められ、それぞれをピットとした。P3・P22の底面付近からはほぼ完形の甕形土器(第109図75・86)が出土している。SX12の西側斜面上方では粘土層は見られず粘土採掘跡はそれ以上西側には広がらない。SX12中央には掘り残された地山部分が島状に残る。土層断面で確認するかぎり遺構の切り合い、もしくは粘土採掘坑を一定期間放置した後に、また採掘を再開するような状況を示す自然堆積の間層は認められない。出土遺物の時間幅を勘案してもSX12の採掘期間は何世代にもわたるような長期間に及ぶものではないと思われる。

SX15・17・21は不定形な平面形態で検出面からの深さはそれぞれ92cm、46cm、51cmで、一部分で他の採掘跡と接してはいるものの平面形態がほぼ独立して捕らえられることから、個々に独立した採掘跡と判断される。SX22・23は、それぞれ検出面から1mと63cmの深さで、SX12と連続するものなのか、または独立した採掘坑なのかは確認できなかった。SX23Pit2より完形の甕(第109図78)が出土した。

SX05とSX12から拳大と子供の頭大の礫が出土した。

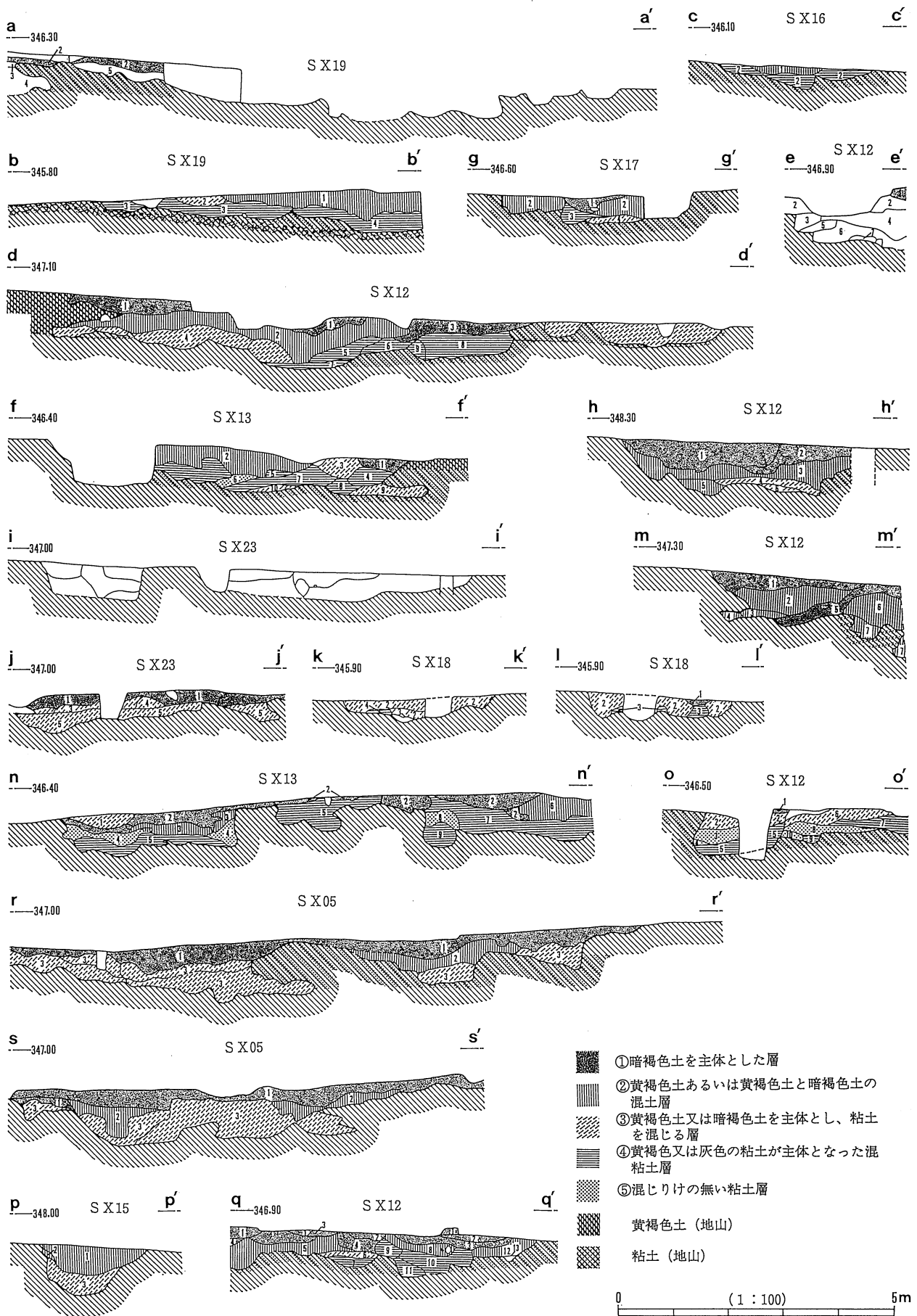
それぞれの採掘跡の出土遺物の概要は第6表に示した。SX12の古代の須恵器1点は覆土1層の黒褐色土より出土したもので後世に流れ込んだものと思われる。出土土器からBグループの粘土採掘跡の時期は古墳時代前期と判断した。

Cグループ (SX03・14・20) (第99図)

調査区外に出る部分もあり、全体像はつかめない。調査された範囲では合計で24m²を測る。検出面からの深さは最深部でSX03が36cm、SX14が84cm、SX20が60cmを測り、平面形は不整形で、いずれも粘土層を掘り込んでいる。特にSX14(断面C-D)では粘土層に沿って横穴を掘ったことが確認された。SX03とSX14が連続した粘土採掘か否か不明である。SX20は平面形からは3つの穴が重



第96図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(1)



第97図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(2)

a - a' b - b'

- 1: 黄褐色土 暗褐色土を混じる
- 2: 灰色粘土に暗褐色土を混じる
- 3: 黒褐色粘土と黄褐色粘土と灰色粘土の混土層
- 4: 黒褐色粘土と黄褐色粘土と灰色粘土の混土層
- 5: 黄褐色土を主体とし、黒褐色土、灰色粘土を少量混じる。

f - f'

- 1: 暗褐色土
- 2: 黄褐色土 暗褐色土を含む
- 3: 黄褐色土に灰色粘土を混じる
- 4: 灰色粘土を主体とし 黄褐色粘土 黒褐色土を含む
- 5: 黄褐色粘土と灰色粘土と黒褐色粘土の混土層
- 6: 灰色粘土
- 7: 黒褐色土に黄褐色粘土 灰色粘土を混じる
- 8: 黒褐色土に黄褐色粘土 灰色粘土を混じる
- 9: 灰色粘土に黄褐色土と黒褐色土を混じる
- 10: 灰色粘土に黄褐色土と黒褐色土を混じる

m - m'

- 1: 暗褐色土 黄褐色土ブロックを混じる
- 2: 黄褐色土 暗褐色土を混じる
- 3: 黄褐色土 暗褐色土を混じる
- 4: 黄褐色土 暗褐色土を混じる
- 5: 暗褐色土 炭化物 黄褐色土ブロックを混じる
- 6: 黄褐色土
- 7: 黄褐色土 黒色土を混じる

o - o'

- 1: 暗褐色土
- 2: 黄褐色土に灰色粘土を混じる
- 3: 黄褐色粘土
- 4: 灰色粘土
- 5: 灰色粘土 黒褐色粘土 黄褐色粘土の混土層
- 6: 黄褐色土に粘土を混じる
- 7: 黒褐色粘土と灰色粘土と黄褐色粘土の混土層
- 8: 黄褐色粘土
- 9: 黒褐色粘土と黄褐色粘土の混土層
- 10: 灰色粘土

c - c'

- 1: 黄褐色土
- 2: 黄褐色粘土と灰色粘土と黒褐色粘土の混土層

g - g'

- 1: 暗褐色土 黄褐色土を混じる
- 2: 黄褐色土
- 3: 黄褐色粘土
- 4: 黒褐色土に灰色粘土と黄褐色土を混じる

j - j'

- 1: 暗褐色土
- 2: 暗褐色土と黄褐色土と粘土の混土層
- 3: 暗褐色土と黄褐色土と粘土の混土層
- 5: 黒褐色土と粘土の混土層

n - n'

- 1: 黄褐色土と灰色粘土の混土層
- 2: 暗褐色土 黄褐色土を混じる
- 3: 黄褐色土
- 4: 灰白色と黄褐色のまだらな粘土層
- 5: 黒褐色粘土と黄褐色粘土と灰色粘土の混土層
- 6: 黄褐色シルト
- 7: 黒褐色粘土と黄褐色粘土の混土層
- 8: 4層に類似
- 9: 7層に類似

l - l' k - k'

- 1: 暗褐色土 黄褐色土ブロックを混じる
- 2: 黒褐色土を主体とし灰色黄褐色粘土とを混じる
- 3: 灰色粘土に黄褐色粘土を混じる
- 4: 灰色粘土に黄褐色粘土と黒褐色粘土を混じる

p - p'

- 1: 黒褐色土と黄褐色土の混土層
- 2: 灰黄褐色土
- 3: 黄褐色土 灰色粘土と黒褐色土を混じる

d - d'

- 1: 暗褐色土 黄褐色土ブロックを混じる
- 2: 黄褐色土 暗褐色土が混じる
- 3: 暗褐色土 1層に類似
- 4: 1層 2層と灰色粘土との混土層
- 5: 灰色粘土と黄褐色粘土との混土層
- 6: 黒褐色 黄褐色 灰色粘土の混土層
- 7: 黒褐色 黄褐色 灰色粘土の混土層
- 8: 黒褐色 黄褐色 灰色粘土の混土層
- 9: 灰色粘土と黄褐色粘土の混土層

h - h'

- 1: 暗褐色土 黄褐色土を多量に混じる
- 2: 暗褐色土
- 3: 黄褐色土
- 4: 黒色土と黄褐色土と灰色粘土の混土層
- 5: 黄褐色土と暗褐色土の混土層
- 6: 黄褐色土と灰色粘土の混土層

q - q'

- 1: 表土
- 2: 暗褐色土
- 3: 暗褐色土に黄褐色土を混じる
- 4: 暗褐色土に黄褐色土を少量混じる
- 5: 黄褐色土を主体に暗褐色土を混じる
- 6: 黒褐色土を主体に灰色粘土 黄褐色粘土を混じる
- 7: 黄褐色粘土と灰色粘土の混土層
- 8: 4層に類似 炭化物を含む
- 9: 黄褐色粘土を主体とし灰色粘土を混じる
- 10: 黒褐色粘土と灰色粘土と黄褐色粘土の混土層
- 11: 黄褐色粘土を主体とし灰色粘土と黒褐色粘土を混じる
- 12: 黄褐色土を主体とし暗褐色土を混じる
- 13: 10層に類似

r - r' s - s'

- 1: 黒褐色土 (III層に相当)
- 2: 黒褐色土と黄褐色土 (V層) が混じりあった層
- 3: 黒褐色土と黄褐色土と灰色粘土が混じりあった層

第97図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(2)

第6表 沢田鍋土遺跡 古墳時代粘土採掘跡出土遺物一覧

遺構名	縄文	古墳土器師	箱清水系土器	礫	遺構名	縄文	古墳土器師	箱清水系土器	礫
A	SX 1 3	0	●	9	D	SX 0 9	142	●	7
	SX 1 6	3	0	1		SX 2 8	3	◎	0
	SX 1 8	8	◎	0		SX 2 5	3	○	0
	SX 1 9	51	●	11		SX 3 0	17	●	5
B	SX 0 5	51	●	6	SX 3 1	0	0	0	
	SX 1 2	103	★	64	SX 3 2	0	0	0	
	SX 1 5	24	◎	1	SX 3 3	1	○	1	
	SX 1 7	13	○	0	E	SX 2 4	12	●	11
	SX 2 1	27	◎	0		SX 2 7	0	○	0
	SX 2 2				F	SX 2 6	0	◎	0
SX 2 3	111	●	3	SX 2 9		10	●	2	
C	SX 0 3	57	◎	0		SX 3 5	12	◎	0
	SX 1 4	0	◎	0		SX 6 1	0	0	0
	SX 2 0	17	○	0	SX 6 2	0	0	0	
D	SX 0 1	416	●	0	SX 6 3	0	0	0	
					SX 6 4	0	0	0	

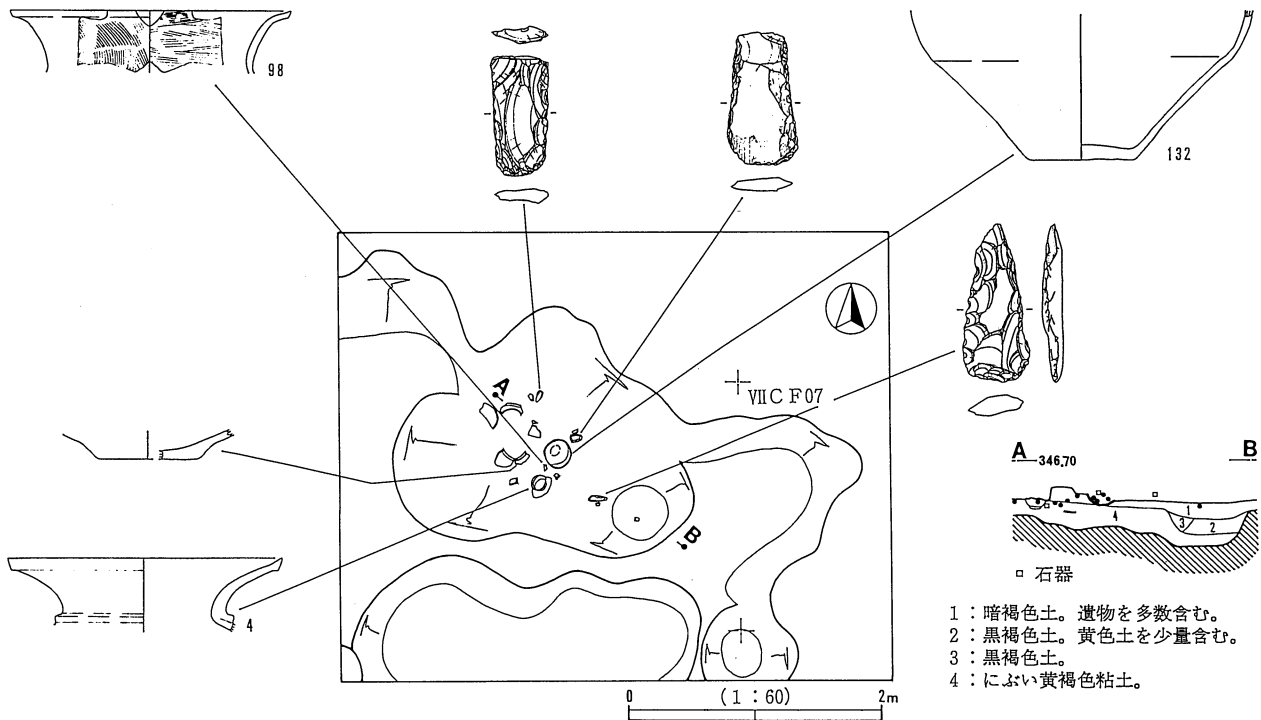
○10点以下、◎10~50点、●51~100点、★101点以上

複している様に見えるが、断面から切り合い関係は確認されない。出土遺物は少ないが、覆土より古墳時代の土師器が出土しており、いずれも古墳時代前期の粘土採掘跡と判断した。なおSX 1 4からは拳大と子供の頭大の礫が出土した。

Dグループ (SX01・09・25・28・30・31・32・33) (第98~101図)

未調査部分を含み全体像が確認できないため、他のグループに含まれないものを一括した。合計で約131㎡を測る。SX01は直径約5mの半円形を呈し、南側は調査区外となる。底面は凹凸し、粘土層を横に掘り進んだ横穴が壁面全体に確認され、オーバーハングした部分が崩落した状態が断面e-fに認められる。多量の縄文式土器と打製石斧が出土しているが、覆土5層からは縄文土器と共に古墳時代土師器も出土しており、出土遺物より古墳時代前期の粘土採掘跡と判断した。SX01の覆土は縄文時代の遺構もしくは包含層を破壊して埋め戻されたと推定される。SX09は調査区外にも広がり、底面は凹凸し窪み状のピットがいくつも重なり合った状態である。北端部に暗褐色土の広がり確認され土師器と打製石斧がまとまって出土した。当初土坑として調査を行ったが(SK45)、最終的にはSX09の覆土の一部であることが判明した。覆土中の遺物ではあるが、同一レベルでまとまって出土しており、廃棄による一括遺物の可能性が高い(第98図)。すなわち、図示した4・98・132は共伴関係にある。なお、胎土から4の底部と判断されるものを同図に示した。打製石斧については縄文時代の遺物であり、土器とは共伴しないと考えている。SX28・30・31は接しており、SX09とも一部接している。SX25・32・33・34はそれぞれ単独に存在している。SX32・33・34は他の粘土採掘跡に比べ浅く出土遺物が無い。しかし検出面が粘土層上面であり粘土層を掘り込んだ遺構であると認められる。SX25はトレンチにより北半分が破壊されている。残存部から方形の平面形が推定される。縦坑は約60cm~75cmの粘土層を掘り抜き礫層まで達し、壁面の粘土層を数十センチ掘り込む横穴も認められる。

出土遺物の概要は第6表に示す。奈良・平安時代の須恵器が出土しているがSX09の覆土中に同時代の溝状の遺構が検出されており(SD18)、それに伴う遺物と推定される。②~⑤層群の粘土採掘の行為により堆積した層から古墳時代土師器が出土しており、出土遺物よりDグループは古墳時代前期の粘土採



第98図 沢田鍋土遺跡 SX09 (SK45) 遺物出土状況

掘跡と判断した。出土遺物が見られない、SX31・32については覆土より同時期のものと判断した。なお、SX01とSX09から拳大と子供の頭大の礫が出土した。

Eグループ (SX24・SX27) (第102・103図)

調査部分の合計面積は約124㎡を測る。SX24B・24Iは他と独立している。他の部分は全体としてひとつの不整形な平面形を示すが、底面の凹凸からいくつかの粘土採掘の単位が認められる。SX27は断面s-tを見ると粘土層を掘り抜いて礫層まで達しており、2層は地山の崩落土と考えられ、壁面の粘土を採掘した横穴もあったと考えられる。また断面m-n、u-vでも壁面の粘土層を掘った横穴が確認できる。出土遺物の概要は第6表に示した。これらの粘土採掘跡は出土遺物から古墳時代前期と判断した。なお、SX24から拳大から子供の頭大の礫が出土した。

Fグループ (SX26・SX29・SX35・SK61・SK62・SK63・SK64) (第104図)

合計面積は約105㎡を測る。SK61・62・63は規模が小さく他の粘土採掘跡から独立しており、出土遺物はない。粘土層を掘り込んでいるが、遺構の時期、性格とも不明である。SX35としたものはトレンチで分断されているがSX29に続くものと思われ不整形な形状を示す。斜面上方のEグループに比べ地山の粘土層が薄く、検出面からの掘り込みも浅くなる。遺構の底は他の粘土採掘跡と同様凸凹であるが、Fグループには壁面から粘土を掘った横穴など粘土採掘を実証するものは確認されていない。また、SX29の断面a-bで見られるように粘土層は薄く、黄褐色土もしくは黄褐色シルトを掘り込んでおりSX29において粘土採掘を行えたかどうか疑わしい。

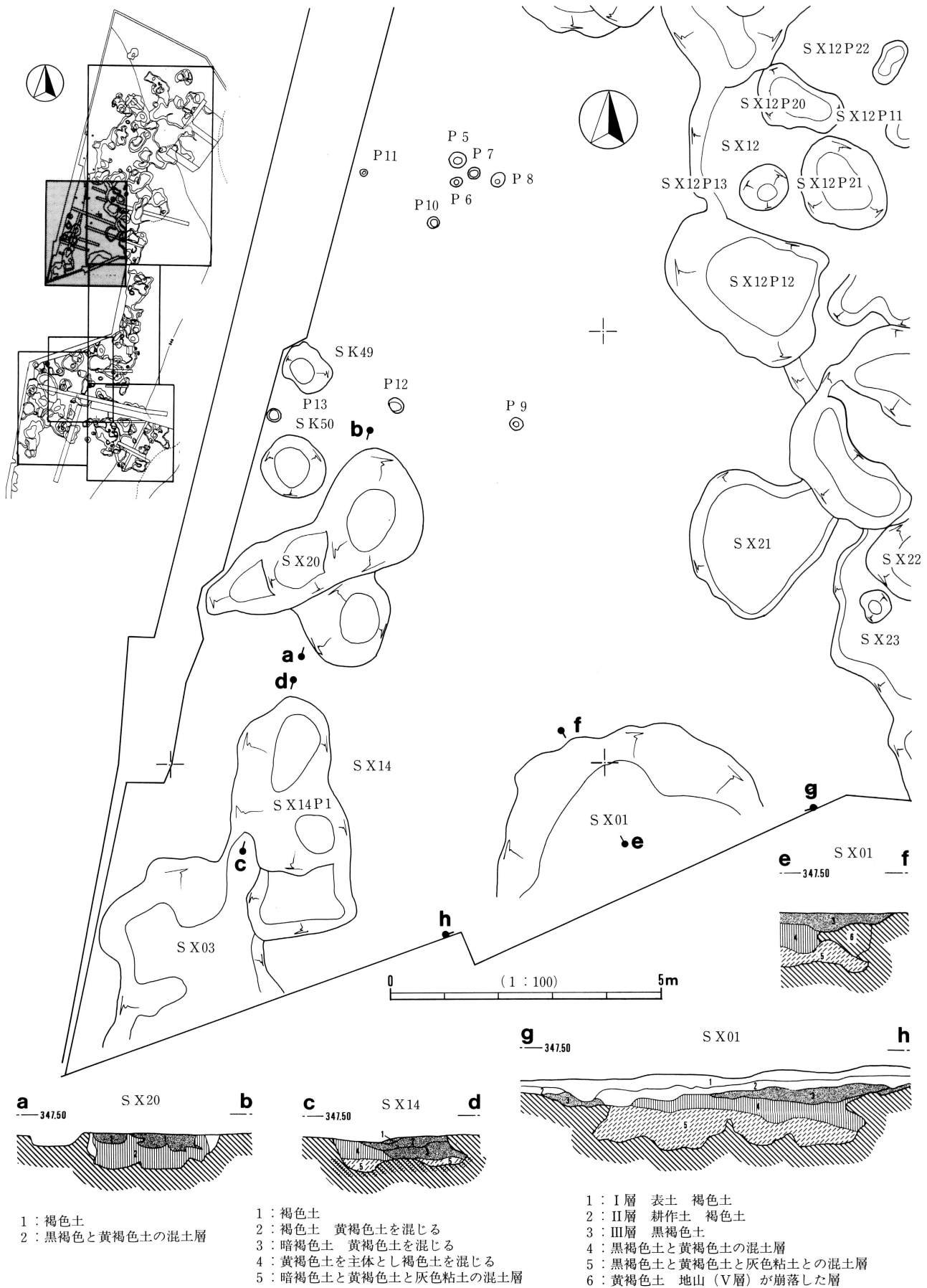
次に、遺物出土状況について述べる。全粘土採掘跡から出土した土器は実測図を示したものの他に、深さ10cmのテン箱7箱分が出土した。ほとんどの遺物は破片で出土しており、器形全体を復元できるものは少ない。ほぼ完形で出土したものは図版番号15・75・78・86・155に示したもので15以外はBグループより出土した。このうち75・78・86は採掘跡の底面に確認されたピットの底から出土したものである(第96図)。覆土中から出土した土器のほとんどが破片であったのに対し完形であったこと、土坑底面で出土していることを勘案すると、これら3点の完形品は粘土採掘後に埋設された可能性がある。他の破片で出土した土器には、人為的な埋設を示すような出土状況のものはなかった。この他に先述したようにDグループのSX09に、一括して廃棄されたと考えられるものが出土している。

なお、多くの遺物は遺構覆土一括で取り上げたため詳細な出土状況は不明であるが、第96図には土坑底面より出土した遺物についてのみ出土位置を示した。

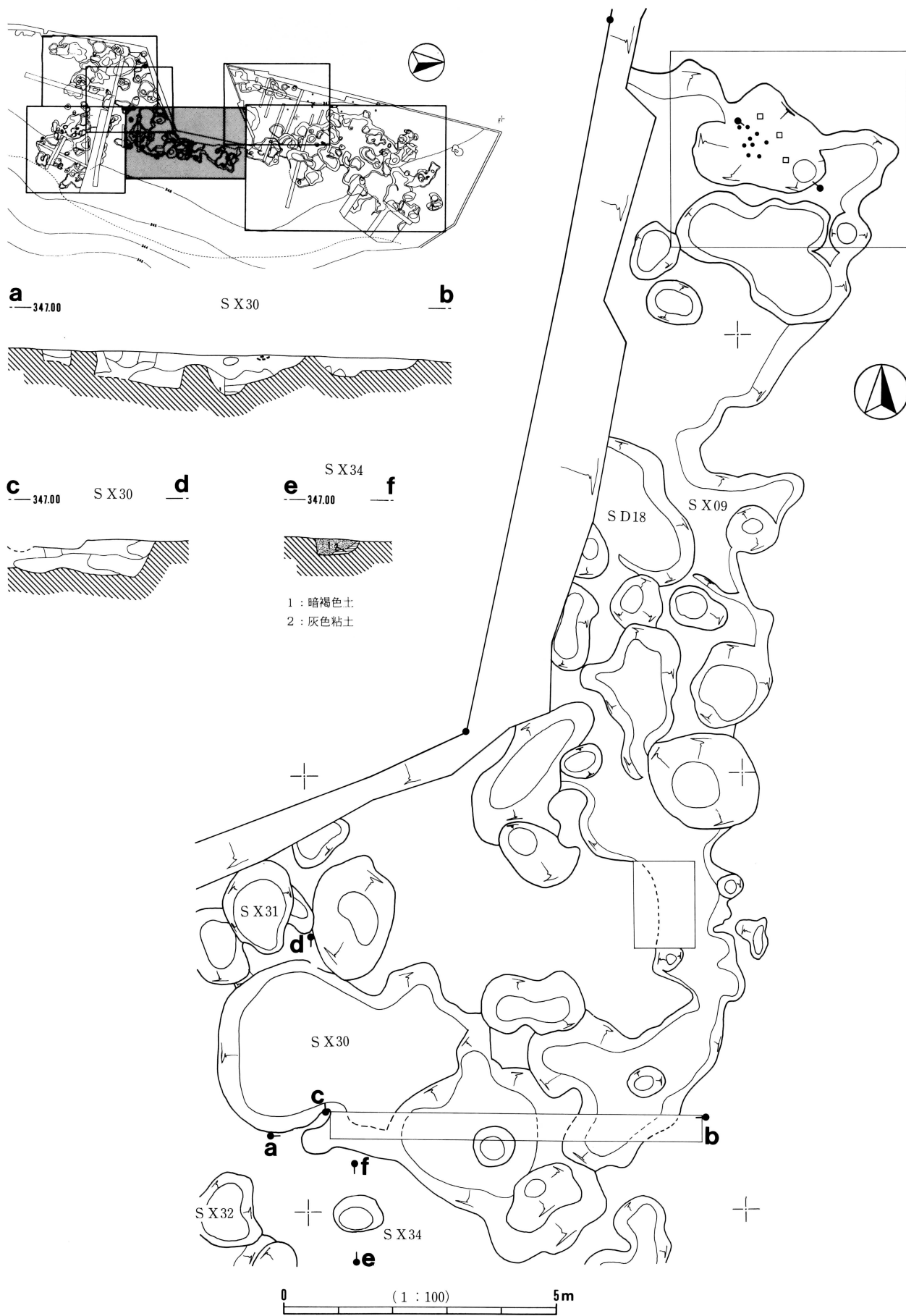
以上、粘土採掘遺構について述べたが、採掘された粘土と粘土採掘行為によって形成された粘土採掘跡の形成過程について、気づいた点を以下にまとめる。

まず採取した粘土についてであるが、採取地点により粘土層の厚さと粘土の色調に差がある。A・B・Cグループ及びDグループのSX01・SX09は灰白色粘土で、その他は黄褐色粘土と異なっている。また粘土層の厚さはEグループが一番厚く60cm～75cm、斜面下方に向かうにしたがい粘土層は薄くなり、斜面途中で粘土層はなくなる。Bグループの斜面上方には粘土層は認められないが、Cグループ以南の地区については斜面上方に粘土層が広がっており、古墳時代前期の粘土採掘跡が中野市教育委員会の調査で確認されている。本遺跡周辺では、地表下に粘土層が存在する所としない所があり、丘陵上のどこを掘っても粘土が採取できるという状態ではないようである。

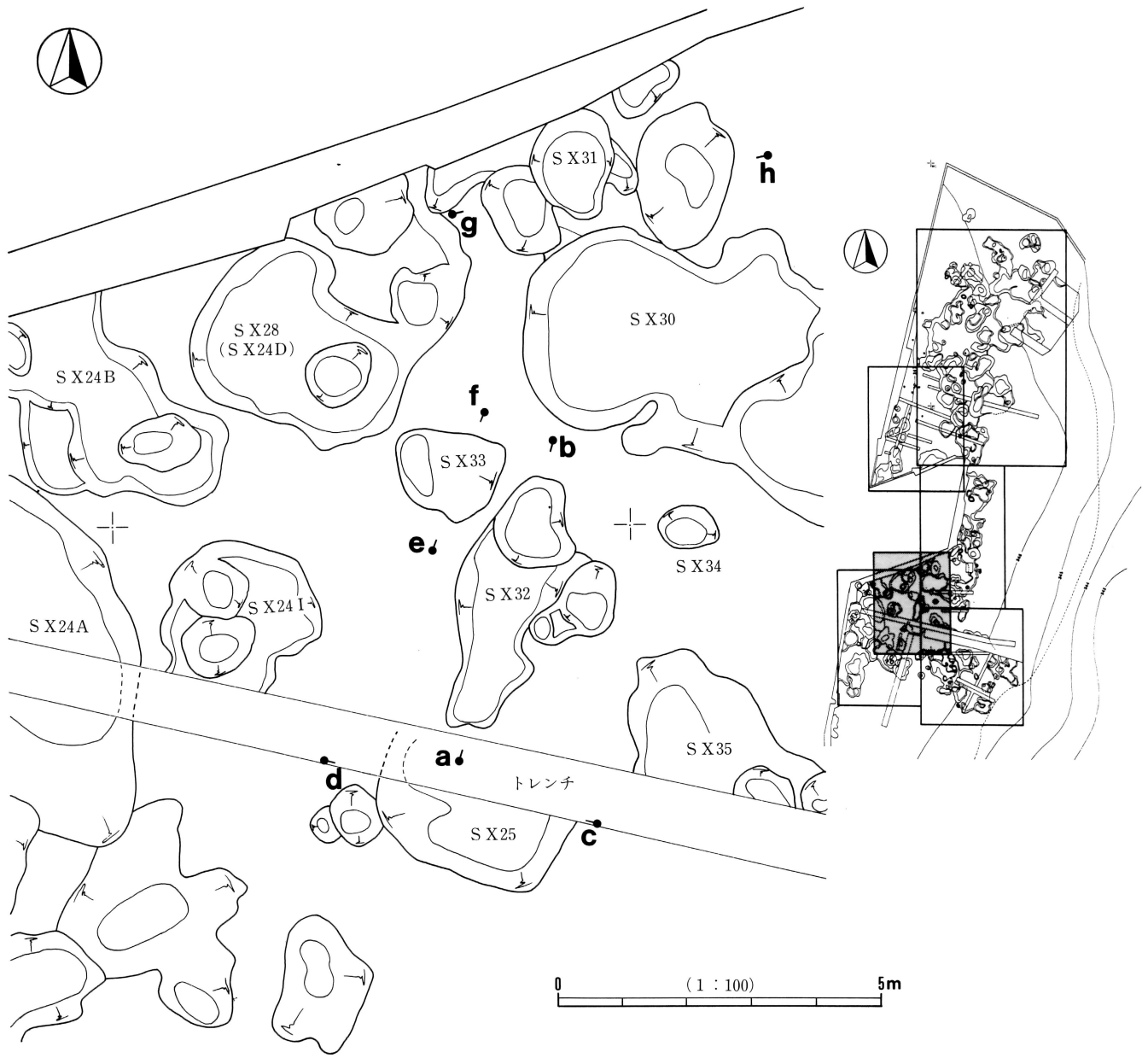
次に粘土採掘遺構の形成過程についてであるが、比較的土層断面記録の多いBグループを中心に考えてみたい。まず、完掘状態の粘土採掘跡の平面形状を見ると、粘土採掘の小さな単位が把握できるもの(小単位採掘)と、かなり広い範囲を一単位として捕らえられるもの(広範囲連続採掘)の二者がある。前者



第99図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(3)



第100図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(4)

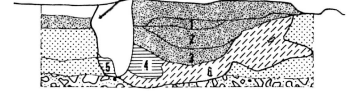


a 347.00 **S X 32** **b**



- 1: 暗褐色土
- 2: 黒褐色土と黄褐色土と暗褐色土の混土層
- 3: 褐灰色土 黄褐色土が混じる
- 4: 灰色粘土

c 347.00 **S X 25** **d**



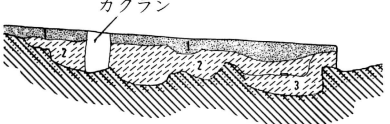
- 1: 暗褐色土
- 2: 暗褐色土 黄褐色土を混じる
- 3: 黒褐色土に黄褐色土と暗褐色土を混じる
- 4: 灰褐色粘土
- 5: 粘土層
- 6: 黒褐色土と黄褐色粘土と灰色粘土の混土層

e S X 33 **f**



- 1: 暗褐色土

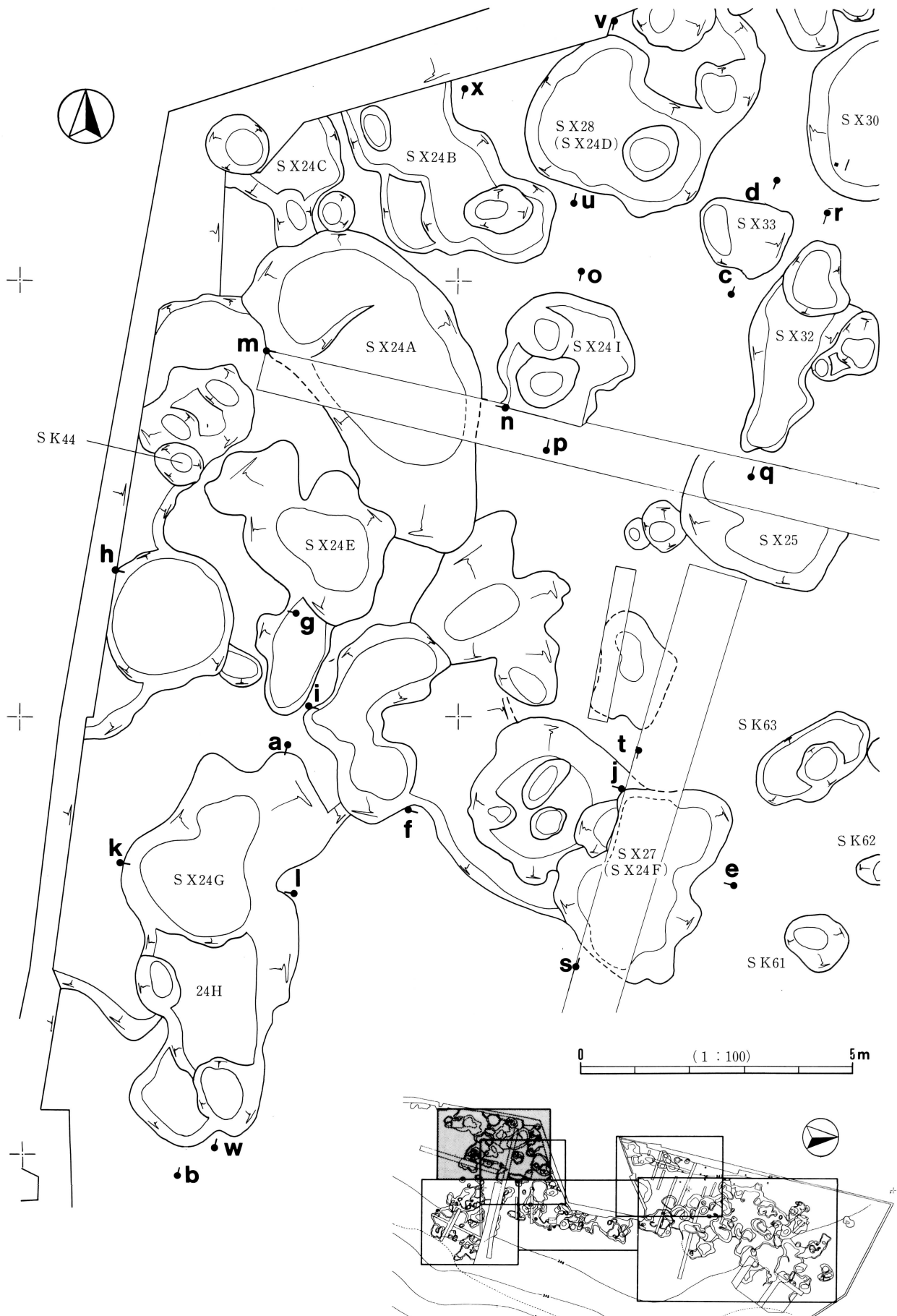
g 347.00 **S X 31** **h**



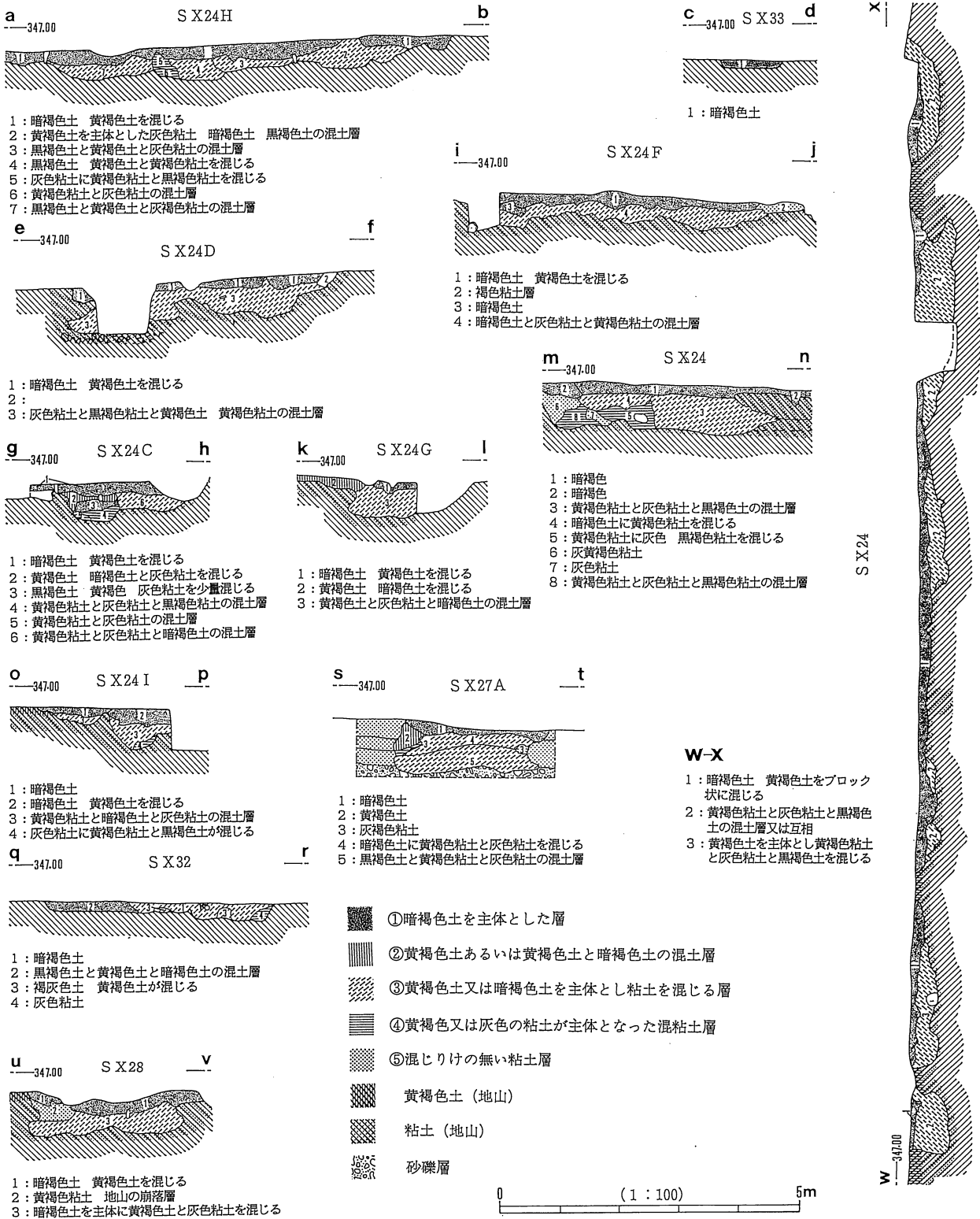
- 1: 暗褐色土
- 2: 暗褐色土と灰色粘土の混土層
- 3: 黒褐色土と灰色粘土と黄褐色土の混土層

- ① 暗褐色土を主体とした層
- ② 黄褐色土あるいは黄褐色土と暗褐色土の混土層
- ③ 黄褐色土又は暗褐色土を主体とし粘土を混じる層
- ④ 黄褐色又は灰色の粘土が主体となった混粘土層
- ⑤ 混じりけの無い粘土層
- 黄褐色土(地山)
- 粘土(地山)
- 砂礫層

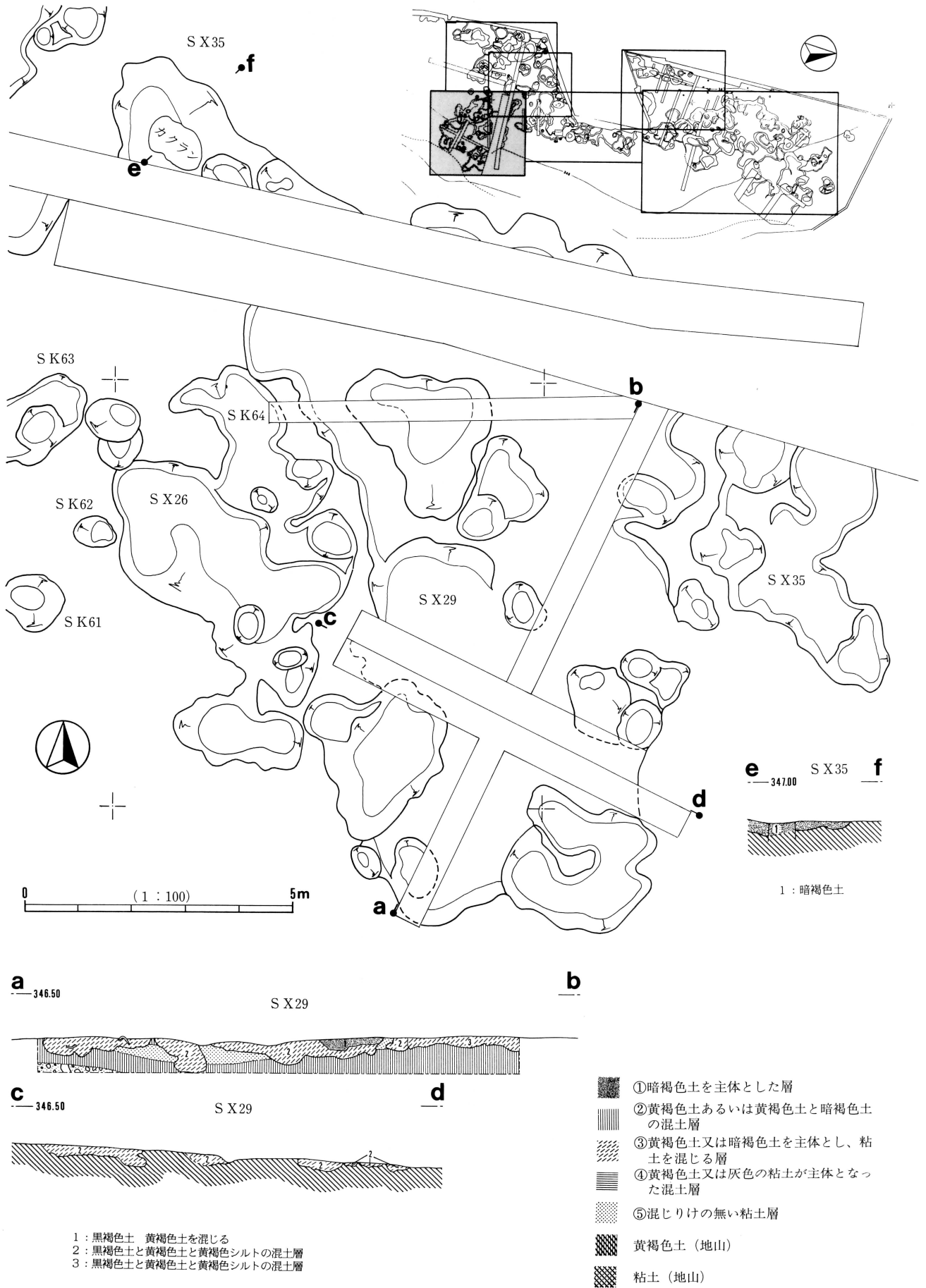
第101図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(5)



第102図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(6)



第103図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(7)



第104図 沢田鍋土遺跡 粘土採掘跡(8)

はSX15・17・21などであり、後者はSX12・13などで代表される。SX12などの広範囲連続採掘の例も基本的には小単位採掘の粘土採掘が連続した結果であろうと考えているが、掘り方に若干の違いがあるようである。すなわち、小単位採掘では直径3m前後の不整形な縦穴を掘り、粘土層に達した所で粘土を採掘し、さらに水平方向に穴を掘り壁面の粘土を採取する。これらはSX15・17・25などの断面から判断される。これら小単位採掘の採掘跡では①・②層群が厚く堆積し遺構を埋めている傾向にある。特にSX25では①層群の堆積が厚く、粘土採掘後に深い穴が開いたままの状態に放置された様子が伺える。

次に、広範囲連続採掘のSX12の土層断面d-d'と、SX13のf-f'を見ると③・④層群の上面に傾斜が認められ、いずれも断面図右側がより早く埋められていることが観察される。これは、すでに掘られた所に土を捨てながら掘り進んだ結果であろうと思われる。すなわち、断面d-d'では斜面下方部分を掘り粘土を採掘した後斜面上方に向かって掘り進み不要な土をすでに掘った部分に置いたと考えられる。さらに、広範囲連続採掘が行われたと思われる、SX12、SX13・19、SX24などの土層断面を見るかぎり、間層となる自然堆積の上にまた人為的な堆積が見られることは無い。これは採掘があまり時間を置くことなく短期間に行われた結果であると考えられる。なお、広範囲連続採掘の場合も小単位採掘と同様に、壁面の粘土を横方向に掘り進む横穴が認められる。

調査区内における古墳時代の遺構は粘土採掘跡のみでその他の遺構は確認されていない。粘土採掘については遺構の所見からあまり長期にわたるものではないと判断され、遺物からも大半は古墳時代I期新段階からII期古段階の間に納まるとと思われる(宇賀神1988、宇賀神・青木1993)。

3 遺物 (第105図～第111図・PL25)

ほとんどが破片資料で、できる限り器形を示したが、小破片のため正確さを欠くものがある。土器の残存率については観察表に示しているので残存率1/4以下のものについては器形復元に大きな誤差があり得ることを了承頂きたい。また、出土地点も観察表に示した。

なお、以下の文章に示す土器の細分類、器面調整の名称は第9章2節に示した。

(1) 壺形土器 (1～12・29・132・142)

1(A類)は赤色塗彩され櫛描直線文と簾状文と無文のボタン状貼り付けが見られる。2(C類)は口縁部に段を持ち、内面には稜を持たないものの二重口縁壺になるものであろうか。3(D類)は折り返し口縁でハケメが残る。4(G類)は頸部に凸帯がめぐり、口縁端部は面取りをしている。同一個体と思われる底部との関係から推定すると球胴形と思われる。また、胎土は乳白色で他の土器とは異質である。5・6(J類)は頸部が「く」の字に屈曲し、内外面にハケ調整が見られる。7(K類)は全体に器壁が厚く、ハケ調整後ナデ調整を行うがハケメが残る所も見られる。8(B3類)は第111図142と同一個体と思われ、全面ミガキ調整がなされる。器形は胴下半にゆるい稜がある器形と推定され箱清水式の系譜上にある壺形土器と思われるが、櫛描直線文など壺A類に見られる文様要素は認められない。9は「く」の字に屈曲した頸部のみであるが、表面は丁寧ミガキ、内面は幅約1cmの巻上げ痕が見られる。10は口縁端部をわずかに欠損し、表面及び口縁内面に赤色塗彩される。11は口縁端部が面取りされ、口縁内外面に赤色塗彩される。12は内面に幅約1cmの巻上げ痕が見られる。29・132(A類またはB類)は胴下半部に稜を持つ箱清水式の系譜上にあるものである。表面が摩滅しており赤色塗彩されているか否かは観察できない。

(2) 小型土器 (13～17)

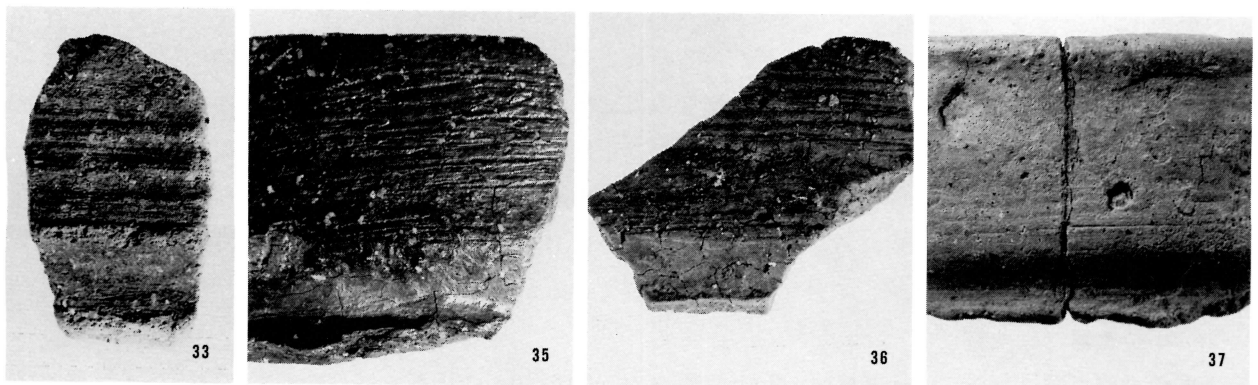
小型の土器を一括した。13は表裏面ともナデ調整で、直径2.0cmの小さな底部を持つ。14はハケ調整の後ケズリ・ナデ調整が見られる。16はハケ調整の後ナデ調整を行う。17の器面調整は不明。

(3) 広口短頸壺 (18・19)

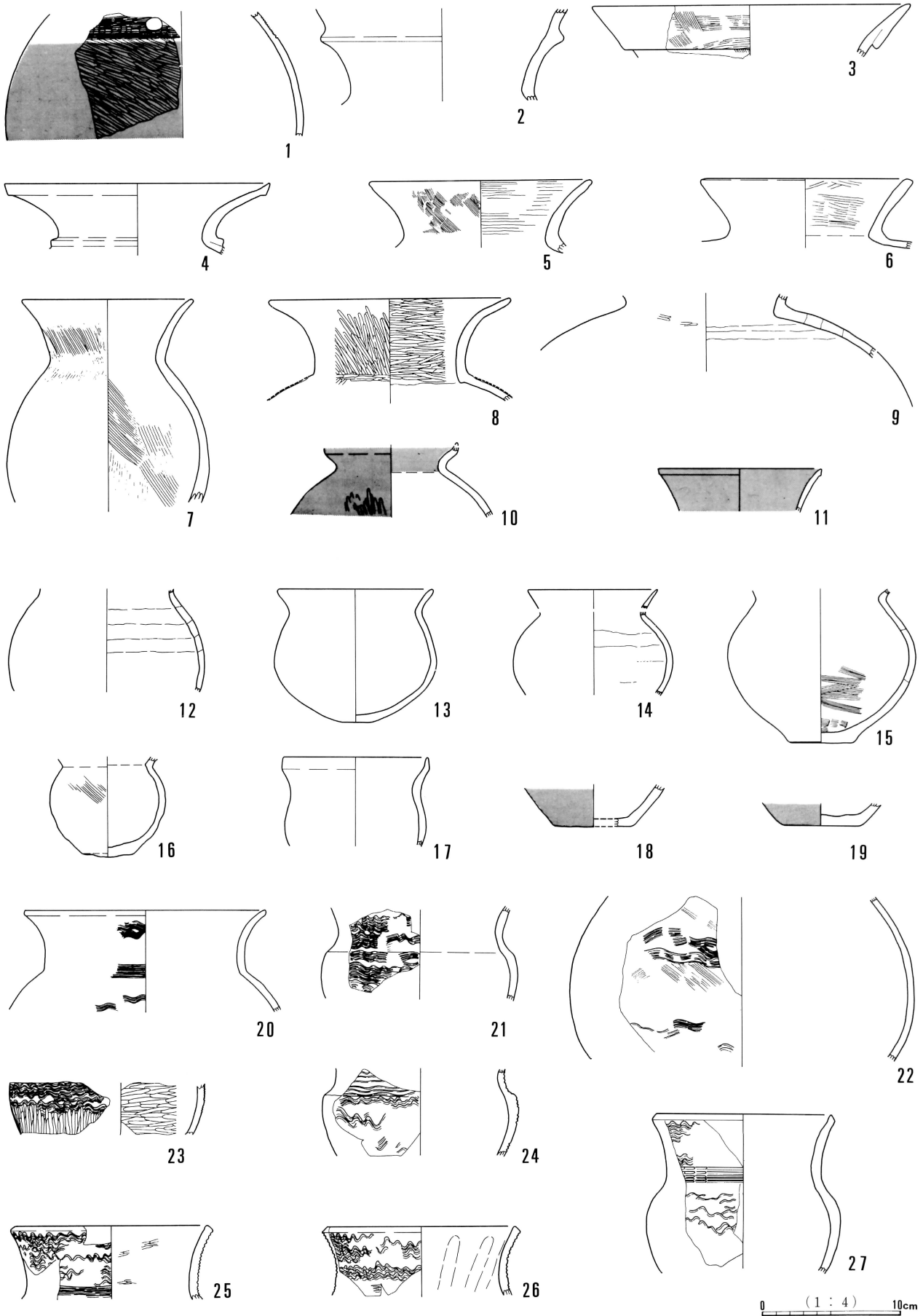
底部のみで口縁部が出土していない。いずれも表面のみ赤色塗彩されたもので、箱清水式に見られる広口短頸壺と思われる。

(4) 甕形土器 (20~28・30~111)

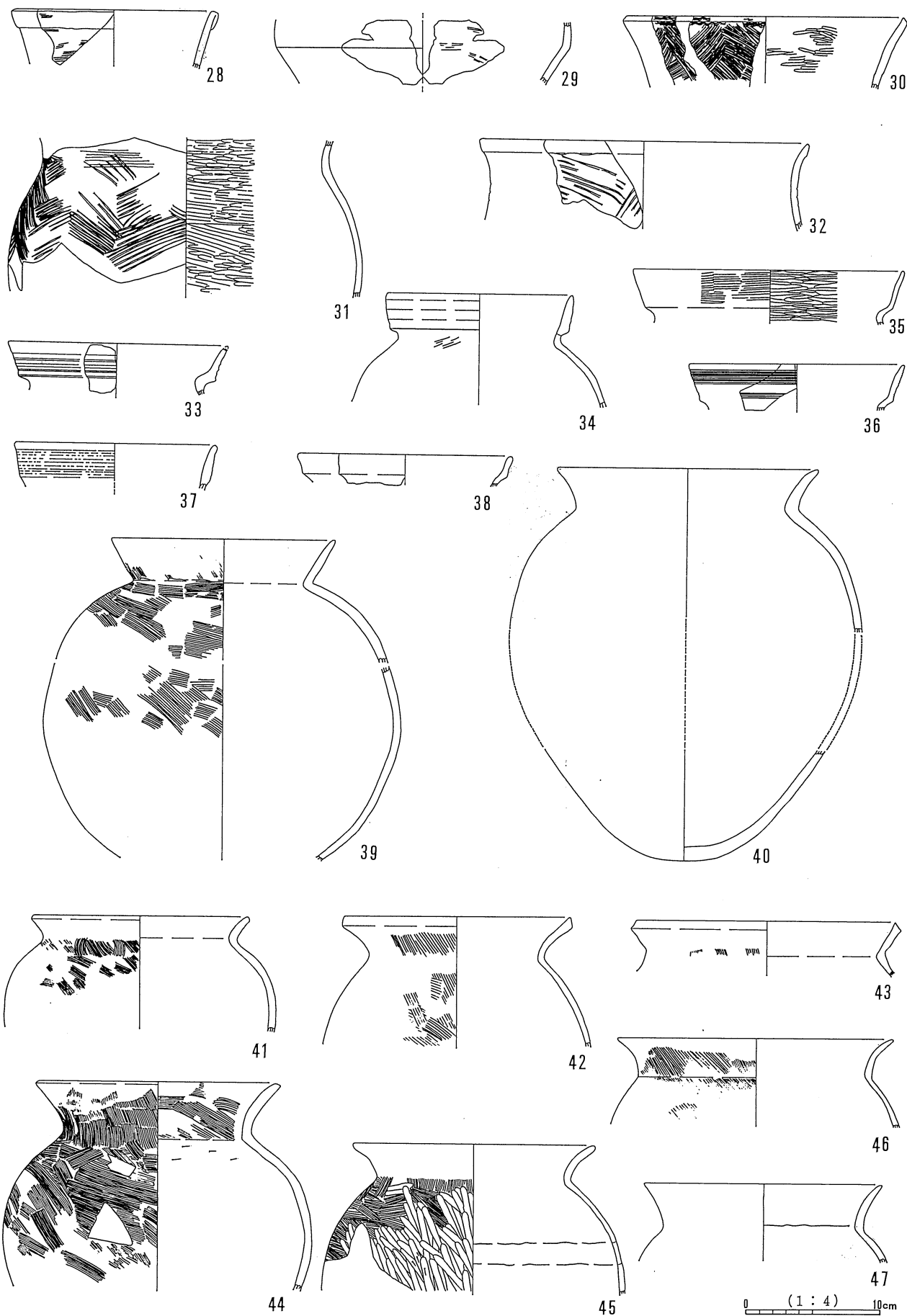
20~27(A類)は櫛描波状文が認められるものである。20は表面がかなり摩滅しているが、頸部が屈曲した球胴形の器形と推定され、頸部に櫛描簾状文、胴部及び口縁部には櫛描波状文が見られる。21・24・27は胴部上半が大きく膨らむ形態を示し、21・24は胴部と頸部の境に稜を持つ。27には簾状文が認められるが、21・24では簾状文が省略されており、いずれもがまん淵遺跡のものに比較して波状文が崩れている。22は櫛描波状文が施文された球胴形の胴部破片である。以上の資料から本遺跡の甕形土器A類には20に代表される頸部が屈曲する球胴形の器形と、24などのように胴部上半が膨らみ肩を張って稜を持つ器形が認められる。28は表面が摩耗しており、櫛描文が僅かに認められる折り返し口縁の甕形土器である。30~32(B類)は羽状の櫛描斜走直線文が見られるものである。30は甕A類に類似する沈線の間隔の狭い櫛描文で口唇部に櫛描波状文が認められる。31・32はそれに比べ間隔の広い櫛描文である。33~38(D類)は有段口縁で33~37は擬凹線文あるいは疑似擬凹線文が見られる(第105図)。34以外は小破片である。39~54(E類)は口縁が「く」の字に屈曲し、表面にハケ調整が行われている。41~43は口唇部に面取りがなされるもので、44も部分的に面取りがなされている。39・45~47は口縁端部を丸くおさめている。45はハケ調整の後ミガキ調整も行っている。48~51は横ナデにより口唇部が僅かに丸く肥大している。53は口縁分が厚く肥大している。54は口縁が内湾している。以上のように甕形土器E類の口縁部形態にはかなりのバリエーションがある。40・56~58・60~63は摩耗のため器面調整が不明であったり、ハケ調整をナデ消しているものなどで分類困難なものであるが、器形や僅かに残る器面調整からE類に含めたものである。64~66(F類)はE類より鋭角な「く」の字口縁で口縁端部に面取りがなされ、胴部外面はハケ調整が施される。67・68(G a類)は「く」の字口縁で胴部外面がケズリ調整、69~74(G b類)は板状工具もしくは指で撫でて掻き取ったような調整(ナデD)のものである。76・77・79(H類)はタタキ調整が見られ、75・78・80(I類)は「く」の字口縁で一見タタキに見える粗いハケ調整(ハケB)が見られ、口縁端部を面取るものがある。81~93(J類)は頸部が緩やかに外反しながら口縁部が伸長する器形を示し、胴部にハケ調整がなされるものである。胴部内面の最終調整は81・90・91がミガキ、85・87・88・89・93がナデ、86がハケメである。81・82は口縁端部が面取りされ、86も面取りされているようにも観察されるが摩滅しているため断言できない。他は口縁端部を丸くおさめている。94~98(K類)は頸部から緩やかに外半しながら伸長する口縁形態で、口縁端部は面取りがなされ、胴部外面は削り調整またはナデ調整によるものである。外面調整は94



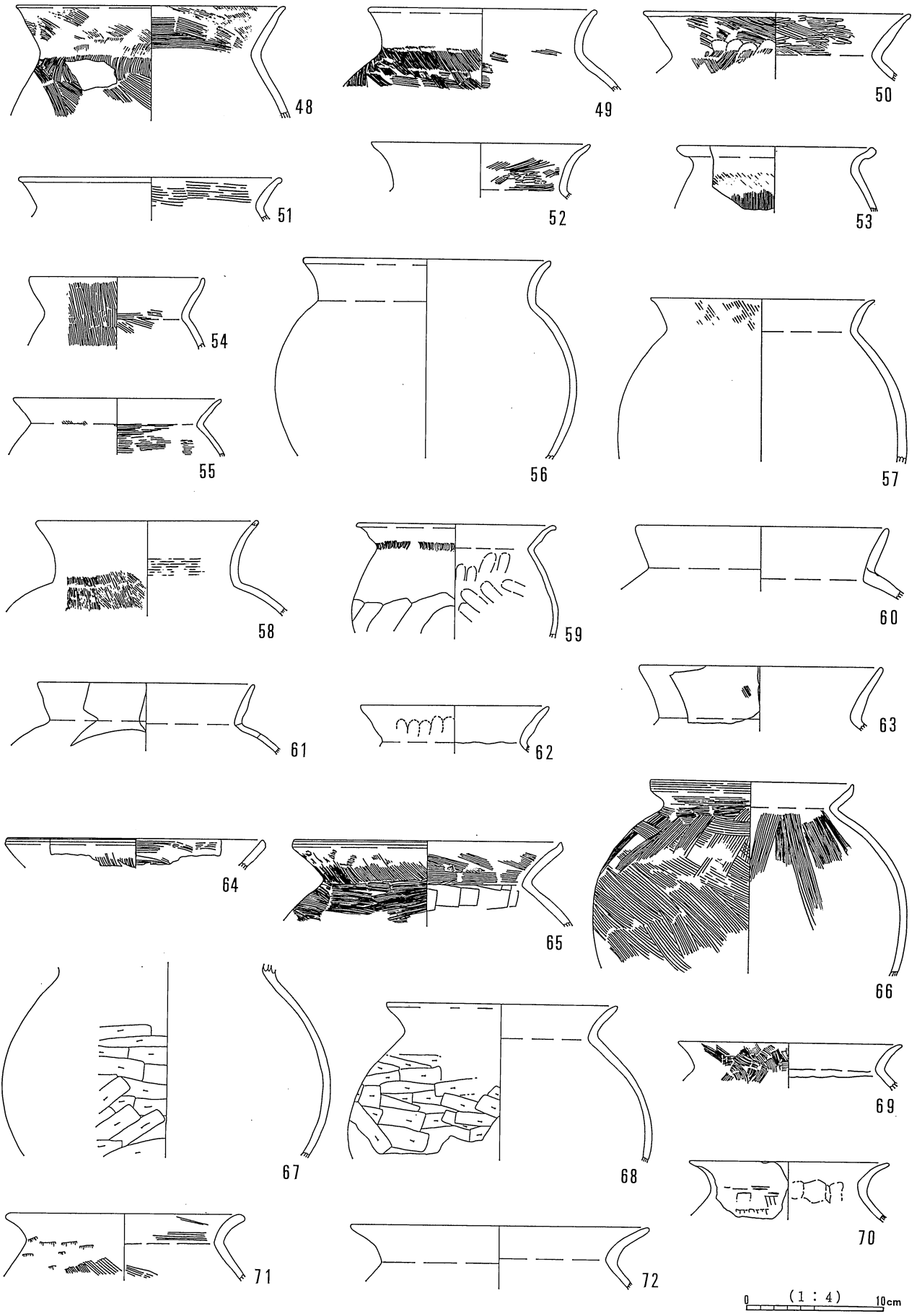
第105図 疑似擬凹線文写真



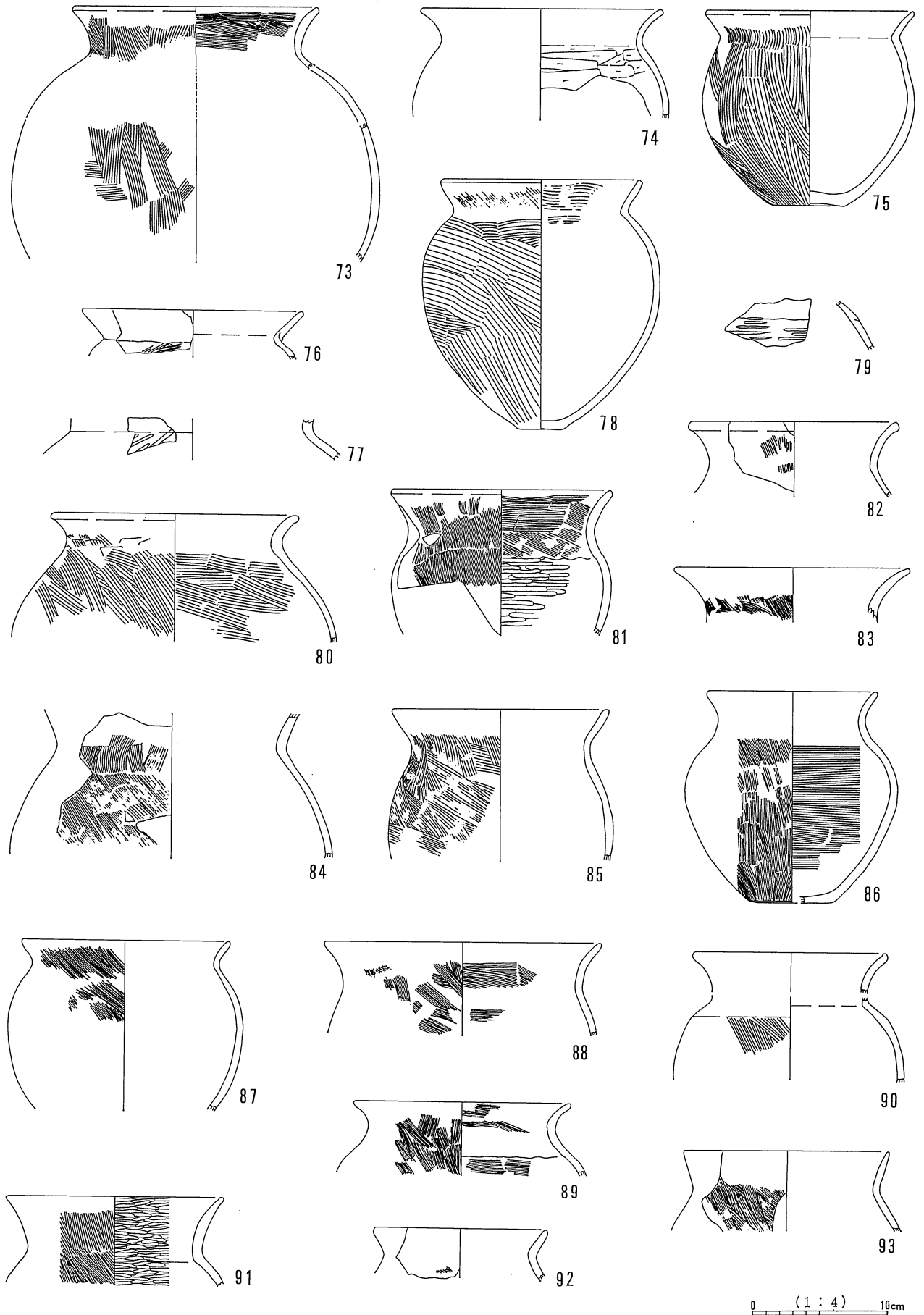
第106図 沢田鍋土遺跡 古墳時代出土土器(1)



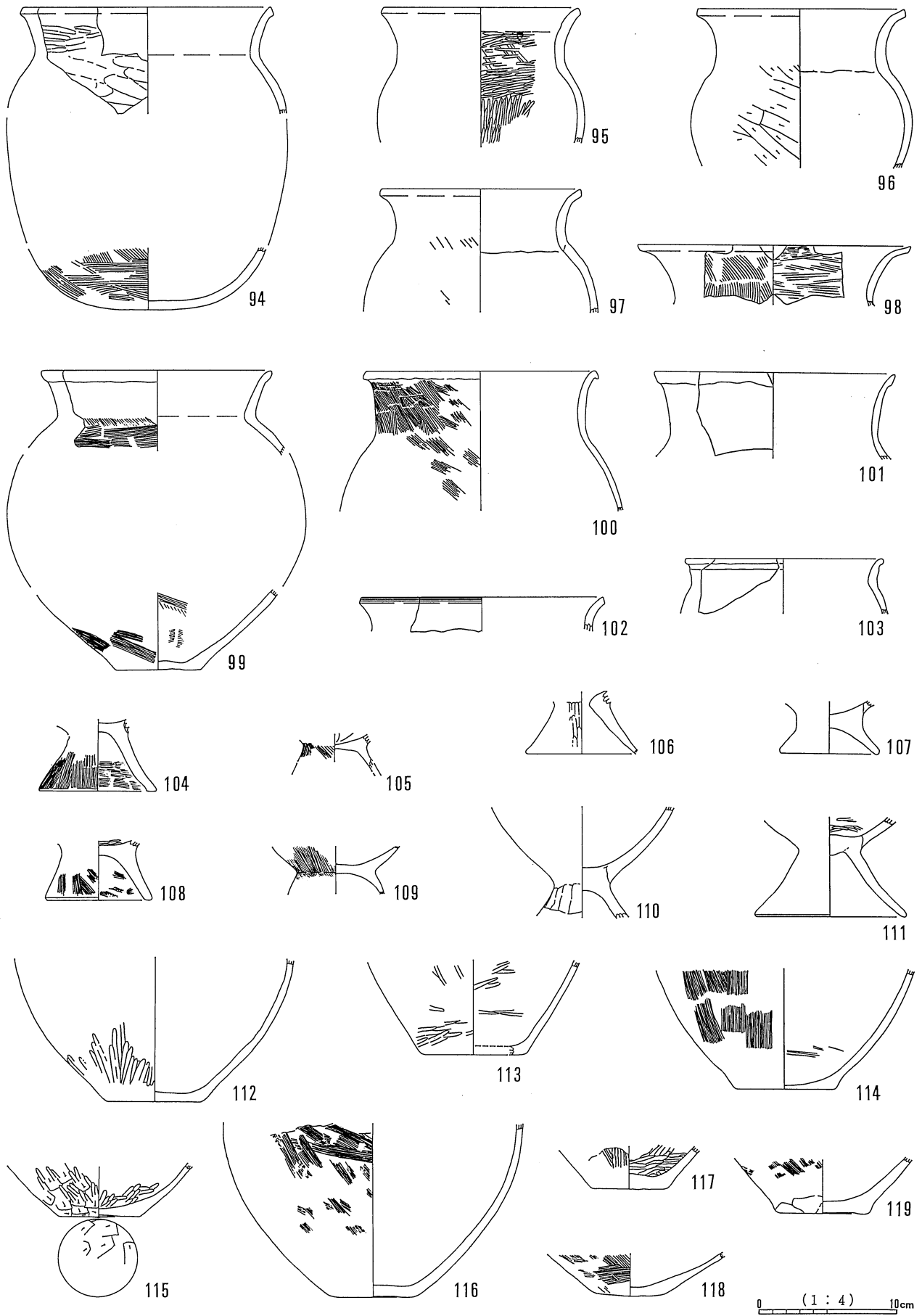
第107図 沢田鍋土遺跡 古墳時代出土土器(2)



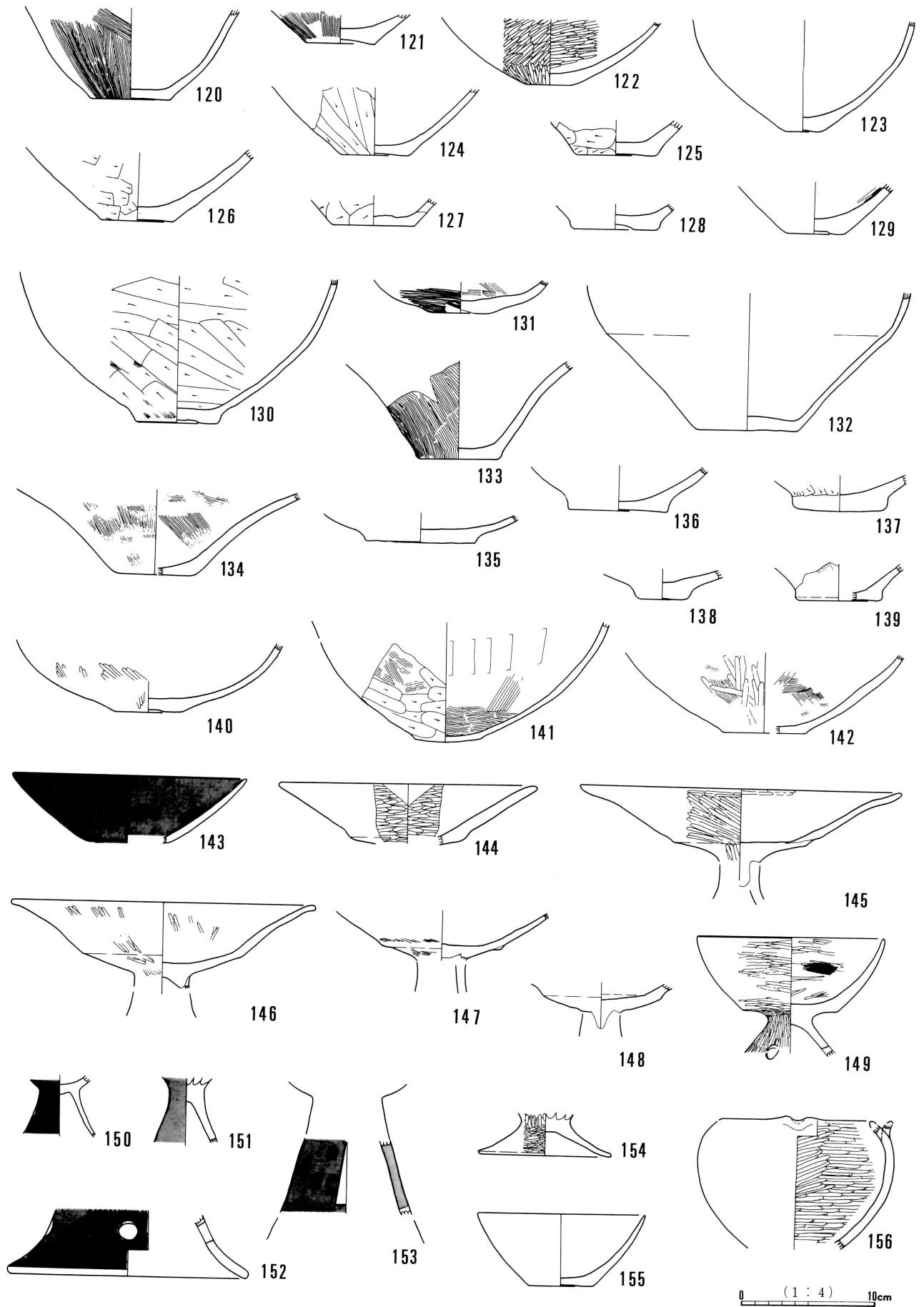
第108図 沢田鍋土遺跡 古墳時代出土土器(3)



第109図 沢田鍋土遺跡 古墳時代出土土器(4)



第110図 沢田鍋土遺跡 古墳時代出土土器(5)



第111図 沢田鍋土遺跡 古墳時代出土土器(6)

が撫でた部分が窪みその中に繊維束を引いたような擦痕が認められ(ナデB)、95はナデ、96はケズリ、97はケズリの後ナデ、98にはハケメに比べ間隔の広い浅い条線がみられる(ナデD)。これらの内面調整はミガキとナデのものがある。99~101(L類)は折り返し口縁で、99・100は胴部にハケ調整がなされ、101は摩滅のため器面調整は不明である。104~111は台付甕の脚部で、105と109はS字状口縁の台付甕である可能性が指摘されるが、S字状口縁甕の口縁部は1片も確認されていない。106など外面ミガキ調整のものは甕A類の脚部である。112~142は甕形土器、壺形土器の底部である。123は底径が2.5cmと小さい器形を示し、北陸地方に見られる形態であり、器面調整は観察できないものの、長石と石英が少なく雲母を含まず、甕形土器A・E・J類などの在地の土器と考えられるものとは異なる胎土である。131はタタキもしくはハケB調整で甕H類の底部と考えられる。132~134は外反しながら立ち上がる底部で壺A・B類に特徴的に見られる形態である。133・134にはハケ調整が見られることから、ミガキを基本とする壺A類ではない。したがって、口縁部は確認されていないが、ハケ調整の壺形土器B類が存在しているということになる。

(5) 高杯 (143~154)

143(B類)は杯部底面に量を持ち、赤色塗彩される。144~148(C類)は杯部下半に稜を持ち、僅かに外反しながら口縁に至る器形を示す。いずれもミガキ調整が見られ、147にはハケ調整の痕跡を残す。149(D類)は底部に明瞭な稜を持ち、脚部に円形の透かしが3つ開けられる。杯部内面に僅かに赤色塗彩の痕跡が認められるが、外面には赤色塗彩の痕跡が認められない。150~153は赤色塗彩された高杯脚部である。

(6) 鉢形土器 (155)

摩滅が著しく器面調整は不明。

(7) 内湾口縁鉢 (156)

片口で、内面はミガキ調整、外面は摩滅が著しく器面調整は不明。口縁部を僅かに欠損する。

第5節 奈良・平安時代の遺構と遺物

1 概要

須恵器窯跡2基とこれらの窯とは別の灰原1基、竪穴住居址2棟、土坑14基、溝2条が検出された。竪穴住居址及び須恵器の窯跡・灰原は奈良時代に属し、2基の窯跡は斜面部に、住居址はその上方の平坦部に位置している。灰原は、これらと谷を挟んで向かい合う斜面に位置する別の窯跡のもので、窯跡本体は調査区外のため調査を行っていない。他の遺構は出土遺物が少なく厳密な時期限定はできない。土坑のなかには墓坑と思われるSK44、粘土採掘跡と思われるSK47・51などがある。

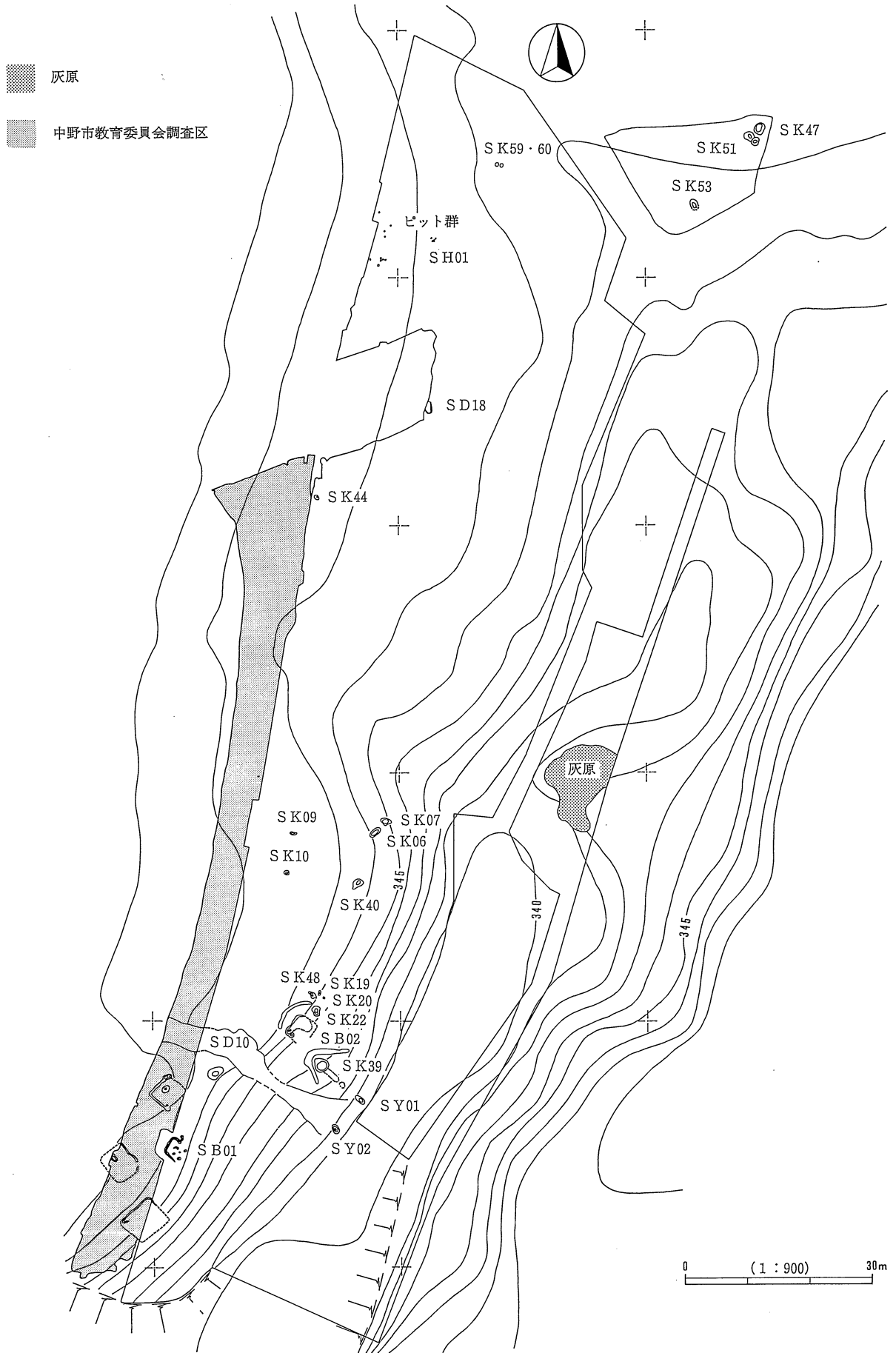
なお、本調査区の西側では中野市教育委員会の調査により、窯跡と同時期の竪穴住居址3棟が検出されているが、住居内より粘土が出土するなど須恵器生産の工房跡の性格を示している。(中島1993)

2 竪穴住居址

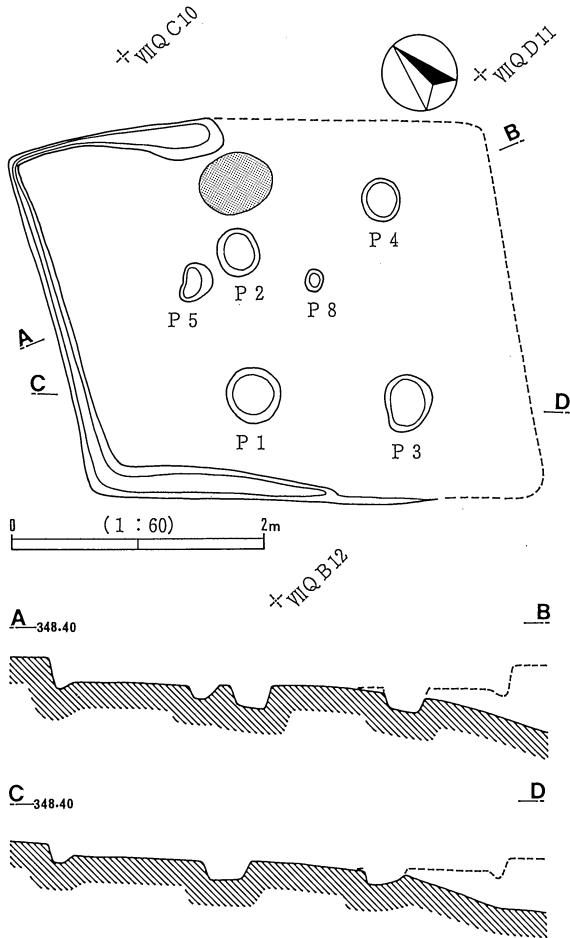
SB01 (第113・114図)

調査区南端の調査区壁際の緩斜面に位置する。

遺構の構造 北西側の斜面上方では壁面が確認されるが、斜面下方は立ち上がりが確認できず、部分的



第112図 沢田鍋土遺跡 奈良・平安時代遺構配置図



第113図 沢田鍋土遺跡 SB01

と誤認しSK21・22・34・35の遺構名をつけた。掘り下げたところ、これらの遺構がひとつの遺構であると判明し、SB02に変更した。

遺構の構造 斜面上方の立ち上がりを確認されるのみで、斜面下方は床面が流失してしまい全貌はつかめない。残存する一辺は3.8mを測る。竈と思われる火床面が北東壁際に検出された。柱穴は確認されず、西角に深さ6cmの方形のピット(P1)が確認された。また、竪穴の斜面上方に住居址を囲むかのように配された長さ7.3mの弧状の溝がめぐる。溝の深さは中央部で約25cmで、底面のレベルは中央部が一番高く、両端が低くなる。覆土の類似からSB02と同時期のものと判断され、遺構の構造から斜面部にある竪穴への流水を防ぐ施設であると推定される。

遺物出土状況 火床面の近くの床面に甕と甑がまとまって出土した。とくに2の長胴甕は口縁を下にして立てた状態で出土したもので、出土位置から竈の袖の芯材とも考えられる。

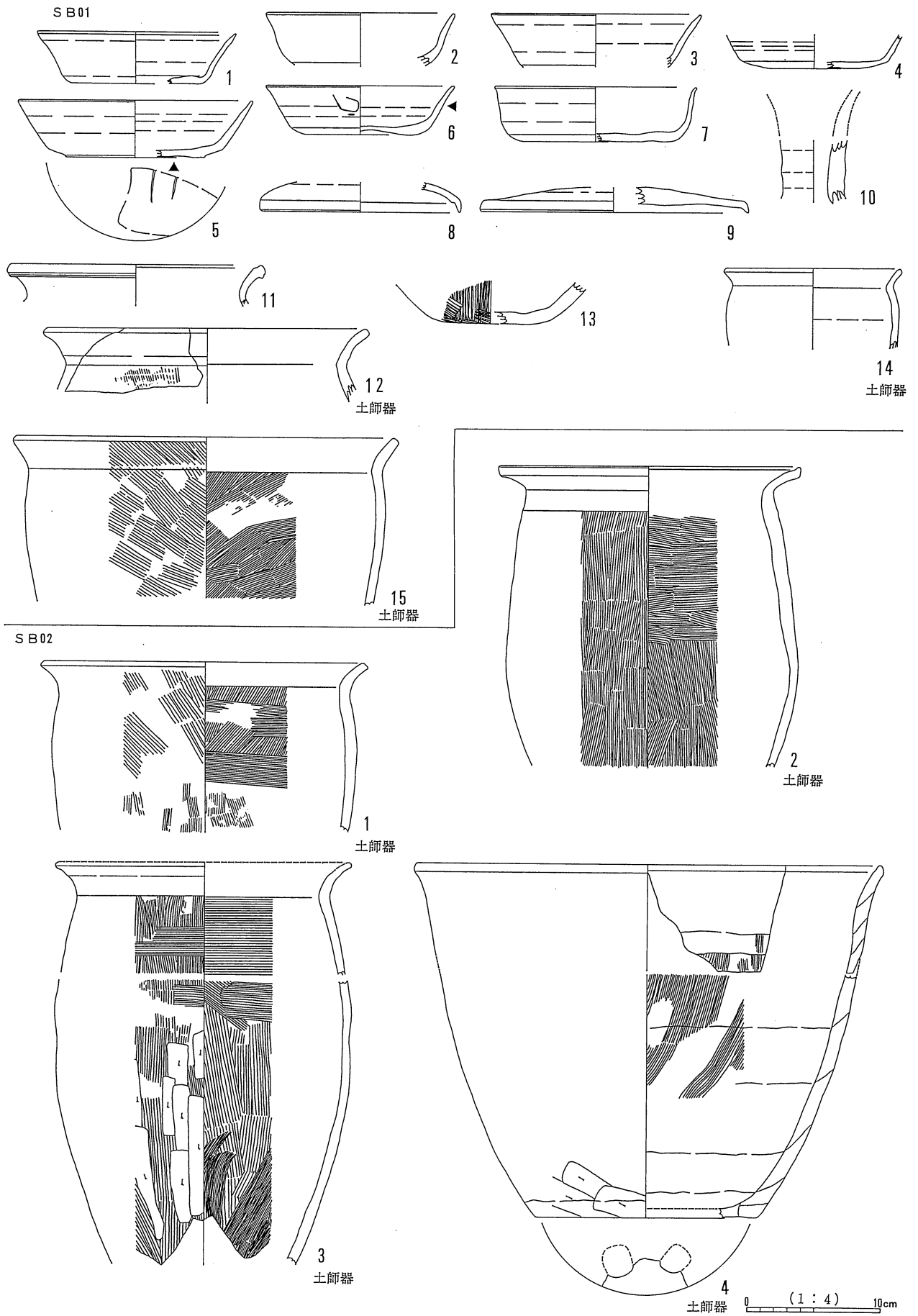
出土遺物(第114図下段) 主に竈付近から土師器の長胴甕(1~3)と甑(4)が出土している。須恵器の杯蓋B1点が破片で出土している。1はSB01と同様な形態である。2は口唇部が上に立つ形態である。タタキ目の残る甕(1)と外面縦のハケ、内面上部が横位のハケ、下部が縦位のハケ調整(2・3)という2種類の甕がみられる。3は若干削りもみられる。甑(4)は底部が平らな鉢形の形態で、隅丸方形の甑用の穴が底部にみられる。

に床面が検出されたのみである。不整な方形で、残存する一辺は2.9mを測る。北東の壁際中央部の床面に竈の痕跡と思われる火床面のみが検出されたが、赤色化した部分は薄く調査中に消失してしまったため、およその位置を示してある。柱穴と思われるピットはP1~P4で直径30~40cm、深さ12~17cmである。北西側の壁際には周溝がめぐっている。斜面下に竈跡があることから工房址の可能性が指摘される。出土遺物から8世紀前半と考えられる。

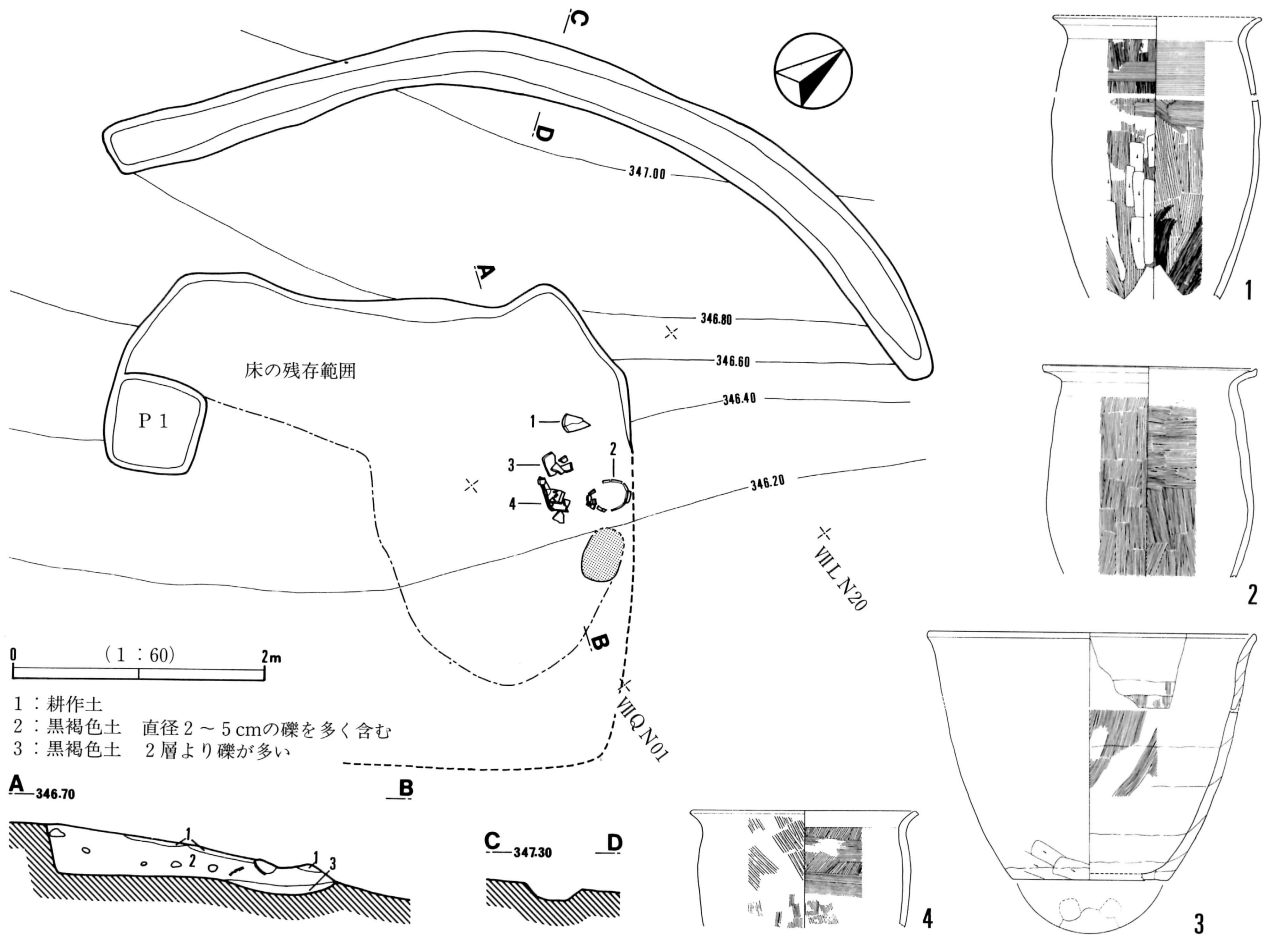
出土遺物(第114図上段) 須恵器は杯A(1~7)と長頸壺(10)、蓋B(8・9)、甕C(11)、甕底部(13)で、土師器は小型甕(14)、長胴甕(12・15)がみられる。須恵器杯Aや杯Bなどは沢田鍋土遺跡の1号灰原の出土品に類似する。杯Aには「井」と思われるへら描き(5)がみられ、6は杯身外面に「ㄣ」のへら描きがみられる。15の土師器長胴甕は頸部の屈曲があまり強くなく、胴部最大径も口径より小さい。外面はタタキ調整されている。SB01は須恵器工房の可能性が強いため、須恵器工人の製作による土師器甕である可能性がある。

SB02(第114・115図)

東向きの緩斜面から急斜面にかかる部分に位置する。当初プランの全容がつかめず、小土坑が多数存在する



第114図 沢田鍋土遺跡 SB01 (上段)・SB02 (下段) 出土遺物

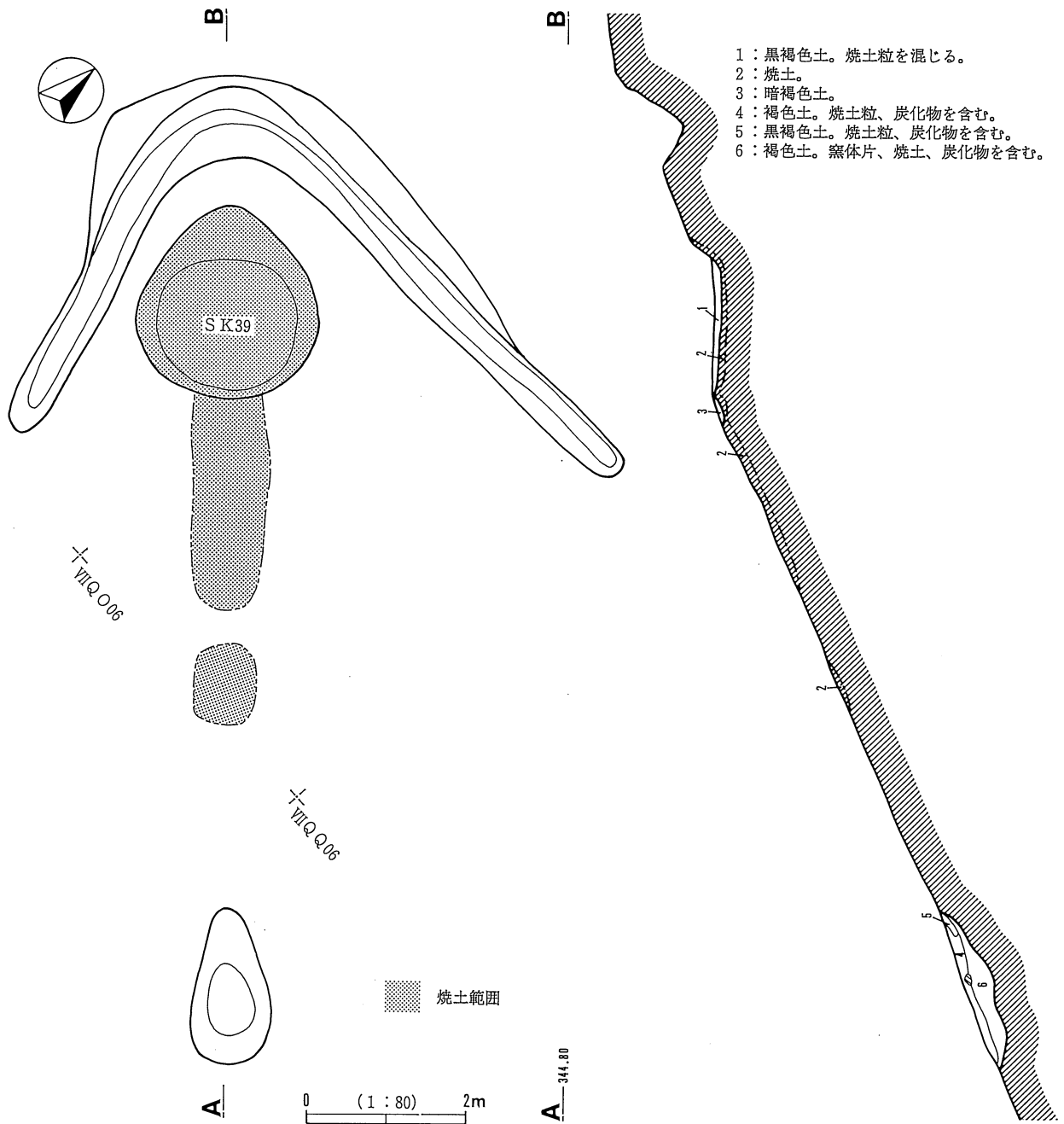


3 窯跡と灰原

SY01 (1号窯跡)・SK39 (第116・118図)

丘陵の東斜面に位置し、地山は砂礫層となる。調査当初、検出面が高すぎたため、SK39と溝をひとつの遺構としてSB03の遺構記号を付したが、後に住居址ではなく溝及びSK39であることが確認された。溝及びその周辺から出土した遺物はSB03の注記がなされている。また、SD10の覆土を取り除くとSY01窯体部のプランが確認された。

遺構の構造 SY01は舟底状ピットと床下焼土のみが残存していた。残存する焼土から推定すると焼成部の床面の傾斜角度は25°となる。SK39はSY01焼成部の斜面上部に重なって掘り込まれる直径2.2mの円形の焼土坑で、平坦な床面から壁面にかけて焼土となる。SY01との切り合い関係は明確でないが、他の窯跡の構造から考えてSK39がSY01の施設の一部とは考えられない。調査時の所見ではSY01を切ってSK39が掘られたとある。焼土坑の斜面上方に「く」の字に曲がる溝が検出された。他の奈良・平安時代の遺構と同様に黒褐色土の覆土であること、SK39とSY01を囲うように配置されていることから、いずれかに関連する施設と考えられる。窯跡の斜面下方の谷部を現地表下約4mまで掘り下げたが灰原は確認できず、調査を断念した。窯跡の残存状況から、地滑りや侵食により失われた可能



第116図 沢田鍋土遺跡 SY01・SK39

性がある。

なお、SK39は須恵器または土師器の焼成遺構である可能性があるが、出土遺物が無く遺構の性格を明言できない。焼成遺構と仮定すると、登り窯を廃棄した後、溝を再利用して平窯を構築したとも考えられる。

出土遺物よりSY01は奈良時代前半、SK39は奈良時代もしくは平安時代の所産と考えられる。

出土遺物(第118図上段) 舟底状ピット(SY01)内より須恵器の杯A、杯B、杯蓋、短頸壺、甕、横瓶が一括して出土した。SK39及び溝には遺構に伴うと思われる遺物の出土状況はなかった。SY01より出土した炭化材8点の樹種同定の結果7点がクヌギ節、1点がコナラ節という結果であった。なお、

樹種同定は(株)パレオ・ラボの藤根久氏に依頼し、実施した。

杯A (1) 回転ヘラ切り未調整である。器壁は薄く、底部が大きく、箱形でやや口縁部が開く。回転ヘラ切り面は凹凸がはっきり残る。

蓋B (2) 低く潰れたように偏平な形態で、擬宝珠形のツマミの中央部が凸であるが偏平なツマミである。口縁部の折り曲げは少ない。

杯B (3) 杯底部が垂れたような丸底で、外傾が強く、腰部が明瞭に屈曲しない形態である。高台が腰部外周に外向きに付いている。丁寧な回転ナデ調整が行われている。

短頸壺B (4) 頸部がかなり短く、口縁部は薄く口唇部は丸みを持つ。肩部は短くイカリ型で、体部が屈曲する形態である。口縁から肩部にかけて蓋をされた焼成痕が残る。

器種不明底部 (5) 分厚な底部の円盤に粘土を巻き上げたものと思われる。底部外面はヘラ削りによって、底部の円盤部に段を残しながら、丸底に仕上げられている。底部立ち上がりに「井」印の細いヘラ描きが見られる。皿あるいは壺の底部が推察される。

甕A (6) 口縁のみの出土である。口縁有段部は垂直に立ち上がっている。

横瓶 (7) 被蓋部は搾られた後に蓋をし内面を指でヨコナデし調整している (横瓶の製作方法10・11段階) (第181図)。外面にはスリ消しタタキ目が残る。

SY02 (2号窯跡) (第117・118図)

SY01の南約6mの東向きの斜面に位置する。舟底状ピットのみが残っており、窯の規模は不明。出土遺物からSY01と同様奈良時代前半と考えられ、両者の同時操業の可能性も指摘される。地山が砂礫層であるため、SD10の影響でほとんど流失しており、SD10の覆土に覆われていた。灰原はSY01同様、現地表面下約4mまで掘り下げたが確認できず、調査を断念した。

出土遺物 (第118図下段) 舟底状ピット内より、須恵器の杯A、杯B、甕などテンバコ1箱に満たない少量の須恵器が出土した。

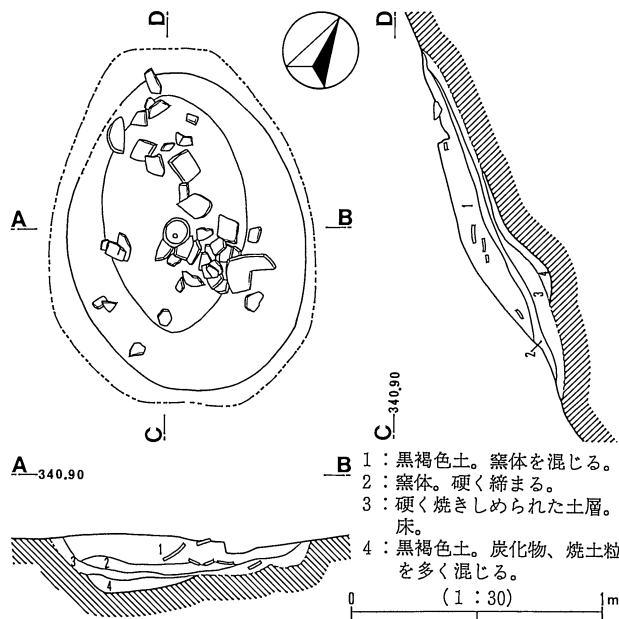
杯A (1、2) 杯Aは回転ヘラ切り未調整である。底部は丸底で外傾が強く、2はその上に口縁端部を

外反させている。回転ヘラ削りは、底部斜め上から徐々に中央に向かって丸みをもたせながら切るように行われている。そのため底部外面中央に円盤状の段が生じている。

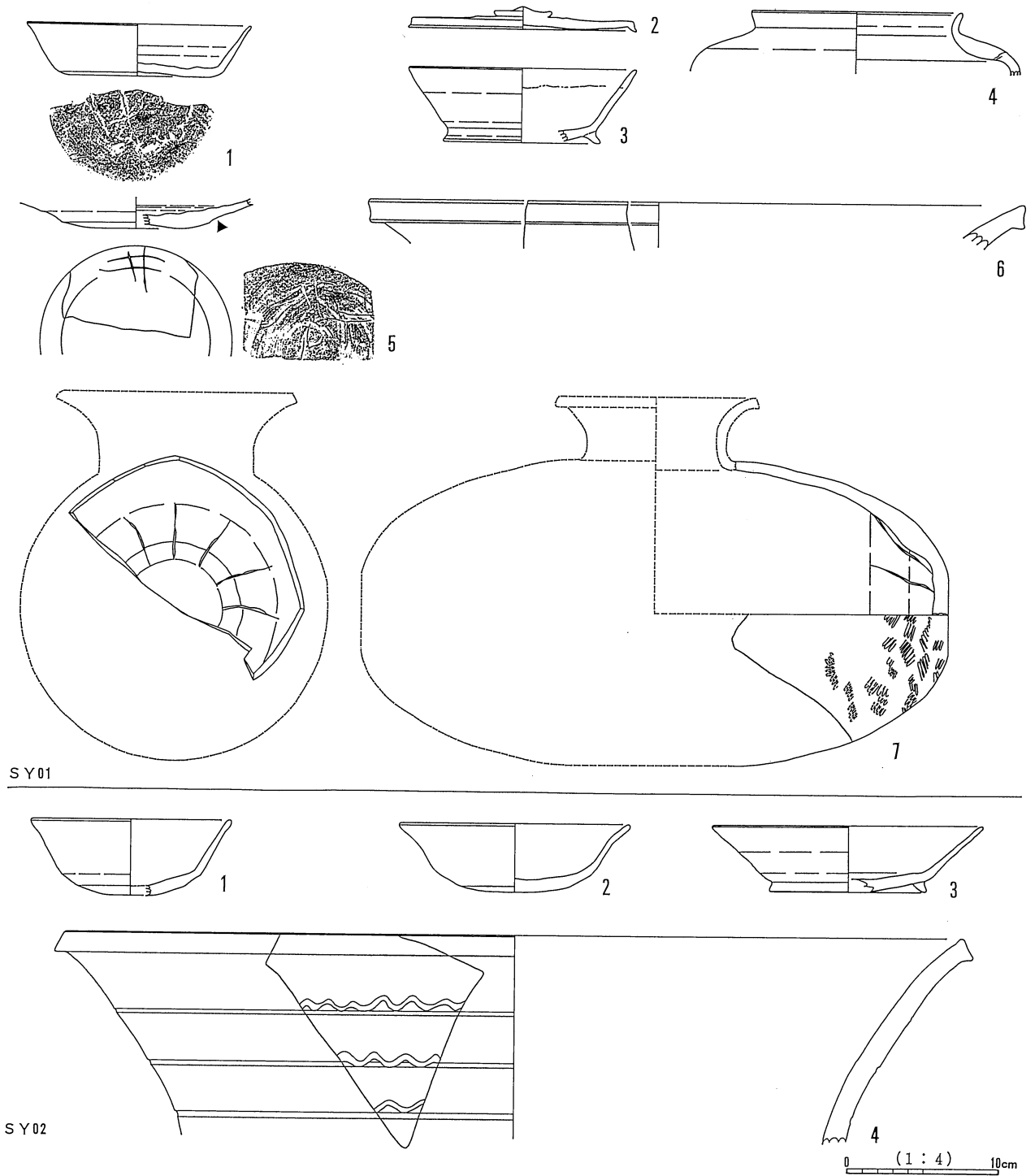
杯B (3) SB01の杯Bと類似し、それよりも外傾が強い。

甕A (4) 太めの沈線と波状沈線の組み合わせの文様が頸部にみられる。波状沈線は1本ずつ施文されている。

沢田鍋土2号窯の杯Aや杯Bは屋代遺跡群の第5水田対応層新段階杯と類似するSD7045・SD7046は出土木筒などの検討から7世紀第4四半期から8世紀初頭とされる (鳥羽英継 1996)。



第117図 沢田鍋土遺跡 SY02



第118図 沢田鍋土遺跡 SY01・02 出土遺物

SW01 (1号灰原) (第119~127図・P L26・27)

SY01から北へ約60mの谷部に確認された灰原である。炭化物を含む黒褐色の灰原層(5層)は約30cmの厚さに堆積し、地表下40~60cmに確認された。灰原は南北13.2m東西8.5mの範囲に分布しているが、さらに東側の調査区外に分布範囲が延びる。窯跡は東側の調査区外の斜面に位置する。須恵器の大半は5層に含まれており、4層と6層中からも僅かに出土した。出土した須恵器は図示したもの以外にタバコ34箱に及ぶ。

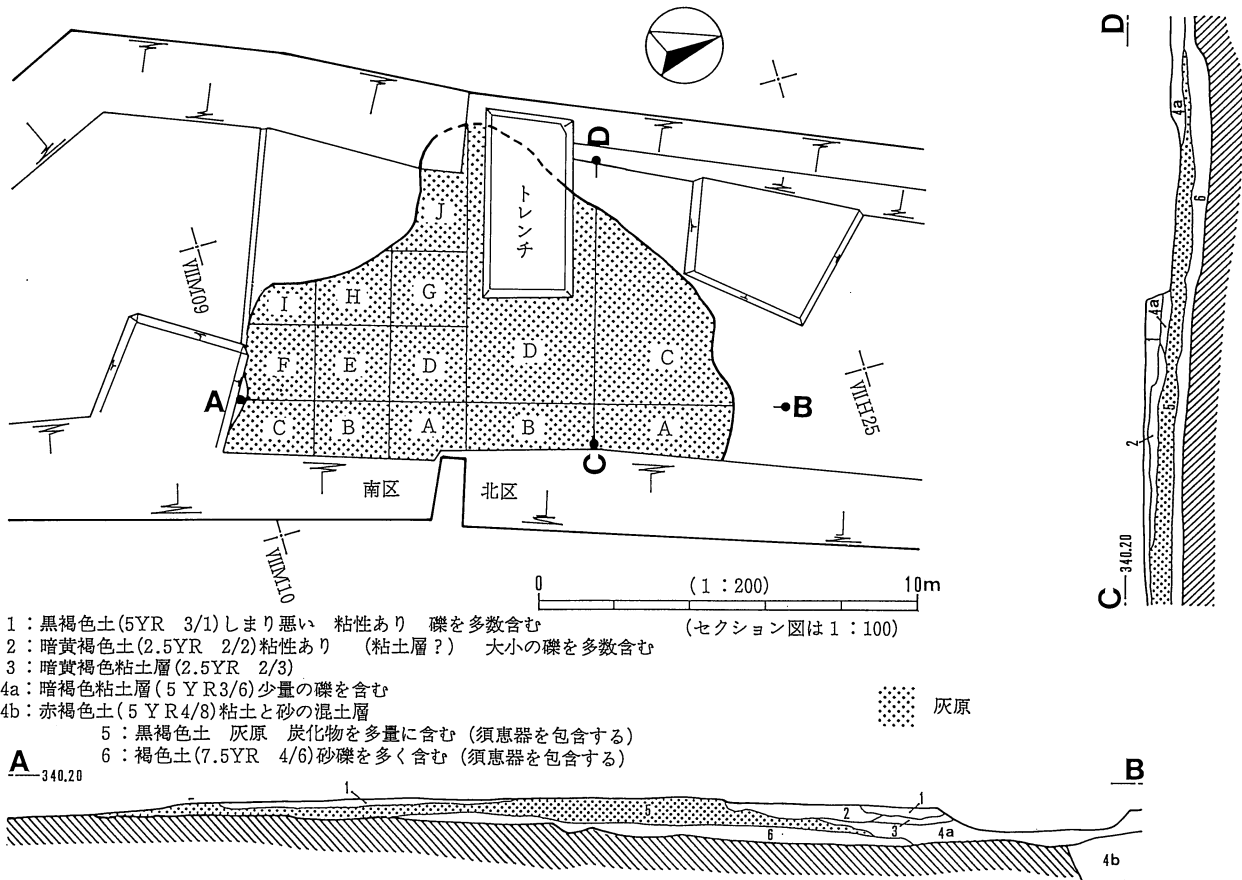
5層中からは焼成時の燃料と考えられる多量の炭化物が出土し、樹種同定の結果66点中65点がクヌギ節

で、1点がクヌギ節あるいはコナラ節のいずれかであるコナラ亜属と同定された。清水山④区の泥炭層の花粉分析の結果、須恵器坏Bが出土した12層の前後の層ではコナラ属コナラ亜属（クヌギ節・コナラ節）の花粉が全体の6～9割を占める。この12層は出土遺物より奈良・平安時代の堆積層と考えられ、窯操業当時の周辺植生はコナラ節やクヌギ節が多かったことを示しており、本灰原から出土した炭化材の樹種構成は周辺の植生を反映したものと見える。なお、樹種同定は(株)パレオ・ラボの藤根久氏に依頼し実施した。灰原から出土した炭化材にクヌギ節が圧倒的に多いことについて、藤根氏は「両者（クヌギとコナラ）は外観上容易に区別される。（中略）遺跡が成立した時代において周辺植生がいかなるものであり、またコナラ属とクヌギ節の割合がどの程度であるかは明確でないが、クヌギ節の樹木を意識的に選択して利用していることが伺われる。」と結論している。

なお、遺物は北区A～D、南区A～Jの任意に設定したグリッド単位で取り上げた。

出土遺物（第120図～第127図） 杯A、杯B、皿、盤、高杯、鉢、横瓶、長頸壺、短頸壺、凸帯付四耳壺、壺蓋、甕など多種類の器種が出土した。

杯A（第120図1～45） 1～4は浅めの身で、口径の大きめな形態である。底部は大きく平底である。5～24は深い身のもので2号窯の杯Aのような丸底で外傾の強いものはみられない。腰部の屈曲が明瞭でないもの、回転ヘラ切り未調整のものはなく、ヘラナデなどの調整によって、底部中央に円盤状の段を残すもの（1・7・9・12・14・15・17）や底部立ち上がり部分に丸みをもたせたものがみられる。底部径は大きいものが多い。12は底部が非常に分厚く小さくなっており外傾も強く特殊である。杯A全体として



第119図 沢田鍋土遺跡 SW01

形態や法量にはっきりした規則性はみられない。25～45は杯Aにみられるヘラ描きである。25～29は杯身側面にみられ、「×」か「十」、「卍？」が描かれている。30～42は底部外面にみられ、「一」、「×」やヘラの繊維がはっきりみえる太いヘラで描かれているもの(39)がみられる。45は杯底部に模様のように幾つもの放射状のヘラ削りが行われている。42～44は杯Aの重ね焼きがみられる。44は底部に焼台がみられる。

蓋B(第121図46～53・71) 47と48は天井部が丸みを持って高く、ツマミが偏平で、口縁端部の折りが少なく境目に陵がない。49～52は擬宝珠形のツマミで天井部が偏平である。口縁端部の折りは少ないものが多い。53はツマミの小さな形態である。46は天井部外面に「大」?のヘラ描き文字がみられる。口径の大きい71は74の杯Bとセットである。

杯B(第121図54～70・72～74) 54～57、69は高台よりも底部が垂れ下がる形態である。55は高台が丸身を持ち外周に向かって広がる踏ん張り型である。60、64は断面三角形の高台である。高台は杯腰部外側近くに付くものが多く、垂れ下がった底部のもの以外は高台が低いものが多いのが特徴である。72～74の口縁部下には沈線が巡っている。金属器模倣の形態も考えられる。この形態の杯Bは沢田鍋土1号窯、2号窯ではみられない。

椀A(第127図174～176) 小型で口縁部直下に沈線が巡り、内湾する形態。底部は無台であると思われる。金属器の模倣品と思われる。

皿A(第121図75～80) 底部がやや丸みを持ち、口縁部が直立するもの(77～79)と緩やかに外反するもの(75、76)がある。

皿B(第121図81・82) 底部は盤状に平で口縁部が先細りに直立する形態である。

盤B(第121図83～90) 1号灰原の盤Bの口縁部の形態は3つに分類される。

1類 口縁が丸みを帯びて立ち上がるもの(83・84)

2類 口縁がまっすぐ折り曲げられているもの(85)

3類 口縁がS字状に折り曲げられているもの(86～90)

2類、3類は東海系の窯跡(8世紀前葉—中葉)に多くみられる形態である(斎藤・後藤 1995)。

高杯A(第121図93) 93は長脚のみである。脚の接合面に同心円の当て具(同心円の中心から放射状の線あり)で凹凸面を作って接合し易くしている。

高杯C(第121図91・92・94・95) 高杯Cは脚の短い高杯で、1号灰原は高杯の接合部が出土している。脚の取付は91では杯底部中央部に凹面を設け、脚部接合部の突起部を差し込み接合している。95は脚の部分であり、接合面は外周に回転ヘラ削りして平らな面を設け、中央部に凸面を残すと思われる。

高台(第122図96) 96は高台のみの出土であり、器種がはっきりしないが金属器模倣の容器の高台部分と思われる。高台の口縁が外側に跳ね上がり上向きになっている。

鉢C(第122図97) 97は逆台形を呈する形態で、軟質の若干雑な作りである。

横瓶(第122図98～110) 口頸部では2種類の接合法が行われている。99と104は差し込み法であり、98、103、105は上乗せ法であり、100と101は上乗せ法と思われると思われるがはっきりしない。上乗せ法のものには接合面に溝を巡らせたり、タタキ目で凸凹を作って接合し易くしている。被蓋部は形状で2種類みられる。106～109は平形であり、110は砲弾形である。108は被蓋する際、体部接合部を搾る代わりに接合部を蓮の花びらのように切り目を入れ蓋と接合している。109は搾らず口唇部を凸凹にし、蓋を接合している。106～109は被害部を平形にするために削りやタタキで調整しているが、110は丁寧に蓋をした後、もう一度丸みをもたせるために蓋の上に円盤を乗せ砲弾形にしている。

長頸壺A(第123図111～119) 長頸壺には2種類の口頸部接合が考えられる。113は頸部を肩部の口縁上に乗せた接合法(第181図1)。114は肩部の口縁内側に粘土帯を一周させそこに頸部を乗せる(第181図

3)。肩部と体部の接合にも2種類の接合がみられる(第181図5・6)。113と117は体部の上に肩部を乗せる方法(第181図5)。119は肩部を体部の内側につけて接合する方法である(第181図6)。114と115は肩部にタタキ調整が行われている。116と118は体部下半部でへら削り調整されている。118は無高台の長頸壺である。

長頸壺B(第123図120) 120は体部下半部が回転へら削りされた長頸壺である。高台は球形の底部に外向きに付けられている。

広口壺(第123図121) 全体の形態が不明である。大形で口頸部がラッパ状に開く形態である。頸部に2本の沈線が巡っている。

短頸壺B(第123図127~130) 口縁部が直立するもので、127は肩部が撫で肩となるもの、128~124は肩部がイカリ肩となるものである。129は肩部に2本の沈線巡っている。壺蓋126と129はセットと思われる。

短頸壺C(第123図131、132) 広口の壺である。体部にタタキ目が残る。

短頸壺E(第123図133~136) 頸部が長めで基部が縮まった形態である。136と135は体部に沈線が1・2本みられる。金属器の模倣形と思われる。

凸帯付四耳壺(第123図137) 表面回転ナデ調整された小型の四耳壺の体部である。凸帯上に下方を閉塞した耳部が付く。耳部は断面三角形にへら削りで調整されている。

壺蓋(第123図122~126) 壺蓋口縁部には3種類の形態がみられる。122と123と125は口縁端部が外側に外反し、124は口縁端部が内湾し、126は口縁端部が直立する。122は口縁端部が丸縁になっている。126は天井部に2本の沈線がみられ、沈線上に対になる穿孔がみられる。金属器模倣品であろうか。穿孔のある壺蓋は富山県小杉工業団地N016号窯(平城II期)(出越 1995)などでみられる。

甕A(第124・125図146~166) 146~157は頸部無文で、口縁部がラッパ状に開く。頸部にタタキ目が残るものもある。146は器壁が薄手で小型である。口縁部が受け口状になっており、頸部に2本沈線が巡っている。149は頸部にへら描きがみられる。文様か文字か不明である。158~166は有文の頸部である。口縁の折り返しものと無いもの(158・162・188)がみられる。文様は沈線と櫛描波状文の組み合わせが多く、166は櫛描押し引き文がみられる。櫛描波状文の櫛幅が狭いものが多くみられる。153は同心円文の当て具痕がみられる。

甕C(第121図138~141) 138は有段口縁部に沈線が巡り、139、140は有段口縁になっており、141は無段口縁である。139と141は肩部がイカリ肩で、141の体部は長く、140は球胴形の体部である。

甕D(第121図142~145) 広口甕で頸部がやや「く」の字形に屈曲する甕である。144を除き有段口縁である。145は体部内面に同心円の当て具痕がみられる。

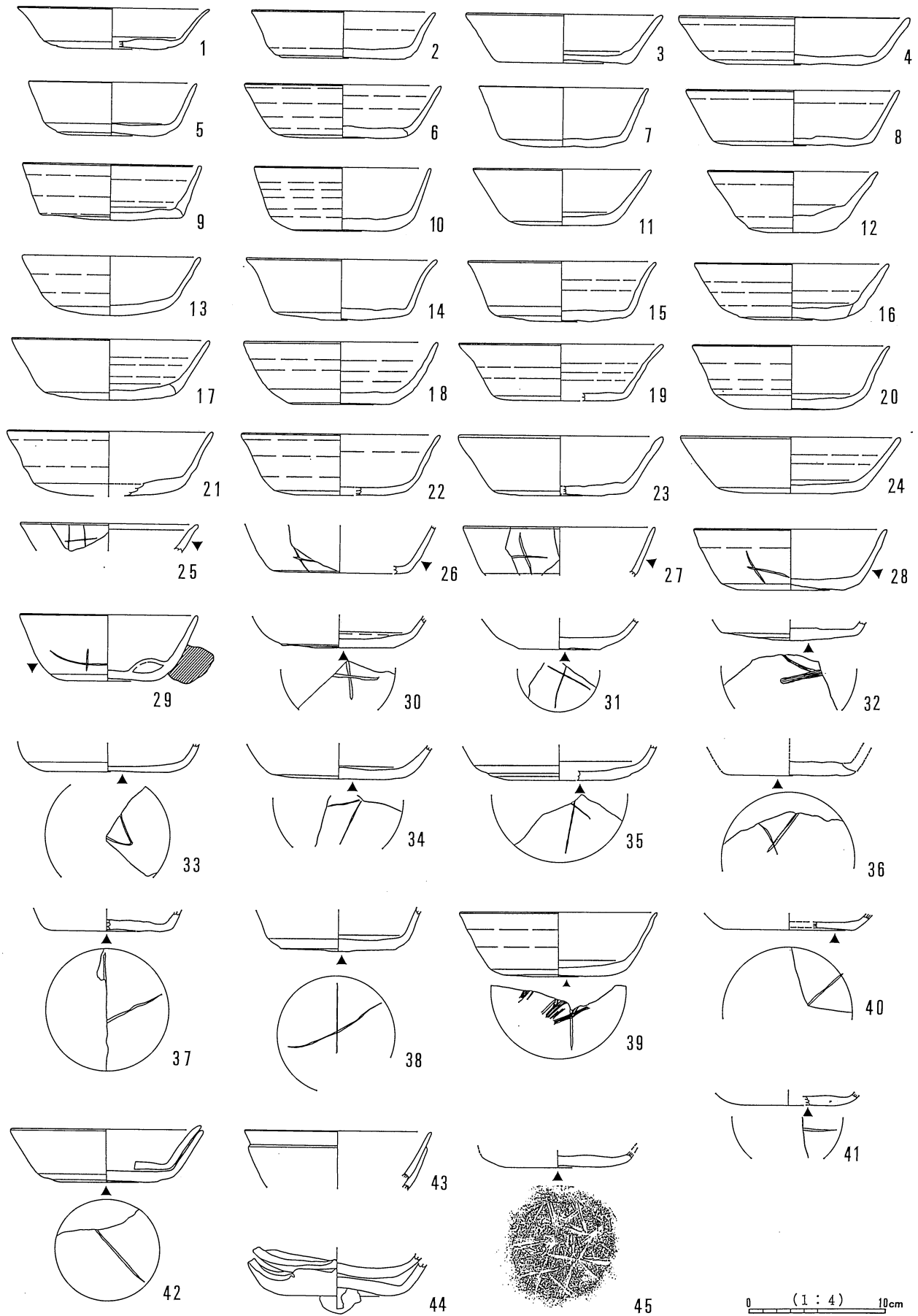
甕底部(第127図168) 甕Aの底部と思われる。丸底である。

甕に描かれたへら描き(第127図167) 縦に9本と横に1本と斜め横に1本の線刻を組み合わせている。文字か記号か柵のようなものの絵画表現か不明。

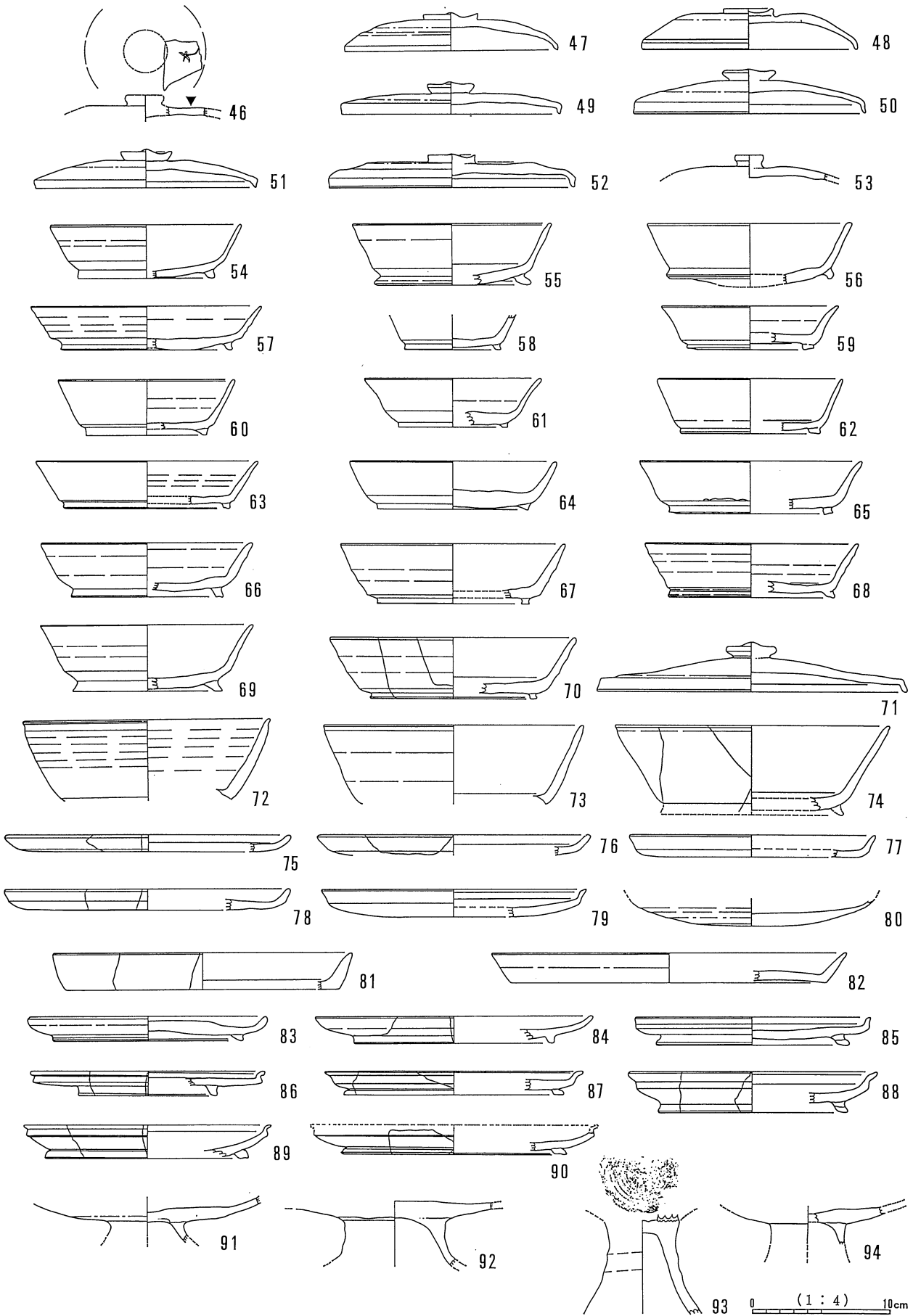
硯(第127図169~173) 透かしには、十字形(169)と周囲に縦線を巡らせた上に長方形(170)をいれたものがある。内堤の方が縁よりも高いもの(161、171、173)と低いもの(172)がみられる。

土師器長胴甕(第127図177) 口唇部が上向きに立ち頸部が「く」の字形になった甕で外面へら削り、内面ハケ調整されている。焼台などのに使われたものと思われる。

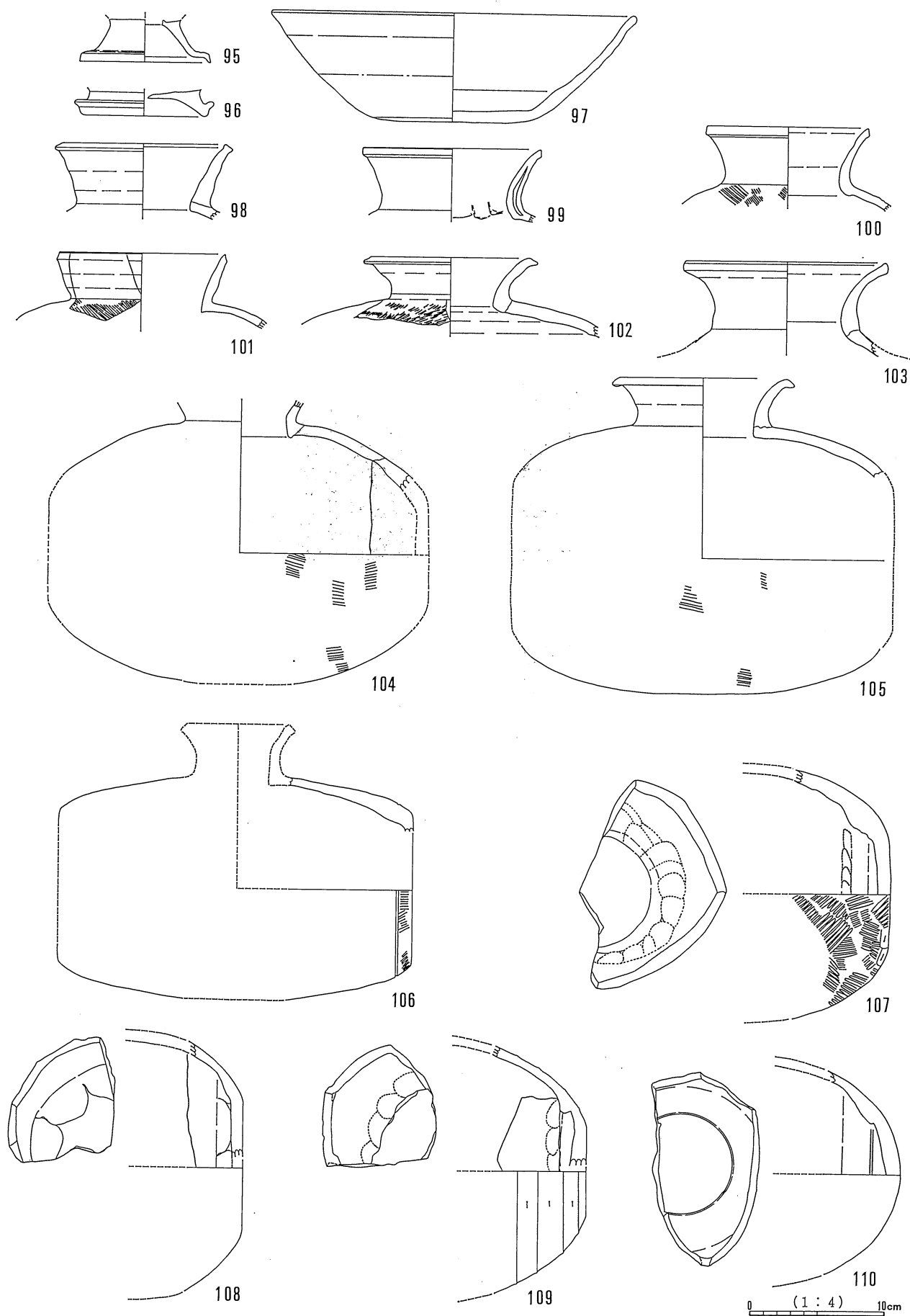
沢田鍋土1号灰原は老洞古窯址(岐阜市教委.1981)の遺物に類似するものが多く、8世紀前半期の美濃須衛古窯址群(第IV期第1小期)(各務原市教委.1994)(後藤 1995)の影響を受けた様相がみられる。



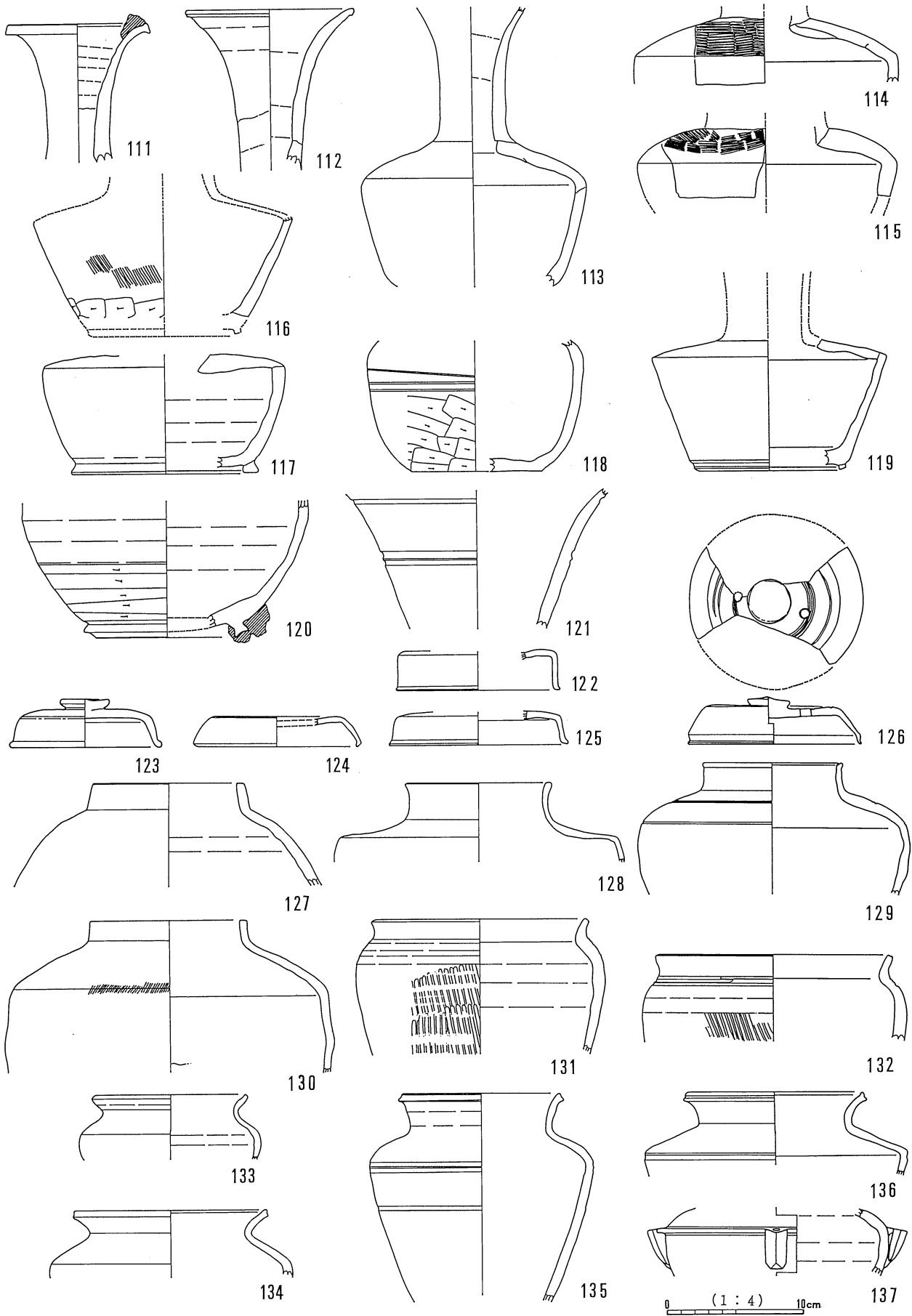
第120図 沢田鍋土遺跡 SW01出土遺物(1)



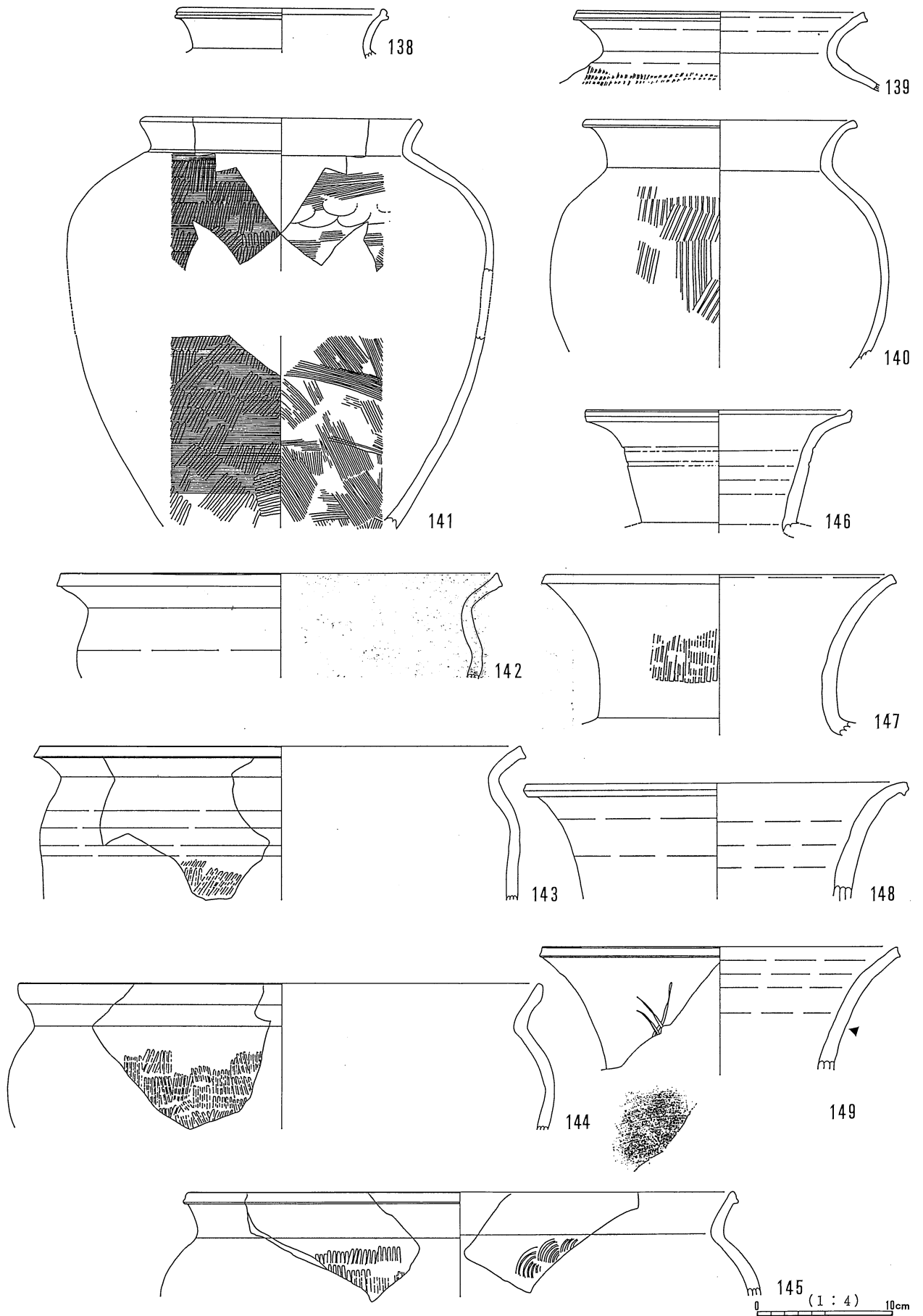
第121図 沢田鍋土遺跡 SW01出土遺物(2)



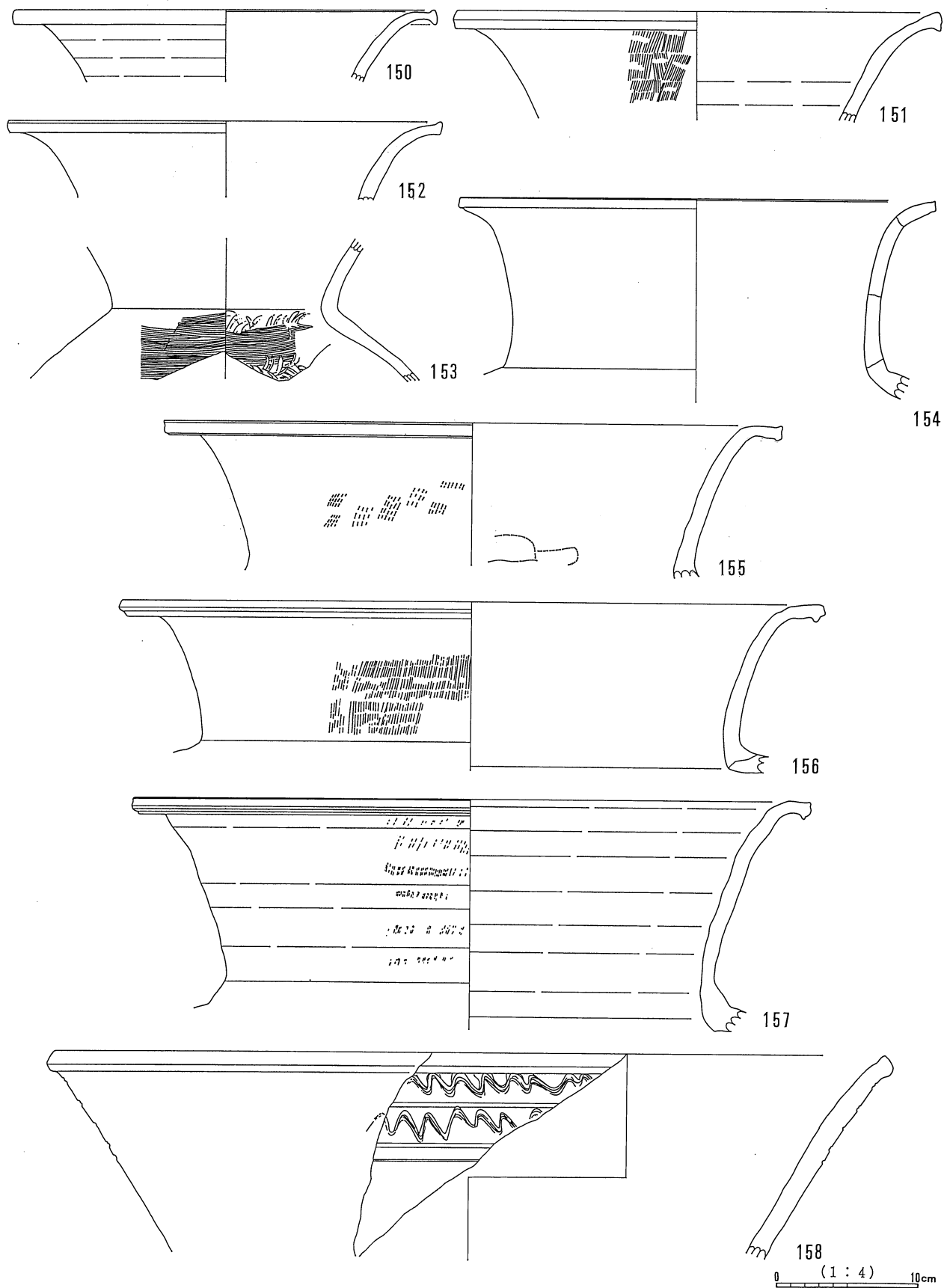
第122図 沢田鍋土遺跡 SW01出土遺物(3)



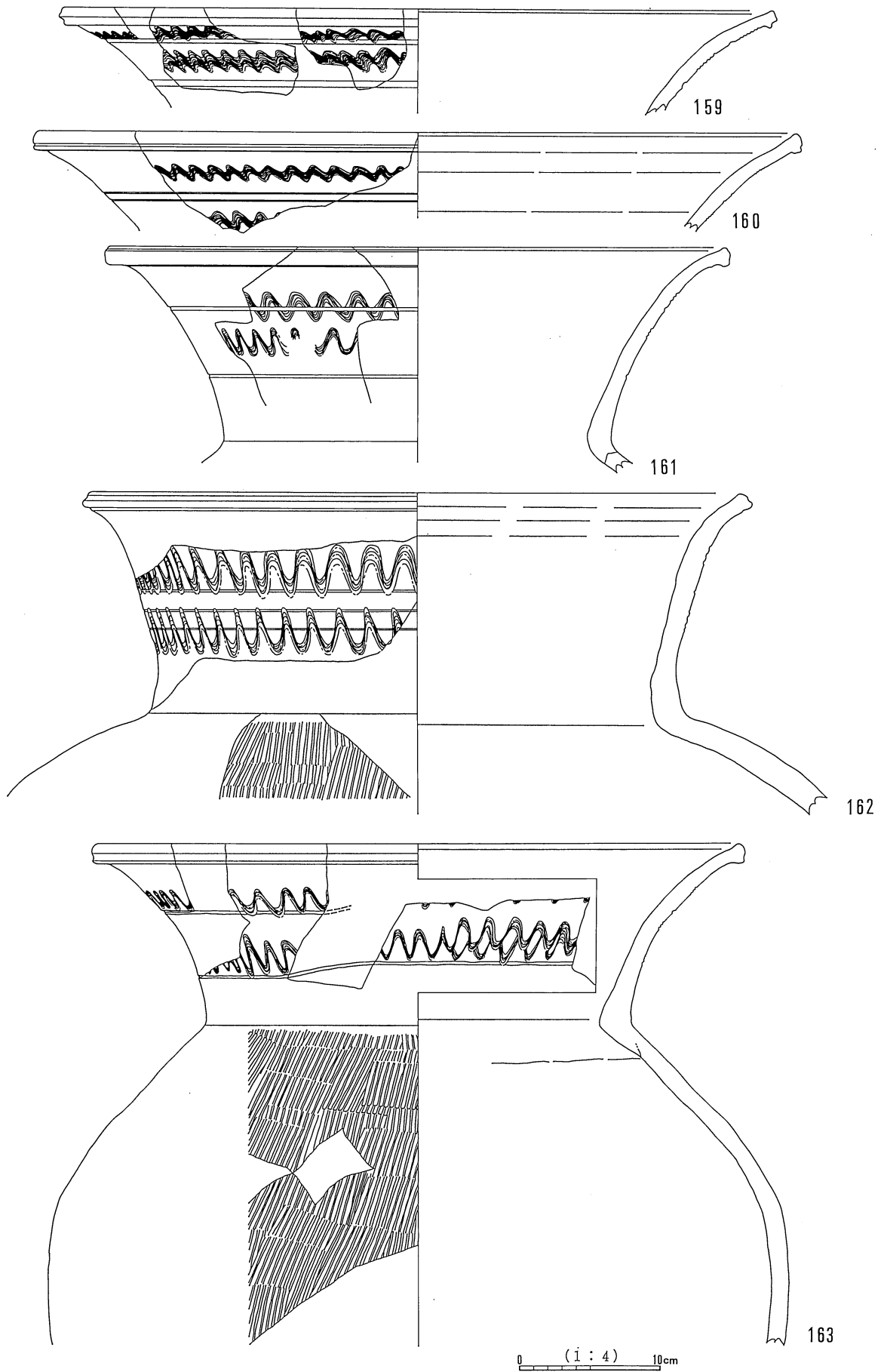
第123図 沢田鍋土遺跡 SW01出土遺物(4)



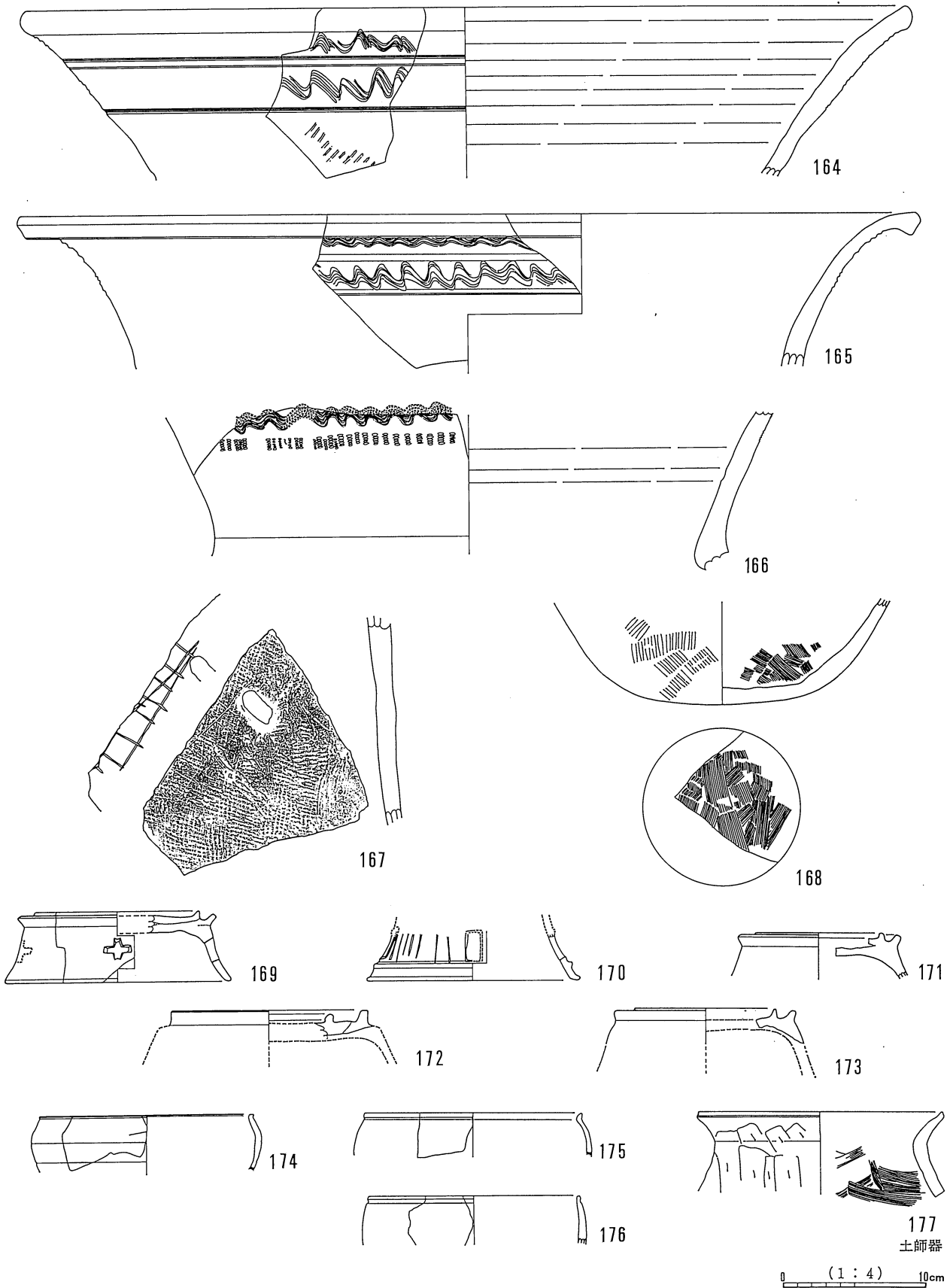
第124図 沢田鍋土遺跡 SW01出土遺物(5)



第125図 沢田鍋土遺跡 SW01出土遺物(6)



第126図 沢田鍋土遺跡 SW01出土遺物(7)



第127図 沢田鍋土遺跡 SW01出土遺物(8)

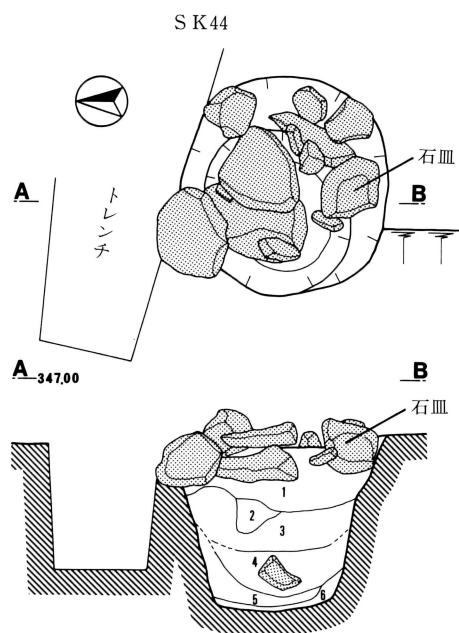
4 土坑・集石

SK44 (第128図)

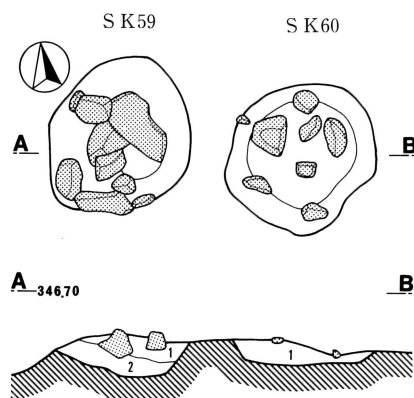
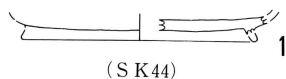
古墳時代の粘土採掘跡SX24の覆土中に掘り込まれた遺構で、直径88cmの円形を呈し、深さ70cmを測る。底面は平坦で、6層の灰褐色粘土が1cmの厚さで堆積していた。覆土1層上面に人頭大の礫が集積しており、礫の中には縄文時代の石皿が1点含まれている。

土坑墓の可能性を考え、リン・カルシウム分析を(株)パレオ・ラボに委託し実施した。サンプルは3層、4から5層、遺構外の3点を採取した。分析の結果、4・5層のリン酸とカルシウムの含有量が3層と遺構外の含有量に比べ多いという結果が得られ、「全リン酸のみでなく全カルシウム含量も高くなることから、リン酸含量の富化が遺骨による可能性を示唆させる。」という考察が示されている。(註3)

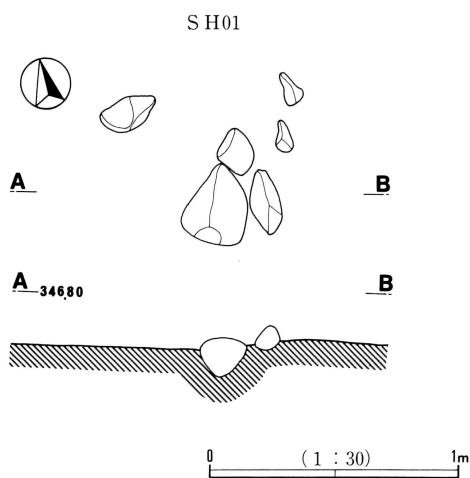
土坑墓の可能性を考慮しながら遺構の埋没過程を考察すると、覆土3～5層はブロック状に異質な土の混土层で人為的な埋め戻し土と認められる。1層と2層は類似しており、人為的な埋め戻しとは思われず、3層中に2層が落ち込んだ状態が認められる。土坑内部に遺体が埋葬されていたとすると、遺体の腐食により土坑が陥没した結果生じた落ち込みと推定される。1層中に見られる礫も検出面より落ち込んでおり、陥没が起こったとすると本来遺構上面に墓標のようなものとして配置されたものが、覆土の陥没に



- 1: 暗褐色土 炭化物粒を少量含む
- 2: 暗褐色土 黄褐色土を含む
- 3: 褐色土 灰色粘土を混じる 焼土を混じる
- 4: 黒褐色土 焼土と黄褐色土を混じる
- 5: 暗褐色土 黄褐色土と灰色粘土を混じる
- 6: 褐灰色粘土



- 1: 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2) 炭化物を含む。
- 2: 灰黄褐色土 (Hue10YR5/2) 地山の粘土を混じる。



第128図 沢田鍋土遺跡 SK44・59・60・SH01

伴って遺構内に落ち込んだものと理解できる。さらに、3・4層中には焼土が認められ、埋葬行為にともない生じた焼土とも考えられる。1層下面より須恵器杯Bの破片が出土しており、底部外面に回転ヘラ削りが見られる。遺物より奈良時代の遺構と思われる。

なお、遺構の形態から、埋葬姿勢は伸展葬とは考えられず、牛出古窯遺跡SK13（平安時代）の伸展葬と思われる埋葬形態とは異なっており注目される。

SK59・60（第128図）

古墳時代の粘土採掘跡SX13の覆土中に掘り込まれている。二つの土坑はおよそ15cmの間隔を置いて並んでおり、いずれも直径60cmのほぼ円形を呈し、深さ17cmと10cmを測る。覆土中より拳大から人頭大の礫が出土している。SK60から土師器が出土しているが時期は不明。古墳時代前期の遺構の覆土に掘り込んでいること、遺跡内では粘土採掘跡以降奈良時代まで遺構遺物が確認されていないこと、覆土から中世以降ではあり得ないことから、奈良・平安時代の遺構と判断した。

SH01（第128図）

SX12の覆土上面から拳大から人頭大の礫が7点まとまって出土した。掘り込みは確認できなかったため集石とした。伴出する遺物はなく時期は不明であるが、古墳時代の遺構の埋没後に形成されており、礫の出土状況がSK59・60に類似しているため本節で扱った。

その他の土坑（第112図、第7表）

以上の土坑の他に出土遺物が無く覆土に基本土層III層の暗褐色土または黒褐色土が見られる土坑が12基検出された。不整形なものも多く、遺構の性格も不明であり、時期も確定できないが覆土から奈良・平安時代のもので推定される。全体図に位置を示し、第7表にその属性をまとめる。なお、SK47・51は他の土坑とは異なり、粘土層を掘り込み、覆土が人為的な埋め戻し土であることから粘土採掘跡の可能性はある。なお、SK47から出土した須恵器には奈良時代前半と思われる口縁に沈線がめぐる椀が出土している。

第7表 沢田鍋土遺跡奈良・平安時代土坑一覧

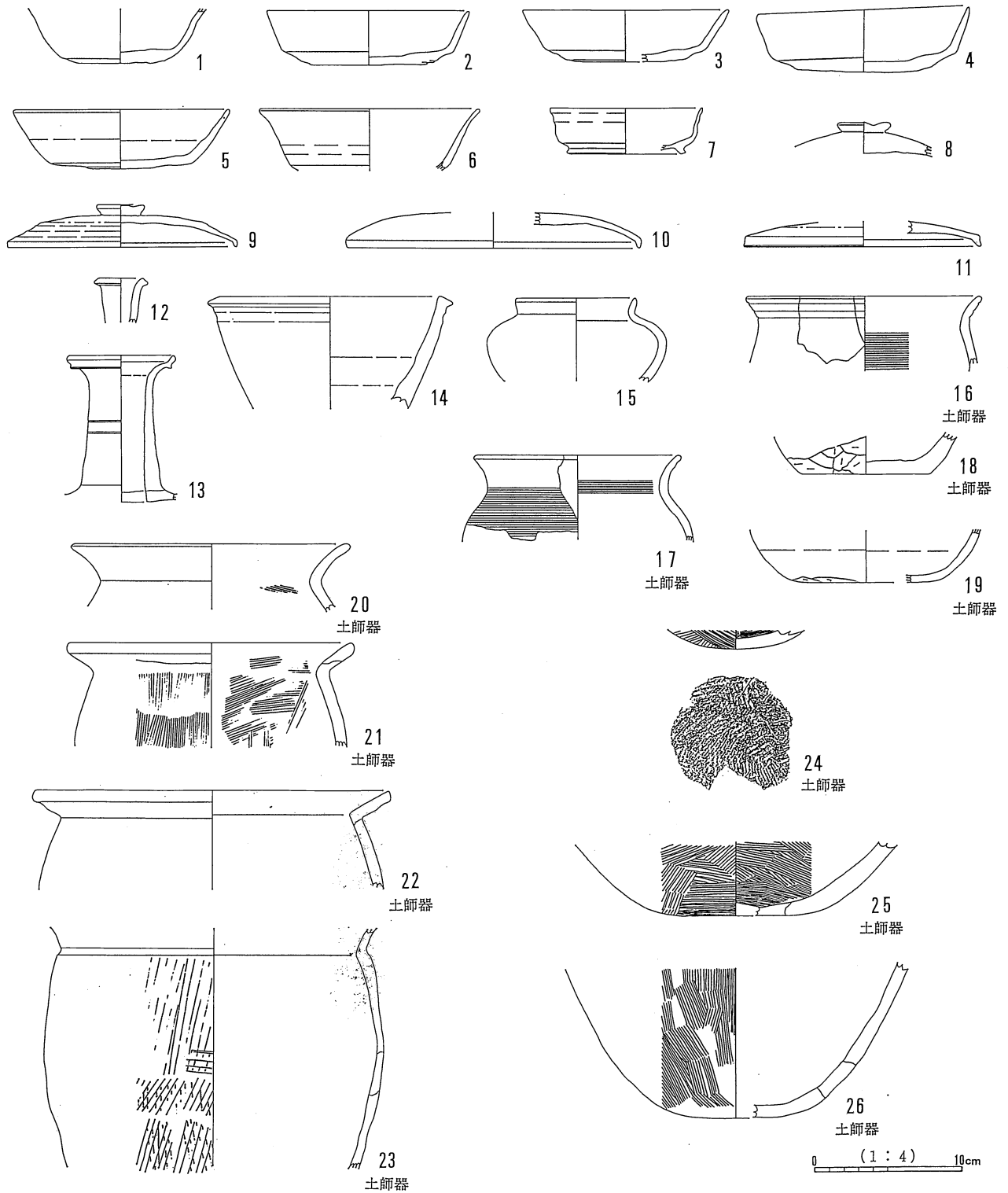
遺構名	平面形状	規模	深さ	備考
SK06	長楕円	2.2m×0.8m	0.40m	須恵器片出土。
SK07	円形	1.3m×1.3m	不明	須恵器片出土。
SK09	方形	0.94m×0.29m	0.20m	出土遺物なし。
SK10	円形	0.8m×0.8m	0.10m	出土遺物なし。
SK18	不整形	1.4m×0.8m	0.35m	出土遺物なし。
SK19	隅丸方形	0.8m×0.4m	0.10m	出土遺物なし。
SK20	楕円形	0.4m×0.34m	0.10m	出土遺物なし。
SK22	不整形	1.7m×1.18m	0.20m	出土遺物なし。
SK40	不整形	1.8m×1.14m	0.60m	出土遺物なし。
SK47	隅丸方形	1.8m×1.4m	0.28m	須恵器甕片出土。粘土層を掘り込む。
SK51	不整形	2.8m×1.0m	0.5m	須恵器・土師器出土。粘土層を掘り込む。
SK53	不整形	不明	不明	須恵器杯B。覆土に焼土を含む。

5 溝

SD10（第112図）

調査区南側のSB01とSB02の間に等高線に直行した溝が検出された。調査区の西壁で幅約3.5m、深さ0.6mで、斜面下方に行くにしたがって幅が広がり、基本土層III層に類似する覆土がSY01・02を覆っ

ている。斜面上方で弧状の断面形を示し、斜面下方に行くに従い上場のラインが不明瞭になる。調査区内では流水によって削られた自然地形と観察されるが、斜面上方の調査区外には奈良時代の集落が広がっており、斜面上方部分では人為的に掘られた溝であることが十分考えられる。覆土には奈良時代の須恵器、土師器などが含まれており、斜面上方の集落跡の遺物が流れ込んだものと思われる。後世の遺物が混入していないことから奈良・平安時代に埋没したと考えられる。



第129図 沢田鍋土遺跡 遺構外出土遺物

SD18 (第112図)

古墳時代の粘土採掘跡SX09の覆土中に掘り込まれる溝である。溝は幅0.9m、深さ約15cmで南北方向に走り、北側は調査区外に延びていく。底面から須恵器甕の胴部破片が重なって出土した。

6 ピット群

SH01の西側に不規則に配されたピットが10個検出された。ピット群は調査区外に伸びると考えられ全貌はつかめない。位置関係から掘立柱建物址とは認められず、各ピットは直径20~30cm、深さ7~29cmで出土遺物はなく奈良・平安時代と限定する根拠はない。縄文時代、古墳時代の遺構も近接して存在することから他の時期のものである可能性がある。

7 遺構外の出土遺物 (第129図)

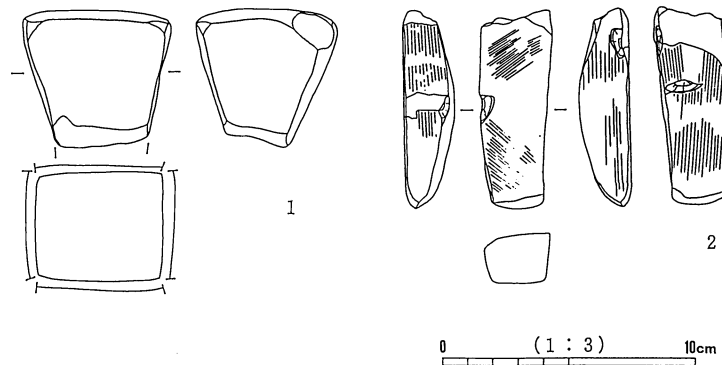
須恵器では杯A (1~6)、杯B (7)、蓋B (8~11)、長頸壺A (13)、長頸壺C (12)、鉢B (14)、短頸壺B (15)、甕底部 (24、25) がみられ、土師器では小型甕 (16~18)、長胴甕 (19~26) がみられる。須恵器杯Aは回転ヘラ切りのもので、2~4は底部から腰部まで広がって立ち上がり、腰部から屈曲し直に立ち上がる形態である。この形態は沢田鍋土窯跡には少ない。1と5はSW01に類似する形態である。6はSY02の杯Aと類似する。13は長頸壺Bに類するが口縁部が受け口状に有段になっており、頸部も垂直に立ち上がる。これは、高丘丘陵窯跡群にはみられない形態であり、老洞古窯跡(岐阜市教委.1981)など美濃須衛窯跡群に類似品がみられる。14は鉢Bである。通称すり鉢と思われる。

土師器の長胴甕は胴部外面が縦位ハケ調整である。口径の方が胴部径より大きく、口縁が開いており、胴部の張りが少なく砲弾形の底部にいたる。底部は丸底 (24) かやや丸みを帯びた平底 (19・26) である。25は、やや平底の甕底部であるが、低部に穴をあけ甑として転用している。小型甕は内外面カキメ調整がおこなわれている。底部 (18) は平底で削りがみられる。

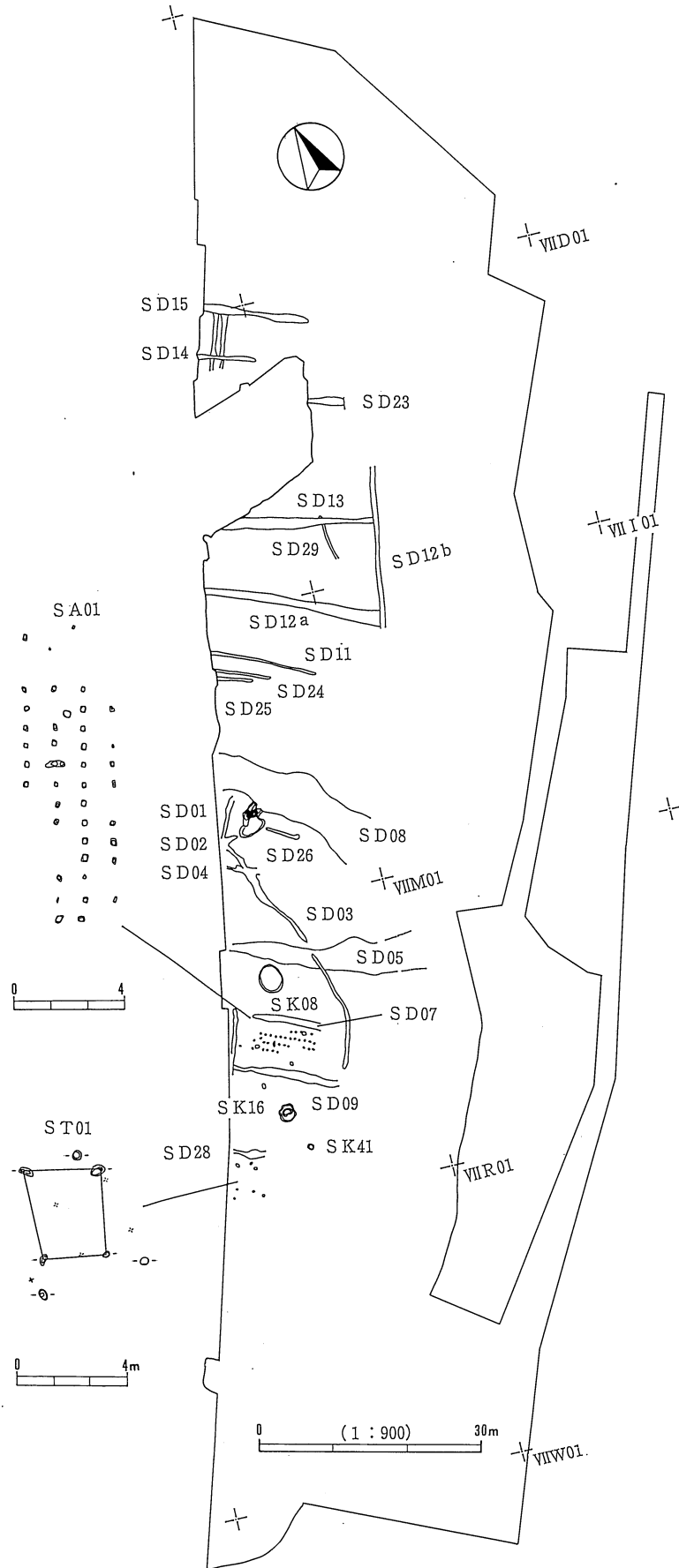
第6節 近世以降の遺構と遺物

1 概要

出土した陶磁器で古いものは18世紀の波佐見焼であり、19世紀以降のものが大半であることから、検出された遺構も近世後半から近代のものである。遺構は以下に示すとおりであるが、いずれの遺構も厳密な時期については明確にできない。溝19条、土坑11基、ピット群2か所が検出された(第131図)。陶磁器の他に砥石が出土した。(第130図)



第130図 沢田鍋土遺跡 近世以降の溝出土の砥石



第131図 沢田鍋土遺跡 近世・近代の遺構配置図

2 溝

SD08・05は斜面下方ほど幅が広く、流水により削られて生じたものと思われる。他は人為的な遺構と考えられるが時期、性格については不明。なおSD03・12a・12b・23は現在の畑地境に一致する。SD13は拳大以下の礫が1列に敷かれていた。

3 土坑

覆土から近世・近代の遺構としたがSK02・41以外では出土遺物はなく時期は不明である。第8表に土坑の属性を示す。

第8表 沢田鍋土遺跡近世以降の土坑一覧

遺構名	平面形状	規模	深さ	遺構名	平面形状	規模(cm)	深さcm
SK01	円形	32×32cm	18cm	SK13	円形	28×24cm	4cm
SK02	楕円形	50×34cm	20cm	SK14	隅丸方形	58×56cm	8cm
SK04	不整形	48×36cm	27cm	SK16	楕円形	36×24cm	10cm
SK08	楕円形	378×302cm	12cm	SK17	不整形	236×214cm	16cm
SK11	隅丸方形	50×48cm	7cm	SK41	方形	66×64cm	21cm
SK12	隅丸方形	60×59cm	9cm				

4 ピット群

ST01 (SK25・27・29・72) (第131図)

調査区南側に径30～50cmの円形・楕円形の穴が7基確認され、SK25・27・29・72は等高線に平行して方形に配列しており掘立柱建物跡の可能性があり、3.1m×2.3mを測る。柱痕は確認されなかった。

SA01 (第131図)

一辺約20cmの方形の小ピットが4列に配列する。部分的に欠落するところが見られるが、一列に13個のピットがあるものと思われ、全体で縦横8.5m×3.2mを測る。それぞれのピットの間隔は、4列の横の間隔は1.0～1.05m、縦は約0.7mである。ピットの深さは3～9cmを測る。柱痕は確認されなかった。SD07・11・27に囲まれているが、SA01との関係は不明である。

註

- 1 上越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14 (平成9年度刊行) に分析結果を掲載する。
- 2 註1に同じ
- 3 註1に同じ

参考文献

- 中島英子 1993 『沢田鍋土遺跡 第II地点発掘調査報告書』 中野市教育委員会
- 中島庄一他1995 『沢田鍋土遺跡 発掘調査報告書』 中野市教育委員会
- 中島庄一 1994 「第3節 縄文中期後葉から後期初頭の土器群」『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書 栗林遺跡・七瀬遺跡』
- 宇賀神誠司 1988 「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』 2
- 宇賀神誠司・青木一男 1993 「土器様相変化の素描」『長野県考古学会誌』 69・70
- 各務原市教育委員会 1981 『美濃須衛古窯跡資料調査報告書』
- 岐阜市教育委員会 1981 『老洞古窯跡群発掘調査報告書』
- 後藤健一 1995 「II東海東部第3章主要窯址と須恵器」『須恵器集成図録』 第3巻 東日本編1
- 出越茂和 1995 「III北陸 第3章窯址と出土遺物」『須恵器集成図録』 第3巻 東日本編1
- 鳥羽英継 1996 「第二章第二節 各水田対応層遺物」『長野県屋代遺跡群出土木簡』

第6章 清水山窯跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

遺跡は長野県中野市大字立ヶ花字清水山671-5他に所在し、高丘陵南西部に位置する通称清水山と呼ばれる小高い山とその周辺の平坦な地形とからなる。清水山の北東には湿地があり泥炭層が認められる。湿地は最近まで水田として利用され、山は果樹園もしくは山林となっていた。清水山は東西方向に長い楕円形をしており、東側半分以上は採土のために削平されており、遺構の有無は確認できない。また、残った西側部分の山頂部は火薬庫設営のため掘削されており平坦部はほとんど残っていない。当時の工事関係者と名乗る人の話では、掘削した時に、大きな板状の石と骨が出たという話もあり、山頂部に古墳があった可能性も指摘される。遺跡は窯跡として知られていたが、これまで調査事例はなく1992年の県埋蔵文化財センターの発掘調査により3基の窯跡が確認され、その翌年中野市教育委員会により中世墓址群が調査された。これにより、北斜面に奈良時代の窯跡、南斜面には中世墓址があることが明らかとなった。清水山は高速道路建設と、それに伴う盛り土用の採土により、西端の一角を残しすべて削平された。

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法 (第2・132図)

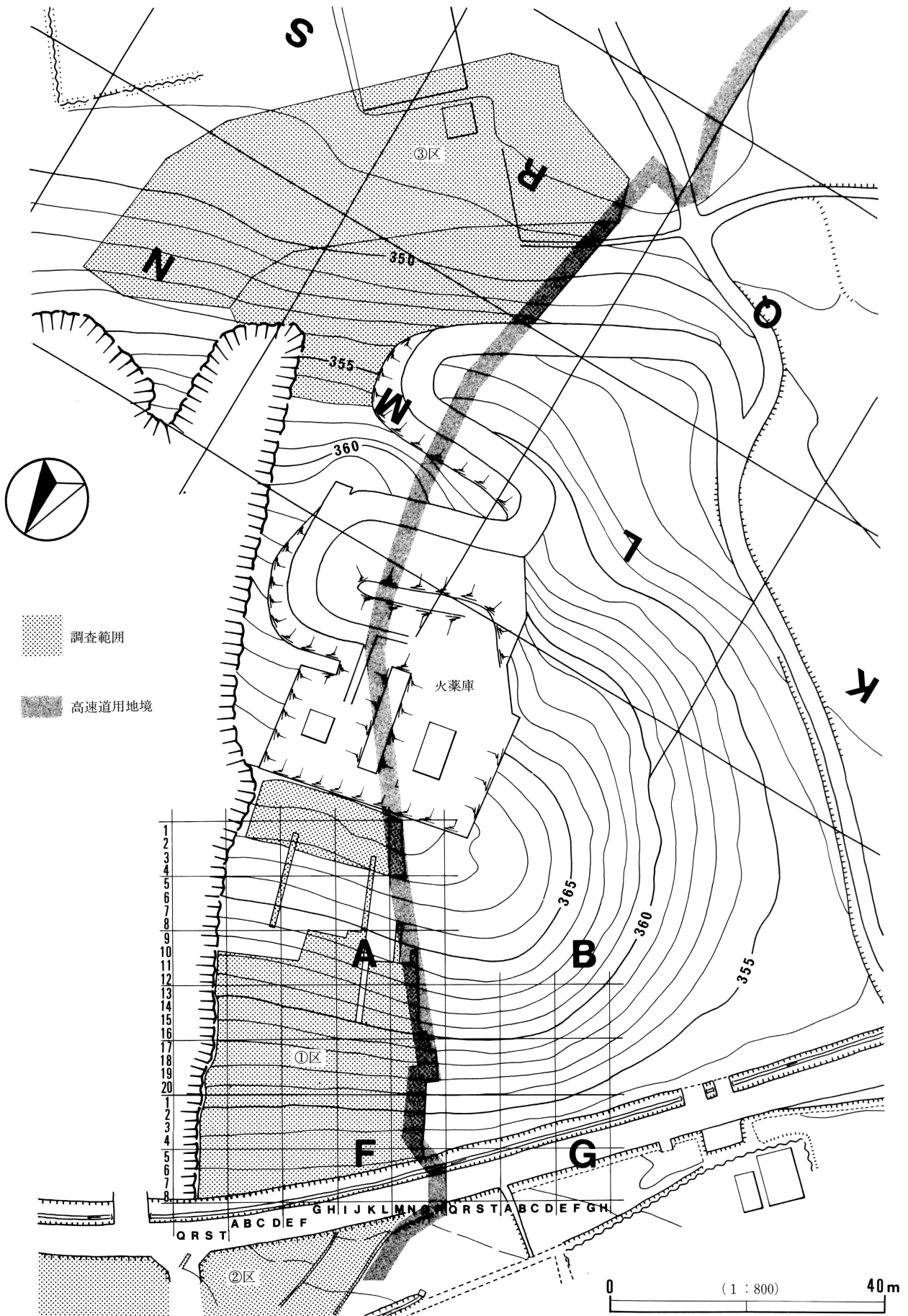
調査範囲 清水山の北斜面を①区、道路をはさんだ裾野部分を②区、南斜面から裾野にかけての部分③区とした。③区の南側は表土剥ぎを行ったが、遺構遺物は検出されず、その範囲のみ第2図に示した。また、清水山の北東に広がる低地の一部分の約600m²を④区として調査した(図2図G)。また、①区ではトレンチ調査で、遺構遺物がないと判断された斜面上部については表土剥ぎを行わなかった。清水山の東端の削平を免れて島状に残った緩斜面部は、1991年の試掘調査で遺構が存在しないことが確認されている。

グリッドの設定 ③区のグリッドは埋文センター仕様に従い設定し(第1章2節3項参照)、第132図に大々地区と調査区の関係を示した。

ただし、①区は地形に沿って任意のグリッドを設定したため、③区とは異なったグリッドを用いている。グリッドの呼称法は埋文センター仕様にのっとり、40m四方の大グリッドにアルファベット名をつけ、それを2m単位で区切ったものを小グリッドとし、X軸の1~20、Y軸のA~Tの組み合わせでグリッド名を示している。すなわち、大グリッドA内の9列とI列の交点のグリッドは「A I 0 9」と示される。第132図に調査区との関係を示し、調査区内の方眼の交点を以下に示す。

第VIII系	A E 0 5 (小グリッド)	X=80568.083	Y=-16120.967
	F E 0 5 (小グリッド)	X=80595.453	Y=-16137.539

調査の方法 表土剥ぎは重機で行ない、遺構の検出を行なった。①区では等高線に平行したトレンチ調査を行ない、窯跡・灰原の位置を確認した後に、重機による表土剥ぎを行なった。灰原部分では表土下数センチで遺物が多量に出土するため、表土から人力による掘り下げを行なった。窯跡内、灰原から出土し



第132図 清水山竅跡 調査区とグリッド設定

た窯体はすべて取り上げて、水洗をして観察、重量測定を行なった後、焼台と思われるもの、窯壁の構築材の痕跡があるもの、窯壁の補修が観察されるもの以外は廃棄した。

④区で出土した木は発掘現場で加工痕の有無を観察したが、加工痕が残されたものはなく、樹種同定のためのサンプルのみ採取した。

(2) 調査経過 (調査日誌抄)

調査期間 1992年5月13日～同年7月29日、同年9月11日～同年12月17日

5月13日	④区の低地部の調査を開始。	10月6日	1号窯(SY01)調査開始。
5月25日	③区工事用道路切り直し部分の表土剥ぎ。遺構なし。	10月7日	2号窯(SY02)調査開始。③区斜面部遺構、遺物なく調査終了。
6月2日	②区表土剥ぎを行ったが、遺構はなく調査終了。	10月13日	SK01が窯跡と同時期の遺構と確認される。
6月6日	③区工事用道路移設。	10月22日	長野市立博物館山口明氏他十数名見学。
6月8日	③区平坦部表土剥ぎ及び遺構検出開始。縄文中期の土器片、埋甕が検出される。	11月2日	藤沢高広調査員と作業員10名増員。灰原の遺物の取り上げ開始。
6月19日	③区グリッド杭設定(写真測図研究所に委託)。	11月4日	SM01下の土坑調査。
6月25日	③区平安時代の土坑(SK01)を確認。	11月9日	中野市内小学校教員40名見学。
7月3日	④区各層の土壌及び植物遺体を採集し調査終了し、埋め戻しを開始。	11月13日	ラジコンヘリによる空撮実施(写真測図研究所に委託)。
7月24日	③区の遺構の調査終了。	11月15日	現地説明会実施。
7月27日	機材撤収。本日を持って作業員は玄照寺跡に移動。	11月18日	中野市教育委員会他約30名が見学。
7月29日	③区、粘土採掘跡SK04・05粘土サンプル採取と基本層所の記録を行い調査終了。	11月20日	富山大学広岡先生らにより、熱残留磁気年代測定のためのデータのサンプリングを行う。
9月11日	本日より清水山窯跡の調査再開。①区重機による表土剥ぎ開始。	11月25日	1号窯より「高井」とヘラ描きされた須恵器出土。県教育委員会視察。
9月14日	人力によるトレンチ調査。須恵器窯検出。山頂部で五輪塔出土。	12月1日	現場撤収準備
9月16日	山頂部マウンド(SM01)測量。	12月3日	1～3号窯断ち割り。
9月22日	窯跡3基と灰原を検出。	12月7日	作業員は本日で終了。残務は調査員2名で行う。
9月28日	③区斜面部表土剥ぎ開始。五輪塔1点出土。	12月11日	2号窯調査終了。
9月30日	①区表土剥ぎ、遺構検出終了。	12月16日	3号窯調査終了。機材撤収。
10月2日	3号窯(SY03)調査開始。グリッド設定(写真測図研究所に委託)。	12月17日	1号窯側面図実測を終え調査終了。
10月5日	SK11調査開始。灰原調査開始。		※1号窯、3号窯は1993年4月に2日間の追加調査をした。

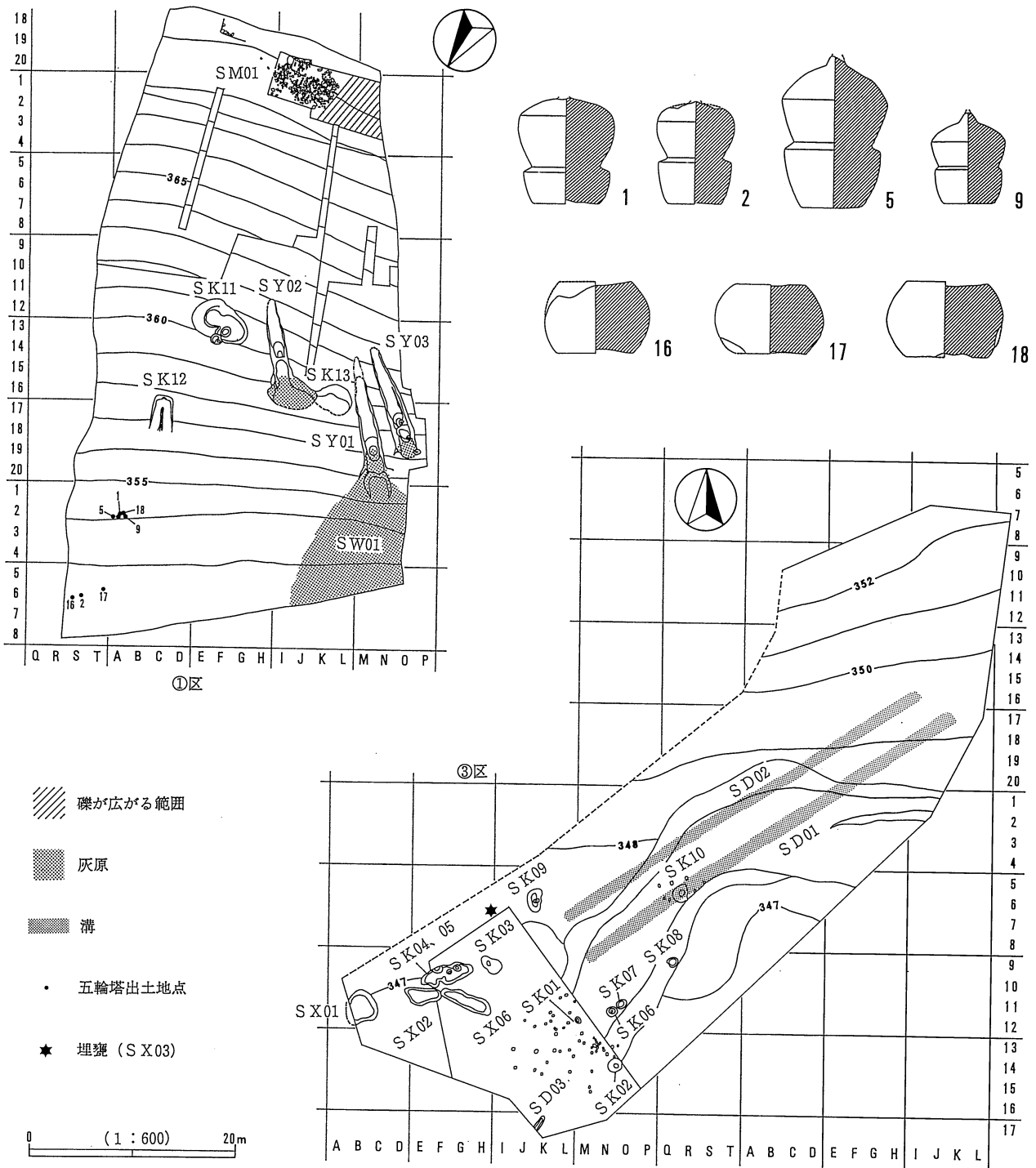
(3) 調査結果の概要

①区では奈良時代前半の窯跡3基と灰原、中・近世の塚などを調査した。特に1号窯(SY01)では高坏や直径30cmを越える盤など一般の集落跡では見られない器種や、「高井」とヘラ描きされた皿が出土するなど遺物に特徴が見られる。さらに、灰原から「佐玖郡」とヘラ描きされた無頸壺が出土したことが特筆される。また、五輪塔風空輪・水輪が数点出土しており、中野市教育委員会が調査した清水山西斜面の中世墓址群(中島1994)と関連する遺物である。

②区は出土遺物がなく、試掘で遺構と認められたものが自然地形の浅い窪みであることが確認された。

③区では縄文時代の埋甕と、粘土採掘跡が各1基、奈良・平安時代では土坑を8基検出した。縄文時代の遺構・遺物は沢田鍋土遺跡のものと同じく中期後葉で、いずれも一連のものと考えられる。

④区は低湿地で泥炭層と粘土層の互層の堆積が認められた。遺構は検出されなかったが、須恵器片の他倒木、種子、昆虫などの自然遺物が多量に出土した。これらの自然遺物と土壌を採取し樹種同定、種子同定、花粉分析を行った。また、泥炭層出土の木の放射性炭素年代測定を行った結果、古くは2万年以上前の泥炭層が存在することが明らかとなった。



第133図 清水山窯跡 遺構配置図

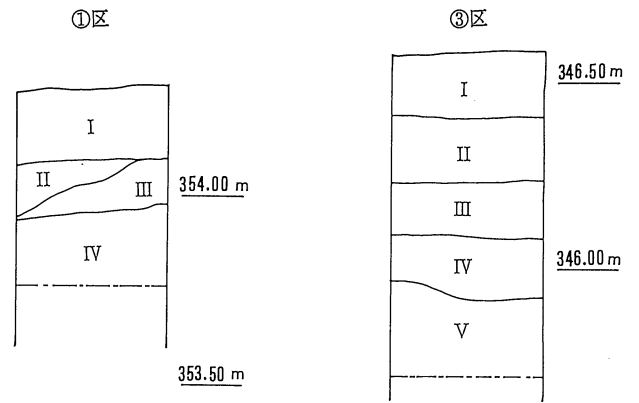
(4) 基本土層 (第134図)

①～④区ではそれぞれ層序が異なっており、直接の対比ができないので、調査区ごとに基本土層を示す。なお、④区の土層は本章5節に記述した。

①区 灰原部の土層を模式図的に示した。I層：にぶい黄褐色土(Hue10YR5/4)表土。II層：褐色土(Hue10YR4/4)。III層：黒褐色土(Hue10YR3/2)焼土・炭化物・須恵器を多量に含む灰原。IV層：暗褐色土(Hue10YR3/3)硬く締まった層。II・III層は遺物包含層で、灰原部分ではII層はなく、灰原以外ではII層が発達しており、II層とIII層は相互補完的な関係にある。IV層は地山である。また、調査区西側半分では地山中に人頭大以上の礫が含まれているが、東側では礫は見られない。これは褶曲作用により、地山の

土層が場所により異なるためである。なお、遺構検出はIV層上面で行った。

③区 以下に調査区南端の層序を示す。I層：褐色砂質土(Hue10YR4/4)表土。II層：暗褐色土(Hue10YR3/3)漸移層。III層：黒褐色土(Hue10YR2/2)縄文時代～平安時代の遺物包含層。IV層：にぶい黄褐色土(Hue10YR4/3)。V層：明黄褐色と灰白色がまだらになった粘土層。V層は縄文時代の粘土採掘で採取された粘土と思われる。なお、遺構検出はIV層上面で行った。



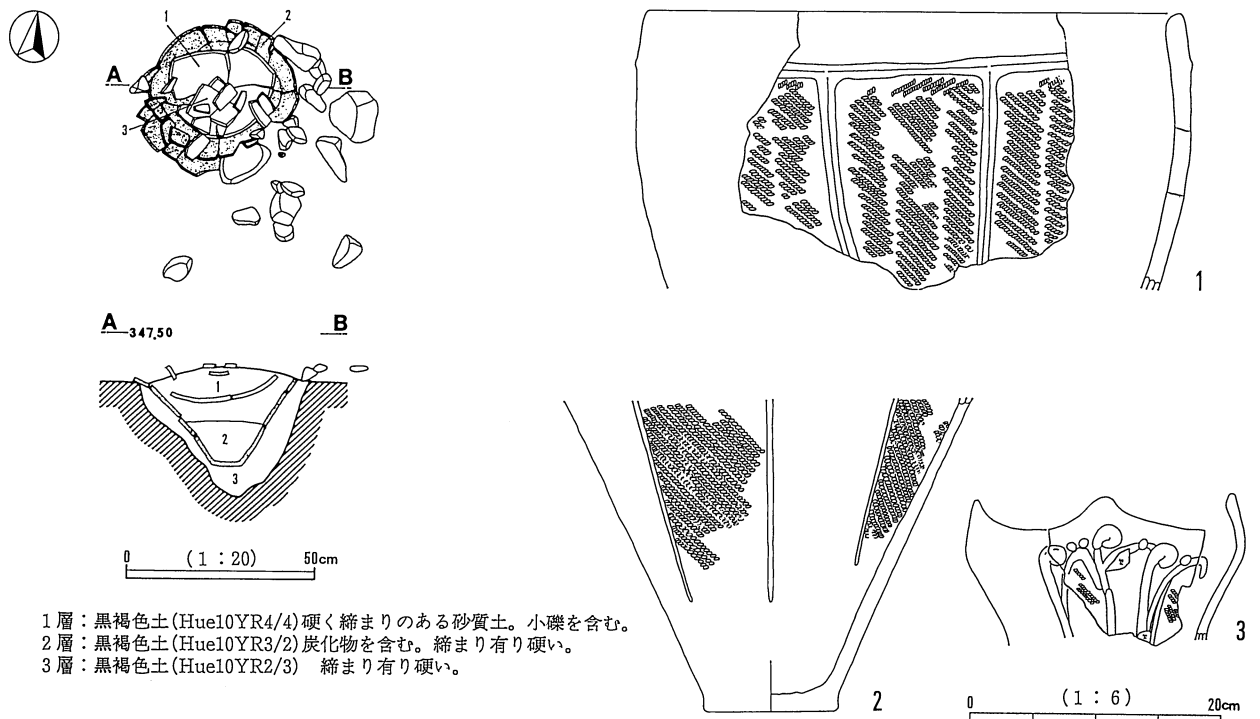
第134図 清水山窯跡 基本土層

第2節 縄文時代の遺構と遺物

埋甕1基、土坑3基が検出され、土坑のSK04・05は粘土採掘跡である。なお、縄文時代の遺構・遺物は主に③区で検出された。

1 埋甕

SX03 (第135図) 直径約45cmの穴に正位に埋められた埋甕である。検出面は地表から15cm～20cmと浅く上半部は失われていたが、胴下半部は完全な形で残されていた。埋められた深鉢(第135図2)の内部には別個体の土器片(第135図1・3)が蓋をするように水平に落ち込んでいた。埋甕の周辺には礫が多く見られたが、地山に含まれる礫との区別は困難であるため、遺構に関するものかどうか判断できない。周辺に柱穴などの住居跡の施設はなく、埋甕は屋外のものである。



1層：黒褐色土(Hue10YR4/4)硬く締まりのある砂質土。小礫を含む。
2層：黒褐色土(Hue10YR3/2)炭化物を含む。締まり有り硬い。
3層：黒褐色土(Hue10YR2/3) 締まり有り硬い。

第135図 清水山窯跡 SX03 (埋甕)

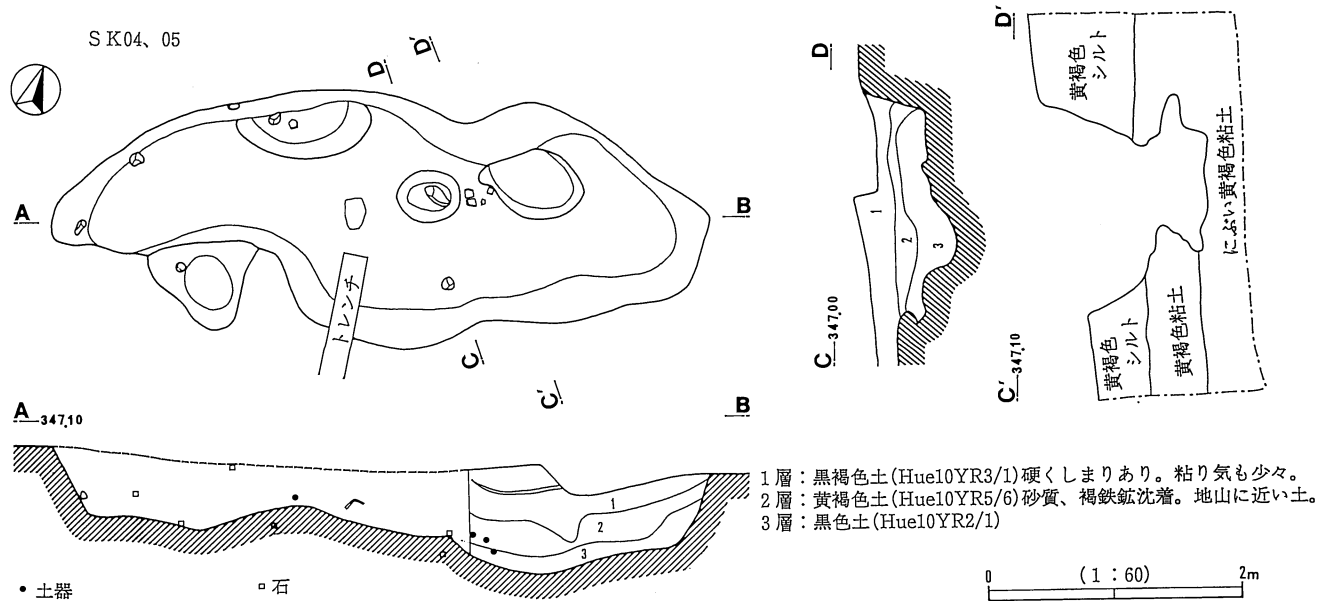
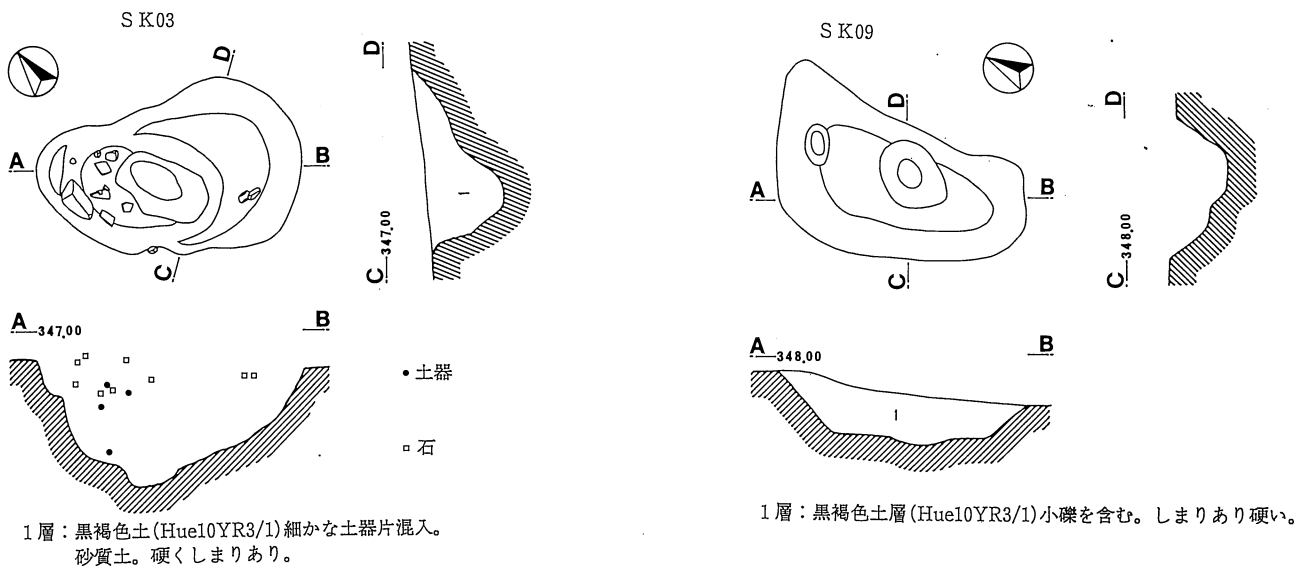
埋甕内の土壌と、地山のリン・カルシウム含量を比較したところ、埋甕内のリン・カルシウムのいずれの含量も地山より多いという結果が得られた。しかしながら、全リン酸の周辺土壌に対する増加量が少ないことから、「(リン酸の増加は) 遺骨などによる可能性は低いと考えられる。」と報告された。(註1)

出土遺物 1は口縁部無文帯と、胴部には縦横の隆帯で区画した中に単節(LR)の縄文を縦位に施文している。2は縄文施文の後に、垂下する沈線による縦区画を行い、ひとつおきに無文の区画としている。3は口縁部に向かって蕨手状の文様を浅い沈線で描き、蕨手の先には円形文が見られる。沈線は指先の腹で引いており、同様なものが沢田鍋土遺跡でも認められる。いずれも中期後葉に位置付けられる。

2 土坑

SK03 (第136図)

長径2.2m、短径1.4m、深さ90cmの不整な楕円形を呈する。底面は凹凸しており、底面の中央部が一段深くなる。覆土より縄文中期土器片(第137図16・19)、磨石(第139図27)、礫が出土した。粘土層まで掘



第136図 清水山窯跡 SK03・04・05・09

り込んでいることから粘土採掘跡の可能性があり、時期は出土土器から縄文時代中期である。

SK04・05 (第136図)

調査当初二つの土坑の切り合いと考えて遺構名を付けたが、切り合いは確認できず一つの遺構として認識した。長さ5.2m、幅2.0m、深さ1.4mで不整な形態を呈し、底面は大きく凹凸しており、3か所のピット状の窪みが認められる。地山の粘土層では横穴を掘りオーバーハングしたところが確認された。これは、粘土を採取するために掘ったものと思われ、本遺構を粘土採掘跡とする根拠となる。縄文中期土器10片(第137図2・30・35)、打製石斧4点(第140図37・39・40・41)、磨製石斧1点(第139図24)、台石1点、拳大から人頭大の礫が数点出土した。時期は出土土器から縄文時代中期後葉である。

SK09 (第136図)

長さ2.1m、幅85cm～125cm、深さ48cmの不整な形態を呈する。底面にピット状の窪みが認められる。縄文土器が1片出土したのみであるが、表面が摩滅しており時期は不明である。

3 出土遺物

(1) 土器(第137図) 出土した土器はすべて中期後葉に属するもので、埋甕以外は破片で出土している。また、遺構に属する遺物は少なく、多くは遺構外の包含層(基本土層Ⅲ層)より出土した。土器の分布状況は沢田鍋土遺跡と合わせて示した(第86図)。

1～8は隆帯と縄文が見られるもの、9・10は隆帯のみのもの、11・12は縄文と刻目隆帯が見られる。13～22は沈線と縄文で文様が構成されるもの、24～26は条線文が施されたものである。27は口縁部に棒状工具で2列の刺突がめぐる。28～37は縄文のみが見られる破片であるが、単節のものと無節のものがある。

(2) 石器(第138～140図)

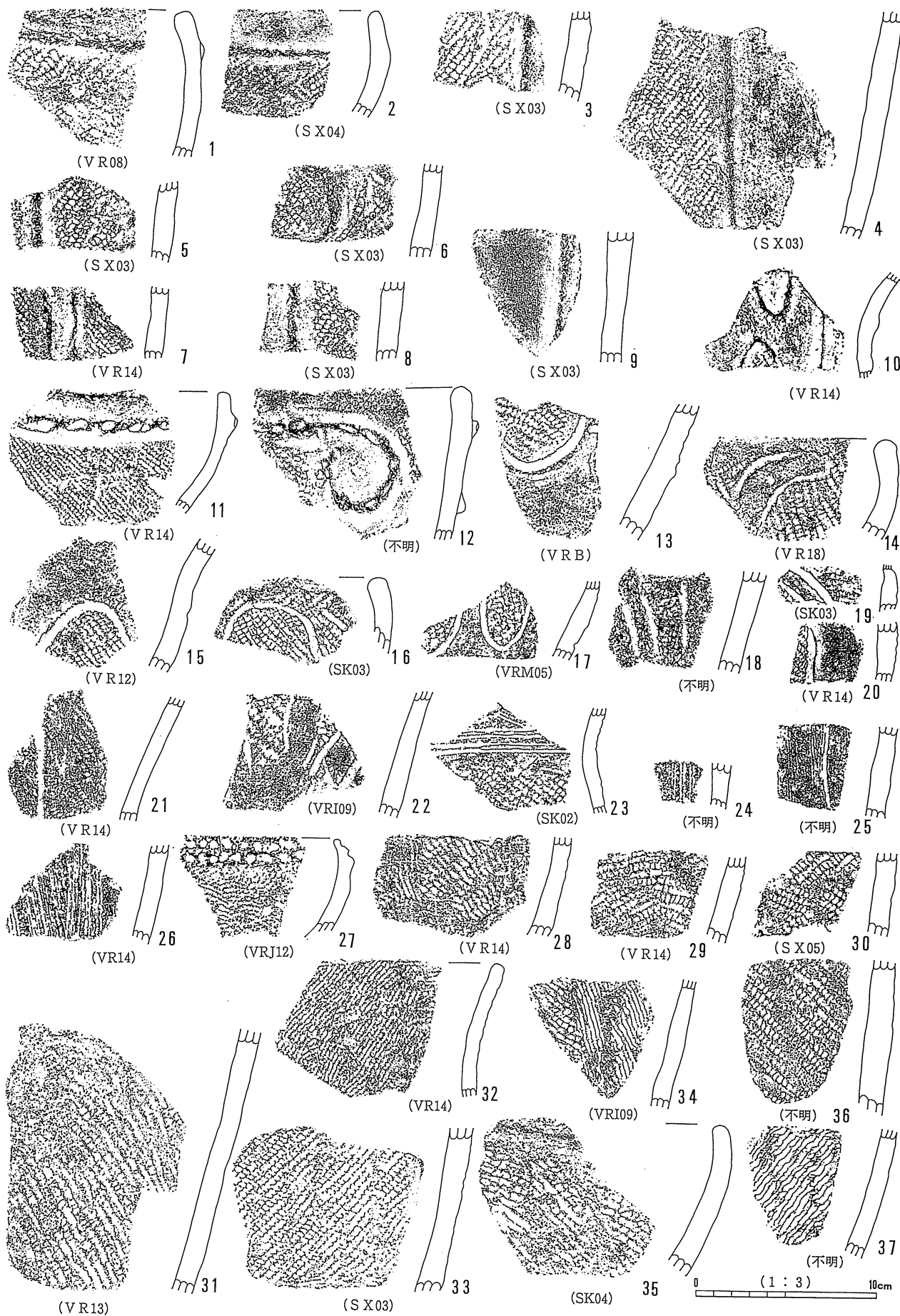
石鏃10点、搔器1点、削器3点、小型不定形石器7点、打製石斧53点、横刃型石器2点、磨製石斧2点、磨石・凹石・敲石13点、特殊磨石5点、石皿・台石6点、剥片92点、石核1点が出土した。この他に弥生時代の太形蛤刃石斧3点と時期不明の砥石が1点出土した(第141図)。

1～10は石鏃で、1・5～8は黒曜石、2・3・10はチャート、4は流紋岩、9は珪質頁岩製である。11・12は小型不定形石器で11がチャート、12は黒曜石である。13は黒曜石の搔器ではほぼ全周に刃部が形成されている。14・15は黒曜石、25は安山岩の削器である。16・17は台石で、平坦な表面に敲打による凹みが見られ、18・19はわずかに窪んだ磨り面を持つ石皿である。いずれも安山岩である。21・22は安山岩の横刃型石器であるが、22は打製石斧製作時に剝離した剥片の可能性もある。23は安山岩の磨製石斧で、製作時の剝離面を残しており、側面の面取りは明瞭ではない。24は蛇紋岩製の磨製石斧で、基部に敲打によるツブレが見られ、表面に見られる剝離もその敲打によるものである。26はチャートの石核である。27は特殊磨石に類似する機能面を有する磨石であるが、機能面が二側面で幅が広く、異なった特徴を持つ。28は凹石、30は磨石、29は特殊磨石で先端部に敲打痕を有する。いずれも安山岩である。20・31～42は打製石斧である。実測図中に縦線で示した摩耗痕は、刃部を残すもの40点中21点に認められる。これらの摩耗は使用痕と見ることができ、胴部または基部にまで摩耗痕が認められる物がある。今回は果たすことができなかつたが、打製石斧の使用法を考える上で今後さらに細部の観察と検討が必要となる。また、打製石斧は53点中完形品が16点、刃部を残す欠損品が24点、基部を残す欠損品が5点、刃部と基部を欠く胴部みの欠損品が7点で、すべて安山岩である。

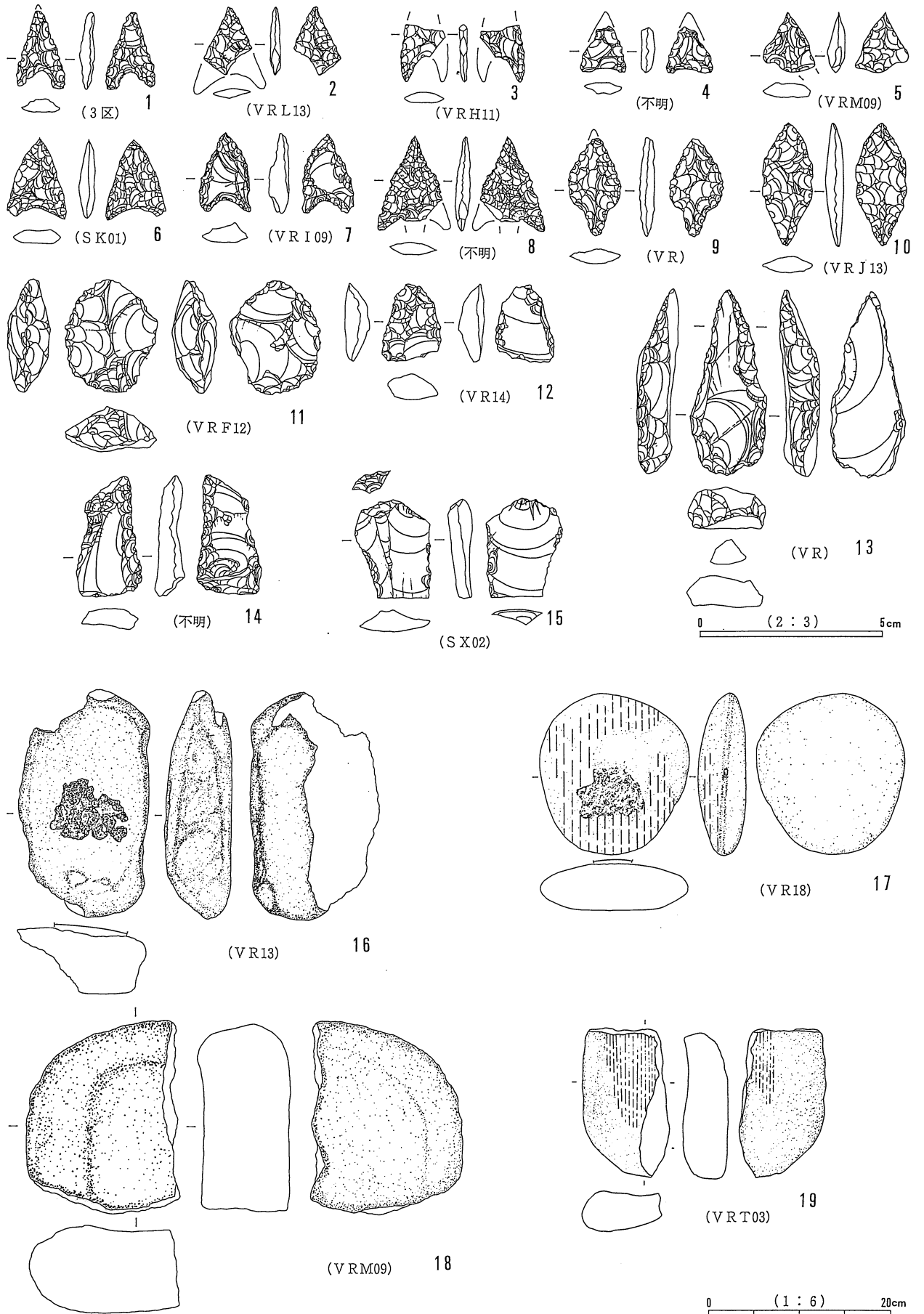
なお、第141図に、弥生時代の太形蛤刃石斧と時期不明の砥石を示した。

註

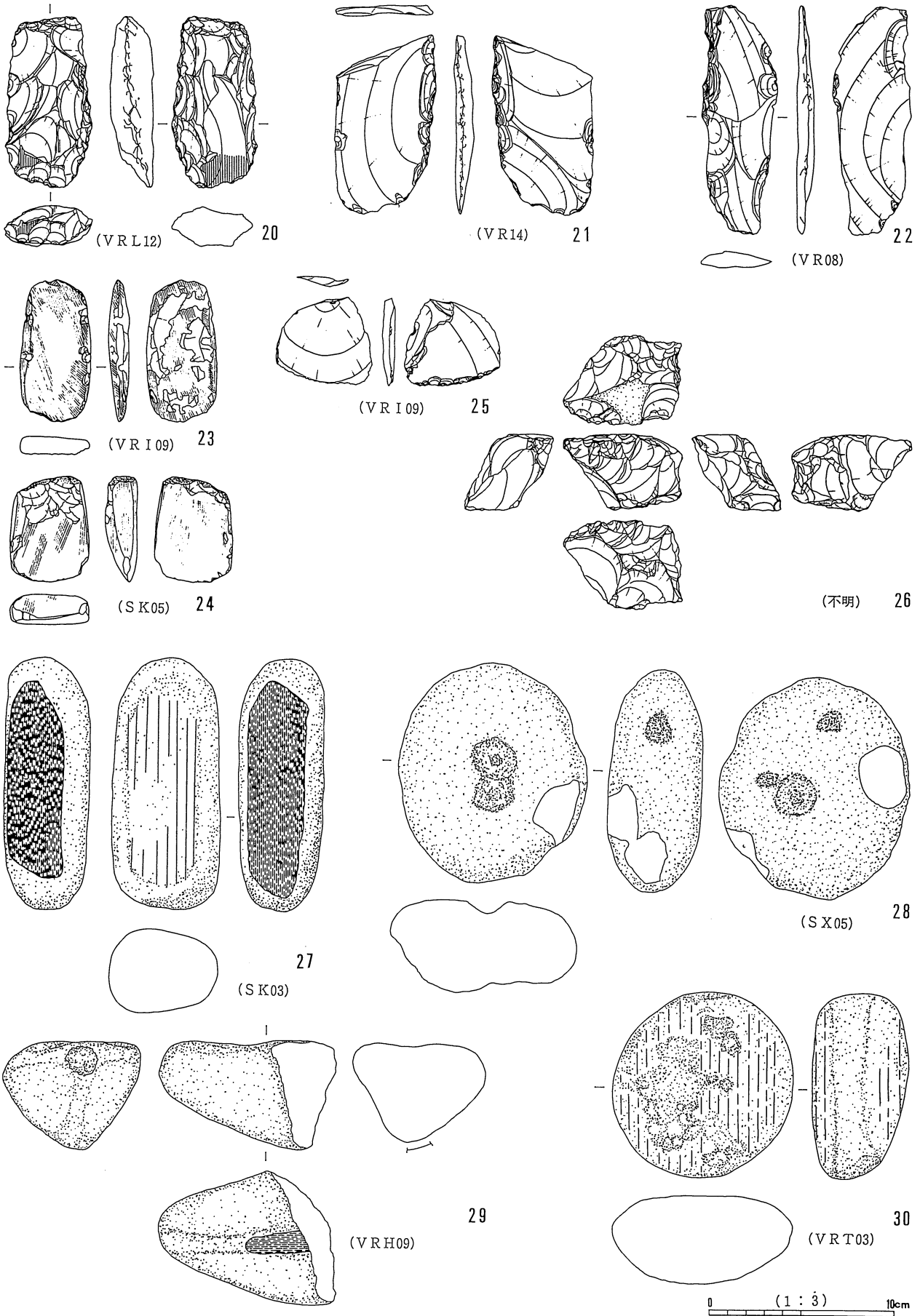
1 分析結果の報告は 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14(平成9年度刊行予定)に掲載する。



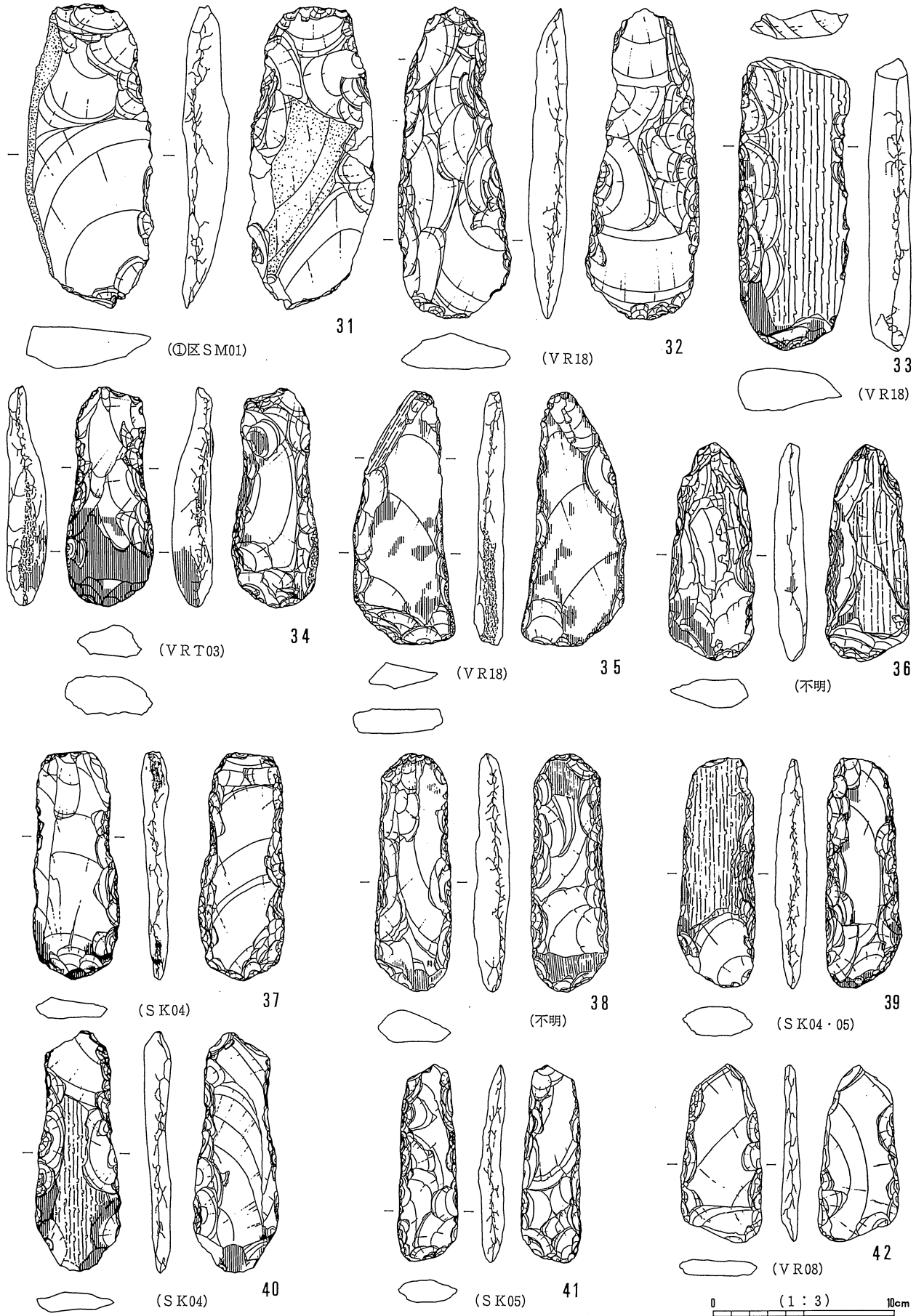
第137図 清水山窯跡 縄文時代土器



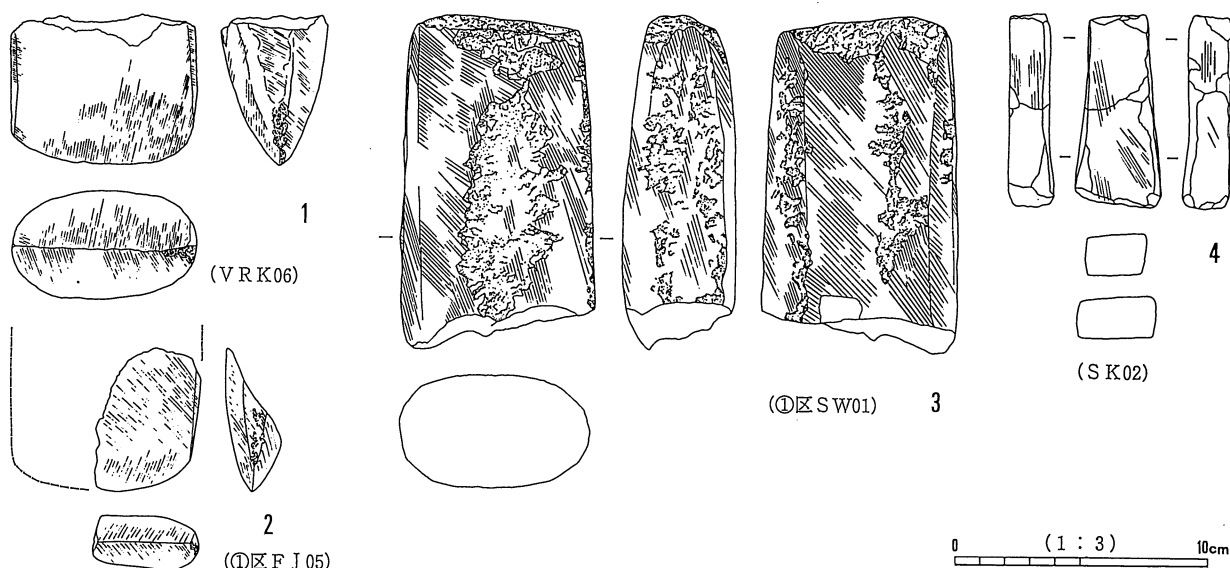
第138図 清水山窯跡 縄文時代石器(1)



第139図 清水山窯跡 縄文時代石器(2)



第140図 清水山竊跡 縄文時代石器(3)



第141図 清水山窯跡 弥生時代以降の石器

第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物

1 概要

北斜面の①区では奈良時代前半の窯跡が3基、土坑が2基確認され、窯跡・灰原からテン箱100箱を越える須恵器が出土した。窯跡は調査区の西側にまとまっており、東側に当該期の遺構は認められない。また、調査区の東に隣接する部分はすでに削平されており、西側に隣接する地区は中野市教育委員会により灰原の調査が行われたが、他の遺構は検出されなかった。出土遺物では「#」などのへラ描きされた須恵器が多量に出土し、その中には「高井」(SY01出土)、「佐玖郡」(SW01出土)の郡名を記したものが認められる。

南斜面の③区では奈良時代後半から平安時代にかけての土坑が7基検出されたが、①区の窯跡と同時期の遺構は検出されなかった。

2 窯跡・灰原

SY01 (1号窯) (第143～154図、PL29・33～37・42・43)

位置 北斜面中腹に位置し、主軸方向はS-41°-Eで、等高線とは直行せず約20°振れて斜めに構築されている。1.2mの間隔を置いて3号窯とほぼ平行して築かれている。

土層 1・2層は表土層。3a～3c層は窯体崩落後に流入した層。4a～4c層は窯体堆積層。5a・b層と7層は硬く焼けた床で間に炭化物層を挟む。8a～8d・9層は舟底状ピット内の覆土である。10・11層は窯壁の外側の層である。また、地山が焼土化した範囲(12層)を二点鎖線で示した。なお、土層断面図ではスサ入り粘土の窯体を右下がりの斜線で示した。層名は発掘時に付したものを一部変更し、窯底を5a・b層、旧5層を6a層、旧6層を6b層と表記した。なお、遺物の注記は旧層名を用いており、巻末に記載した遺物観察表の層名も旧層名である。

窯体の構造 半地下式無階無段の登り窯。煙道と窯尻部分は残存せず、斜面上部部の床面は消失して地山が焼けた焼土が観察される。この焼土部分と前庭部を含めた遺構の全長は約14.10mで、焼成部は最大幅1.46mである。また、焼成部から焚口部までは約11.1mを測る。天井部は窯内に崩落していたが、側壁部は部分的に崩れているものの良好な状態で残されている。特に、焚口部右壁は礫を積み上げ窯壁を築いている。礫は地山の地層に含まれており、床面と焼成部壁に見られる礫は地山にめりこんでおり人工的な構築物ではない。天井、側壁共にスサ入り粘土が用いられ、窯内に崩落した窯体片には直径2cm～3.5cmまたは6cm前後の管状の空洞があり、天井を支える枝材の痕跡と考えられる。また、崩落した窯壁には最大3回もしくは4回の塗り重ねた補修の痕跡が認められた。燃焼部から焚口部覆土には拳大から人頭大の焼けた礫が多量に含まれており、焚口部の構築材の礫が崩壊したものと思われる。これらの礫は床面から間層を挟んで出土しているところもあり、窯が放棄されていくらか覆土が堆積した後に崩壊している。焼成部床面は一カ所わずかな段になる構造を持ち、部分的に2枚の床面が認められる。燃焼部から焼成部にかけて床面下に舟底状ピットがある。ピットの側面は一部焼けて赤褐色を帯びるが、底面には火床面は認められない。ピットの横断面（I-J）を観察すると、最終焼成面の5a層と5b層の間に炭化物を多く含む暗赤褐色土が薄く堆積し、5b層の下は炭化物層を挟んで7層上面に窯底と思われる硬い面が確認できる。断面の観察からは3枚の床面が認められる。焚口部の斜面下方は地山を一段掘り込んだ前庭部となる。

また、焼台と思われる須恵器片を付着したスサ入り粘土塊が26点出土したが、これらは窯内一括で取り上げたために出土位置は示すことができない。焼台には甕片を用いることが多いが、杯・杯蓋などを用いた焼台も見られる。

灰原は前庭部から下方に広がりSW01へとつながり、多量の須恵器が出土した。

遺物出土状況 1・2層中には遺物はなく、3a層中の礫の上下から僅かに破片が出土している。大半の遺物は4層下部もしくは床面の遺物である。これらには硬い床面の上ののるものと、床面に食い込んでいるもの（第147～151図59・66・69・104・105・113・114・138・151）があり、床面として取り上げた遺物には最低2回分の焼成品が含まれていると思われるが、厳密な新旧の区別は困難である。また、燃焼部床面の炭化物層直上に須恵器片が重なって大量に出土した。これらは、青灰色と橙色のものが入り組んで分布し、焼成部の床面出土の須恵器と接合するものがあることから、焼成時の原位置をとどめたものではなく、最終焼成時に焼成部にあったものが燃焼部に廃棄されたものである。この他に、船底状ピット内出土のもの（第146・148図1・7・9・15・16・102）、窯壁に埋め込まれたものがある。これらの遺物は出土状況からいくつかの焼成の段階に分けられる。

第1段階：船底状ピット内、窯壁内出土のもの。

第2段階：焼成部床面に埋まり込んで出土したもの。

第3段階：床面出土のもの。

なお、前述した礫の上下から出土したものは、焚口部の上部構造に埋め込まれていたものと考えられるので第1段階のものと解釈できる。また、6b層出土のものについては上記の段階のいずれかに含まれるものが混在して出土していると考えられる。

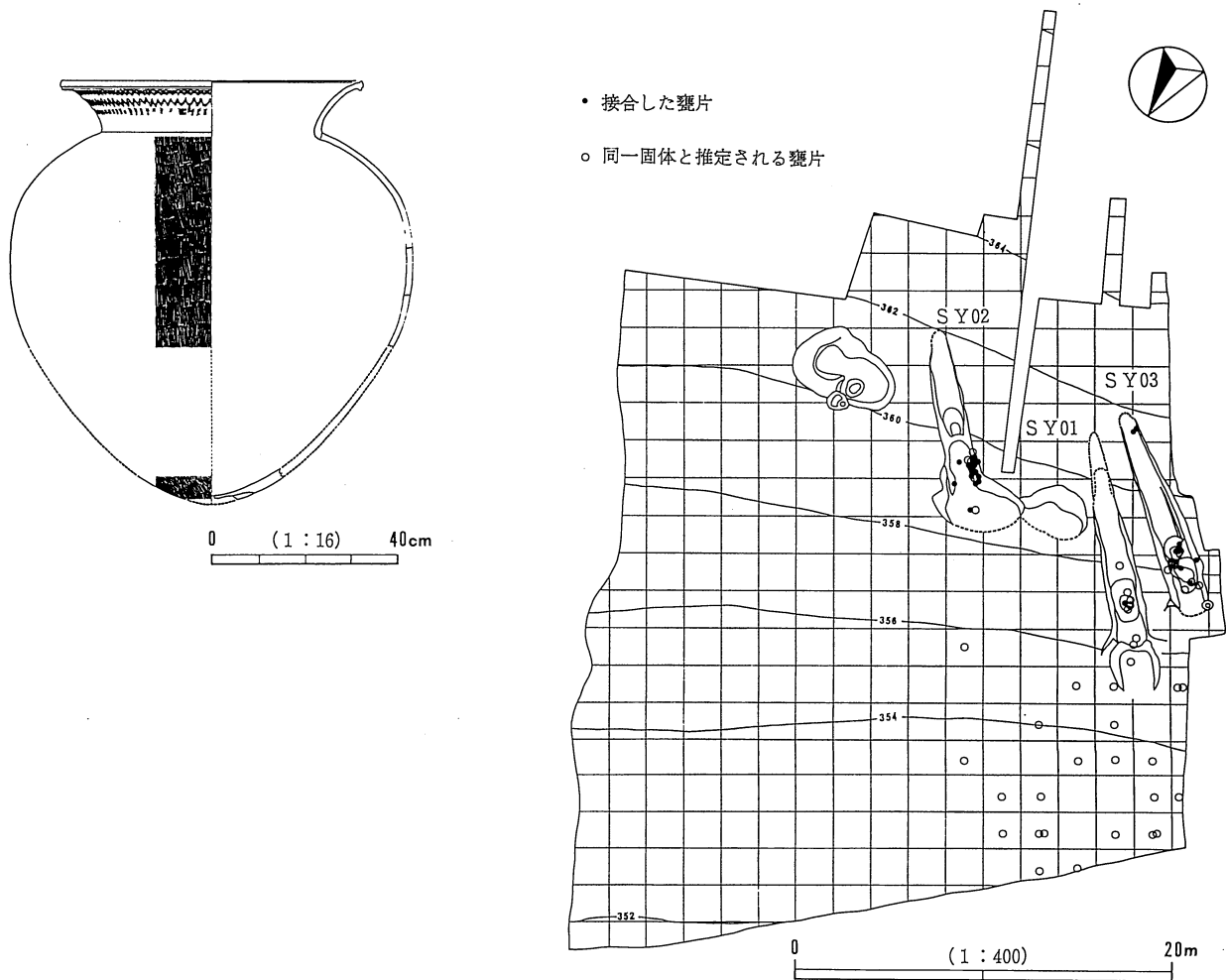
第143図右図には焼成部・燃焼部の床面から出土したへら描きのある須恵器の出土状況を示した。図中にはへら描きがある破片と接合した破片の出土位置も示した。へら描きは、「#」と記されたものが76点、「高井」と記されたが2点である。本遺跡は高井郡に所在することから、「高井」は高井郡を示し、多量に出土した「#」も高井郡を示したものと思われる。ちなみに、「#」とへら描きされた須恵器はSY01の他にSY02で9点、SY03で6点、SW01で37点、合計128点の資料が出土した。「井」のへら描きはすべての器種に見られ、1個体に2カ所記されたものも認められる。なお、中野市教育委員会調査分灰原の

資料中には「+」「++」のように「#」とは別の記号が数点確認されている。これらは出土位置からSY03で焼かれたものと推測される。ヘラ描き資料については第9章で更に詳しく述べることにしたい。

第154図190の甕は第142図に示すようにSY01～03の窯内のものが接合している。生焼きで橙色を呈しており、個体識別が比較的容易であったため、直接接合しないものの同一個体と思われる破片も含めて出土位置を示した。SY01は焚口部の2・3a層と6a・b層、SY02は焚口部から前庭部の9a層～10a層、SY03は燃焼部から焚口部の4層と5f層より出土したものである。いずれも焼成部以外から出土しており、SY02・03では窯体の構築材として用いられている。

出土遺物（第146～154図）

坏A（第146図1～46）平底のものは回転ヘラ切り未調整のものであり、丸みのある底はナデ調整あるいはヘラナデ調整されるものに多いような傾向がある。ナデ調整は丁寧に行われているものが少なく、多くは回転ヘラ切りの渦巻痕の凸凹を残している。また、底部の回転ヘラ切り面はほぼ8cm～10cm径と思われる。器高3.7cm前後口径14cm～15cm、器高4.0cm口径14cm～15cm、器高4.5cm～4.7cm口径15cmの3種類に大別できる。しかし、器高は底部から腰部の高さの違いで、それが杯全体の高さの違いになっている。9・13・21・25・30・40のように外傾の強い、底径の小さなものもみられる。窯の最終段階で焼かれた杯は、丸身のある底部のものが多い。坏Aに「井」印のあるものとして、43は底部外面、41は坏身にみられる、41は「井」印の変形したヘラ描きと対になっている。40は底部中央に「一」のヘラ描きがみられる。



第142図 清水山窯跡 甕の接合関係

蓋A (第148図102~104) 蓋Aはリング状のツマミの形態によって2つに分類される。

1類 リング状の大きなツマミを持つもの (102・104)

2類 ややリング状のツマミの小さいもので天井部が高いもの (103)

1類は、SW01出土の椀C (第173図100・101) の蓋と考えられる。ツマミ外周の天井部には一巡りの沈線がみられる。102には「井」印へラ描きが2ヶ所みられ、103・104には天井部内側に1ヶ所ずつみられる。

蓋B (第147・148図50~79・81~101) 蓋Bでは口縁部の折り目の稜が明瞭でないものが多く、天井部が扁平なものや高さのあるものがある。50~67・83は天井部が高いものあるいはやや高いものである。83は「井」印へラ描きである。68~79は天井部が扁平なものである。81・82・84~101は「井」印へラ描き付きである。「井」印へラ描きの位置は、天井部内面外周 (81・82・84・85・88・91・93・95・96・100・101) と天井部内面中央付近 (83・86・87・89・90・92・94・97・98・99) にある。

蓋C (第147図47~49・80) 他の窯に対して口径が小さくツマミが凸の宝珠形をしている。80の「井」印へラ描きは天井部の外面外周にみられる。

杯B (第148図105~114) SY01の杯Bはすべて杯底部を回転へラ削りしている。105~107は薄身の箱型のもので、口径は異なり入れ子可能である。小さい高台が底部外周近くに取り付けられている。107は杯底部が垂れている。108~114は杯腰部が丸みを帯び高台も小さく、底部外周に付けられている。杯底部も垂れ下がったものが多い。111~114は「井」印へラ描きである。111は外側、112,113は底部外面、114は両方に付けられている。108~114の杯Bの器高はほぼ一致している。口径には若干の差がみられる。

皿A (第149・150図115~142) 製作方法の違いで2つに分けられる。

1類 皿底部が回転へラ削り調整のもの (115~121, 128, 132~136)。

2類 皿底部がへラ削り調整のもの (122~127, 129, 137~142)。

1類は2類に比べ底部の膨らみが少ないものが多い。口径が2種類あり、約22cm前後と約20cm前後のものがみられる。器高も底面が平になってしまったものや丸みを持つものとは差がみられる。

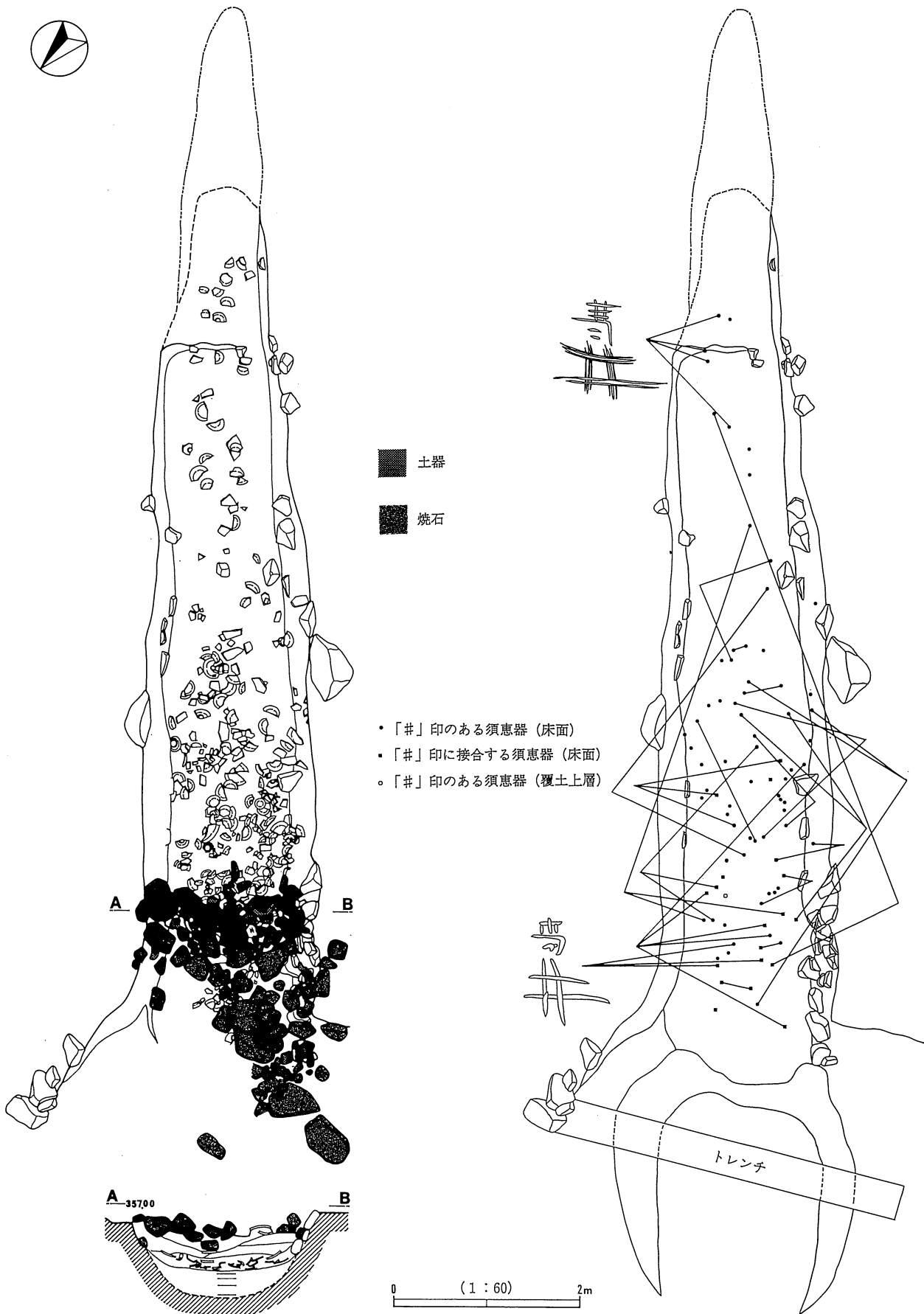
1類128は内面に「高井」の文字が施されている。文字はへラの繊維が明瞭で、枝または細い植物繊維を束ねたもので記されたものと思われる (筆順は遺物図に記入)。1類では「井」印へラ描きは底部外面中央に施されており、同一人物と思われるようなよく似た筆跡である (130~136)。直線的な筆跡が特徴である。

SY01出土の皿Aの2類はすべて一方向からのへラ削り調整による。形態は1類のうちで底部が丸みを持つものに類似する。2類はすべてにへラ描きがみられ、137~142の「井」印へラ描きは同一人によると思われ、蓋Aの102の「井」印の筆跡に類似する。1類の「井」印の文字よりも太めであり皿内面に施されている。2類にも「高井」の文字はみられ、1類の「高井」のへラ描きと違い、2類の「井」印へラ描きと類似している。「高井」の「井」は他の「井」と筆順が異なる (筆順は遺物図に記入)。

皿C (第150図143) 底部より体部にかけてやや丸みを持ちながら直に立ち上がった形態である。口唇部は面取りされており口唇部の一部に注ぎ口がつく。破片1点のみの出土であるため、形が不明であり、今後の類例を待ちたい。

盤A (第150図144~148) 口径が30cm以上ある大型の皿に高台を付ける。器高のやや低いものと高いものがみられる。皿の腰部は丸みを持ち立ち上がっている。底部は回転へラ削りによって平に調整されている。高台は皿の大きさの割に断面の小さな高台が取り付けられている。144は「井」印が底部外面中央部付近に施されている。皿A 1類の「井」印の直線的筆跡に類似すると思われる。

高杯A (第151図149~171) 皿に高台が付いた器形である。171のみ完形品であるが他も同一の形態と思われる。体部は、皿Aより立ち上がり量が少なく滑らかに立ち上がっているため、口縁部破片でも皿Aと高杯の区別は比較的容易である。170・171の脚接合部では、杯部の底外面は回転へラ削り後、脚接合部の

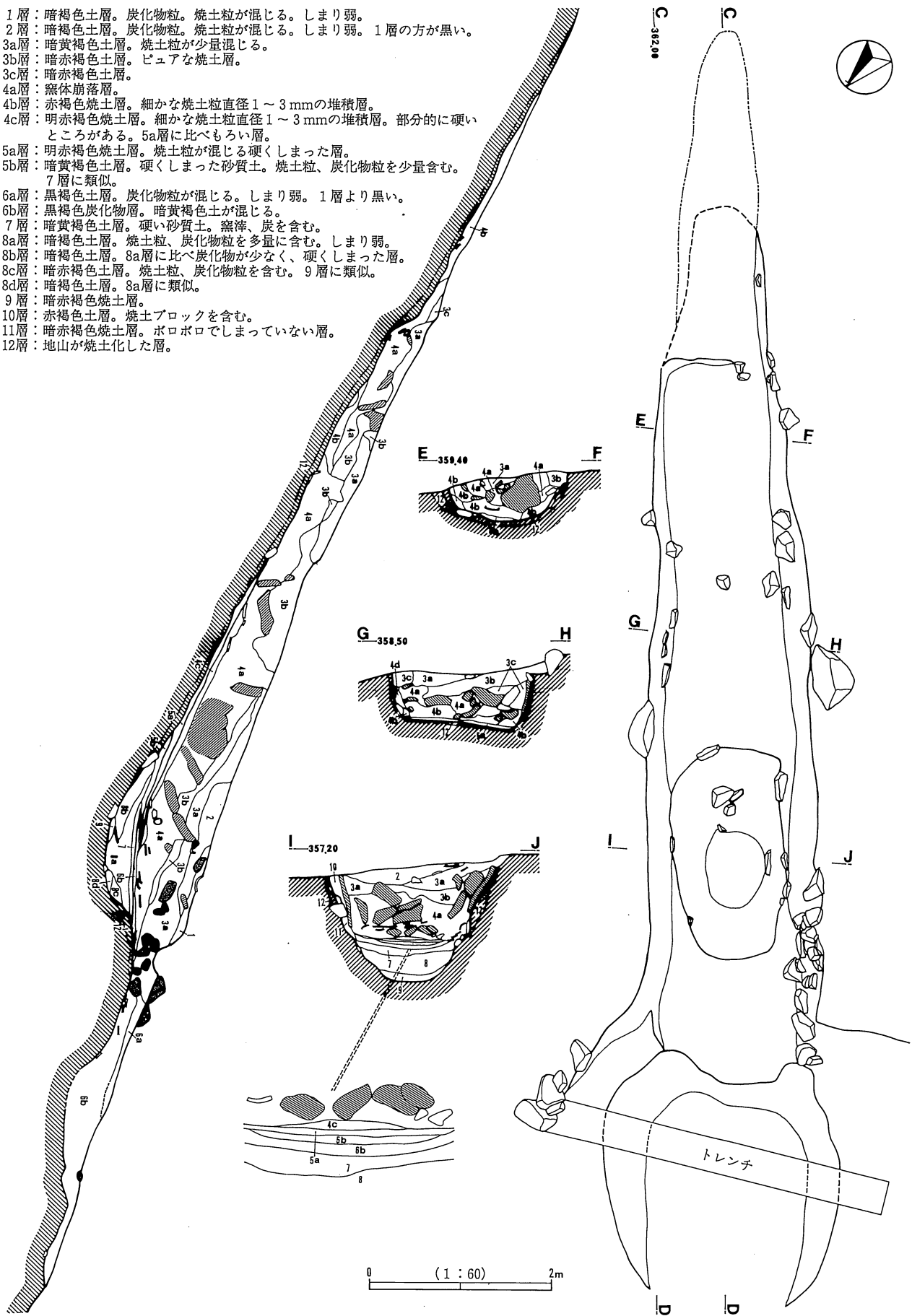


第143図 清水山窯跡 S Y 01遺物出土状況(I)

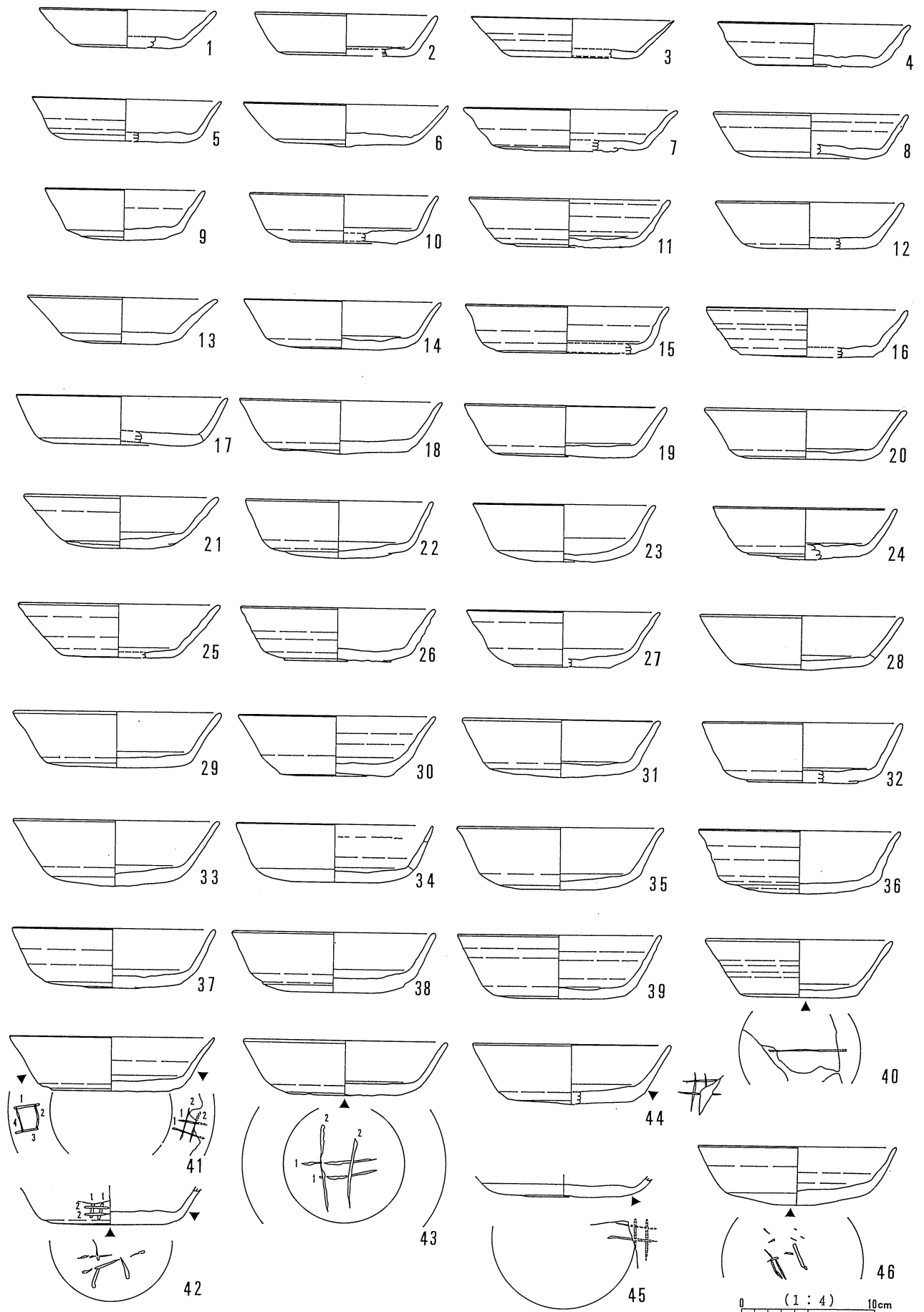


第144図 清水山窯跡 S Y01遺物出土状況(2)

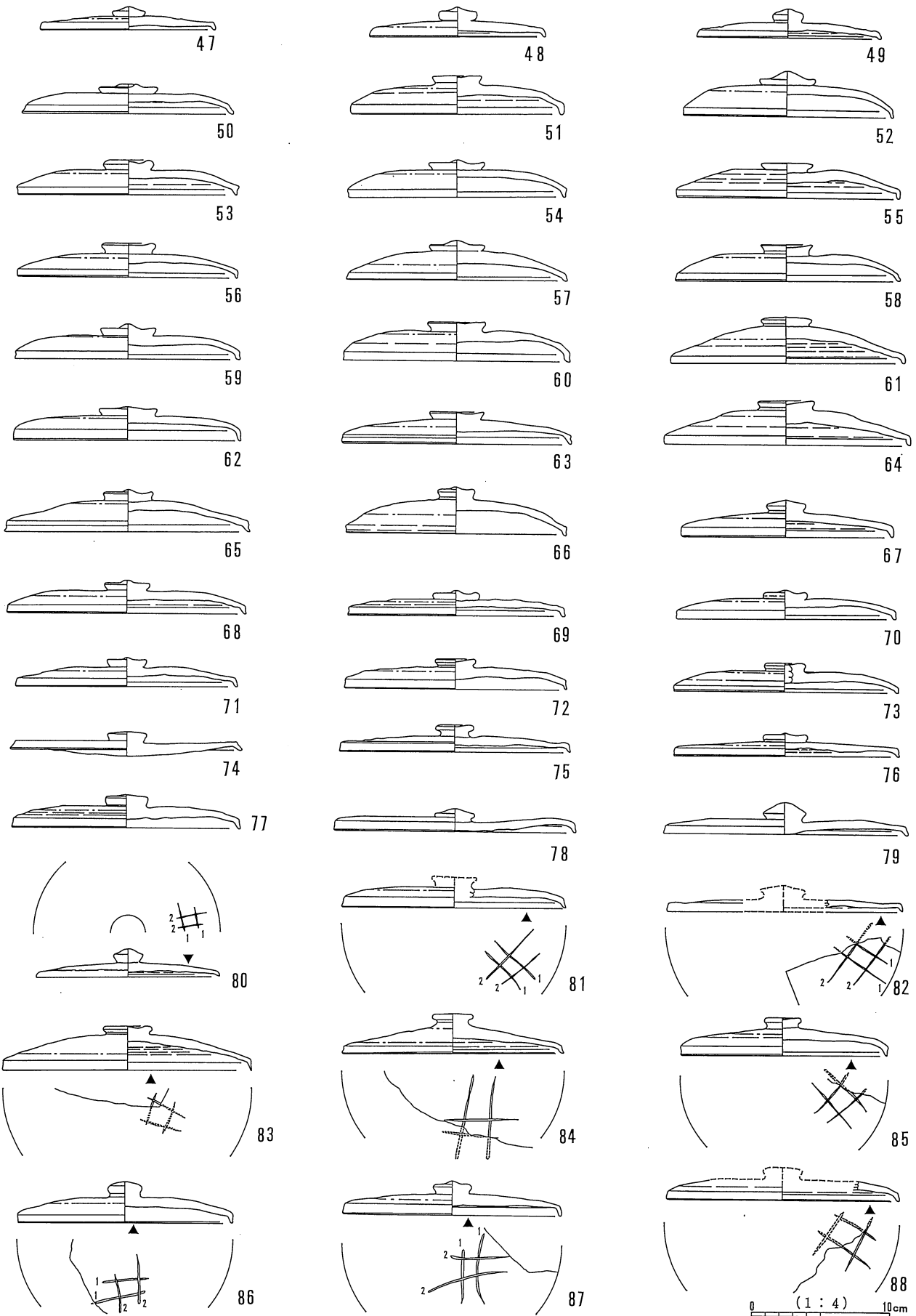
- 1層：暗褐色土層。炭化物粒。焼土粒が混じる。しまり弱。
- 2層：暗褐色土層。炭化物粒。焼土粒が混じる。しまり弱。1層の方が黒い。
- 3a層：暗黄褐色土層。焼土粒が少量混じる。
- 3b層：暗赤褐色土層。ピュアな焼土層。
- 3c層：暗赤褐色土層。
- 4a層：窯体崩落層。
- 4b層：赤褐色焼土層。細かな焼土粒直径1～3mmの堆積層。
- 4c層：明赤褐色焼土層。細かな焼土粒直径1～3mmの堆積層。部分的に硬いところがある。5a層に比べもろい層。
- 5a層：明赤褐色焼土層。焼土粒が混じる硬くしまった層。
- 5b層：暗黄褐色土層。硬くしまった砂質土。焼土粒、炭化物粒を少量含む。7層に類似。
- 6a層：黒褐色土層。炭化物粒が混じる。しまり弱。1層より黒い。
- 6b層：黒褐色炭化物層。暗黄褐色土が混じる。
- 7層：暗黄褐色土層。硬い砂質土。窯滓、炭を含む。
- 8a層：暗褐色土層。焼土粒、炭化物粒を多量に含む。しまり弱。
- 8b層：暗褐色土層。8a層に比べ炭化物が少なく、硬くしまった層。
- 8c層：暗赤褐色土層。焼土粒、炭化物粒を含む。9層に類似。
- 8d層：暗褐色土層。8a層に類似。
- 9層：暗赤褐色焼土層。
- 10層：赤褐色土層。焼土ブロックを含む。
- 11層：暗赤褐色焼土層。ポロポロでしまっていない層。
- 12層：地山が焼土化した層。



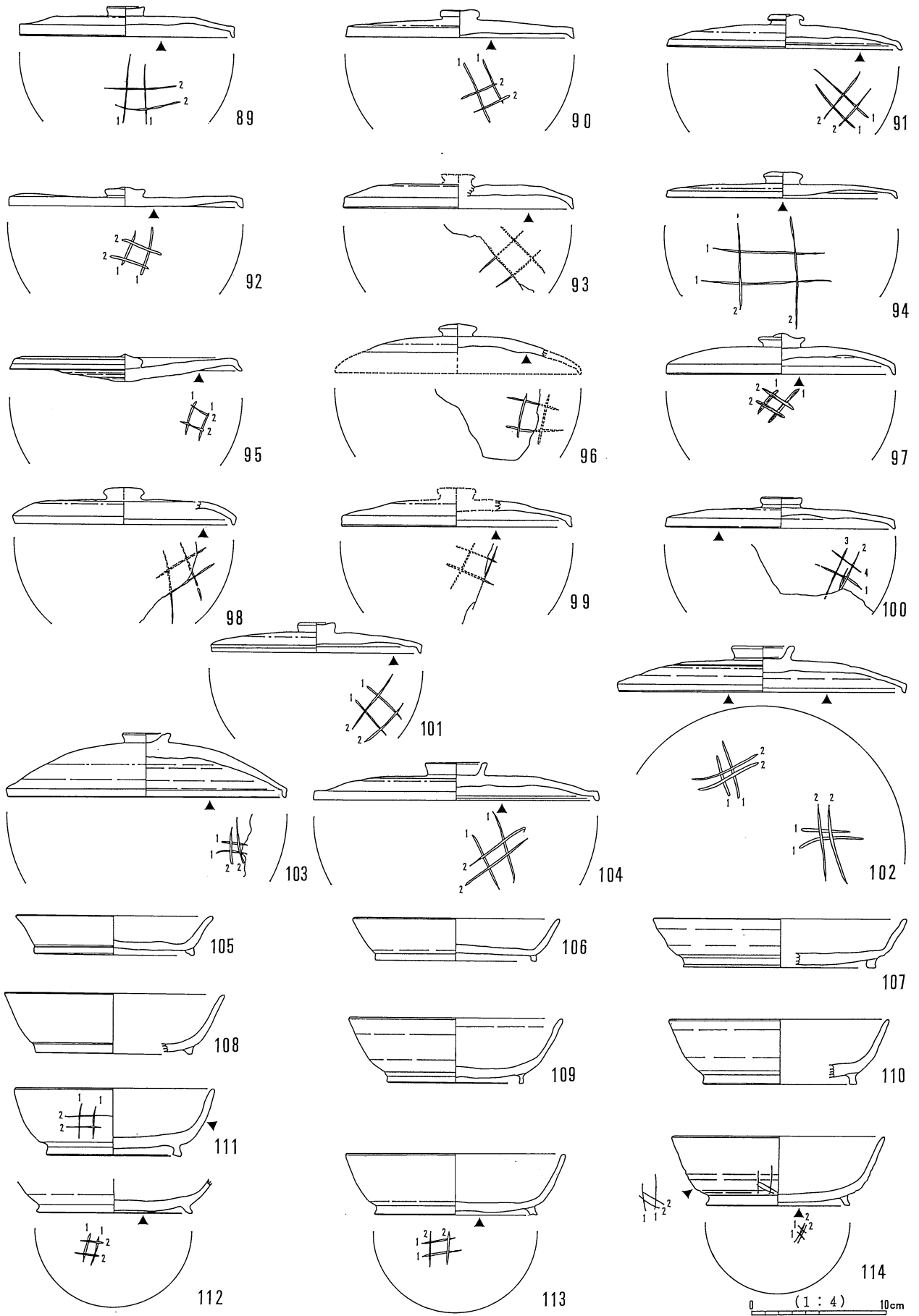
第145図 清水山窯跡 SY01



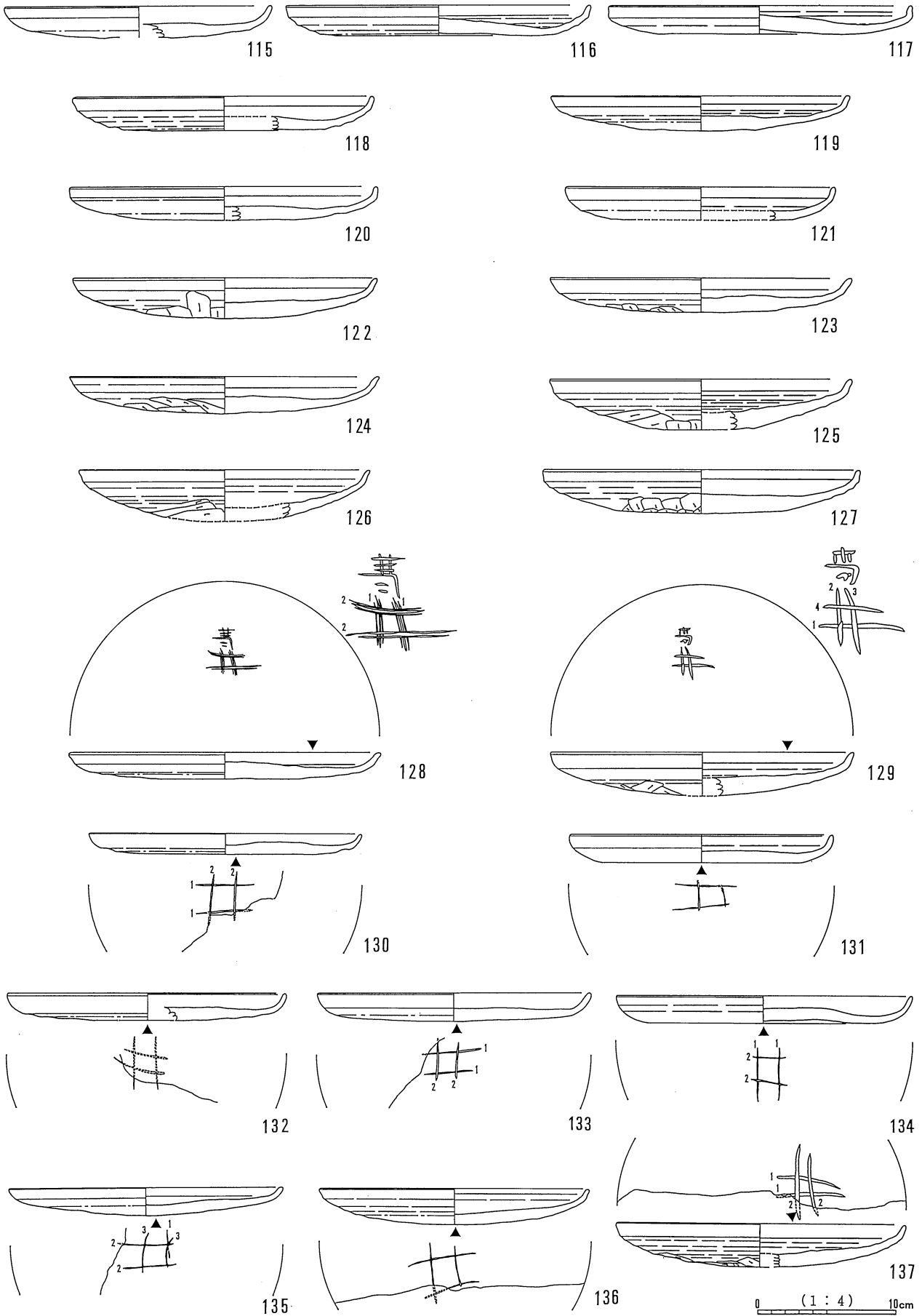
第146図 清水山窯跡 SY01出土遺物(1)



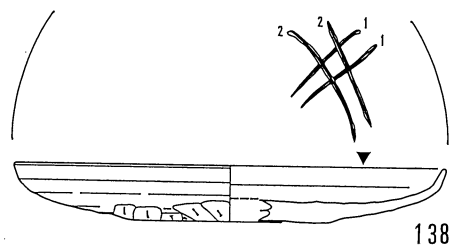
第147図 清水山窯跡 SY01出土遺物(2)



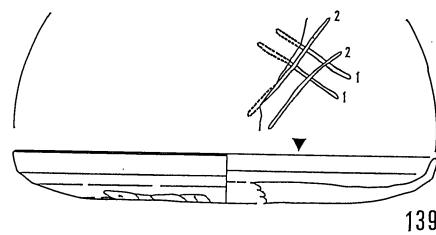
第148図 清水山窯跡 SY01出土遺物(3)



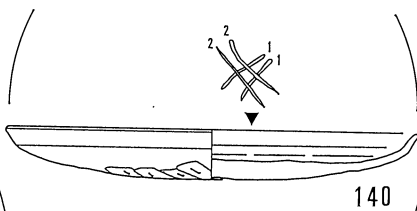
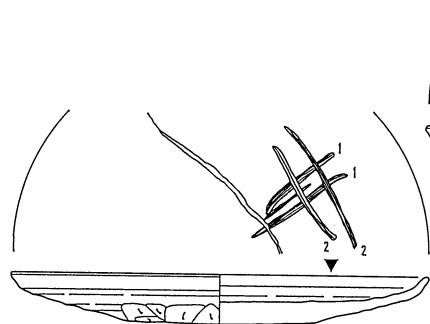
第149図 清水山窯跡 S Y01出土遺物(4)



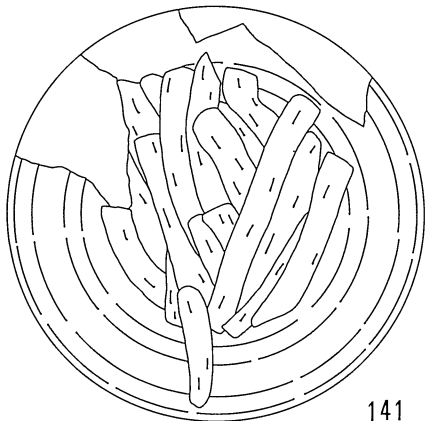
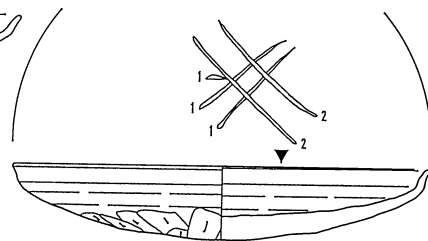
138



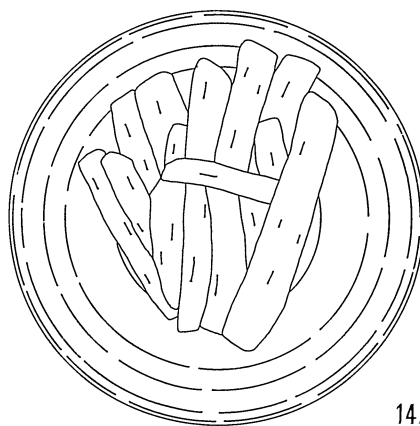
139



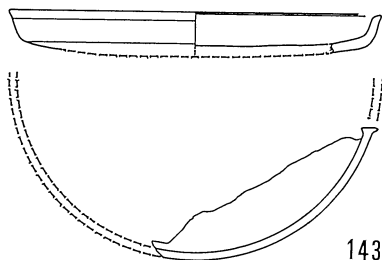
140



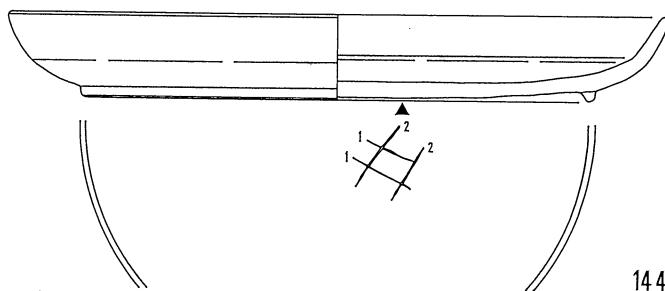
141



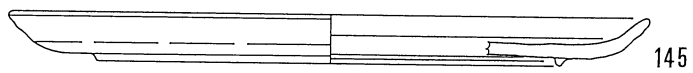
142



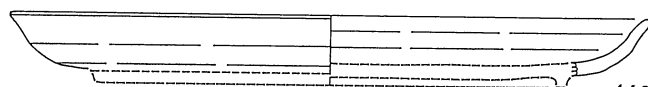
143



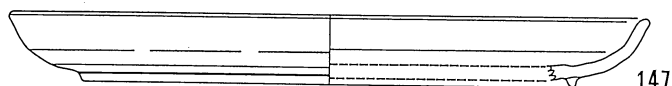
144



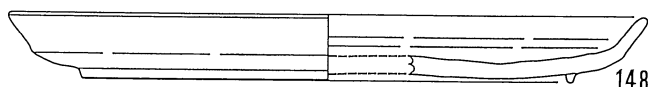
145



146



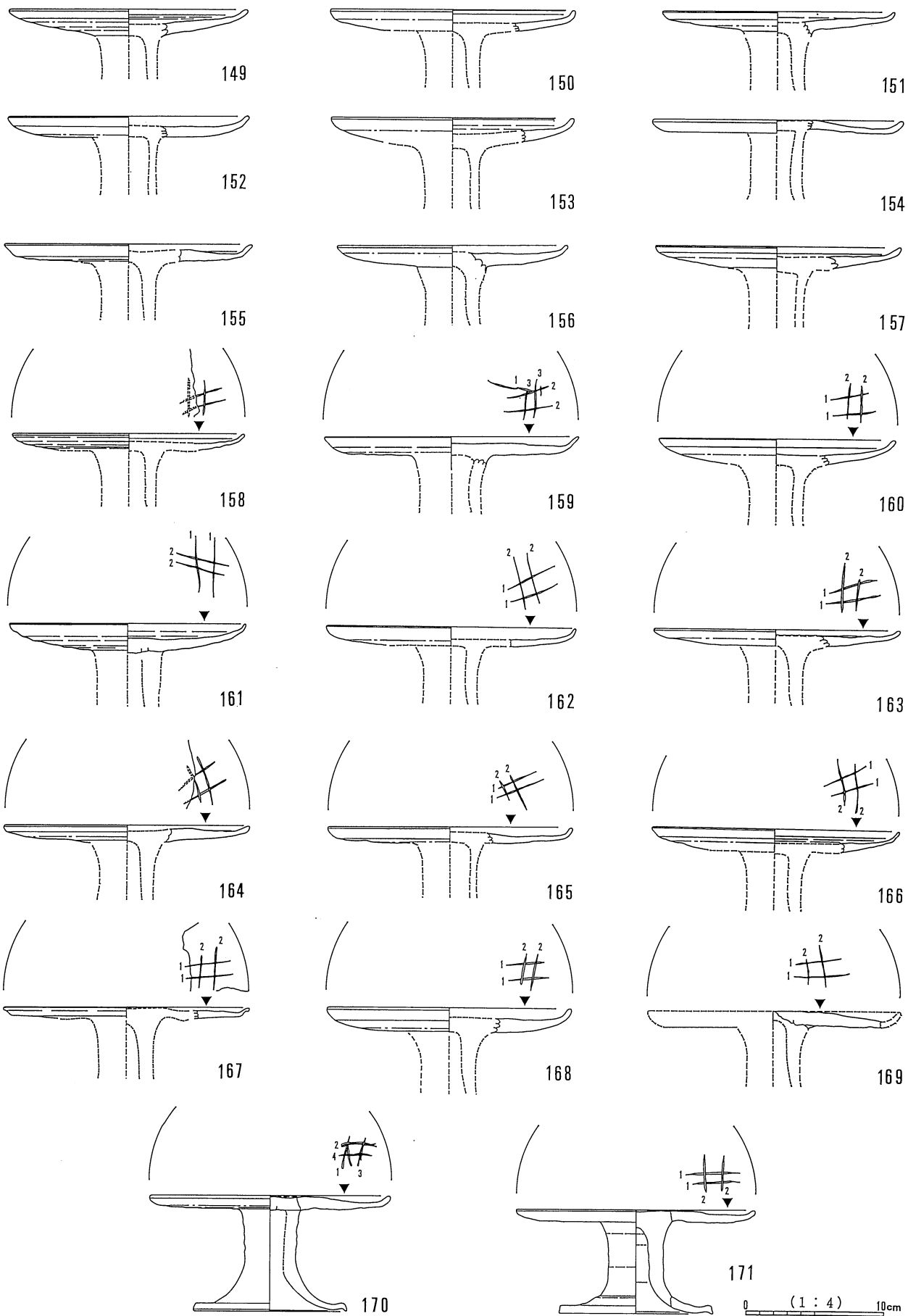
147



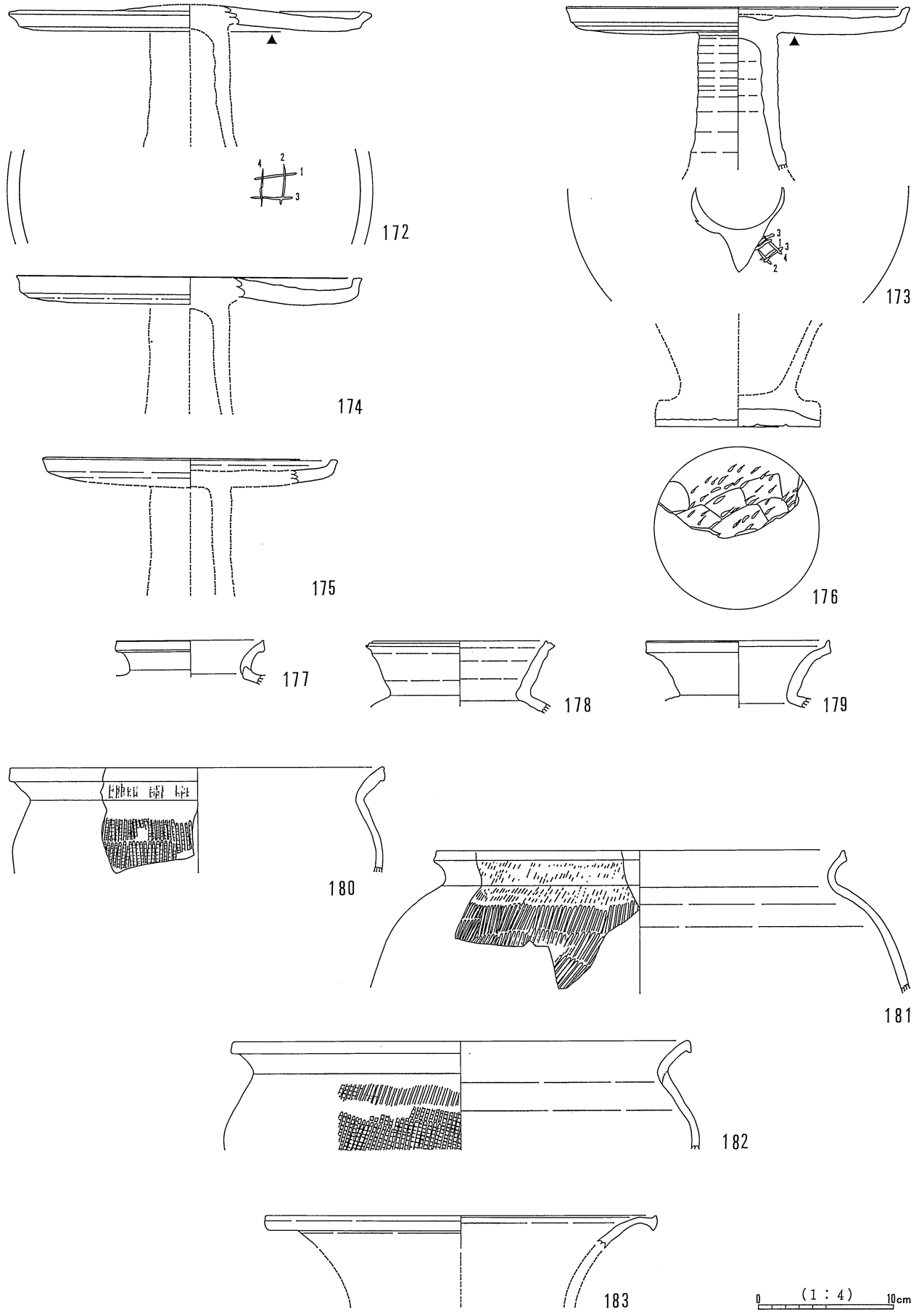
148

(1:4) 10cm

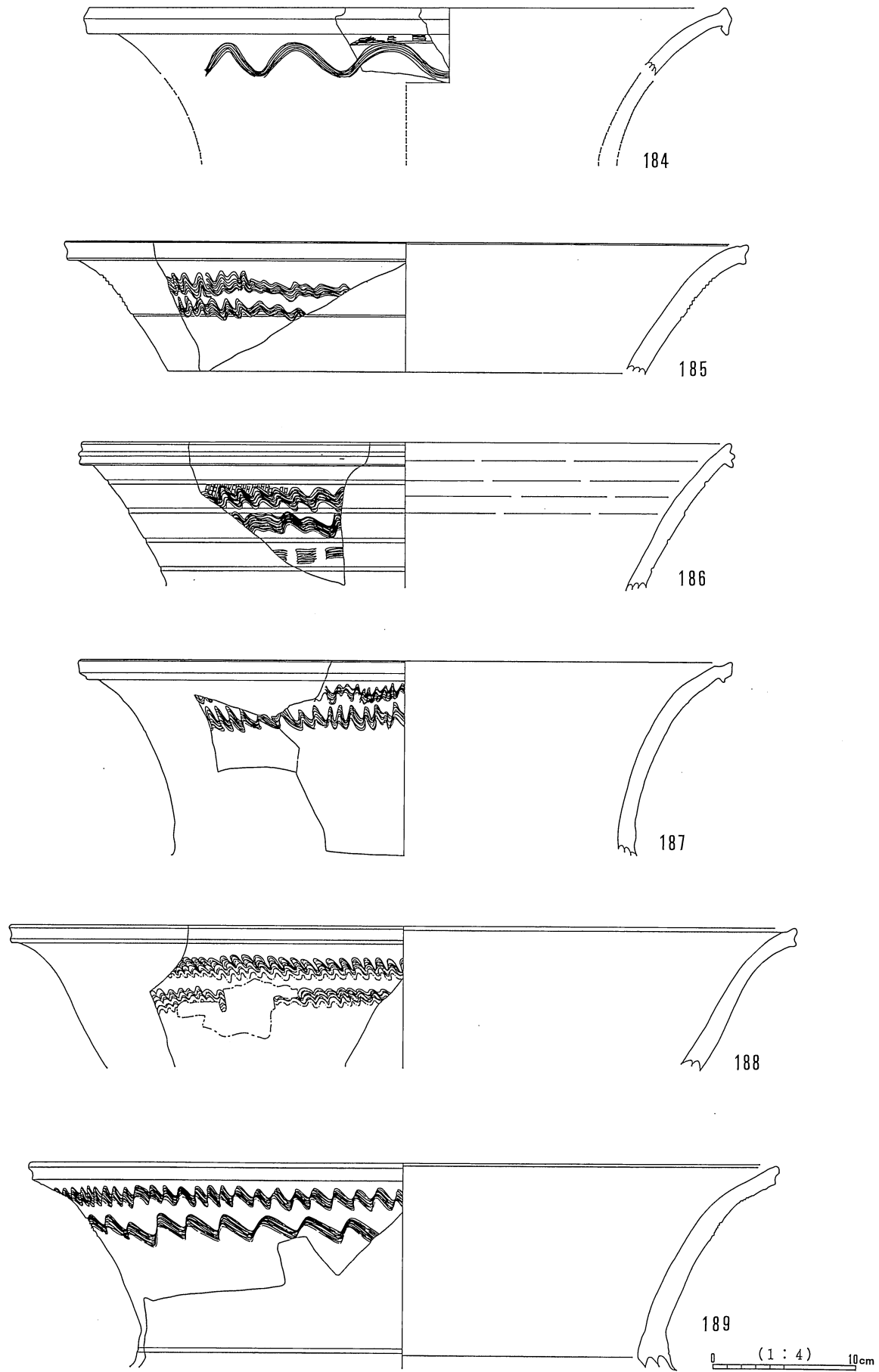
第150図 清水山窯跡 SY01出土遺物(5)



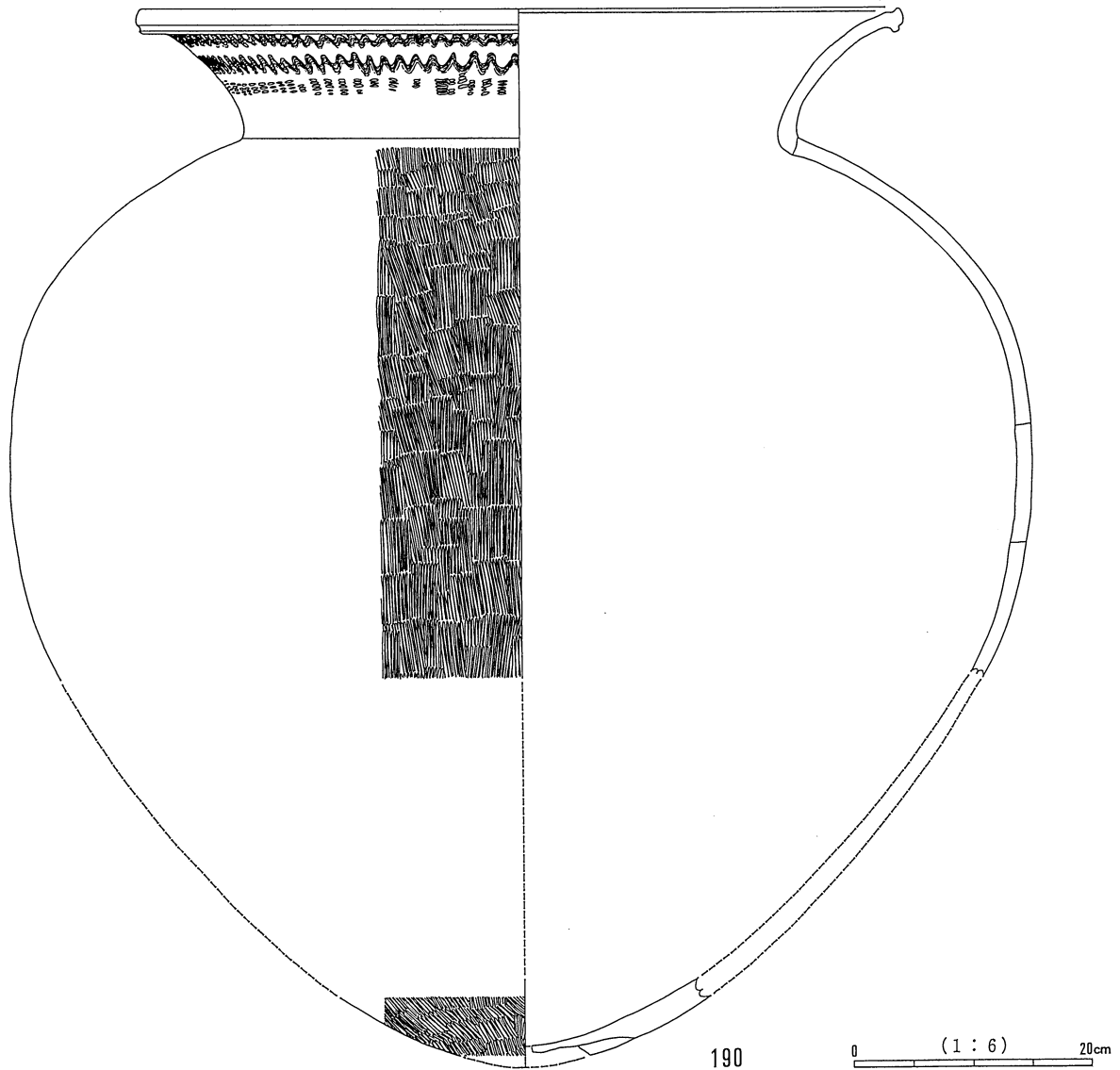
第151図 清水山窯跡 SY01出土遺物(6)



第152図 清水山窯跡 SY01出土遺物(7)



第153図 清水山窯跡 S Y01出土遺物(8)



第154図 清水山窯跡 SY01出土遺物(9)

内側あるいは外側に粘土を僅かに足しながら接合している。149～157は「井」印へラ描きが見られないが、破片が小さいために「井」印部分が失われた可能性があり、この器種の多くには「井」印のへラ描きが施されていたものと推測することができる。「井」印の描き順を最終描き順で揃えると3通りの描き方がされている。「井」の傾きが左下がりのもので右下がりのものに分けることができる。左下がりのもは158～164・167・168、右下がりのもは165・169である。170は1回で「井」の字の文字形にならなかったため何度かなぞってある。171はどちらともつかない字形である。3種類の字の形態はあるものの、高杯Aに施されたへラ描きの筆跡は、細い工具で描かれ平行線「井」が長く、非常に類似しているように思われる。

明瞭な立ち上がりのない口縁部を持つ扁平な形態をもつ高杯Aは、老洞古窯址1号窯の高杯（岐阜市教育委員会1981）に類似する。

高杯B（第152図172～175） 高杯Bは口径が大きく、杯底部が平らで口縁部が垂直に短く立ち上がり、口唇部が水平に面取りされた高杯である。脚の下部は欠損しており形態不明である。いわゆる盤状の高杯

である。脚部と杯部の接合部の製作方法は、杯底部を回転ヘラ削りした後、中央部に巻き上げ技法で脚部を取り付ける。その後脚部をロクロで成形している。「井」印ヘラ描きは、杯部内面に施されているもの173と、杯部底面に施されているもの172がある。173は2回なぞってある。172は皿A 1類のヘラ描きに筆跡が類似する。

横瓶（第152図177～179） 横瓶の口頸部のみが出土している。179の口縁部9は受け口状である。178の口唇部には溝がみられる。

甕D（第152図180～182） いわゆる広口甕である。口頸部は短く体部径と口径がほぼ同じ、口頸基部がつまる形態で体部にタタキ目が残る。

甕A（第152～154図183～190） 甕A頸部が無文のもの（1類）と有文のもの（2類）の2種類に分類される。

1類（183）は器壁が薄手で、口径が小さく、全体の形態は不明。口縁部は受け口状である。2類（184～190）は頸部に櫛描波状文や沈線文を施す。190以外は口頸部のみの資料である。口縁部の形態はそれぞれ異なる。184は他のものより櫛描波状文が大きく波打っており、その波状文の上部に櫛描押し引き刺突文がみられる。器壁もやや薄い。185と186は櫛描波状文と沈線が入り、186は下段に櫛描押し引き文が巡っている。190は口径が63.8cmの大甕である。頸部は2条の櫛描波状文と1条の櫛描押し引き文、体部は平行タタキ目である。形態は体部が球形に膨らみ底部が丸底である。頸部と体部の接合部は「く」の字状になり口縁に向かってラッパ状に広がっている。

SY01で最終的に焼かれていた器種は、杯A・杯B・蓋・皿・高杯・盤である。SY01およびSW01の杯A、杯Bの形態、高杯や皿の形態、盤A・蓋A・鉢B、横瓶の存在など美濃須衛古窯址群第IV期第1小期（8世紀前半期）（斎藤 1995b）に相当する遺物をあげることができる。皿や盤や高杯などは美濃須衛窯の影響を受けたものと思われる。

SY02（2号窯）（第155～162図、PL30：38・39）

位置 北斜面中腹に位置し、主軸方向はS-41.5°-Eで、等高線とは直行せず約20°振れて斜めに構築されている。1号・3号窯よりも斜面上方、標高差にして1.5m高いところに築かれている。

土層 1・2層群は窯体崩落後に堆積した層。3層群は窯体崩落層。4・5層群は純粋な炭化物層及び灰原層である。最終焼成時の窯底は3層群と5層群を取り去った時に露出する面である。窯底下には5b層の他に7層・9b層・10b層の3枚の間層を挟んだ炭化物層が確認され、最低4回の焼成が行われたことが観察される。燃焼部の9a層上面と8層上面、及び9c層に接する10a層上面が硬い面をなしている。10e層・10f層は前庭部に並べた甕の下の溝の覆土、11層は地山が焼土化したものである。なお、土層断面図中に右下がりの斜線で示したものはスサ入り粘土の窯体である。

層名は発掘時に付したものと変更して示しており、遺物の出土層位は1・2層群をA層、3～5層群をB層、焼成部の窯底を床面、6～10層群をC層とし、遺物観察表に示した。

窯体の構造 半地下式無階有段の登り窯。煙道と窯尻部分は残存せず、斜面上方部の床面は消失して地山が焼けた焼土が観察される。この焼土部分と前庭部を含めて残存する窯の全長は約10.80mである。焼成部の最大幅は1.36mを測る。完掘状態では燃焼部から焼成部にかけて段を有するが、上段は舟底状ピットに相当する施設、下段は中央部に幅20cm、深さ5cmの溝の上に大甕の破片をかぶせた施設が見られ、前庭部へと段差なく続いている。溝の上端部の甕は溝部分だけではなく床面全体を覆うように敷き詰められており、溝の底面はわずかに斜面下方に傾いている（第156図）。この甕の上には間層を挟んだ2枚の炭化物層が乗っており、上部の炭化物層（9b層）が堆積した焼成時には機能していなかった施設と思われる。

この前庭部に続く下段面は古い段階の燃焼部であったと推定される。

焚口部分の窯壁は両側に礫を積んで構築しており、焼成部と比べ窯幅が狭くなっている。第155図右図は遺構中央部の1・2層に带状に見られる礫と、壁面に積み上げられた礫を示したものである。1・2層出土の礫は拳大で焼けていないものが多く、3層以下で出土する人頭大の大きな礫は焼けているものが多い。後者は焚口付近の窯壁の構築材が崩落したものとわれ、原位置をとどめるものをスクリーントーンで示

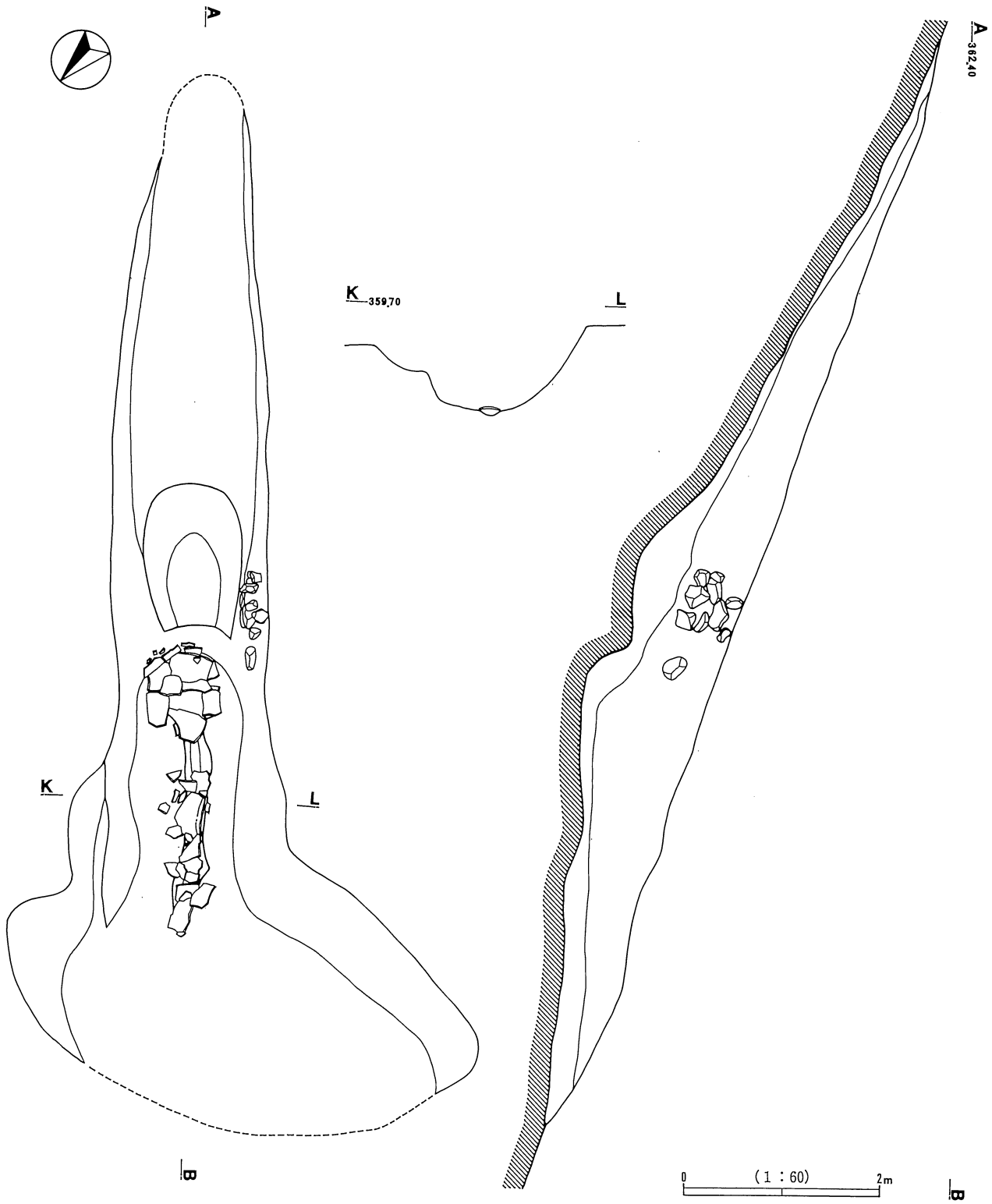


第155図 清水山窯跡 SY02遺物出土状況(1)

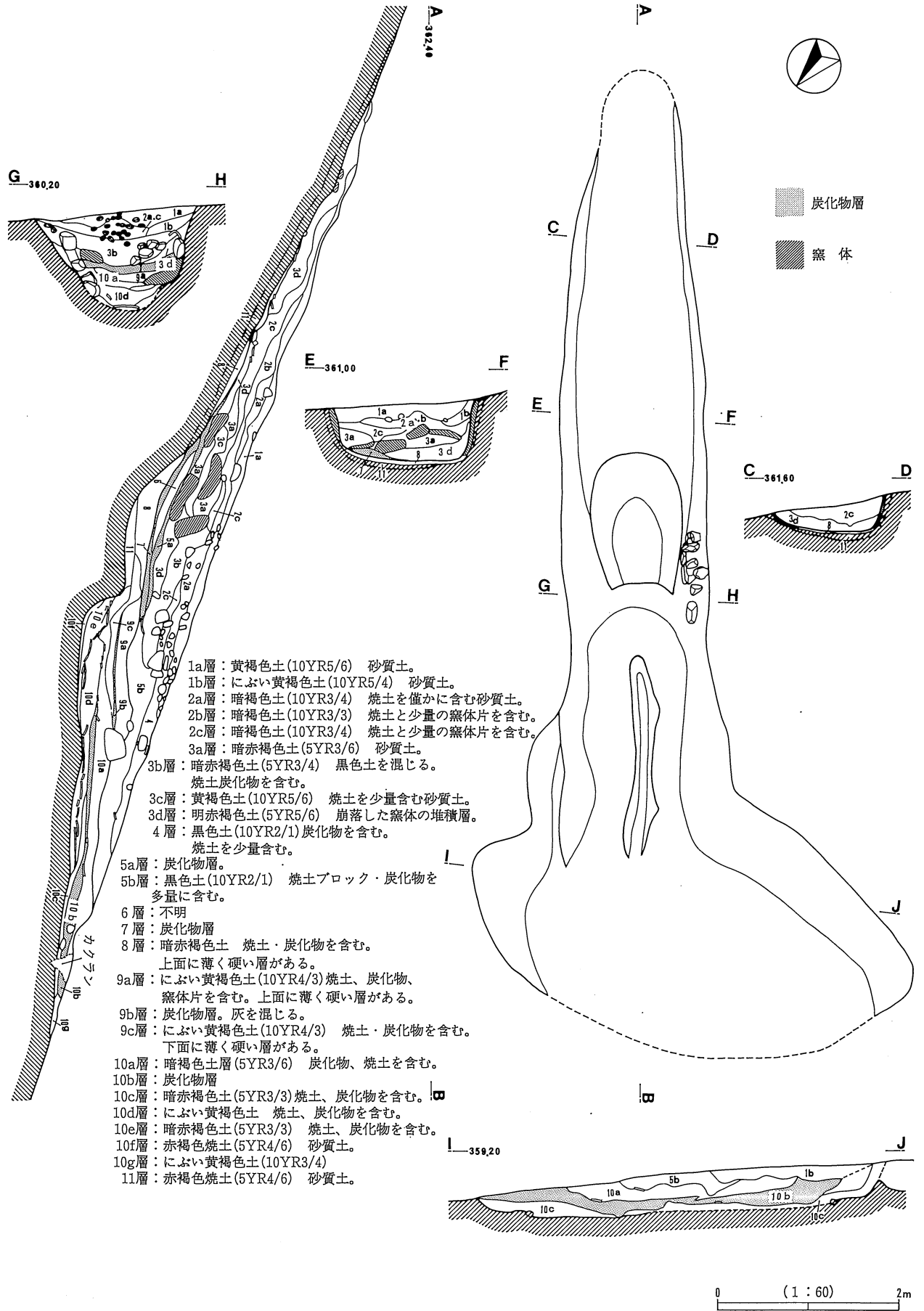
した。なお、左壁の礫は整理作業段階で図面上で復元したもので他の平面図には記載していない。

また、焼台と思われる須恵器片を付着したスサ入り粘土塊が18点出土したが、これらは窯内一括で取り上げたために出土位置は示すことができない。杯片を用いたもの1点の他は、すべて甕片を用いた焼台である。

遺物出土状況 出土した遺物を層位により以下の4群に分けることができる。各遺物の出土層位は遺物



第156図 清水山窯跡 S Y 02遺物出土状況(2)



- 1a層：黄褐色土(10YR5/6) 砂質土。
- 1b層：にぶい黄褐色土(10YR5/4) 砂質土。
- 2a層：暗褐色土(10YR3/4) 焼土を僅かに含む砂質土。
- 2b層：暗褐色土(10YR3/3) 焼土と少量の窯体片を含む。
- 2c層：暗褐色土(10YR3/4) 焼土と少量の窯体片を含む。
- 3a層：暗赤褐色土(5YR3/6) 砂質土。
- 3b層：暗赤褐色土(5YR3/4) 黒色土を混じる。
焼土炭化物を含む。
- 3c層：黄褐色土(10YR5/6) 焼土を少量含む砂質土。
- 3d層：明赤褐色土(5YR5/6) 崩落した窯体の堆積層。
- 4層：黒色土(10YR2/1)炭化物を含む。
焼土を少量含む。
- 5a層：炭化物層。
- 5b層：黒色土(10YR2/1) 焼土ブロック・炭化物を
多量に含む。
- 6層：不明
- 7層：炭化物層
- 8層：暗赤褐色土 焼土・炭化物を含む。
上面に薄く硬い層がある。
- 9a層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)焼土、炭化物、
窯体片を含む。上面に薄く硬い層がある。
- 9b層：炭化物層。灰を混じる。
- 9c層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) 焼土・炭化物を含む。
下面に薄く硬い層がある。
- 10a層：暗褐色土層(5YR3/6) 炭化物、焼土を含む。
- 10b層：炭化物層
- 10c層：暗赤褐色土(5YR3/3)焼土、炭化物を含む。
- 10d層：にぶい黄褐色土 焼土、炭化物を含む。
- 10e層：暗赤褐色土(5YR3/3) 焼土、炭化物を含む。
- 10f層：赤褐色焼土(5YR4/6) 砂質土。
- 10g層：にぶい黄褐色土(10YR3/4)
- 11層：赤褐色焼土(5YR4/6) 砂質土。

第157図 清水山窯跡 SY02

観察表に示した。

①群：焼成部床面より出土した遺物（床面）

②群：1・2層の礫に伴って出土したもので、埋没過程で混入したもので、窯壁の構築材として用いられたもの（A層）。

③群：主に4・5層群より出土した遺物（B層）。

④群：6～10層群より出土した遺物（C層）。

これらの時間的前後関係は②群・④群→①群・③群となる。なお、②群は遺構内に残された経緯が不明なものもあり、再検討が必要である。

第155図左図にはB層群下面（床面）と前庭部を除くC層群出土の遺物を示し、断面図には全出土遺物の垂直分布を示した。焼成部窯底では甕の破片が多く、他に杯A・杯B・杯蓋・壺が出土した。また、古い段階の燃焼部と思われる部分のC層群中には特に甕片がまとまって多量に出土した。なお、前庭部に燃焼部から続く灰原層（B群層）が堆積しており、多量の須恵器片が出土した。

出土遺物（第158図～第162図）

杯A（第158図1～28） 杯底部の切り離し方法は回転へら切りであり、未調整のものと手持ちへら削りを外側にしたものとナデ調整のものがある。底部の平らなもの（1～11、27）がSY01より多くみられる。そのほか腰部がやや丸みを呈するもの（7～26）、底部が丸いもの（28）がみられる。器高の違いがみられるが口径差はあまりない。SY01より杯身の浅いもの（1～5）が少なく、底部が若干小さくなったもの（6～28）が多くみられる。へら描きは27と28にみられ、SY01の「井」印とは異なり「十」「一」のへら描きである。図示したものはすべて最終窯焼成のものでなく、窯体部や床下の窯構築材の中からの出土である。

蓋B（第158図29～48） SY02では蓋はB類のみである（29～46）。蓋のツマミの中央部が突出するもの（39～48）と中央部が凹むもの（29～38）がみられる。同形態で天井部の高さに違いがあり、天井部のやや高いもの（35～46）、天井部の扁平のもの（29～34、47、48）がみられる。

杯B（第159図49～70） SY02の杯Bの法量は2種類ある。浅身の49～57は器高が同じである。高台径は大きく外向きに広がり、杯底部は垂れ下がる。58は他のものより口径がやや小さく、腰部が丸みを帯びる。59は器高も口径も大きく、47の杯蓋とセットと思われる。へら描き「井」印は60～70の杯底部外面に描かれている。

椀B（第159図71） 71は小型の椀である。酸化焰焼成状態である。欠損しており口縁部形態は不明である。椀身の底部外面には「井」印のへら描きがみられる。

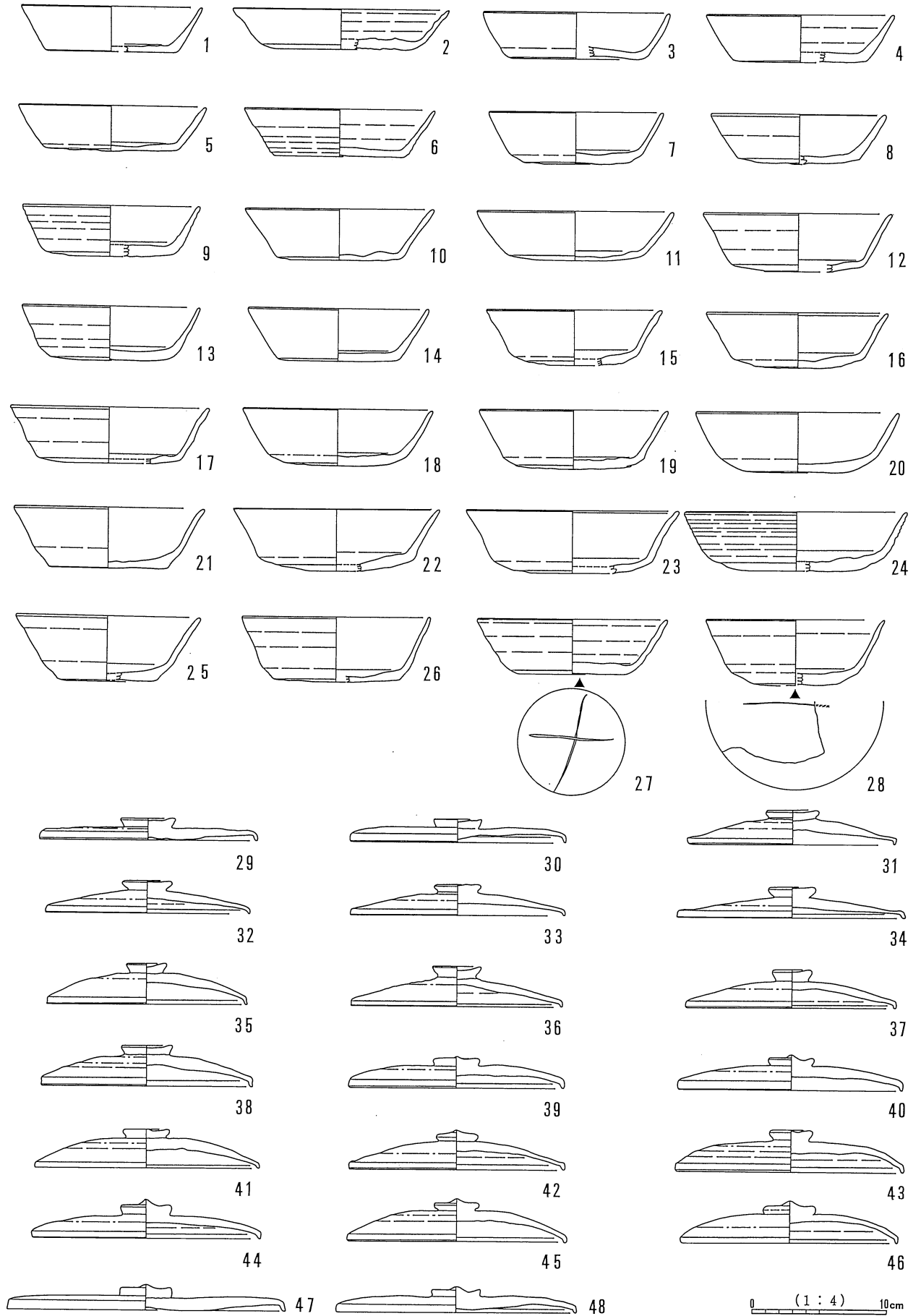
椀C（第159図72・73） 72、73の法量は杯B第159図59に類似するが、59より器壁が薄く腰部が丸みを帯び、ロクロ痕を残す。また73は高台を外周に向かって丸く折り曲げている。金属器模倣品と思われる。底部外面に「井」印へら描きがみられる。

盤B（第159図74） 口縁部が直立する皿に高台をつけたもの。猿投窯や美濃須恵窯（斎藤 1995a・b）にみられる器形である。丁寧に整形されている。

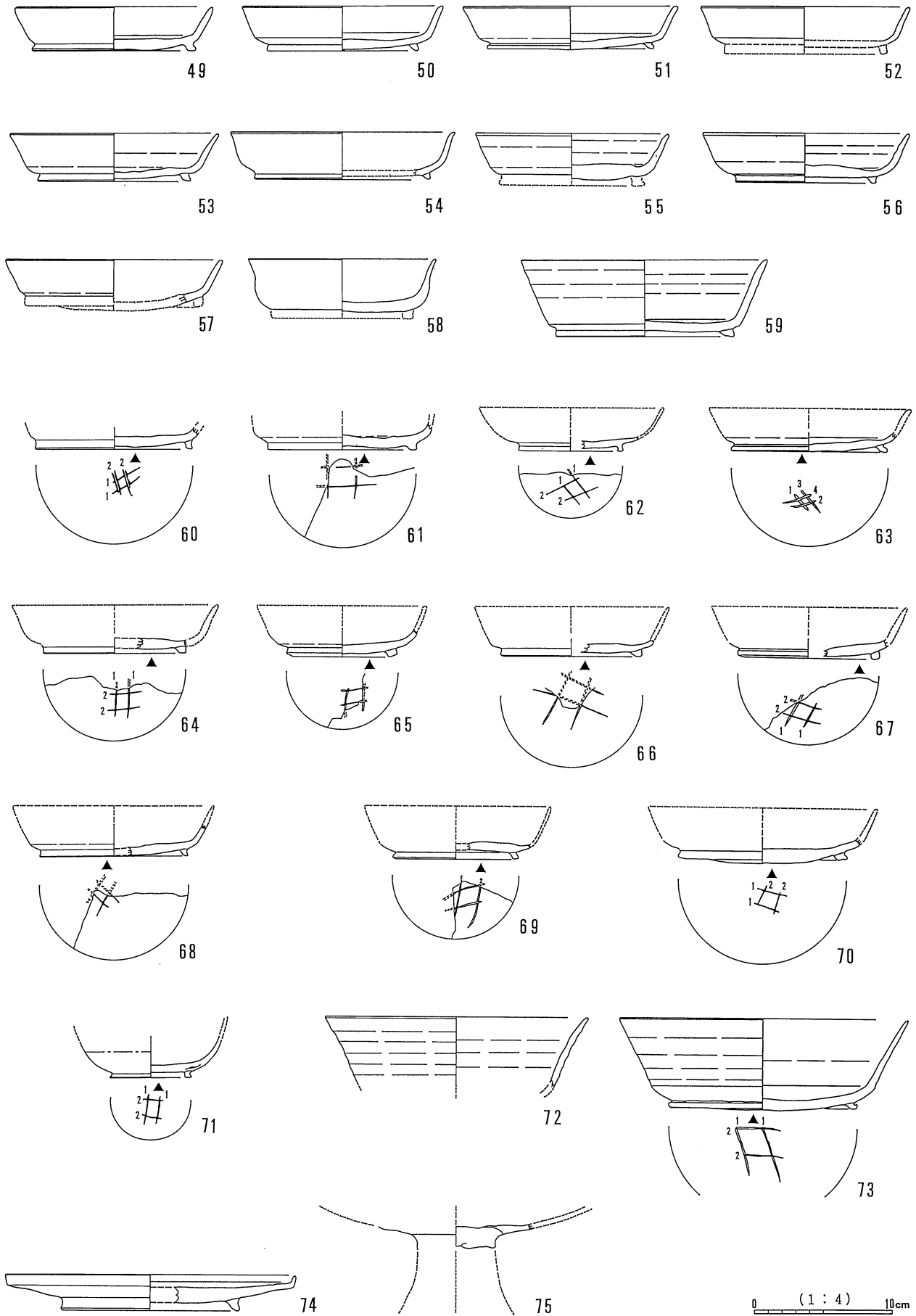
高杯（第159図75） 高杯の脚接合部である。

横瓶（第160図76～79） 76・79は口頸部。78は体部上半部で中央部に割り付け痕と思われる沈線がみられる。79は被蓋部にあたる部分である。被蓋部内面に放射状のへら削りがみられる。

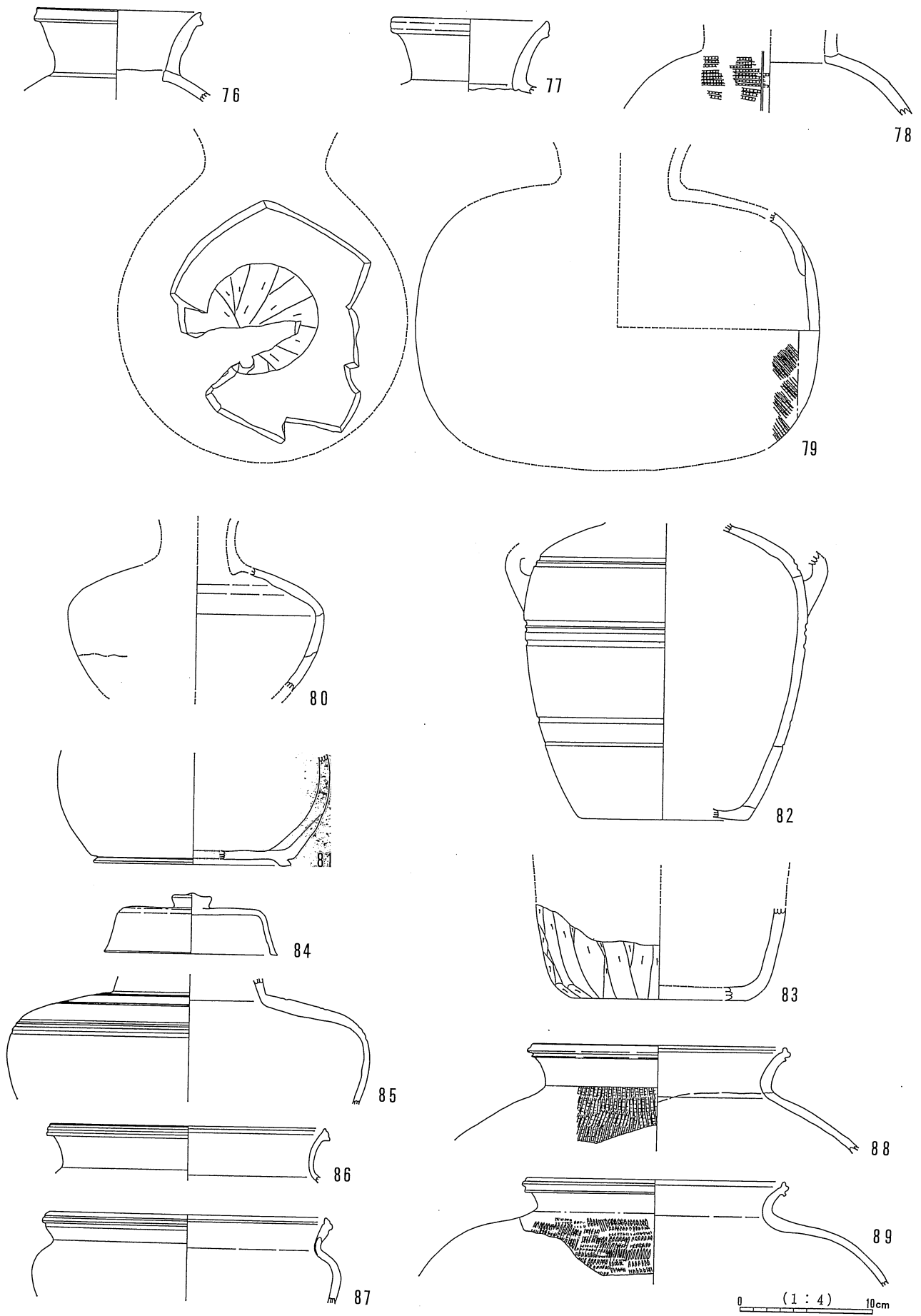
長頸壺A（第160図80・81） 80は口頸部が欠損しているが、長頸壺A（口頸部が長く口縁部がラッパ状に開く）と思われる。肩部は鈍く屈曲する。81は体部下半のみであるが、やや丸みを帯び高台を持つ。SW01第173図116の長頸壺Aと同形態と思われる。



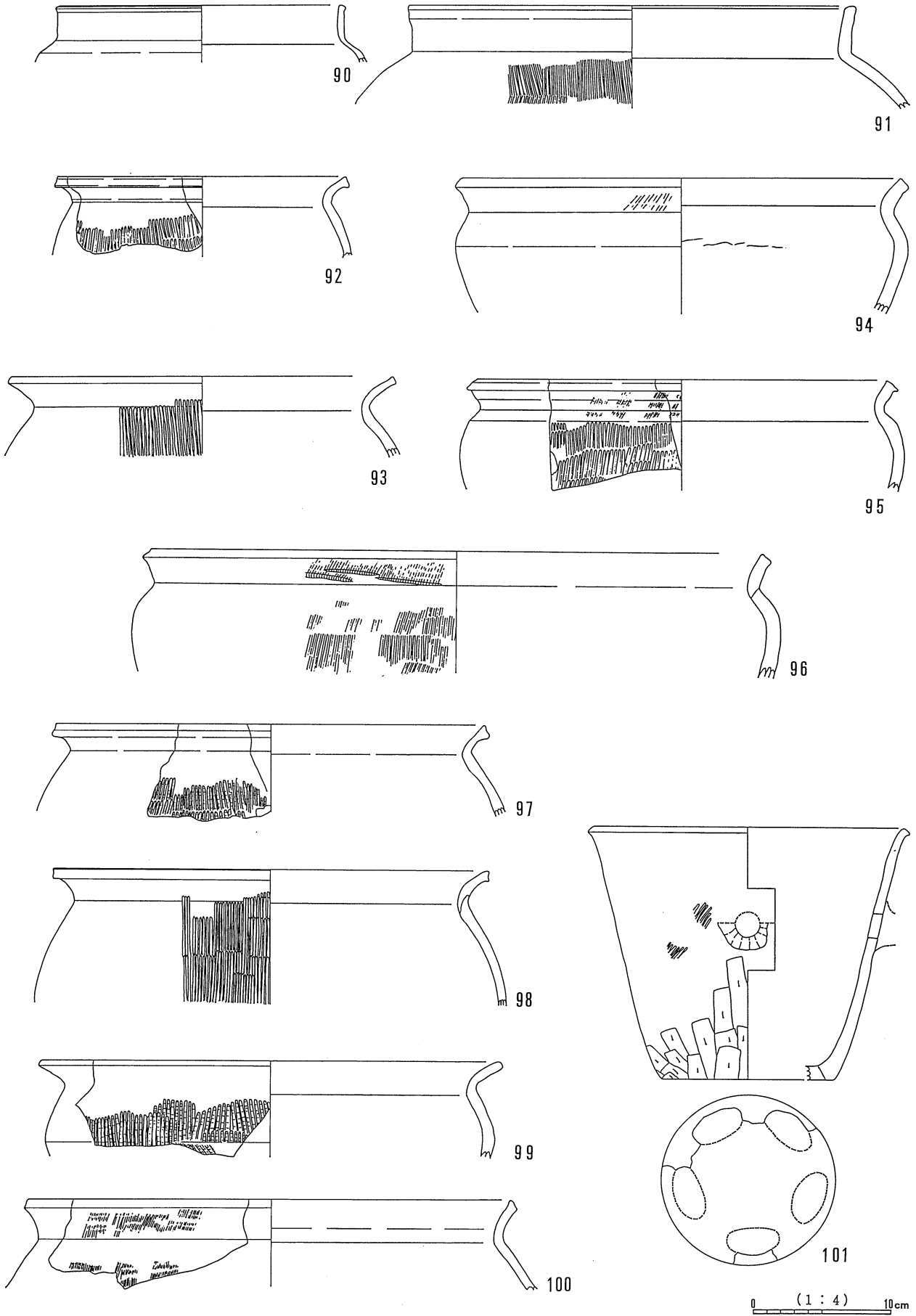
第158図 清水山窯跡 S Y 02出土遺物(1)



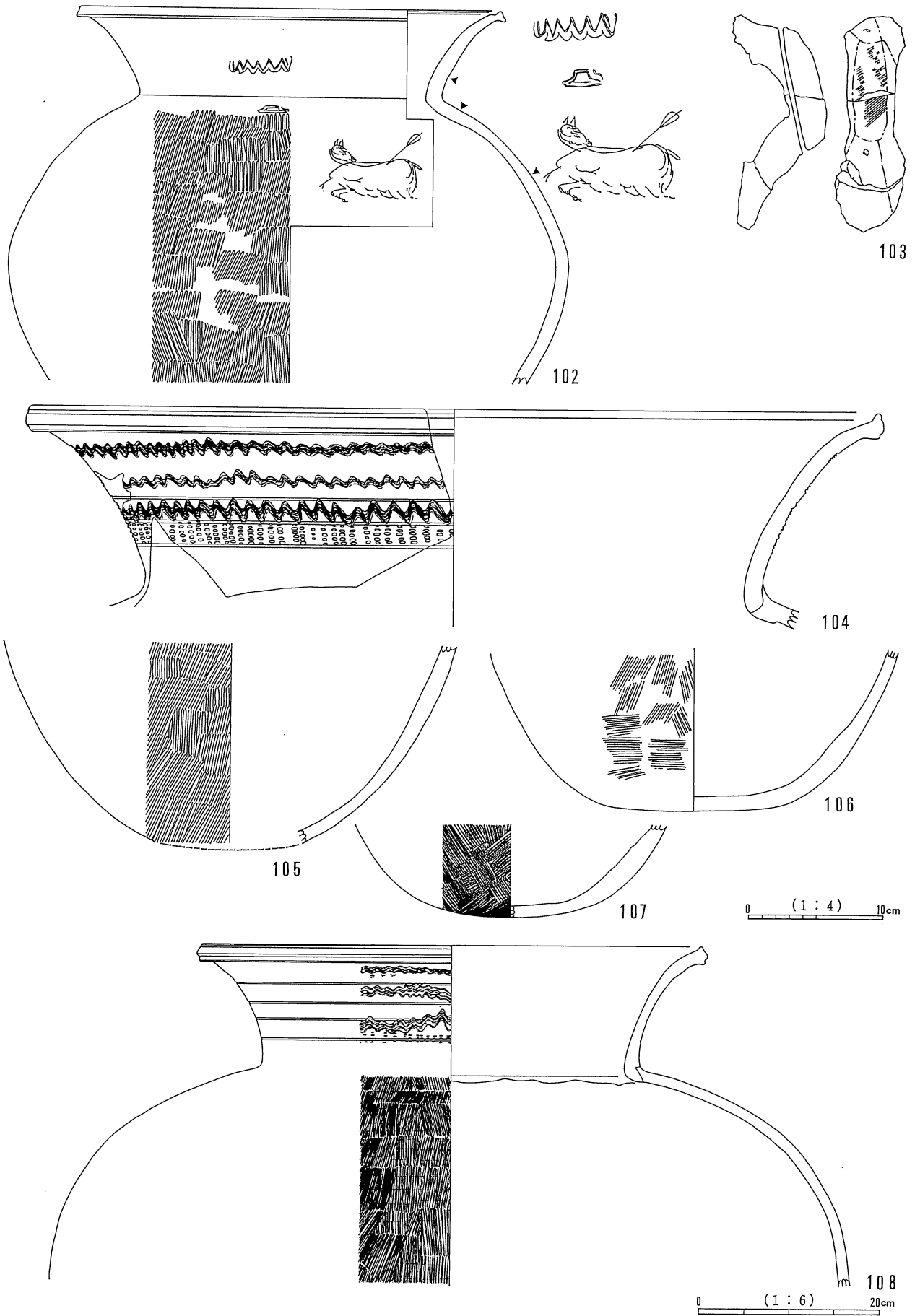
第159図 清水山窯跡 SY02出土遺物(2)



第160図 清水山窯跡 SY02出土遺物(3)



第161図 清水山窯跡 S Y 02出土遺物(4)



第162図 清水山窯跡 SY02出土遺物(5)

双耳壺(第160図82) 82は左右両方に耳部分を持つ。体部は長胴で、肩部が丸く内湾しており、平底である。体部には2～3本1単位の沈線が3単位がみられる。口頸部が欠損しているが、長頸の頸部と思われる。

壺底部(第160図83) 平底の体部外周を削りで整形した寸胴の底部である。

壺蓋(第160図84) 短頸壺Bの蓋である。ツマミが擬宝珠形で天井部は平らであり、「く」の字に曲がり口縁に至る形態である。器面が薄く丁寧な作りである。

短頸壺B(第160図85) 短い口頸部が直立し、肩部がイカリ肩である。肩部には2本1単位の沈線と胴部最大径の部分に3本1単位の沈線が巡っている。84の壺蓋とセットの短頸壺と思われる。

短頸壺C(第160図86・87) 短い口頸部が僅かに開き、頸部基部がやや窄まり胴上部が最大径になる広口壺である。口縁部が有段で口唇部を沈線が2～3本巡る。体部はナデ整形でタタキはみられない。

甕C(第160図88・89) 口頸部が細く肩部がやや撫で肩で胴部が張る甕である。口縁部は有段で88は口縁有段部下に沈線が1本巡り、89は有段部に2本の沈線が巡る。体部には平行タタキ目が残っている。

甕B(第161図90・91) 口頸部が直立する甕で、小形(90)と大形(91)がある。90は体部の平行タタキ目がスリ消されている。

甕D(第161図92～100) 胴上半に最大径があるもの(94、95、96、99)とやや下膨れで下半部に最大径があるもの(92、93、97、98、100)がある。94は口縁から体部までタタキ目をスリ消している。

甕(第161図101) 楕円形の孔が底部に計5ヶ所想定できる。孔はへらで整形されている。形態はバケツ形である。胴部下半は削りによって整形されており体部中央に注口を思わせるような孔があげられている。

甕A(第162図102・104～108) 102の形態は、底部丸底を想定させる甕で、体部が球形の形態を呈し、口縁部内側がやや受け口状になっている。102の甕にはへら描きがみられる。へら描きはへら状工具の先端で描かれており、タタキ調整後生乾き状態で描かれている。頸部の無文部に角のある波形を細・太2本引き、頸部くびれ下に円盤か鏝のある帽子のような文様を2重線で描いている。体部上部には、タタキ調整後に耳が立ち顔が長い馬のような動物がへら描きされている。この馬のような動物像は、背に矢のようものが刺さっており、顔を後方に向け、前足を折って、崩れかけたような状態にみえる。狩猟の様子を現したのか、魔除であろうか。104、108は頸部に櫛描波状文と沈線文、櫛描押し引き文がみられる。108は口径55cmの大きな甕である。形態は102に類似する。105～107はこれら甕Aの丸底と同類の底部である。

甕把手(第162図103) 103は大甕の把手と思われる。把手の整形はかなり雑で指頭痕とタタキ調整痕を残す。把手の中央部は上下に穿孔する。孔も細い棒状のものを通し雑に開けている。これは分厚なため焼成時に炸裂してしまうのを避けるために開けられたものと想定される。

SY02は杯Aの底部が平らなものが多く、SY01より新しい時期と思われる。

SY03(3号窯)(第163～168図、PL31・40)

位置 北斜面中腹に位置し、主軸方向はS-49.7°-Eで、等高線とは直行せず約28°振れて斜めに構築されている。1.2mの間隔を置いて1号窯とほぼ平行して築かれている。

土層 1層は表土と類似、2・3層群は窯体の崩落後の堆積層で、3a・3c層は焼土を余り含まない間層となる。4層は窯壁部・天井部が崩落した窯体の堆積層である。炭化物層は間層を挟んで2枚認められ(5a層と6層)、最終焼成時の床面は5層群上面と思われる。しかし、燃焼部5b層の上面には床面と思われる硬い面は認められない。5f層群は古い窯跡の規模を縮小し新しい窯壁を築いた時に埋めた土層で、5b～5e層もその時に埋められた可能性がある。以上のことを肯定するならば、焼成部の5g1層

上面は新旧両方の共通した窯底であったと理解できる。7～9層は舟底状ピットの覆土で、7b層と8層のそれぞれの上面が硬く締まった面であり、床面であったと考えられる。なお、セクションA-Bの燃焼部の6層上に乗る5g1層は調査時に再堆積したものを5g1層と誤認した可能性があり、5g1層と6層の前後関係は明確ではない。なお、取り上げ層位と本報告での層位名との対応を以下に示す。

取り上げ層位	上層	中層		下層	床面	旧窯
断面図層位名	1・2a・3層	2b・4層群	5a～5e層	6層	5g1・7a・7c層上面	5f層群
遺物観察表層位名	A層	B層	C層	床面	床面	旧窯

窯体の構造 半地下式無階無段の登り窯で、改築により規模を縮小している。煙道と窯尻部分は残存せず、斜面上方部の床面は消失して地山が焼けた焼土がわずかに観察される。この焼土部分と前庭部までの全長は約11.68mで、焼成部の窯幅は新窯が約1.36m、旧窯が約1.60mを測る。さらに旧窯燃焼部では窯幅約1.9mを測る。天井部は窯内に崩落していたが、側壁部は部分的に崩れているが良好な状態で残されている。新窯の右壁面は礫の平坦面を窯体内にそろえて積み上げてその表面にスサ入り粘土を塗る。第163図の立面図はスサ入り粘土を剝した状態を示しており、礫面の斜線部は粘土が薄く、礫面がそのまま窯壁になっていた部分である。礫は改築により窯幅を狭くした部分に用いられており、全面に認められるわけではない。旧窯跡の壁面には礫を用いた痕跡は認められず、部分的にスサ入り粘土の壁面の痕跡が認められる。改築に当たっては旧窯の焼成部窯底と窯尻側の窯壁部分はそのまます新窯の窯体として用いており、部分的な改築により窯幅を狭くしたと思われる。

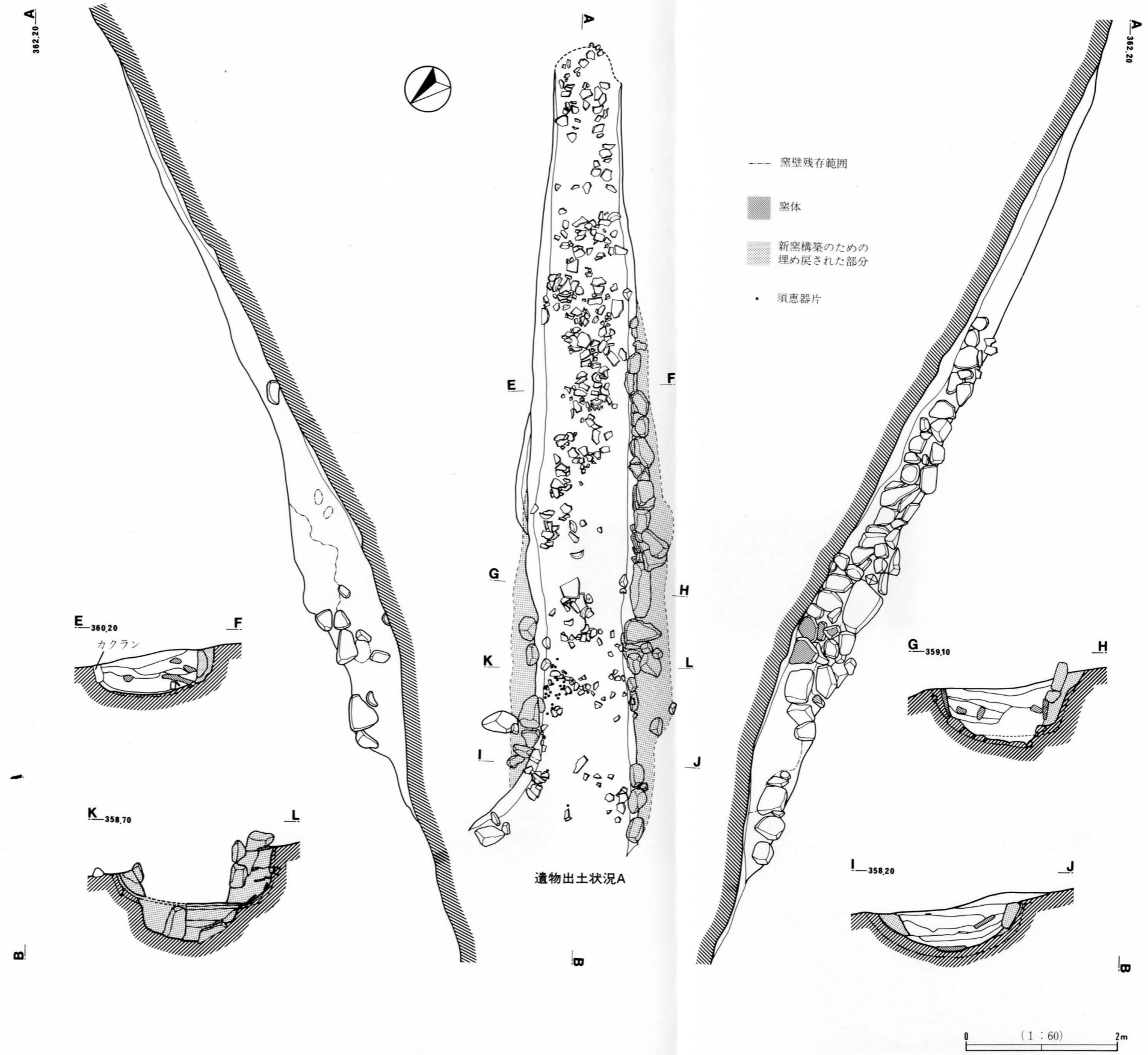
舟底状ピットは2カ所確認され、上段のものをP1、下段のものをP2とする。P1では地山の石を抜いた痕跡が見られるが、さらに大きな石があるためそれ以上の掘り下げをあきらめたものと思われ、非常に浅い。P2は他の窯跡の舟底状ピットに類似した覆土が堆積しており、上面を火床面が覆っている。底面には地山の大きな石が突き出している。なお、第165図の完掘の平面図に示した他の礫もすべて地山より突き出た礫である。またピットの底面に火床面はないが、ピットの覆土の7b層上面と8層上面とに焼けて硬くなった面が認められ、最終的な床面の5g層上面と合わせて本窯跡では3面の火床面が確認された。

また、焼台と思われる須恵器片を付着したスサ入り粘土塊が10点出土したが、これらは窯内一括で取り上げたために出土位置は示すことができない。甕片を用いた焼台が6点、他は窯壁の構築材と思われる。

遺物出土状況 遺物出土状況B図(第164図)に示したものは窯体の崩落層中もしくはその上面に出土したものである。多くは甕破片で、窯体の構築材として用いられたと思われ、スサ入り粘土が付着したものが認められる。A図(第163図)は焼成部から燃焼部の窯底出土の遺物である。焼成部では杯A、杯蓋、壺、甕が比較的多く見られるが、杯Bは2～3点と出土数が少ない。C図(第164図)は旧窯の窯底に残された遺物で、新窯の壁を除去した後に出土した遺物である。A図の燃焼部にもこれらと同じく旧窯の遺物が含まれている可能性があるが、調査時点での区別は困難であった。また、舟底状ピット内からも窯滓、須恵器片が出土した。これらの遺物は、焼成の前後関係により以下の4群に分けることができる。

- ①群：1～4層中に出土した遺物で、窯体の構築材に使われたものを含む。
- ②群：焼成部窯底より出土したもので、新窯で焼成されたもの。
- ③群：5f層と旧窯底面、及び5b～5e層より出土した、旧窯で焼成されたと考えられるもの。なお、旧窯と新窯の窯底が同一面である可能性もあり、5b～5e層中のものは新窯で焼かれた可能性もある。
- ④群：舟底状ピット(P2)内より出土したもの。

以上の①～④群の前後関係は④群→③群→②群となる。なお、①群は新窯の構築材として転用されているもので焼成時点は②群より古いことは明らかであるが、③・④群との関係は明確でない。



第163図 清水山窯跡 SY03遺物出土状況(1)

出土遺物（第166～168図）

杯A（第166図1～20） 杯Aは平底が多い（1～20）。回転ヘラ切りが水平に行われたものと思われる。14～20など若干丸みのある底部のものがみられるが、回転ヘラ切りがやや斜め上方から行われたためと思われる。杯Aは回転ヘラ切り痕をはっきり残したものが多くみられ無調整である。底部の大きめな、逆台形に外傾する形態である。口径差はあまりなく、身は浅いもの（1～12）と深いもの（13～20）の2種類の違いがみられる。

蓋B（第166図21～50） 杯蓋は天井部が偏平な21・22・48がみられるが、大きな形態差はみられない。口径は2種類で14cm前後と15cm前後である。ツマミの大きさに若干違いがみられるが、ほぼ同形態である。全体的特徴は口縁部の立ち上がりが少なく口縁端部の折り目が不明瞭である。48は「井」印ヘラ描きが天井部内面にみられる。

杯B（第167図51～55） 杯Bは口径がほぼ等しく高さの違う2種類に分けられる（51・52、53・54）。杯底部は全点回転ヘラ削りで垂れたように丸くなっている。高台の形態は51が断面三角形の低い高台であり、54は高台が外向きに広がって踏ん張り型である。他の高台は断面方形である。高台径は大きく、杯底部外周に取り付けられている。55は杯底部に「井」印のヘラ描きがみられる。

蓋E（第167図56） ツマミのない蓋である。口縁端部の折り目部は稜を設け、垂直になっている。富士山形の器高の高い蓋である。天井部の切り離し痕は残っていない。天井部をロクロから切り離した後、切り離した部分のみを調整して平らにしている。天井部外面の中央部には爪痕のような痕跡が認められる。この形態の蓋は東海地方（湖西古窯址群）（後藤1992）と富山（越中上末窯）・石川県地方（戸津古窯址群）（出越1995）にみられ、奈良時代8世紀前半から9世紀代にみられる（斎藤・後藤1995）。皿や盤の蓋と思われる。

高杯A（第167図57） SY01の高杯Aに類似する。脚部欠損。内面に「井」印のヘラ描きがみられる。

長頸壺A（第167図59） 「く」の字状に屈曲する体部である。SY02の長頸壺Aに類似する。

短頸壺A（第167図58） 小形の口頸部が直立し、「く」の字状に屈曲する体部である。

短頸壺B（第167図62） 直立する口頸部で、胴部の上半部に最大径を持つ。口唇部は丸みを持ち玉縁状である。

鉢D（第167図64・66） 体部はタタキ目がなくナデ調整である。口頸部から体部上半部にかけて「S」字状に屈曲する浅鉢形で、口唇部は面取りされる。66は「井」印ヘラ描きの一部が体部外面にみられる。

横瓶（第167図60・61） 60は被蓋部の破片で外面は回転ヘラ削りである。61は体部に「井」印のヘラ描きの一部がみられる。頸部接合面には2本の沈線が巡っている。

甕A（第168図74～78） 74～77は櫛描波状文と櫛描押し引き文と沈線文の組み合わせで、頸部文様帯が構成されている。78は他の甕Aに比べると薄手で口径の小さな形態である。

甕C（第168図69～72） 71は口縁部がS字状になっている。71、72は肩部は直角に屈曲しイカリ肩である。69・70は71の口縁部と同様な形状をしているが肩部が撫で肩である。

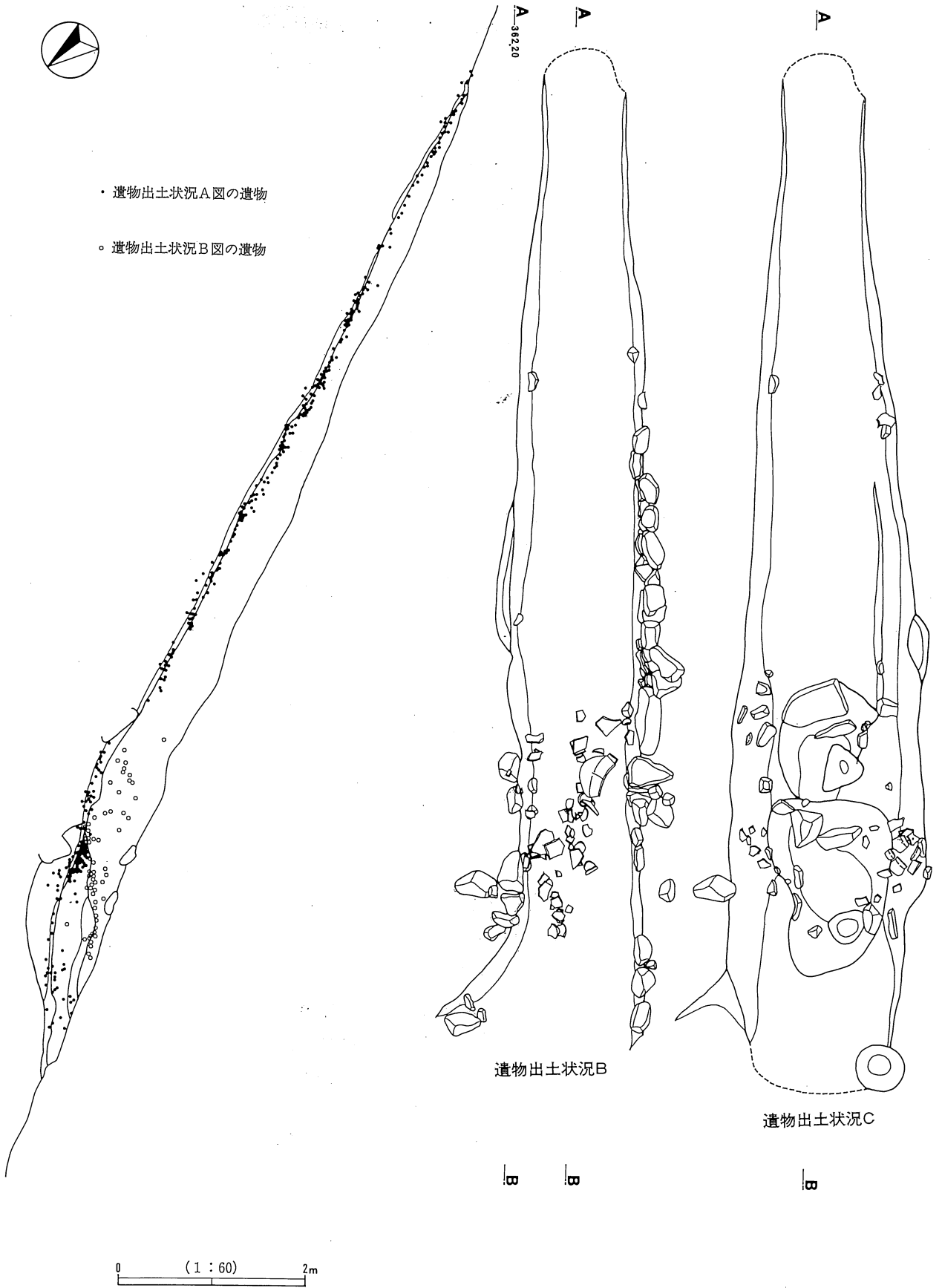
甕D（第167図65） 広口の甕である。体部は下膨れの形態を呈する。口唇部が面取りされている。

甕E（第167図67、第168図73） 広口の甕である。73の口唇部は丸みを持つ。67は口唇部下を摘んだ様な状態である。73と67は体部上半部に最大径を持つ。

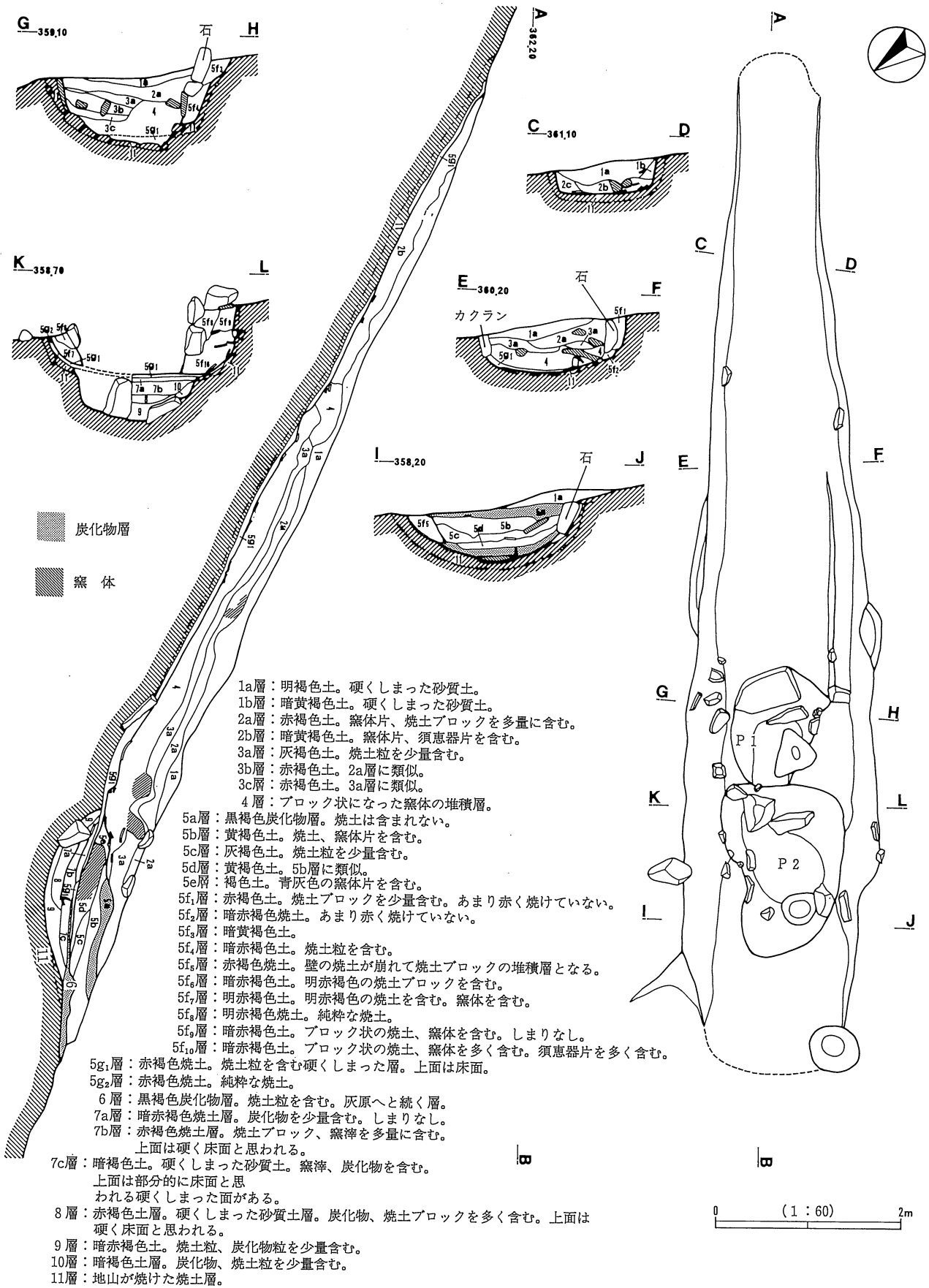
甕底部（第167図68） 体部下半部がタタキ目スリ消し調整である。「井」印のヘラ描きがみられる。

その他（第168図79） 甕口頸部の接合面の調整に際し、切りとられたものである。

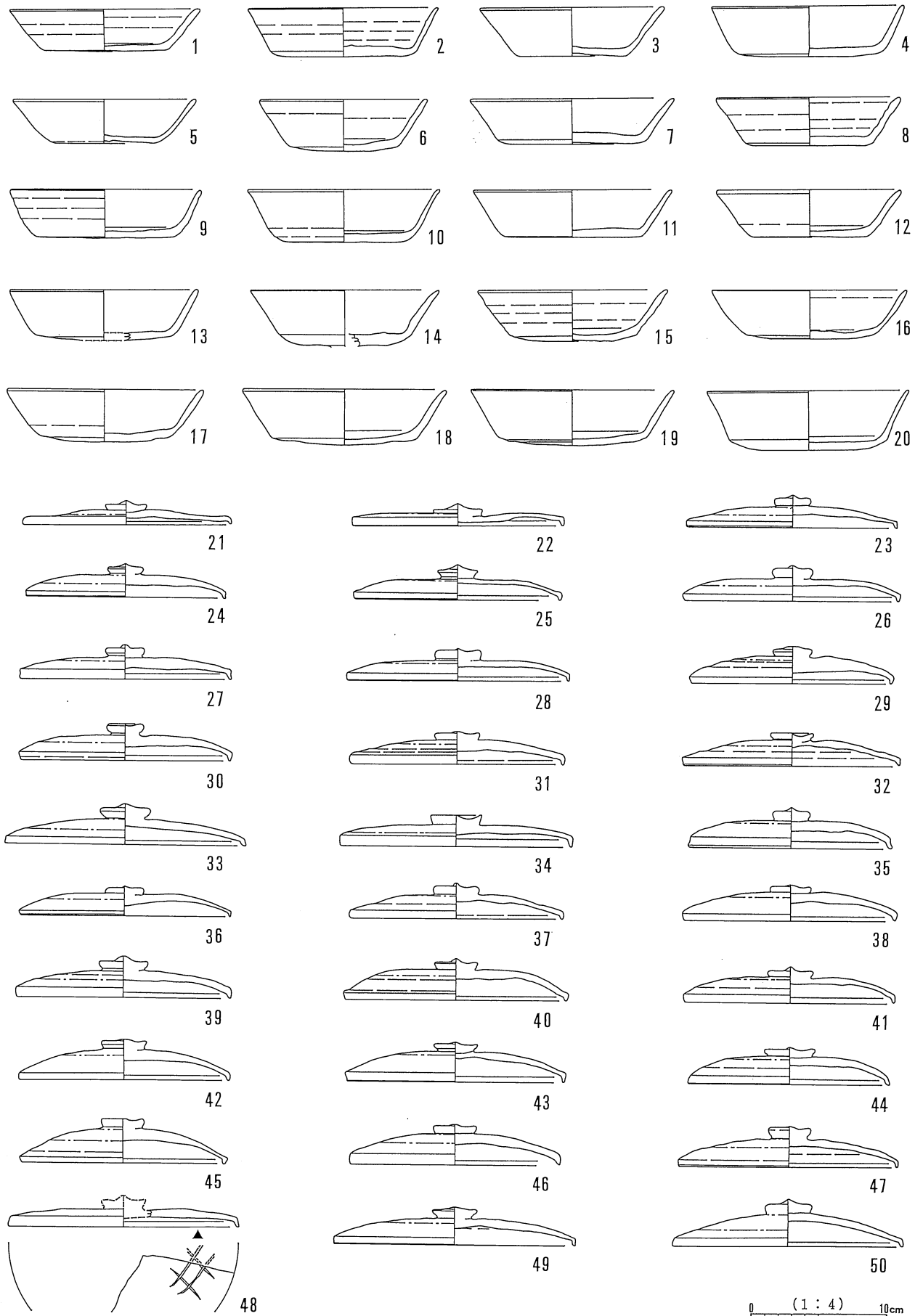
杯Aの底部が平らなものがSY02より多くなり、SY03の方が若干新しい窯と思われる。



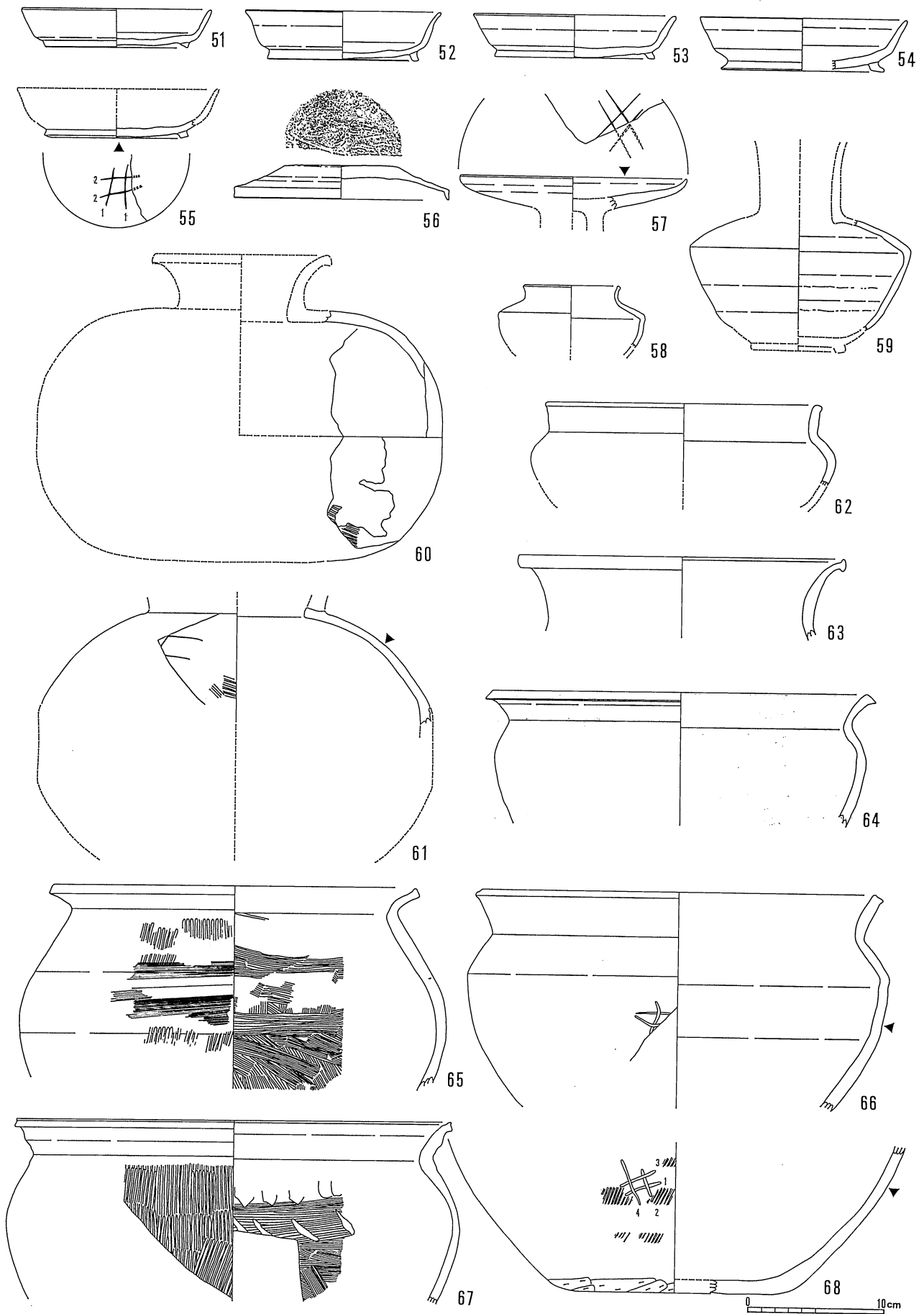
第164図 清水山窯跡 S Y 03遺物出土状況(2)



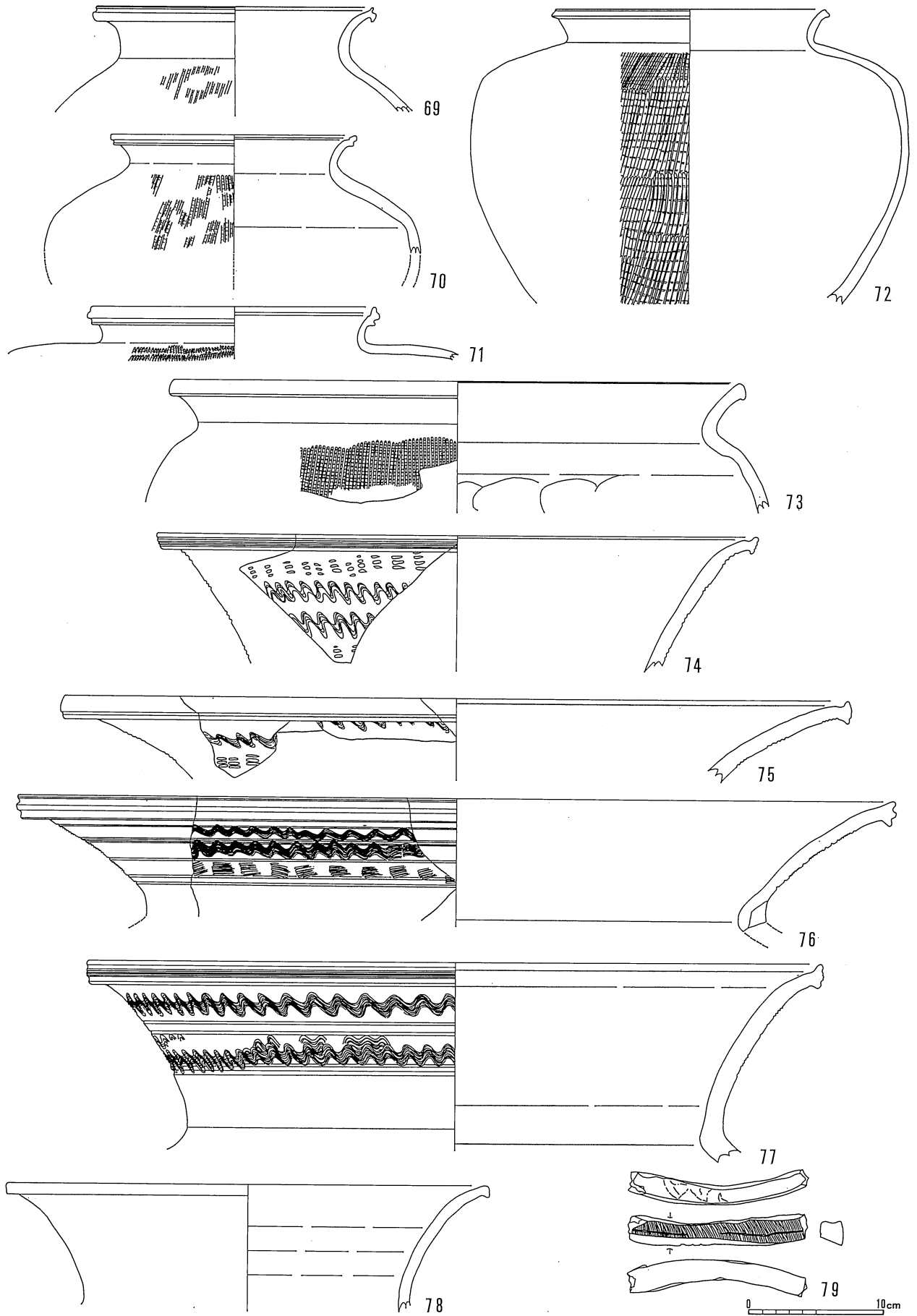
第165図 清水山窯跡 SY03



第166図 清水山竊跡 SY03出土遺物(1)



第167図 清水山窯跡 S Y03出土遺物(2)



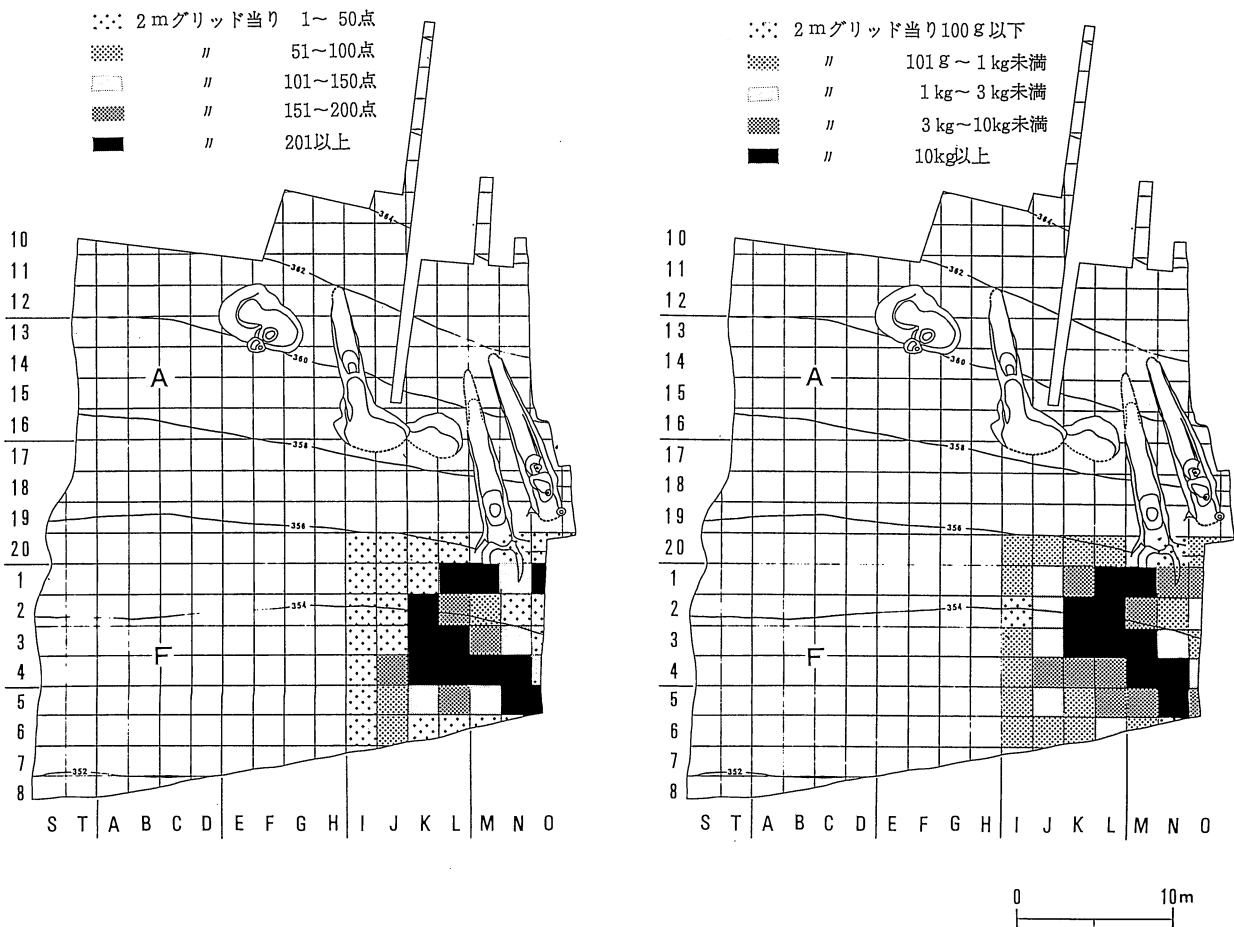
第168図 清水山窯跡 S Y03出土遺物(3)

SW01 (1号灰原) (第169~176図 P L 32・41)

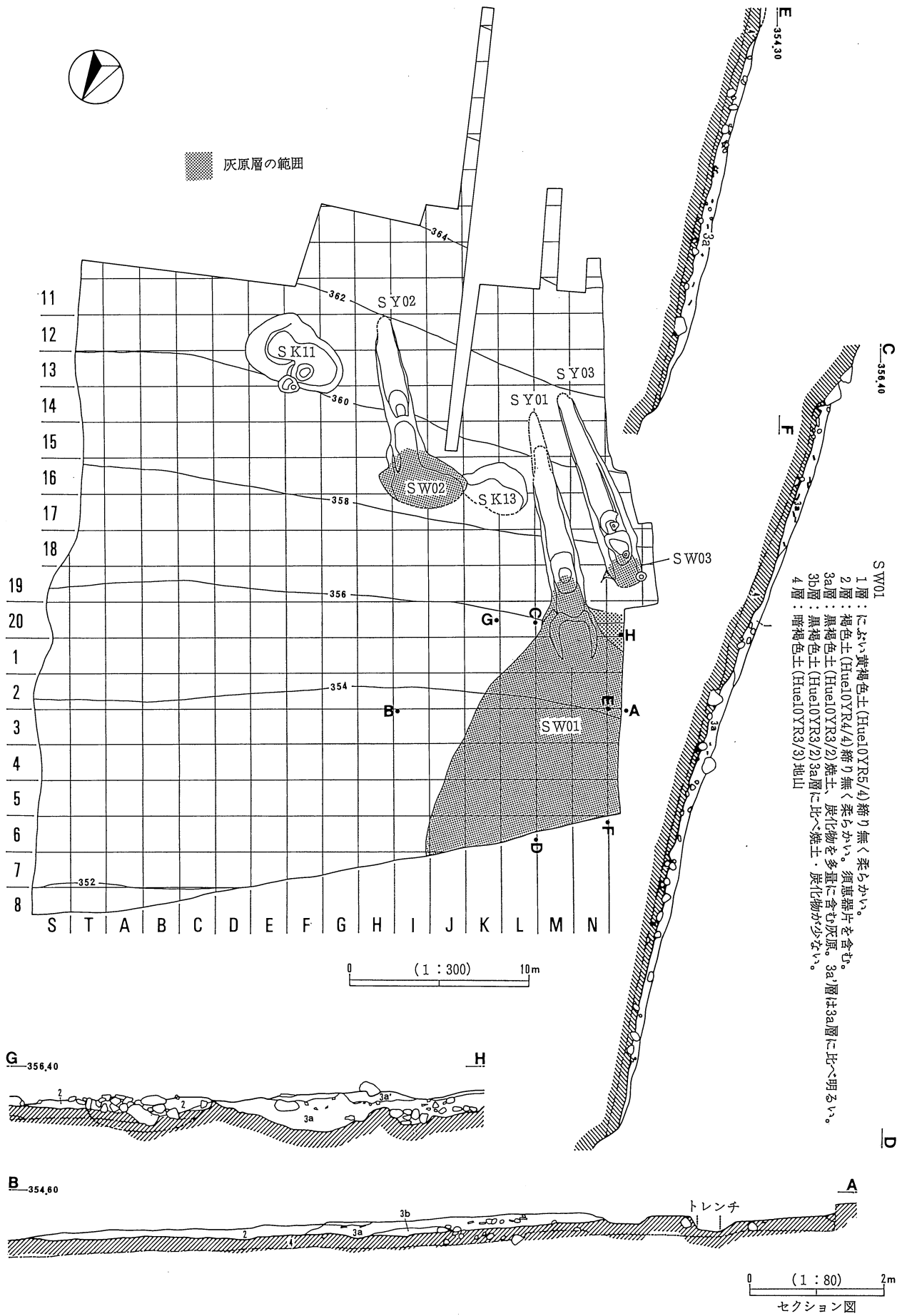
SY01の前庭部からその斜面下方に扇状に広がる、炭化物・焼土ブロックと須恵器片を大量に含んだ黒褐色土の分布範囲である。灰原(3a・3b層)は層厚約20cm、上に2層は見られず地表下数cmで灰原に至る。また、灰原層はSY01の6a・6b層につながる。SW01は窯跡との位置関係から、SY01以外にSY02・SY03から供給された堆積物もあると思われるが、灰原の分層はできずそれぞれの窯の灰原を区別することはできない。また、中野市教育委員会調査区にはSW01の続きと共に、それとは区別され3号窯(SY03)の灰原が確認されており、多量の遺物を出土した。

遺物出土状況 第169図に須恵器の点数及び重量の単位面積あたりの分布密度を示した。FN02グリッドで遺物が極端に少ないのは抜根により遺物が失われているためで本来は遺物分布密度が高いところと思われる。また、須恵器のほかに窯体片が多量に出土し、総重量158kgを測る。このなかに甕・杯・杯蓋などの破片が付着した焼台と思われるものが100点含まれている。ちなみに、窯体片の総重量はSY01が940kg、SY02が340kg、SY03が355kgで、これに比べると灰原の窯体片は少ないことになる。灰原中及びその下面には拳大から人頭大の礫が多量に出土した。これらの礫は窯を構築の際、地山より掘り出された礫を廃棄したものと思われ、その分布は須恵器の分布とほぼ重なっている。

なお、第173図106・107の「大」「佐玖郡」とヘラ描きされた無頸壺は窯跡内からの出土例が見られない器種のため、焼かれた窯を特定することは難しい。106はFN04・05グリッドと中野市教育委員会調査区C4グリッド(本報告書のFO01グリッド)より出土し、107はFL01グリッドより出土している。両



第169図 清水山窯跡 SW01遺物分布密度



第170図 清水山窯跡 灰原

者は製作技法と焼成が極めて類似することから、同じ窯で焼かれたと思われ、出土地点を見る限りでは、SY01で焼かれた蓋然性が高いといえる。他の遺物は観察表にその出土グリッドを示した。

出土遺物（第171図～第176図）

杯A（第171図1～36） 回転ヘラ切りによってロクロから切り離されたものである。底部は回転ヘラ切り未調整のもの、ナデ調整されているもの、ヘラ削りのもの等がみられる。回転ヘラ切り未調整のものは平底であるが、29～32の調整されたものはやや丸底が目立ち、32は丸みをもつ底で口縁に向かって杯身がかなり開く形態を呈している。SY01第146図21の杯Aと類似する。平底のものは、身が浅く、口径の広い大きい底部形態が多い（1～16、18～21、23～24）。35の底部は板状ヘラ工具によるナデ調整痕がはっきり残っている。36は木葉痕が底部に残っている例である。これは、乾燥時に木の葉の上に置いたものと思われる。17は底部をヘラ削りしたものである。杯の腰部に明瞭な稜線がみられる。この形態は清水山窯跡では少ない。10、22は杯の腰部に稜線がみられるが、底部は回転ヘラ切り後ナデ調整である。

蓋B（第171・172図37～62） 蓋天井部が低いもの（37～42・49・50・57）、やや天井部が高いもの（43～48、51～56、58～61）の2種がある。やや天井部の高いものは、ツマミ径も大きくSY01第147図50～64に類似する。

蓋A（第172図62～64） 62は口径がやや小さめである。SY01・02・03にはみられない形態である。63、64はSY01の蓋A（第148図103）と類似する。天井部内面に「井」印ヘラ描きがみられる。SY01の蓋Aのヘラ描きと筆跡が類似する（第148図103）。

杯B（第172図65～96） 67と72は器高が低く腰部外周に高台が付き、SY01第148図105に類似する。65と92は器高が低く高台が踏ん張り型で丸みを持つ。65はSY03第167図54に類似する。92にはヘラ描きの一部が杯底部内側にみられる。66は器高が低く杯腰径と口径がほぼ同じで箱型である。65～70、74～83は杯底部が丸みを持ち垂れ下がる。79はSY01第148図107と類似する。81・83の底部は高台より垂れ下がる。84～88は口径に対し器高が高く、杯身が外反しない箱型である。84と85は法量が小さく、86～88は法量が大きい。86～88はSY02第159図59に類似する。88は杯身下部にヘラ先をあてロクロを回してできた傷のようなものが巡っている。89、92～96は底部から杯腰部にかけて丸みをもつ。これらの形態はSY01の杯B第148図108～114に類似する。93～96には「井」印のヘラ描きが杯底部にみられる。「井」印の線刻が太めで、63・64の蓋のヘラ描きに類似しており、SY01の皿第150図140の文字に類似する。91、92は細いヘラ描きの一部がみられる。90は外面にヘラ描きの文様の一部がみられる。

椀B（第173図97） 高台は踏ん張り型で、口縁部が内湾し底部が丸みのある形態である。

椀C（第173図98～101） 金属鉢（佐波理鉢）の模倣品である。SW01には2種類がみられる。

1類は98と99である。椀身に3本の細い隆線がみられ、椀全体をナデ調整後生乾きの時点で再びナデ調整を行い、一見ミガキ調整を行ったような効果をあげ丁寧に作られている^(註1)。同型の金属器模倣の椀は中野市教育委員会の清水山古窯址調査際、灰原より出土している（中野市教委1994）。これら3点はほぼ入れ子状の大きさである。98の高台は踏ん張り型である。

2類は100と101である。椀身中央に段を設けた形態である。段上部に「井」印のヘラ描きがみられる。SY01の蓋A（第148図103）に記されている「井」印のヘラ描きの筆跡が類似しており、これら椀と蓋Aはセットと思われる。2類の椀は老洞古窯址1号窯の椀B類（岐阜市教委1981）に類似する。

高杯A（第173図102） SY01の高杯Aとほぼ同様口縁部を持つ高杯である。

皿A（第173図103・104） 103はSY01で出土した皿Aの1類と同じタイプの底部回転ヘラ削り調整のものである。直線的な「井」印ヘラ描きの一部が底部外面にみられる。104皿の破片はSY01で出土した皿Aの2類と同じ底部ヘラ削り調整である。

硯（第173図105） 中野市教育委員会が調査した清水山窯跡灰原出土資料と接合したものである（中野市教委1994）。小型の硯で体部にへらによる縦位の沈線が巡り、中央部に十字形の透かしがみられる。硯面は丁寧にナデ調整されている。

無頸壺（第173図106・107） 口頸部のない長頸壺Aの形態である。肩部がイカリ肩で、体部にかけて算盤玉状に屈曲している。製作方法も長頸壺同様、長頸壺の頸部接合面にあたる部分に蓋をし、その蓋にへらで穴を開け、106は口唇部をへら削り調整し、107はナデ調整している。106は肩部外面に「大」のへら描き文字が記されている。文字の一部が欠損しており、別の文字の可能性もある。107の肩部には縦に細い刻書で「佐玖郡」のへら描き文字が記されている。達筆な行書体の文字である。

長頸壺C（第173図108～111） 金属器模倣の長頸壺と思われる。108と109は小型である。表面は丁寧にナデ調整され、磨かれているようにつややかである。その上に数本の沈線が丁寧に施されている。108の体部形態はやや卵形をしており、109の体部形態はやや球形である。SW01の長頸壺Cは110のような細い長頸を有するものと思われる。110の頸部には2本の細い沈線がみられ丁寧に作られている。平城京分類の水瓶に類似する形態（第9章第16表）と思われる。111は体部球形の大形の長頸壺である。体部中央に3本ずつの沈線が2単位施されている。丁寧にナデ調整がされている。

長頸壺A（第173図116・117） 116はイカリ肩の肩部を持ち、体部は直角に近く屈曲する。口縁部は有段で、高台は踏ん張り型である。頸部と体部の接合方法は、肩部まで製作した部分に蓋をし、蓋の部分に穴を開け口頸部を差し込み（第181図1）、接合面に粘土帯を載せ補強して接合させている（第181図4）（3段法）^(註2)。全体的に丁寧にナデ調整がされている。117は体部が「く」の字状に屈曲しており、体部は底部に向かって窄っている。体部下半部は下から上に向けて放射状にハケ調整され、その後高台接合部付近を横位削りによって調整している。

長頸壺（第173図112～115） 長頸壺の口頸部には形態のバリエーションがみられる。口縁部は有段のもの（116）とラップ状に口縁部が開くもの（115）がみられる。頸部は頸部に沈線がみられるもの（113）、頸部中央に段のあるもの（114）がみられる。また頸部の接合部に凸帯を巡らすもの（112・114）がある。稲田山古窯址群12号窯（美濃須衛古窯址群第IV期第3小期）、平城SB143（平城II～III期）、鳴海32号窯（猿投窯第IV期第2小期）に112・114と同類のものがみられる。

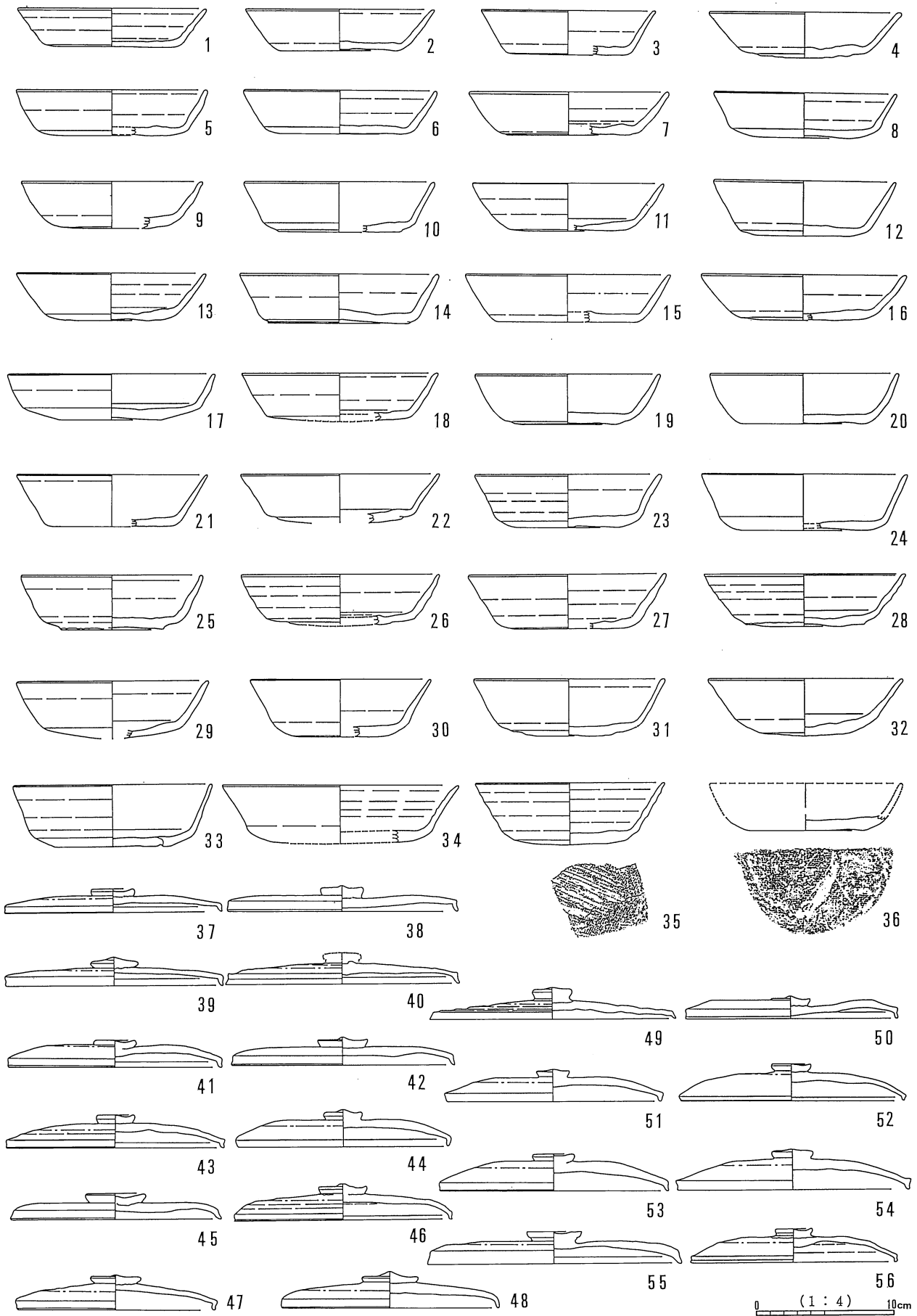
横瓶（第174・175図118～142）^(註3) 口縁部の形態（118～133）は3種みられる。口唇部が平らになり口縁が外反しているもの（118・113）、口縁がやや受け口状のもの（120・121・125・130）、口唇部が丸みを持つもの（126・128）である。また口縁部に沈線がみられるもの（119、122～124、127、129、131、132）がある。122は頸部接合面に沈線を巡らせ、接合しやすくしている。被蓋部の整形技法には（134～142）2種みられる。被蓋部接合面を搾るもの（砲弾形、丸形）（134、135、137、138、140）、被蓋部接合面平らなもの（136、139、142）である。

短頸壺A（第175図143） 平城宮址の壺Aに類似する小形壺である（第16表）。丁寧にナデ調整がされている。

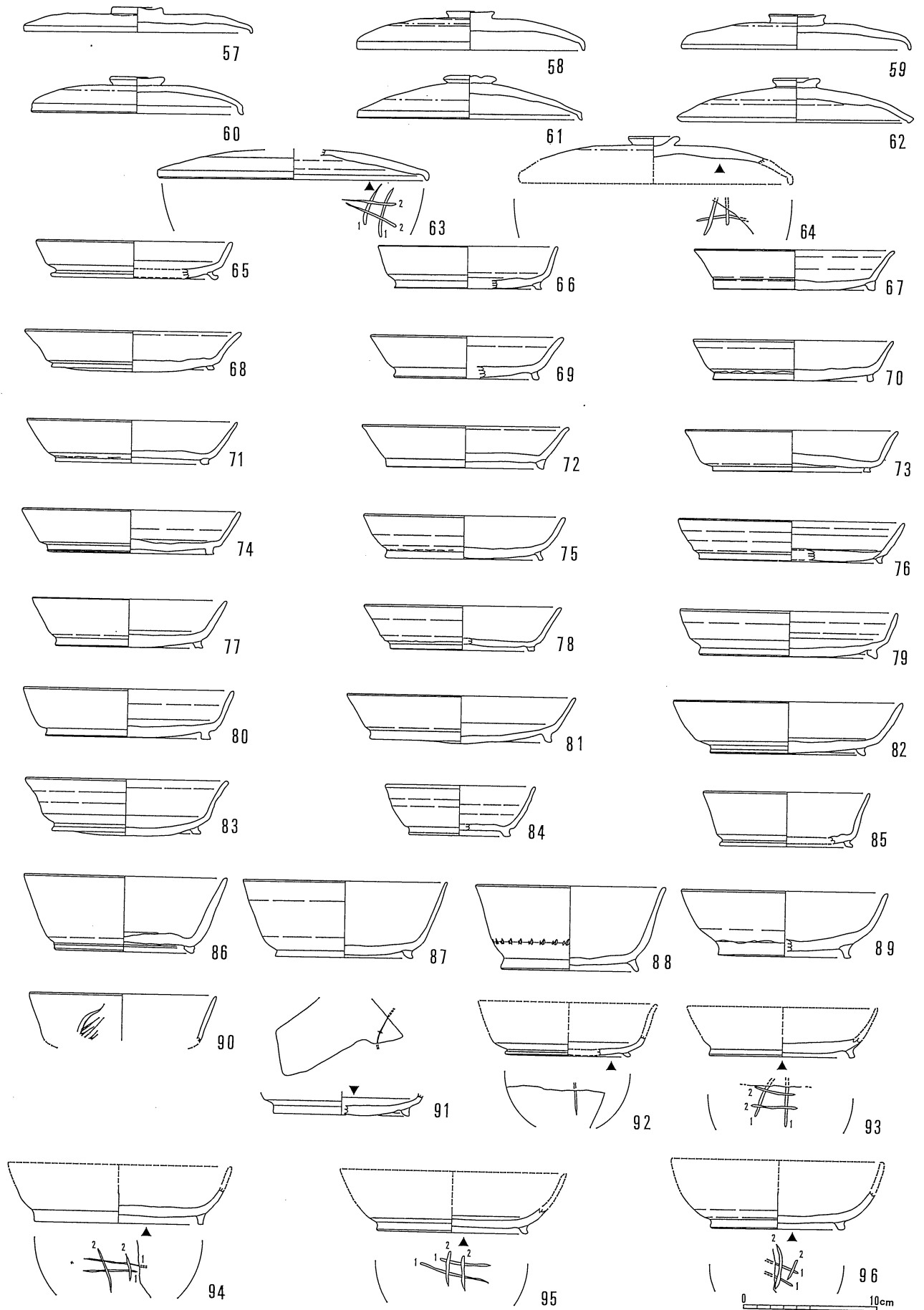
短頸壺B（第175図145～148） 147はイカリ肩で湾曲しながら体部にいたる。口頸下部から肩部にかけて数本ずつの沈線が2単位巡っている。口縁部はやや丸みを持つ。144の壺蓋とセットと思われる。145・146・148は肩部が撫で肩である。口唇部は平らなもの（145）と丸みのあるもの（146・148）がみられる。

壺蓋（第175図144） 144は短頸壺Aとセットとなる。口縁の立ち上がりから天井部にかけて丸みを持つ。ツマミ部は欠損している。

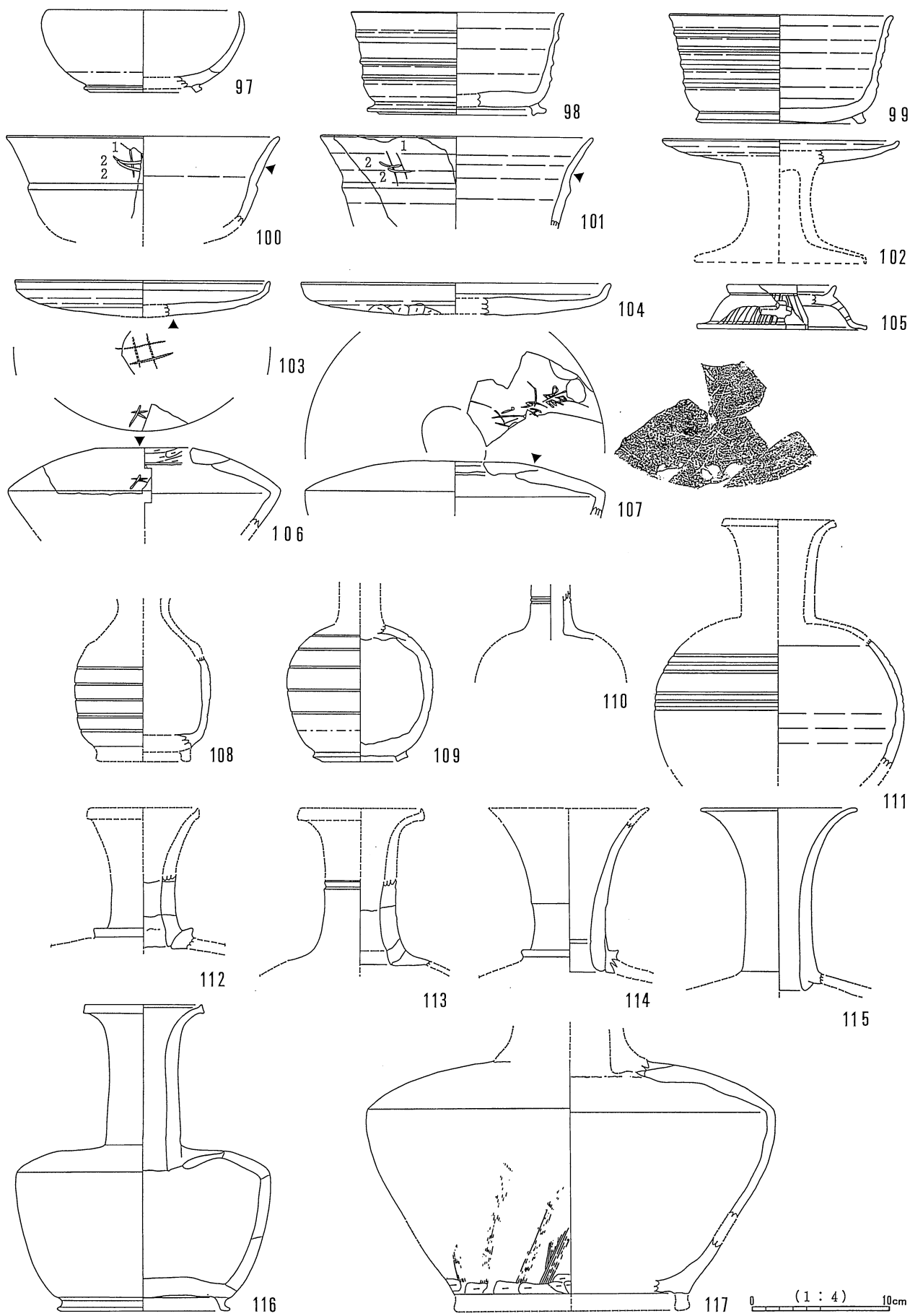
短頸壺C（第175図149～155・157） 口縁部に段のないもの（149～152、157）と、口縁部に段のあるもの（153～155）に分けられる。157は口唇部が玉縁状に丸みを持ち、内外面で原体の違うハケで調整を行っ



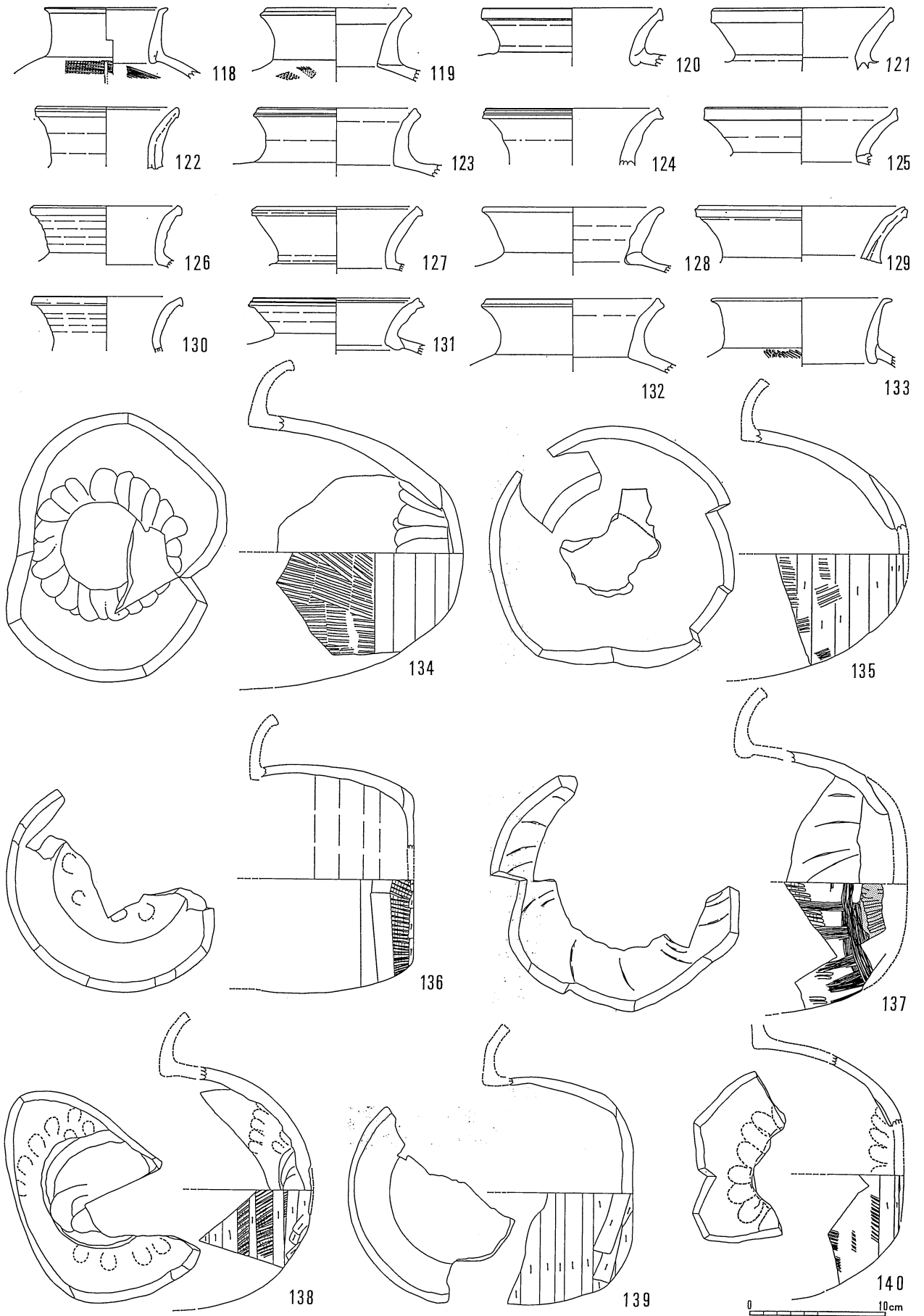
第171図 清水山窯跡 SW01出土遺物(1)



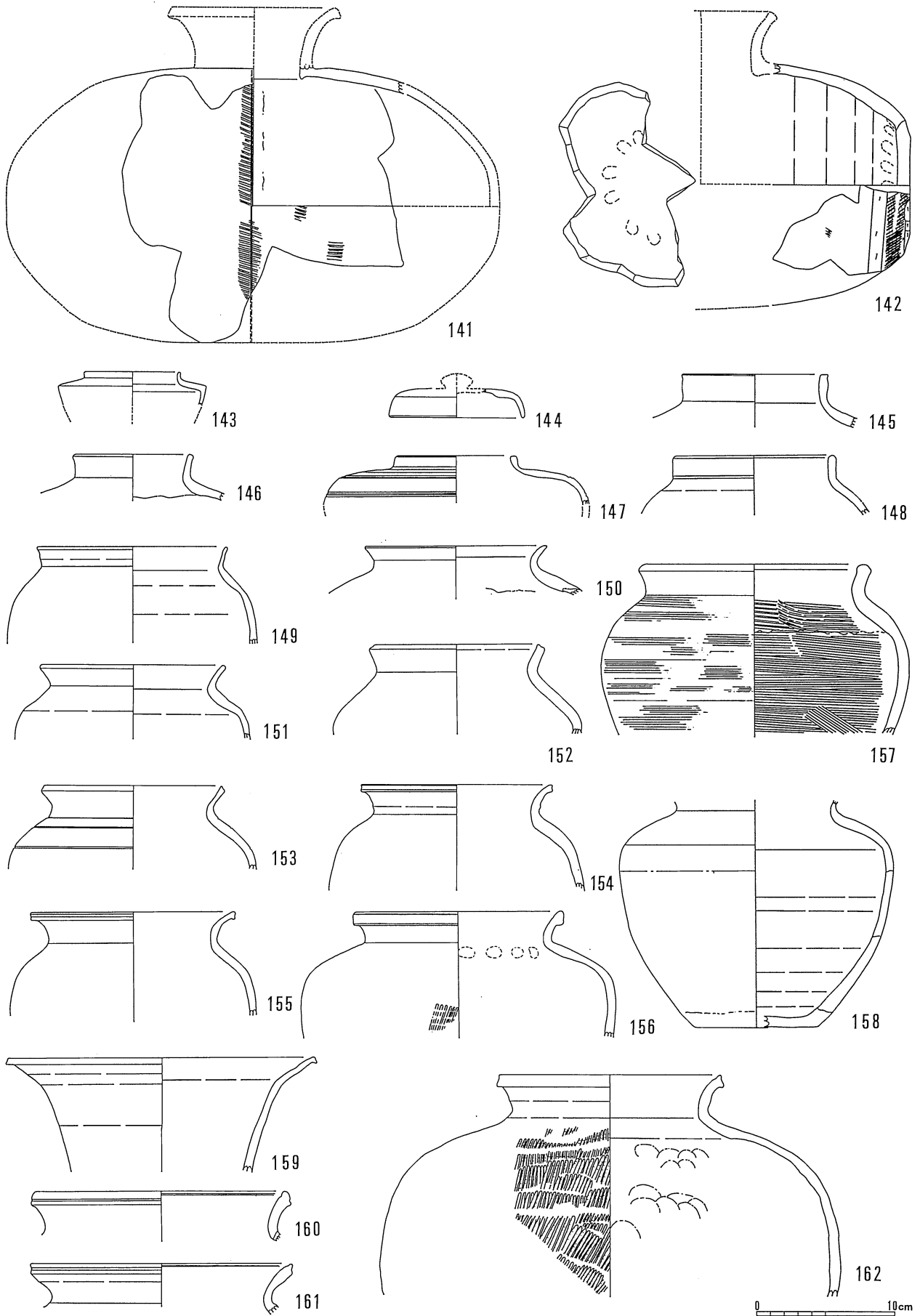
第172図 清水山窯跡 SW01出土遺物(2)



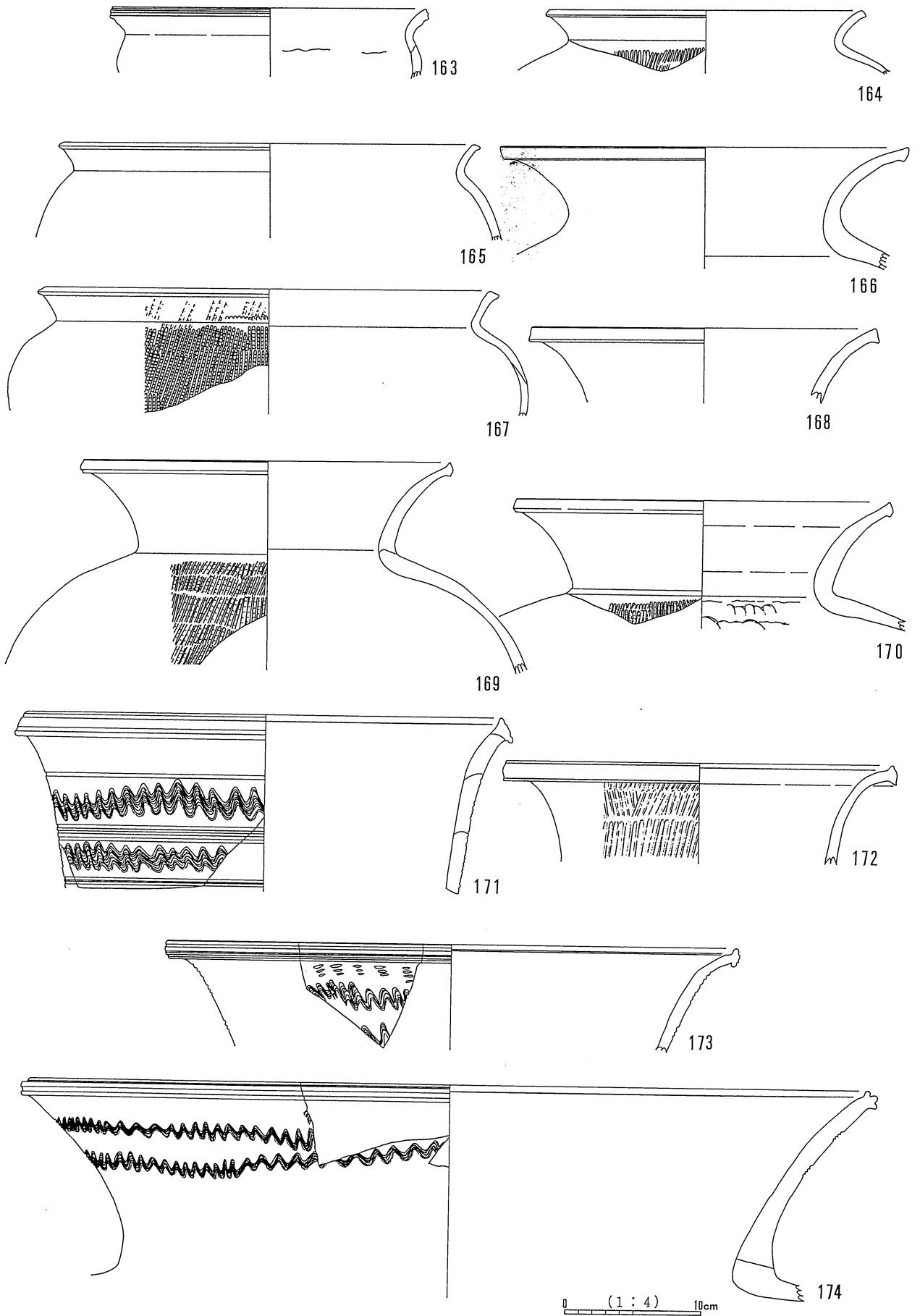
第173図 清水山窯跡 SW01出土遺物(3)



第174図 清水山窯跡 SW01出土遺物(4)



第175図 清水山窯跡 SW01出土遺物(5)



第176図 清水山窯跡 SW01出土遺物(6)

ている。153は体部上半に3本の沈線が巡っている。155には口縁部に沈線がみられる。

短頸壺（第175図158） 口頸部が欠損した短頸壺BまたはCである。

甕A（第175図159、第176図164・166・168～174） 頸部無文のもの（1類）と有文（2類）のものがみられる。

1類（159・166・168・169・170・172） 159・168・172は頸部が長く、有段の口縁がラッパ状に開き、器壁が薄い。172は頸部にスリ消し調整されているが、タタキ目が残った状態である。166・169・170は頸部が短めの形態である。

2類（171 173 174） 171は櫛描波状文と沈線文の組み合わせであり、173は櫛描押し引き文と波状文の組み合わせ、174は波状文のみである。口縁部にはそれぞれ2本沈線が施され断面楓葉状になっている。

甕C（第175図156・162、第176図164） 156と162と164は壺Cに類似する。肩部イカリ肩で、壺Cに比べ口頸部が肉厚に製作されており体部にタタキ目を残す。

甕D（第176図160・161・163・165・167） 口縁の形態で2種類に分類される。口縁部肉厚であり沈線を巡らすもの（160・161・163）と口唇部面取りされるもの（164・165・167）である。後者はSY01床内から出土した第152図180～182に類似する。

SW01にはSY02、SY03操業時の遺物が混在するものの、その多くはSY01の製品が廃棄されたものと思われる。

SW02・03（2号・3号灰原）（第169図）

それぞれSY02・SY03の前庭部に認められたもので、出土遺物はそれぞれの窯跡の項で示した。なお、SW03に続くと思われる灰原が中野市教育委員会により調査された。

3 土坑

SK11・13は①区にあり窯跡と同時期と思われるが、他の土坑は③区で窯跡とは山頂をはさんだ反対側にあり窯跡と異なる時期の遺物も認められ、窯跡とは直接関係しない土坑と思われる。

SK11（第177図）

SY02の東側に隣接する。5.7m×3.8mの不整な形状を呈し、底面は凹凸して、斜面下方の立ち上りはほとんどない。覆土中には多量の礫とわずかな須恵器が含まれており、出土遺物から奈良時代前半期の窯操業時の遺構と判断される。牛出古窯遺跡1号窯に隣接して同様な遺構が認められることから、窯の構築もしくは操業に関連する遺構と推測される。

出土遺物（第177図2～4） 須恵器杯B・蓋と土師質の杯がみられる。2は杯Bで、高台は杯腰部付近に接合され高台径が大きい。高台が断面三角形である。4は蓋Bで偏平な形態である。3の杯Aは色調が橙色で土師質である。底部は回転へら削りである。焼台として使用されたものであろうか。

SK13（第177図）

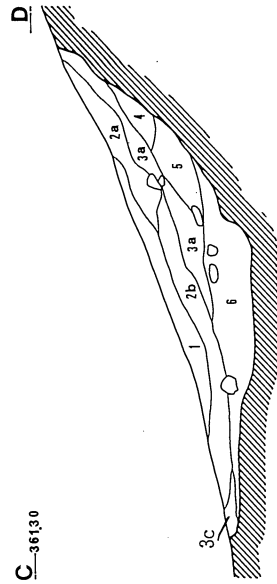
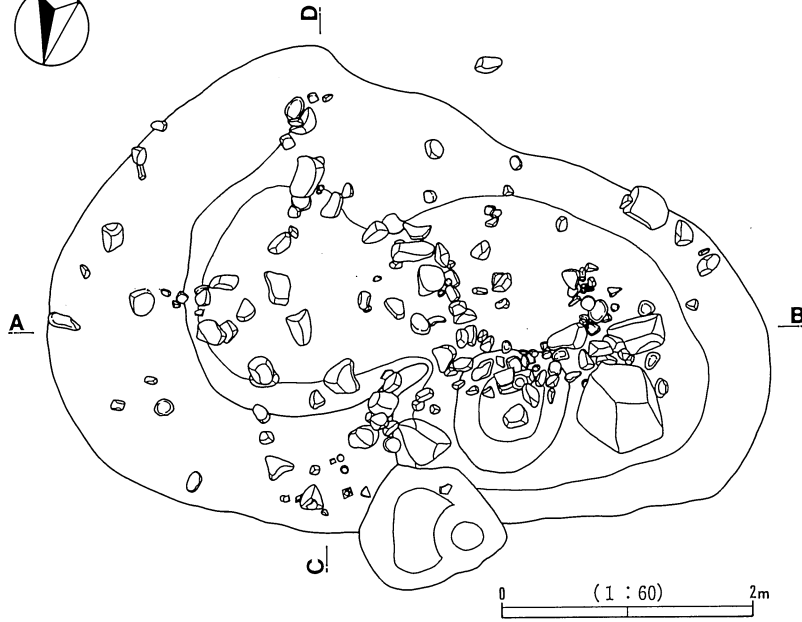
SY02の前庭部とSY01の間に検出された。3.8m×2.7mの不整な形状を呈し、底面は比較的平坦で、斜面下方の立ち上りは認められない。須恵器が数点出土したのみであるが、出土遺物から奈良時代前半期の窯操業時の遺構と判断される。SK11と同様の性格のものと推定される。出土遺物は第177図1の須恵器杯Aで、底部へら削り調整である。

SK01・02・06・07・08・10（第178図）

いずれも③区に検出された土坑である。SK01は52cm×40cm、深さ10cm、須恵器杯片が出土した。SK02は1.3m×1.3m、深さ40cm、須恵器片・砥石の他に、覆土中に拳大の礫がまとまって出土した。S

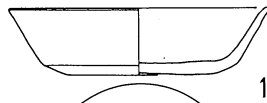
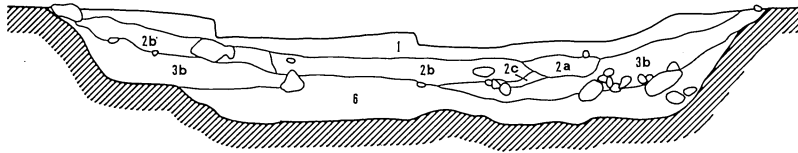


SK11

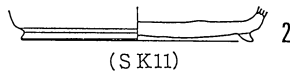


- 1層：にぶい黄褐色土(Hue10YR4/3)表土。
- 2a層：暗褐色土(Hue10YR3/3)
- 2b層：黒褐色土(Hue10YR2/2)炭化物を少量含む。
- 2c層：暗褐色土(Hue10YR3/3)
- 3a層：褐色土(Hue10YR4/4)
- 3b層：暗褐色土(Hue10YR3/4)
- 3c層：暗黄褐色土 暗褐色土と黄褐色土がブロック状に混じる。
- 4層：暗褐色土(Hue10YR3/4)
- 5層：黄褐色土(Hue10YR5/6)黄褐色土と暗褐色土が混じる。地山の崩落層。
- 6層：黄褐色土 暗褐色土を混じる。

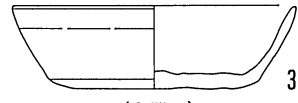
A-360.70



(S K13)



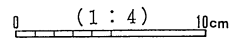
(S K11)



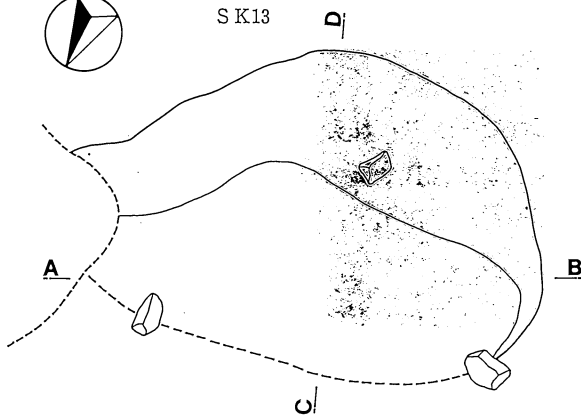
(S K11)



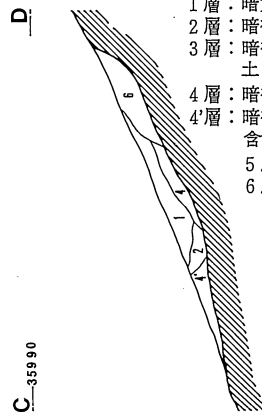
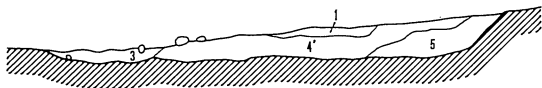
(S K11)



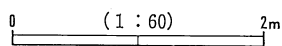
SK13



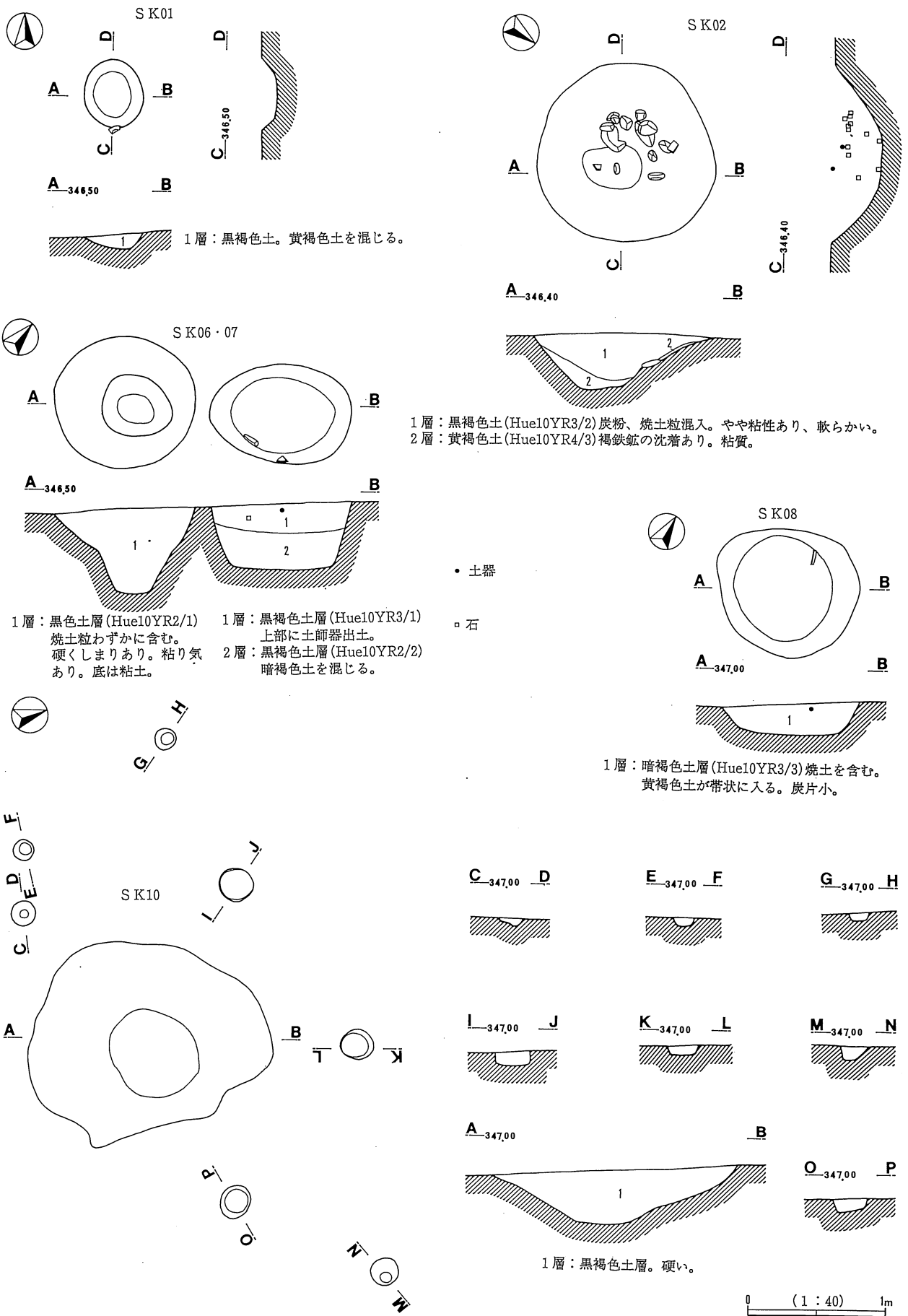
A-359.00



- 1層：暗黄褐色土。表土。
- 2層：暗褐色土。焼土粒をわずかに含む。
- 3層：暗褐色土。焼土ブロックと暗褐色土を混じる。
- 4層：暗褐色土。
- 4'層：暗褐色土。焼土ブロックを多量に含む。炭化物を含む。
- 5層：暗黄褐色土。炭化物を多く含む。
- 6層：褐色土。炭化物を少量含む。



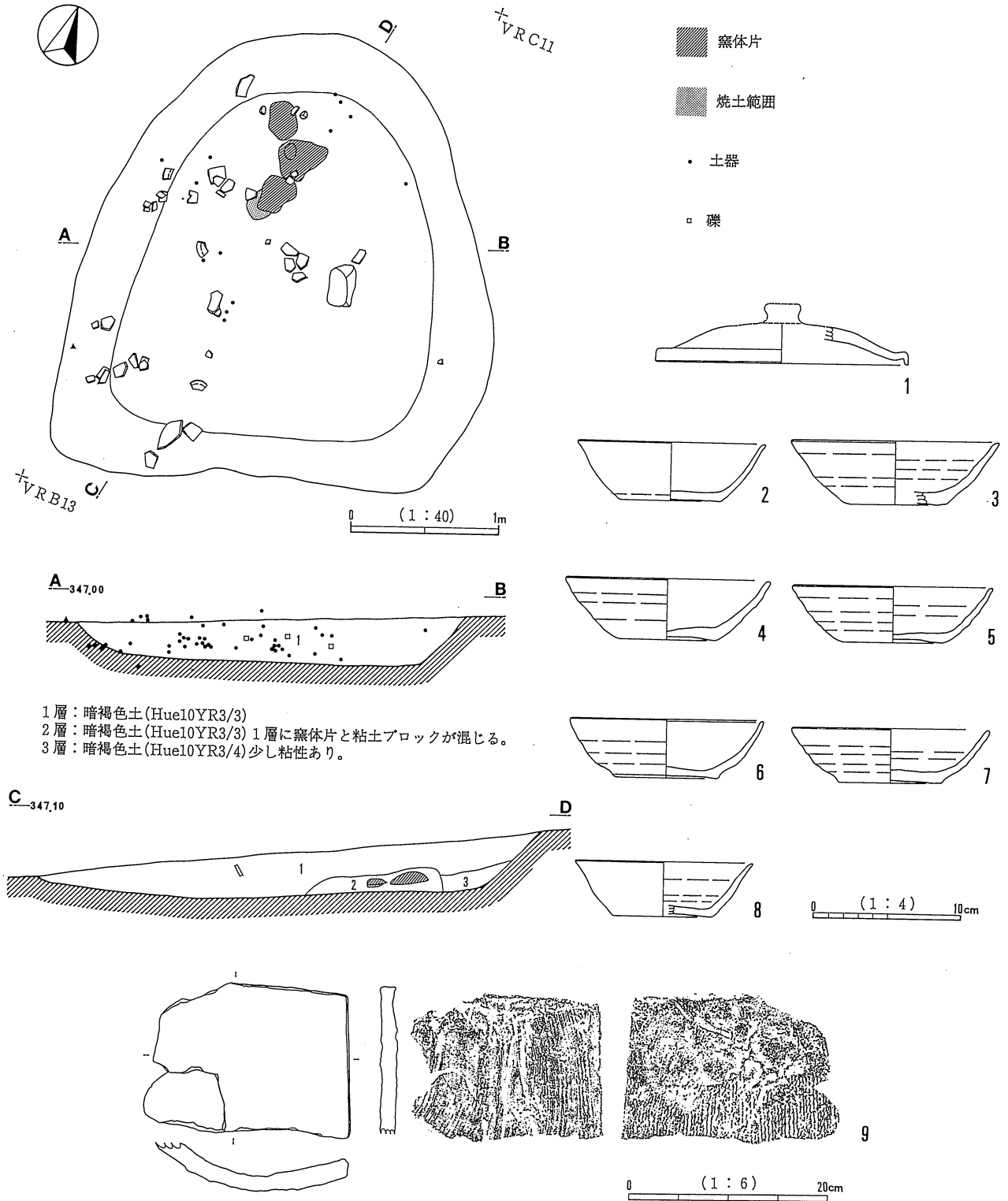
第177図 清水山窯跡 SK11・13



第178図 清水山窯跡 SK01・02・06・07・08・10

K06は直径1mの円形で、深さ10cm、出土遺物なし。SK07は104cm×74cm、深さ40cm、土師器片が出土。SK08は100cm×94cm、深さ22cm、須恵器甕片が出土。SK10は1.8m×1.4mの、深さ40cmの不整形な形状を呈し、土坑周辺には浅いピットが7個検出された。

上記の土坑は出土遺物からの時期の特定は困難であり、遺構外の出土遺物も考慮に入れると、奈良・平安時代のいずれかの時期のものと思われる。

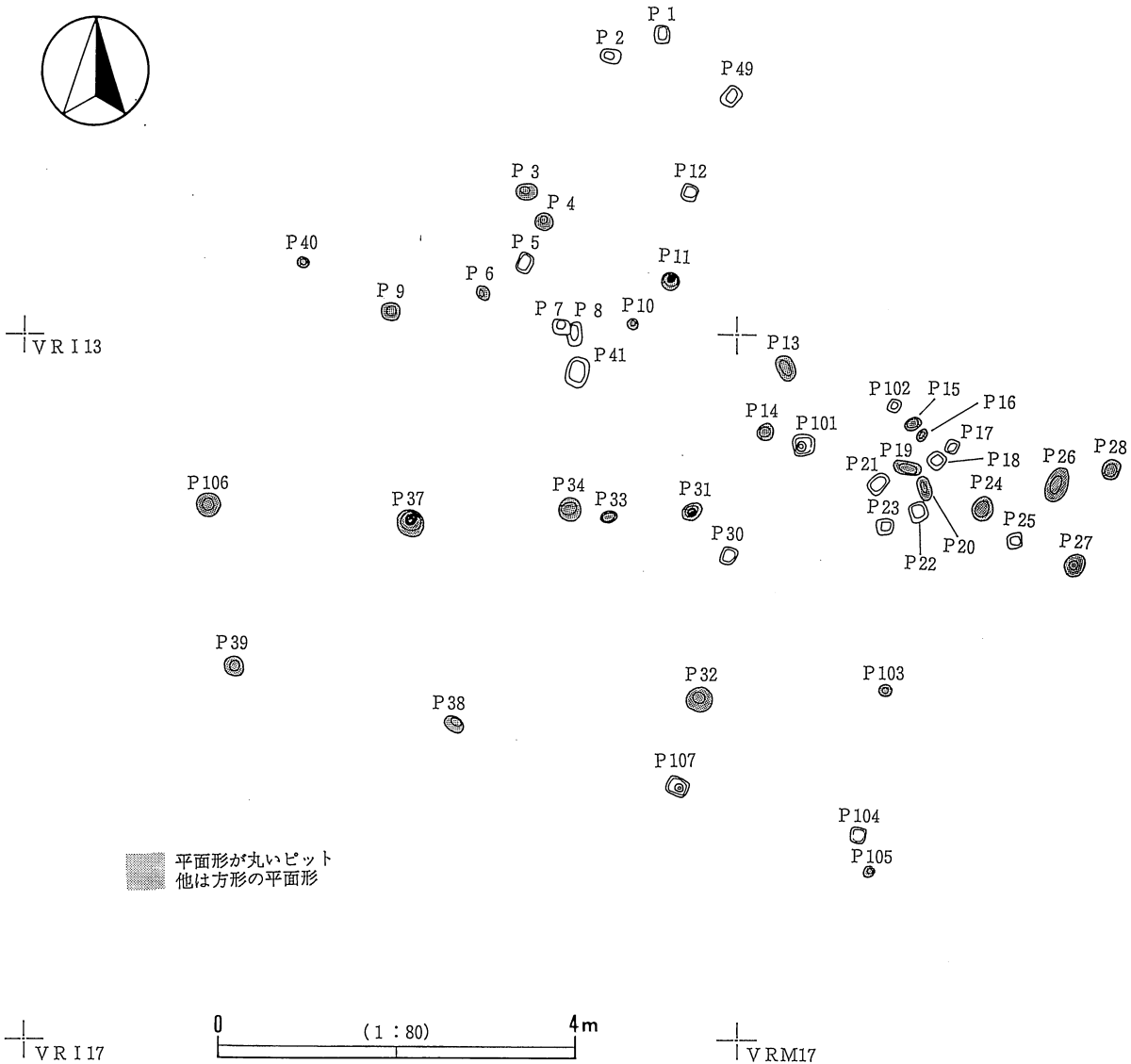


第179図 清水山窯跡 SX01

SX01 (第179図)

南斜面(③区)の裾野の緩斜面に位置する。3.2m×2.8mの不整な形状を呈する竪穴状の遺構である。深さ28cmで床面は平坦であるがやや傾斜している。図に示した焼土範囲は覆土中に認められたもので火床面とは断定できない。また覆土下層には窯体片が含まれており、焼土範囲の周辺に特にまとまって見られた。遺構の北側には焼土、窯体、炭化物が見られ、出土遺物には須恵器甕・壺・杯A・杯蓋、土師器、瓦などが出土しており、特に杯Aが多く見られた。遺物は覆土全体に認められ、床面の遺物は少ない。窯体片が出土していることなどから須恵器生産にかかわる遺構と考えられるが、清水山南斜面に窯跡は発見されず、北斜面の窯跡又は近接する沢田鍋土遺跡の窯跡より新しく、同時期の窯跡は隣接地には認められない。本遺構が焼成遺構であるとは考えられず遺構の性格は不明である。

出土遺物(第179図) 1は蓋Bである。天井部が高く富士山形をしており、口縁部の立ち上がりから天井部にかけて沈み込みの屈曲がみられる。ツマミは欠損している。2~8は杯Aである。回転糸切りの底部で、底径は9.5cm前後、逆台形で口縁部が大きく開き外傾は強く、法量もある程度一定である。9は布目瓦である。凸面には撚糸の平行タタキ目残り上部の部分ヨコナデによりタタキ目がスリ消されている。凹面は桶巻き痕と糸切り痕が残る。瓦は胎土や焼成などの特徴から池田端2号窯のものと類似する。



第180図 清水山窯跡 ピット群

4 ピット群 (第180図)

③区南端に径20cm~30cmのピットが約10m四方の中にまとまって検出された。ピットの平面形は円形のものと同方形のものに分けられる。掘立柱建物跡と思われる配列は確認できない。出土遺物はP13・18・107から須恵器、P19からは縄文時代中期の土器片が出土している。出土遺物と覆土から奈良・平安時代の遺構と考えられ、P18出土の須恵器は奈良時代前半期のものである。

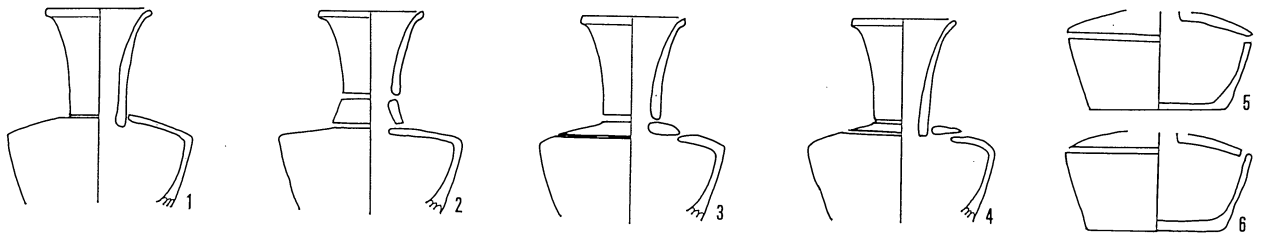
註

(1) 猿投窯第Ⅲ期東山50号窯以降の甕に鉄分の多い黄土を刷毛を用いて塗布し、黒褐色・暗赤褐色に発色したものがみられるようになると記述がみられる(斎藤 1995b)。椀Cの黒褐色や暗褐色の発色したような色彩は鉄分の多い黄土を塗布したものではないかと思われる。

(2) 長頸壺の接合方法 (第181図)

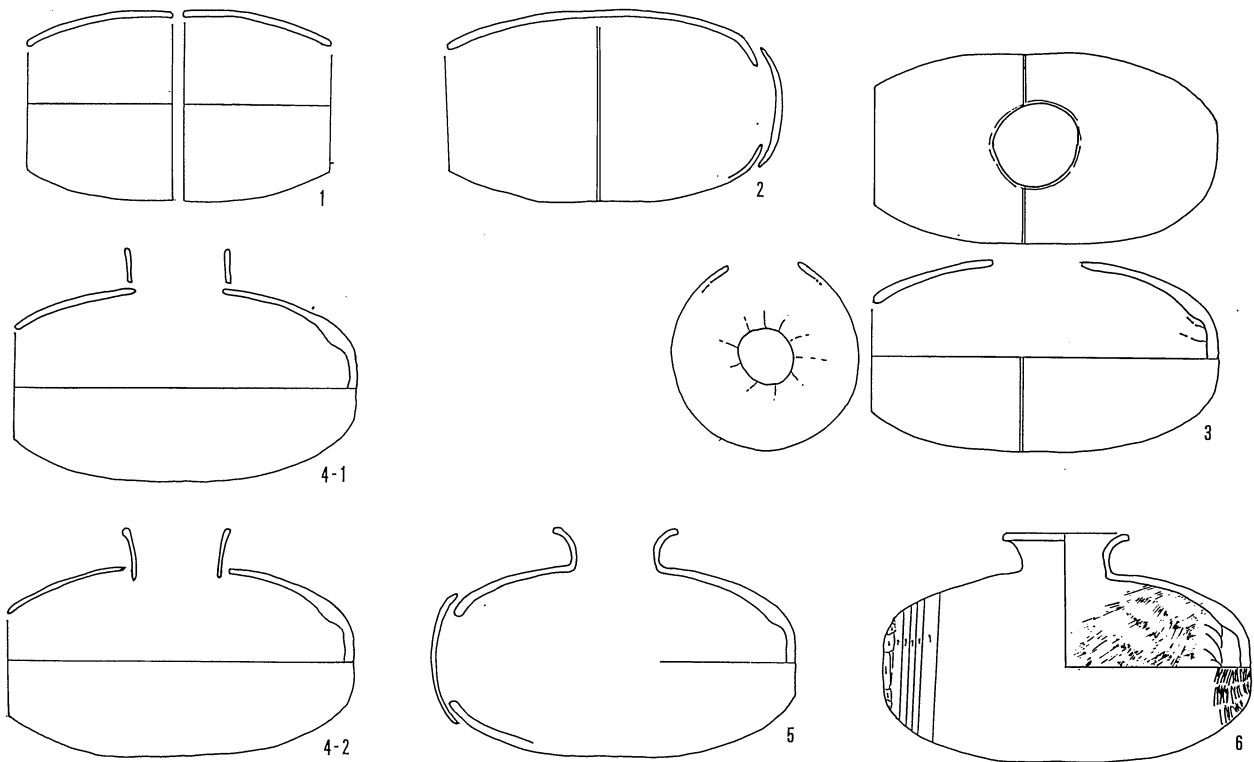
(3) 清水山窯跡における横瓶の製作方法は次のとおりである。(第182図)

- ① 同じ鉢形の底無し容器を、輪積みで製作する。
- ② 両者を口縁部で接合。(第182図1)
- ③ 平行タタキで外面を調整。(第175図141)
中央の接合部に割付線をいれる。(第182図2)



第181図 清水山窯跡 長頸壺の頸部・肩部接合方法

- ④ 内面を回転ナデで調整。
- ⑤ 一方の口に蓋をし、平らに削り調整。(第182図2)
- ⑥ 平らにした被蓋部の接合面を回転へら削りして調整。(第174図136・139、第175図142)
- ⑦ 口頸接合部に穴を開ける。(第182図3)
- ⑧ もう一方の口を拵って蓋をする。(第182図3)
- ⑨ あらかじめ作ってあった口頸部を体部に接合する。接合にはa・b2通りある。
 - a 口頸接合面に1~2本の沈線を巡らせ接合面を整える。
 - 2 口頸接合面に口頸部を乗せる。(第174図122・128・129・141) (第182図4-1)
 - b 口頸部を体部接合口に差し込む。(第174図118・120・131・133) (第182図4-2)
- ⑩ 口頸部接合口から手をいれ、被蓋内面を指オサエしながら外面をタタキ調整。(第182図5)
- ⑪ 被蓋内面をナデ調整やへら削り調整。
- ⑫ 平らな被蓋部を下にしてロクロ台に乗せ、被蓋部外面を回転へら削り(第174図-134・135・138・140)やハケ(第174図137)等で調整。(第182図6)



第182図 清水山窯跡 横瓶の製作方法

第4節 中世・近世の遺構と遺物

1 遺構

SM01 (第183図)

山頂部に認められた直径約2.7mの低いマウンドである。マウンド及びその周辺の表土を除去すると、礫が多量に出土したが、人為的に積み上げた様子は見られない。この礫に混じって3点の風空輪(第184図7・10・11)が出土したが、五輪塔の他の部分は認められず五輪塔が山頂に建てられていた様子はいかたがえない。中野市教育委員会が調査した清水山西斜面の第2地点で中世墓址群が調査され多数の五輪塔が出土した(中島 1994)。山頂部で出土した五輪塔も西斜面よりもたらされたものであると思われる。礫の集中区の下には4基の土坑が確認されたが、出土遺物はなくマウンドとの関係も不明である。なお、山頂部南半分から南斜面にかけて、火薬庫建設のため掘削されており、山頂部の遺構の全容はつかめない。

風空輪の他に、寛永通宝2点が出土した。なお、山頂部からは珠洲系の甕の破片が数点出土した。

SM02 (第183図)

山頂部に認められた、方形の基壇状の遺構である。南側は削平され、周辺部を囲む石が部分的に残されているのみで、その規模は確認できない。出土遺物なし。

SK12 (第184図)

北斜面(①区)中腹に位置する。縦4.0m以上、幅1.8m~2.2mの台形を呈す。斜面上方では深さ約35cmの壁面を持つが、斜面下方では立ち上りは認められない。床面中央部に幅20cm、深さ2cm~4cmの浅い溝



第183図 清水山竊跡 山頂部の遺構

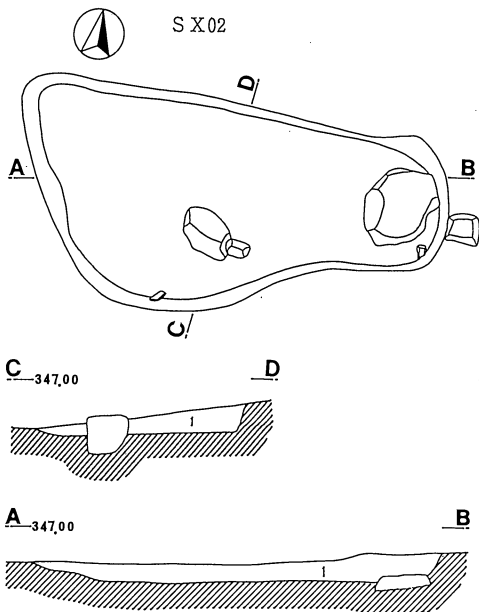
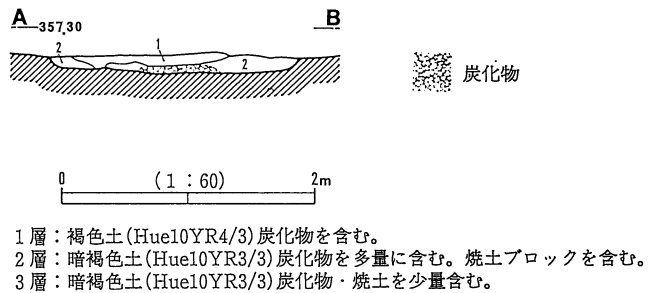
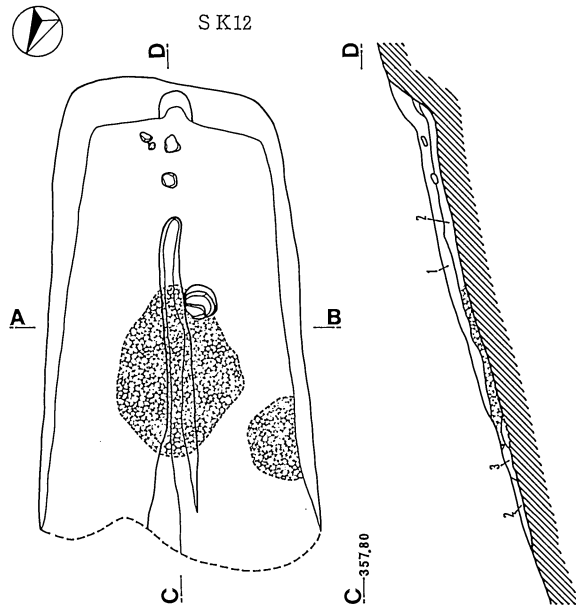
がある。覆土下層からは多量の炭化材が出土しており、任意に選び出した10点の樹種同定の結果、コナラ節が6点、クヌギ節が4点であった。床面では部分的に火床面が認められ、炭化材の出土状況などから炭焼窯と判断される。出土遺物はなく、覆土から中世以降のものと判断した。

SX02・06 (第184図)

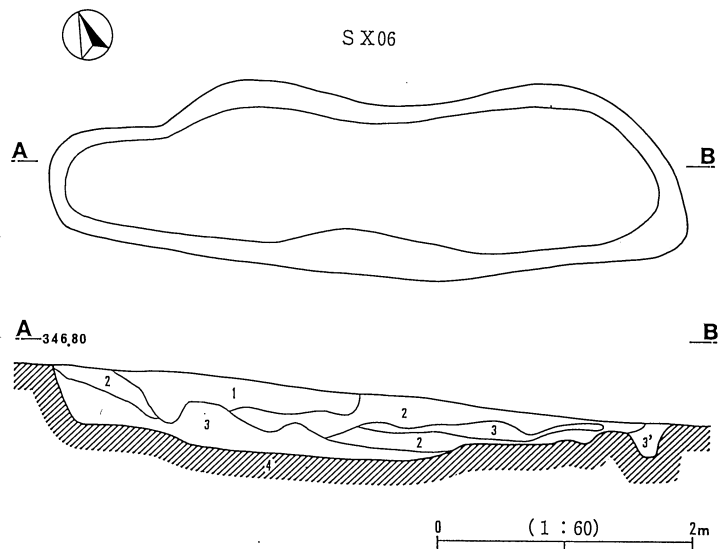
SX02は3.5m×1.6m、深さ0.2mの不整形形状を呈する。底面に50cmを越える礫が2か所露出している。SX06は5.5m×0.8m、深さ0.7mの細長の不整形形状を呈する。粘土層を掘り込んでおり、覆土の状態から粘土採掘跡の可能性があり、時期を示す出土遺物はなく共に時期不明である。

SD01・02 (第186図)

③区の間掘に確認された溝で、遺構配置図にスクリーンで位置を示した。いずれも幅120cm、深さ40cmで、2.8mの間隔で平行している。等高線とは斜交しており、南西側の端は確認されたが、北東側にはさらに伸びている。磁器の小片が1点出土した。



1層：褐色土(Hue10YR4/4)硬く締まった砂質土。褐鉄鉱が全面に沈着。

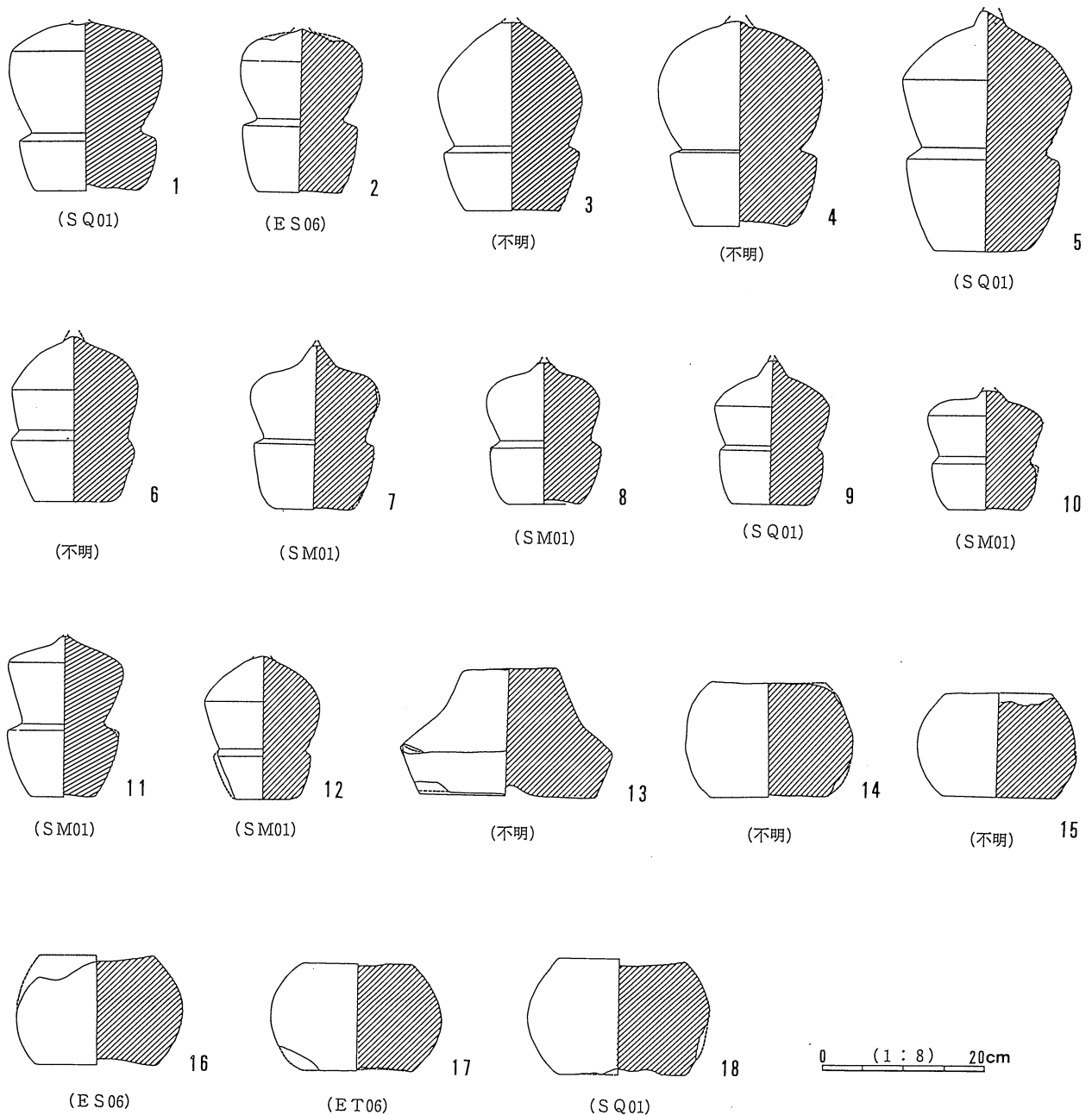


1層：黒褐色土(Hue10YR3/1)締まりのある砂質土。
 2層：黄褐色土(Hue10YR5/8)
 3層：にぶい黄橙色粘土(Hue10YR6/3)青みがかかった粘土層(3'は黒色をおびる粘土層)
 4層：にぶい黄橙色粘土(Hue10YR7/3)地山粘土層。

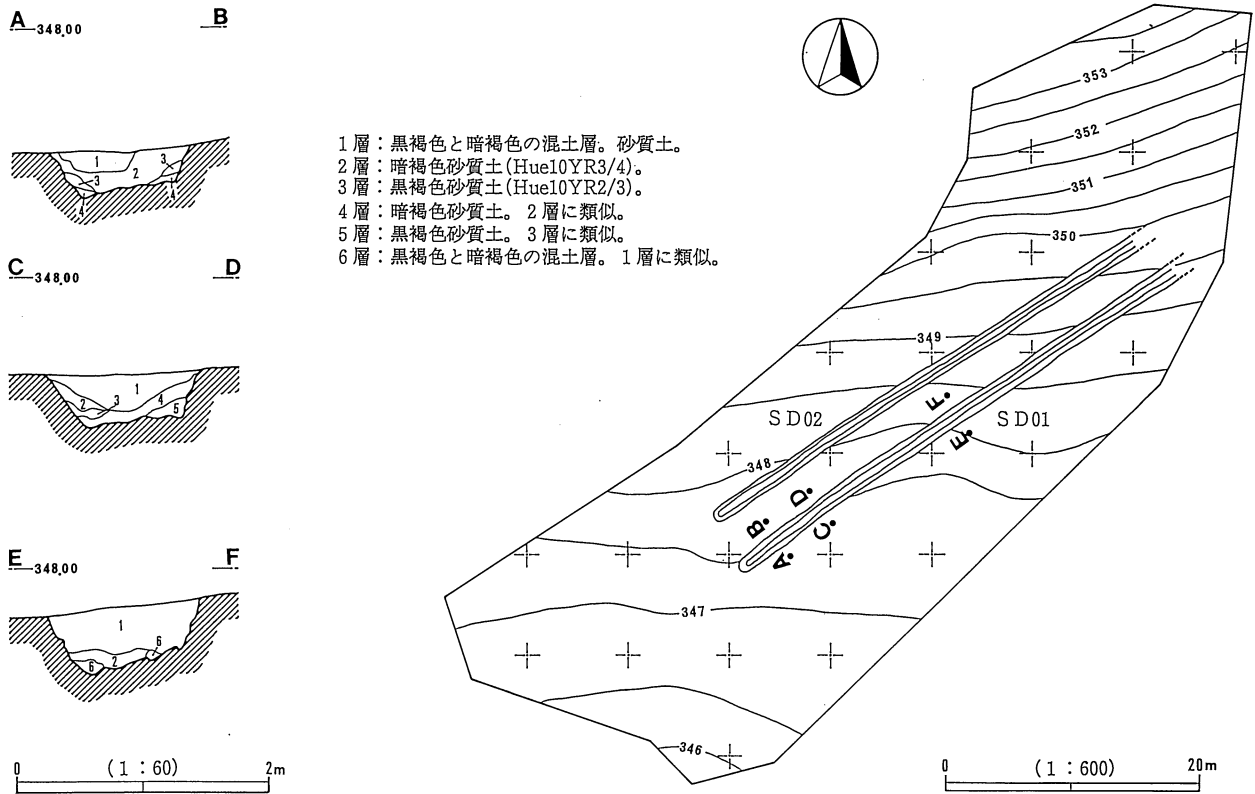
第184図 清水山窯跡 SX02・06・SK12

2 出土遺物 (第185図)

①区では珠洲系の甕片数点と寛永通宝2点、五輪塔が出土した。五輪塔は風空輪12点(1~12)、火輪1点(13)、水輪5点(14~18)が出土した。すべて安山岩である。地輪は1点も認められないことから調査区内で出土した五輪塔は調査区外の西斜面で確認された中世墓址群より持ち込まれたものと思われる。この中世墓址群は出土した蔵骨器、板碑の年代から「成立期の上限は13世紀、下限については明らかでないが近世以降の遺物は確認できないことから近世までは継続しなかった」(中島1994)とされており、これらの五輪塔の製作年代も近世には降らないものと思われる。①区FA02グリッド周辺にまとまって出土した他は、山頂部と灰原より出土、火輪は③区南斜面より単独で出土した。



第185図 清水山窯跡 出土五輪塔



第186図 清水山窯跡 S D01・02

第5節 ④区(低湿地)の調査

1 調査の概要

本調査区は清水山の北東に広がる低湿地の西端に位置し、東西約15m南北約25mの範囲を調査した(第2図G)。低湿地は大きな褶曲作用による凹地に雨水などが集まった湿地と考えられ、東西約150m南北約350mの細長い形状である。近年までは池であったが、水田を経て現在は暗渠施設を設置し畑地として利用されている。

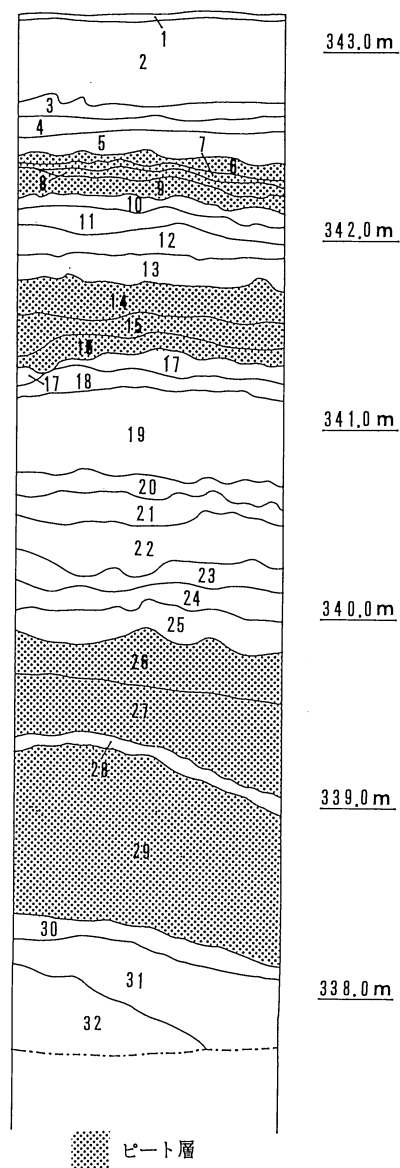
試掘により、土坑と思われる掘り込みが確認されていたが、本調査で遺構は検出されず、12層より須恵器杯Bが1点出土したのみである。調査は地表下5mまで掘り下げ、低湿地の基盤層と思われる硬いシルト層に達した。土層は粘土・シルトと泥炭層の互層となり、多量の植物遺体が出土した。出土した木材については調査現場で加工の有無を確認したが、加工痕が認められるものはなくすべて自然遺物であった。そこで、周辺には奈良・平安時代の窯跡が多数発見されており、須恵器生産が窯跡周辺の植生に影響を与えたかどうかを探るために、放射性炭素14年代測定、樹種同定、種子同定、花粉分析を行った。植物遺体・土壌のサンプリングは埋蔵文化財センターで行い、各種分析は(株)パレオ・ラボに委託し実施した。なお、分析結果の詳細は上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14(平成9年度刊行)に掲載する。

2 層序とその年代

第187図に調査区北壁の土層を示した。土層は低地の中心部の東側に向かってわずかに傾斜しており、基盤層も更に深くなっていく。植物遺体の純粋な堆積層となるピート層は大きく分けて4枚認められる。すなわち6～10層と14～16層と26・27層と29層である。このピート層の間には粘土またはシルトの層が堆積しており、湿地内の堆積環境が繰り返し変化していることがうかがえる。なお、28層は火山灰などの一過的な堆積であり堆積環境の変化によるものではないと思われるが、28層の供給源の特定は行えなかった。

次に各層の堆積年代であるが、12層より須恵器杯片が出土しており、12層の堆積は奈良・平安時代以降である。他に出土遺物はなく、12層以下の年代については各層出土の植物遺体の放射性炭素14年代測定による。以下に各層の概要を記し、当該層位に放射性炭素14年代測定による年代を示す。

- 1層：灰黄褐色土(Hue10YR5/2)現在の耕作土。
- 2層：褐灰色シルト質植土(Hue5YR5/1)水田耕作土。
- 3層：暗赤灰色シルト質植土(Hue105R3/1) 黒色と褐色シルトが混じる。
- 4層：赤黒色ピート(Hue7.5R1.7/1)粘土が多く混じる。
- 5層：赤黒色ピート(Hue10R1.7/1) 4層より少量の粘土が混じる。
- 6層：にぶい赤褐色ピート(Hue5YR4/3)
- 7層：黒褐色ピート(Hue5YR2/1)部分的に見られる層。
- 8層：灰黄褐色ピート(Hue10YR4/2)部分的に見られる層。
- 9層：暗褐色ピート(Hue10YR3/3)褐色粘土を含む。上下の層に比べ流木が多く見られる。
- 10層：褐色ピート(Hue7.5YR4/3)
- 11層：暗青灰色シルト質土壌(Hue10BG3/1)ピートを含む。
- 12層：褐灰色シルト質土壌(Hue7.5YR4/1)ピートを含む。黒色シルトが斑紋状に混入する。須恵器杯B出土。
- 13層：赤黒色シルト質土壌(Hue5B1.7/1)多量のピートを含み、灰白色の細粒砂を帯状に混じる。4・5層に類似。(5,290BP±100)
- 14層：暗赤褐色ピート(Hue5YR3/2)枝などの流木を含む。(4,900BP±90)
- 15層：黒褐色ピート(Hue5YR3/1)14・16層に比べピート(植物遺体)が少ない。(4,910BP±100)
- 16層：暗赤褐色土(Hue5YR3/2)枝などの流木を含む。(5,790BP±100)
- 17層：暗褐色シルト質土壌(Hue10YR3/3)ピートを含む。粗粒砂をブロック状に含む。(5,990BP±100)
- 18層：黒褐色砂土壌(Hue10YR3/2)黄褐色ピートが薄い筋状に堆積する。(6,400BP±110)
- 19層：黒褐色砂土壌(Hue10YR3/1)少量のピートを含む。



第187図 清水山窯跡 ④区の土層断面図

(6,610BP±110)

- 20層：暗灰色シルト質土壌(HueN3/)褐色、黒色の粗粒砂を含む。(5,940BP±130)
 21層：黄灰色重埴土(粘土)(Hue2.5Y4/1)ピートを少量含む。(5,890BP±100)
 22層：黒色軽埴土(砂を混じる粘土)(Hue7.5YR1.7/1)硬く締まった層。(7,400BP±120)
 23層：褐灰色粘土(Hue7.5YR5/1)黄褐色の粗粒砂を混じる。(6,300BP±140)
 24層：褐灰色粘土(Hue7.5YR6/1)黒色粘土をまだらに混じる。
 25層：暗赤褐色粘土(Hue5YR3/2)粘土とピートが混じる。(21,760BP±410)
 26層：暗赤褐色ピート(Hue2.5Y3/4)(27,090BP±720)
 27層：暗赤褐色ピート(Hue2.5Y3/4)(22,990BP±490)
 28層：浅黄色砂土(Hue2.5Y7/3)
 29層：暗褐色ピート(Hue5YR3/6)下部では粘土の割合が増える。(28,900BP±1,160)
 30層：灰褐色粘土(Hue7.5YR4/2)細かな植物遺体を混じる。(26,620BP±930)
 31層：オリブ灰色軽埴土(砂を混じる粘土)(Hue10Y6/2)わずかに細砂粒を混じる。硬い基盤層。
 32層：緑灰色軽埴土(砂を混じる粘土)(Hue5G5/1~6/1)ごくわずかの砂を混じる。

3 泥炭層採取資料よりみた清水山周辺の環境変化

花粉化石の分析では、各層の花粉化石の組成の比較から、分析者の吉川昌伸氏は清水山周辺の森林植生は5層から30層までを5期に分け植生の変遷を示した。すなわち、カバノキ属を主とする落葉広葉樹林(29・30層)、針葉樹林の拡大(25~27層)、ツガ属林の拡大(23・24層)、コナラ亜属を主とする落葉広葉樹林(18~22層)、コナラ亜属林とクリ林(5~17層)と変遷したとし、更に、22層と23層の間に植生の大きな不整合面が認められることを指摘している。年代測定では、23層と25層の間に時間的不整合があり、花粉分析が示す不整合面と一致しない。23層は植物遺体をほとんど含まない層であることから、年代測定の分析資料が上層から混入した可能性を考慮したい。また年代測定の結果をそのまま用いると13層は縄文時代中期の年代を示しており、12層は奈良・平安時代以降であることから、縄文時代後期から古墳時代までの堆積層が存在しないこととなる。23層前後で見られた不連続面が13層上面でも存在するのかもしれないが、土層の観察では不整合な面は観察されず、年代測定の誤差あるいは分析資料の混入などの堆積状況も考慮しておかなければならない。以上の2点を考慮して植生の変化を見ると、23層から30層はカバノキ属からトウヒ属・ツガ属などが主体となる旧石器時代の植生を示し、18層から21層はコナラ亜属を主体とする縄文時代前期から中期の植生を示し、5層から17層はコナラ亜属に加えクリ属が認められる植生であるが、縄文時代中期以降少なくとも古代に至るまで植生の変化は余り見られないことを示している。5層の堆積年代を知る資料はないが、須恵器が出土した12層以降約50cmの堆積が見られ、それ以前の堆積速度と比較して、5層は少なくとも12層の堆積後数百年後の堆積層と思われる。縄文時代の堆積層とされる17層以降少なくとも中世までは植生に大きな変化は見られないものと思われ、奈良時代前半から平安時代にかけての周辺の窯跡の操業による植生の大きな変化は認められない。

また、各層で任意の一平面に確認された木材のすべてを採取し、樹種同定を行った。採取面積は各層ともほぼ同じであることから、各層のサンプル数の増減は各層に含まれる木材の増減をある程度示している。その結果、22層と25層を境に出土木材が大きく変わり、花粉化石群の分析と整合することが明らかとなった。すなわち、25層から30層にかけてはトウヒ属・カバノキ属が主体となり、22層以上にはトネリコ属を主体としクヌギ節・コナラ節が見られる。クヌギ節・コナラ節は17・18層には比較的多く見られるものの、16層以上では激減し12層以上では1点も認められない。花粉分析では大きな変化が認められなかった5層

から17層の間で、木材の樹種同定ではクヌギ節・コナラ節の出現率に変化が見られる。湿地周辺の池田端窯跡、清水山窯跡、沢田鍋土遺跡の各窯跡から出土した炭化材の樹種同定ではほぼ全点がクヌギ節・コナラ節であった。すなわち、燃料として多量のクヌギ節・コナラ節が切り出された可能性がある。須恵器が出土した12層前後を境にクヌギ節・コナラ節が見られなくなることから、湿地周辺ではクヌギ節・コナラ節が燃料として切り出されたために減少したと考えられる。花粉は広域の植生を示し、木材は局地的な植生を示すことから、高丘丘陵全域では大きな植生の変化は見られないが、窯跡周辺の局地的な植生は変化した可能性がある。この仮説が肯定されるなら、16層と17層の境にクヌギ節・コナラ節の出現率の変化が見られることから、16層の出現率の低下が窯の操業と関連すると考えられ、16層は清水山・池田端などの窯跡が出現する奈良時代の堆積層である可能性がある。しかしながら、放射性炭素14年代測定の数値と大きな差があり、堆積年代については更に検討を要する。

なお、9層・15層・19層・27層・29層の単位体積当りの種子などの植物化石の同定をしたところ、19層には植物化石が確認されなかったものの花粉分析の結果と矛盾しない結果を得た。更に、前項で大別した4枚のピート層で出現する種類や数に明瞭な差が認められ、それぞれのピート層を形成した堆積環境も異なっていたことが伺えるようである。筆者には更に踏み込んだ考察はできないが、上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14（平成9年度刊行予定）に各分析の結果を掲載するので参照して頂きたい。

引用・参考文献

- 岐阜市教育委員会 1981『老洞古窯跡群発掘調査報告書』
- 中野市教育委員会 1993a『清水山古窯跡発掘調査報告書』
- 中島英子 1994 『清水山古窯跡(古窯址群・中世墓址群)発掘調査報告書』中野市教育委員会
- 斎藤孝正 1995a I第3章 1 猿投窯と出土遺物 『須恵器集成図録』第3巻東日本編1
- 斎藤孝正 1995b I第3章 3 美濃須恵窯と出土遺物 『須恵器集成図録』第3巻東日本編1
- 後藤健一 1995 II第3章 1 湖西窯跡群 『須恵器集成図録』第3巻東日本編1
- 出越茂和 1995 III第3章 窯跡と出土須恵器 『須恵器集成図録』第3巻東日本1

第7章 池田端窯跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

池田端窯跡は中野市大字立ヶ花字清水山裏387他に所在する。遺跡は千曲川に面する高丘陵上の南端部に位置しており、千曲川からは約800mの距離にあり、前章で述べた清水山窯跡の北側に隣接する小高い丘に立地する。窯跡は南東斜面と東斜面に確認されており、古くから布目瓦の採集される遺跡として知られていた。採集された多量の瓦は高丘小学校に保管されている。遺跡の南東側には湿地があり、窯跡が確認された斜面はこの湿地に面している。なお、平成2年度の文化課の試掘により、この湿地は清水山窯跡の遺跡範囲に含まれており、その詳細については第6章で記述した。本遺跡の調査事例はなく、灌漑施設の配管埋設時に遺物が出土したのみである。丘の北側と頂上の一部は調査時点ですでに削平されており、調査結果から推定するに、削平された北端部分にも、窯跡が存在した可能性がある。また、頂上部分は、平坦な地形であり、工人集落などが立地する可能性もあるが、調査対象地区ではすでに削平されているために確認はできない。

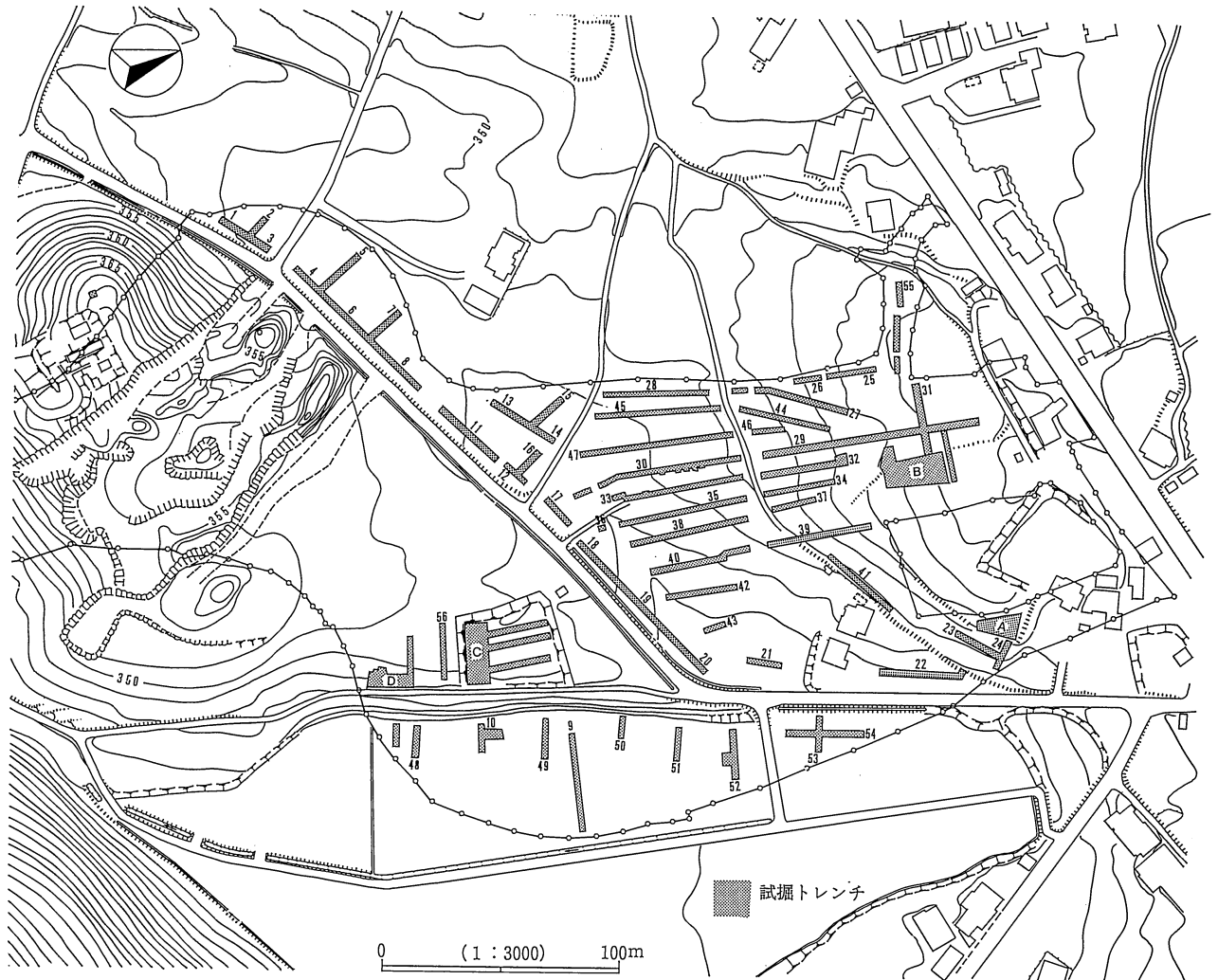
2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法 (第2・188図)

本調査に先立ち1991年に試掘調査を行った(第188図)。調査は池田端窯跡の高速道路用地内全域と清水山窯跡の一部を対象範囲とし、重機を使用したトレンチ調査を行った。また、A～Dの4地点で面的に表土を除去し遺構検出を行った。その結果23・24トレンチで窯跡、22トレンチで灰原、1・9・18・32・33・35・38・40～42・44～47・55トレンチで土坑が検出された。A区では須恵器・瓦などが出土したものの、C・D区では遺構・遺物は検出されず、B区は削平されており遺構・遺物は確認できなかった。また、30トレンチでは縄文早期押型文土器と石器が、34トレンチでは古墳時代土師器が出土した。試掘の結果、29トレンチの北半分から31トレンチ・B区周辺は攪乱もしくは削平されており、本調査不要であり、また15・27・28トレンチ周辺の高速道路用地内北側には遺構が希薄であることが明らかとなった。

発掘調査範囲は前年度の試掘調査に基づき設定し(第2図・188図)、調査の便宜上、窯跡が集中する北側の一角を①区、その南側の粘土採掘の土坑群が確認された緩斜面部分を②区、頂上部から西斜面にかかる細長く伸びた突出部を③区とした。②区と③区の間については前年度の試掘調査により、遺構・遺物が無いと判断されており、調査の対象から除いた。その他の部分については全面表土剥ぎを行い、遺構検出を行った。②区については地山が粘土であるために、乾燥により土が非常に硬くなり、移植ゴテ、両刃鎌では掘れないので、シャベルなどを用いた。③区と、②区の頂上部付近で旧石器時代の遺物の有無を確認するために2m×2mの試掘坑を掘ったが、ブロックは確認されなかった。他の地区での旧石器の確認調査は行っていない。

グリッドは長野県埋蔵文化財センター仕様により設定し(第1章第2節3項を参照)、遺構外の遺物は2



第188図 池田端竊跡他の試掘調査

mグリッド毎に層位別に取り上げた。また、②区では遺構検出時に取り上げた遺物で、プランがはっきりしない遺構に所属するものは仮に通しナンバーをつけて取り上げ、整理時に各遺構の遺物に戻し、注記を変更した。なお、グリッド設定は、(株)写真測図研究所に委託した。

遺構の平面図実測では、②区の土坑群は空中写真測量、①区の竊跡ではコーディクシステムによる単点測量を併用した。いずれも(株)写真測図研究所に委託した。

(2) 調査経過 (調査日誌抄)

調査期間 試掘調査 1991年11月25日～12月13日 (清水山竊跡を含む)

本調査 1992年4月3日～8月4日

- 4月3日 機材搬入。①区表土剥ぎ開始。
- 4月8日 近世以降の溝の調査開始。
- 4月9日 1号竊(SY01)、2号竊(SY02)、5号竊(SY05)調査開始。
- 4月15日 灰原(SW02)掘り下げ、及び②区遺構検出開始。
- 4月20日 4号竊(SY04)掘り下げ、平竊であることを確認。
- 4月21日 調査区の端に7号竊検出される。
- 4月24日 6・7号竊調査開始。
- 4月27日 ②区の土坑群掘り下げ開始。



第189図 池田端寮跡 遺構配置図

- 5月6日 粘土採掘穴にミニバックでトレンチを入れる。
- 5月7日 ③区で住居址と土坑が検出される。
- 5月15日 飯山市埋蔵文化財センター常磐井さん他見学。
- 5月17日 現地説明会。約250名の見学者がある。
- 5月19日 五十嵐幹雄氏、上田市国分寺資料館学芸員倉沢氏、川上氏見学。
- 5月20日 湯本軍一氏見学。
- 5月25日 中野市教育委員会一行見学。
- 6月5日 ①区③区のラジコンヘリによる空撮。(※写真測図研究所に委託)
- 6月9日 旧石器の確認調査を行い③区の調査終了。
- 6月23日 4号窯、断ち割りを行い調査終了。
- 6月30日 ②区の写真測量のため空撮。(※写真測図研究所に委託)
- 7月3日 粘土採掘坑部分の粘土サンプル採取。②区旧石器の確認のための試掘坑を行い調査終了。
- 7月17日 6号窯調査終了。
- 7月23日 7号窯調査終了。
- 7月27日 機材撤収。本日を持って作業員は玄照寺跡に移動。
- 8月4日 2号窯の調査終了し、池田端窯跡の調査終了。玄照寺跡の調査に合流。

(3) 調査結果の概要

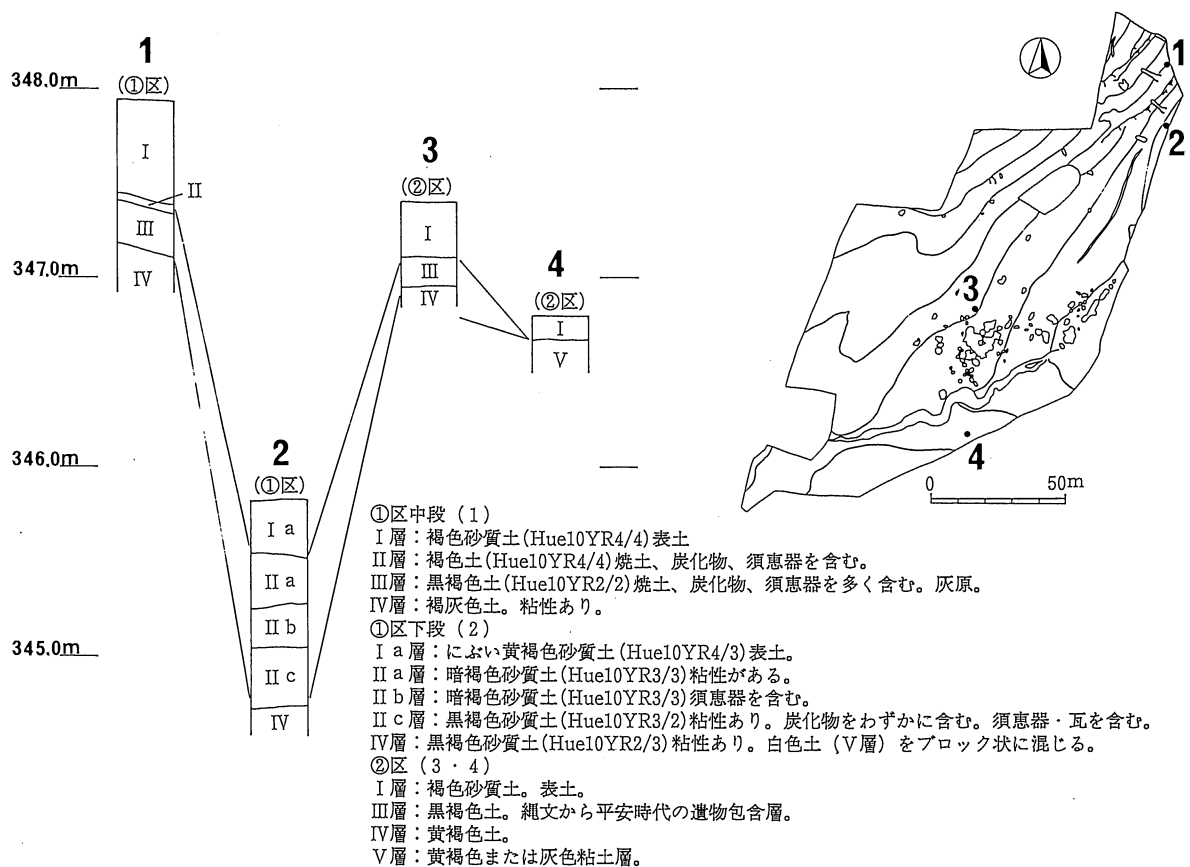
縄文時代では②区で土坑が5基と数点の土器と石器が出土したのみである。土坑は粘土採掘跡と考えられる。③区では古墳時代前期の竪穴住居址1棟と掘立柱建物址1棟が検出された。①区では6基の須恵器の窯跡が、またやや離れた②区の斜面部で1基の窯跡が確認された。奈良時代前半期のものが4基、平安時代のものが2基、窯跡の痕跡のみで時期不明のもの1基である。これらの窯跡のうち、2号窯(SY02)は須恵器と布目瓦を焼いた窯で、多量の平瓦が出土した。軒瓦は出土しなかったものの、窯内より出土した須恵器により、これらの瓦は奈良時代前半のものと判明した。①区の窯跡群から約100m離れた②区の平坦部では、同時期の粘土採掘跡と思われる土坑群が検出された。土坑群の中には、比較的整った形状のものも存在しており、粘土採掘以外の機能を有する土坑も存在する可能性もあるが、形状以外に粘土採掘坑と異なった点は指摘できない。粘土採掘跡群から窯跡群に向かって溝(SD12)が掘られており、土坑群と窯跡を繋ぐ何らかの施設であったと思われる。なお、①区を中心に近世以降の溝が多数確認されている。

(4) 基本土層 (第190図)

第190図に①・②区の層序を示した。各地点の層序は異なっており、それぞれを直接対比することは出来ないが、I層は表土、II・III層は縄文時代から平安時代にかけての遺物包含層、IV・V層は地山の土層である。なお、①区は地形が階段状にカットされているために直接の対比は出来ないが、遺物出土状況から1地点のIII層は2地点のIIb・c層に対比されるものと思われる。また、標高が低い部分にはより粘性の強い粘土質の土層が見られ、湿地部分に続くものと見られるが、湿地との接点は道路のため調査できず、湿地部の層序(清水山窯跡④区)との対比は出来ない。

②区のほぼ全域には粘土層が広がっており、粘土採掘坑群部分では厚さ20cm～40cmの粘土層が見られ、さらにその下層にシルト層、砂層と続く。遺構検出はIV層またはV層上面で行った。

③区では①・②区と層序が異なって、表土下は砂質土で遺物包含層は形成されていない。この違いは標高の差によって見られるようで、①区の標高の高い上段部分では③区に類似した層序を示す。



第190図 池田端竊跡 基本土層

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構

土坑が9基検出された。直径20mの範囲にまとまっており、類似した形状と規模を示している。いずれも粘土層を掘り込んでおり、粘土採掘跡の蓋然性が高い。出土遺物が少なく時期決定に根拠を欠くが、奈良・平安時代のもとの覆土の土質が異なっていること、遺跡全体の出土遺物は奈良・平安時代以外では縄文時代の遺物しか見られないことから、これらの土坑を縄文時代の遺構と判断した。

SK13 (第191図) 1.92m×1.20m、深さ20cmの不整な形状を呈する。底面は凹凸が認められる。土器、石鏃1点、剥片が出土した。

SK14 (第191図) 2.2m×1.0m、深さ60cmの楕円形を呈する。底面中央にピットがあり2段構造となる。石鏃1点出土。

SK82・85・86・100 (第191図) 当初、平面形状から複数の土坑が重複しているものと認識し、複数の遺構名をつけたが、切り合いが確認できなかったため一つの遺構と判断した。6.2m×5.56mの不整な形状を呈する。底面には複数のピットが認められ、一番深いところで96cmを測る。土器、磨石4点、敲石2

点、石皿1点、蜂巢石1点が出土した。

SK18 (第191図) 3.3m×1.5m、深さ50cmの不整な形状を呈する。底面は細かな凹凸が認められる。覆土は自然埋没と考えられる。出土遺物なし。

SK19 (第191図) 2.96m×1.6m、深さ64cmの不整な形状を呈する。底面は細かな凹凸が認められる。覆土は自然埋没と考えられる単層である。出土遺物なし。

SK48 (第191図) 3.8m×1.4m、深さ50cmの不整な形状を呈する。底面は凹凸が認められ、1層は自然埋没土で2・3層は地山の粘土が攪拌された状態である。出土遺物なし。

SK70A・B (第191図) SK70Aは3.3m×1.26m、深さ66cmで、覆土は自然埋没と考えられ、2層は地山部分の崩落である。粘土層を掘り抜いてその下の砂質土に達したところで土坑底面となる。SK70Bは1.52m×1.22m、深さ50cmの楕円形を呈する。

2 遺物

土器は楕円押型文土器1点と無文の土器片が数点出土し、石器は石鏃8点、有茎尖頭器1点、石匙1点、削器2点、打製石斧2点、磨製石斧1点、石錘1点、礫器2点、磨石・凹石18点、特殊磨石9点、敲石3点、石皿・台石6点、蜂巢石1点、石核3点、剥片23点が出土した。

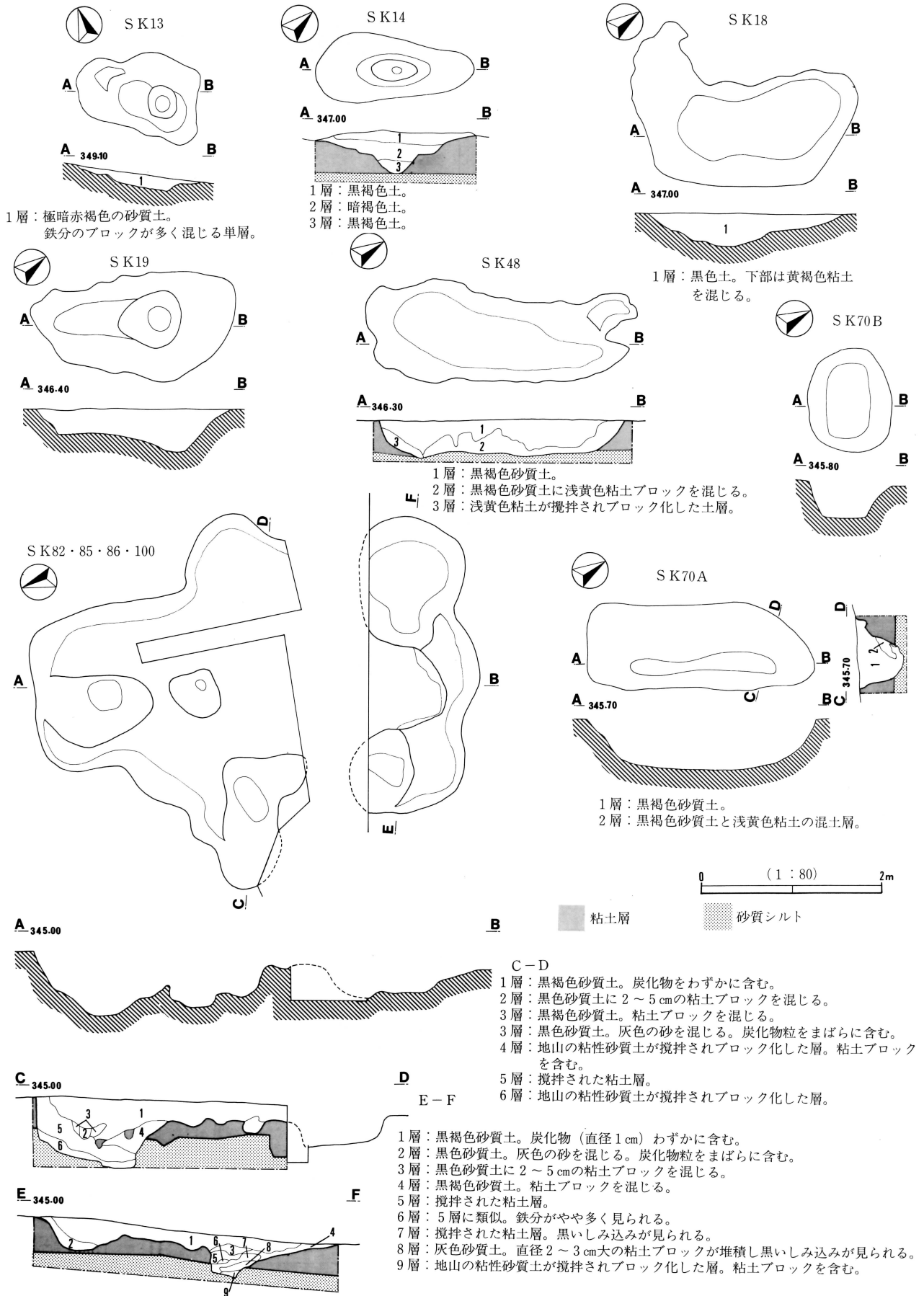
(1) 石鏃・有茎尖頭器 (第192図1～9) 1～8は石鏃で、1・6・7はチャート、2～5は黒曜石、8は珪質頁岩である。9の有茎尖頭器は黒曜石で茎部を欠損している。

(2) 磨石・凹石・特殊磨石・敲石 (第193・194図22～36) 22～23は磨石・凹石で、22・23・27は側縁部に敲打痕が認められ、24の側縁には特殊磨石と類似する機能面が認められる。28～33は特殊磨石で、機能面をスクリーントーンで示した。32の長軸端部には敲打痕が認められる。34～36は側縁に敲打痕が認められる敲石である。図示しないものも含めてすべて安山岩である。

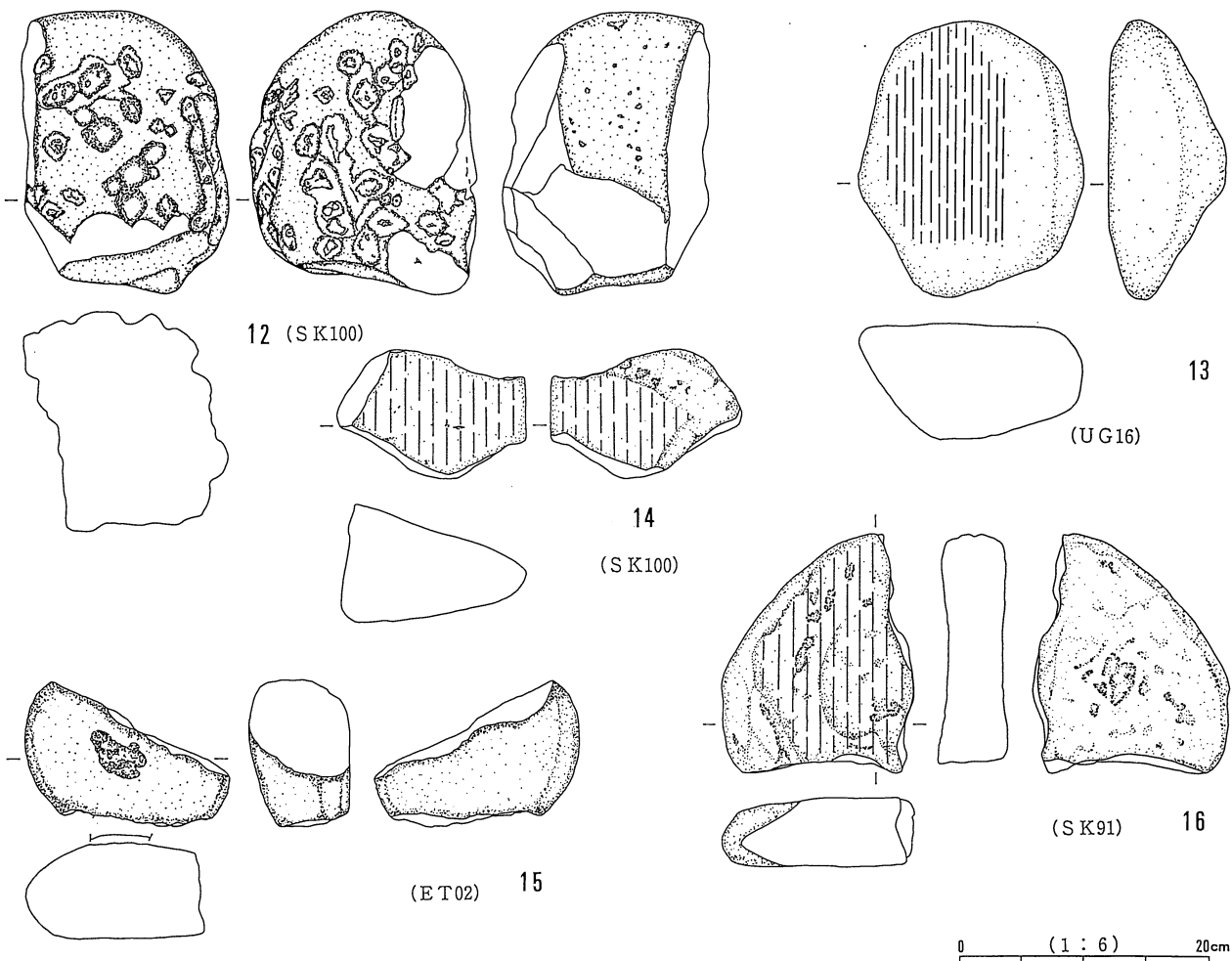
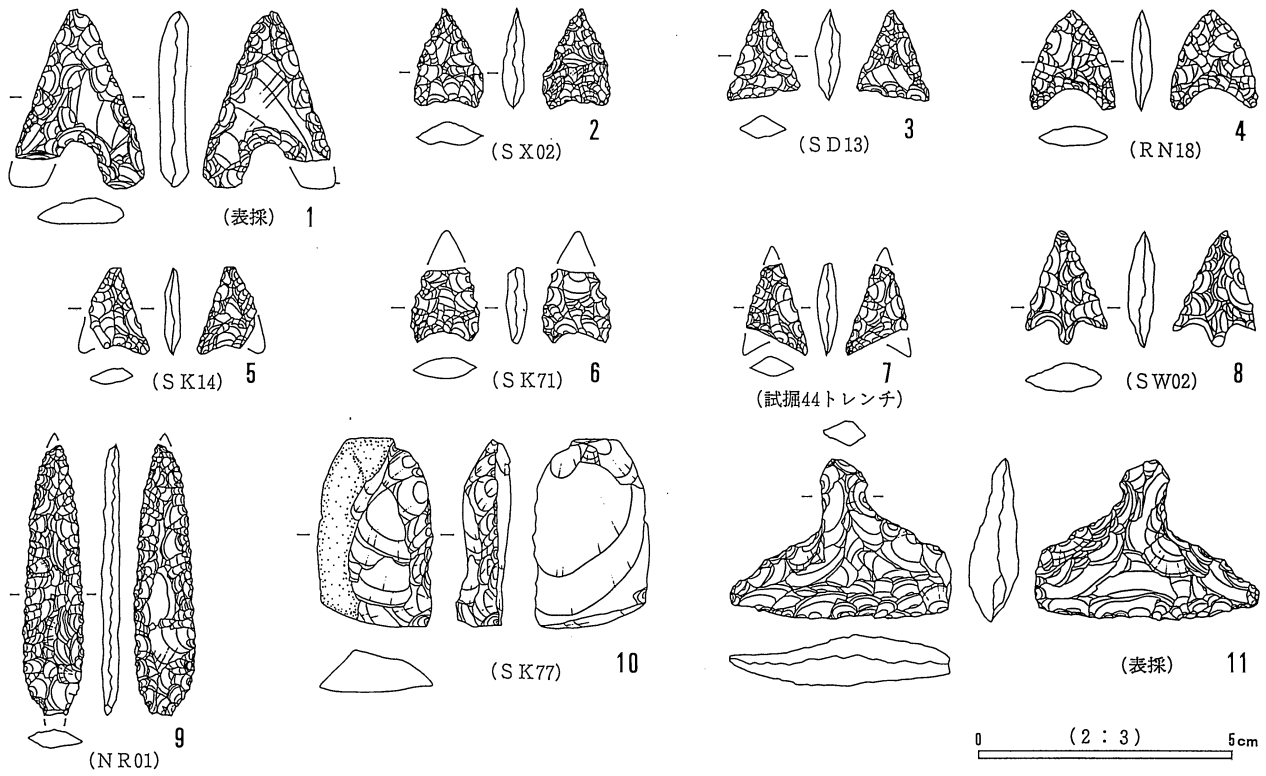
(3) 蜂巢石・石皿・台石 (第192図12～16) 12は蜂巢石で凹石と比べ深い窪みを多数有する。13・14・16は平坦な磨耗面を有する石皿、14は敲打による浅い窪みを有するもので、凹石が0.4kg～0.9kgであるのに対し、半分欠損した残存部の重量が1.7kgと凹石とは規格において区別され、台石とした。いずれも安山岩である。

(4) その他の石器 (第192・193図10・11・17～21) 10は頁岩、17は安山岩の削器。11は安山岩の石匙。18はチャート、19は安山岩の礫器。20は安山岩の打製石斧。21は安山岩の石錘である。図示していないが安山岩の磨製石斧が出土した。

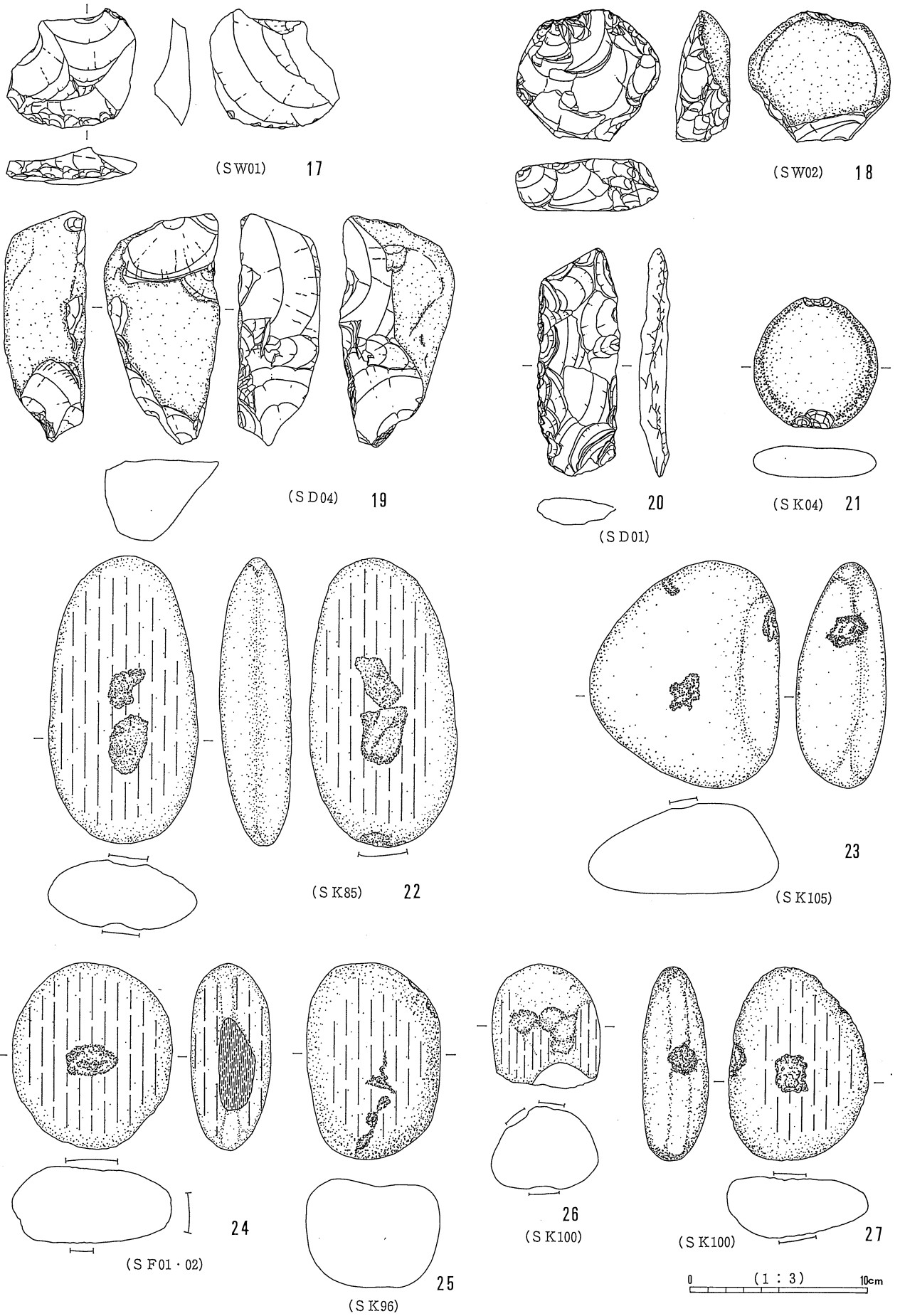
(5) 石核・剥片 石核は黒曜石1点、チャート2点である。剥片は黒曜石10点、チャート8点、安山岩4点、不明1点である。



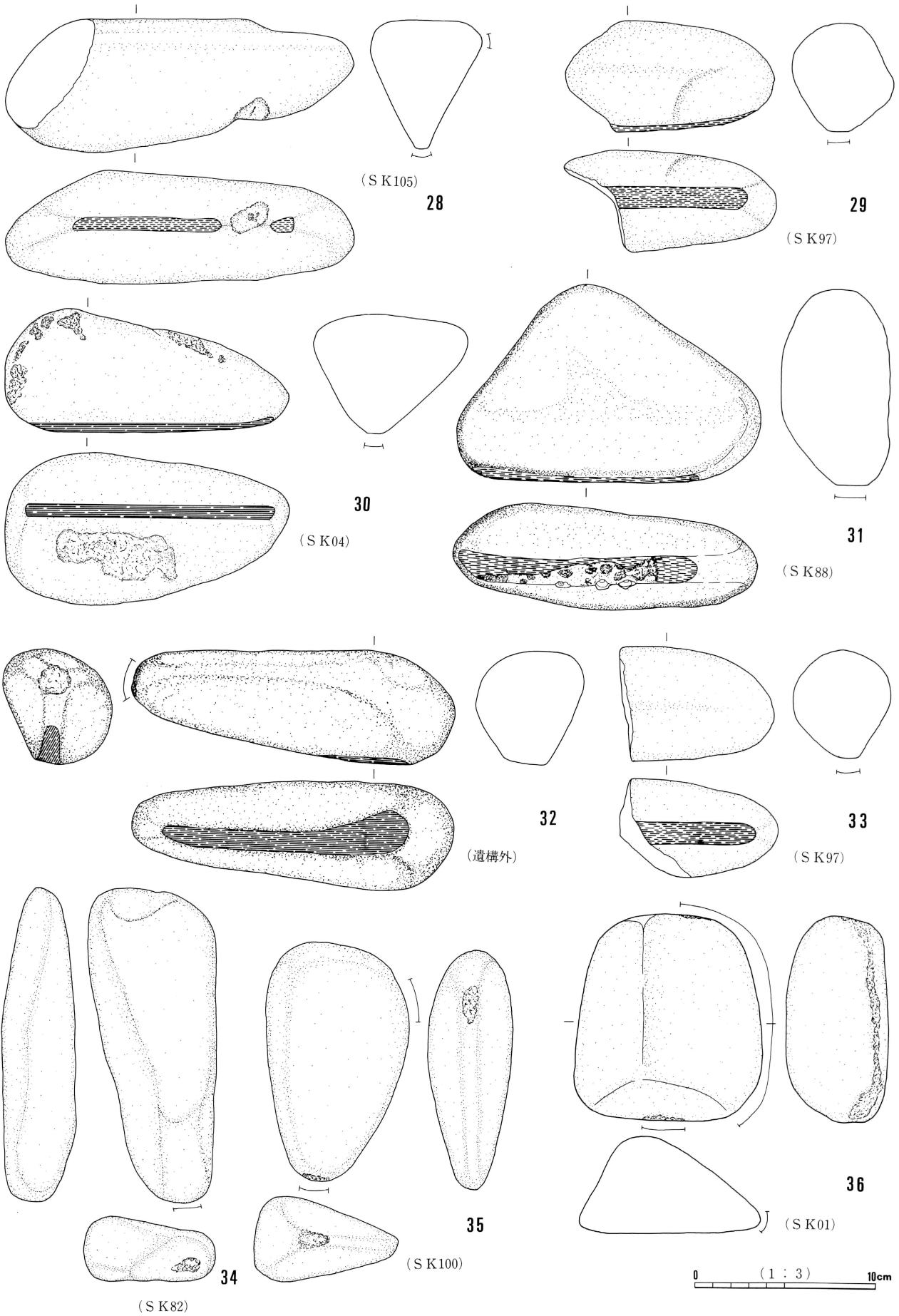
第191図 池田端窯跡 SK13・14・18・19・48・70・82・85・100



第192図 池田端竊跡 縄文時代石器(1)



第193図 池田端窯跡 縄文時代石器(2)



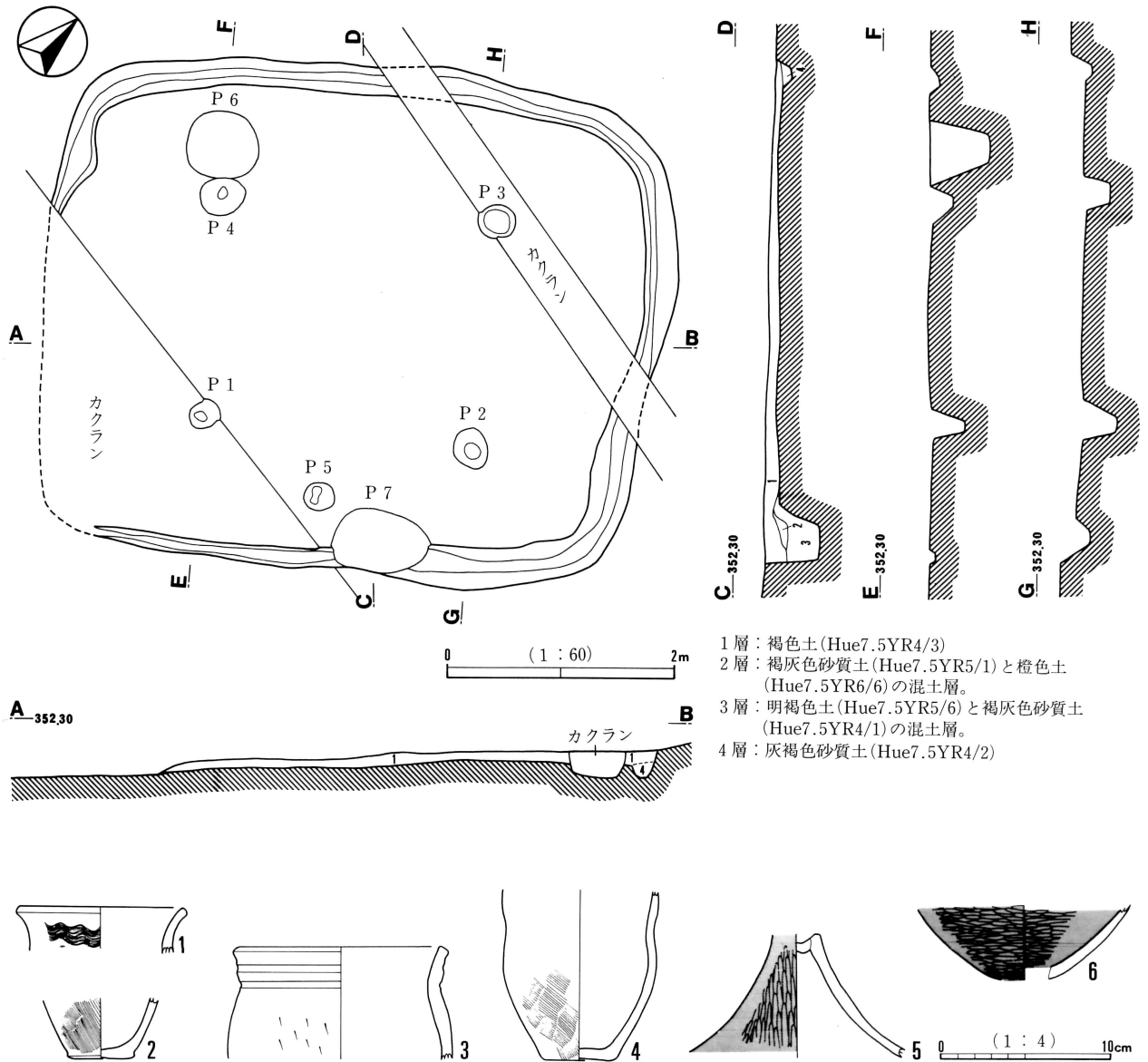
第194図 池田端窯跡 縄文時代石器(3)

第3節 古墳時代の遺構と遺物

③区で弥生時代後期末又は古墳時代初頭の竪穴住居址1棟(SB01)と掘立柱建物址1棟(ST01)が検出された。調査範囲が狭いため調査区外にも住居址が存在する可能性がある。遺物は少なくSB01・ST01覆土より出土したのみである。

SB01 (第195図)

遺構の構造 ③区の南側に傾斜した緩斜面に位置し、5.4m×4.4m、深さ6cm～10cmの隅丸の長方形を呈する。南側の角は攪乱されて床面は失われているが、一部周溝が残存している。P1～P4は直径25cm～35cm、深さ20cm～30cmで、柱穴と思われるが柱痕は確認されなかった。炉跡は確認されず、覆土に焼土は全く含まれていない。なお、P6・P7は当初本遺構の施設と考えていたが、ST01の柱穴であるこ



第195図 池田端窯跡 SB01

とが判明した。断面C-DではP7をSB01の覆土がおおっているように観察されたが、住居床面まで掘り下げた段階で、P7が周溝の覆土を切って掘り込まれているのが確認された。すなわち、SB01はST01より古く、出土遺物より弥生時代後期終末から古墳時代前期の遺構と考えられる。

出土遺物 1・2は床面出土、3～5はP6、6はP7より出土した。P6・P7はST01の柱穴であるが、ST01の方が新しい遺構であるためSB01の遺物が混入した可能性もあり一緒に提示した。1は口縁部が面取りされ、7条1単位の櫛描波状文が見られる甕の口縁である。2・4にはハケメ調整が認められる。4の上半部は磨滅が著しく器面の調整は観察できない。3の口縁部はヨコナデ、胴部は縦方向のケズリ、内面はわずかにハケメが認められる。5・6は赤彩された高杯である。

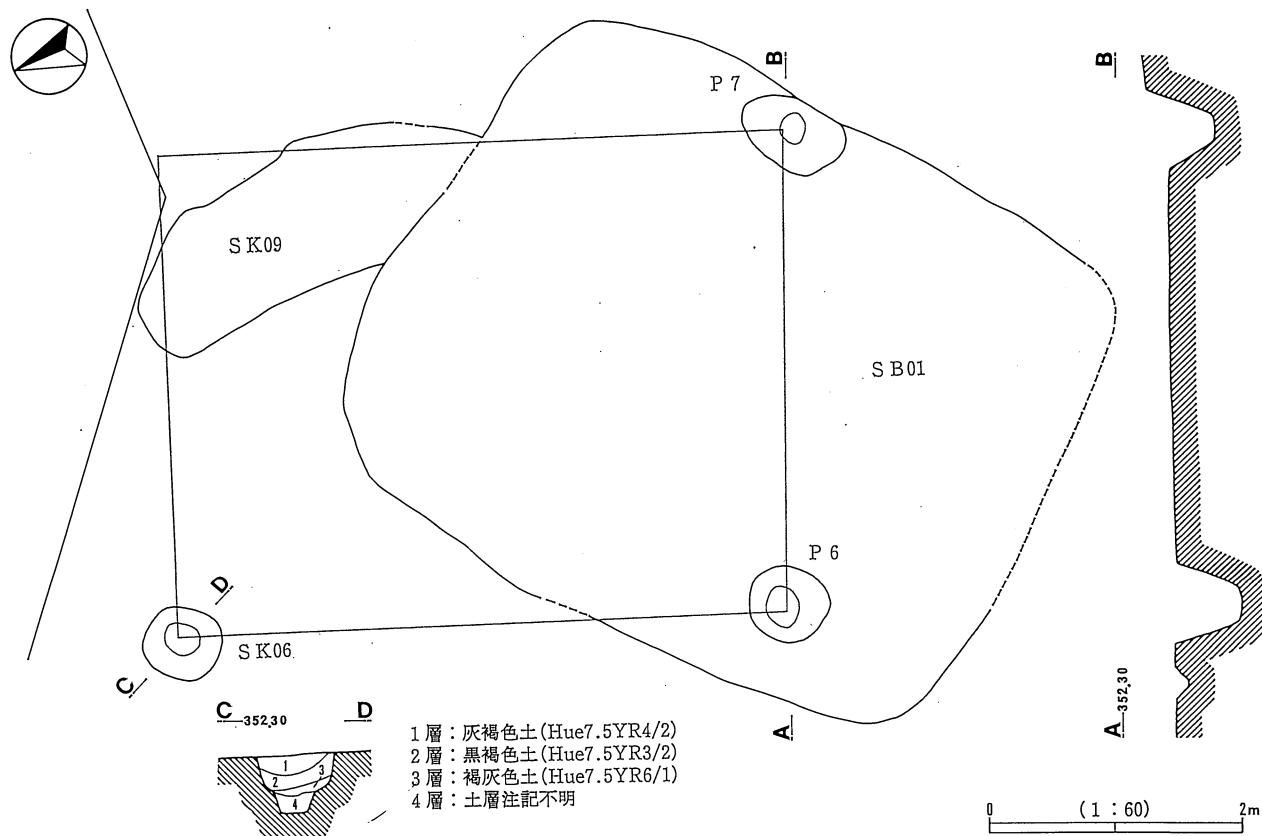
ST01 (第196図)

SK06・SB01のP6・7を掘立柱建物址とした。ピットは3カ所確認されたが、調査区外に北東側の柱穴があると予想される。③区の南側にわずかに傾斜した緩斜面に位置し、SB01と一部重なっている。調査当初SB01の施設としたP6・P7は検出面では確認できず、調査後にST01を認識した。切り合い関係からSB01より新しいことが明らかとなった。4.8m×3.8mを測り、柱穴は直径約60cmの円形もしくは楕円形で、深さ50cm～55cmである。出土遺物は第195図3～6がP6・7より出土した。

その他の遺構

SB01・ST01周辺にSK07～10の4基の土坑が検出された。出土遺物がなく時期は限定できないが、③区では他の時期の遺物は出土していないことから、これらの土坑はSB01又はST01と同時期の遺構であると推定される。

なお、②区の試掘調査では古墳時代の土師器が数点出土していたが、本調査では当該期の遺構・遺物は確認されなかった。



第196図 池田端竃跡 ST01

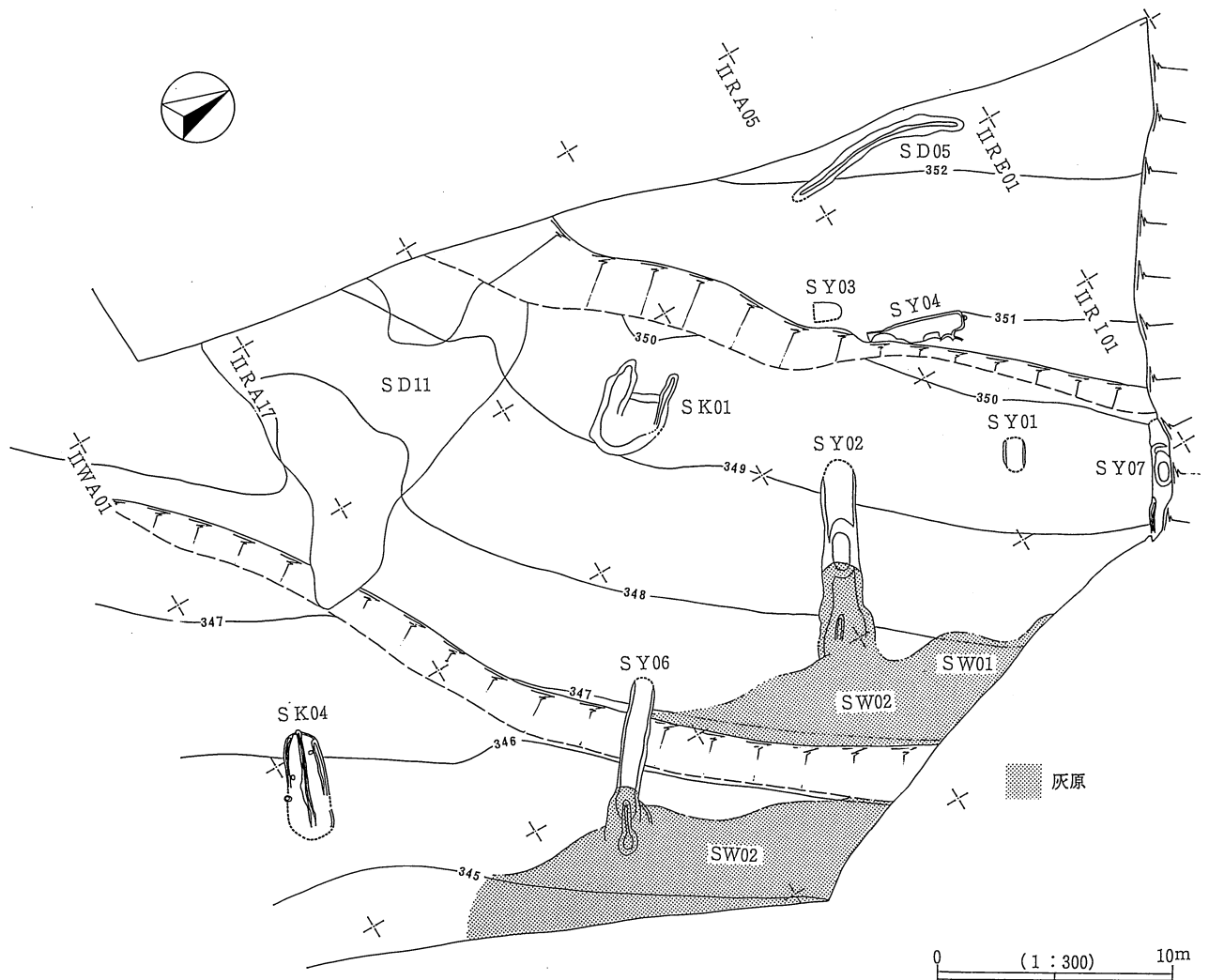
第4節 奈良・平安時代の遺構と遺物

1 概要

窯跡7基、土坑82基、溝2条を検出した。窯跡は小高い丘陵の緩斜面にあり、南斜面に位置するSY05以外は、東斜面の①区に群集している。これらは奈良時代前半期のもの(SY01・02・04・05)と平安時代のもの(SY06・07)の2時期に大別される。

第197図に①区の遺構配置図を示した。6基の窯のうちSY03は窯底の焼土のみ検出されたもので窯の構造は全く不明である。SY01・02・06・07は等高線が直交して築かれているが、SY04は主軸が等高線とほぼ並行しており、窯の構造も他と異なっている。

②区では多数の土坑がまとまって検出され、その多くは窯跡に対応する時期の粘土採掘跡である。これらの土坑群と窯跡群を結ぶように約50mにわたって細い溝が検出され、須恵器生産に関連した遺構ととらえられる。これらの窯跡を築いた工人の工房址は検出されなかったが、沢田鍋土遺跡・牛出古窯遺跡では窯跡が築かれた斜面の上方の平坦面に工房址が見られることから、本遺跡においても窯跡が築かれた斜面



第197図 池田端窯跡 奈良・平安時代遺構配置図 (①区)

上方の平坦面に工房址がある可能性はあるが、高速道路用地外であるため調査は行っていない。土坑群の南側に低湿地に流れ込む浅い自然流路があり、覆土から奈良時代までさかのぼる可能性がある。

2 窯跡・灰原

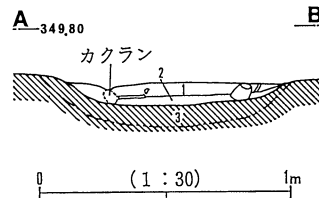
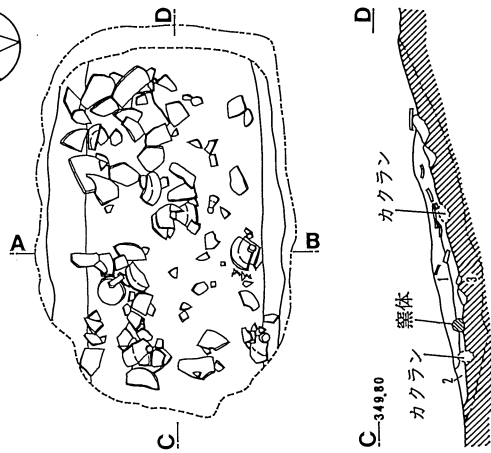
SY01 (1号窯) (第198・199図、P L47・50)

丘陵の東向きの緩斜面に位置し、主軸方向はN-59°-Wで等高線と直交する。SY02と約6.3mの間隔で平行している。

遺構の構造 焼成部の一部が残存しているのみで、燃烧部と窯尻部は失われている。残存部は幅92cm、長さ140cmを測る。覆土は厚さ15cmで窯底に杯A、杯B、蓋B、横瓶、甕が出土した。

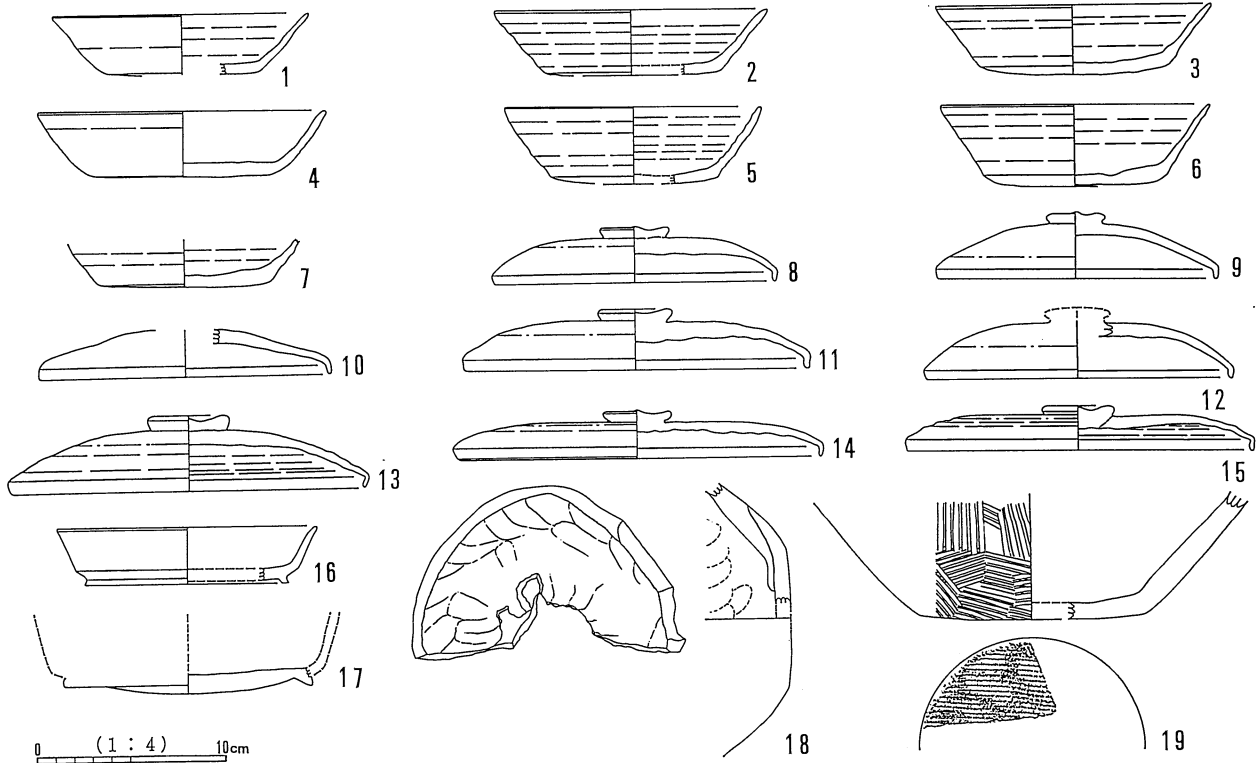
出土遺物 (第199図1~19)

杯A (1~7) はすべて回転ヘラ切りで平底ぎみである。底径の大きなものと(4)と小さなもの(1~3・5~7)の2種がある。底径の小さなものは外傾が強い。杯側面にはロクロ痕が多く認められる。杯B (16・17) は器高の低い底径の小さいもの(16)と、杯底部が垂れ下がる底径の大きいもの(17)がみられる。蓋B (8~15) は天井部が少し高く丸みのあるものが多い(8~13)。口



- 1層：にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4)
- 2層：褐色土 (Hue7.5YR4/3) 炭化物を含む。
- 3層：焼土。

第198図 池田端窯跡 SY01



第199図 池田端窯跡 SY01 出土遺物

縁の折り目部分も丸みを持つ。ツマミは中央が凸状になる偏平なツマミである。口径は14.9cm～15.4cmと16.2cmと、18.1cm～19.1cmの3種類みられる。18は横瓶の被蓋部である。19の甕は立ち上がり部に丸みのある平底である。

S Y 0 1 の杯Aは平底ぎみで底径がやや小さくなり外傾が強く、清水山3号窯第166図8や清水山2号窯第158図14などの杯の形態と類似する。この形態の杯Aが清水山窯跡より多いことから、清水山2号窯・3号窯より後出の窯と思われる。

S Y 0 2 (2号窯) (第200～205図、PL48・51～53)

丘陵の東向きの緩斜面に位置し、主軸方向はN-60°-Wで等高線と直交する。半地下式無段無階の登り窯である。規模を縮小する改築により、新旧二つの窯壁が確認された。古い窯体を旧窯、新しい窯体を新窯として記述を進める。なお、燃焼部から前庭部にかけては、新窯の壁を残すことなく掘り進めてしまったため、新窯の燃焼部から焚口部分の平面の記録を残せなかった。

土層(第201図) 1層には多量の瓦と少数の須恵器が含まれており、窯体が崩落し覆土がある程度堆積した後、遺構の窪みに人為的に埋められたものと思われる。2層群は窯体崩落後に流れ込んだ土、3層は崩落した窯体の堆積層で、天井部がそのまま崩落したような状況であった。4層群は新窯の操業によって堆積した土層で、4a～4c層は炭化物と須恵器・瓦を多く含む。4d層と4j層は間層を挟んだ炭化物層で、7a・b層が火床面であり、4e層上面も焼けたと思われる硬い面が認められ、新窯の燃焼部には2面の床面が認められる。なお、4e層上面には断面図に示せないほどの薄い炭化物層が堆積している。5・6層は旧窯に起因する堆積層、7層群は新窯操業以前の堆積層で、旧窯操業時の堆積もしくは新窯構築の際に充填された土層である。8・9層と15層は新窯の窯壁で、10～12層と16層は新窯と旧窯の窯壁の間に充填された土層である。なお、8～11層は窯壁が窯体内に崩れたものである。17層は新窯構築の際の土層である。断面図中に左下がりの斜線で示した部分はスサ入りの窯体であるが、3層中の多量の窯体は表現していない。

なお、遺物の取り上げ層位と報告で用いた層名との対比を以下に示す。遺物観察表では取上げ層位名を示した。

取上げ層位名	1層	2層	3層	4層	B2層	B3層	B4層	5層
本書層位名	1層	4a・4b層	5層	6層	4e・4f・7a層	7e層	7e・7f層	3層

遺構の構造 窯尻部分は失われており、煙道の構造は不明である。前庭部を含めて全長は8.12m、焼成部の幅は、新窯が1.12m、旧窯が1.30mである。焼成部窯底は新窯のもののみ確認され、約24°の傾斜である。燃焼部には船底状ピットが認められ、やや段差を持って前庭部へと続く。船底状ピットは新窯構築時には埋没していることから、新窯操業時には機能しない施設と考えられる。前庭部には幅25cm、長さ116cm、深さ5cmの溝が認められる。

新窯の燃焼部には4e層と7a層の2面の火床面が認められる。7a層面の火床面と4j層の炭化物層は同時に形成された層と思われることから新窯の古い段階には焚き口部におよそ20cmの段差が生じていたと見られる。焼成部では旧窯の窯底は確認されなかったが、断面G-Hで新窯の窯壁(15層)の裏側に間層を挟んで古い窯壁が確認された。新窯の窯壁にはスサが多く含まれていたが、断面G-Hで確認された旧窯の窯壁にはスサはあまり認められなかった。しかし、新窯構築以前の7層群から出土した窯体にはスサが含まれており、旧窯体構築にも新窯同様スサ入り粘土が用いられたと理解したい。

また、窯壁をはずしたところ地山壁に縦もしくは斜めに打ち込まれた直径3cm～4cmの炭化材が5カ所

検出された。右壁には約60cm間隔で3カ所、左壁は1.4m間隔で2カ所に確認されたが、シンメトリックな位置関係にはない。これらの炭化材は窯体の骨組み材の痕跡と思われる。また、窯跡及び灰原から出土した窯体の中に直径2cm～3.5cmの管状の空洞を持つものがあり、これらの炭化材の太さとも概ね一致する。なお、窯内より出土した窯体片には修復のための塗り重ねの痕跡を持つものはなかった。

遺物出土状況 第200図Aは1層下部の遺物出土状況で、大半は平瓦であり、わずかに須恵器を含んでいる。これらの瓦は窯底面より出土した平瓦ときわめて類似する特徴を有する。B図は新窯窯底面の瓦の出土状況である。瓦の直上は窯体が覆っており、焼成時もしくは焼成後の瓦を取り出す前に窯体が崩落した状況であると思われる。瓦は破片となったものが多く、1m以上離れて接合する瓦も数点あり窯詰めの状態をそのまま残しているものではない。しかしながら、出土密度と出土数から見て、焼成後に取り除かれた瓦はほとんどないと思われ、窯体内に残された瓦が1回に焼かれた平瓦の総数であると思われる。なお、燃焼部より直径約10cmの炭化材が1点出土している。このような太い炭化材の出土は他の窯跡では見られないことから焼成時に窯体が崩落し放棄された窯跡である可能性が高い。また、丸瓦は平瓦に対して焼成が良好で、多くのものが窯底に密着して出土した。このことから最終焼成時には平瓦のみを焼き、丸瓦は焼台に用いられたものと思われる。C図に窯底面より出土した丸瓦の出土状況を示した。以上のように、焼成部の出土遺物は瓦のみで須恵器は出土していない。

4層群中から瓦と須恵器が出土しており、新窯構築以前の6・7層群からは須恵器のみが出土している。5層中からも数点の瓦が出土したが大半は須恵器である。

以上のことから旧窯では須恵器のみを焼いていたが、改築後に須恵器と瓦の兼業窯となり、新窯では2回以上の操業が行われ、最後の操業では平瓦を焼いたものの焼成完了前に崩落して放棄された、と推定される。

燃焼部と前庭部出土の炭化物のうち任意に抽出した23点の樹種同定の結果、クヌギ節15点、コナラ節8点であった。また、窯体の骨組み材もクヌギ節、コナラ節であるという鑑定結果であった。なお、本遺跡の炭化材の樹種同定は(株)パレオ・ラボに委託して実施した。^(註1)

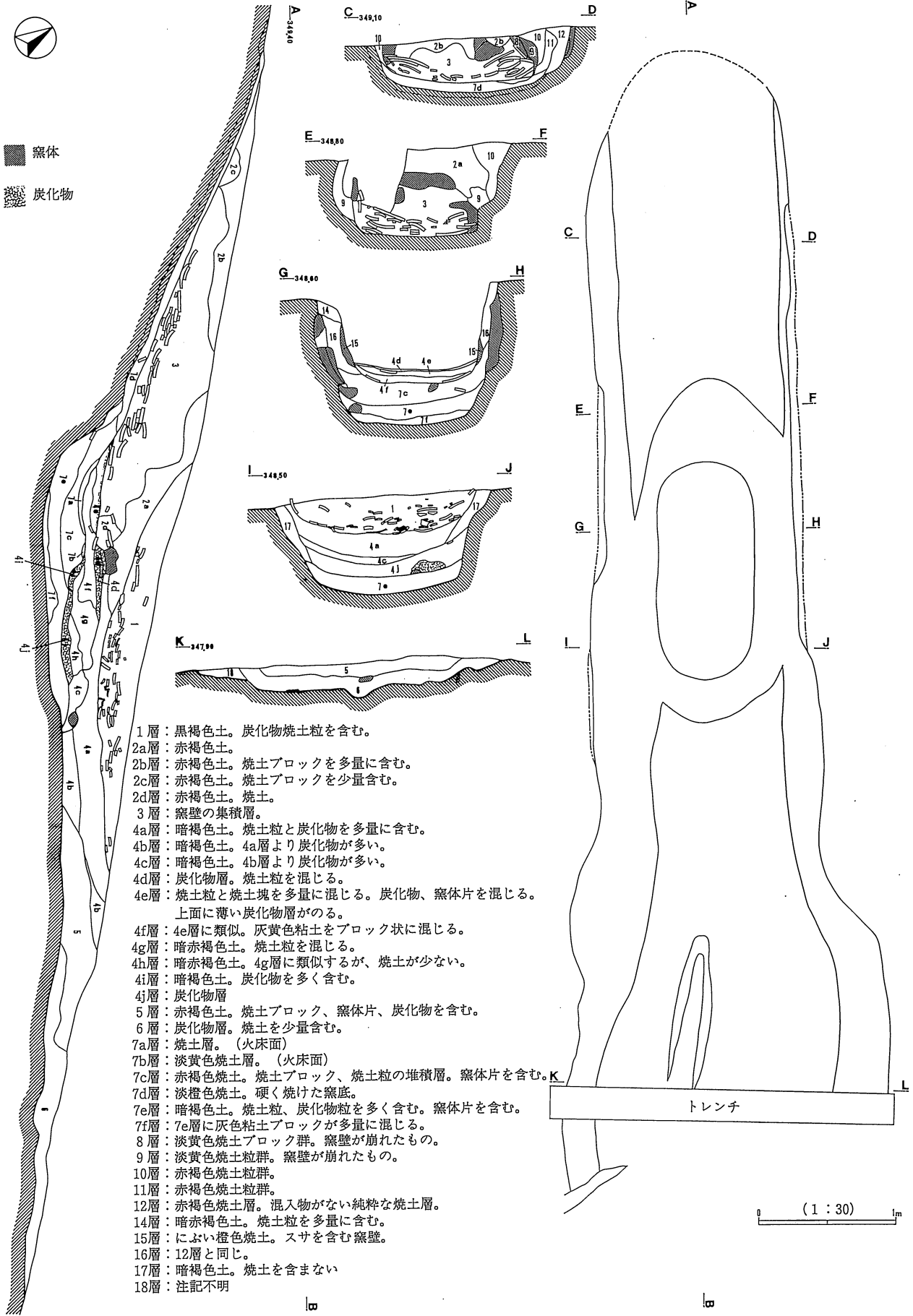
出土遺物(第202～205図) 杯A(1・2)、杯B(2～12)、長頸壺(13)、横瓶(14)、甕A(15・16)、土師器長胴甕(17)、平瓦、丸瓦が出土している。

須恵器(第202図) 1の杯Aは底部回転ヘラ切りで平底ぎみで、底径が大きい。2は底部欠損で、1と同型と思われる。杯Bは高台部分が断面三角形のもの(5～8・10)が多くみられる。高台断面が三角形になるもののうち、杯身の側面に板状工具の痕跡が巡るもの(5・8)がみられる。高台断面の異なる踏ん張り型の高台の11・12は、5～8・10と法量が異なる。杯Bの口径は10cm前後、13.8cm～14.0cm、14.6cmの3種類で、身は浅いものが多くみられる。14の横瓶の被蓋外面は平らである。内面は搾って蓋をした接合痕が明瞭である。15の甕Aは口縁部の折り曲げ部が横向きに平らになっている。波状紋は波が小さい。この口縁部形態の甕は愛知県高蔵寺2号窯(斎藤1995c、猿投窯第Ⅲ期第4段階)に類似する。16は頸部が直立し口頸部の開きの少ない甕である。体部球形で丸底となるとと思われる。類例が少なく静岡県吉美中村遺跡A地点(後藤健一1990、7世紀第3四半期から8世紀前半)で類似する甕が出土している。17の土師器長胴甕は1層より出土したもので、口縁部が強く外反しており、口径の方が胴部径よりも大きくなっている。ナデ調整である。

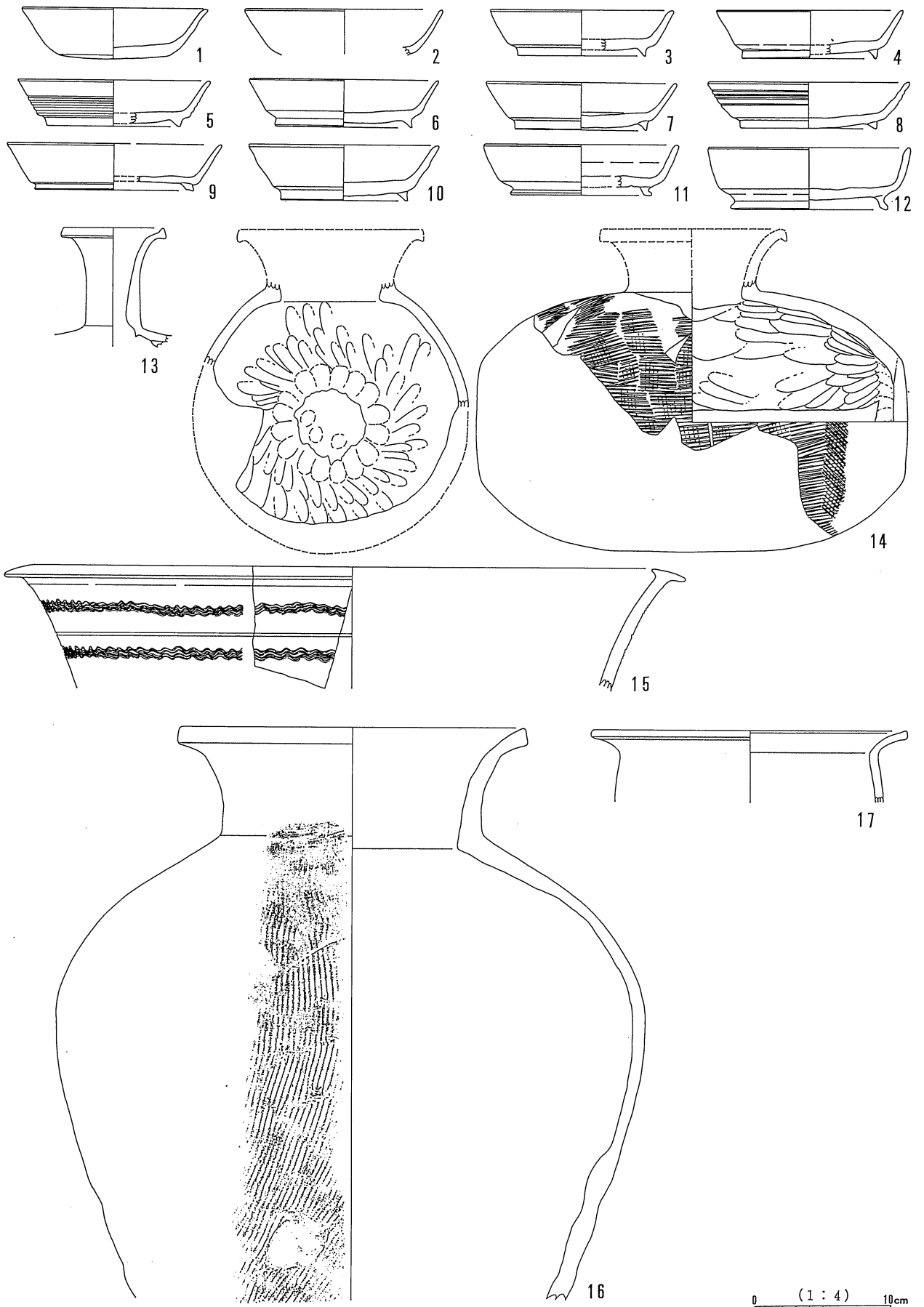
瓦(第203～205図) 瓦は破片で出土したものが多く、角の破片の部位を識別し、それぞれの角の数をカウントし、4カ所の角の破片の平均値を個体数とした場合、焼成部から出土した瓦の総個体数は平瓦68点、丸瓦11点である。軒瓦など他種類の瓦は見られない。遺構外においてもすべて平瓦と丸瓦のみであり、本窯跡では軒丸瓦・軒平瓦の生産は行っていない。



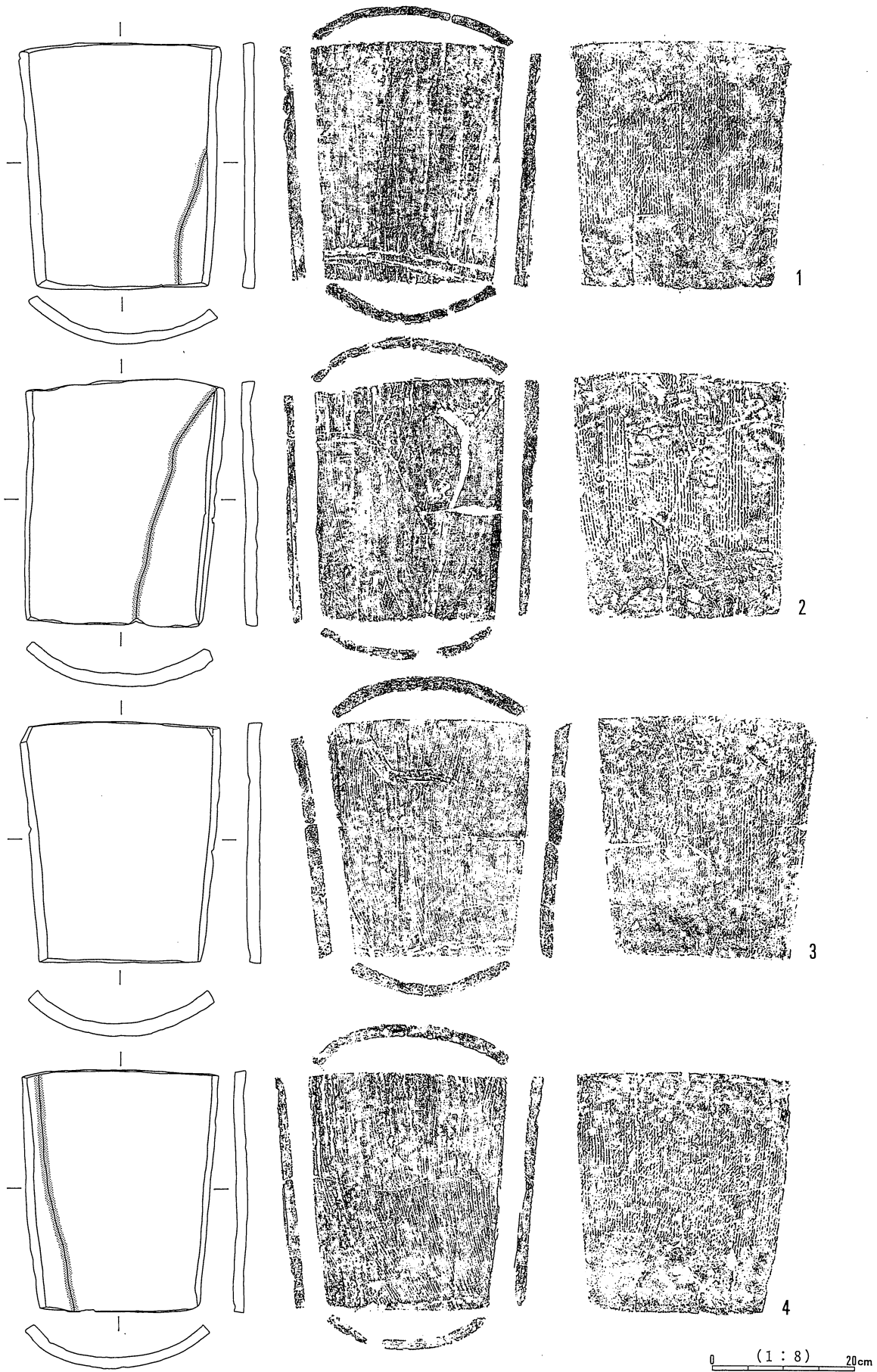
第200図 池田端窯跡 SY 0 2(1)



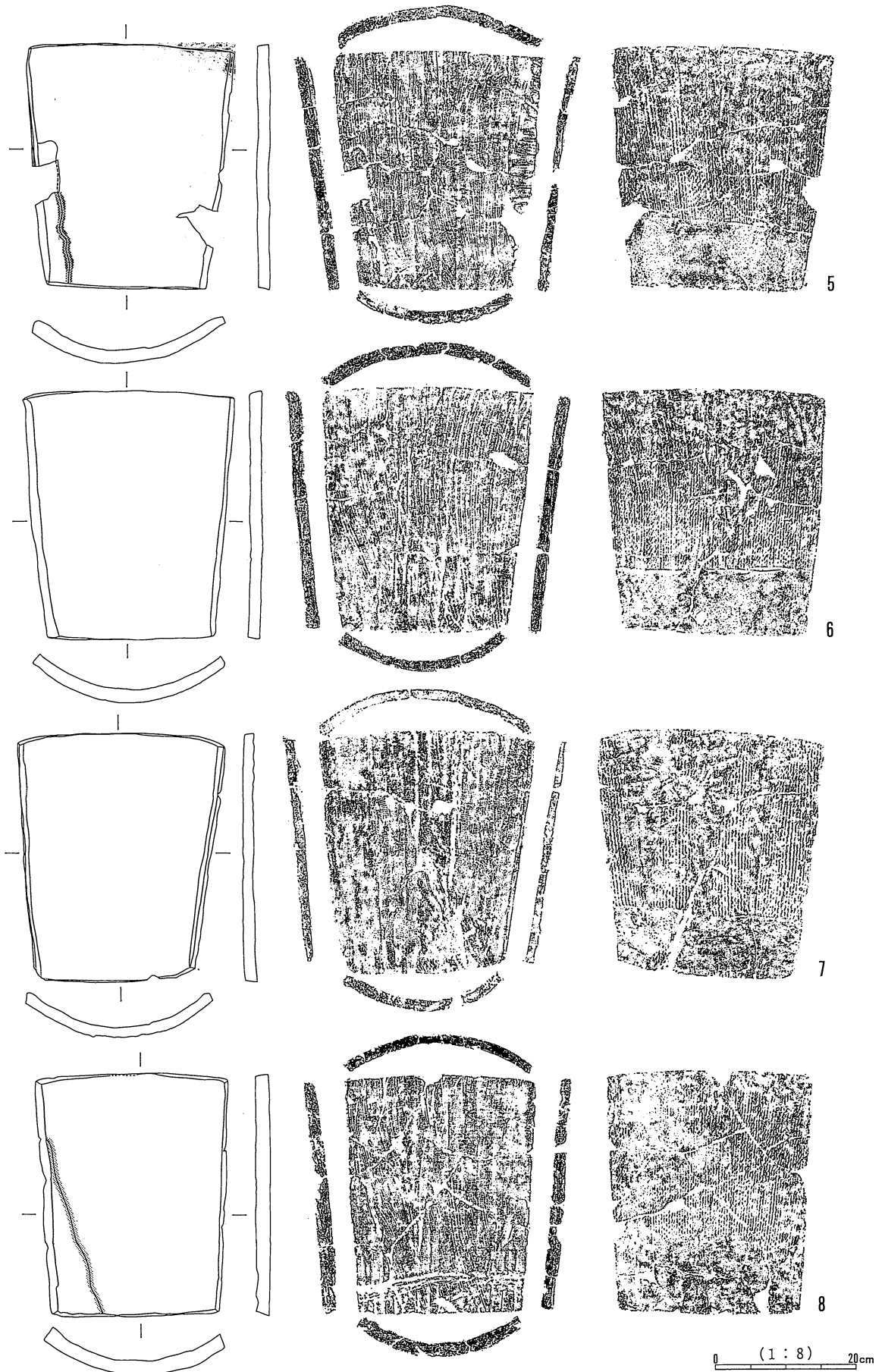
第201図 池田端窯跡 SY02(2)



第202図 池田端察跡 SY02出土遺物(1)

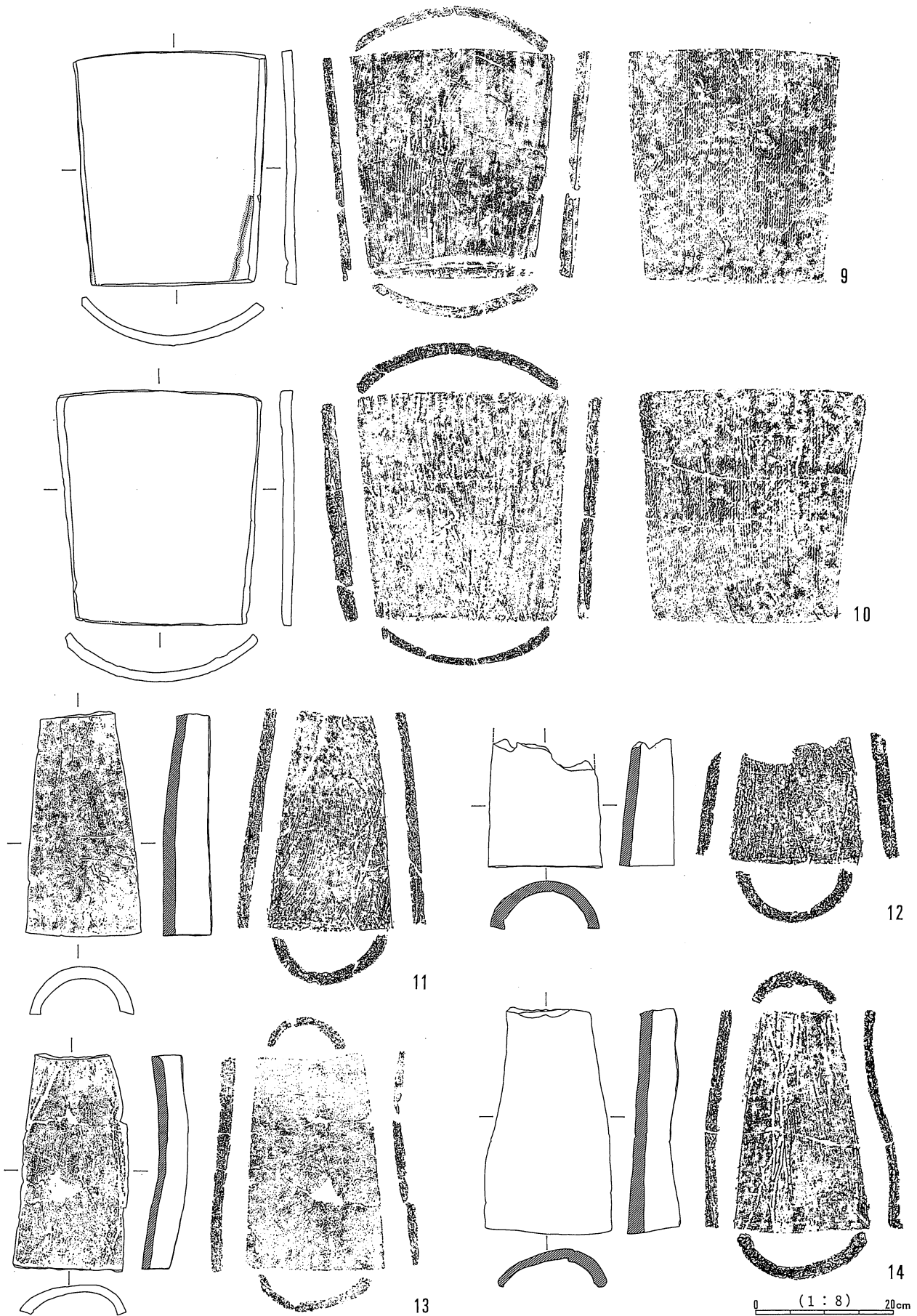


第203図 池田端窯跡 SY 0 2 出土遺物(2)



0 (1:8) 20cm

第204図 池田端察跡 SY 0 2 出土遺物(3)



第205図 池田端窯跡 SYO 2 出土遺物(4)

第7章 池田端竊跡

図版番号	遺構名	種類	広端幅 a (cm)	広端幅 b (cm)	狭端幅 c (cm)	狭端幅 d (cm)	全長 L (cm)	高さ H (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)	側面調整	布端圧痕	糸切痕	粘土巻き付け痕	布目 (本/1cm ²)	桶板圧痕	色調	焼成	整理 No.
	SY02	平瓦	28.5	30.8	23.4	29.5	33.2	32.9	1.9	2.9	B	有	凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4001
	〃	〃	25.5	28	22.3	24.8	33	33	1.5	2.71	AB	有	凹面	有、ナテ消し	8×8	有	灰白色	やや良	4002
第203図-1	〃	〃	25.6	27.6	21.8	24	34.2	33.5	1.4	2.7	B	有	凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4003
第203図-2	〃	〃	25	26.8	22.6	24	33.7	33.5	1.8	2.7	CE	有	凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4004
	〃	〃	25.3	27.2	21.4	23.2	33.3	33.3	1.4	2.45	A	有	凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4005
	〃	〃	29	30.4	21	22	33.7	33.8	1.3	2.2	B		凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4006
第203図-3	〃	〃	26	28.2	21	22.4	33.2	33	1.7	2.9	AD	有	凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4007
第204図-5	〃	〃	27.7	29.4	20.5	21.8	33.8	33.4	1.8	2.65	AB		凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4008
第203図-4	〃	〃	25.6	27.8	21	22.6	33.8	33.5	1.6	2.35	AB	有	凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4009
第204図-6	〃	〃	27.5	29.5	21.3	23.2	34.2	34.1	1.9	2.6	B		凹面		8×8	有	灰白色淡褐色	やや良	4010
	〃	〃	29	31.8	21.5	24	33.2	32.4	1.5	2.7	B	有	凹面	有	8×8	有	灰白色黒灰色	やや良	4011
第204図-7	〃	〃	27.3	29.6	20.5	22.4	34	33.5	1.4	2.31	B		凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4012
	〃	〃	26.2	29.8	21	23.8	34	33.8	1.9	2.9	AB	有	凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4013
	〃	〃	26.5	29.6	20.5	22.2	32.7	33	2.4	4.12	BD	有	凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4014
	〃	〃	26.7	29.6	23	25	33.2	33.5	1.5	2.9	B	有	凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4015
	〃	〃	27.3	29	20.3	27	33.3	33.5	1.5	2.35	B		凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4016
	〃	〃	25.5	29	23	25	33.5	33.5	1.7	2.8	B	有	凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4017
	〃	〃	28.2	30	23.5	25.6	33.4	33	1.6	2.7	B	有	凹凸面		8×8	有	灰白色	やや良	4018
第205図-9	〃	〃	26.5	29.5	22.5	25	33.7	33.1	1.4	2.3	B	有	凹面	有	8×8	有	灰白色淡褐色	やや良	4019
	〃	〃	26.8	30	23	25	33.5	33.3	1.6	2.7	B	有	凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4020
	〃	〃	28.8	32	24	26.4	33.7	33.7	1.8	3.15	B	有	凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4021
	〃	〃	27.5	29.5	23	25	33.8	33.5	1.8	2.62	B	有	凹凸面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4022
	〃	〃	26.7	28.4	22.2	24	33	32.7	1.8	2.55	B	有	凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4023
第205図-10	〃	〃	28.2	30.6	24	25.2	33.9	33.6	1.5	2.68	B		凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4024
	〃	〃	28	30	22.8	25.8	34.2	33.4	1.5	2.7	B	有	凹凸面		8×8	有	灰白色	やや良	4025
第204図-8	〃	〃	25	26.6	21.3	23	33.5	32.7	2	2.65	A	有	凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4026
	〃	〃	27	28.5			33.4	33.1	1.7	2.45	B	有	凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4027
	〃	〃	28	30	23.5	25.8	34	33.5	1.8	2.5	B	有	凹凸面		8×8	有	灰白色	やや良	4028
	〃	〃	26	28	23.3	25.2	33.8	33.5	1.8	2.85	B		凹凸面		8×8	有	灰白色	やや良	4029
	〃	〃	27.3	29.5	21.2	23.2	33	32.4	1.8	2.8	B		凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4030
	〃	〃	26.5	30.2	23.6	26.4	33.4	33.2	1.6	2.75	B	有	凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4031
	〃	〃	25	26.8	18.8	19.8	33.8	33.4	1.4	2	BE		凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4032
	〃	〃	28.3	29.8	23.3	24.8	34	33.3	1.6	2.51	AB	有	凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4033
	〃	〃	28.2	30.6	23.9	26	34	33.9	2.3	3.25	B	有	凹凸面		8×8	有	灰白色	やや良	4034
	〃	〃	26.8	28.3	22	23.4	32.7	32.2	2	2.9	B	有	凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4035
	〃	〃	26.4	28.4	24	25.8	32.8	32.7	2	2.95	B	有	凹凸面		8×8	有	灰白色	やや良	4036
	〃	〃			21.3	23	33		1.4		B	有	凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4037
	〃	〃			19.7	21.4	32.5		1.9		AB	有	凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4038
	〃	〃	27.4	29.4			33.4		1.7		B	有	凹凸面		8×8	有	灰白色	やや良	4039
	〃	〃			22.5	24.4	33.7		1.7		B		凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4040
	〃	〃			21.6	24.4	33.1		1.6		B	有	凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4041
	〃	〃					33.7	33.5	1.7		BD		凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4042
	〃	〃					33.7	33.2	1.5		BF	有	凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4043
	〃	〃	25.7	27.6			32.7	32.5	1.9		B	有	凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4044
	〃	〃	28.5	30					1.9		BF	有	凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4045
	〃	〃			22.8	24.3			1.6		BF	有	凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4046
	〃	〃	27	29					1.9		B		凹面	有	8×8	有	灰白色	やや良	4047
	〃	〃	26.6	29.6					1.6		F		凹面		8×8	有	灰白色	やや良	4048
	〃	丸瓦	14.8	19.2	8.2	11.2	32.1	32	1.5	1.5	A	有	凹面	有	8×8	有	青灰色	良好	4049
第205図-11	〃	〃	13.4	18	7.5	10.6	32	32	1.8	1.9	A		凹面	有	8×8	有	青灰色	良好	4050
第205図-14	〃	〃	16	20	9	10.6	33	32.6	1.5	1.8	C		凹面	有	8×8	有	青灰色	良好	4051
	〃	〃			8.4	11	32.5	32.5	1.1		C		凹面	有	8×8	有	青灰色	良好	4052
	SY02	SD03	14.1	18.4			31.4	31.4	1.6		A	有	凹面	有	8×8	有	青灰色	良好	4055
第205図-12	SY02	〃	13	19.2					1.6		A	有	凹面	有	8×8	有	青灰色	良好	4073
	〃	〃	14.2	17.8					2		BC		凹面	有	8×8	有	青灰色	良好	4074
	〃	〃							1.4		A	有	凹面		8×8	有	青灰色	良好	4075
	〃	〃	16	20	8	10.5	34	33.5	1.5	1.6	A		凹面		8×8	有	青灰色	良好	4076
	〃	〃			7.7	11.1	31.7	31.7	1.6	1.5	A	有	凹面		8×8	有	青灰色	良好	4077
第205図-13	〃	〃	13.6	17.1	8.2	11	31.5	31.5	1.2	1.4	A	有	凹面		8×8	有	青灰色	良好	4078

第9表 池田端竊跡 SY02瓦観察表

平瓦（第203～205図1～10）はすべて桶巻き作りの4分割されたもので、広端幅25.0cm～29.0cm、狭端幅19.7cm～24.0cm、長さ31.4cm～34.2cm、厚さ1.3cm～2.4cm、重さ2.3kg～4.0kgである。凹面には布目と糸切り痕と粘土板を巻き付ける際の接合痕が観察される。布目は1cmあたり8×8本の糸痕が数えられる。また、1・8・9などでは布の端部の圧痕が明瞭に見られる。糸切り痕は3・4・6・8などに明瞭に見られる。糸切り痕が凸面に残されている資料もまれに存在する。実測図にスクリーントーンで示した部分は粘土板を巻き付ける際の接合部分である。ほぼ完形に復元された平瓦48点中22点に接合痕が認められ、2・8などは接合部を指でなで消している。桶板の幅は約2cmのものが多く、凸面には縄目のタタキがみられる。縄目の条は瓦の側縁に平行して整然と揃っており、タタキは横方向に平行して移動している。また、平瓦凸面狭端部に幅8.8cm～9.6cmの帯状の圧痕が認められることが多い。この帯状圧痕は縄目のタタキが施された後の調整で、圧痕部分に縄目のタタキの痕跡が認められるものがある。この圧痕は、5・6のように明瞭に認められるものと、1・2のように不明瞭なものがある。

丸瓦（第205図11～14）は桶巻き作りの2分割されたもので、広端幅13.0cm～16.0cm、狭端幅7.7cm～9.0cm、長さ31.4cm～34.0cm、厚さ1.1cm～2.0cm、重さ1.4kg～1.9kgである。凹面には布目と糸切り痕が認められる。布目は平瓦と同様に1cmあたり8×8本の糸痕が数えられる。11の凹面下端に布端の圧痕が見られる。凸面はナデ調整であるが、11・13のようにわずかに縄目のタタキが観察されるものがある。凸面はタタキの後全面をなで消しているものと思われる。

SY03（3号窯）

丘陵の東向き緩斜面に位置する。SY04の南西約4mに地山が焼けた火床面が1.2m×0.85mにわたって確認された。遺構覆土はすべて消失しており出土遺物はないが、焼土の長軸がSY04と平行しており、窯跡と推定される。

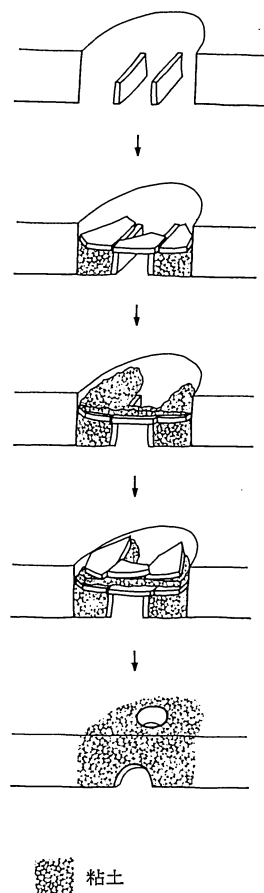
SY04（4号窯）（第206～208図・PL53）

丘陵の東向き緩斜面に位置し、主軸方向はN-19°-Eで等高線とほぼ並行する。北側に煙道を持ち焚き口は東側の側縁部に1カ所確認された。南側が大きく削平されているために全容は不明である。

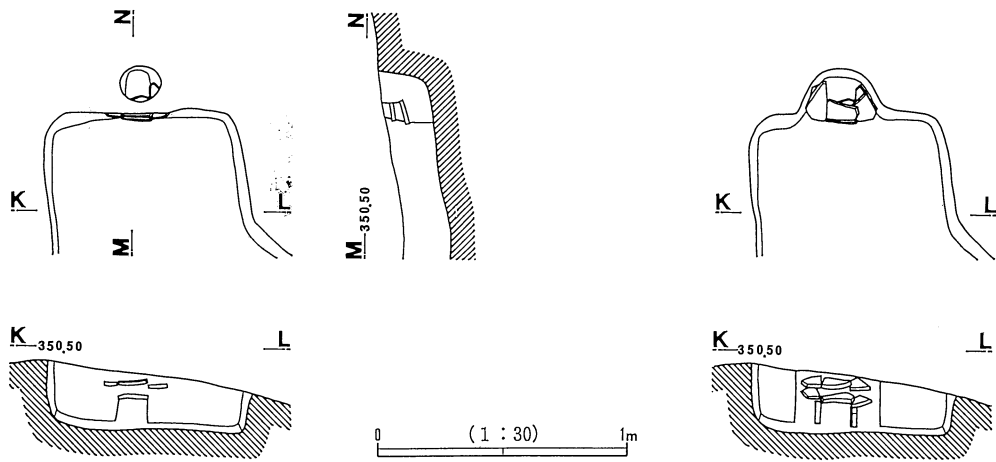
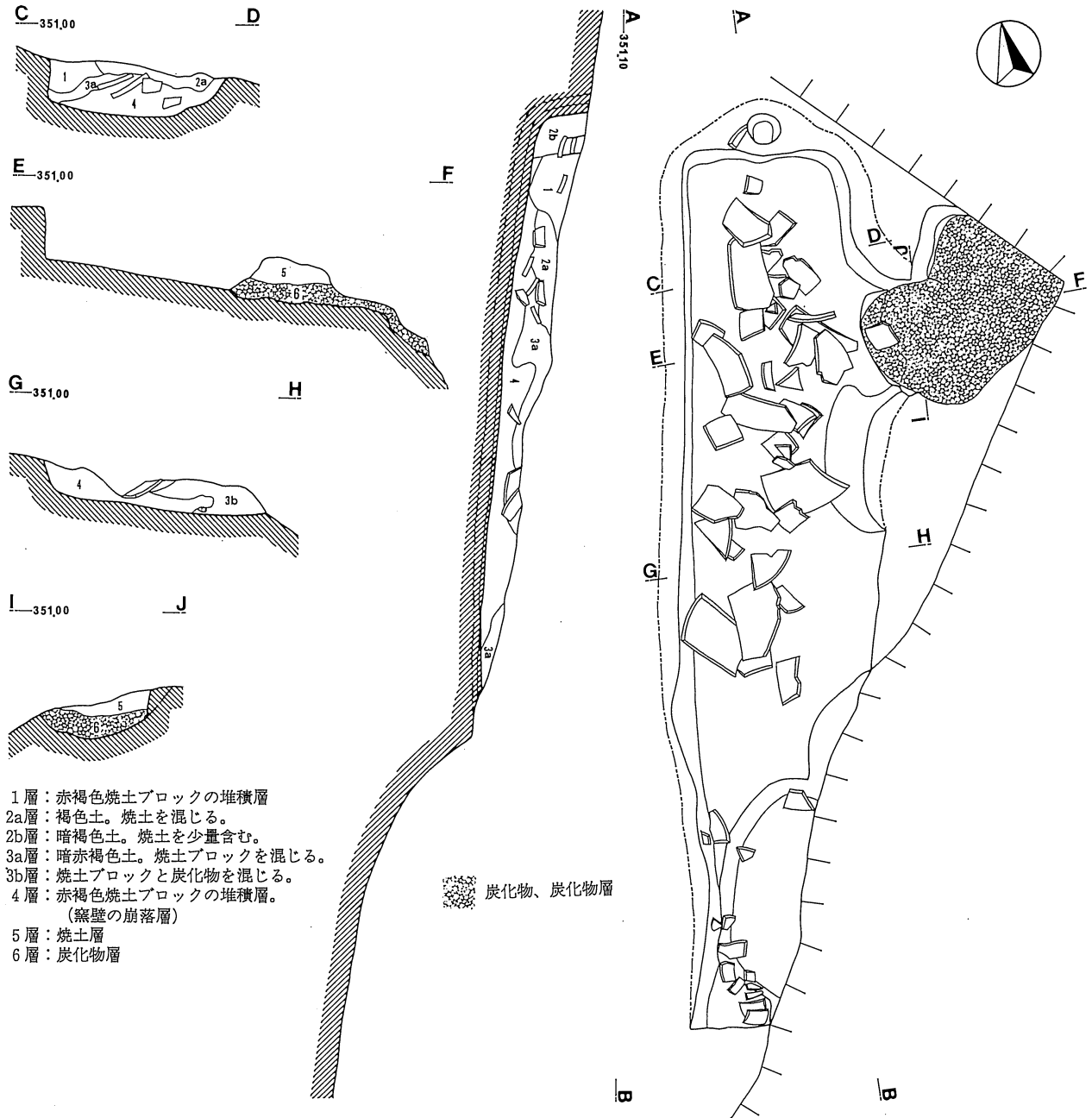
土層 1～3層は窯体崩落後に堆積した層、4・5層は窯体の崩落層で瓦を多く含む。6層は焚き口から前庭部に見られる炭化物層である。地山中に一点鎖線で示した部分は地山が焼土化した層である。

窯の構造（第206・207図） 残存する長さ4.23m、幅0.78mの半地下式の平窯である。焚き口は窯の北側に1カ所確認されているが、窯の南端の覆土には炭化物が含まれていることから、窯の南側にも焚き口があったものと推定され、最低2カ所の焚き口が存在したと思われる。焚き口の外部は窯底より約4cm掘り下げられており、前庭部を作り出している。前庭部に火床面は認められない。煙道は第206図の模式図に示したように瓦と粘土を交互に積み重ねて築いている。また、窯内からはスサ入り粘土が付着した瓦が出土しており、窯体の構築材として瓦が用いられていたことが確認された。

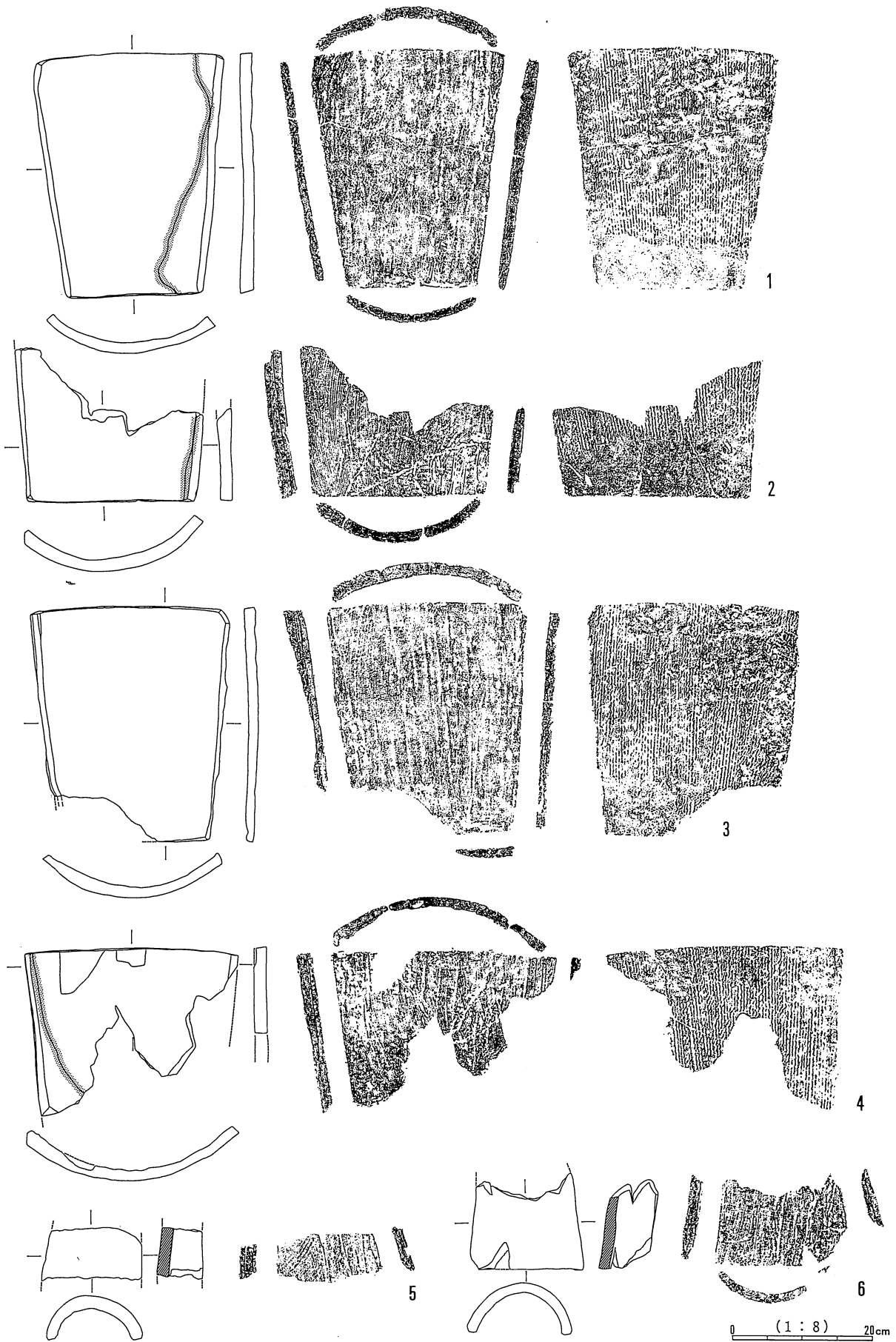
遺物出土状況 1・2層及び遺構上面の表土中では須恵器と瓦が出土したものの、遺構内の3・4層中からは瓦が出土したのみである。これらの瓦の多くにはスサ入り粘土が付着しており、窯の構築材に使われたものと思われる。また、窯



第206図 池田端窯跡
SY04煙道部



第207図 池田端窯跡 SY04



第208図 池田端窯跡 SY04出土遺物

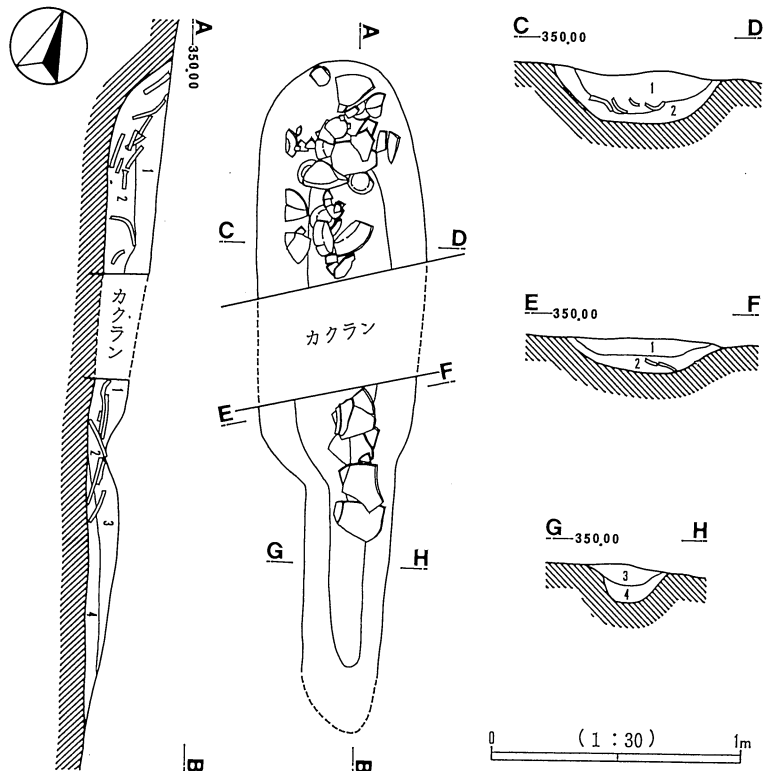
底に密着して出土する遺物はなく、本窯跡で何を焼いたか不明である。なお、焚口部の炭化物層より出土した炭化物より任意に抽出した7点の樹種同定の結果、クヌギ節6点、コナラ亜属1点である。

出土遺物(第208図) 1~4は平瓦で、製作技法と規格がSY02のものに類似する。5・6は丸瓦でSY02のものに類似する。瓦にはスサ入り粘土を付着したものや二次焼成を受けたものが見られる。

SY05(5号窯)(第209・211図、PL49・54)

丘陵の南東向きの緩斜面に位置し、主軸方向はN-24°-Wで等高線とほぼ直交する。他の窯跡から約70m離れたところに単独で存在する。火床面は認められず、覆土中に焼土、炭化物、窯体片が含まれていることから、燃焼部、焼成部が消失して船底状ピットのみが残存したものと思われる。残存部の長さ2.52m、最大幅0.69mを測り、斜面下方は幅18cmの溝状になる。溝には甕(第211図13)の破片を並べており、清水山窯跡SY02の前庭部の溝の構造に類似する。中央部は配水管施設の埋設により攪乱されている。

出土遺物(第211図上段) 杯A(1~4)、杯B(6・7)、蓋B(6~12)、甕(13)が出土している。杯A底部は全点回転ヘラ切りである。口径は13cm~13.5cm(1・2)と18cm(3・4)の2種類がある。1・2は身が浅く、3・4は身が深い。杯Bは口径が3種あり、10.1cm、13.8cm~14.0cm、17cmである。12は身が深いと思われ、3の杯Aに高台を付けたものとみられる。SY02同様杯Bに断面三角形の高台がみられる(6・7・10・11)。13の甕は体部が球形である。



- 1層：にぶい黄褐色土(Hue10YR5/3) 窯体片をブロック状に含む。焼土、炭のブロックが互層をなす。
- 2層：にぶい黄褐色土(Hue10YR5/3) cm以下の小さな窯体、焼土、炭等がまだら状に混じる。
- 3層：にぶい黄褐色土(Hue10YR5/3) cm以上の焼土、炭化物ブロックを混じる。
- 4層：にぶい黄褐色土(Hue10YR4/3) cm以下の小さな焼土、炭化粒を混じる。

第209図 池田端窯跡 SY05

SY06(6号窯)(第210・211図、PL49・55)

丘陵の東向きの緩斜面に位置し、主軸方向はN-49°-Wで、等高線と直交する。

土層 1層は窯体崩落後の堆積層。2層群は窯体の崩落層。3~7層は窯壁の崩落と前後して堆積した層。3層の一部と8・9層は作業時に堆積した灰原へつながる層。10~12層は前庭部溝の覆土。13層は窯底と窯壁、14層は地山が焼土化した層である。以上の層名は調査時の層名を変更しており、遺物観察表の層名は第210図の層名と一致する。

遺構の構造 窯尻・煙道は消失しており、前庭部を含めた全長7.5m、焼成部の幅0.94m~1.1mの半地下式無段無階の登り窯である。焼成部の傾斜角は約29°、焚口部から窯幅を広げ前庭部が作り出されている。焚口部から前庭部には幅約30cm、深さ10cm~20cmの溝が掘られており、浅い皿状で焼土が充填された

ピットへつながる。溝の底面はピットに向かって傾斜し、また、調査時には燃焼部・前庭部に地下水がしみ出し、放置すると床面が水没したことから、前庭部の溝は配水施設であると考えられる。舟底状ピットは確認されない。火床面は1面のみであるが、補修のためにスサ入り粘土を二重に塗り重ねた窯壁が認められることから、少なくとも2回の焼成が行われたことが確認される。また、焼台と思われる須恵器片が付着したスサ入り粘土塊が焼成部より5点出土した。なお、本窯跡は粘土層を掘り込んで構築されている。

遺物出土状況 遺物は、主に焼成部窯底上面と3層・8層・9層に出土した。燃焼部の炭化物層(9層)上面に完形の杯Aがまとまって出土した。これらの杯はすべて焼成不良である。第210図右図には焼成部窯底上面と、9層及び9層上面より出土した遺物を示した。なお、燃焼部と前庭部より出土した炭化物のうち任意に抽出した7点の樹種同定の結果、クヌギ節5点、コナラ亜属2点であった。

出土遺物(第211図下段) 杯A(1~22)、杯B(23・24)、凸帯付四耳壺(25)、甕A(27・28)、甕底部(29・30)、把手(26)が出土している。

杯Aは杯身側面にロクロ痕がはっきり残るものが多い。底部はすべて回転糸切りで、形態は底部から口縁に向かって直線的に外傾が強く、口径は12.0cm~13.8cm、底径は5.2cm~6.4cm、器高は3.6cm~4.4cmで法量がかなり一定している。杯Bでは23の底径は5.5cm、24の底径は9.4cmで大きな差があり、2種あると思われる。23は口径が小さく深身の形態である。25の凸帯付四耳壺の凸帯部は断面三角形で、底部は30のような平底と思われる。甕Aは口唇部が平らで外側へ突出しており、口縁下に凸帯を巡らせている(27・28)。甕Aの底部は平底(29)と思われる。27の口縁部内面に布目痕がみられる。

SY07(7号窯)(第212・213図、PL49・55)

丘陵の東向きの緩斜面に位置し、主軸方向はN-61°-Wで等高線と直交する。北側半分は削平され、南側壁の一部は配水管施設の埋設により攪乱されている。

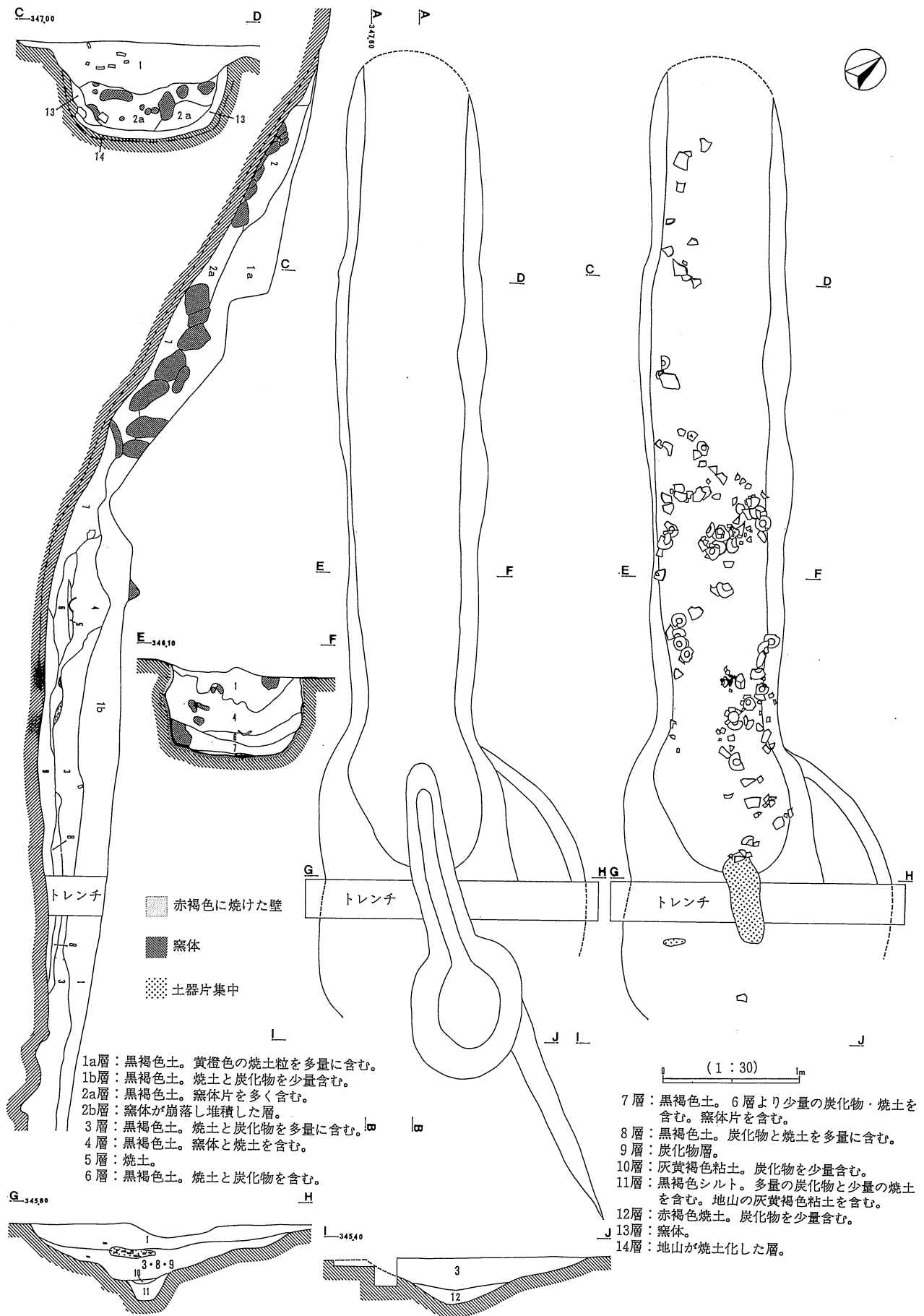
土層 1層は窯体崩落後の堆積層。2層群は窯体の崩落層とその前後に堆積した層。3層群は窯の操業時に堆積した層。4a~4c層は窯壁・窯底、4d~4f層は舟底状ピットの覆土で最終焼成時にはすでに堆積していた層。5層は地山が焼土化した層である。上記の層名は調査時の層名を変更しており、遺物観察表の層名は第212図の層名と一致する。

遺構の構造 焼成部の上半部は消失しているが、前底部を含めた残存部の全長4.9m、焼成部の幅は推定で0.8m、焼成部の傾斜角は約29度である。窯壁はスサ入り粘土で築かれており、覆土中にはこれらが崩落したスサ入りの窯体片が多量に出土した。焼成部と燃焼部の境にはわずかな段差が認められる。燃焼部の床下には舟底状ピットが確認され、ピットの底面は焼けていない。前庭部南壁際には幅10cm~15cmの溝が掘られており、溝を覆うようにSY02焼かれたと思われる平瓦が並べられている。溝の覆土には炭化物が多く含まれていることから操業時に機能していた施設であることが推定される。前庭部に見られる溝は池田端窯跡SY02・同SY05・同SY06・清水山窯跡SY02などに確認されている。なお、第212図の二点鎖線は焼土の範囲を示す。

遺物出土状況 第212図右図の黒点は舟底状ピット内のものを示し、他は床面より上層出土の須恵器・瓦である。焼成部では、床面直上のものと、床面から浮いて出土するものがある。また、燃焼部3b層からは直径10cmの炭化材が出土した。燃焼部と前庭部より出土した炭化材のうち、任意に抽出した4点の樹種同定の結果、クヌギ節が4点であった。

出土遺物(第213図) 杯A(1~4)、蓋B(5)、杯B(6)、壺底部(7)、凸帯付四耳壺(8)、甕A(10)、甕底部(11・12)、平瓦(13・14)が出土している。

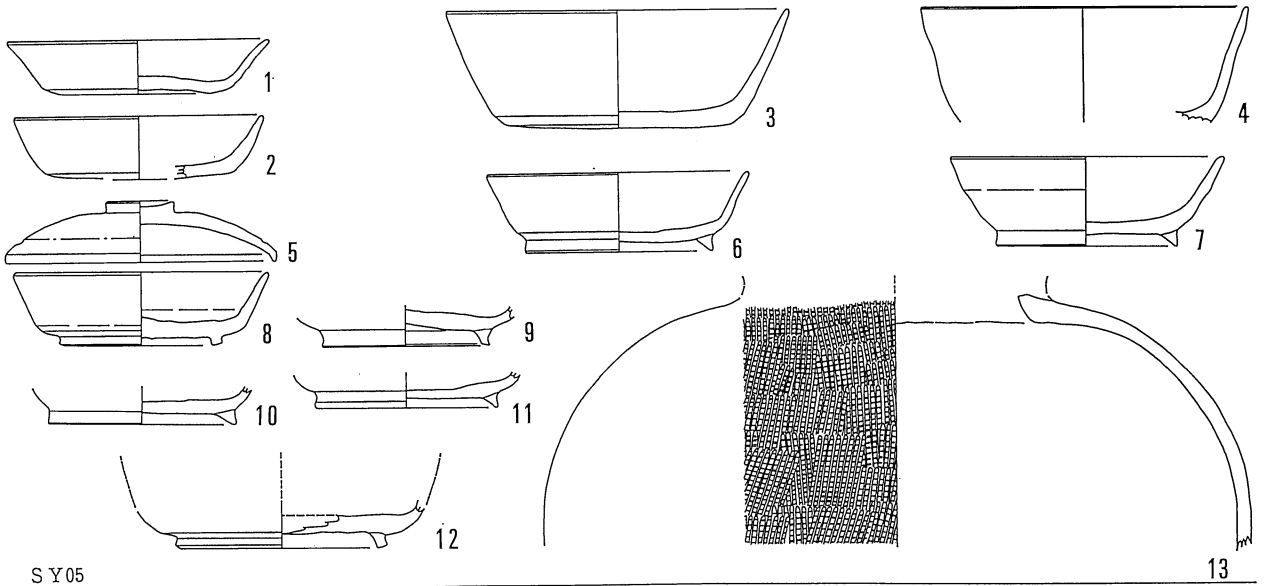
杯Aはすべて回転糸切りである。杯身外面にロクロ痕をはっきり残す。完形の杯Aは出土していないが、



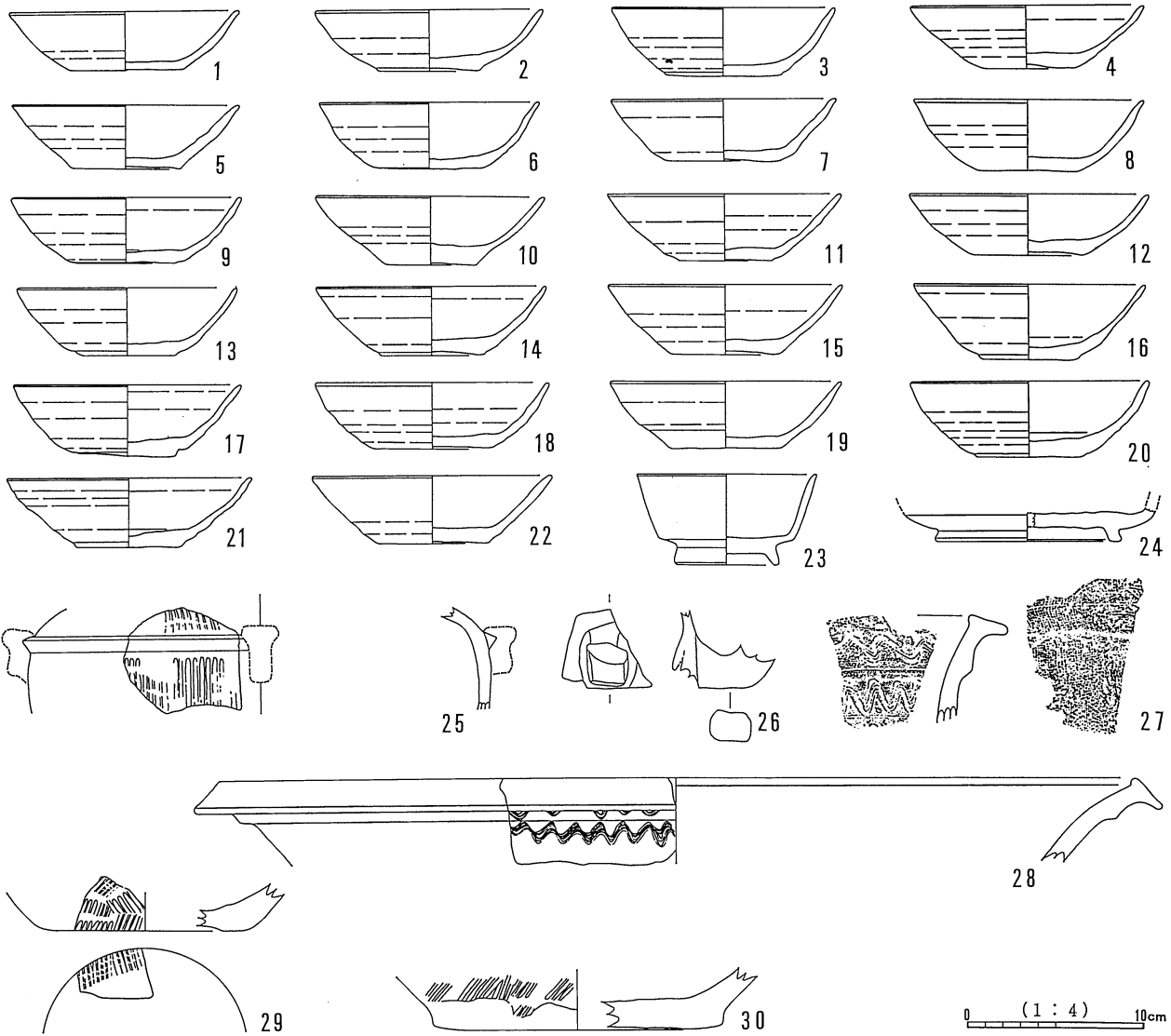
- 1a層：黒褐色土。黄橙色の焼土粒を多量に含む。
- 1b層：黒褐色土。焼土と炭化物を少量含む。
- 2a層：黒褐色土。窯体片を多く含む。
- 2b層：窯体が崩落し堆積した層。
- 3層：黒褐色土。焼土と炭化物を多量に含む。
- 4層：黒褐色土。窯体と焼土を含む。
- 5層：焼土。
- 6層：黒褐色土。焼土と炭化物を含む。

- 7層：黒褐色土。6層より少量の炭化物・焼土を含む。窯体片を含む。
- 8層：黒褐色土。炭化物と焼土を多量に含む。
- 9層：炭化物層。
- 10層：灰黄褐色粘土。炭化物を少量含む。
- 11層：黒褐色シルト。多量の炭化物と少量の焼土を含む。地山の灰黄褐色粘土を含む。
- 12層：赤褐色焼土。炭化物を少量含む。
- 13層：窯体。
- 14層：地山が焼土化した層。

第210図 池田端窯跡 SY06

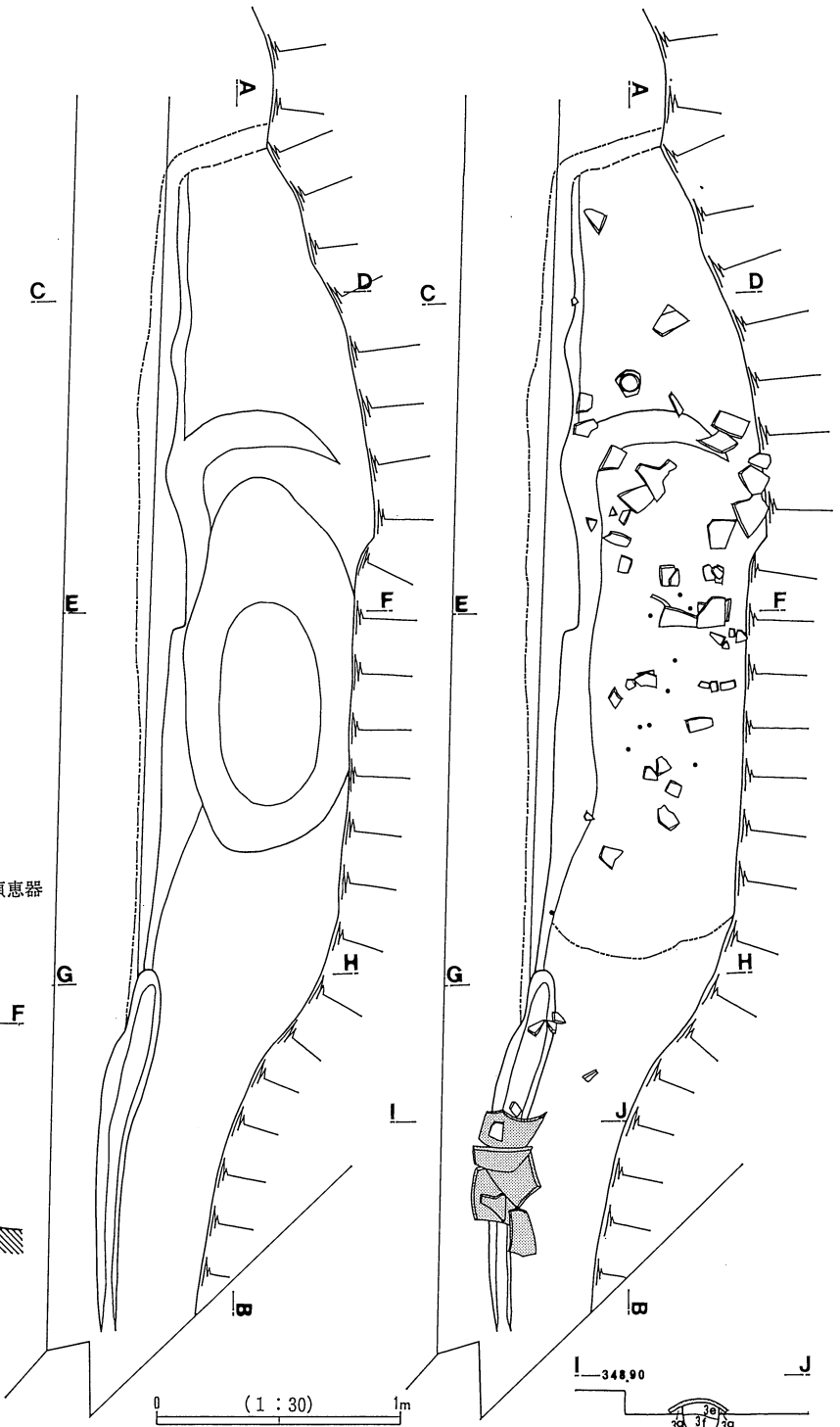
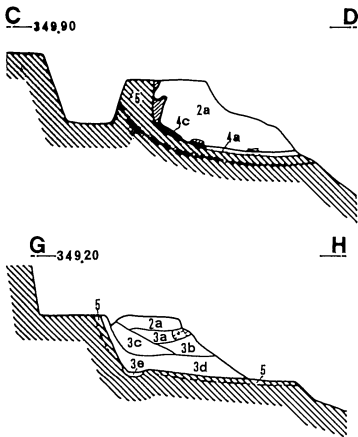
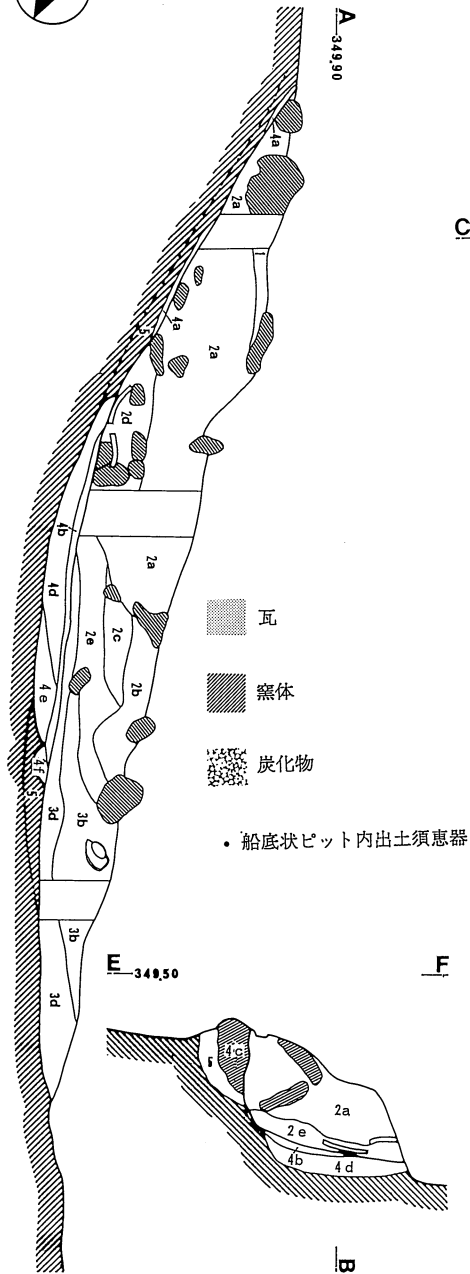


SY05
SY06



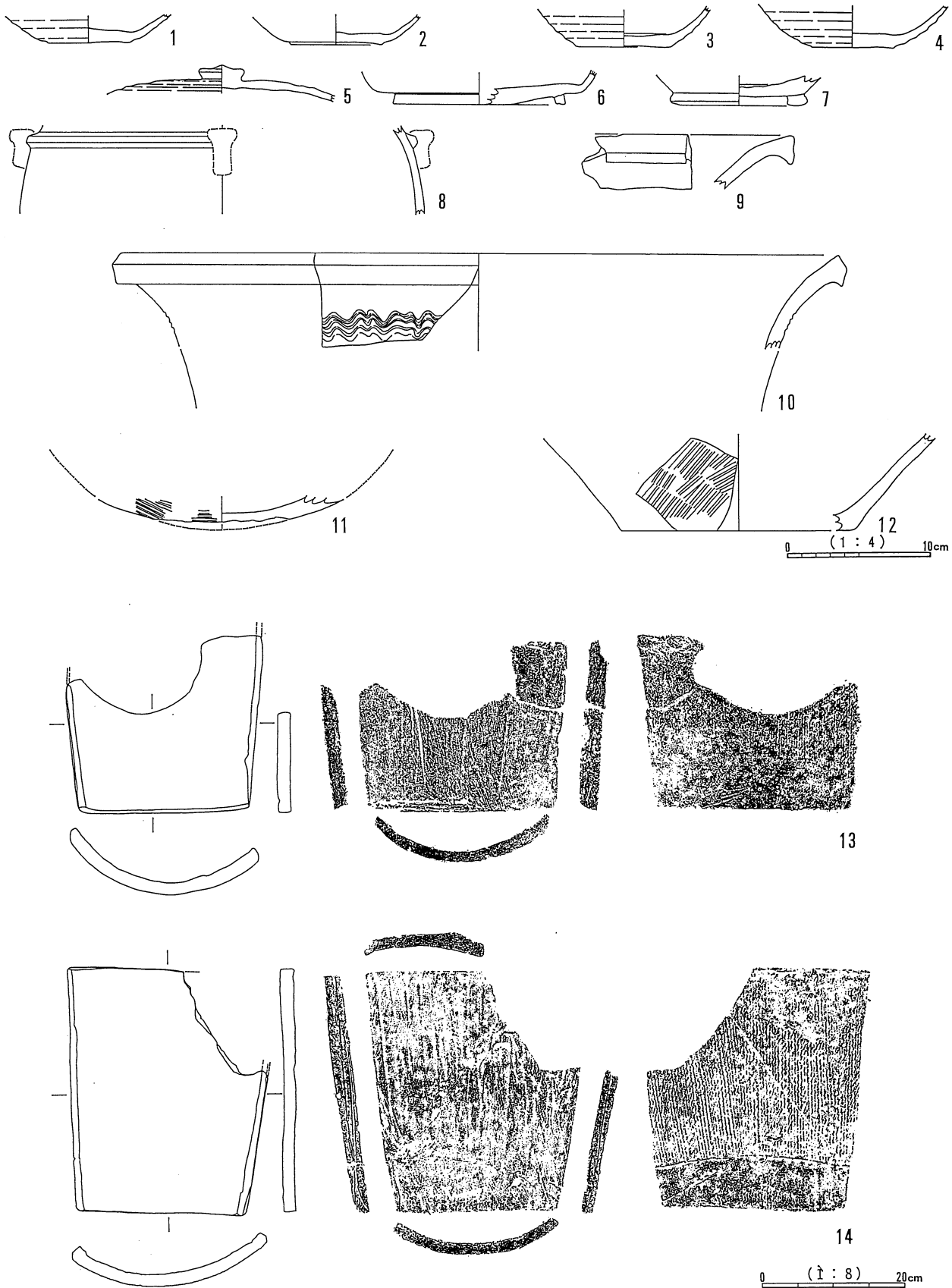
第211図 池田端窯跡 SY05 (上段)・SY06 (下段) 出土遺物

0 (1:4) 10cm



- 1層： におい黄褐色土。表土。
- 2a層： におい赤褐色土。砂質土。窯体と焼土ブロックを多量に含む。炭化物を含む。
- 2b層： におい褐色土。砂質土。焼土、炭化物を少量含む。
- 2c層： 褐色土。2e層に類似するが、焼土、炭の粒がやや小さい。
- 2d層： におい褐色土。砂質土。焼土を含み少量の炭も含む。
- 2e層： 褐色土。焼土、炭化物を多量に含む。
- 3a層： 炭化物層。焼土粒を多く含む。
- 3b層： 暗褐色土層。焼土粒、炭化粒を多く含む。
- 3c層： 暗黄褐色土層。焼土、炭化物を多く含む。
- 3d層： 赤黒色土。地山の土（浅黄色粘土）が混じる。径2cmの炭を多量に含む。焼土含む。
- 3e層： 赤褐色土。黄褐色の砂質土に多量の焼土を含む。
- 3f層： 炭化物層。暗褐色土中に多くの炭化物を含む。
- 3g層： 灰黄色土。炭化物粒を少量含む。
- 4a層： 灰色に陶質化した窯底。
- 4b層： 赤褐色、黄褐色土。焼土、炭化物粒を含む。
- 4c層： スサ入りの窯壁。
- 4d層： 赤褐色土。焼土層。焼土粒のブロック、炭化物粒を含む。
- 4e層： 焼土層。焼土ブロックを混じる。
- 4f層： 赤褐色焼土。焼土ブロック、窯滓片が混じる。
- 5層： 赤褐色焼土。

第212図 池田端窯跡 SY07



第213図 池田端窯跡 SY 0 7 出土遺物

底径は5.6cmと6.4cm前後の2種がみられる。6は高台が内側に入ったところで取り付けられている。8の凸帯部は断面方形である。12が8の底部と思われる。7は回転糸切り後外周へラ削りの壺底部である。9・10は甕Aで、10の口唇部は断面「く」の字の陵が見られる。中野市中原窯跡（中野市教育委員会1995）に同様の形態の甕がみられる。11は甕Aの底部である。13・14は桶巻き作りの平瓦で、凸面には縄目のタタキと端部に帯状圧痕が認められSY02のものと類似する。前庭部溝上に出土した平瓦である。

SW01・02（1号・2号灰原）（第197・214図）

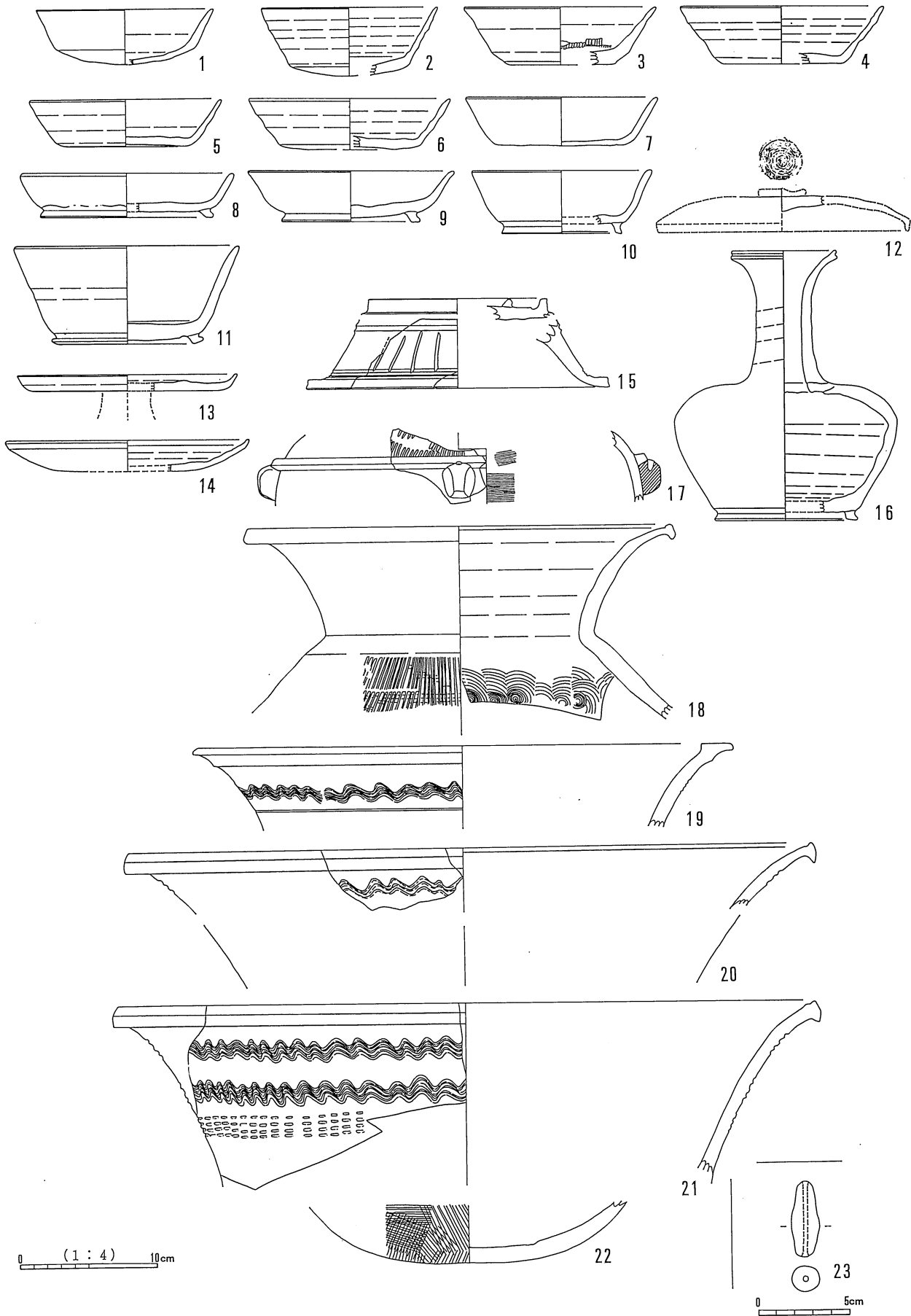
SY02・SY06の下方に広がる炭化物・焼土・須恵器を多量に含む層を灰原とした。灰原は近年の削平により上下に分断されているが、下段の灰原にはSY02とSY06で焼かれた遺物が混在しており、灰原を分層することは困難であったので灰原全体にSW02の遺構名をつけた。ただし、SW02上段部の北端では灰原は分層され、上層部をSW01、下層部をSW02とした。層厚は厚いところで約20cmである。出土遺物と位置関係から、SW01はSY07の灰原、SW02はSY01・02・06の灰原と推定される。SW01として取り上げた遺物は少なく、第214図にはSW02出土遺物のみを示す。遺物は2m四方のグリッド単位で一括して取り上げ、遺物観察表の層名の欄に出土グリッド名を記した。出土遺物は須恵器の他に、窯体片（総重量80kg）が出土した。

出土遺物（第214図1～23） 杯A（1～7）、杯B（8～11）、蓋B（12）、高杯（13）、皿（14）、硯（15）、長頸壺A（16）、凸帯付四耳壺（17）、甕A（18～22）、土錘（23）が出土している。

杯Aは丸底で身が浅いもの（1）、平底ぎみで底径が小さめで身が深く外傾が強いもの（3・4）、平底で底径が大きく浅い身のもの（5～7）の3種がある。3・4はSY01第199図2・3・5・6と類似する。5～7はSY01第199図4と類似する。杯Bは大きさも形態も異なる。11の高台径と底径がほぼ同じで、高台は丸みを持ち外反する。12の蓋Bは、ツマミの接合面に渦巻のへラ描きをし接合し易くしている。13は回転へラ削りで底部を平らにした皿状杯部の高杯Aと思われる。清水山1号窯の高杯A（第151図）に類似する。皿Aの14は口縁部をツマミ上げるようにしたため、内面に僅かな段がみられる。大型の円面硯の15は縁と内堤がほぼ同じ高さである。脚台部には透かしがなく、縦位沈線が巡っている。長頸壺Aの16は肩部と体部の境目が丸みを持つ屈曲部となっている。頸部と体部の接合は、底部から肩部まで成形した後、その肩部の擬口縁に粘土紐を巡らせ、その上に、巻き上げ技法で作られた頸部を乗せ接合している（第181図2）。凸帯付四耳壺の17は凸帯の断面が方形で、凸帯直下に耳部が付く。18は頸部無文の甕Aである。当て具痕はナデ調整でスリ消されているが、こまかい同心円文の当て具痕がみられる。19の甕Aは、SY06甕A（第211図26・27）のように口縁下に凸帯様の段が巡っている。SY06で焼かれた可能性がある。21の甕Aには櫛描き波状文の他に押し引き櫛描文がみられる。22は丸底である。清水山窯跡でみられる甕Aと類似する。

SW02でみられる回転へラ削りの杯Aや高杯、皿、丸底の甕などは、同様な様相を持つSY01、SY02の製品と思われる。これに対し、SY06、SY07の製品と類似する凸帯付四耳壺や19の甕Aは、SY06、SY07の製品の可能性がある。

23は作りが粗雑な土師質の土錘で、窯で焼かれたものではない。



第214図 池田端窯跡 SW02出土遺物

3 粘土採掘跡

(1) 遺構 SY02・SY06などの窯跡群から約80m南側に土坑群が検出された。土坑群は東向きの緩斜面に位置しており、低湿地に流れ込む沢筋に面している。粘土層を掘り込んでいること、形状が不整形であること、壁面がオーバーハングしたものがあることなどからこれらの土坑群の多くは粘土採掘跡であると判断した。出土遺物から奈良時代前半と平安時代の2時期に大きく分けられると推定される(第225図)。これは、池田端の窯跡群が2時期に分かれることと対応しており、この粘土採掘跡は、池田端の窯跡に関連したものであったことが推定される。また、採掘跡から南西約300mに奈良時代前半期の清水山窯跡があり、これらの窯との関係も考慮しなければならない。

第215～224図に各土坑の形状と土層断面を示した。地山に細かい網掛けのスクリーンで示した部分にはふい黄橙色(Hue10YR7/4)または浅黄色(Hue5Y7/3)の粘土層で、その下層の粗い網掛け部分は灰オリーブ色(Hue5Y6/3)の粘性のある砂質シルト層である。多くの土坑では粘土層を掘り抜いたところで掘削を終えているが、いくつかの遺構では砂質シルト層を深く掘り抜いている。

土坑の規模と形状は様々で、以下の4つ群に大別される。

I群：直径1m～2mの円形もしくは楕円形、底面は比較的平坦である。

II群：I群と同じ規模であるが、平面形状が不整形なもの。底面が凹凸なもの。

III群：I群に比べ大規模で、平面形状は不整形で、底面にはいくつかの小さな掘り込みが認められるもの。複数の土坑が重複している可能性も否定できないが、切り合いは確認できず、一つの土坑が完全に埋没した後に他の土坑が掘られたものではないと判断される。

IV群：その他の土坑で、浅く単層又は径50cm以下の小形の土坑で粘土様掘跡か否か疑わしいもの。

個々に説明が必要な遺構について以下に取り上げ、他は第10表に遺構の属性を示した。なお、SK12・15・16・101～107は本項目で取り上げたが、他の土坑から離れて分布しており、一連の粘土採掘跡である可能性は少ない。

SK34(第216・227図) 長軸3.36m、短軸2.46m、深さ84cmの不整な平面形で、底面は凹凸しており、複数の小ピットが掘り込まれている。北側と南側の壁はオーバーハングしている。土層は1層が自然埋没、2・3層は人為的に埋め戻された層、もしくは地山の崩落層である。北壁際の土坑底面より完形の土師器小型甕が出土した。他の遺物は遺構覆土上面より出土した。

SK81(第219・229図) 長軸2.64m、短軸1.98m、深さ74cmの不整な平面形で、1層は自然埋没、2層は地山の崩落層、3層下部は地山の粘土をブロック状に混じており人為的な埋没土と思われる。土坑底面には土師器甕の破片が2点出土した。

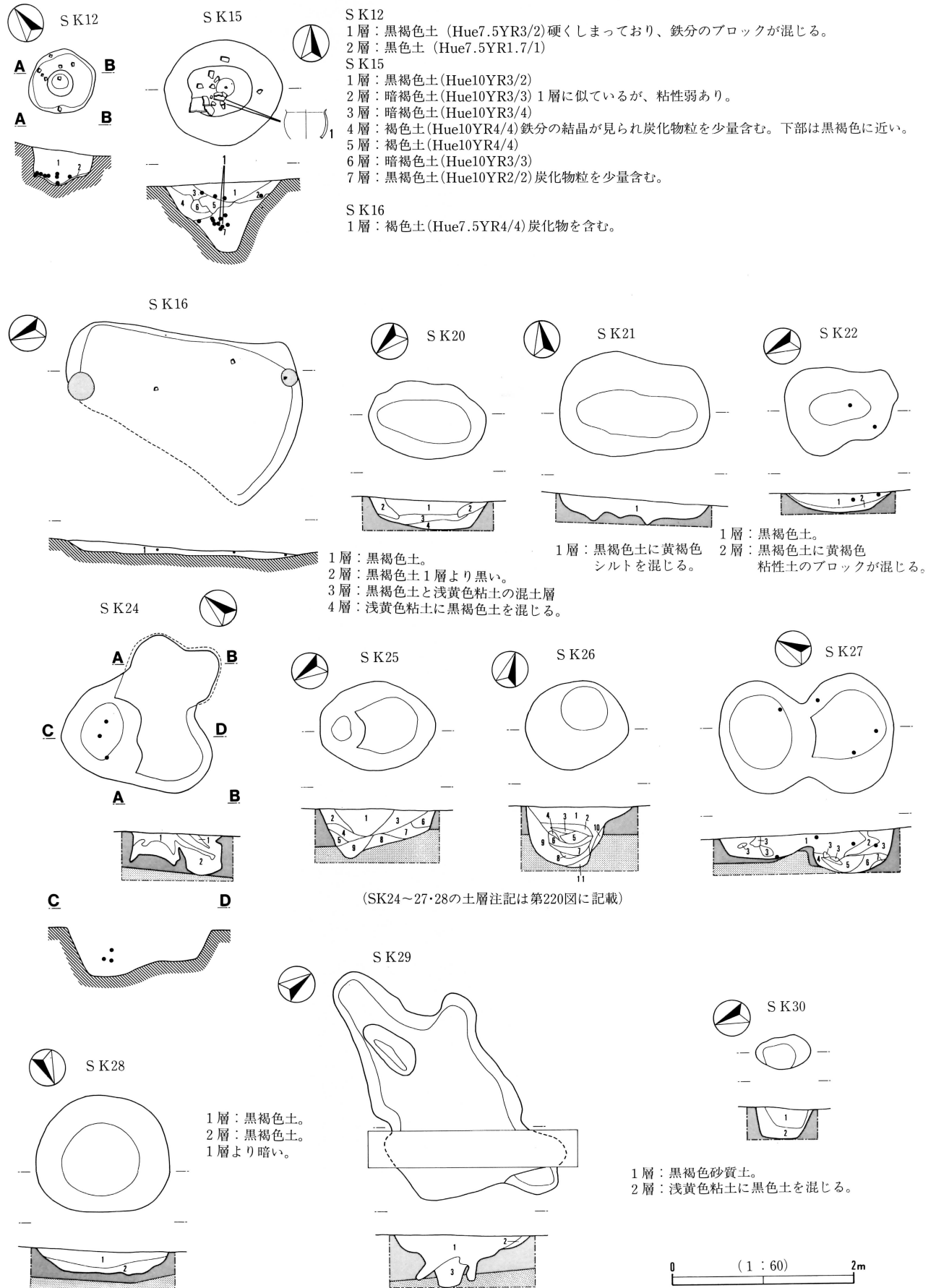
SK94・95・96・97・98・99(第221・222・231・232図) 等高線に平行してほぼ直列に配置している。特にSK96とSK97・98・99は複数の土坑が連結するような形状をしており、一連の遺構であった可能性を指摘できる。また、他には見られない配列をしていることから、粘土採掘以外の目的を持った土坑であることも考えられる。

SK32・53・78・87・88(第223・227・228・230図) 平面形では複数の土坑が重複したプランを示しており、便宜的に複数の遺構名を付したが、明確な遺構の切り合いは確認できなかったため、短期間に連続して掘られた一連の遺構と理解しておきたい。土坑底面は凹凸が見られ、底面に多数のピットが確認される。第223図に出土状況を示した遺物のうち、SK53-1・5、SK88-4・7は土坑底面より出土したもので、SK88-7の須恵器甕はほぼ完形で出土した。また、横瓶の出土点数が多いことが注意される。

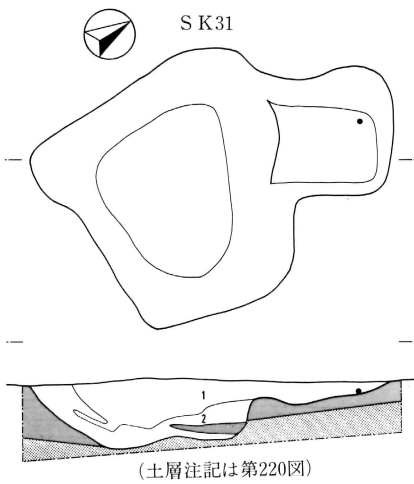
遺構名	分類	時期	遺物	縦横 m	深さ cm	切り合い連続関係
SK12	I	8・9世紀	土師器甕	0.74×0.7	38	
SK15	I	8・9世紀	土師器小型甕・瓦他	1.28×1.16	76	
SK16	IV	8・9世紀	土師器甕	2.6×1.8	12	
SK20	I	8世紀前半	須恵器甕(S K21・34と接合)	1.28×0.84	32	
SK21		8世紀前半	須恵器甕(S K20・34と接合)	1.64×1.0	26	
SK22	I	8世紀後半~9世紀初頭	須恵器甕・壺	1.2×0.76	22	
SK23	III	8世紀後半~9世紀初頭	須恵器杯A・B(ヘラケズリ・糸切り)・四耳壺・土師器長胴甕	4.2×4.28	26	
SK24	III	8世紀前半	土師器長胴甕	1.6×1.52	44	
SK25	II	8・9世紀?	なし	1.28×0.98	54	
SK26	I	8・9世紀?	なし	1.12×1.0	66	
SK27	III	8・9世紀	土師器甕・杯	2.16×1.36	46	
SK28	I	8・9世紀?	なし	1.6×1.32	25	
SK29	III	8・9世紀?	なし	3.28×1.52	60	
SK30	IV	8・9世紀?	なし	0.54×0.4	32	
SK31	III	8世紀後半~9世紀初頭	須恵器甕(SX01と接合)・短頸壺	2.64×2.04	54	
SK32	III	8世紀前半	須恵器横瓶・土師器甕他			SK 53・78・87・88
SK33	I	8・9世紀?	なし	1.48×1.32	34	
SK34	III	8世紀後半~9世紀初頭	須恵器杯(糸切り)・甕(S K53と接合)・土師器小型甕、瓦	3.32×2.24	84	
SK35	IV	8・9世紀?	なし	0.68×0.54	5	
SK36	I	8・9世紀?	なし	2.5×2.72	78	
SK37	I	8・9世紀?	なし	1.96×1.44	42	
SK38	IV	8・9世紀?	なし	1.24×1.24 1.04×0.84	15	
SK39	I	8世紀後半~9世紀初頭	須恵器甕・壺・土師器甕	1.88×1.72	62	
SK40	I	8・9世紀?	なし	2.04×1.84	32	
SK41	I	8・9世紀?	なし	0.96×0.84	42	
SK42	II	8・9世紀	土師器甕	1.4×1.12	60	
SK43	II	8・9世紀?	なし	1.32×1.16	20	
SK44	II	8・9世紀?	なし	1.52×1.16		
SK45	II	8世紀前半	須恵器甕・土師器甕(S K81と接合)	1.72×1.16	40	
SK46	IV	8・9世紀	須恵器甕	1.44×1.24	22	
SK47	II	8・9世紀?	なし	1.24×1.16	38	
SK49	IV	8・9世紀?	なし	1.44×0.8	21	
SK50	III	8・9世紀?	なし	2.68×1.28	61	
SK51	I	8・9世紀?	礫	2.52×2.48	85	
SK52	II	8・9世紀	須恵器甕・土師器甕	2.2×2.12	46	
SK53	III	8世紀前半	須恵器甕(SK34と接合)・横瓶長頸壺・土師器甕			SK 32・78・87・88
SK54	III	8・9世紀	土師器?	2.0×1.8	88	SK76
SK55	II	?	なし	2.04×0.88	46	
SK56	II	8・9世紀?	なし	2.12×1.68	40	
SK57	I	8・9世紀	須恵器甕・杯(ヘラケズリ)	1.72×1.74	56	
SK58	I	8・9世紀?	なし	1.72×1.52	23	

遺構名	分類	時期	遺物	縦横 m	深さ cm	切り合い連続関係
SK59	IV	8・9世紀?	なし	1.86×0.92	16	
SK60	IV	8・9世紀?	なし	1.44×0.9	13	
SK61	IV	8・9世紀?	なし	2.1×0.76	18	
SK62	III	8世紀前半	須恵器短頸壺	2.04×1.4	48	SK77
SK63	I	8・9世紀?	なし	0.98×0.8	147	
SK64	I	8・9世紀?	なし	1.4×1.2	48	
SK65	I	8・9世紀?	なし	1.44×1.4	40	
SK66	IV	8・9世紀?	なし	0.64×0.56	35	
SK67	IV	8・9世紀?	なし	0.6×0.58	20	
SK68	I	8世紀後半~9世紀初頭	須恵器甕(SK77と接合)	1.3×1.04	64	
SK69	I	8・9世紀	瓦他	1.3×1.10	72	
SK71	III	8世紀前半	須恵器甕・壺・土師器甕	2.36×1.36	69	
SK72	I	8・9世紀	須恵器甕	1.2×0.8	23	
SK73	I	8世紀前半	須恵器横瓶(SK97と接合)	1.28×0.96	71	
SK74	I	8・9世紀?	なし	1.7×1.52	67	
SK75	I	8・9世紀	須恵器甕	0.84×0.72	53	
SK76	III	8・9世紀?	なし	2.8×2.48	41	SK54
SK77	III	8世紀前半	須恵器横瓶(SK92と接合)・壺(SK68と接合)	1.92×1.6	75	SK62
SK78		8・9世紀	土師器・砥石	1.64×1.04	44	SK 32・53・78・88
SK79	IV	8世紀後半~9世紀初頭	土師器甕	1.12×1.04		
SK80	I	8・9世紀	須恵器甕	1.12×1.08	52	
SK81	III	8世紀前半	須恵器甕・土師器(SK45と接合)	2.64×2.04	74	
SK83	II	8・9世紀?	なし		28	
SK87	III	8世紀前半	須恵器甕・横瓶・杯(糸切り)			SK 32・53・78・88
SK88	III	8世紀前半	須恵器甕(SK99と接合)・杯(ヘラケズリ)・長頸壺・横瓶・土師器長胴甕		78	SK 32・53・78・87
SK89	I	8・9世紀?	なし	1.96×2.04	22	
SK90	IV	8・9世紀?	なし		28	
SK91	II	?	石皿	4.6×1.96	83	
SK92	II	8・9世紀?	なし	3.0×2.8	52	
SK93	II	8・9世紀?	なし	3.52×2.82	46	
SK94	I	8・9世紀	須恵器甕・土師器甕、瓦	1.76×1.36	28	
SK95	II	8世紀後半~9世紀初頭	須恵器甕・壺・土師器甕・杯(糸切り)	1.84×1.68	66	
SK96	III	8・9世紀	須恵器甕・短頸壺・磨石	5.12×2.2	63	
SK97	III	8世紀前半	須恵器横瓶(SK73と接合)・磨石	2.6×1.32	1.8	SK98・99
SK98	III	8世紀前半	須恵器杯・甕・短頸壺	3.28×1.84 1.92×1.56	57	SK97・99
SK99	III	8世紀前半	須恵器甕(SK88と接合)・横瓶(SK77と接合)・杯・短頸壺・黒曜石剥片	1.96×1.8	45	SK97・98
SK101	IV	?	礫	0.38×0.34	17	
SK102	IV	8・9世紀?	なし	1.44×0.96	18	
SK103	IV	8・9世紀?	なし	0.2×0.18	15	
SK105	II	?	縄文土器・磨石	2.4×1.6	57	
SX01	III	8世紀前半	須恵器甕(SK31と接合)・土師器甕	5.44×4.08		

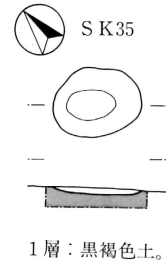
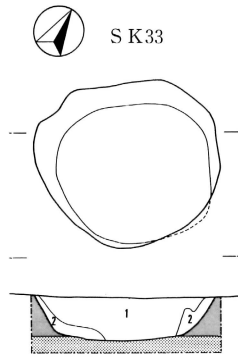
第10表 池田端竊跡 土坑一覽表



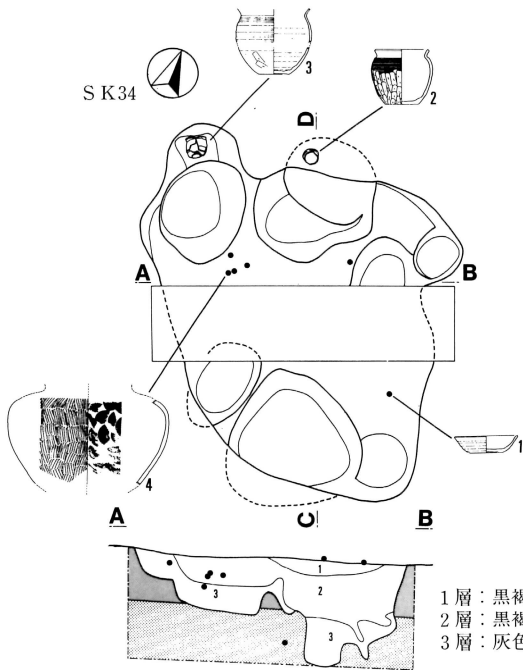
第215図 池田端察跡 粘土採掘跡(1)



1層：黒褐色土(Hue10YR2/3)細砂。炭化物を含む。
浅黄色粘土ブロックが混じる。
2層：褐灰土。粘性のある層で、鉄分のブロック
が多量に含む。



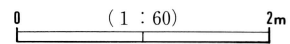
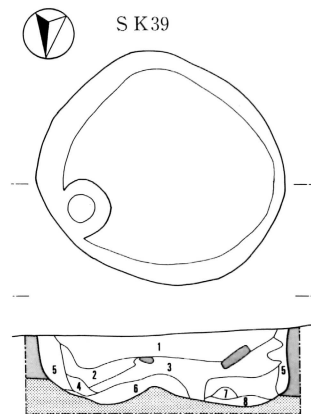
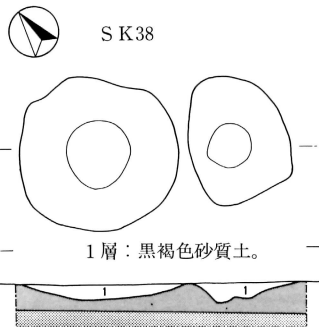
1層：黒色土。
2層：浅黄色粘土に黒色土を混じる。



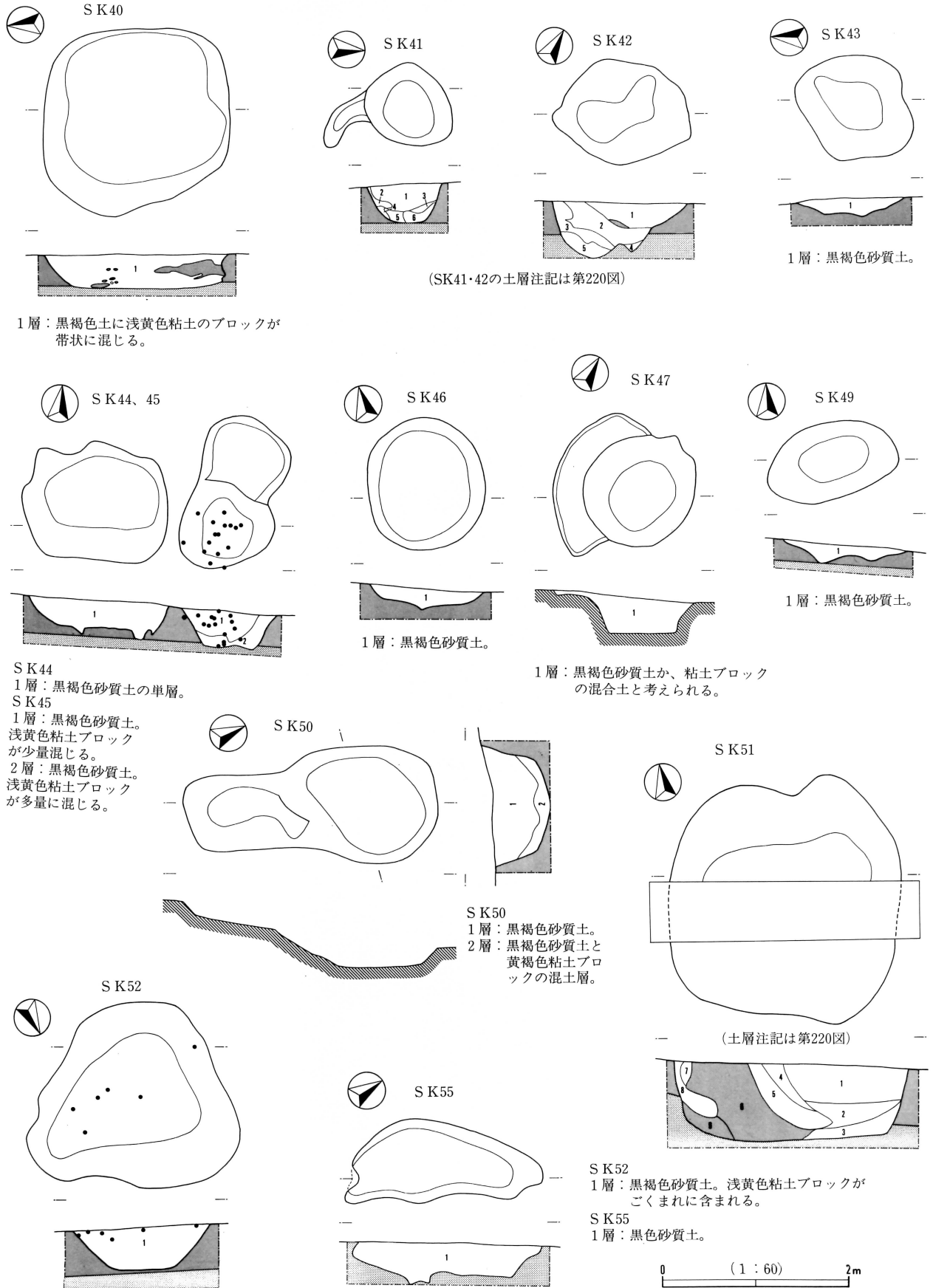
1層：黒褐色砂質土。
2層：黒褐色砂質土に黄褐色土ブロックが混じる。
3層：灰色に浅黄色粘土ブロックが混じる。



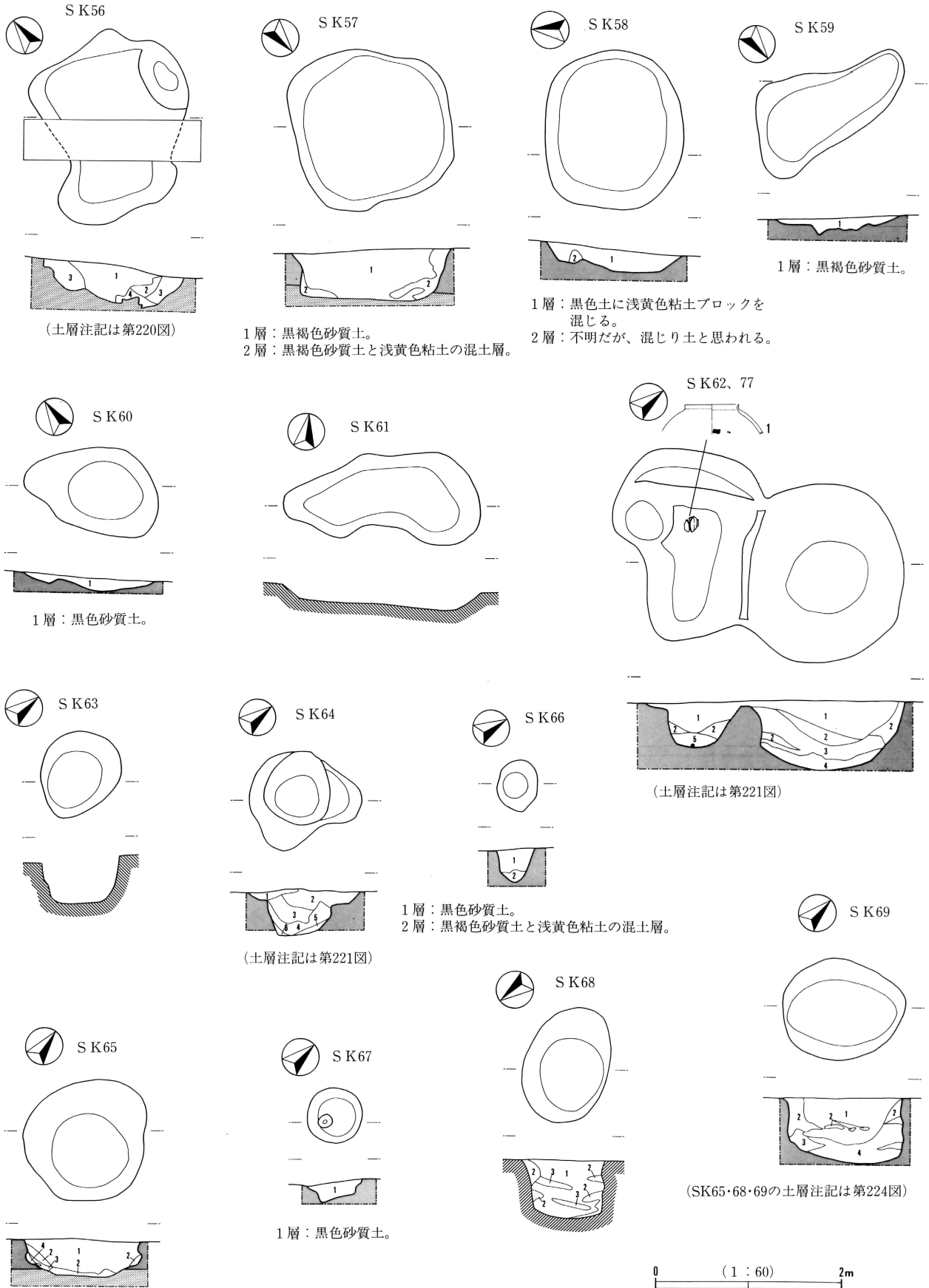
1層：黒褐色土。



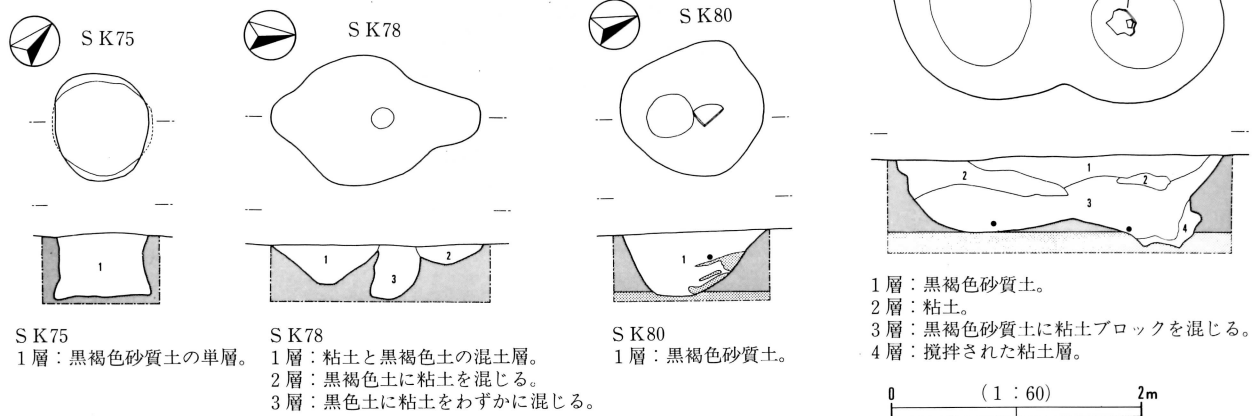
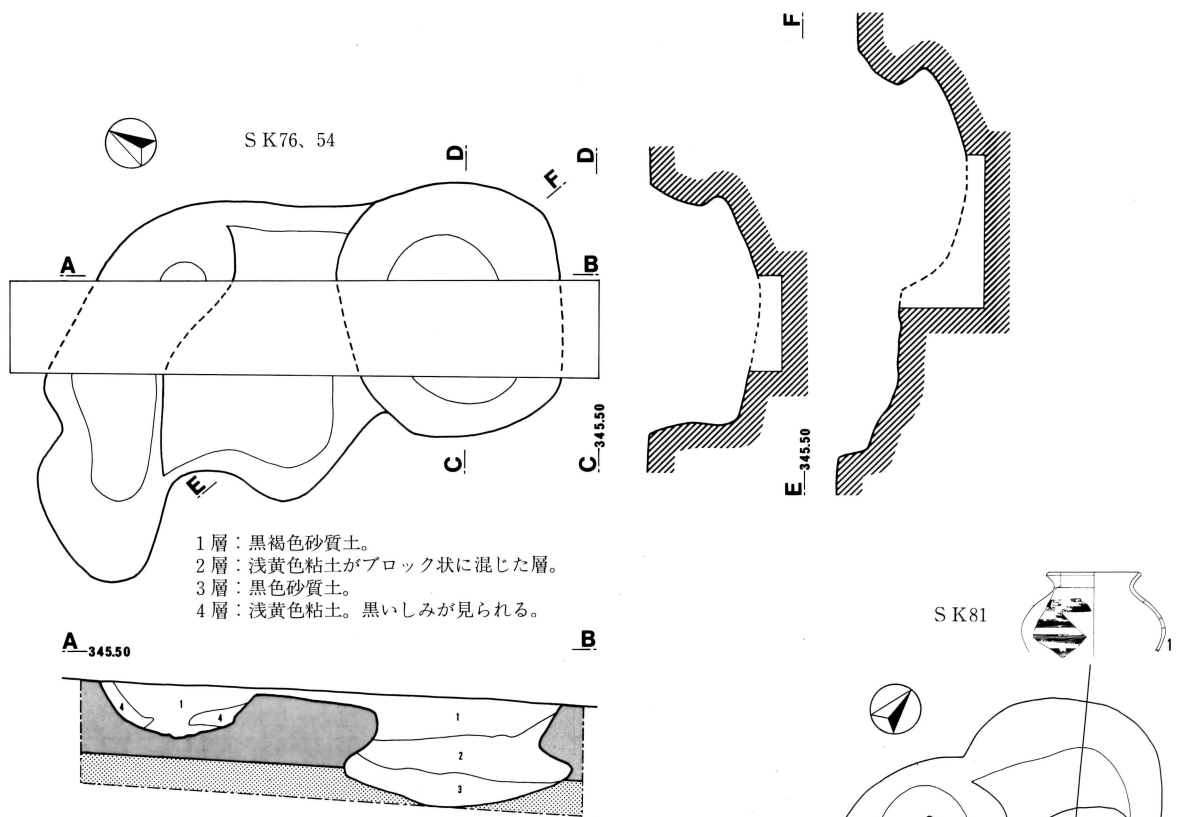
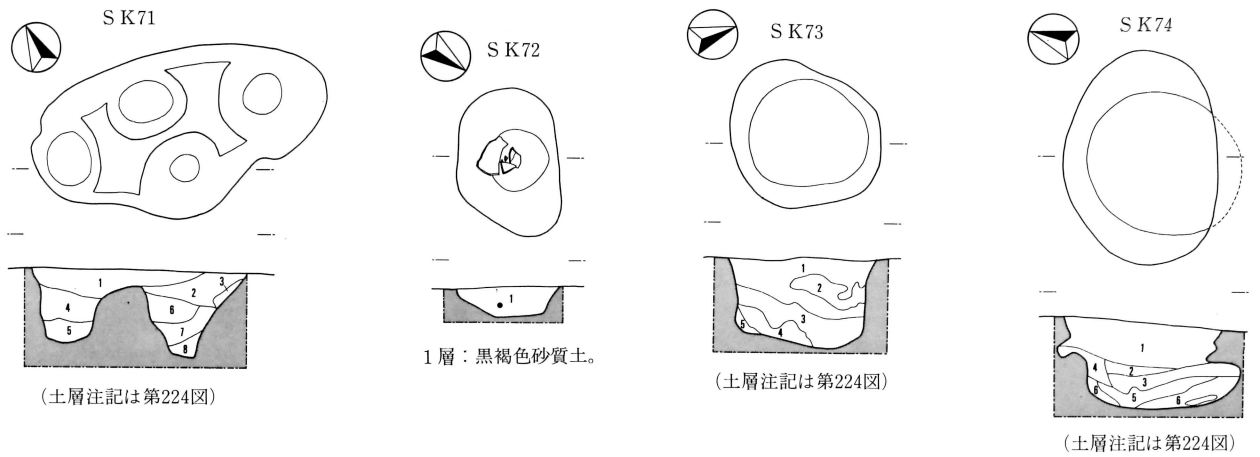
第216図 池田端窠跡 粘土採掘跡(2)



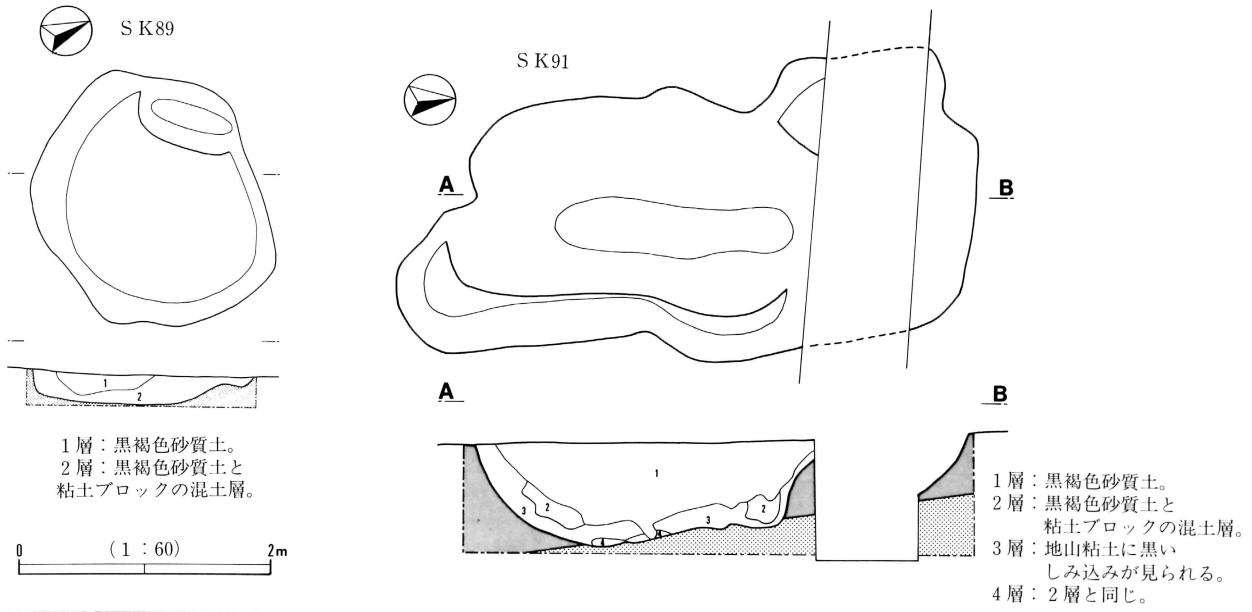
第217図 池田端窯跡 粘土採掘跡(3)



第218図 池田端窠跡 粘土採掘跡(4)



第219図 池田端窯跡 粘土採掘跡(5)



SK24

- 1層：地山の浅黄色粘土と思われる。
- 2層：黒褐色砂質土。鉄粉、浅黄色粘土を全く含まない。

SK25

- 1層：黒褐色砂質土。2層より黒色が濃い。
- 2層：浅黄色粘土。鉄分のブロックが混入。
- 3層：黒褐色砂質土。1層より白っぽく、鉄分のブロックが多い。
- 4層：3層と同じ。
- 5層：浅黄色粘土。鉄分のブロックが混入。
- 6層：黒褐色砂質土に浅黄色粘土ブロックが混じる。
- 7層：5層と同じ。
- 8層：黒褐色砂質土に浅黄色粘土ブロックが混じる。
- 9層：浅黄色粘土に黒色土が混じる。

SK26

- 1層：黒褐色砂質土。
- 2層：浅黄色粘土。
- 3層：1層と同じ。
- 4層：1層と同じ。
- 5層：黒褐色粘土に、部分的に浅黄色粘土ブロックが混じる。
- 6層：2層と同じ。
- 7層：5層と同じ。
- 8層：黒褐色砂質土に浅黄色粘土が混じる。
- 9層：浅黄色粘土。
- 10層：9層と同じ。
- 11層：浅黄色粘土に黒褐色土を混じる。

SK27

- 1層：黒褐色土に浅黄色粘土ブロックを混じる (30%)。
- 2層：黒褐色土。
- 3層：黒褐色土に浅黄色粘土色を帯状に混じる。
- 4層：黒褐色土に浅黄色粘土ブロックを混じる (30%)。
- 5層：黒褐色土。
- 6層：黒褐色土に浅黄色粘土ブロックを混じる。
- 7層：黒褐色土に浅黄色粘土色を帯状に混じる。

SK29

- 1層：黒褐色土に浅黄色粘土ブロックを混じる。
浅黄色粘土は部分的には帯状に堆積する。
- 2層：黒褐色土。
- 3層：地山の砂質シルト層。

SK31

- 1層：黒褐色土に部分的に浅黄色粘土ブロックを混じる。
- 2層：暗褐色土。地山の浅黄色粘土を混じる。

SK39

- 1層：黒褐色砂質土。
- 2層：1層と浅黄色粘土の混土層。
- 3層：1層に浅黄色粘土ブロックが混じる。
- 4層：黒色砂質土に浅黄色粘土ブロックがわずかに混じる。
- 5層：浅黄色粘土の崩落層。
- 6層：1層と浅黄色粘土の混土層。
- 7層：黒色砂質土に浅黄色粘土ブロックが混じる。
- 8層：1層に浅黄色粘土ブロックが混じる。

SK41

- 1層：黒褐色砂質土。浅黄色粘土ブロックを混じる。
- 2層：混土層。
- 3層：黒褐色砂質土。粘性がある。
- 4層：混土層。
- 5層：3層と同じ。
- 6層：4層と同じ。

SK42

- 1層：黒褐色砂質土。
- 2層：黒褐色砂質土。1層より固結度が高く、土器を含まない。
- 3層：浅黄色粘土ブロックの堆積。
- 4層：黒褐色砂質土に浅黄色粘土ブロックが混じる。
- 5層：黒色土に浅黄色粘土ブロックが混じる。

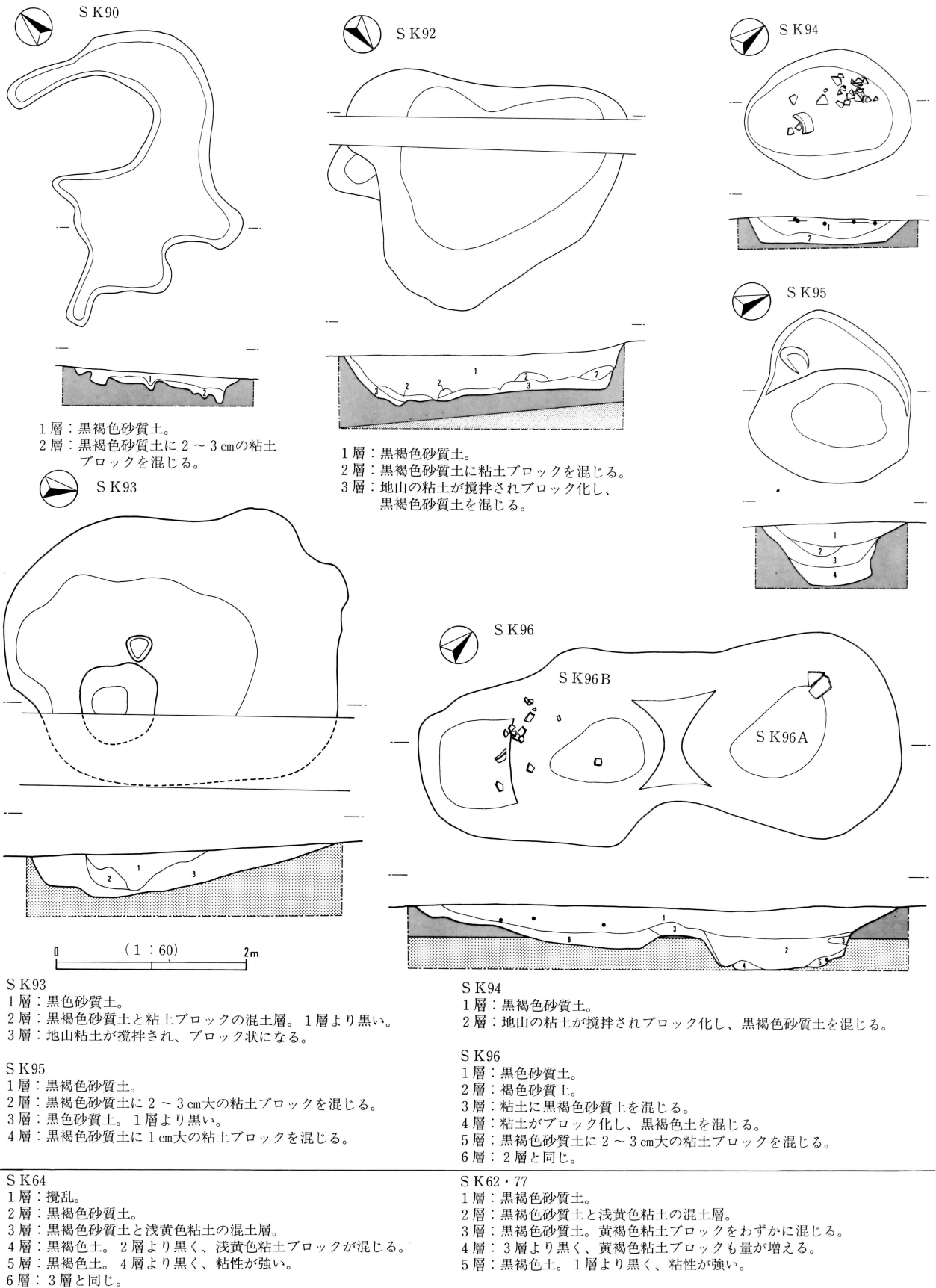
SK51

- 1層：黒褐色砂質土。
- 2層：黒色土。
- 3層：浅黄色粘土に黒灰色土のブロックを混じる。
- 4層：浅黄色粘土に黒褐色粘土を混じる。
- 5層：黒色土に浅黄色粘土を少量混じる。
- 6層：3層と同じ。
- 7層：黒灰色土に浅黄色粘土ブロックを混じる。
- 8層：黒色土に浅黄色粘土ブロックを混じる。
- 9層：3層と同じ。

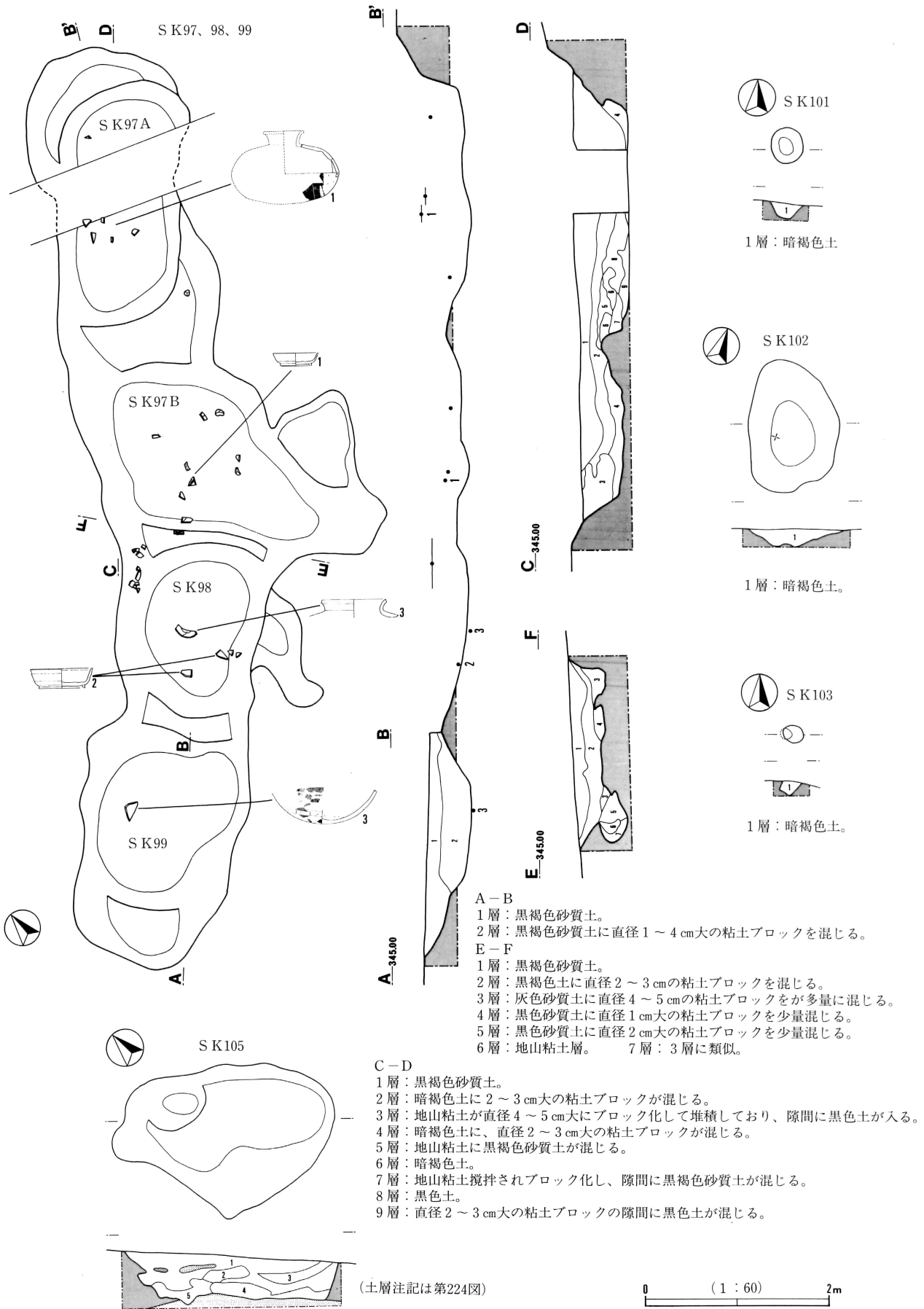
SK56

- 1層：浅黄色粘土に黄灰色の砂質土が混じる。
- 2層：黒褐色砂質土に浅黄色粘土ブロックを混じる (50%)。
- 3層：黒色砂質土。
- 4層：黒褐色砂質土に浅黄色粘土ブロックを混じる (10%)。

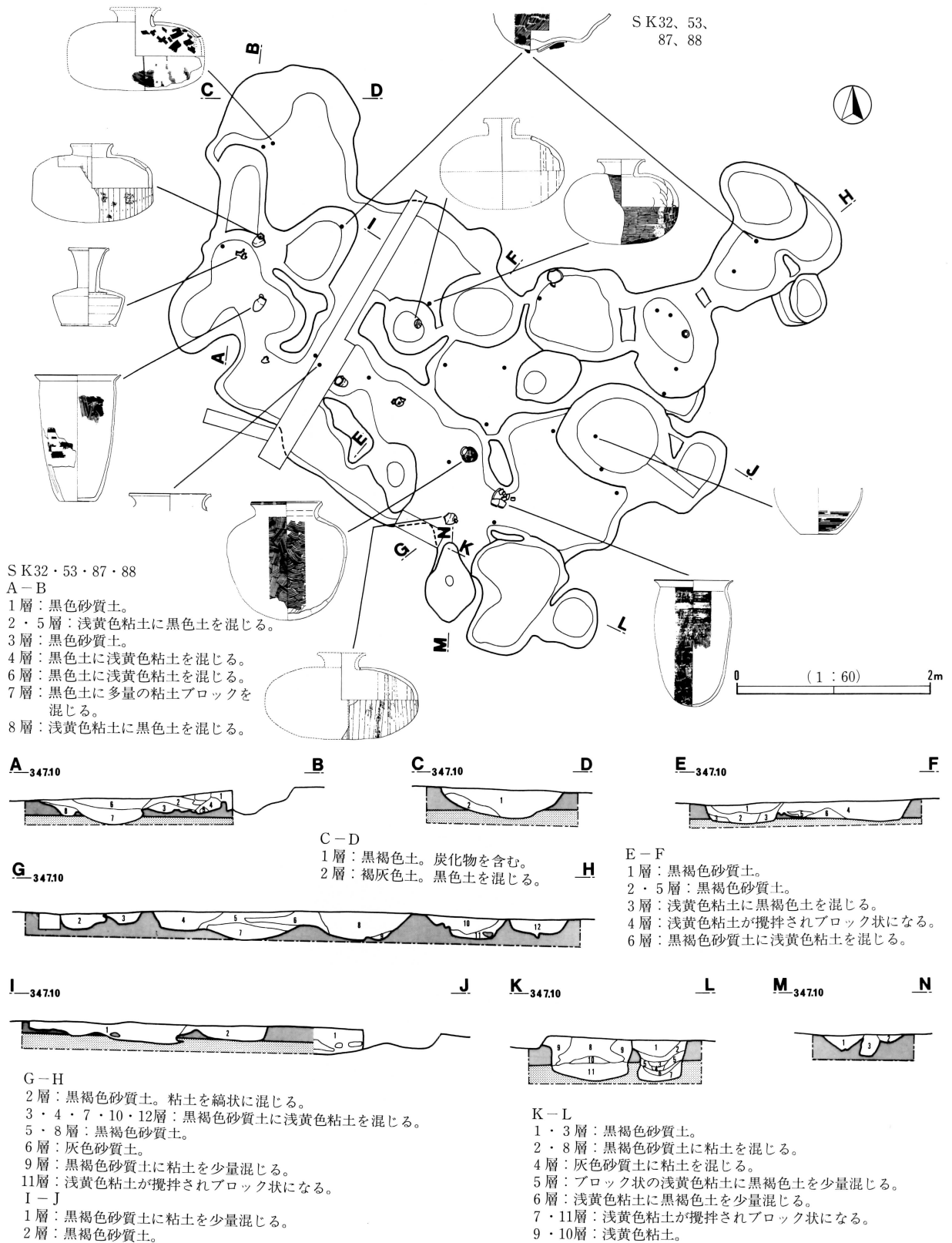
第220図 池田端窯跡 粘土採掘跡(6)



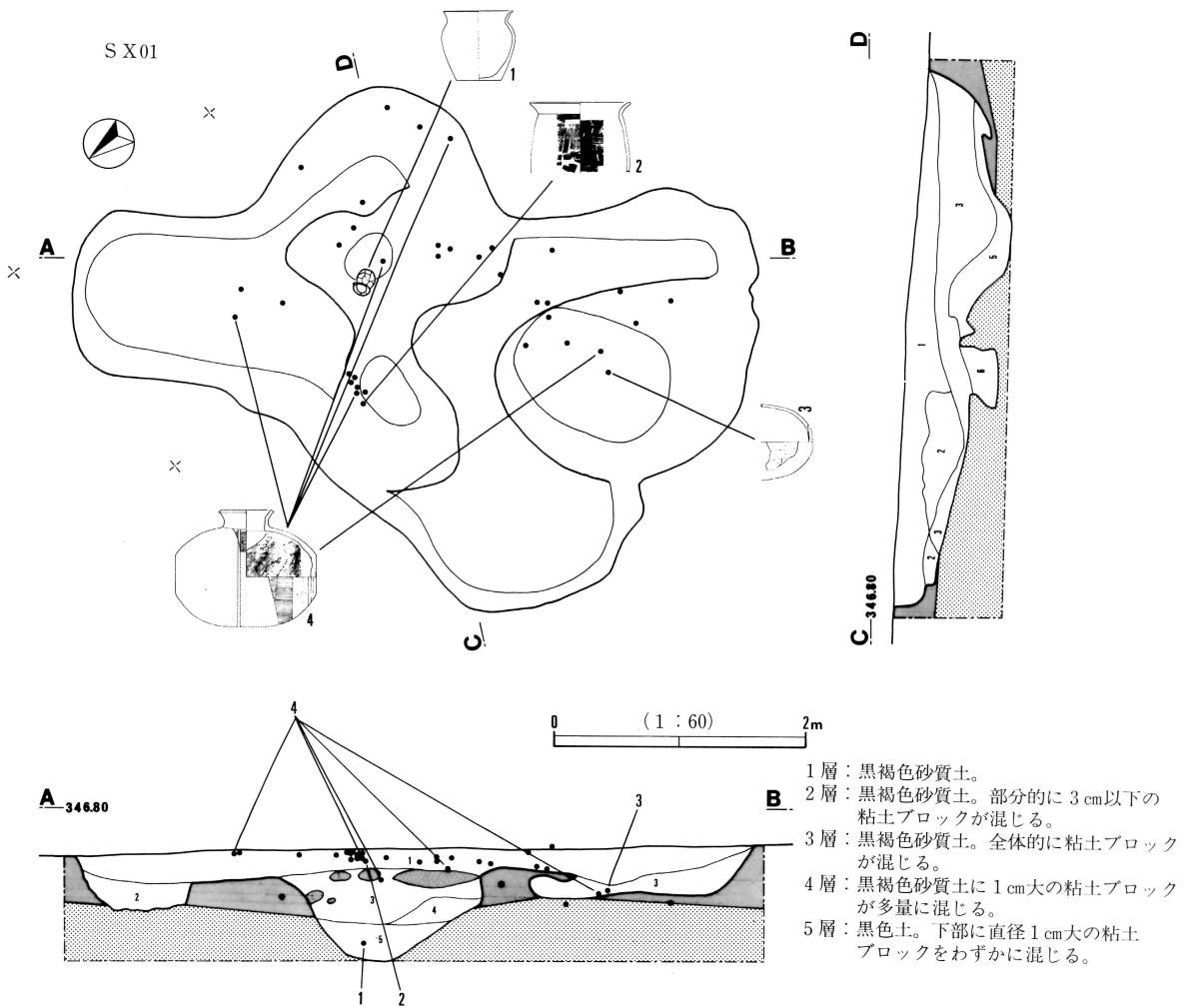
第221図 池田端窯跡 粘土採掘跡(7)



第222図 池田端窯跡 粘土採掘跡(8)



第223図 池田端窯跡 粘土採掘跡(9)



S K65

- 1層：黒褐色砂質土。
- 2層：黒褐色砂質土と浅黄色粘土の混土層。
- 3層：1層と同じ。
- 4層：2層と同じ。

S K68

- 1層：黒褐色砂質土。
- 2層：浅黄色粘土。
- 3層：黒褐色砂質土と浅黄色粘土の混土層。

S K69

- 1層：黒褐色砂質土。
- 2層：黒褐色砂質土に浅黄色粘土ブロックが混じる。
- 3層：2層と類似。2層より黒褐色砂質土が少ない。
- 4層：2層と同じ。

S K70

- 1層：黒褐色砂質土。
- 2層：黒褐色砂質土と浅黄色粘土の混土層。

S K71

- 1層：黒色砂質土。
- 2層：灰褐色ブロックに黒色砂質土が混じる。
- 3層：黒色砂質土。
- 4層：粘土がブロック状になり、黒いしみが見られる。
- 5層：黒色砂質土に粘土ブロックが混じる。
- 6層：3層と同じ。
- 7層：5層と同じ。
- 8層：6層と同じ。

S K73

- 1層：黒褐色砂質土。
- 2層：黒褐色砂質土と粘土の混土層。
- 3層：2層に似ているが、黒褐色土の割合が多い。
- 4層：2層と同じ。
- 5層：1層と同じ。

S K74

- 1層：黒褐色砂質土。
- 2層：黒褐色砂質土。1層より白く、粘性弱。
- 3層：黒褐色砂質土に黄褐色粘土ブロックが若干混じる。
- 4層：黒褐色砂質土と黄褐色粘土の混土層。
- 5層：黒褐色砂質土と黄褐色粘土の混土層。4層より黒褐色土の割合が多い。
- 6層：浅黄色粘土に黒褐色土が混じる。

S K105

- 1層：黒褐色砂質土。
- 2層：黒褐色砂質土に直径3～4cm大の粘土ブロックを混じる。
- 3層：ブロック状の粘土に、黒褐色砂質土を混じる。
- 4層：粘土が攪拌されブロック状になる。
- 5層：4層と類似するが、ブロックが粗い。

第224図 池田端窯跡 粘土採掘跡(10)

(2) 遺物出土状況について

粘土採掘跡より出土した遺物は、須恵器の杯A・杯B・横瓶・長頸壺・四耳壺・甕、土師器の小型甕・長胴甕・球胴甕である。出土遺物には杯蓋が認められない。客観的なデータは示せないが、窯跡及び集落跡の出土器種と比較して、杯類の出土数は少なく、横瓶の出土点数が多いことが伺われる。これらの遺物は比較的残存率が高く、SK34・SX01出土の土師器小型甕などのように土坑底面から完形で出土したものもある。特に、SK34の土師器小型甕はオーバーハングした部分に出土しており、埋設したような出土状況を示している。この他に、SK81・99などのように土坑底面から甕の大きな破片が出土する例など人為的に土坑内に残されたと思われる遺物が認められる。なお、土師器小型甕の他に完形で出土したものはSK88出土の杯Aのみである。

また、出土遺物は全般的に残存率が高く大型の破片または半完形品であり、遺構内では小破片はあまり認められず、②区全体の遺構間接合を行ったにも関わらず、完形に還元されるものはなかった。また、SK88底面より出土した須恵器甕はほぼ完形ではあるが、底面が剥落しており、低部は脆弱となっていることから、機能的には完形品とは言い難い。遺構内の発掘資料のみで言及するには無理はあるが、以上の状況から、粘土採掘跡で出土した遺物には、本来の機能が失われてから遺跡内に持ち込まれた可能性も考慮する必要がある。すなわち、出土遺物には、半完形もしくは大型の破片の状態で遺跡に持ち込まれたものも含まれていると考えられる。

遺構間の接合関係を見ると、SK21とSK22とSK34、SX01とSK31、SK34とSK53、SK45とSK81、SK68とSK77、SK73とSK97、SK77とSK99、SK88とSK99の接合関係が見られる。土坑内一括で取り上げたものもあり、詳細な出土状況はつかめないが、SK88とSK99のように30m以上も離れた土坑間での接合も見られる。

(3) 出土遺物

SK15出土遺物(第226図1) 1は底部と口縁部欠損の土師器小型甕である。

SK20・21出土遺物(第226図1) 内面は同心円文の当て具痕を残し、外面は平行タタキ後を板状工具でカキ目調整している。球胴形の須恵器甕の破片である。

SK22出土遺物(第226図1・2) 1と2は軟質な須恵器の壺胴下半部で平底である。1は酸化焙焼成で、タタキ目をスリ消し調整している。2は内面に横位ハケ調整を残す。

SK23出土遺物(第226図1～6) 1と2は回転ヘラ切り後外周ヘラ削り調整の須恵器杯A底部である。腰部から口縁の立ち上がりかけ稜を成す。杯Bの3の底部は回転糸切り後外周を回転ヘラ削り調整し、4は切り離し技法不明であるが、回転ヘラ削り調整している。3と4も、高台が内側に付けられている。3は浅身の口径の大きい箱型であり、4は深身で逆台形の形態である。6の凸帯付四耳壺は凸帯部が断面三角形で、凸帯上に付けられた耳部の穴は貫通していない。5は頸部が「く」の字状で胴部にカキ目がみられる土師器長胴甕である。

SK24出土遺物(第226図1) 1は砲弾形の土師器長胴甕胴下半部で、丸みのある小さな平底である。外面は縦位ヘラ削り調整であり、内面は斜位ハケ調整である。

SK31出土遺物(第227図1・2) 1は須恵器甕の平底部分である。2は須恵器甕Eの口縁から体部まで断面S字状になる浅鉢形で、底部は欠損している。体部にタタキ目を残す。胎土が非常に白色を帯びている。

SK32出土遺物(第227図1) 須恵器横瓶である。頸部は体部に差し込むように接合している。被蓋部は搾った後蓋をし、内面指オサエで調整している。体部外面中央に割付の沈線がみられる。

SK 3 4 出土遺物(第227図1～4) 1の杯Aは回転糸切りの底部で、底径は6.6cmである。SY 0 6・0 7と同時期の杯と思われる。2・3は土師器小型甕で、胴上半部はカキ目調整、胴下半部は縦位へラ削りである。4の須恵器甕は内面に細かい同心円文の当て具痕がみられる。SK 2 0・2 1の第226図1の当て具痕と比べると同心円が細かく丸木の小口を当て具とした可能性がある。SK 2 0・2 1の方は土製の当て具であろうか。4はSK 5 3出土の破片と接合している。

SK 3 9 出土遺物(第227図1) 須恵器壺胴部破片で、短頸壺と思われる。

SK 4 5 出土遺物(第228図1・2) 1は外面タタキ目が残る須恵器甕Cである。2は中型の土師器球胴甕で、胴下にカキ目が認められる。2はSK 8 1出土のものと接合した。

SK 5 3 出土遺物(第228図1～5) 1・4は須恵器横瓶で、1は外周全体を回転へラ削りし、被蓋部が平らで丁寧な作りであり、プロポーシヨンの整った個体である。体部外面にへラ描き「メ」がみられる。4は被蓋接合部の搾り痕が明瞭である。2の須恵器甕は内面に細かい同心円文の当て具痕が見られ、SK 3 4出土のものと接合する(第227図4)。3の土師器長胴甕は口縁部が胴部よりかなり大きく開き、胴部が張らない。平底で胴上半部は横位と縦位のハケ目、胴下半部が縦位へラ削りである。5の須恵器長頸壺は肩部がかなり張り、「く」の字状に屈曲する。肩部の擬口縁に粘土帯を巻き、頸部を差し込むように接合している。(第181図4参照)

SK 6 2 出土遺物(第229図1) 須恵器短頸壺Bである。口頸部がかなり短い短頸壺で、肩部は撫で肩である。色調は白っぽい。

SK 6 8 出土遺物(第229図1) 須恵器甕はSK 7 7出土のものと接合した。平底部分で内面に同心円文の当て具痕が僅かに残る。

SK 7 1 出土遺物(第229図1・2) 1はイカリ肩の須恵器甕体部破片である。2は丸みのある須恵器甕平底部分である。

SK 7 3 出土遺物(第229図1) 1の須恵器横瓶は砲弾形被蓋部の破片である。外面に削りと中央部に割り付け沈線が残る。

SK 7 7 出土遺物(第229図1) 1は須恵器横瓶の被蓋部破片で、内面を搾らずに被蓋部の擬口縁に粘土帯を接合し、それに蓋を接合している。これはSK 9 9出土のもの(第232図4)と接合する。

SK 7 9 出土遺物(第229図1) 1の須恵器短頸壺は口縁部と底部欠損し、イカリ肩で体部が長い。外面にタタキ目がわずかに残り、底部外側にへラ削り調整が行われている。色調は白っぽい。

SK 8 1 出土遺物(第229図1) 1は土師器球胴甕で、SK 4 5出土のものと接合している。

SK 8 7 出土遺物(第230図1～4) 1と4は須恵器横瓶で、1は被蓋部をかなり搾って被蓋し、外面をタタキ調整している。4は被蓋部を搾らず、外面を回転へラ削り調整している。2は須恵器甕Cの口縁部である。3は焼き歪のある丸底の須恵器大甕の底部である。底部に融着する杯蓋の破片は焼台であろう。

SK 8 8 出土遺物(第230図1～3、第231図4～8) 1・2の須恵器杯Aは回転へラ切り後外周へラ削りしている。底部が丸みを持ち、腰部は底部より少し上がったところにある。3・4は須恵器横瓶で、3は体部外周中央はへラ削り調整で、内面中央縦方向に仕切りがみられる。このような仕切は、富山県小杉流通業務団地内遺跡群NO16遺跡1号窯灰層出土の横瓶(斎藤・後藤1995)にみられ、それと類似する。富山県には横瓶、平瓶に仕切りのあるものが出土している。4は被蓋部が砲弾形をしており、外面全部を回転へラ削り調整している。5は砲弾形の土師器長胴甕である。頸部横位ハケ調整、胴部縦位ハケ調整である。6は須恵器短頸壺底部である。体部は球形で底部平底である。7は内面に同心円文の当て具痕の残る須恵器甕Cである。体部は球形で最大径は体部上半部にあり、丸底の底部まで丸みを保つ。8は丸底の須恵器甕である。

SK 9 6 出土遺物 (第231図1・2) 1は小型の須恵器短頸壺の胴下半部で、内外面カキ目調整し、外面下半部へラ削り調整が行われている。2は須恵器甕Dで、頸部が「く」の字状に屈曲し、肩部がイカリ肩で、体部は丸みを持ち底部に到る。

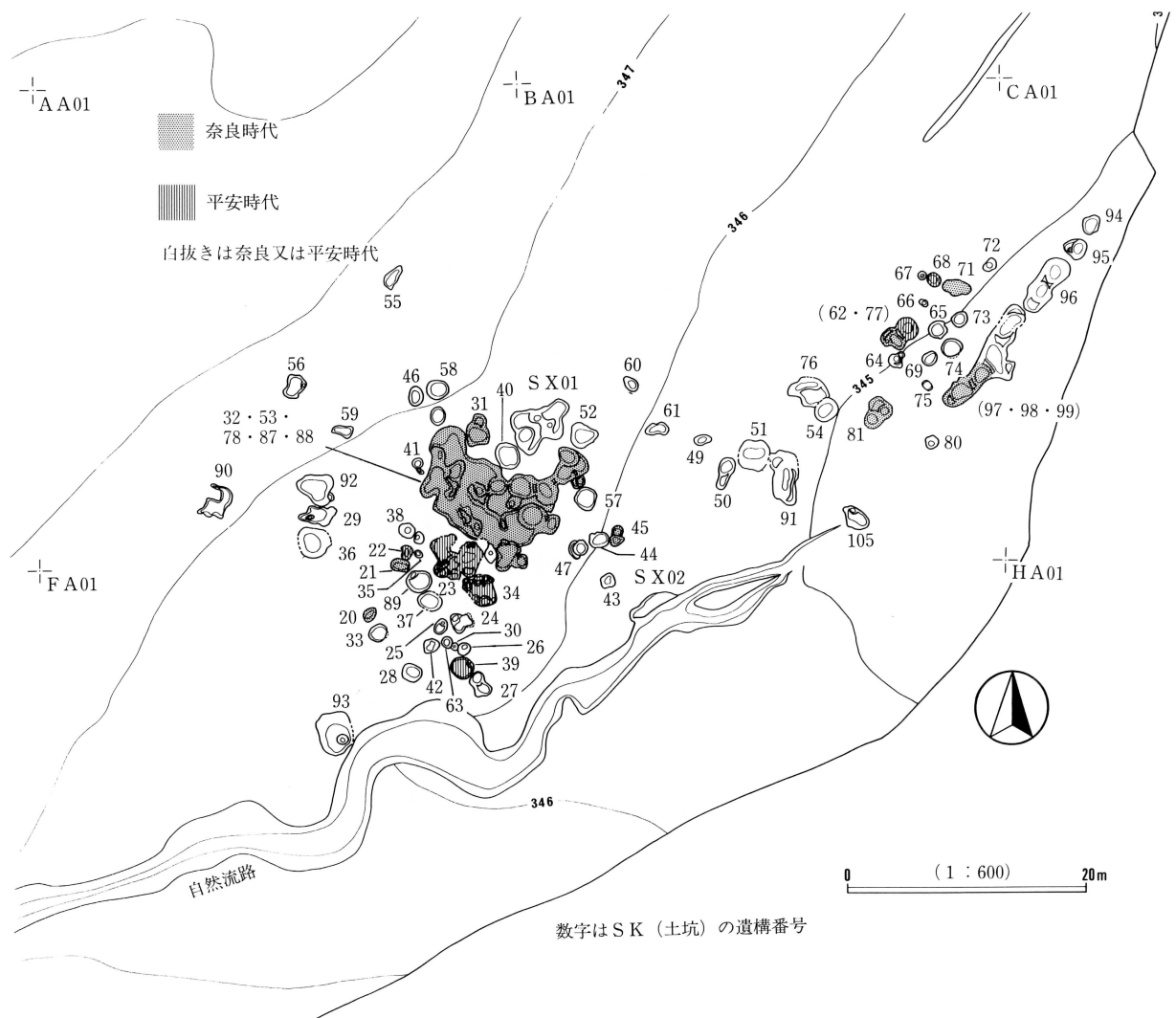
SK 9 7 出土遺物 (第231図1) 1は須恵器横瓶で、SK 7 3 出土のもの (第229図1) と接合する。

SK 9 8 出土遺物 (第232図1～3) 1・2は須恵器杯B、3は須恵器甕Cである。杯Bは大小あり、2点とも箱型で、底部回転へラ削り調整されている。

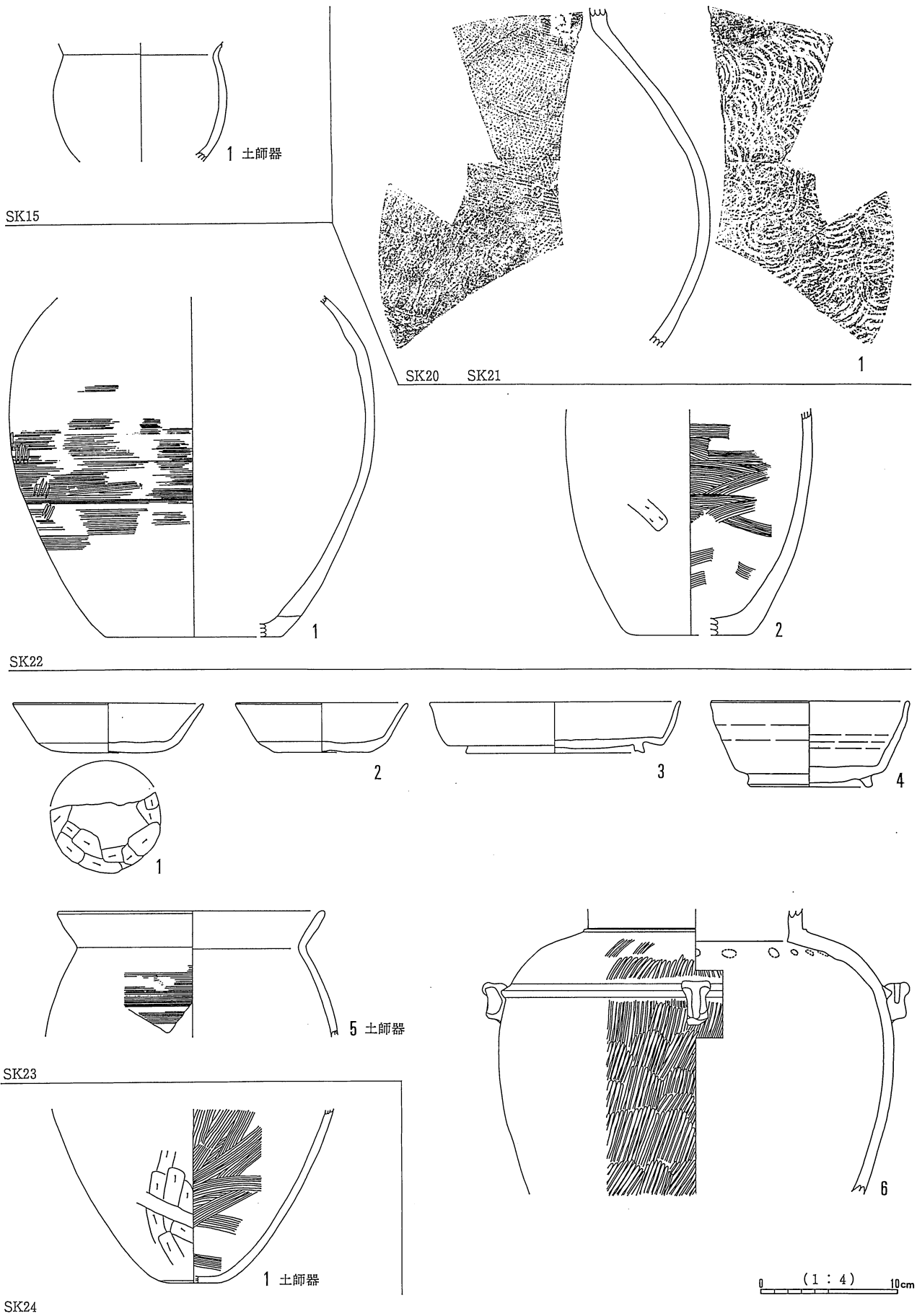
SK 9 9 出土土器 (第232図1～4) 1・2の須恵器杯Aは底部回転へラ切りである。3は須恵器甕でSK 8 8 出土のもの (第231図8) と接合する。4は須恵器横瓶でSK 7 7 出土のもの (第229図1) と接合する。

SX 0 1 出土遺物 (第233図上段) 1の土師器小型甕はナデ調整の平底である。2・3は土師器長胴甕で、2は頸部が「く」の字形になり、内面横位のハケ目、外面は体部に縦位のハケ調整をして、頸部に横位ハケ目を施している。4の須恵器横瓶は内面に丁寧なハケ調整を行い、被蓋部に蓋をし、接合面にナデ調整を行っている。接合部外面には回転へラ削りを行っている。被蓋部は平らである。

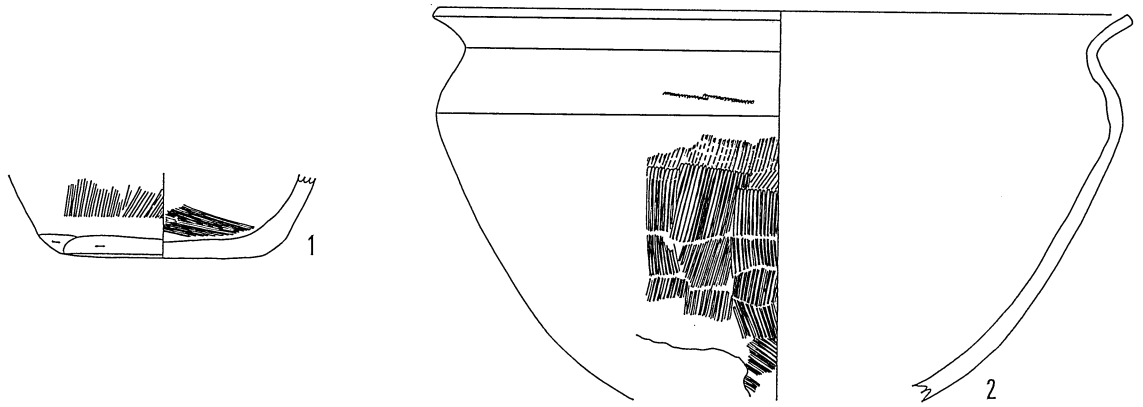
粘土採掘跡周辺の遺構外出土遺物 (第233図下段) 1は須恵器凸帯付四耳壺で、破片のため耳部の形状は不明である。2～4は甕Aで、2は甕Aの口縁部下に凸帯を巡らせており、SY 0 6 の甕A (第211図27・



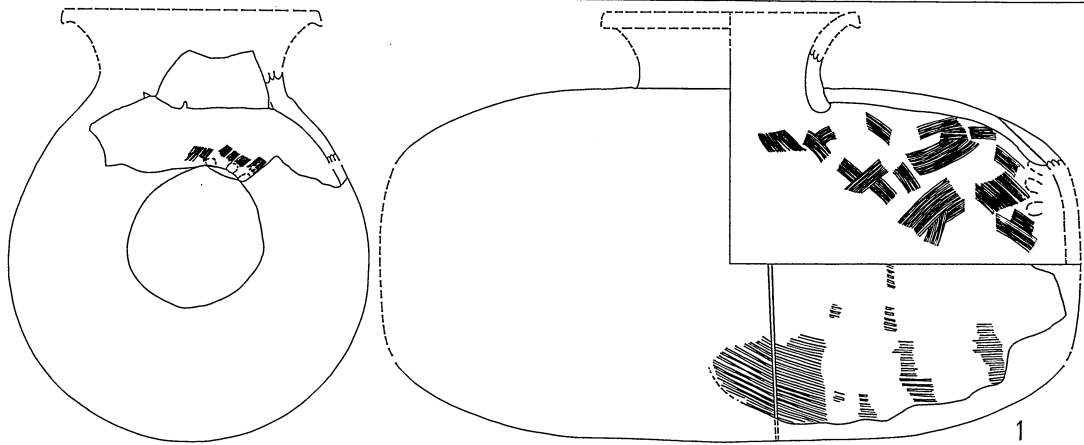
第225図 池田端窯跡 奈良・平安時代粘土採掘跡配置図



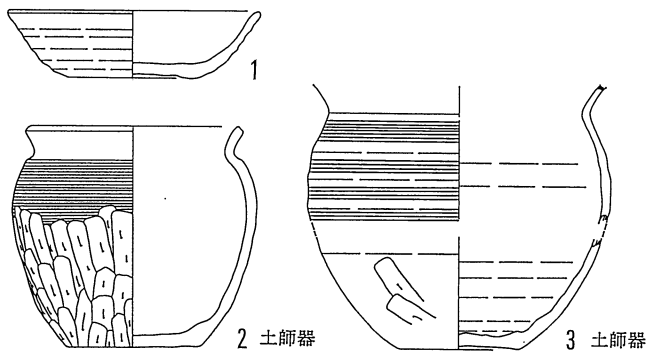
第226図 池田端窯跡 SK15・20・21・22・23・24出土遺物



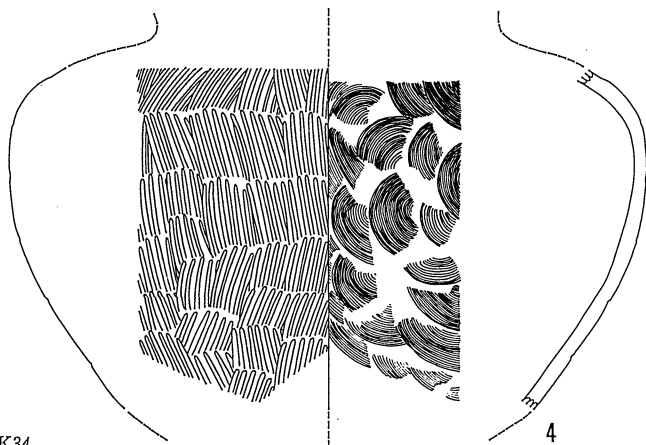
SK31



SK32



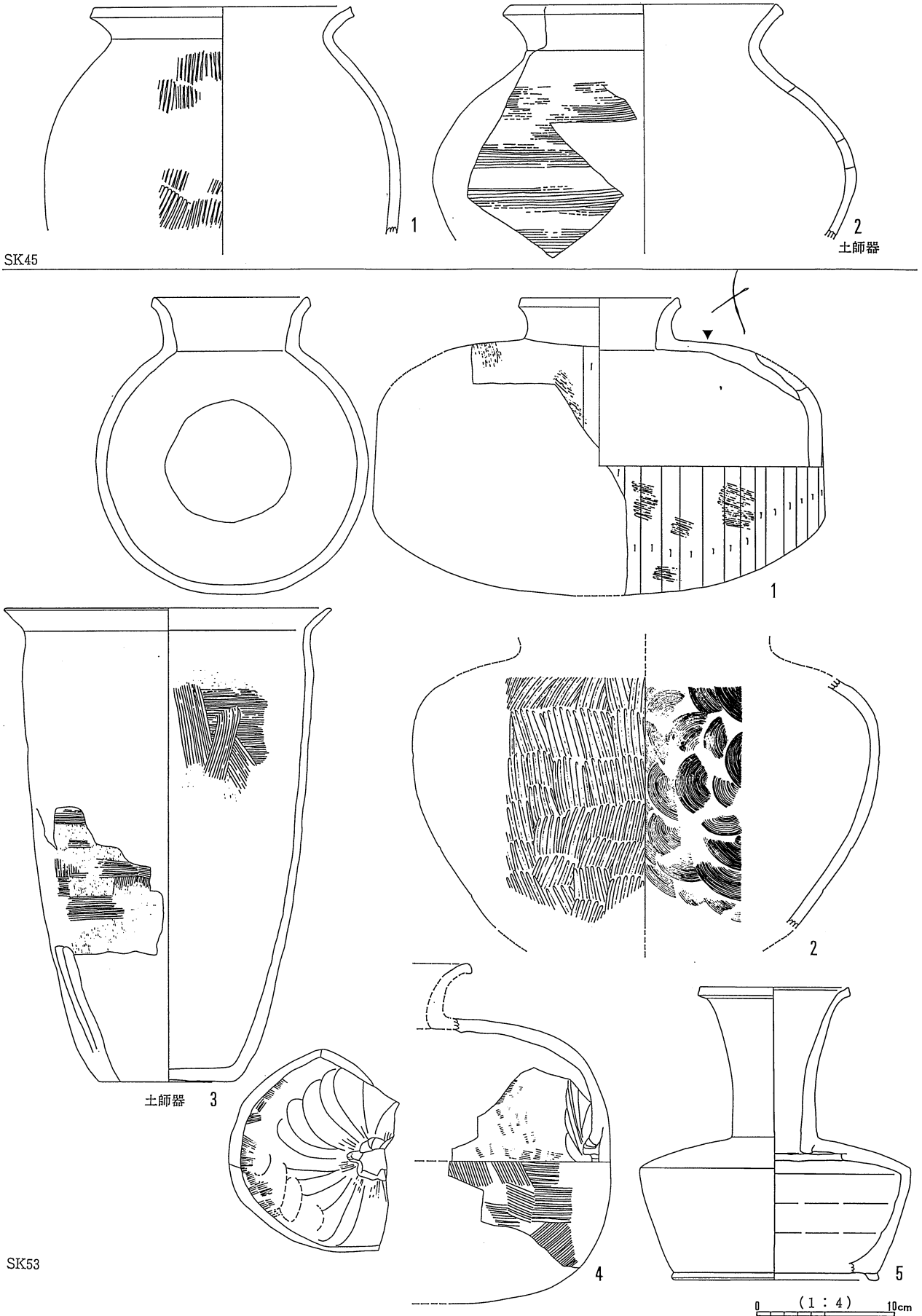
SK34



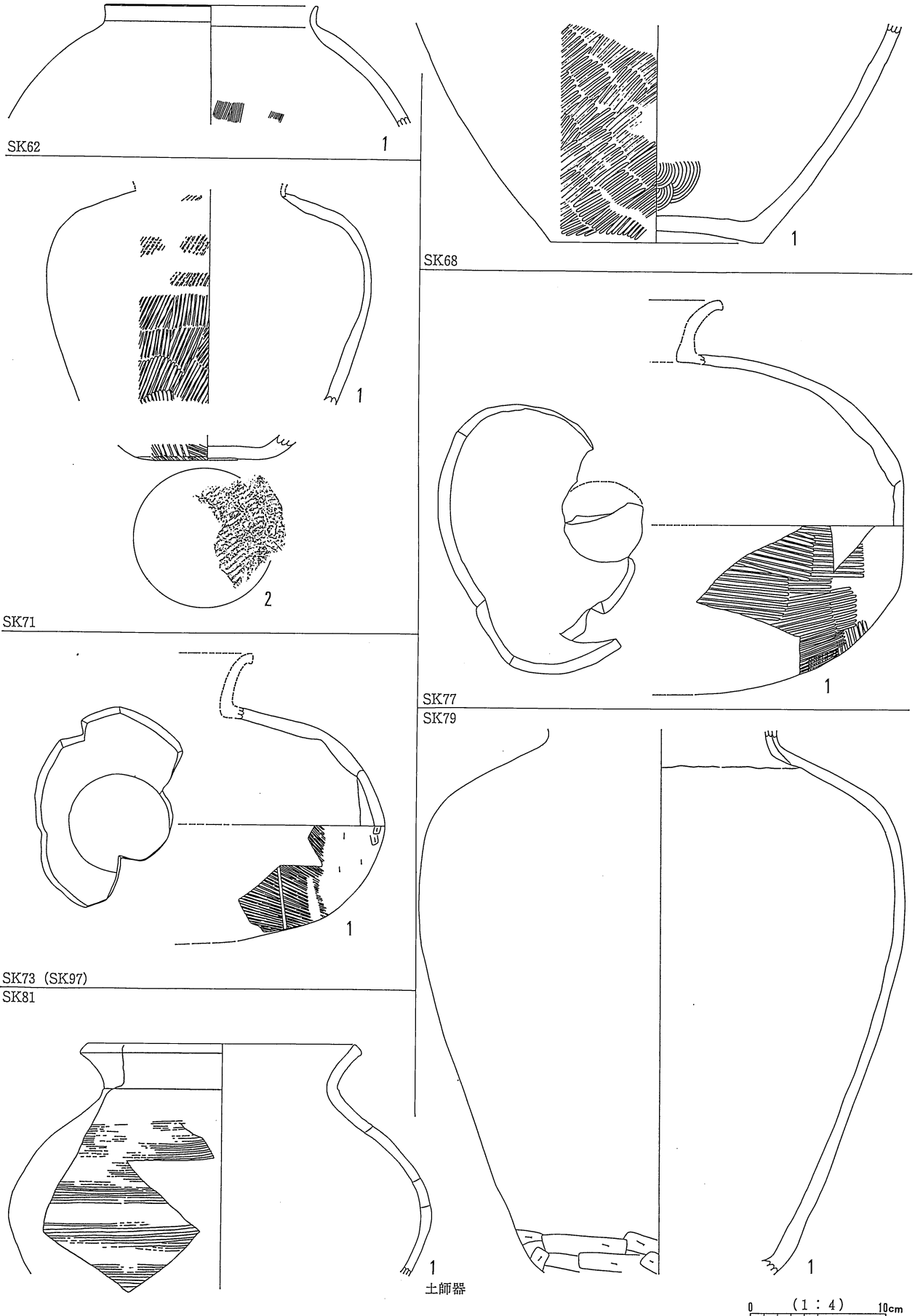
SK39

0 (1:4) 10cm

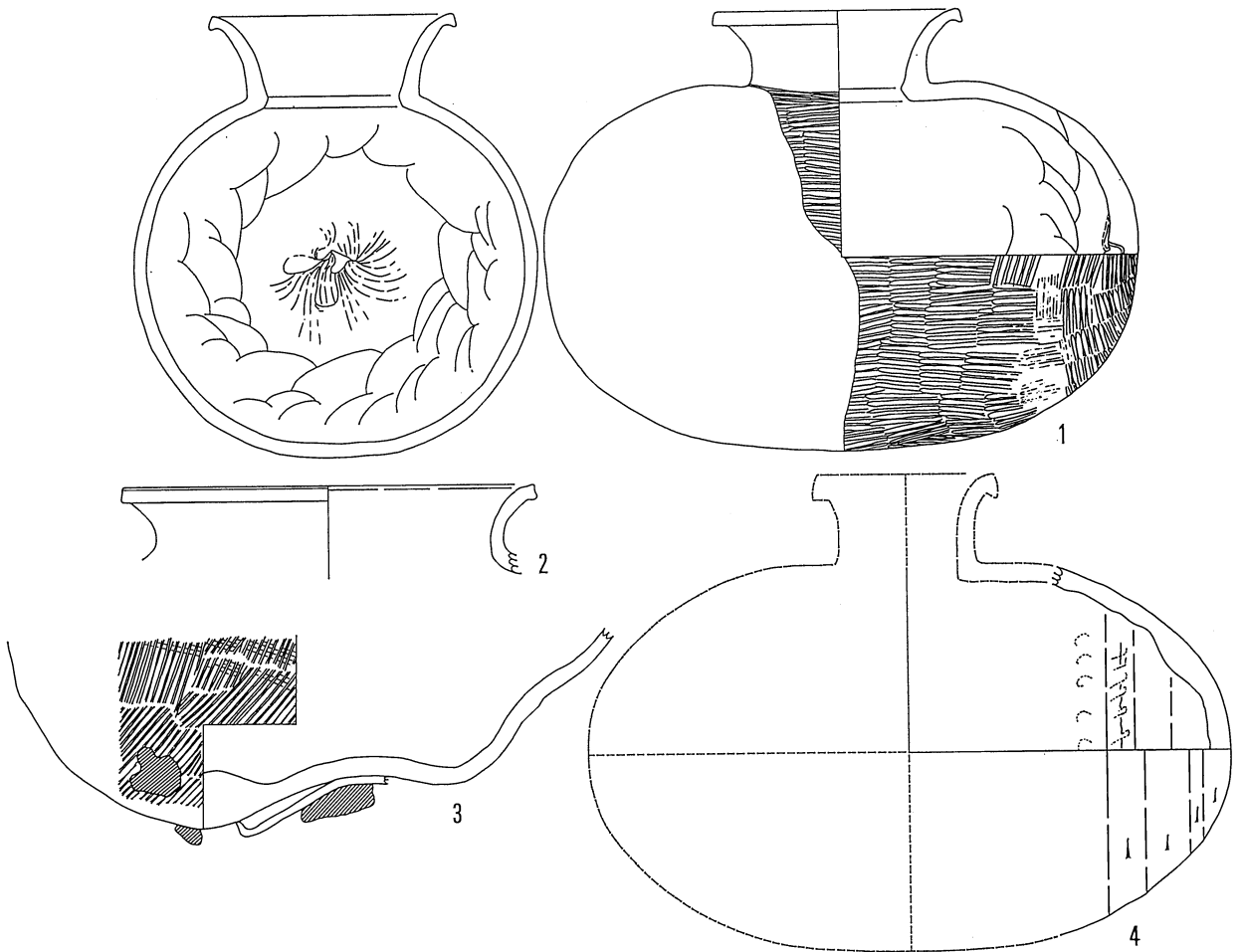
第227図 池田端窯跡 SK31・32・34・39出土遺物



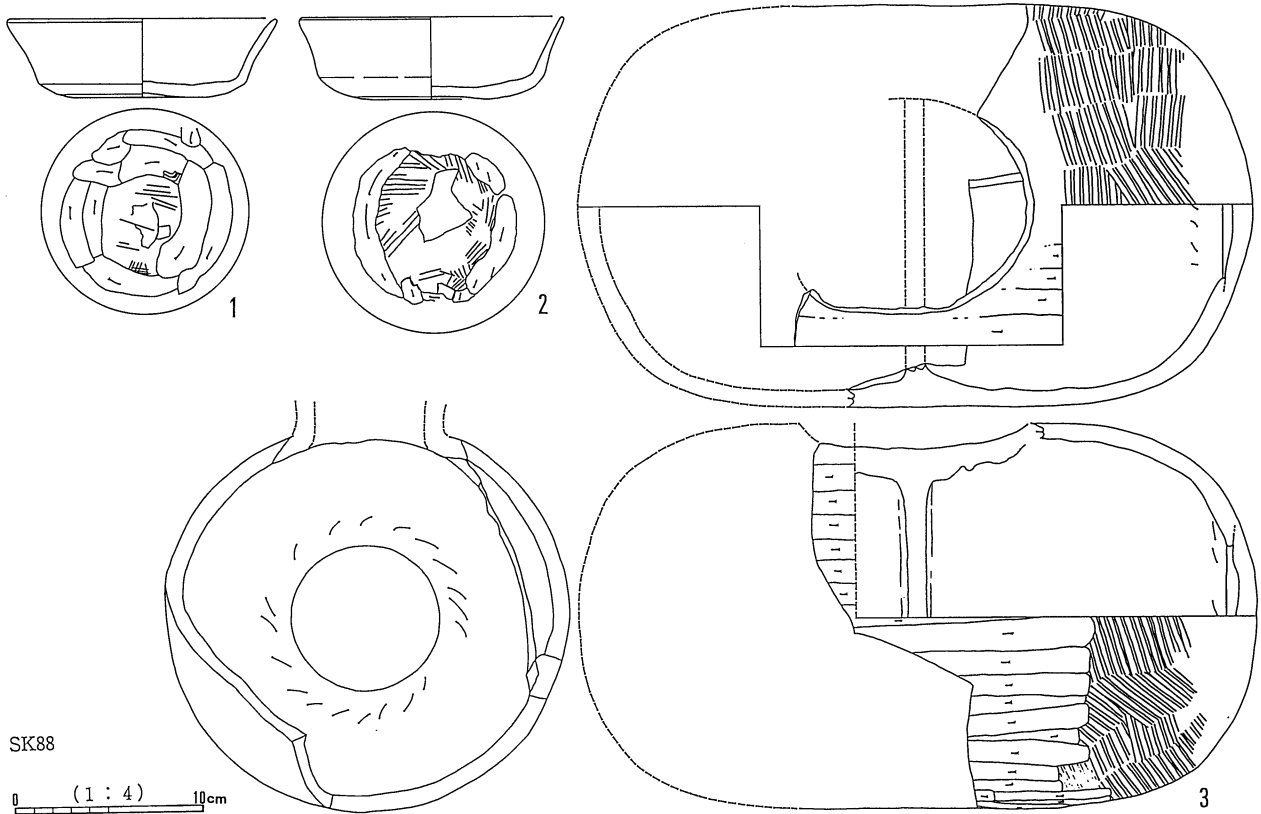
第228図 池田端窯跡 S K45・53出土遺物



第229図 池田端窯跡 SK62・68・71・73・77・79・81出土遺物



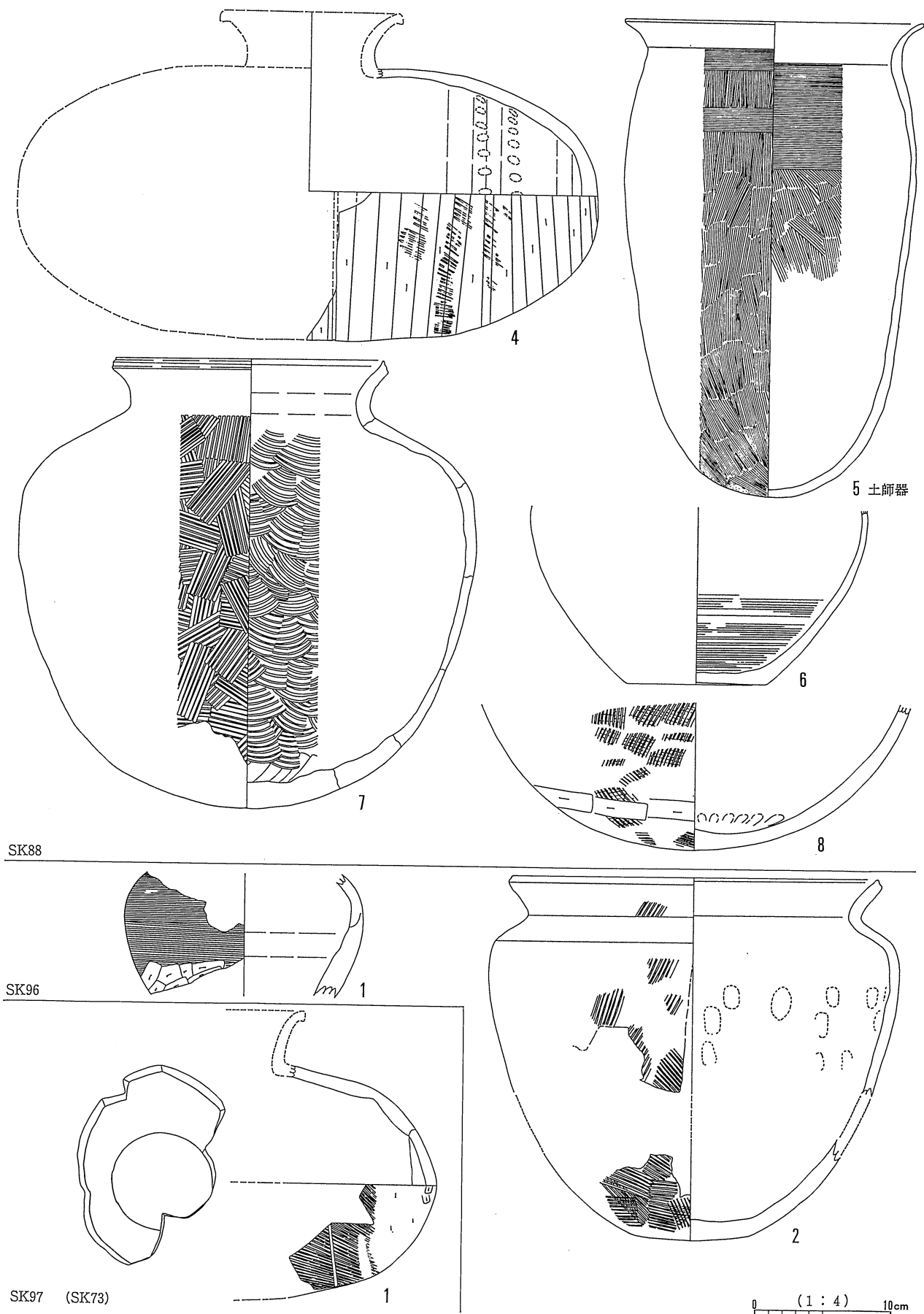
SK87



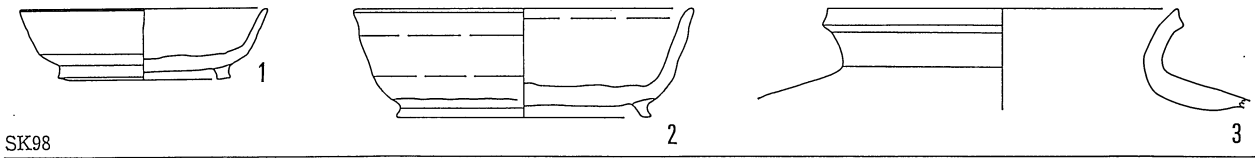
SK88

0 (1:4) 10cm

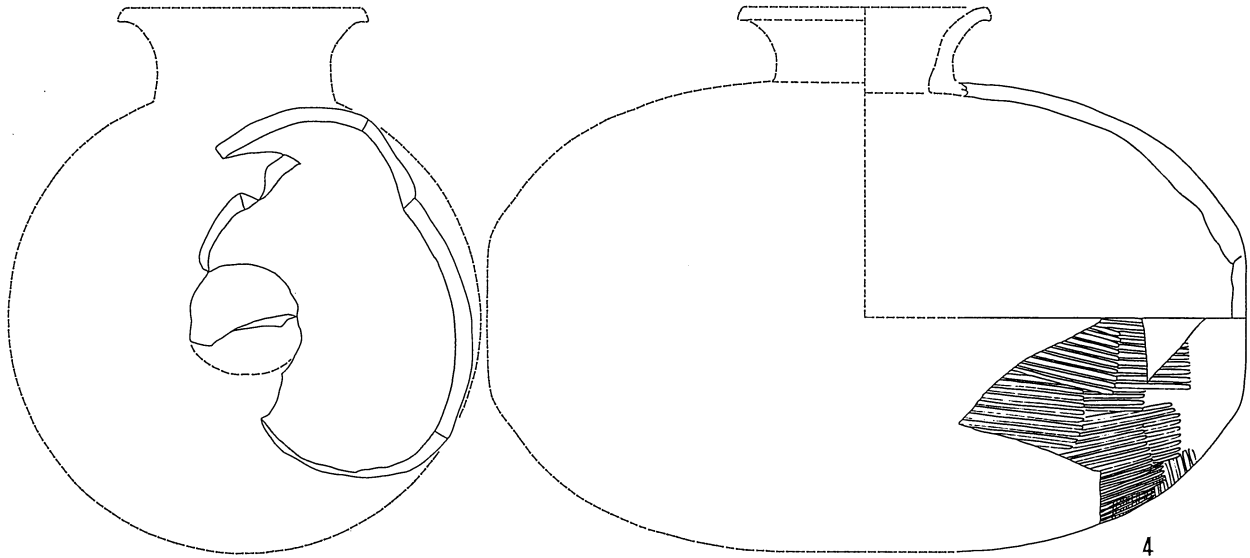
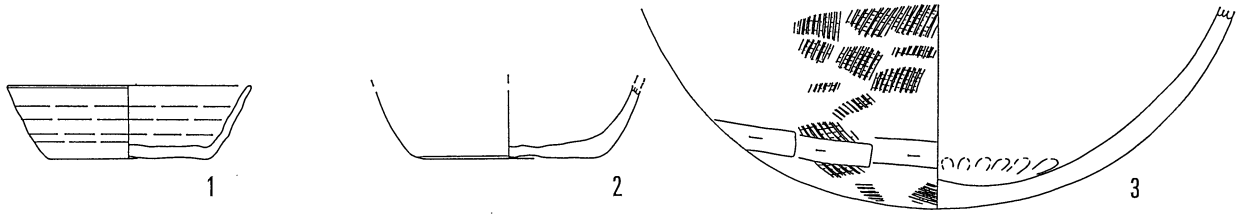
第230図 池田端窯跡 SK87・88出土遺物



第231図 池田端察跡 S K88・96・97出土遺物

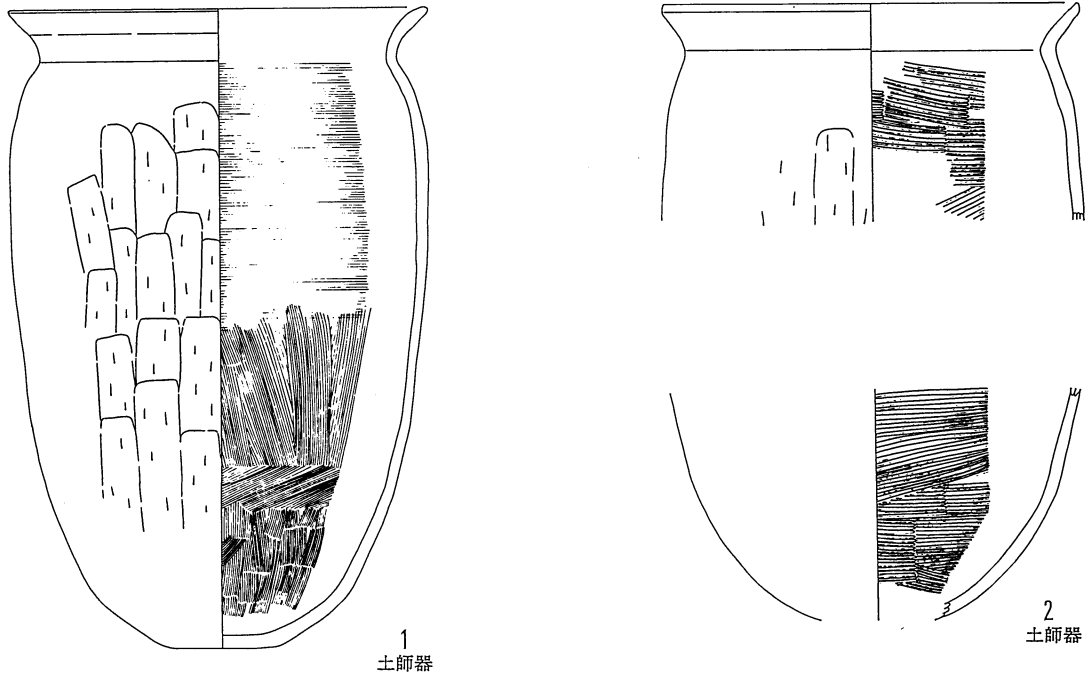


SK98



SK99

SF01

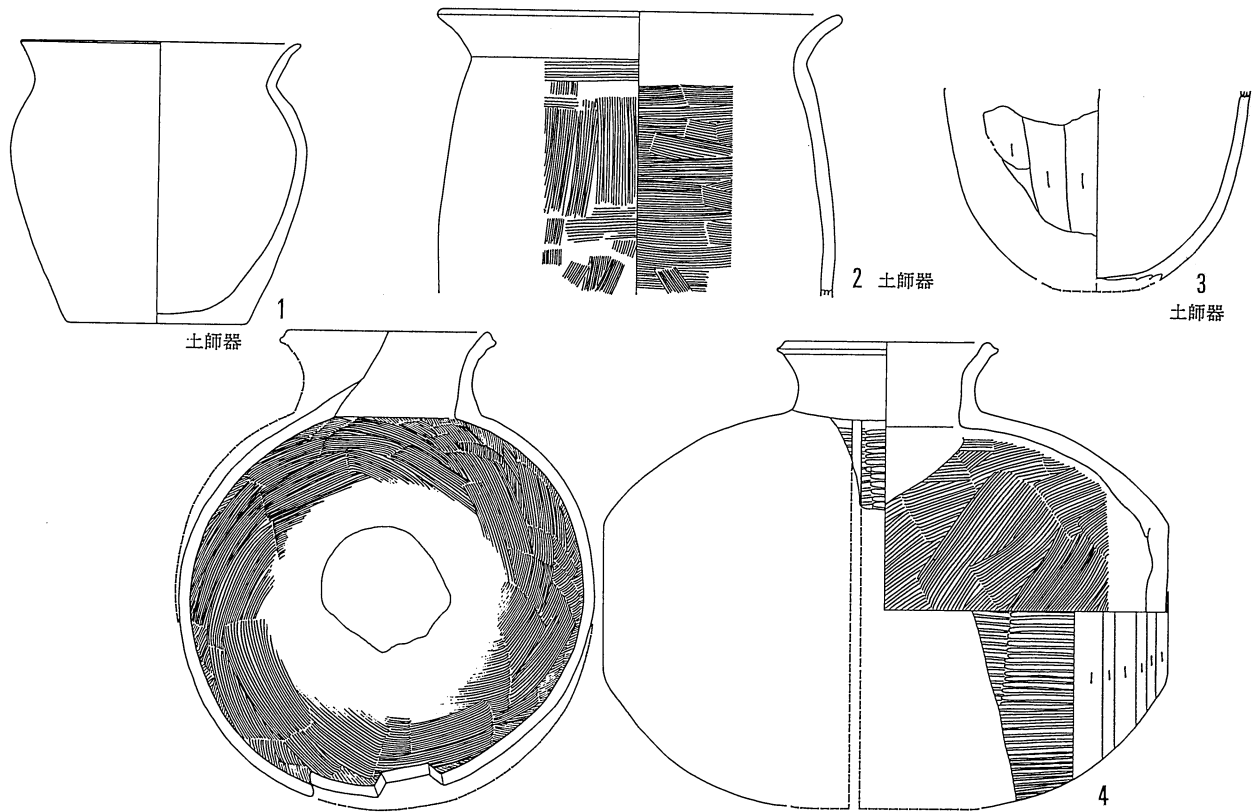


1
土師器

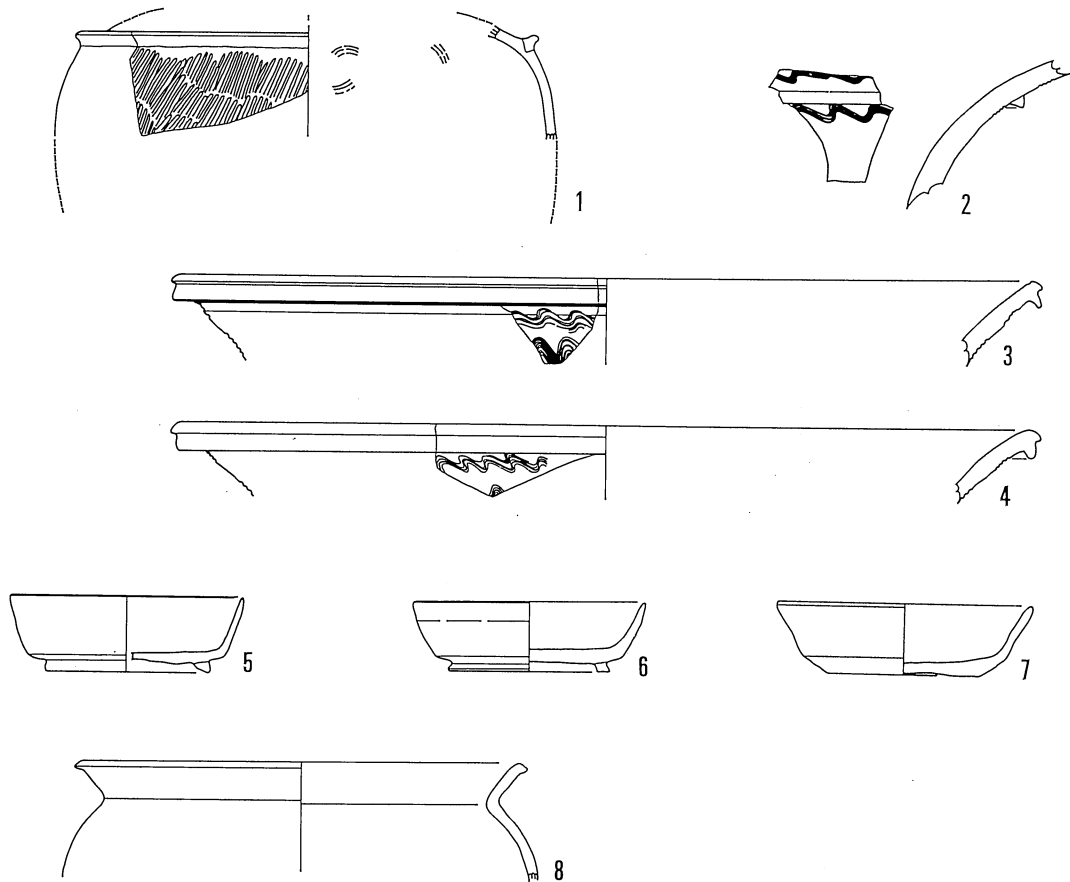
2
土師器

0 (1:4) 10cm

第232図 池田端窯跡 SK98・99・SF01出土遺物



SX01



遺構外

(1 : 4) 10cm

第233図 池田端窯跡 SX01・遺構外出土遺物